

人間がウマ娘に負けるわけないだろ！いい加減にしろ！！

なちよす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品は、トレーナーが自身の経験と名推理でウマ娘達と一蓮托生・切磋琢磨し、共に笑い、共に泣きながらもそれぞれの夢を叶える為にトウインクル・シリーズを全力で駆け抜けていく青春長編スペクタクルラブロマンスです。（建前）

SSRカレンチャン出なかった腹いせにウマ娘達を分からせてやる。もう許さねえからな?!（本音）

※サザエさん時空の為時間は繰り返されず。進んでるように見えるのは錯覚なのです。だからグラスは毎年不転転を破るしオグリは毎年太るしミークは毎年フランスパンみてえな靴を履いてます。

2022.03.18——SSRカレンチャンわからせました。

2023.10.06——メインが誰か分かるように今更追記しました。

当作品は変態、カワイイ、アイコピ、ちゃんこ、Rob Roy、ikzeの彼女、ニシノ神、マブ、ブルンボルンに三十路のドータイトムーヴをスパイスに加えた『勇者御一行』+αの面々でお送りします。

## 目次

番外の章・うまぴよい伝説

その① : だっちな事したんですね? | 1

その② : 億ション買いましよん | 13

1章・本能スピード

プロローグ : \*ケツイがみなぎった | With アグネスデジ

タル | 25

教会にて : 俺と勇者と味噌ちゃんこ | 32

第1 R : #カレンの気になるお兄ちゃん | 38

第1 R : 息子が気にするカレンちゃん | 45

第2 R : #出走前——誓いと祈りを青薔薇に | 54

第2 R : 出走前——ブルブルのミホですボン | 61

第3 R : | CHALLENGER | 69

第4 R : #お兄ちゃんという面影 | 79

第4 R : カレンちゃんといふ物の怪 | 86

第5 R : #夢、約束——それは”まじない” | 95

第5 R : 変化、兆し——それは | 103

対決 : さくらばくしんおー | 113

第6 R : メン・オブ・デステニー | 122

第7 R : いやー、きついでしょ。 | 132

継承 : Road to K | 141

1 / 2 : チェリーボーイ・ミーツ・ガールズ | 154

2 / 2 : チェリーボーイ・ミーツ・ガールズ | 163

決戦 : 驀進王 | 173

最終 R : # Look at Curren | 189

【ウマ娘】社会的ゲート難共のスレ【語ろう】

特別R : 花嫁讃歌

## 2章・UNLIMITED IMPACT

プロローグ : \*ぼうけんのしよを よみこみますか？

第1R : \*むてきの チームアップ

第2R : \*テイエムかけだん が あらわれた

第3R : \*おおきな えいゆう Rob Roy

第4R : \*ゆうしや の めざめ

決戦 : 坂路の申し子

大人のぷりていジャーキー(1/3) : 師弟

大人のぷりていジャーキー(2/3) : 悪女

大人のぷりていジャーキー(3/3) : 約束

第5R : \*むかしむかし の ことじやつた

第6R : \*れきし の はじまり

エキシビジョン : 誰より今、強く駆け抜けたら

エキシビジョン : ”約束”の進化系

閑話 : 真偽、決意、可能性

特別R : \*はちくの えいゆう Rob Roy

エキシビジョン : 願い焦がれ、走れ

エキシビジョン : 待ちわびた鼓動

決戦 : スーパーカー

最終R(?) : 勇者の目覚め

最終R : 世界を駆ける愛しのキミへ

特別R① : 聖蹄祭初日のこと

特別R② : 聖蹄祭2日目のこと

Summer Ghost ①	856
838	
ファースト (2 / 2) : 2000 (ミレニアム) マイラー	819
ファースト (1 / 2) : さよならブルボンさん	794
対決 : ちらちらも&ていーぼー	782
第4 R : ユーコピー? (☒) 太すぎるツピ! (2 / 2)	764
第4 R : マヤ、願っちゃった	745
第4 R : ユーコピー? (☒) 太すぎるツピ! (1 / 2)	709
【ウマ娘】 社会的ゲート難共のスレ2 【語ろう】	694
特別 R : 勃発、魔法大戦!	676
対決 : ????????	657
第3 R : マヤ、出会っちゃった!	642
第3 R : ユーコピー? 今日のポピー	625
幕間 : 初日を終えて	610
第2 R : ユーコピー? アイロニー!	599
第1 R : マヤ、謀っちゃった!	588
第1 R : ユーコピー? マイポニー!	578
プロローグ : マヤ、聴いちゃった!	
3章 Special Record !!	
特別 R ③ : なんでもない日のこと	568

番外の章・うまびよい伝説

その① : だっちな事したんですね？

「コタツ??温ぬくいか？」

目の前のウマ娘は、こくんと頷いた。

そりやそうだろう。新年早々、学園のジャージを着て朝の5時から人ん家の前で突っ立ってたんだから。かく言う俺もジャージなのが。

「やっぱさ??今日、走るの止め——。」

「その命令オーダーは受理出来ません、マスター。」

無敗2冠のサイボーグ——ミホノブルボン。隣でミカンをつまんでいた彼女はいつも通りのポーカーフェイスのまま、今度は正月太りした俺のお腹をムニムニとつまんできた。いやん。

「この感覚は、恐らく4〜5kgの増加かと思われます。毎年こうなるから、チームの皆さんに対して恥ずかしくない体型を維持したいと願いだたのはマスターだったと記憶していますが。」

「うっ??そうです??。」

「なら走りましょう。何事も早い内が良いです。それに??。」

「それに?」

「——いえ。こちらの問題です。」

そう言ったブルボンは人の顔を見るなり、ゆっくりと目線を俺の手元に下げていった。な、何だよ??ミカン剥いたばっかなんだからこれだけは食べさせてくれよ??。

いや、これ食いたいのかな。ちよつと餌付けしてみようか。ほーれほれ、美味しいミカんだぞ——なんて、食うわけねえよな。一応は

後輩ちゃんから預かってる身だし、なんてったってサイボーグ。ふっ。

食ったわ。

そうして束の間の餌付けタイムを終え、人のミカンを全部食い尽くした娘と共に外に出てきたのだが??。

「さっ、ささささみいゝゝゝツ!!ブルっ、ブルブルボン、やっぱもう少し暖まろう!中で過ごして、暖かくなったら走ろうって!」

「いえ、それでは遅過ぎます。それにデジタルさんからは既に特別な命令を受けているので、優先順位はそちらになるかと。」

「おデジいゝ???アイツ何言ってたんだよ?」

「『どーうせボーノさんの料理食べ過ぎて丸くなった後で後悔するんだから、徹底的に絞り上げて下さい!』と。」

「お前デジタルの真似ちよつと上手いな。マスター、今困惑してるよ。」

それはそれとして既に行動を読んでいたとは、流石相棒。いや、毎年夏前に後悔してたからかな??そうかも??。

「では。」

「ま、待って!待ってくれブルボン!お前の意見も、デジタルからの命令を受けてる事も、よおゝゝゝつく分かった!その上で言わせて欲しい!??昼過ぎ頃とか、どう?」

「??マスター。」

走り出そうとしたブルボンは止まり、優しい笑顔を浮かべながら僅かに下を向いた。あつ、良かった??伝わった?俺たち、ちゃんと分かり合えたんだ??うふっ??。

「四の五の言わずに走りなさいツ!!!」

「ヒヒインツ!!」

違つたらしい。何も分かり合えてなかった。

僕、ブルボンちゃんが怒つたところ初めて見た??いや?結構、ガチギレさせてるな??。これが中央トレセン学園のトレーナーか?そうだよ。

たつた2人だけの新春早朝マラソン大会は、そんなこんなで始まつてしまった。やはり街の中は鼻がつんつ、となる冷たい空気で満ちているし、吐く息は真つ白だし、喫煙者故、脇腹と肺はめちやめちや痛いしでここ最近でも1・2を争う辛さ。涙出てきた。

だが何より気が散るのはあれだよ?あの??隣に行くサイボーグの胸部パーツが??ブルンボルンが??。

「よきみ、尊み。」

「マイ女神??。」

「よきみ、尊み。」

「マイ女神??。」

クソアツ!!ランニングの掛け声に集中出来ねえツ!!気にしなくなるのに視界に入ってくる!ちよつと前を走ってペースを合わせてくれるから余計に目に入る!!お前サイボーグ名乗ってるけどその跳ね方は絶つつつ対サイボーグじゃねえからな!!坂路で何やったらそんな本格化すんの!?!?そういうのって条件とかあるのかよ!!

じゃあロブロイとかとんでもねえ文明開化レベルの進化じゃねえかツ!!

お、おお落ち着け童貞??何をそんなに慌てる必要がある。相手はブルボン。ジャージで走る姿など、後輩ちゃんの所に居た頃から見てきただろう。センチティブなのは勝負服??つまりいつも通りで良いんだ。冷静に、クールに、スマートに。俺は出来ない大人だが、やる事意識したら出来ると自負してる。見てろよ見てろよ??。

「よきみ、尊み。」



「ブル、ブル、ボン。」

「マスター。」

「違うんだ聞いて欲しい。」

ダメじゃねえか。えっ？何で出来ると思った？ブルボン足止めちやったじゃん。おああ??これ命取られるな。何かこう、上手いこと誤魔化せねえかな??無理かな??。

「たまには掛け声を変えて気分上げようかと思っとな。」

「マスターはその掛け声なら気分が上がるんですか？」

「うん。」

「状況の把握を確認。これより掛け声を変えたランニングに移行します。」

イケちやった。今のでイケんの？あつ、どうしよう??俺この子の将来が物凄く心配になってきた。

「ミーホーノ。」

「ブル、ブル、ボン。」

「気分、高揚してますか？」

「はい。ところでこのランニングルート、物凄く見覚えが有るんだけど。」

「デジタルさんから教えて頂いたコースです。少々悩んでいた様子でしたが。」

「ああ、だろうな。」

走りながら僅かにこちらを向いたブルボンは、頭にクエスチョンを浮かべているようだった。

デジタルなら間違いなくそうなる??光景が目には浮かぶよ。

『何でもない』と言って、そのままランニングを続ける事にした。

相棒が選んだルートに沿って辿り着いたのは、勿論神社。チームが出来上がるまで??いや、出来上がった時も大概このルートの終着点は初詣も兼ねて神社に向かう事になっている。ようやく日が登り始めて境内を照らしている様は実に目出度い。あけおめムードに満ち満ちている。

こっちは虫の息だかなッ!!

「お疲れ様でした、マスター。」

「ヒュー? ヒュー??おう??。」

「ゆっくり休んだ後、商店街経由で戻りましょう。そちらのルートも予め——。」

「待った??。」

手元から取り出した地図を眺めるブルボンに静止をかける。最近感情表現がお上手になりつつあるサイボーグだが、1つだけ言っておきたかった事がある。

「ブルボン??お前さん、デジタルに言われたろ。『絞りあげるメニューは一任します』とか何とか。」

「??はい。」

「それでデジタルにコースを聞いたんなら、あいつは確かに悩む。だってあいつは、ミホノブルボンが決めた事を俺にやらせろって話をしたんだから。今日は俺とお前さんの2人だけなんだからよろしく頼むよ、専属コーチ。」

「2人? 専属??任務、了解。5分程時間を下さい。」

そう言つて、ブルボンは再び地図を眺めた。5分と言わず30分でも1時間でも構わんぞ俺は。

ライス曰く、ブルボンは事トレニングに関しては「鬼」らしい。鬼を宿した娘が何言ってるの、とかその時は思ったが、中々にどうして既にハードモードだよ。休憩5分しかないの? 新年の抱負とか、願

掛けとか、甘酒とか??色々有るよ?本当に良いのか??次来るのは来年だぞ???

「行きましようマスター。ルートの変更、完了しました。」

ダメだったらしい。あつ、そう言えば明日チームの皆で神社に来るんだった??じゃあうん、要らないね??鬼ツ!鬼イちゃんツ!!お兄ちゃん俺だ。何だポニーちゃん、文句あるのか。

「なら行くか。どこ経由?」

「商店街です。」

そこは変わらねえのな??心做しか意気揚々とした様子にも見えるブルボンだが、俺は冷や汗かいてんよ。気付いてコーチ。

虫の息のまま神社を後にした俺達は、ブルボン厳選坂路コースを通ったうえで商店街へとやって来た。

朝も早いと言うのに、凄い人だからだ——主に俺の周りが。マダムでいっぱいである。

「??あの。」

「あれまあ、また少し良い男になったわね〜!」

「その子新しい子?来る度違う若い子連れてくるから、お正月から賑やかで嬉しいわ〜。」

「いや、その言い方はちよつと??と言うより、動けな??。」

「あつ、そうそう!さっきお正月限定のコロッケ揚がったのよ!食べてって!紅白コロッケなんだけどね!」

「あら、あれ本当に商品化したの?私にも後で下さる?」

「ちよ、あの??。」

あつ、あつ!ブルボンがめつちや見てくる!違うんだコーチ!言い

方が悪いだけで俺が女遊び激しいわけじゃないんだコーチ!

若い子つて全員中等部だよ!何なら見た目ロリだよ!おっきいのかおセンチティブなのも居るけど基本ロリ!!信じてよコーチ!!助けてよコーチ!!

あとなんだ紅白コロツケって!!

集まったマダム達の間を縫って、1人のご老輩が姿を見せた。この商店街の中でも顔の広い、商工会の男性である。

彼は俺の顔を見るや否や、その眼に熱い闘志を滾らせていた。

「??やはり??今年も来ましたね。この時を1年間待ち侘びました。来る日も来る日も、どうすればトレーナーさんを打ち負かせるのかと??そればかり考えていたんです。」

「他に過ごし方あったでしょう??。」

「さあッ!どちらの運が良いのかを決めましょう!我々商店街一同か、貴方か!今年こそ、温泉旅行券は渡しませんッ!!」

「いや??今日は引きませんって。」

「奇遇ですね。私も今日は1歩も引きません。」

「そういう意味じゃねえよ。福引券も持ってないですし——マダムッ!!」

俺の所からブルボンコーチの元へ居場所を変えたマダム達は、あれよあれよという間に福引券の束を握らせていた。何あれ100万円?えっ、こわ??この商店街こわあ??。

「トレーナーさんの福引大会はウチの商店街の名物だもの。それに、この子も何だか娘を思い出して可愛いわ。ウマ娘では無いけれど、元気にしてるかしら。」

「眼がとても綺麗な子??それにとてももの仕上がりも完璧。これは坂路で鍛えたわね??。」

「マスター。ここが例のマダム十番でしょうか。」

「麻布十番みたいに言わないの。商店街有るけど。マダム達居そうだ

けども。それどこ情報よ。」

「ナイスネットワークです。」

「よし分かった。後で言っておくから、取り敢えずボケにボケをかまさないでくれ。」

『まだボケてないわよ。』

「そういう意味じゃねえよ。もー！話が進まないでしょ!!」

ほらあ??お父さん福引きのテーブルとガラガラ1式持ってきてちやつたじゃあん??早朝だから中身はフルで入ってるとは言え、今日温泉旅行券出したら、俺正月中は出禁になるんだって??。

お父さんもどうしてそんなにウキウキしてるの。えっ、そんなに? そんなに悔しかった?マジで俺の事ボコボコにしたかったの??凹む。

勝てば名物継続。しかし出禁。

負ければ商店街に来れる。しかし名物は終わる。

助けてデジたん。いや、ブルボンコーチ。

「いやはや??でもね、嬉しいんですよ。都内にあるとは言え、商店街は商店街。私らがどれ程若い子達の関心を引こうと考えても、時代はそれよりも早く流れてしまいますから。こうしてトレーナーさんやウマ娘の子達に新年に来て頂けると、活気が出て今年も頑張れる!と思えるんです。」

「お父さん??。」

「でも出したら出禁ね。」

「お父さん??ッ!」

先手を打たれた事で、引くに引けない状況になってしまった。ブルボンは既に臨戦態勢整ってるし、マダム達はなんか期待の眼差し向けてくるし??うごごご??。

あっ、そうだ。そもそも俺が引く必要無いじゃん。ブルボンに引いてもらおう。そうすれば有耶無耶に勝負が終わる筈。ヒュー、冴えてるうッ!

「ブルボン、1回勝負だ。お前さんがビシツと決めてくれ。」

「??デジタルさんが。」

「うん。」

「デジタルさんが言っていました。マスターには、”勇者バフ”と言う力が備わっていると。チームの皆さんが本来の実力以上の力を発揮出来るのも、望む結果に近付けるのも??マスターが居てくれるからだ。」

「あつ??スウー??。」

何言ってるんだあのロリ。ねえよ、んなもん。100歩譲ってバフ持ちだとしたらお前の方だろ。ブルボンちゃん信じちやってるじゃん。

あゝゝあ！俺この後の展開分かっちゃった!!

「引きましょう、マスター。共に。」

「無理だつて??バフなんか無いつて??力強いなあ、もうツ!!分かった、分かったから！引くから!!」

一切の抵抗を許して貰えず、俺とブルボンは1つのハンドルを握り締めた。えっ、吐きそう。緊張感半端じゃない。俺正月から何してんの？あと思った以上にブルボンの手が小さい。

「では。」

「はい??せー、のっ。」

福引セットがガラガラと音を鳴らし、3周回ったところで——白  
い玉がコロんと転がった。

「??は、外れた??外れたよな？白ってティッシュだもんな！そうかそうか外れたか！やっぱりバフとか無かった——お父さん、何で温泉旅行券持つてきちゃったの？」

「??もし、金色の特賞玉が出たら??今年は白でした」、って言いたくて??。」

「あつ??スウー??。」

「??えっ、気まずっ。」

この空気よ。俺大罪犯したみたいじゃん。そんな事ある?じゃあ何??俺、中身フルの状態から当たり引いたの?出禁??嘘だと言ってよバーニイ。

ヤダヤダヤダ!だつて俺、” いや、今年は負けました!あつ、お父さん裁縫が趣味なんですよね!この記念に後で教えて貰って良いですか?”とか言つて平和に済ますつもりだったんだぞ。盛り上がったのマダム達だけじゃねえか。

いや、ブルボンコーチも耳の動きがどえらい事になつてる。それ喜んでんの?バグつてんの?

「??お父さん。この旅行券は受け取れません。」

「それは??出禁になるからですか?冗談だったのに。」

「なにこの?じゃなくなつて!普通に考えたら、特賞が無い福引をこれから回すことになるお客さん達つて絶対複雑じゃないですか??。」

確かに、と言いながらお父さんは納得してくれた。逆に何で気付かなかったの。どんだけ俺の事負かしたかったのよ。

あつ、あつ!ブルボンコーチがこつち見てブルブルしてる!!お前もお前でどうしたの!何か今日ちよいちよい情緒が読めないよ!それマナーモードか怒りかどつちだ!!後輩ちゃんじゃないからマスター完璧じゃないの!!

しかし——これが後者の震えなら頂けない??ならよお?見せるしかねえだろ男気をツ!!

「彼女は??ミホノブルボンは、俺が責任を持って温泉に連れて行きますから。自費で。」

「マスター??。」

「温泉で責任取るって言ったわよ。」

「あら、青春ね。」

「コロツケにお赤飯詰めなくちゃ。」

「マダムツ!!!」

一言も言っただろうがそんな事ツ!!温泉で教え子に責任取ったらそれは事案だよ!無垢ノブルボンがそんな事思ってるわけないでしょ!あと、コロツケ屋のおばちゃんはコロツケをなんだと思ったださつきから!!

「ふふつ??確かに見ました。貴方のトレーナーとしての姿勢を。完敗です。ですが、来年こそは負けませんからね。」

「ええ??望む所です。いや、本当はごめん被りたいですけども。」

なんか?疲れたな??取り敢えずはお父さんと固く握手を交わし、互いの健闘を讃えあった。いつの間にかマダム達が増えていたが、まあそこは良いだろう。来年もこの商店街に来る事が出来ると分かっただけで、よし!終わり!解散!

そんな時だった——コーチが俺の袖を引っ張ってきたのは。

ヌツ。どうしたニコニコと可愛いな。そんなに嬉しいの?実は特賞狙ってたの?じゃあ俺も緊張の中引いた価値はあると言うもの。感情表現が本当に豊かになったなあ??マスター嬉しい??。

「あの。」

「どうした?」

「私は“勇者バフ”が実在するのか知りたかっただけなので、温泉とかは特に。」

「頬っぺ出せこの野郎。」

全てを台無しにする一言を吐いたブルボンの頬っぺをモチモチし



ながら、この後滅茶苦茶坂路を走らされた。お前やっぱキレてるだろ。

その② : 億ション買いましよん

「やっぱり時代は億ションですよ億ション。トレーナーさんも買いません?」

「俺はいいよ??も」って何?買ってんの?」

「いえいえ、そういう事では無いですね。将来的な夢の話ですよ。2人ぐらいで住めたら夢みたいじゃないですか。」

「かもなあ??でも俺は今ぐらいのアパートか、普通に家建てる位が丁度いいや。2〜3人くらいなら問題無いだろうし。」

「まあそこは人それぞれですよねえ。」

ところで誰と暮らすって話で億ションとか言ってたんだこのウマ娘。??まあ、そこは良いとしよう。そんな事より――。

「買ったよ??ウマ娘用ASMRマイク??。」

トレーナー室の机の上に鎮座しているそれに、思わず声を上げずには居られなかった。クツソ高い買い物である。

いつぞやの聖蹄祭で、俺とデジタルは『喋るカレンちゃん貯金箱』とか言う聖遺物を生み出してしまった事がある。ヨシエちゃんとの協議の結果、”変態的思考の天才的嗜好品”の太鼓判を押してもらった??ワケなのだが。

ぶつちやけあれ以外はもう作る気が無かった。

いや、何もウチの可愛いウマ娘達が向いてないとかでは無い。寧ろ専門だろあの妹+ロリ達。

??ただ、俺の気が向かないのだ。何だろうこの??担当達で利益を得ている気がして少し申し訳ない気持ち。あんなにバカ売れするだなんて思わなかったんだもん。何だよ学祭のグッズが3次事後物販つて。ライブでも中々見ねえよ。

そんな事もあり、カレンの影響力と恐ろしさを改めて痛感しながら多少なりとも気が引けてしまった俺は天才のお兄ちゃんブレインで

1つ考えた。

『そうだ！ASMRで担当達のクソかわボイスを録音してショート動画にしよう！』と。疲れてたんだろね。

無論ウマチューブからの収益は無しだ。今回だって学園——と言  
うよりやよいちゃん——が手伝おうかと言ってくれたけれど、それ  
は意味が無い。

自費で道具を買い、自分で頼み込み、担当達や乗ってくれそうな生徒達の力を借りながらその可愛さを広めていく??まさに伝道師よ俺は。可愛い伝道師。決してウチの子達をひけらかしたいワケでも無いし、自慢でも無い。血迷ったロリコンの奇行などでは全く無いしそもそも俺はロリコンじゃねえ。

と言うわけで！早速やってみよう！と思った矢先ッ！

カレンはアヤベとデート。マヤノはボーノとデート。ロボロイはスイーピーとデート。ブルボンはライスとデート。マルゼンはスペとデート。相棒は今日に限ってシンボルエンカウトしない。デートばっかじゃねーか。なのに俺と来たら1人で??虚しいな。

「??チラッ。」

「——♪」

落ち込むな。それならチーム以外で試して貰えば良いだけよ。

ジョーダン??はギャル達とデート。ローレル??も後輩達とデート、つて言うかそもそもアイツ呼んだら企画終わるわ。バクシンオー??鼓膜が終わるわ。

「チラッ。チラッ。」

「??」

もうこの際ヒト娘で良いんじゃないかな。後輩ちゃんなら絶対イ

ケメンっぷりを発揮して男女問わずウケると思うんだ。ああでも?? あの小娘はこういう時にド天然ポンコツ出すからなあ。肝心な所でむせ返って鼓膜ぶち破るかもしれない。あと普通に拒否られそう。

ヨシエちゃんは?? 1番無えな。普通にやりそうだが絶対悪ふざけして耳舐めボイスとかやるわ。何ならこの間酒飲んでた時だって、『私がASMRでやらしい声出したら金稼げるかもしれない。ちよつと耳貸せ、やるわ』とかマジな顔してやがったもんな。人が耳弱いのを良い事にあの野郎?? なーにが『オランウータンのマジ交尾』だ。クソ似てやがったから余計に拷問である。

「あの〜??。」

「どうしたミラ子。」

「どうしたはこつちの台詞ですよ? さっきからチラチラ見てたじやないですか。」

「求む。ASMR対応ウマ娘。」

「へえ〜?? 字面も絵面もダブルで際どい事してますね。あつ、じゃあ私がやりましょうか? なーんて。」

「おう、ウマ娘になってから出直して来い。」

「いやいやいや、耳ついてますよ? ほら尻尾も。私ウマ娘。OK? 出るどころも出てますからね。」

「腹だろ?」

「はい。」

『へへへへ??。』

何だその腹ツ!! (驚愕)

お前プールにぶち込まれんぞ!!

「あとさっき言おうと思ってたんですけど。それウマ娘なら意味ありますかね?。」

「あるに決まってるさ。何が疑問なんだ?」

「やつ、ですから?? ウマ娘用なんですよ? 人とウマ娘ってそもそも

の聴力とか違いますから、もしフアンの人達に聞かせるなら人用じゃないと音質とか聞こえ方とか大丈夫なのかな〜って。もしかしてデジタルちゃん用ですか?」

「??パンナコッタ。」

「なんてこった。」

今聞きたくなかった衝撃の事実だわ。ちよつ、ちよつと待ってくれ動揺しちまつてる。何か?じゃ俺は対して意味も無い、何ならデジタルにしか特効性能を発揮しない買い物をしたのかい?ガバすぎんだろこの計画。早速頓挫の兆しだよ。

「??店頭で視聴とかなさらなかつたんですか?」

「したよ。したさ勿論。その時は普通に聴こえたんだよ。テスト代わりにその辺歩いてた学園のウマ娘にも手伝って貰って??。」

「こわあ??何巻き込んでるんですか。トレーナーさん、もしかしてウマ娘と同じ耳付いてたりします?」

「俺は普通に人——あつ。」

「えつ。」

そう言えば半分だけウマ娘の血が入ってました。

えつ、遺伝?そこだけ遺伝する事あるの?なのに地獄耳のお兄ちゃんイヤーはあんなカス性能?劣等種だろコレ。

「??買ってしまった物は仕方無い。今は現実から目を背けよう。あつ、手伝ってくれた子の音声聴く?」

「ええ〜??私漫画読みたいんですけど??。」

「それ俺の私物やろがい。」

「でもまあ??良いですよ?仕方無いので。この『自己紹介』って言うファイルですか?」

「そう。」

『アイ??アム??ハヤスギール——』。』

「自己紹介?自己主張じゃなく?」

「うん。本人がそう言った。」

「ウチの学園ってたまに普通じゃない類の子が居ますよね。」

「お前がそれ言うか?」

「いやいや。アイアム平凡過ぎる。」

「宝塚でデジ負けかといって平凡なわけあるか。」

しかもお前その時のメンバーって、クリスとタップ、ユニとデジにロブロイの大粒小粒勢揃いだろうが。ウチの娘が2人も居たんです。勇者と英雄なんです。絶対リベンジしてやるからな??レース以外で。

「で、どんなのやります?」

「ノリノリかよ。」

「だってこんな事を真面目にやってる人なんて滅多に見ませんよ。しかも学校で。折角だから楽しんだ方が消えていったお金達も喜んでくれますって。」

「ぐっ??まあ、確かに。じゃあー??咀嚼系?」

「ニツチな上にそこはかたなくガチでちよつと引きます。」

「だってお前あんまりセンチティブなのは怒られるだろ!」

「咀嚼系だって怒られると思いますけど??無難なのいきましようよ。やるの私ですよ。」

「そう言われてもなあ??耳フーとか?」

「??もしかして、私の耳フー聴きたかったんですか?」

「いや別に。何様だお前。」

「傷つきました。見返してやります。ほらヘッドホン付けてくださいな。」

本当にノリノリだコイツ。さては今日暇してたな?」

だが折角やる気になってるところに水を差すのも悪い。どのみち

やってくれそんな生徒には健全さをアピールしつつ依頼する予定だったんだ。多少順番が前後したと思えば――。

「いきますよ。」

『ふボボボボッ!!』

「うるっせえッ!!! 鼓膜破れるわッ!!」

「やっぱりウマ娘と同じ耳付いてますよね?」

「お前のやり方だろ今のは!? これは止めよう、また他の機会に。もっとう、フアンがドキドキするようなやつでいこう。」

「ええ〜? ん〜?? じゃあちよつと待っててください。」

そう言っミラ子は5分程部屋を後にした。

帰ってくる頃には何か紐のような物を手に持ちながら、ドヤ顔晒してた。もう嫌な予感しかしねえ。

「じゃあやりますからヘッドホンどうぞ。あつ、恥ずかしいので目は瞑っててくださいね。」

「?? あいよ。」

目を瞑ってすぐ、聞こえて来たのは何か軽めの『パチンツ、パチンツ』という音。それから??。

『ウス?? ウス??!!』

「どうです? ドキドキしてます?」

「何してんのお前?」

「何って勝負服のゴム紐弾いて気合入れてる時の音ですけど。」

「ニツチ過ぎるわッ! お前の勝負服事情とか普通知らねえからッ! 良くて腹叩いてる力士だろうが春場所ASMRごっつあんですッ!!」

「何ですかさつきから文句の多い人ですねぇ??。」

「悪かったよ??じゃあもうド定番で行こう。日常会話系。普段トレーナーと会話してるっぽい内容で頼む。」

「1番公開処刑みたいなものじゃないですか。ええ??じゃあ??お好み焼き行つた時のとか?でやりましょうか?。」

「頼む。本っ当にお願いします。」

もう傍から見たら完全にアウトなのは俺だと思う。違う意味でドキドキしてるよ。見つかったら絶対怒られるもの。

でも今回ばかりは足りない俺の頭脳で考えたわりには良い案だと思うんだ。そして無駄に散っていった食費諸々達の為にも何とかお願いしたいんだよ。

頼むぞミラ子。お前さんはやれば出来る子。デジとロボイにも勝つた子。起きろ奇跡ツ!

『??さては素人だな?』

1番ダメだろコレ。何がって全てが。えっ、お好み焼きでこんな台詞出てくる事ある?俺が知らないだけ?いやそこは個人達の会話だから別にとやかく言わないが??この囁きASMRは??クビだなあ??。

「一旦持ち帰らせて頂きます。」

「えっ、どこに?」

「気にするな。今日はもうお終いにしよう。なっ?」

「良いですけど??何か私だけやり損じやないですか。ねえ、カレンちゃん。」

「そんな事ないって。大丈夫、ちゃんと上手いことあれこれしとくから。なあ、カレン。」

『わあああああツ!?カワイイカレンちゃんツ!!』

「はーい♡カレンちゃんです♪」

「??えっ。何で?アヤベは???」



「ちよつと忘れ物しちゃったから戻って来たの。そしたら??ねえ?」  
♪

終わった。サラバトレセン学園。ありがとう、やりがい搾取。よりもよつて1番力になって1番見られたらダメなボスに内容を聞かれています。退職願を持ってツークソお世話になりましたッ!!

えつ、待つてヤダ何で俺にヘッドホン付けてんの?おいミラ子止めるよ。ウチの妹が暴挙に出ようとしてんだぞ。見たら分かんだけ着々とお兄ちゃん仕留められそうになつてんだつておい。おい。さつきまでの謝るから。ちよつと距離取るなこの野郎!

??何で何もしない?攻撃ならぬ口撃されるんじゃないのか?何でそんなニツコニコ何だ妹よ。今日も可愛いね。もしかして座れつて言つてんのか?

上等だよお前、おとお兄ちゃんの事あんまり舐めてるといつかきつと反撃してやるんだからな!でも今は舐めるなよ!頼むから舐めるようなボイスだけは本当に止めてくださいポニーちゃんが死んでしまいます!チツクシヨ覚えてろ——。

『ふうー?? ♡ 』

あつかん、椅子に座れなかった。お兄ちゃんひっくり返つちやつた。おしりいたい。

こらゴム紐。何ちよつと引き笑いしてんだ。だから妹を止めろつて言つたら。耳フーの手本見せてくれたんだろが寧ろ感謝しとけお前。

「お兄ちゃんつてばそんなにく?カレン、気を遣われるのはちよつと悲しいかも??なんて♪」

あざとい。然しそのあざとさにひれ伏すのがお兄ちゃんの責務である。カワイイカレンチャン。さし伸ばされた手を取つ——あつ

！コイツ自然な流れでボディータッチするつもりだったな!?俺がその手を掴んでドキドキすると思ってるんだろ!?それでアヤベに俺の醜態を晒すんだ全部知ってるんだからなッ!ここまで分かってその手を握ると思ってるのかッ!?

握る。おててちっちゃーい。もうそこまでにしとけよ三十路。クビレーストップだぞ。

「カレン、そのゴム紐が聴きたいって眼で訴えてる。」

「ゴム紐で。いや、私は別に??。」

「本当に良いのか?これ習得してトレーナーに出来たらプールトレーニング減るぞ。多分。」

「ちよつとヘッドホン貸して下さい。背に腹はかえられぬ。」

「極限だなお前。ほらよ。」

相変わらずニッコニコの可愛いカレンチャン。今自分がどんな風格醸し出してるか分かってるか?分かっててやってるんだらうけど一応言つとくぞ。魔王だよ。

『ミ〜ラ子ちゃん♡』

「ふわわわお?!あつ、これ大変なやつ?!」

「だろ??腰、抜かすだろ??。」

「本当に立ってません助けてください。」

「立ってないはその腹のせいだと思う。」

「そんな事言わないで助けてくださいよ??ねえ、デジタルちゃん。」

「ソファアー近いんだから捕まりなさいよ。なあ、デジ。」

「わああああアツ!?デジタルッ!!いや俺だけかい。」

クソが。恥ずかしいわ。お前どっから出てきた勇者。今日一日エンカウントしなくてちよつと寂しかったんだぞ。

「いやー??何か皆さんのお声が響いてると思って窓から這ってきたんですけどね?」

「何で這ってんだ。普通に入ってこいよ。いや窓からは止めろ。」

「トレーナーさんも中々業の深い買い物をしましたねコレ??。」

「でも失敗したよ。間違つてウマ娘用のヤツ買っちゃったし。」

「??失敗ですか?寧ろ大成功では?」

「何だよ。」

こちらの問いにデジタルは若干のヨダレを垂らしたマジ顔でキツパリ断言した。

「だってこれ、トレーナーさん達の声を録音してウマ娘ちゃん達に配るんですよね?」

天才と変態が紙一重って本当だったんだな。その発想にはならねえよ普通。

いやウマ娘好きでウマ娘の可愛い所を見たがつてるコイツなら??それコイツがぶっ飛んでるって事にしかならん。ぶっ飛んでたわ。

「それはお前??需要あるの?」

「はあ~~~~~??これだからトレーナーさんは。」

「耳出せお前。」

「丁重にお断りさせて頂きます。需要が無ければデジたんだってこんな事言いませんからね!」

「ふーん??。」

ひー、ふー、みー??良し。

「カレン——。」

「あつ!アヤベさんから待たせすぎって連絡来ちゃった!ゴメンなさいお兄ちゃん、また今度ね〜!♪」

「??通知来てなかったじゃん。露骨に嫌がったじゃん??デジの嘘つき??。」

「はあくくくく??これだからトレーナーさんは。」

「ほんとお??ミラ子——。」

「えっ?普通に嫌ですけど。じゃあそろそろ失礼しますね。漫画借りていきまーす。」

「デジ需要??何で目を逸らしたお前。言え。ほら。今ならまだ許す。耳。ほら。」

「やめっ、お断りいっつ、してますそういうのはあッ!!」

このっ??抵抗すんなロリお前ッ!結局俺が傷ついたただけやろがいつ!許されると思うなよ??その耳に報いを受けさせるまで俺は諦めねえぞチクショー??ッ!

しかし勝てない。パワーで対抗出来るはずが無いんだよ。例えば30cm低い中等部だとしても。

クツソー??満足気にニヤニヤしながら俺よりもASMRマイクに夢中になりやがって??買って良かったかもしれない。

待て!流されるな俺!こんなだからミラ子にデジタル専用で買ったとか言われるんだろうッ!

デジタルの可愛さは既に全国に知れ渡っているのだからこれ以上はトレーナーの特権にして欲しい。すみません。

「へへへ??本当にどう使いましたよかコレ??。あつ!何かファイルが入ってますね!入ってますよコレ!??チラ。」

「??おう。聴くか?そんなにチラチラせんでも。」

「エッ!?良いんですか!?!じゃあ遠慮無く——。」

——これ勝ったわ。ウマ娘用のヘッドホンを無理やり付けてた俺とは違って、お前はびったりフィットしてるもんな。

ウマ娘は3人居たって事忘れるなよお前。143cmのへそ出し族め。

「デジタル。」

「ドーキドキドキドキ——はい？」

『君が愛バだ。』

???? いや、ゴメンで。ゴメンで相棒。オタク心に水差して悪かったよ。謝るから顔に色香爆弾押し当ててくるの止めろ。ポニーちゃんセロトニン出そうなんよ。前が見えねえ。顔も見えねえ。恐らくブチギレてるわこの子。

「これだから??っ。これだからトレーナーさんはあ??ッ！」

「ごめ、押し当ては、うっ、カワイイカレンチャン??。」

分かった事。

俺の声はウマ娘達から需要の無いと言う悲しい事実だけでした。  
凹む。

## 1章 本能スピード

プロローグ : \*ケツイがみなぎった With  
アグネスデジタル

”うまぴよい”、という言葉を知っているだろうか。

ウマ娘達が研鑽を積み、トウインクル・シリーズの最後を締めくくるURAFアイナルズ。その決勝で華々しい成績を残した者達がウイニングライブで披露する楽曲、『うまぴよい伝説』。言葉自体は、誰が生み出したかも分からないこの電波曲から来ているものだ。1度だけ同期である女性トレーナー葵ちゃんとイベントで踊ったことがあるが、中々に辛い。

まあそれは良いとして??ここで言う”うまぴよい”と言うのは”うまぴよい(動詞)”である。

1つ昔の話をしよう。あれは俺が新人トレーナーとしてトレセン学園へやってきてすぐの頃だった。トレーナーとしてのイロハを叩き込んでくれた兄貴分とも叔父貴とも呼べる様な大先輩が居たのだが、その人がある日を境にトレーナーを引退するという話を聞き、俺は酷く悲しんだ。自分にも他人にも厳しく、しかしウマ娘達には親の様に寄り添い、共に歩むその姿に強い憧れを抱いていたからだ。

その人が引退してから2〜3ヶ月が経ち、一通の手紙と写真が届いた時??こう記されていた。

『うまぴよいしました。』

は??????

と言うのが、正直な感想である。この人は何を言っているのだと。”うまぴよい”とはなんぞやと。なんの報告してんだと。だが先輩と、先輩の隣で幸せそうに微笑む綺麗なウマ娘さんの薬指を見て、俺は全てを察した。ついでに式に呼ばれなかったことにも、人知れず涙した。クソが。

つまり”うまぴよい”とは概念であり、”うまぴよい(動詞)”であり、”うまぴよい(隠語)”なのである。これもう分かんねえな。まあ確かに、現役時代に傍から見ても『あの人ら付き合ってるんじゃない?』っていう距離感ではあったし、初めて契約を結んだウマ娘とトレーナーと言う間柄なのは知っていたのでなんらおかしいとは感じなかった。それに相手のウマ娘さんも既に大人になっていたのだから、学園の女子生徒に顧問が手を出したみたいな話でも無い。

そう??問題は無いのだ。それが大人同士のあれこれであるならば。時折トレセン学園内ではトレーナーと親しくしているウマ娘達の姿をよく見るし、俺のチームだって例外では無い。皆仲良し。良バ場◎。チームという同じ組織に属している以上、コミュニケーションが足りなかったりチーム仲がギスギスしているよりはよっぽどマシである。だから問題は無い??のだが、ここで重大な問題が露見された。それが——トレーナーロリコン疑惑である。

「トレーナーさん、いつまでそのクソ長自分語りしてるんです?」「ナチュラルに人の心読むんじやねえよ。」

隣で変態望遠鏡(本人命名)を覗き込んだまま、アグネスデジタルがそうボヤいた。

「途中から全部声に出てましたし。」

「マ?。」

「良かったですねえ、聞かれていたのが私で。」

うごご??迂闊だった。『トレーナーさんは思ってる事が口に出る癖があるから気をつけて下さい』と常々こいつに言われていたのに、またやってしまったらしい。

アグネスデジタルは俺が初めて契約を結んで、共にURAFアイナルズを勝ち進んだ言わば半身<sup>相棒</sup>だ。チームの中では1番付き合っても長く、そこそこなら互いの考えも汲み取れる。互いにどこか丁度いい距

離を保とうとしていた最初の頃に比べれば、随分とまあオタク友達みたいな子になってしまったとは思っているが。

因みにガツチガチのウマ娘ちゃんオタクであるし、学園内でも変態だのヤベー奴だの変態だの変態だの言われているが、芝とダート両方のマイルでは負け無し。それどころか天皇賞・秋では覇王テイエムオペラオーとメイシヨウドトウにも勝ち越している。このHENTA Iめ。

「??今のはオフレコで。」

「分かっていますって。つまりトレーナーさんは、何を仰りたいので?」

「うむ。トレセン学園の貞操観念って、割とガバガバなんじゃないかと思っただけな。」

「はあ??えっ、そうですか?至極真つ当だと思えますけど。」

ヨダレを垂らしながら尚も望遠鏡を覗き込むデジタルはキツパリとそう言った。せめてこつち見て言えよ。

お前あれだかな?どれだけ仲の良い友人間だって、そんな風に流されたら結構傷つくんだからな?分かれー?

至極真つ当ってどんな目線で見たら言えるんだそれ。

あつ、こいつ変態だった。

「だって考えてもみて下さい!!」

「ちっか。」

「年頃のウマ娘ちゃん達は、その胸に秘めた熱い想いと夢を叶える為に学園に来ているんです。きつと辛いこともあるでしょう。泣きたい時だってあるでしょう??。そんな時、一番近くに居るのは誰ですか?そう、トレーナーさんなんですよ!ウマ娘ちゃんだって年頃の女の子!何年もそうやって親身に支えてもらえればそりゃ乙女にもなるってもんですし、2人の間に信頼を超えた何かが生まれた時に初めて見せるウマ娘ちゃん達の表情ときたらでゆふふ??そしてそして!自分の気持ちに気づいてしまって、生徒とトレーナーなんて本当はい



けないこと？けれど不器用ながらも慕っているあの人に自分の真つ直ぐな想いを何とかして伝えようとする健気でいじらしい姿なんて見た日にはもうもう——ン”ッ?!ン”ン”ッ?!!! 堪らんッ!!!」

「熱い近い長い圧がパない！ちよつと落ち着けっ!!」

「???」

「き、急に落ち着くなよ?!やめろよ?!。」

要約すれば、そうなるのも致し方ないと言う事らしい。

しかしそうなると男性トレーナー諸君は大変な事だろう。何せウマ娘と言う存在は、人間の女性とは大きく異なるのだ。

まず圧倒的に顔が良い。

決して俺の話では無いが、今まで女性と付き合った事の無い男連中にしてみれば普通に眼を見られるだけでドキリとする事がある。そのクセ性格は基本的には良い子ばかり。まあ個性が強すぎるのもいるがそれも愛嬌だろう。今まで何度、生徒会長シンボルドルフに墮とされかけたことか。

次にスタイルが良い。

変態的な意味で無く、トレーナー目線の話だ。『本格化』を迎え始めたウマ娘は急激に身体の発育が進んでエライ事になる。BWHがBQBだ。

これも決して俺の話では無いのだが、今までそういう事に接点の無かった男連中にしてみれば、中高生だと分かっているもドキリとする事がある。勝負服によつては、明らかにヒト息子へ影響を及ぼす格好をしたウマ娘だって居るのだ。素晴らしい仕上がりですね。

違う、何を考えているんだ俺は。とにかく彼女達とトレーナーの間にはそういういった間違いが無い方が良い。

故に。

チーム内だけでも、ここは俺がトレーナーとして?!いや、1人の男として教えねばなるまい。適度な距離感を守り、ついでに貞操も守護る。多少怖がらせてしまおうとしても、これは彼女達の為にもなるのだ。大人に色目を使ってからかうとどんな目に遭うのか??身をもつ

てその怖さを知ってもらおうではないか！

「草。」

「生やすな。」

おかしい。長年連れ添った半身だと言うのに、何だこの扱い。

「そこまで仰るなら仕方が無いですねえ??女性経験の無いトレーナーさん1人では心配ですし、このデジタルさんも力をお貸し致しましょう。」  
「一言多いんだよなあ??。つか、ウマ娘ちゃん達の尊みを感じたいだけでは?」

「当たり前でしょうッ!?!」

ひえっ??怒られた?。

しよぼくれる俺を他所に、デジタルは何処からか分厚い本を引っ張り出してきた。

「これは私が集めた」 マル秘ウマ娘ちゃんノートとチームメンバー編  
「」です。」

「広辞苑かと思った。チーム内だけでそんな有るのかよ??。」

「当然です。」

「あつ、ハイ。」

「トレーナーさんはこれを元に、ウマ娘ちゃん達の指導に励んでもらえれば良いので。」

ふむ??驚き、もとい僅かな恐怖心が芽生えたものの、確かに綿密にデータが纏められている。いやこれ色々不味くない?スリーサイズとかいる?こんな俺が持ち歩いてるってバレようものなら、ウマ娘同士で戦争が起きるのではなからうか。最悪やよいちゃんに『磔刑ツ!』されてしまうのでは?。

そんなこちらの心配を他所に、デジタルはニコニコと恍惚な笑みを

浮かべたまま続けた。

「こんなこともあるのかと、実は既に1人呼んでいるのですよ。後はトレーナーさんの頑張り次第です。」

「ほう???流石我が半身、勇者デジタル。話が分かるではないか。」  
「トレーナーさんが常日頃から欲求ダダ漏らしてる賜物ですね。」

ぐっ、こいつ。ま??まあ何はともあれだ。

ウチのチームには距離感の近いウマ娘達は何気に多い。と言うよりバグっている。そしてセンチティブな格好やこれみよがしな動作・言動で此方を誘惑してくる少女達ばかりなのだ。このままでは俺の社会的地位の落下と股間のドータイムUV（ヒト息子）がうまだつちするのも時間の問題だろう。決してロリコンではない。

しかし誰だろうか?ヒシアケボノ??はマスコットの立ち位置ではある。身長たっぱの高い女の子好きな俺からしてみれば色々とマズイが、まだ危惧するほどの事では無いだろう。ちゃんこは美味しい。ただ1つあるとすれば、たまにじつと向けられる視線にだけは気を付けねばならない。未だに何を考えているのか分からない時がある。ポーノは味方にしてこそだ。

なら、マヤノトップガンか?確かに幼さが残るにも関わらず、やれ大人の女になりたいだの、やれトレーナーちゃん好き好きムーブをかましてくるなど油断ならない。この間もレースに勝つてすぐ俺の方に来たかと思えば、ランディングキスだのをしてきた。まあ全然届いてなかったし、何してるのか分かんなかったら受け流しちゃったけど??取り敢えずあのセンチティブな勝負服は何とかならんものか。ぽんぽん冷やしちゃうぞ。

ではカレンチャン??論外。ラスボスだ。今の俺の童貞力トレーナーちからでは相手取ることすら烏滸がましい。何をしても倍返しにされて、此方が分からされる。ましてや普段からお兄ちゃん呼びしてくるのだ。幾らカレンが子供の時に1度だけ出逢っていたとしても、それだけでトレセン学園の、それも俺のチームに入るなどと言うだろうか。言わないと

思います（名推理）。お兄ちゃんプレイに発展するだろうか。しないと思います（名推理）。

ふむ??他にもチラホラいるが、個人的にはマヤノが有難いというか無難なところだろう。飽き性ではあるが根はいい子だからきつと素直に聞いてくれる筈。

実際問題ウチのチームで今相手取るとマズイのはカレンちゃんだ。彼女さえこの段階で来なければ怖いものは無いし、俺も段階を踏んで他のウマ娘達にあれやこれやを教えながらステップアップ出来るというもの。ふふっ??ウマ娘達の事や俺の事を良く理解している勇者デジタルの采配だ。その辺は何も心配はするまいて。

そうふんぞり返っていたら、トレーナー室の扉が3度ノックされた。

おっ、来た来た。

「デジタルちゃんに呼ばれて来たよ、お兄ちゃん♪」

「おう、カレン——」

変態、ちよつと話がある。

教会にて　：　俺と勇者と味噌ちゃんこ

「とある作家は言いました。」愛はお互いに見つめ合うことではなく、共に同じ方向を見つめることである。故に、嫌よ嫌よも好きの内”??”と。」

「後半言っただけよ。テグジュペリサンⅡテグジュペリ。星の王子さまの作者。何だと思っただけ。」

カレンを待たせた後、俺はデジタルと共にトレーナー室隣の簡易保健室——通称『教会』へとやってきた。学園内でも屈指のヤベー奴と称されるアグネスデジタルは、大のウマ娘オタク。いやオタクの範疇に留まるのかは知らないが??とにかく尊みを感じるたびに気を失っては保健室に運ばれる為、都度こちらから迎えに行かねばならなかった。全く世話のかかるヤツめ。

故にコイツとURAFアイナルズを勝ち抜いた時、無敗のマイル王と言う肩書きを引っ提げて理事長であるやよいちゃんに土下座して作って貰ったのだ。勇者が復活するのは教会しかないという事で命名したのだが、本当にこいつしか使っていないのが悩みの種である。

あの時ばかりはたづなさんの目線が突き刺さったが必要経費なのでそこは目を瞑ってもらいたい。

実際ウチのチームで誰かが不調を訴えたり怪我をした時にはきちんと使おうと思っただけ。しかし如何せんそこはウマ娘、皆優秀であるが為に誰も使わない。いや、怪我とかされても困るけど。今となってはデジタルが気を失った時にここへ運び込むか、俺の使う資料云々が雑多にぶち込まれているだけだ。因みにやよいちゃんにだけこっそりお願いしたのだが、完全防音である。高かったらしい。

これバレたらたづなさんにしばかれんじやねえかな??。

ま、まあ今はそれどころじゃない。

重大戦犯を犯した目の前のこいつに、事の真意を問いたたださねばならないのだ。

「取り敢えず話し合いだ。」

「それは良いですけど??布団で簀巻きにする必要あります?やっぱりそういう趣味をお持ちで?」

「お前今やっぱりって言った??じゃないわ。何でリーサルウエポンなんか呼んでんだ。俺のケツイが秒で割れかけたぞコラ。」

「うそ??トレーナーさんのケツイ、クソ雑魚すぎ??。」

「言葉は選びな?」

「い、嫌ですね冗談ですよ!だから耳を触ろうとするのはやめてください!デジたんにも考えあつての事なんですつてば!」

「なんだとオ???」

モゾモゾと芋虫の様に蠢きながら、我が半身は言った。

「必要かなと思ひまして。あつ、あつ!!耳はいけません!!ウマハラです!!やめてくだ、うひいっ!や、やめっ?!」

取り敢えず両耳をコリコリしてやる。

この顔面偏差値激高美少女ウマ娘が??今お前が言ってる事は、覚悟を決めて初めて120分コースで予約したのに『じゃあ始めますねー』って事務的な対応の中サクツと抜くだけ抜かれて残り時間会話で終わるタイプの風俗店みたいな言い分だかな?行ったことないけど。最初にあっさり『クソ雑魚お兄ちゃん♡』されて俺はどうしろと言うんだ。

「ひっ、人の話は最後まで聞いてください!ほんつとにそういうところですよ!」

「ほう??ならどんな考えがあるんだ?返答次第じゃあ、そのプリチーナ両耳に指が突っ込まれると思え?」

「ひえっ??で、ですから、トレーナーさんに必要なのは慣れなんですよお!」

「慣れだあ?」

「年頃のウマ娘ちゃん達は繊細かつ大胆、恋に恋するお年頃なんです?? トレーナーさんは、そんな純真無垢なウマ娘ちゃん達相手に大人の余裕を見せつけられますか? 無理でしょう? 無理ですよね。絶ツツツツツ対ムリツツ!!!」

「言い過ぎじゃない?」

泣きそうになったが、ぐうの音も出ねえ?!

こいつも含めてウマ娘達の顔の良さは嫌という程思い知らされている。そんな顔でグイグイ攻められたり、あまつさえ泣き落としされようもんなら、俺は恐らく自我を保つことも出来ぬまま流されてしまおうだろう。

「だからカレンさんなんですよ。彼女とやり取りする中でトレーナーさんが成長出来れば、ちよつとやそつとの事で動じない鋼の意志を手に来るわけです。ウマ娘のアタシから見ても、彼女の”カワイイ”は群を抜いてますからね。」

「成程?? 一理ある。つまりちよこちよここと小賢しいレベル上げなんかしないで、一気にラスボス戦で経験していけということか。幸いカレンは俺をからかいの対象としか見てないだろうから、そこも活かせばいいわけだな。」

「あんなどこからどう見ても好感度MAXガールを前になんてそう思うんですか。」

「でもなきやあ、あそこまでグイグイ来るわけ無いだろ。」

「は? デジたんキレそう。」

「なに? この。」

なんで俺が『何言ってるの?』みたいな顔で見られなければならないんだ。少なくとも俺はウマ娘達から好かれるような容姿も性格もしとらんわ。確かにカレンとは、カレンが小さい時に1度出会ってるさ。アイツの”宇宙一カワイイ私”って夢も肯定したさ。チームに入りたいって言われた時も秒でOK出したさ。

それだけぞ？それで好感度メーターなるものがMAXになるならその愛の重さが逆に危うい。貞操観念どうなってるんだ。いや、これでカレンが大人だったら俺も喜んでダイブ決め込んでそのままベッドフアイツ!!しただろう。

中等部はさあ??マズイってえ??。

故に、俺はこう考える。

カレンはその持ち前の”カワイイ”を余すことなく振るいかざし、俺をからかっているのだと。デジタルの言い分も分かるが、ここはあのカレンが相手だ。

『あは♡お兄ちゃんこういうのが好きなんだ♡』とか、『カレンの事そういう目で見てるの??知ってるよ?♡』とか、『ふくん??ロリコン♡』とか考えているに違いない。こちらが油断を見せたが最後、死ぬまで搾り尽くされるのだろう。

又ツ。滾る。

な、なんだと???これでは俺が本当にロリコンではないか。違う。俺はカレンを正しい道に導かねばならない。でなければ、何人の男共がお兄ちゃんになって搾り尽くされるか分かったものでは無い。以前シヨツピングモールで出会った好青年もカレンの餌食になり、『カワイイカレンチャン』しか言えない体にされてしまった。

そう!パパ活ならぬ兄活を止めるのが俺の使命であり、トレーナーとしての責務なのだ!

「芝。」

「刈るぞお前。はあ??取り敢えずカレンのとこ行くわ。待たせすぎるのも悪いしな。」

「えっ、アタシは?このままですか?」

「案ずるな。お前の面倒はボーノに見てもらおう。ボーノは俺の制御下?しかも言う事をしっかり聞いてくれる良い子だからな。」

そう言って、入ってきた扉と反対側の扉を3度ノックする。そう、何を隠そうこの隣はヒシアケボノ専用の隠し厨房があるのだ。やよ



いちちゃんに ( r y .

「ヒシアケボノ、居るか?」

「ボノボノ♪? トレーナーさん、どうしたの?」

ふふつ、一昔前のフシギバナみたいな鳴き声出しやがって?? 可愛いなコイツ。しかし170ちよつとある筈の俺ですら見下ろされるのは中々にドキリとする。未だに心臓が縮む時はあるが、やはり身長たっばのある女子は良きだ。おなじ

「主犯アグネスデジタルの面倒を見ていてくれないか。カツ丼でも出してやって欲しい。」

「えつとね? 今日、味噌ちゃんこの日かな?」

「あ、うん、じゃ味噌ちゃんこでお願ひします。」

「いや全然制御出来てないじゃないですかッ! 何自分の方が上みたいなドヤ顔出してるんです!」

「うつ、うるさいなっ!! ボーノが味噌ちゃんこつつたら今日は味噌ちゃんこなんだよ! 黙って頂けッ!!」

暴れ牛すら真正面で受けきるヒシアケボノさんを怒らせてみるお前! 俺がどうなるか分かってんのか!?

と?? とにかくカレンの元へ行こう。戦わなければ生き残れない。俺はお兄ちゃんなのだ。必ずカレンを分かせ?? もとい、正しい道に戻さなければならぬ。トレーナーはケツイがみなぎった。

扉を開けてトレーナー室の様子を伺うと、カレンは俺の机の前に立っている。手に持っているのは?? 写真だろうか。あそこに置いてあるのは、俺とデジタルがURAFファイナルズで勝っちゃった時に、修学旅行みたいなテンションで撮った写真だけである。何をそんなに凝視する事があるのか?? というより、なんで耳が別々の方を向いているのか??。

トレーナー講習の時に教わった気もするが、イマイチ覚えていな

い。あれだろうか。普通にしていると見せ掛けて実はこちらの音を聞こうとしているのではないか？だとしたら俺がこうしている事も、向こうには筒抜けだろう。

相手はカレンだ。生半可な覚悟じゃ足りない。堂々と声を掛けてやればいいんだ。

「どうした？」

ピクっ、とカレンの身体が震えた。これではまるで気づいていなかった仕草ではないか。ははあん、演技派だな？

こちらが何か続ける前に、カレンはにこやかな笑顔で振り向いた。

「何でもなーい♪？そっちは良いの？」

「ああ、終わったよ。待たせて悪かったな。」

クツツツツツソカワイイなコイツ。何だこの顔立ちの良さ。何その甘ったるい声。えっ、何、声になんかしてんの？聞いたら動悸が起こる成分とか入ってるの??はあく??(クソデカ溜息)。

い、いかん。カレンのペースに吞まれるな。意志を強くもて、俺!!

「ねえ、お兄ちゃん。」

カレンの桃色の瞳が、魔性の笑みを浮かべた。

「カレン??ナニしたら良いかな?♡」

あつ、ダメだコレ勝てねえわ。

## 第1R : #カレンの気になるお兄ちゃん

部屋に入っただけで、お兄ちゃんは何かを考えるような素振りを見せた。

「カレン、少しだけ待っていてくれ。すぐに終わるから。」

「はーい♡」

それだけ言うと、お兄ちゃんはデジタルちゃんを連れて隣の部屋に入ってしまった。

トレーナー室の隣に併設されている開かずの間。チーム内でも、あそこは特定の人しか入れない秘密の部屋って言われてる。

今のトレーナー室は、カレンも含めて皆がこぞって私物を持ち込んでるから凄く”カワイイ”。普通なら学園の人達や生徒会にだっただけ怒られてもおかしくないけれど、お兄ちゃんは笑って『どんどん持ってきても良い』『責任は俺が取る』って言うから、ここはチーム皆の部屋みたいになっているの。隣の部屋だけは鍵が掛かって、実際他の子が入ってるのは見た事ないけれど??多分、お兄ちゃん以外で入れるのはデジタルちゃんだけだと思う。中がどうなっているのか、何があるのかは誰も知らない秘密の部屋。

色とりどりのカワイイで満ちた部屋を見渡す。そこには控えめに——けれども確かに、強く、お兄ちゃんとデジタルちゃん2人の功績が所狭しと並んでいた。

阪神JF、桜花賞、NHKマイルカップ、マイルCS南部杯、フェブラリーステークス、ヴィクトリアマイル、安田記念。

芝もダートも関係無い。マイルG1のコースを尽く総ナメして、『マイル王』とか『戦場を選ばない勇者』とか色んな名前で呼ばれているデジタルちゃん。でも1番目についたのは、お兄ちゃんの机に飾られていた1枚の写真だった。

『祝、URAファイナルズ。”勇者御一行”』

心の底からすつごく嬉しそうに笑ってるデジタルちゃんど、泣きながら彼女を抱き締めているお兄ちゃん。この部屋は、そんな風にたくさん成績を残してきた2人の3年間<sup>軌跡</sup>で出来た部屋。このチームは、そんな2人が先導して作り上げたチーム。

「??ちよっぴり、妬けちゃうな。」

そんな独り言がこぼれて、思わず笑ってしまう。スプリントのG1では結果を残してきたけれど、それでも勝ち続けられるわけじゃない。G2やG3クラスでも勝ったり負けたりしているカレンじゃ程遠い。スプリントだけの私じゃ、芝もダートも両方走れるデジタルちゃんとは比べ物にならないんだ。

でも後悔は無い。それでも短距離で成績を残せるなら、それを極めたい。もっともっと可愛くならなきゃいけない。お兄ちゃんが素敵だつて言ってくれた、カレンの夢のためにも。

「どうした?」

ピクって、身体が跳ねる。とつくの昔にお兄ちゃんは戻ってきていて、カレンの後ろに立ってみたい。全然気づかなかった。

「何でもなーい♪?そっちは良いの?」

「ああ、終わったよ。待たせて悪かったな。」

そんなに待ったわけじゃないけれど、お兄ちゃんはなんだかバツの悪そうな顔。気にしなくなつて、別にカレンは怒ってないよ——つて言っても、きつとお兄ちゃんは気にするんだよね。だからカレンは何も言わない。デジタルちゃんからは、お兄ちゃんがカレンに手伝つて欲しいことがあるって聞いているから、まずはそっちを優先しなきゃ。

ぱぱーって終わらせて、今だけはお兄ちゃんを独り占めしちゃうもんね♪?

「ねえ、お兄ちゃん。カレン??何したらいいかな?」

「何もしなくていいぞ。」

「えっ?」

「えっ?」

あれ?聞いてた話と違うような??でもお兄ちゃん、最近また仕事が忙しそうだったのは確かだし??んん??

「ああーっ、と??言葉足らずだった。俺はただ、カレンと話がしたかったんだ。ほら、2人でこういう時間取る機会ってあんまりないだろ?普段はチーム内であれこれしてるし、俺も一人一人とコミュニケーションを取らなきゃなって思ってたさ。」

「へ?お兄ちゃん、トレーナーみたい!」

「トレーナーだよ。」

何言ってるんだーって顔でお兄ちゃんは笑う。

ねえ、お兄ちゃん。カレン??嘘をついてるんだ。こうして余裕を見せてるけど、これは本当のカレンじゃない。

だって——ずっと、胸が騒がしい。

2人の時間を取りたいから、こうして呼んでくれた。その一言がどれだけ嬉しいか。

ふふっ。お兄ちゃんは多分、分かってないよね。今のカレンがどれだけ貴方にぐちやぐちやにされてるか。小さい頃に出会ったあの日から。お兄ちゃんがカレンの夢を素敵な夢って言ってくれた日から。カレンは、ずっとお兄ちゃんに追いつきたかった。一緒に過ごしたかった。だからこうしてトレセン学園に来て、カレンはお兄ちゃんのチームに入ったんだよ?

ここでなら??お兄ちゃんが居てくれるから、きっとカレンの夢を叶

えられそうな気がする。そんな気がして。

でも自分からは言っておけない。お兄ちゃんが昔導いてくれた子が、今こうして目の前に居るんだよって??教えてあげたいけれど、それはお兄ちゃんに気づいて欲しいもん♪?

「じゃあいいっぱいお話しよっか!」

「ははっ、まあそんなに慌てるなって。取り敢えずそのソファにでも座ってくれ。」

テーブルを挟んで、向かい合うように座る。決まっている訳では無けれど、お兄ちゃんはどうしてかチームの子達がモチーフになったパカプチぬいぐるみで埋まってる方へと座る癖がある。今回もそう。ちよっぴりミスマツチだけど、お兄ちゃんはカワイイものに弱い。分厚い手帳（ノート?）をざっと流し見した後、お兄ちゃんと言った。

「ウチを志願した理由は?」

「面接かな?」

「あ、違う。ご趣味は?」

「あはっ、お見合い??」

「??場を和ませようと思ってるな。」

「うん、知ってる。不器用だね。」

困ったように頭を掻き出すお兄ちゃん。多分本当に何かあるわけじゃないんだ。ただ話の始め方が上手く出来ないだけ。基本的にはデジタルちゃんか後輩トレーナーさんの前でしかスラスラ話しているお兄ちゃんは見えないもん。だから??カレンがトーク術を教えてあげなきゃね?♪?

「お兄ちゃん、そっち行っているのかな?」

「えっ?」

「ダメ???」

「いや、良いぞ。」

「じゃあ隣失礼しまーす♡」

開けてくれたスペースに座ると、肩が触れ合うぐらい近くなった。お兄ちゃんは背が高いから、座って横並びになると見下ろされる形になる。

——じゃあ、よろしく。

それだけ言って、少し照れくさそうに笑った。

緊張してる？ 恥ずかしいかな？ ふふつ、カワイイ♡でも??それは、私も同じなんだよ、お兄ちゃん。

「ねえお兄ちゃん、好きな色ってある?」

「好きな色?」

「好きな色でその人がどういう人か、どういう心理をしているか分かるんだって。」

「ふむ、色彩心理学ってやつか。」

お兄ちゃんは顎に手を当てて、カレンの携帯と睨めっこしながら真剣に考えていた。

「ん??これ、あつ違うな? いや??。」

「こういうのは直感だよ?」

「そ、そうだよな。じゃあ??ピンク?。」

「お兄ちゃん、ピンクが好きなんだ。」

「まあ??恥ずかしくてあんまり人には言っていないけど。」

「そう? カレン的にはカワイくて良いと思うな。」

恥ずかしがる事ないのに。そんな会話をしていたら、携帯の画面は結果に切り替わっていた。ハツとして、思わず電源を切る。

「じゃあお兄ちゃん! カレンこの後用事があるから、先に帰りまーす

♪? 明日も来ていい?」

「お、おう?? 良いぞ。いや待つて。結果は?」

「なーいしよ♪? これは質問したカレンにしか見れないの!」

「ええ?? ちよつとくらい??。」

「だーめ♡」

「ぎ、先つぽだけ??。」

「めつ。じゃあまたね、お兄ちゃん!」

何か言いたげだったお兄ちゃんにお別れの挨拶を済ませて、トイレ室を出た。先つぽつてなんだろう?

ふうつ、と息を吐いて扉にもたれかかりながら座り込む。お兄ちゃんにはしつかり見せなかつたけれど、色彩心理学だなんてそんなに仰々しいものじゃない。ただ、回答者が質問者に対して無意識に何を思っているのか、それを知る為のテスト。

勿論確証は無いし、占いは自分の心を後押ししてくれるものだって思っではいる。いるけれど??。

逃げるだなんて、カワイくない。

鼓動は一向に治まらない。

”対象に対して、愛されたいという気持ちの表れ”

携帯の画面には、大きくそう表記されていた。

耳が熱い。少し照れくさい。全部全部、お兄ちゃんのせい。ふふつ?? なーんて言ったら、きつと気にしちゃうよね。

だから――。

「??好きだよ。」

扉の向こうに居るあの人に、精一杯の言葉を投げ掛けた。

今日はもう帰ろう。そして、明日からまたお兄ちゃんとお話しよう。2人きりじゃないかもしれないけれど、このチームの空気はとっ



てもカワイイに満ちているから大好き。

——ぶ——や——。

「あれ？今なにか聴こえた気が??ううん、気の所為だよね。」

きつと明日も、楽しい日になると思う。ね、お兄ちゃん♡

## 第1R : 息子が気にするカレンチャン

ヌツ、ヌツ、ヌツ。ギンギラギンギンギン。

おててやーらかい。ちっちゃい。いいにおい。

キツツツツツツシヨツ  
!!!!!!

危ねえ開幕早々持っていかれるところだった?。自身のキモさにハツとしなければ、”カワイイカレンチャン”しか言えない身体になっただろう。大丈夫だ、まだまだ焦る時間じゃあない。

いくらカレンが最初っからトップスピードでぶちかましてきたとしても、これは彼女がスプリンター故、致し方ない事なのだ。

こつちの手を握って『ナニすれば良い?♡』だの聞かれて滾るのも致し方ない事なのだ。

マジでナニするつもりなんだお前。

あれか?こつちの出方を伺ってんのか?出方もナニも上にしか向かねえよ。

違うわクソボケ。お、落ち着け??物事といふものは冷静かつ、スマートに済ませなければならぬ。それが出来る大人の余裕というものだ。ここでうまだつちしかけている事がバレようものなら、俺はやよいちゃんに『去勢ツ!保健所行きツ!』されてしまうであろう。チーム内でも弱みとして握られた拳句、ここぞとばかりに搾り尽くされるのだろう。主にカレンに。ヌツ。

だが案ずることなかれ。幸いこちらには、勇者の聖遺物おきみやげがある。つまりその気になれば、この伝説級レジェンドインフルエンサーを言葉で誘導する事も、俺の協力者にする事も容易い事よ。

つまりはカレンチャン恐るるに足らず。そつちがナニかしようとするなら、まずはやんわりと否定してやる所からだ。常人の3倍以上の力さえ有するウマ娘。カレンは誘い受けのプロ(デジタル談)らしいからまず無いだろうが、機嫌を損ねて強行策に出られれば為す術なくうまぴよいからのクソザコお兄ちゃんコンボをかまされるに

決まっている。ふふっ、二重の意味でハメ技だな。は？

「ごほん??とにかく慎重に。当たり障りなく。そしてスマートに。」

「いや、特に何もしなくていいぞ。」

「えっ?」

「えっ?」

いやなんだし。何の疑問だし。やめろお前、お兄ちゃんの心は繊細なんだ!もうすぐ30になるけどチキンハートだけは未だに治っていないんだよ!

??お巫山戯は一旦ストップだ。これ以上心を乱されるわけにはいかん。だが今の反応が本当に分からない。デジたん助けて。

ん?デジたん??あつ、しまった。アイツがなんて言ってカレンを呼んだのか全然聞いてなかった。ガツデム。

「ああーっ、と??言葉足らずだった。俺はただ、カレンと話がしたかったんだ。ほら、2人でこういう時間取る機会ってあんまりないだろ?普段はチーム内であれこれしてるし、俺も一人一人とコミュニケーションを取らなきゃなって思ってた。」

「へ〜??」

い、いけたか???

バレてはいないはず??動揺は極力見せないように細心の注意を払ったのだ。しかし我ながらよくポンポンと取り繕いの言葉が飛び出してくる。偉いぞ俺。嘘は言っていないもんな。

カレンはそんな俺の様子を見てか、どこか含み笑いを浮かべながら得意の上目遣いである。おカワイ過ぎてキレそう。

「お兄ちゃん、トレーナーみたいー!」

「トレーナーだよ。」

何言ってんだこの妹。お兄ちゃん好き好きからかいムーブしてくるのにたまに毒づくのなんなの???逆に今までなんだと思ってたんだよ。

流石に凹む??いかん、スマイルスマイル。

「じゃあいーっぱいお話しよっか!」

「ははっ、まあそんなに慌てるなって。取り敢えずそのソファにでも座ってくれ。」

とにかく今はカレンの思惑を知る事の方が重要なのだ。さっきは突然の事で動揺してしまったが、結果オーライ。日常会話の中で上手くカレンを誘導しつつ、大人をからかうとどうなるのか分かって貰う。ついでにデジタルの残した手帳に目を通せれば、今後カレンに対して主導権を握る事だって容易いことだ。なんだ、全てが完璧では無いか。偉いぞ俺。

ソファーに腰掛けたカレンは、ニコニコと笑っている。

何だろう??既にちよっと怖い。まるでこちらの思考なぞ全て把握しているとも言いたげだ。

お兄ちゃんはまだカレンの掌の上なんだよ、と。

次はどんな手で愉しませてくれるの、と。

うまびよいの振り付けは充分なの、と。

いや??そんな筈は無い。無いだろうけれど冷や汗がダバダバである。

活路を見出すべく、俺はアイツの手帳を開いた。

- ①カレンさんのプロフィール。
- ②カレンさんのカワイイ理論。
- ③カレンさんのSNS活用術。
- ④ウマ娘大陸『閃光乙女』。
- ⑤距離適性におけるスプリンターの可能性。
- ⑥カワイイがもたらす恩恵と多幸福感。

⑦おすすめカップリング e t c . . .

いや多い多い多い!!カレンだけで200ページくらいあるじゃねえかッ!知りたい情報どこにあるんだよコレ!?

あの美少女ウマ娘が??無駄に興味深い内容なのが逆に腹立たしい。この有り余る情報だけ投げ渡して俺にどうしろと言うんだ。

ん?『カレンさんの誘い受けに対する考察と対策』?なんだ、ちやんとあるじゃあないか。199ページ目なのが気になるが、そこはデジタルの事だ。恐らくは書きたいことが多過ぎて致し方なかったのだろう。無問題。モーマンタイ

対策——ありません。というか要ります?

クソがッ!!!!

くっ?!こうなったら自分ですりかかすしかない。普段他のウマ娘達と会話しているように、まずは何気ない会話でこちらの流れに持っていくのだ。

「ウチを志願した理由は?」

「面接かな?」

「あ、違う。ご趣味は?」

「あはっ♡お見合い??」

「??場を和ませようと思ってな。」

「うん、知ってる♪?不器用だね。」

あ、あつ、むり。泣きそ。

ここに来てまともに会話が出来ないと言う自分のザコミユカに苦しめられる事になるとは思わなんだ。あれ?もしかしてこれ墓穴掘っただけでは?カレンのやつ、俺がキョドっている事を理解したうえで楽しんでやがる??ッ!

おかしい。今までこんな事は1度だって無かったはずだ。そうで

なければアイツと設立した我がチーム、『勇者御一行』がここまで上手く回ったりしていない。

ん？勇者??あつ、しまった。大体アイツが横に居たわ。デジたん助けて。

ま、マズイ??何かキツカケが必要だ。このどん詰まりした現状を変えうる様な会話のキツカケが――。

「お兄ちゃん、そっち行っついていいかな?」

「エツ?」

「ダメ???」

悩む俺を他所に目の前の淫魔、もとい淫バはそんな事を言い出した。

誰がそんなダイナマイト級なキツカケ欲しいって言ったよ。ダイナマイトなのは男を狂わせるそのスタイルだけにしろッ！ヌッ！

や、やべえ???とうとう痺れを切らしたのか?向こうから動き始めるだなんて完全に予想外である。その潤んだ上目遣いやめろカワイいな。お前あれだぞ?いい加減自分の行動と発言の一つ一つがどれだけのオスを弄んでるか分かりなさい?いやまあ、分かった上でやっていそうなのがカレンの底知れない部分で魅力でもあるが。

だがここで引いてしまえば最後、流されるがままどこまでもこの小悪魔の思い通りである。

気合いを入れなかせ。俺はお兄ちゃんだぞ。

深呼吸して下腹部丹に力を入れろ。滾る。いや滾るんじゃない。

「いや、良いぞ。」

「じゃあ隣失礼しまーす♡」

キャバ嬢かな?

そう言いながら隣に座るカレンチャン。こっちのソファはぱかプチぬいぐるみで埋まつてるから、必然的にぎゅうぎゅうである。

もう一度言おう。ぎゅうぎゅう♡である。

えっ、近づ、あ待ってこれやべえわ。サラッサラのしつぽが当たってる！指と指が触れ合ってる！耳がピコピコしちよる！ガチ恋距離不可避ッ!!

誰だバカみたいソファをぬいぐるみで埋めつくした奴！そういう家具じゃねえだろうがッ！俺だわ。

妖艶な微笑みが、見上げる様にこちらへ笑いかけてくる。

「ねえお兄ちゃん、好きな色ってある？」

「好きな色？」

な、なんだ??何の話だ？

「好きな色でその人がどういう人か、どういう心理をしているかわかるんだって。」

「ふむ、色彩心理学ってやつか。」

多分違うと思います（名推理）。

なんかで聞いた事ある仰々しい名前で誤魔化したけど、要は心理テストじゃないか??し、心臓に悪い。

カレンは俺に携帯を向けると、はよ選べと目でせがんでくる。良かった、これなら素直に選んでも良さそうだ。

ふむ。好きな色、ねえ？そんなものはピンク1色である。何故か昔っからピンクというものは俺の心を落ち着かせてくれた。但しシヨツキングピンクやバブルガム系統のド派手な色じゃない。もっとうこう??なんか薄めのそういうやつだ。（賢さG）

どれ、そしたらば手堅くピンクを——ハッ!?

その時、俺はふと思いついた。

あれは学生時代??まだ小中学校に通っていた時に、クラスメイトと面白半分で作っていた心理テスト。俺はそこで散々な結果になったのだ。もしここで不用心に選んだものが、あの時とおなじ結果に——

—『異常性癖持ちの性欲モンスター』になろうものならッ!!  
搾り尽くされるじやないかたまげたなあ。  
言ってる場合か!こ、こええええっ!!

「ん??これ、あつ違うな?いや??。」

「こういうのは直感だよ?。」

せ、急かすんじゃないッ!お兄ちゃんは今人生の窮地に立ってるんだよ!赤??いや、情熱的なイメージが強い。ベッドの上でも情熱的とか出るかもしれない。黒も違う。なんかで見たが、黒が好きなのはプライドが高いらしい。ベッドの上で俺様キャラになりたい痛い奴と診断されるのも辛い。こちとら三十路手前だぞ。

くっ?!こうしてる間にも、カレンは目で語ってくる。お兄ちゃん、素直になる?♡とでも言わんがばかりの視線。ヌッ。やはり素直になるべきか?あくまでもこれは心理テスト、人の本質を見抜くだけの力は無いはずだ。落ち着け。自分に言い聞かせろ。

「そ、そうだよな。じゃあ??ピンク——。」

「お兄ちゃん、ピンクが好きなんだ♡」

えっ?何しれっと人の心読んでんの?デジタルと言いうマ娘は読心術でも持ってるの?

あつ、違うわ。これまた口に出したやつだわ。やあだもうくく。

このボケナスッ!!ええい、どうにでもなれッ!

「まあ??恥ずかしくてあんまり人には言っていないけど。」

「そう?カレン的にはカワイくて良いと思うな。」

えっ、ホント?脳内ピンク野郎とか思っていない?

カレンは携帯の電源を切って、おもむろに立ち上がった。



「じゃあお兄ちゃん！カレンこの後用事があるから、先に帰りまーす♪？明日も来ていい？」

「お、おう??良いぞ。いや待つて。結果は？」

「なーいしょ♪？これは質問したカレンにしか見れないの！」

んなわけあるかいッ!!

結果を自分の内に留めてこっちの揚げ足を取ろうたってそうはいくか！絶対聞き出してやる、このっ!!

「ええ??ちよつとくらい??。」

「だーめ♪?。」

「さ、先っぽだけ??。」

「めっ♡じゃあまたね、お兄ちゃん！」

人差し指で口を塞がれながら怒られてしまった。

ヒヒッヘン。た・ま・ら・ん??。

キツツツツシヨ!!!

フウ??逃げられてしまった。つか、どさくさに紛れて先っぽとか言っちゃったよ。欲求ダダ漏れじゃねえか。

よ、欲求つてなんだ!!俺はカレンに負けてないッ!今日はこのぐらいにしておいてやるってんだ!!

何か??どつと疲れたな?。取り敢えず保健室教会に戻ろう。マジな話そろそろ下校時間である。隣で簀巻きになっている相棒も、ポーノとのひと時で満足しただろう。今日の仕事はお終い、閉廷ッ!!  
そうしてゆつくりと部屋の扉を開いた。

「はいデジタルちゃん、いい子でちゅね〜♪?。」

「ばぶらう♡ママママ♡クリークママ♡おぎや、おぎやあ♡」

「地獄かよ。」

## 第2R : #出走前——誓いと祈りを青薔薇に

静まり返った控え室。

遠くから聞こえてくる、人のざわつき声。

レース前のこのピリピリした雰囲気は、いつだって不思議な緊張感に包まれてる。

ビッグネームのG1レースや中・長距離路線に比べると、まだまだ人の少ない短距離路線<sup>スプリント</sup>??それもG2クラス。勝率が安定しないままG1レースに出るのは心配だったから、お兄ちゃんと話し合った上でどうしても通っておきたい道だった。今のままじゃカレンの夢には程遠い。『カワイイダービー♪?』カレンチャン主催。SNSとレースを連携させてスプリンター達と競った。で残した結果だけじゃまだ足りないの。沢山の人にカレンを知ってもらいたい。その中で、短距離だってこんなに熱くて、カワイイがいっぱいなんだよって教えてあげたい。

その為に、まずはいつものように自撮りしてうまスタにアップしなきゃ。

「#レース前?? #緊張するけど? #頑張ります♡」

「カレンはいつも通りだな。」

「心配?」

「まさか。安心したよ。」

後ろで見ていたお兄ちゃんはそう言った。

だっていつも通りのカレンじゃなくちゃ、お兄ちゃんは気にしちゃうでしょ?それに??今日は、なんだか負ける気がしない。

緊張のドキドキとは違う胸の高鳴りが、じんわり身体に熱を広げていくこの感じ。最高の状態——だと思う。

「カレンさん、僭越ながらゼッケンをお持ちしました!」

「ありがとうデジタルちゃん。後ろ、お願いしていいかな?」

「ひええっ!?ア、アタ、アタシで良いんですか!？」

「デジタルちゃんにやってもらったら、力を貰えそうだもん。お願い♡」

「かヒュっ??。」

不思議な声を出した後、デジタルちゃんは泣きながらゼツケンを付けてくれた。後ろからちっちゃな声で『ありがとうございます?』って聴こえるのが、少し恥ずかしい。お礼を言いたいのはカレンの方なのに。でもそこがこの子の良いところだし、原動力なのが凄く分かる。

そう言えば、前にファル子さんが話してたっけ。

『デジタルちゃんは、いつも他の人の事を考えてくれるの。ファル子のファンの事、ウマ娘の子達の事?あの子は自分を低く見ているかもだけど、本当は優しくって凄く気配り上手な子だと思うな。』

ふと顔を上げると、鏡にはいつもの光景が映る。

「徳積みしましたよね?ありがてえ??ありがてえ??ツ!!」

「マジ泣きするほど??ほれ、ハンカチ。涙拭きな。」

「ちーーーーーんツ!!!」

「涙拭けっつったろが!!」

2人のそんなやり取りに思わず笑っちゃう。うん、このゆるい雰囲気緊張感を消してくれる。鏡越しにこっちを見たお兄ちゃんは、困ったように笑っていた。

会場に来る途中や学園内でも、お兄ちゃんはカレンの調子を聞いてくれた。トレーニング中は、デジタルちゃんが他の子達の面倒を見ながらカレンの事を気にかけてくれた。

レースが近づいた子には、2人はいつもそうして支えてくれている。だから皆、このチームで頑張ろうって思ってる。

今日はいつもと違うレース。いつもと違う状況。だって??お兄ちゃんが居る。

それだけで今日のカレンは無敵だけれど、折角ならお兄ちゃんからも元気を貰いたいな。

「ねえ、お兄ちゃん。カレンを仕上げてくれる?♪?」

「ん、良いぞ。じゃあ座ってくれ。」

「えっ?うん??。」

お兄ちゃんに言われるがまま椅子に座る。

その時――。

「あつ――!」

デジタルちゃんの小さな驚きと同時に、カレンの尻尾にサラリとした感触が通った。キュツと身体が強ばる。

手櫛。

うゝゝゝん??これはちよつと予想外。

「ん??カレン、尻尾をあまり振られると整えるのが難しいぞ。」

「えっ?あ、うん??。」

そんな事言われても、カレンの意思じゃどうする事も出来ないよ。ウマ娘の子達は滅多に尻尾のケアを人に任せたりはしない。その子によってこだわりがあったり、単純に触られるのが苦手な子だっているもん。

カレンはその??いつもみたいに、”カワイイ”って言ってもらえればそれで良かったんだけど??どうしよう。

ちよつと??頬が緩みそう?かも。

「大事なレースがある時、誰かさんにもこうやってたんだ。」

「そうなの?」

「ああ??俺の想いも一緒にゴールまで運んで欲しいって、ただの我儘なんだけどな。結果的にこれをやってた時は負け知らずだったんだが。」

「へえ??」

チラリと目をやれば、その”誰かさん”の顔が下から徐々に紅くなっただけだった。あはっ、カワイイ♡。

??うん。嫌じゃない。寧ろ、どこか安心してくる。デジタルちゃんがそんな風になるのも分かる気がするな。

手の感触とお兄ちゃんの体温が、ゆっくりカレンの中で混じっていくみたいだ??でもなんだろう?この感じ?ずっと昔にもあったような??。

「カレン?どうした?」

「えっ?」

「随分楽しそうだけど?」

もう一度鏡を見ると、そこに映った自分の顔は今まで見た事もない表情をしていた。緩んでしまった口元。少しだけ紅くなったほっぺ。お兄ちゃんは楽しそうって言ってたけど??これ、自分でも分かるくらいに嬉しいんだ。

「なーいしょ♡」

あつ、デジタルちゃんが見てる。

うゝ??お兄ちゃんは気付いてないけど??どうかお兄ちゃんには隠して欲しい。

内緒にしてねって意味を込めて人差し指で”しーっ”ってすると、デジタルちゃんは笑ったままどんどん色が薄くなって??えっ、薄く?

「よしっ！頑張ってこい。今日のお前は最高に”カワイイ”ぞ。」

「う、うん！じゃあ1番いい所で、カレンを見ててね♪？」

「勿論。じゃあ行くぞ、デジタル??何で気失ってんの？」

「あははっ、何でだろうね」

深い溜息をついて、デジタルちゃんを引き摺りながらお兄ちゃんは部屋を後にした。

2人が部屋を出ていってすぐ、もう1人お客さんが来てくれた。

恥ずかしそうに??ううん、申し訳なさそうに、かな？扉の影から青色の薔薇が顔を出している。

「あの??カ、カレン?さん?」

「あっ！ライスさん!!」

「ご、ごめんね??レース前なのに押しかけちゃって??。」

「大丈夫ですよ♪?ブルボンさんも来てるんですか?」

「うん。ブルボンさんは、先に観客席に行くって言ってたよ。トレーナーさんに用事があるんだって。」

「あゝ??なるほどお?。」

マヤちゃんじゃないけれど、ブルボンさんが何をしたいかは何となく分かったかも。お兄ちゃん、頑張れ!!

ライスシャワーさん。長距離路線で活躍している実力者<sup>ステイヤー</sup>で、ミホノブルボンさんと一緒にカレンの坂路トレーニングに付き合ってくれた先輩。2人ともお兄ちゃんの後輩さんのチームだから少しだけ交流はあったけれど、ちゃんと話をしたのは一緒にトレーニングをしてくれるようになってから。

ブルボンさんは”坂路の申し子”に相違無いくらい厳しかった。でもカレンの状態を逐一確認してくれたし、無理な事は絶対しない人。

ライスさんは、いつだってカレンを鼓舞し続けてくれた。休憩中は差し入れを持ってきてくれたりしてくれたお姉ちゃんみたいな人。

ここだけの話??ブルボンさんの坂路トレーニングよりもライスさんの併走の方が、カレン的にはちよつと怖かったかな。プレッシャーが。

「それでどうしたんですか??あつ、もしかして差し入れを持ってきてくれたとか!」

「ふふっ??うん。その、いつもみたいにお菓子とかじゃないけれど??。」

ライスさんが鞆から取り出したのは、一輪の青薔薇が入ったガラス瓶。

「これね?プリザーブドフラワーって言うの。お花がいつまでも綺麗なまま残せるように加工したんだよ。青薔薇の意味は??”祝福”に”夢が叶う”。カレンさんの夢が、必ず叶いますように??。」

そう言つてカレンの手を取つたライスさんは、とつてもカワイイに満ちていた。

この人の事は、デジタルちゃんやお兄ちゃんから聞いていたんだ。今のチームに入るまでのこと。

世間からは”悪役”<sup>ヒール</sup>の名前を付けられていたこと。

自分<sup>自</sup>の名<sup>分</sup>の<sup>名</sup>前<sup>前</sup>のように、たくさんの人に幸せと祝福をあげたいともがいていた事。

そして、今もこうして走り続けていること。

強い人だなつて思う。名は体をあらわすつて良く言うけれど、間違いじゃないのかも。

歡喜と祝福を——いつも言つていた、ライスさんの口癖。

その祝福は形を変えて、今確かにカレンの手の中にある。

それなら——。

「カレン、負けないよ。絶対勝つてくる。だから??見ていてね、ライス



お姉ちゃん♡」

「うん！えっ、お姉ちゃん？ラ、ライスが??ふええっ!!」

「それじゃ、行つてきまーす♪?」

ギュツとハグして地下バ道へと走る。

「あっ、あのねっ、カレンちゃんっ!ブルボンさんが、絶対勝てるって!!」

振り返つてピース。ライスお姉ちゃんは、手を振つて見送つてくれた。

うん、やっぱり絶対調かも!

絶対絶対、誰にも負ける気がしない。

今日のカレンは、最っ高にカワイイ!!

## 第2R : 出走前——ブルブルのミホですボン

俺はカレンチャンというウマ娘を侮っていた。

ウチのチームは少数精鋭（と言えば聞こえはいいがただの人数不足）の為、滅多な事でレースがチームメイト間で被ることなど無い。だがその滅多な事を、今まで見事に引き当ててきたのがカレンだ。新人ちゃん達のメイクデビューや一番のレースに付き添ってる間、G2やG3のレースは基本的にデジタルに任せつきりだった。勿論ビデオ撮影は頼んであるし、再生中間こえてくる語彙力の低下したオタクが発する奇声にさえ目を瞑れば良い映像を持って帰って来てくれる。まあつまりこうして3人控え室に居るのも随分と懐かしいのだ。

故に、カレンの生レースは久しぶりに見る。

故に、カレンの生ブルマを久しぶりに拝む。

よりによってピンクのブルマ履いてんなよコラアツ!!

クソ、やはり心理テストで好きな色を聞いてきたのはこの為だったのか!レース前だというのにブルマ姿で俺の心をかき乱してうまびよいしようにって算段だな!?!な、なんてウマ娘だ??ッ!レースに余裕で勝てるからって一発ぶちかまそうとしやがって、このっ!

カレンの透き通るような肌にピンクのブルマが合わされば、生ブルマならぬ、もはや生ハムだ。良いぞ、生ハム。お兄ちゃんは大好きだ。仮に同じ格好をしたヒト女がカレンの横に並び立とうものなら、ボンスハムである。この違い分かるな?俺は分からん。分からんがハム社会万歳。

「#レース前??#緊張するけど?#頑張ります♡」

フウ??落ち着け。カレンはいつも通りだ。ここで俺が先に取り乱してしまえば、後がなくなってしまう。こちらも冷静だぞ、誘いには乗らんとぞ、という意味表示を見せてやらなければ。

「カレンはいつも通りだな。」

「心配？」

「まさか。安心したよ。」

いやこの際勝てるレースなど問題では無い。

お兄ちゃん、お前の貞操観念が心配なんだよ。安心なんかこれっぽっちもしてないんだよ。だが実に良い仕上がりだ。ヌツ、滾る。滾るんじゃない。

そんな俺を他所に、パタパタと走りながら我が半身がカレンの元へ駆け寄っていく。

「カレンさん、僭越ながらゼツケンをお持ちしました！」

「ありがとうデジタルちゃん♡後ろ、お願いしていいかな？」

「ひええっ!?ア、アタ、アタシで良いんですか!？」

「デジタルちゃんにやってもらったら、力を貰えそうだもん。お願い♡」

「かヒュっ?!。」

半身から墮とすのはレギュレーション違反ですよ?

いや、もう墮ちてたわ。ウチの半身ウマ娘耐性マイナスだわ。何やらブツブツ感謝を唱えたと思ったら、泣きながら帰ってきた。あーあー限界化しちゃってもう??。

「徳積めましたよね?ありがてえ??ありがてえ??ツ!!」

「マジ泣きするほど???ほれ、ハンカチ。涙拭きな。」

「ちーーーーーんッ!!!」

「涙拭けつつつたるが!!!」

お前このやり取り13回目だからなっ?!いい加減確信犯だろ!!

クソっ、これだから限界オタク美少女ロリウマ娘は??語彙力だけじゃなくて賢さも下がる必要ないじゃないか!

ヌツ。カレンが鏡越しにこちらを見ている。さ、騒がしくしすぎた  
だろうか。一応レースに望むんだ、何を考えているか分からんが集中  
力を切らしてしまったなら申し訳ない??出来る大人は謝れるのだ。

俺はダメ人間なので笑って誤魔化します。へへっ??サーセン?。

しかし見れば見るほどに生ハムだな。違う、絶好調だな。頭の上に  
”絶好調”の文字が見える。いやまあ?そんなわけないけど。それ  
程迄にカレンのやる気<sup>色香</sup>が、むんむん伝わってくる。

お肌はピチピチ。

身体はムチムチ。

お兄ちゃんのポニーちゃんもガツチガチ。

良いぞ、カレンチャン。でもそこまでにしておけよ。ポニーちゃん  
が出走するかもしれない。頼むからゲート難でいさせてくれ。今ギ  
リギリゲートで立っているとところなんだ。120億の子孫<sup>仕損</sup>ツピを出  
すわけにはいかない。ふふっ、スターティングゲートならぬスタン  
ディングゲートである。は?!

むん。これ以上ない素晴らしい仕上がりですね。

「ねえ、お兄ちゃん。カレンを仕上げてくれる?♡」

これ以上ないって言うてんだろウガツ!!何求めてんだよ!!

”仕上げはお兄ちゃん♡” って言いたいのか!?!子供の歯磨き  
じゃないんだぞお前ツ!?!ポニーちゃんがメイクデビューしたらどう  
してくれんだ!

<sup>コンセントレーション</sup>  
精神集中からのスタートダッシュ。

ドータイムーヴ、意気揚々と先走ります。どうでしょうこの展開?  
社会的に掛かっているかもしれない。ひとコキする暇があればい  
いですが。

??フウ。おーけー冷静。我無問題。

「ん、良いぞ。じゃあ座ってくれ。」

「えっ?うん?。」

レース前に俺が出来るのは、ウマ娘の身だしなみを整えてやることくらいである。デジタルの時も散々やってきたのだ。ここらで1つ大人の余裕を見せながら、カレンの尻尾でも綺麗にしてやろうではないか。

そう思つて椅子に座つたカレンの尻尾に手を伸ばして――。

「あつ――！」

なんだデジタル!どうしたデジタル!何に対しての”あつ!”なんだ!!お兄ちゃんなんか不味いことしちやつてるのか!?

だつてお前にやつた時喜んでたじゃん!!

も、もしかして??俺の手櫛が下手くそなのか?下手くそなのに喜んでるように、デジタルが気を使つていたというのか?!

俺の兄貴分だった先輩も、初めてうまぴよいした時に奥さんに気を使われていてショックだったと言つていた。独身に何の話してんだクソがツ!とか思つてたけど、つまりはそういう事なのか!?

うまぴよいはした事もないが、手櫛は少し自信あつたのに??凹む。ついでに愛バに気を使わせていた事実にも凹む。

だがそれなら確かに、カレンがぶんぶん尻尾を振つているのにも説明がつく。ご、ごめんなカレン??でも仕事させてくれな???

「ん??カレン、尻尾をあまり振られると整えるのが難しいぞ。」

「えっ?あ、うん??。」

カレンの歯切れが悪い!!やっぱり下手くそには触られたくないのか!?

『お兄ちゃんの右手はなんの為にあるの?ポニーちゃんをなでなでする為でしょ?♡』

つて事だな!?それはそれで??ヌツ、滾るんじゃあないよ。

な、なんとかやらせて貰わなければ。さながら腕はイマイチなのに

トークだけは何か面白いタイプの美容師のように。

「大事なレースがある時、誰かさんにもこうやってたんだ。」  
「そうなの?」

「ああ??俺の想いも一緒にゴールまで運んで欲しいって、ただの我儘なんだけどな。結果的にこれをやってた時は負け知らずだったんだが。」

「へえ???」

うむ。事実である。

情けない話、トレーナーが出来るのは当日に向けた準備だけなので、一種の願掛けだ。それで勝ち進んできたのが、今カレンの横に立っている限界オタクであり勇者様なのだから。

ふと顔を上げると、何やらカレンが笑っている。なんだと?何の笑いだそれ。

「カレン?どうした?」

「えっ?」

「随分楽しそうだけど??。」

「なーい!しょ♡」

ヌツ

お前!意打ちはやめろオ! (建前) ナイスウ! (本音)

思わず目を逸らしてしまったが、今のはズルっ子だ。完全なるレギュレーション違反です。そうだ??ウマ娘は顔がいいのだ。泣き落としや責められだけが脅威だと思っはいたが、あざとくもいやらし——もとい、いじらしい動きをされれば誰だって堕ちる俺だっとうなる。

堕ちるな。俺はお兄ちゃんだぞ。

「よしっ!頑張ってこい。今日のお前は最高に”カワイイ”ぞ。」

「う、うん！じゃあ一番いい所で、カレンを見ててね♪？」

「勿論。じゃあ行くぞ、デジタル??何で気失ってんの？」

「あははっ、何でだろうね♡」

とぼけんなよお前ツ！お兄ちゃんが気づかないとでも思ったか!!  
勇者様を直接墮とすのはお前の十八番だろうが!!

いや??自滅の可能性がある。寧ろ自滅では？自滅の愛バだわ。キレそう。

仕方ないので、ズルズルと引き摺りながら観客席へ向かう事にした。



「許可無くウマ娘ちゃんのお尻尾に触れるだなんてギルティです！セクハラと一緒になんですからね!!」

「はい??すみませんでした?。」

目を覚ましたデジタルに、何故か開口一番説教されていた。

どうやら俺が当然のようにカレンの尻尾を弄り回した事が良くなかったようだ。ヒトに例えるなら、親しい女友達や教え子相手に髪や尻を触るようなものらしい。まさか限界オタクに常識で諭されるとは思わなんだ。凹む。

確かに軽率ではあったし、以後気をつけようと思います。

しかし、143cmのちんちくりんを腕の中に抱えながらふと気づいてしまった。

じゃあなんでコイツは気絶したんだろう??と。

「ところでカレンはどうだった？」

「それはもう嬉しそうに?へへへっ??良いものを拝ませて貰——  
耳いいいいっ!？」

「前言撤回だこの野郎。よくもその精神で他人に説教垂れながせたな

「？」

「あつ、あつーやめて下さいー！そういうところですよ、そういうつ!!」

フウ？これでもかとデジタルの耳を弄り回したところで気持ちが悪く落ちて着いてきた。うむ、これなら安心してレースも観戦できるだろう。良いかデジタル。発言に気をつけよ。お前が腕定位置の中位置にいる以上、俺はいつでもそのピコピコした耳を噛みつきに行けるんだからな。

しかしなんだ。さつきから左側に妙な視線を感じる。

なんなら服の裾をクイクイ引つ張られている。又ツ、これはボーンだな？ずっと観客席で待っていたから寂しかったのか。よしよし全く、可愛いヤツめ。

??いやめちやくちや引つ張ってくるな。身体持つてかれるわ。なんだし。

「どうしたんだヴオおおおおおッ?!?!」

「うひゃっ?!耳元で急に叫ばないで下さいよお?!。」

横向いてウマ娘の顔がゼロ距離だったら誰だって叫ぶわツ!!

し、しかもコイツは??あのクリークママと同じ、後輩ちゃんのところのウマ娘！何故かことある事にこちらを弄んでくる厄介な自称サイボーグ！

そのウマ娘の名は——ツ!!

「はい。ミホノブルヴオーノンです。」

「なんて?。」

ミホノブルボン。

巷では乾電池が主食だの、坂路でターボババアと住んでいるだの、部屋でウサギのぬいぐるみを抱っこしてるだの、ある事ない事飛び交っているウマ娘。だがその実力は間違いなく折り紙付きである。



「ひ、ヒシアケボノは?! 俺の女神をどこへやった!？」

「ライスを迎えに行ってくれました。米騒動が起きないようにと。」

「なんて?」

「米騒動が起きないようにと。」

「クソつ頑固め。あのな?!? いきなり超至近距離に迫ってくるんじゃないよ。心臓止まるかと思ったわ。あと数センチで事故ってたんだぞ。」

「事故チュー。」

「何か言ったか?」

「何も。それに心肺蘇生は心得ています。私にかかれば、90%の確率でワンプッシュユですが?」

「”ワンプッシュユ”って心肺蘇生で使わねえんだよ。シャンプー感覚で他人の生死を握るな。」

「????」

「なんで理解不能って顔してんだ。つか、どこ見て?? ホントにどこ見てんの?」

ええいツツコミきれん! 次から次へとボケ倒しおっからにツ!! デジタルは腕の中でレースに出るウマ娘達を拝んでるし、ポーノは米騒動止めに行ってるし! 米騒動ってなんだしツ!! どうすりや良いんだよこれえっ!!

あとデジタル! いい加減ヨダレ拭けよお前!

さつきから腕べつちよべちよなんだからな!?

もう! 助けてツ! 誰か助けてツ!!

「トレーナーさん、もうすぐ出走なので静かにして下さい。」

「大人として恥ずかしくないのですか?」

「貴様ら。」

### 第3R : —CHALLENGER—

「1987年に始まったセントウルSは、その名前にギリシャ神話のケンタウロスが使われていると言います。当初は1400mでした。」

「はい。ですが今では芝1200m。スプリンターズSの前哨戦としては申し分ないレースと記録していますが。」

「カレンちゃんの適正距離が1200mだから？えっと??か、勝てるって事だよね！」

『それな。』

「君達打ち合わせでもしたん？」

どうした急に——そうツツコミを入れてしまうところだった。

アグネスデジタルを筆頭に何を始めてるんだ君らは。ブルボンもそんな口調じゃないだろうが。しれっとライスも合流してるし??いや、うん。確かにボーノがさつきライスをお米様抱っこしてきてただけどさ。

なんならブルボンがそれ見て『今日は山形ですか？』って言ったし、『ライス、はえぬきじゃないよ？』って言った後本人はどうしてかツボに入ってたし。

良いのかライス。米ネタイジリは許されるのかライス。なんでそんな詳しいんだライス。

君根っこが真面目で良い子なのは良く知ってるんだけど、ボケ方のタチの悪さはブルボンと同じだと思ってるからな？何なら狙ってるのか素なかわからん分、ブルボンよりタチが悪い——いや、それは無いわ。

言つとくがもうツツコまんぞ。俺はレース中だけは真面目と評判なんだ（自分の中では）。どんなボケをされたって安定のスルーである。

チラリと横に目配せすると、こちらに気づいたボーノがニコニコと笑っていた。ふふつ、一昔前のフシギバナみたいに笑いやがって??可

愛いなコイツ。

おや? どうしたどうしたそんなに近づいてきて。トレーナーさんドキドキしちゃうなあ。こっそり何を耳打ちしてくれるんだい? さん?

「トレーナーさん、今日は塩ちゃんこだよ♪」

「どうした急に。」

『各ウマ娘、一斉にスタートしました!!』

始まつちやったよ。なんならツツコミもしちやったよ。

えっ、なんで献立言ったの?

俺今そんな顔してた?

これからカレンのレースが始まるぞって時に飯の事考えてるような顔してたの? だったらゴメン?? 生まれつきなんだよ。

生まれつき飯考えてる顔ってなんだよ。

そうか? ヒシアケボノさんもそっち側だったんだな?? 俺は完全アウエーである。1対4。ツツコミきれん。

「カレンさん、思った通り調子が良さそうですね。」

「だなー。スタートダッシュも決まったし位置取りも悪くない?? よし、カレンがどう勝つか予想するか。俺は外から回って差し切り勝ち。」

「内ですよ。1番内を突っ切って、最終直線での加速勝ちです。」

ううむ、流石アグネスデジタル。何の迷いもなく即決とは。芝1200の短いコースとは言え、まだまだ先の展開は幾らでも変わるかもしれないと言うのにこの判断力。流石偉大な俺トレーナーの半身だけはある。

まあそのトレーナーはまともにカレンの世話出来てなかったんですけどね! クズウツ!!

ヌツ。ライスとブルブルボンボンがこちらを不思議そうに見てい

るではないか。なんだなんだお主ら。こつちにも構えと申すか？ええい頭が高いわ！控えおろう僕早漏。誰が早漏だ。

「??カレンさんが勝つのは決定事項なのですか？」

「うん。負ける理由無いし。」

「ど、どうしてそう思ったの??？」

「どうして??デジタル、教えたげて。」

「いえいえ、ここはトレーナーさんこそ。」

『へへへっ??。何となく。』

ほく、ダメだ納得出来ねえって顔してる。

俺とデジタルの意見だぞっ！勝つって言ったら勝つんだよ！

やる気絶好調なウチのスプリンターが、何をどうしたらコケるのか逆に聞きたいまである。短距離のエースぞ？

今だって見てみる。カレンの胸部でターフを駆け抜ける”カレン”と”チャン”を。これで負けるわけないだろッ！

デツツツツツカ??ッ！お前中等部でそれなのか!?勝負服だと身体ライン隠してるくせになんで体操服で本気出すんだ!!子供だつて来てるんだぞッ!?!駆ける閃光乙女。巻き起こせよカワイイ旋風、栗の花の香りに乗せて。最低だよ。

話が逸れてしまった。

『レースに絶対は無い』との名言は、トレセン学園のウマ娘達やトレーナーの間ではあまりにも有名だ。別にレースに限ったことじゃなく、何かスポーツやら勝負事に関わってきた者なら似たような事は思うのだろう。

実力が。

気持ちが。

運が。

何が起因して何が起きるかなど、あらかじめ予知出来るはずもない??が。

そんなの知らねー!!!

それが”勇者御一行”である!!準備は万全。気持ちもアゲ→アゲ。運なんて誰にも扱えない難儀なものは、来たけりや勝手に寄ってくる。

ならば後は勝つと言い続けるだけだし、信じるだけなのだ!だってそれで勝ってる勇者がいるもの!長距離レース2〜3回出て勝ってるロリが居るもの!

逆にこれ以上のトレーナー精神を俺は知らない。はい、勉強不足です。後輩ちゃんにこれ語ったら『ぶちのめしたいっす』って言われた。凹む。

まあ要するに、だ。

「俺らが勝つって信じてたら、それがウチの”絶対”なのさ。」

「??ふふつ、興味深いです。是非ともその”絶対”を打ち破りたいと思います。構いませんね?」

「おう。出来るもんならな。」

「必ずぶち抜きます——勇者御一行。」

「泣いても知らんぞ——無敗二冠のサイボーグ。」

眼は口ほどにものを言うとはよく言ったものだ。よくまあそこまでギラついた瞳が出来る。往々にして強者に共通して見られるのはその闘志である。それこそ背筋に寒気が走るほどの、瞳の奥底にあるウマ娘としての本能。

ミホノブルボンは、勇者御一行と言った。何を言ってるんだか。

ハナっからアグネスデジタルしか見ていないレース狂いめ。上等だよ。

「まあ俺らに勝つのは三冠取るぐらい大変だからな。」

「あつ。」

「えっ?」

「菊花賞の話はしないでツ!!」

「どうした急に。」

「ライスに菊花賞を連想させるワードはNGです。泣ーかせたー!」

「圧倒的無表情。電池あげるから静かにしてなさい。」

「わーい。」

「どこ見てんの? ラ、ライスもほら? 悪かったよ?? だから泣き止んでくれ? な?」

「ライス泣いてないよ?」

「なんだし。」

好き放題やり過ぎでしょこの子ら。

そうこうしてたらカレンが最後の直線入っちゃうじゃん! 全然レース見れてないって俺のバカツ!!

もしこれがカレンにバレたら?!

『えー!? お兄ちゃんカレンのこと見ててくれなかったの??? じゃあ今からカレンのことだけ見てて。もちろん朝まで?? ね? ♡』

ヌツ。実際カレンは無敵メンタル過ぎて何をしても搾り取ろうとする未来しか見えない。結論、お兄ちゃんはどう足掻いたところで社会的死亡である。今日って大安吉日?! い、嫌だっ! まだすっぴんわっしよいたくねえ!!

あつ、カレンが内側ぶち抜いてる。加速えげつな。何で女の子走りでその速度が出るんだウマ娘よ。これでデジタルの予想が当たったのは23戦中21回である。お前トレーナーやる? 俺がウマ娘?? もといヒト息子やるから。適正距離は120m以下で頼むな。

『最後の直線、最初に抜けてきたのはカレンチャン! 後続をどんどんと突き放していくー! 1着はカレンチャンです!!』

「勝ったな。知ってたけど。」

「勝ちましたね。分かってましたけど。」

「あれ。ブルボン達は?」

「居ないんですか?」

辺りを見回してみるが、先程までボケ倒していた2人の姿がどこにも無い。勝ちが分かって戻ったのだろうか。どうせならカレンに言葉でもかければ良かったのに。

ほら見る、カレンがこつちに手を振りながら小走りで——  
デツツツツツツカ??ッ!お前中等部で（ry

「そーいやなんであの2人が応援に来てたんだろーうな。そんなに接点あつたっけ。」

「そりゃ勿論、坂路トレーニングを手伝ってもらったからですよ!」

「俺それ知らない。」

「えっ、言つてませんでしたっけ?言つてませんでしたね。」

「なに秒で自己完結してんだー?鳴かせんぞお前ツ!耳出せオラツ!!」

「ウマアアアアアアアツ!!」

「思つてたのと違う。」

そんなこんなで無事レースは終わり、カレンチャンと合流を果たしたのだった。



「ねえお兄ちゃん、今日のカレンどうだった?」

「終始最高にカワイかったぞ。」

帰り道、カレンはそんな事を聞いてきた。満足気である。

ち、近い近い??何でレース後なのにそんな彩いろどりフレグランズ漂わせてんだ。こんなもん天そらだつて墮ちるし神さまも惑まどうわ。クソっ、野郎が運動した後なんてただ汗臭さが残るだけなのに?!何が男女で違ちがうつて言うんだよ!

ほら見ろ!そこでデジタルが感嘆の涙を流しながら拍手してんだ

ろ！あれが結果なんだよ！だから見栄張って全部見てた風醸してるお兄ちゃんをそろそろ許して下さいお願いします!!

「カレンさん、今日は絶好調でしたね！」

「ありがとうデジタルちゃん！きつとデジタルちゃんが力を貸してくれたお陰だね♡」

「ヌツ!!」

あつ、気絶した。ヌツ、てお前。

街中で奇声あげるんじゃないよ！変な目で見られるでしょっ!?

「お兄ちゃんも応援ありがとね♡」

「ヌツ!!」

なーんでこっそり耳打ちするの？不意打ちはダメって言ったでしよー？耳開発されたらどう責任取るんだお前。平静装ってるけど実は腰抜けそうだったからな！産まれたての子鹿みたいに足ガツクガクしてるんだからな！

誰かバ鹿って言ったか？

まあいいさ??。とにかく、これでカレンの勢いもついた事だろう。元から実力はあったのだ。何に不安を感じていたのか分からないが払拭出来たのなら万々歳である。

取り敢えず帰ってご飯だ。今日は塩ちゃんこだもんな、ポーノ？

そうしてポーノの方を向こうとした時、後ろからけたたましい足音と拍手と呼ぶにはあまりに大きなクラップ音が同時に聴こえてきた。

「ええ、ええ！素晴らしい走りでしたよカレンチャンさーんツ!!」

「は？とま、止まれツ！止まれ！バクシンオーツ!!」

「はいっ！私こそが全ウマ娘を代表する超模範的優等生にして学級委

員———!」



止まりきれなかったのか、何かを叫びながら向こうへ行ってしまった。なんだし。

あつ、帰ってきた。

「サクラバクシンオーですとも!!」

「はい、そうですか。お疲れ様です。」

「いえいえッ!市中見回り兼後輩のレース鑑賞も委員長の勤めですからねっ!!」

サクラバクシンオー??見ての通りである。後輩ちゃんのチームとは別所属ではあるが、自分こそがキングオブ学級委員長である事を疑わず、常に猪突猛進バクシン街道まっしぐらのウマ娘。色んな人達に愛されて育ったんだね??そのままの君で居て。ただ少しは落ち着こうな。

カワイイダービー♪ではウチのカレンに敗れはしたものの、もしウマ娘において最強のスプリンターが誰だと問われれば万人が答えるだろう。『それはサクラバクシンオーです』、と。

ウ、ウチのカレンだって負けてないし!?見ろこの万人を虜にする魅惑的なボディに愛嬌のある仕草や言動!ヌツ、テロじゃないか。

「それで?そんなに急いでどうしたんだよ。」

「皆々様方がお疲れでしょうという事で、この私自ら差し入れを作つて参りました!なんとッ!委員長お手製の桜もち!美味ッ!!おーっどうぞー!」

「やよいちゃん混ぜってるな。うん、でも確かに美味そうだ。サンキュー、委員長。」

手渡された桜もちは、本当にこのバクシンウマ娘が作ったのかと思われる程に綺麗に作られていた。そういえば昼も食ってないし、小腹もそろそろ呻きを上げ始めている頃合だ。素直に助かる。

「カレンチャンさん！今日の走り、この私も強く感動しましたよ！これは負けてられませんね！」

「えー？バクシンオーさん、ただでさえ早いのものもつと早くなるんですか？♪」

「もちろんですとも！学級委員長に限界はありませんからね！目指すは全距離制覇ですっ！いつかまた、ターフの上で競いましょうツ!!それではツ!!」

踵を返したサクラバクシンオー。

丁度俺の前を横切った時——その顔に、笑みは無かった。

「ええ、いつか——お会いしましょうとも。」

季節外れの桜の花弁が見えた気がした??気の所為だろうか。

貰った桜餅を口に含むと、柔らかさの中に明らかな違和感がある。

これは??紙?なんだし。間違えて食ったらどうすんだ??ああ、なるほど。

「??いつか、ねえ。」

開いた紙には、たった一言。

『スプリンターズS』

「??トレーナーさん。」

「起きてたか、デジタル。どうやら宣戦布告らしい。受けて立とうじゃないか。ウチのカレンが何度だって打ち破るさ。」

「それなんですけど??回避、しませんか?」

そう言ったデジタルの顔は、何かを憂いている表情だ。そんな顔は初めて見る。

こちらの袖をきゅつと掴み、サクラバクシンオーの背を見送りながらアグネスデジタルは言った。

「あの人はあたしと同じ??”領域”こちら側にいます。」

## 第4R : #お兄ちゃんという面影

自分が凄く浮き足立っているのを感じる。こんなに早く来て欲しいって願った一日は、凄く久しぶりかも。

理由は単純??お兄ちゃんからお出掛けの誘いが来たから。普段はカレンが連れ回しちゃってるから心の中ではごめんなさいって思ってたけど、お兄ちゃんから来たって事は嫌じゃなかったって事だよ  
ね。

『試合に勝ったし家で映画でも観るか?』

何度も携帯を見ては、その度に心がポカポカする。チームの子達に對してもだけど、普段とは違うこういうフォローをしてくるのがお兄ちゃんのズルいところ。皆思ってるのも多分知らないんだろうなあ。

「顔、出てるわよ。」

「え?」

「随分と楽しそうね。」

同室のアドマイヤベガさんが、そんな事を言った。うくん、やっぱりお兄ちゃん絡みだと、隠せないのかも。

だって嬉しいものは嬉しいから。笑って誤魔化すと、アヤベさんは少しだけ笑って、視線を下げて足をパタパタさせた。

モコモコで覆われたファアのスリッパ。アヤベさんのトレーナーさんが、この人の為に送った初めての贈り物??って事になってるけど、カレンが少しだけアヤベさんのトレーナーさんにアドバイスした事を本人は知らない。きつと言ったら真っ赤になって怒っちゃうもん。

初めて会った頃のアヤベさんは、氷の様だった。他者を近づけない、関わりを持つとうとしない、けれども何かを求めて頑張ってるのから回ってる。自分自身すら満足に身動き出来ないくらい、冷たい氷??どうしてこの人がそんなに必死だったのか、直接は聞いてない。軽い気持ちで踏み込んだじゃない——そう強く感じていたから。

ただ1つだけ分かるのは、そんなアヤベさんにずっと寄り添っていたトレーナーさんを、この人が邪険にしているわけないよねって事。オペラオーさんが太陽のように氷を照らして、ドトウさんが少しずつ氷を砕いて、トレーナーさんがこの人を受け止めて、温め続けた。

日本ダービーが終わって部屋に戻ってきたアヤベさんの、『肩の荷が降りた気がする』って言った時の顔を覚えている。その時ようやく、アドマイヤバガさんっていうウマ娘の人と出逢えた気がした。

「どうですか?」

「何が?」

「スリッパ。」

「??別に、普通よ。」

「顔、出てますよ?」

ほらっ、そっぽ向いちやった。カワイイ。

「それより、遅れるわよ。出掛けるんでしょ。」

「あっ!じゃあカレンそろそろ行きますね!」

うくん?でもあと少しだけ?!

「アヤベさん。」

「何?」

「感想が知りたいらしいので、電話してあげたらどうですか?」

「感想って、なんの——っ、はっ、なん?!?!、良いから早く行きなさいってばっ!!」

「はーい♡」

ようやくこっちを向いたアヤベさんは、真っ赤になりながら枕を投げようとしていた。ふふっ、満足♪ああでも、後が怖いかも。いつかやり返されるかな?

そんな事を考えながら軽い足取りで駅へと向かった。

流石に人が沢山いる。休日の午前中だから仕方ないと言えば仕方ないよね。5分前には着くはずだったけれど、途中でウマスタのフロワーさんとばったり会ってお話しちゃったから??あちゃー、10時ピッタリ。待ち合わせの場所に向かうと、顎に手を当てて何かを悩んでいるスーツ姿の人が、人混みの中にポツンと1人。

お兄ちゃん、休日もスーツなんだ。うーん、ちよつと残念。私服のお兄ちゃんも見れると思っただけだなあ。

まだこつちに気づいてないみたいだし、腕組みしちゃおーつと♡。

「??どうしたもののか。」

「どうしたの?お兄ちゃん。」

カレンにビックリする事無くお兄ちゃんはこつちを見下ろして笑っていた。ぶー??ちよつと複雑??。

「カレン、来てくれてありがとうな。ただちよつとだけ待っていてくれ。」

「はーい。」

少し離れたお兄ちゃんは、携帯で誰かに電話を掛けていた。詮索はしないけれど?なんだろう??ちよつと気になる。普段あまり見ない、どこか焦ったような表情。最初の方はお兄ちゃんの声が小さくて良く聞こえなかったけれど、最後ら辺は聞き取れた。

「先生、落ち着いて下さい———そうですか。お疲れ様です。それじゃ。」

先生??学園の人かな?

「ごめんな、カレン。待たせた。」

「電話はもう良いの?」

「ああ、大丈夫。少し作家さんが限界を迎えただけだよ。」

「大丈夫じゃないと思うなあ??。あつ、でも待たせたって思ってくれたなら??手、繋いでもいいかな?」

作家さんって言うのが凄く気になるけれど、お兄ちゃんが大丈夫って言うなら大丈夫??なのかな?

カレンの手を取ったお兄ちゃんは、そのまま家へと案内してくれた。



映画をレンタルしてお兄ちゃんに案内されたのは、新しめなアパートの一室だった。てっきりトレーナー寮かと思ってたから、平気なフリをしてるけどかなりビックリしてる。

やっぱりデジタルちゃんと一緒に沢山成績を残してきたし、実力トレーナーとしても別なのかな?開かずの部屋も特別に作って貰ってたって聞いているし。

部屋の中は凄くシンプルで、特段家具が多いとかお洒落なインテリアがあるとかって言うわけじゃなかった。秋川理事長のスタンドが飾られた神棚はちよつと分からなかったけど??崇拜?なんか周りに凄い数のペンライトが刺さってる。

座っていいぞって言われるがまま、取り敢えずソファアに座る事にした。

「楽しみだね、お兄ちゃん。ドキドキしてきたかも。」

「ああ、そうだな。」

たまに見せるお兄ちゃんの表情。優しさに溢れてるけれど、どこか悩んでいるような憂いの空気が滲み出ている。

カレンやデジタルちゃんだけじゃなくて、1つのチームを纏めあげている大黒柱みたいな存在だから、今もこうして他の子の事を考えているのかもしれない。

カレンのことをお兄ちゃんは沢山知っているのに、お兄ちゃんのこととは分からない。それが少しだけモヤツとする。何か少しでも手伝える事があれば??そう思ったのは、1回や2回じゃないのに。

お兄ちゃんは、こつちを向いて言った。

「カレンはレースに向けて詰めてたから、今日1日楽しんでくれるなら嬉しいよ。練習をちゃんと見れなくて悪かったな。」

「気にしてるの?」

「そりゃ勿論。」

悩んでいたのはカレンのことだって。

言ってくれば良かったのに??あつ、でもお兄ちゃんはそういう事言わないよね。カレンはストイックだなってよく言われるけれど、カレンからすれば見えないところでそんな風にずっと考えてるお兄ちゃんも相当ストイックで諦めが悪いよ? (勿論良い意味でね。)

「だってカレン、まだ夢の途中だろう?」宇宙一カワイイ私” っていう夢の。」

「えっ——。」

懐かしい記憶。ずっと昔??子供だったカレンの夢を肯定してくれた人。周りの人達は子供らしくて可愛いねって言っていたけれど、それは認めてくれていたわけじゃなかった。

皆を幸せにしたいから、カワイイカレンであり続けたい。それは今も変わってないし、それがもしかしたら自己満足でしかないかもしれないって言うのは少しだけ思う事もあった。それなのに、お兄ちゃんは今もこうしてカレンの夢を話してくれている。

覚えてるの?カレンのこと。



その一言でいいのに、言葉が続かない。ギュツと、手が握られた。尻尾を整えてもらった時と同じ感じ??どこか懐かしくて、温かい??そんな——。

『カレンは、自慢の——。』

??あつ。そつ、か。私は知ってたんだ。この懐かしさも、温かさも??辛さも。

もう1人だけ、そんな子供らしい夢を信じてくれた人がいた。応援してくれた人がいた。その面影がお兄ちゃんと被ってるから、こんな気持ちなんだ。

ねえ??兄さん。

私は、ちゃんと夢を追いかけられているかな。

もし兄さんが今もいたら、こんな風に過ごせたりもしたのかな。

私はお兄ちゃんに寄りかかっていた。何かを感じてくれたのか、お兄ちゃんが肩に置こうとした手も自分で掴んでしまった。この人は兄さんじゃない。頭で分かっているでも離れたくなかった。どこかへ行ってしまるのが、怖いから。

気づいたら、映画は終わっていた。うん??おセンチなカレンはおしまいつ。いつも通りに戻らなくちゃ。

「終わったね。」

「終わったな??。」

「お兄ちゃん、もしかしてちよつと怖かった?」

「まさか。寧ろ普通に楽しんでたよ。カレン的にはどうだったんだ?」

??どうしよう。お兄ちゃんの事で結構いっぱいだったからあんまり覚えてない。

「ん?やっぱ後半が良かったかな?」

当たり障りなく、それっぽい事で誤魔化しちゃう。ごめんない、お兄ちゃん。カレンちよっぴり悪い子になっちゃいます♪

「クライマックスって感じで盛り上がったかも。あつ、続編もあるけどどうする??:」

きよとんとしてる。

もしかしてあんまり覚えてなかった?じゃあまだ時間はあるから、今日1日楽しもうね。お兄ちゃん♡

## 第4R : カレンチャンといふ物の怪

『古代の哲学者は言いました。唯一の善は知識であり、唯一の悪は無知である、と。』

アグネスデジタルがそう言っていたのは、カレンのレースが終わった次の日であった。

『ソクラテスがどうした。』

『カレンさんの話です。今のままでは、領域に入ったサクラバクシンオーさんと競うのはかなり厳しいかと。仕上がりがどれだけ完璧であつても、最後の決め手には欠けるかもしれません??そこでトレーナーさんが今よりもっとカレンさんの事を知って、その長所を伸ばして差し上げるんですよ。』

『お前の手帳じゃダメなのか?』

『あれはアタシがカレンさんを見て感じた事、実際に話で聞いた事を纏めた物なので、トレーナーさんにとって参考にはなれども解答ではありません。トレーナーさんにだからこそ見せてくれるカレンさんの本質や純粋な気持ち??知って欲しいのはそれなんです。』

普段の限界化したデジタルからは想像がつかない真面目な声。それ程までに、領域に踏み込んだサクラバクシンオーを脅威と見ているのか??或いは、チームの絶対的エースとしてカレンチャンの事を案じているのか。

まあ何にしても、だ。

『分かったけどいつまで変態望遠鏡覗いてんだ。』

『マヤノさんとブライアンさんの絡みを見ないなんて選択肢あります?』

『いや無いな。どれ俺にもマヤ×ブラを——話をしてるんだが??』

『もう、せつかちさんですnee??。』

『顔だらっしな??その顔で哲学云々申していたのか?』

『まあまあ。全て本心ですからね!カレンさんの道が開けるかどうかはトレーナーさんの頑張り次第なのです。じゆる??。』

『又ウ??デートでもした方が良いのか??。』

『えっ。』

『なんだその顔。お前撫で転がすぞオラツ!!』

そんなこんなで??何とも言えない薄ら笑いを浮かべたアグネスデジタルをトレーナー室で追いかけて回したのが実に1週間前である。歳とると時間が経つのが早くてダメね??。

今日は休日。多くの店が開店時間になるこの時間帯は、流石に駅前が人の波である。うつぶ、酔いそ。

田舎生まれ田舎育ちの俺に都会の環境は、10年居ようと慣れるものじゃない。これならクソド田舎な地元山奥で猪とウリびよいした方がマシである。死ぬかな?

だが今日俺が下手をすれば、死ぬかもしれんというのは変わらないのだ(社会的に)。

昨日カレンに送ったメッセージには、確かに俺発信で『試合に勝ったし家で映画でも観るか?』との一文。勘違いしないで欲しいしUR Aに報告なんてもってのほかだ。俺は紛れもなく磔刑か去勢である。

トレーナーを本気で目指していた時、まさか学園がトレーナー寮を所有しているなんて知らなかったから徒歩圏内にアパートを借りてしまったのだ。恥ずかしいね。

この事は我が半身しか知らない。まあその半身からも”私物だけ隠しておいて下さい”とか言われたけど、アイツの私物なんかやよいちゃんの神棚とアホみたいに置かれているペンライトだけだろうに。隠す必要ある?

因みに一緒に来てサポートして♡って言ったら満面の笑みで、『はくキレそくく』って返された。何でだよ。

本当に困った時は連絡下さいね、とは言われたもの??正直自信は無

い。だって俺カレンの私服初めて見るし??ウマ娘と出掛けるなんてデジタルと2人かボーノも入れて3人でしかないし??いや、何故かブルボンが真後ろにいた事があったな。

ええ?どうしよう??変に緊張してきた??。

「??どうしたもののか。」

「どうしたの?お兄ちゃん。」

\*トレーナーは 心臓が1/3程 縮んだ。

\*トレーナーは ヒト息子が1/3程 伸びた。

何たるスウィートボイス。横を見ずとも分かる距離感??カレン、当たってる。出会ってコンマ、即腕組み。出会って即合体する企画物ビデオだって3〜5秒は猶予あるんだぞ知らんのかお前。

お兄ちゃんの腕が『%』<sup>バイスラ</sup>状態!ドータイムーヴも血液循環100%!!ヒヒーン、いつもより多く当たっております!“カレン”と“チャン”が織り成す柔らかな曲線のマリアージュ。

そうだ、これを『曲線のソムリエ』と名付けよう!初めまして。『曲線のソムリエ』代表、魔法使いチェリー・ポピンズです。ぶっ飛ばされんじやねえかな。

阿呆な事考えつつもゆっくり振り返ると、そこには私服姿のカレンチャンが居た。

なんだその男を惑わす黒タイツは。破廉恥が過ぎる。おっ、赤いスカートは女の子らしくて良いじゃないか。実に良い。そういうのだよそういうの。シンプルなデザインの白ニット??いやニットじゃないか?おじさんには名前が分からん。袖はシースルーなのか。ほほう、腕が透けて??中等部だよな?ふーん??。

「カレン、来てくれてありがとうな。ただちよつとだけ待っていてくれ。」

「はーん」

カレンを待たせて少し距離を取り、俺は真っ先に携帯を取り出した。

「デジタル助けてッ！」

『あの〜??何で集合時間から1分で電話かけてくるんですか?草枯れてよもや牧草ですよ。』

「俺には刺激が強過ぎて??直視出来ん??ッ!!」

『かあ〜!!ダメダメダメ!どうしてそこで日和っちゃうんですか!?!今こそ大人の男性としてリードしてあげるところですよ!アタシが行かない分、しつっつかりカレンさんのカワイイ表情を押さえてシチュ記憶して原稿用紙にそのレビューを書いて明後日までに提出して下さい!!』

「おい。目的変わってんぞ。」

『トレーナーさんの今日の頑張り次第で!アタシは!!カレン<sup>新</sup>本<sup>刊</sup>が出せるかどうかの大事な時期なんですよ!』

「先生、落ち着いて下さい。」

『本当はアタシだってそこで壁になりつつカレンさんのカワイイ表情に尊みとしんどみを感じていたいのにっ!!』

「そうですね。お疲れ様です。それじゃ。」

切ったわ。1度ああなるとあてに出来ん。恐らく今頃は限界オタク化して大泣きしているだろう。そこにポーノとクリークがやってきてバブバブ甘やかされるまでが見える。

「ごめんな、カレン。待たせた。」

「電話はもう良いの?」

「ああ、大丈夫。少し作家さんが限界を迎えただけだよ。」

「大丈夫じゃないと思うなあ??。あつ、でも待たせたって思ってくれたなら〜??手、繋いでもいいかな?♡」

こっつ、このウマ娘??ッ!!フウ??落ち着け冷静アムファイン。手の

平に意識を集中させる??汗腺を塞げ??。お兄ちゃんは手汗なんてかかないのだ。昭和のアイドルみてえだな。

覚悟を決めた俺はカレンの手を握って、マンツーマンの戦いへと足を運ぶ事にした。

うひえくちっちゃく。しゅべしゅべく。

キツシヨっ!!



勝てねえよ??。

結局ここに来るまでの道中でカレンに好き放題弄ばれてしまった。今だって無臭をつらぬいていた筈の俺の部屋が彩フレグランスで満たされてしまっているのだ。精神衛生上良くない。いや匂いは良い匂いです。万歳。

映画も2、3本見るつもりで互いにレンタルしたのだが、カレンが何を借りたのかは全く知らない。教えてくれないんだもん??。こいつがホラー好きなのは、勇者手帳で予習済みだ。だから少し前にオスメの映画聞いてこっそり観てたんだが、ホラー色と言うよりはパニック色が強かった。そつち系は別に苦手でも何でも無い。

まあ優しい所から教えてくれたかもしれないから一概には言えないが、その映画に濃厚過ぎる濡れ場があった事は鮮明に記憶している。カレンの原点を知った気がして恐怖に慄いた事も。

『あつ、俺喰われるな』って??寧ろその考えが強過ぎて何にも話が入ってこなかった。お前よくオスメ出来たな。

「楽しみだね、お兄ちゃん。ドキドキしてきたかも。」

「ああ、そうだな。」

こっちだってドキドキしすぎて吐きそうだわ。何出てくるか知らないんだぞ。どこまでも俺を狂わせるウマ娘め??今に見てるよ?お兄ちゃんだってホラー耐性上がってんだって事教えてやんよ。

あつそうだ(唐突)。それはそれとして、レース前って事でちゃんとしたオフを与えられていなかった事はマジで申し訳ないと思ってるぞ、カレン。

「カレンはレースに向けて詰めてたから、今日1日楽しんでくれるなら嬉しいよ。練習、ちゃんと見れなくて悪かったな。」

「気にしてるの?」

「そりや勿論。だってカレン、まだ夢の途中だろう?」宇宙一カワイイ私”っていう夢の。」

「えっ——。」

『いやあああああ!!マイケルウツ!!』

ヌアツ!!!バカヤロウツ!!開幕悲鳴で始まるホラー映画があるかツ!!心臓が1個止まったわクソマイコーがツ!!ふざっけんなよ!!

思わずカレンの手をガッチリロックしてしまった。おおお落ち着けよ俺??情けない姿を見せるのはまだ良い。失神も大丈夫だろう。いくらカレンでもこちらの意識がない時にうまびよいの算段を立てるほど鬼では無いはずだ。

ここが誰も助けに來ない我が家だとしても。

ここが助けの無い我が家だとしても!

ガチ泣きだけは避けなければならぬ。30手前のおっさんがガチ泣きしてる姿って需要ある?いや、無い。あー泣きそ。

怖いものは幾つになっただって怖いものだ。例えフィクションだと分かっていても、現実で説明されていない事が多々ある以上妙にリアリティある映画はタチが悪い。普段ならぬいぐるみやデジタルにしがみつけば何とか意識を保てるが、隣に居るのはカレンチャンネル。1度でもしがみついてみる。誘い受けのプロがあればあれよと俺を手玉に取り事案発生、トレセン学園からうまびよい警察が派遣されてもれなく御用改めである。



『本当だよ！4本足でとてつもなく速い芦毛のモンスターだ??俺は見ただよ。舌を出しながらこつちへ向かってきて?ッ、うわあああああ!!』

『きやあ!!マイケルがモンスターにシャツを破られたわッ!!』

『俺に任せろ！手懐けてみる!』

『そんな、無茶よジャスタウェイ!!』

テンションおかしくない?いや、タイトルで誤魔化されてたけどこれB級映画では?カレン??お前、お兄ちゃんがホラーダメなの知ってこんなマイルドなチョイスに路線変更を考えてくれたのか?ふふっ、優しいじゃないか??他にあっただろ。

ヌツ。ぴよいの波動を感じる。カレンがえらくしつとり身体を寄せてくるぞ。いやいや場面が合わんって。

何でくつつきでしたー?どこの世界にB級映画観ながら良い雰囲気だね??ぴよいしょ?♡って近づいてくる乙女が居るんだー?

ここに居たわ。

今ジャスタウェイが芦毛のモンスターと曲芸してんだよ。お兄ちゃん玉乗りは出来ないし芦毛でもないぞ。精々ベッドの上で股間のモンスターを優しく足蹴にされながら玉転がしコースである。

は?されんが???

しかしここは大人の余裕を見せつける場面なのかもしれない。デジタルも大人の男性としてリードしてあげるべきだと言っていたじゃないか。

呼んだのは俺だがここは1つかレンの心臓も縮小させてやろう。俺は確かにケツイを固めたんだ。大人の怖さを思い知れよ!!

そつと肩に?手を、こう??触れるか触れないかのギリギリで??あつ、ち、近?やめたい??吐きそう??もう自首して——何っ!?カ、カレン!?!お前からこつちの手を掴むのは無しだろうッ!!

『好きよ、マイケル??。』

『僕もだよ??:。』

濡れ場だわ。エツツグ??テンション上がるなあ。

テメエいい加減にしろよクソマイコーツ!こっちはぴよいの波動  
ビンビンだつて言つてんだろうがツ!!

い、いや??これはまさか?カレン、お前知つてたな?このタイミン  
グで濡れ場があるの分かつてこっちの動きを封じたんだな!?B級  
映画見せて俺がお前に安心しきつた所を畳み掛けるつもりだったん  
だろうツ!?

なんてウマ娘だ?!エンディングはまだか!?さつさと終われよ!!い  
つまでベロチキューしてんだコイツら!!

『ゴールデン・ホース??f i n. 』

「終わったね。」

「終わったな??。」

「お兄ちゃん、もしかしてちよつと怖かった?」

「まさか。寧ろ普通に楽しんでたよ。」

な、何だよ??ジト目やめろよ?ちよつと強がったって良いじゃない  
か!

??というか、何で映画見たんだっけ?あつ、カレンの長所伸ばすん  
だった。目標未達成!終わり!終われねえ??デジタルにぶつ飛ばさ  
れる??。

長所?長所??えっ?カレンがぴよいしようとしてた事しか分かり  
ませんけど。嘘、俺のトレーナー適正ザコ過ぎ??。

いや、違う??疲れているんだ。よくよく考えたら俺も休みを取るの  
は久しぶり。だからこんな風に、カレンの一挙手一投足に振り回され  
るのだろう。

カレンチャンだつてきつとからかっているのでは無く、純粋に俺と  
<sup>アオハル</sup>青春を謳歌したいだけなのだ。きつとそうだ。そう考えればなに、今  
日だつてチームのウマ娘と休日を過ごしているハートフルな1日で

はないか。邪な考えは捨てなければならないな。

「カレン的にはどうだったんだ？」

「ん〜??やっぱ後半が良かったかな？」

濡れ場じゃねえかよツ！ああもおやだあああツ！！

「クライマックスって感じで盛り上がったかも♡」

そこまで聞いてねえんだよ!!こっちは最初っからクライマックスなんだわ！何お兄ちゃんとうまびよい伝説作ろうとして1人で盛り上がったんだ!!

これがカレンチャン??これが誘い受けのプロ?つ、強え??.今この瞬間が1番ホラーだったわ。て、手は出さんからなっ!?!お前これ以上俺を誘惑してみる！台所からフランスパン持ってきて蹄鉄嵌めてここで履くぞ!?(ハツピーミック並感)

フウ??深呼吸。次だ次。カレンが実力行使に出る前に、絶対乗り切ってやる。

「あつ、お兄ちゃん。続編もあるけどどうする??」

いい加減にしろよお前えツ!!!!

第5R : #夢、約束——それは”まじない”。

バクシンオーさんとのレースが近くなってきたから、今日はお兄ちゃんの後輩さんも含めての合同練習。向こうの新人さんもデビュー戦があるみたいで、主な練習をするのはカレン達2人。それをサポートしてくれるのが、お兄ちゃんにデジタルちゃん、お兄ちゃんの後輩さんと——。

「??きた?えっ、嘘、はやっ??!」

後ろから物凄い速さで迫ってくる強烈なプレッシャー。何度もカレンの練習に付き合ってくれた、優しい優しい(?)ステイヤーさん。

「ライスお姉ちゃん、怖いかもお??っ!!」

短距離のカレンに合わせる為の併走だから、ライスお姉ちゃんはカレンよりも長い3000m。先にスタートしてた分いつスパートに入ってもおかしくは無いけれど、まだカレンは第3コーナーに入ったばかりなのに心配が迫ってくる。仕掛けるのが早い??ううん、違う。多分これが、お兄ちゃんの後輩さんのやり方。徐々に速度を上げながら前の方にプレッシャーを掛け続ける、超ロングスパート。実際、それで勝てるレースは増えたようにも感じる。

後輩さんは、ウマ娘の子達の事を第一で考えてる。どれだけ自分の負担が大きくなって、絶対にウマ娘一人一人の性格に理解を示して、その関わり方と強みを探して、その子の全部を引き出して勝つんだって。

だから、さも才能で全部やれてる”天才”だなんだと周りが揶揄しているのが心底気に入らない??そんな風にお兄ちゃんは言ってた。

ライスお姉ちゃんも、そんな後輩さんの事はお姉さまって慕ってる。この人の走りがそれを物語って——と言うより、人が変わっちゃってる!!

「??行かせない。」

「うう〜??ピリピリする〜!!」

もうすぐ横に並ばれる。併走とはいえ、ここで負けるようならサクラバクシンオーさんには適わない。

その時だった。

「カレン！最っ高にカワイイぞーツ!!」

スタンド側を向く余裕は無い。でも分かる??分かっちゃうんだ。お兄ちゃんがカレンの事をそう言ってくれているのは、カレンの事を信じてくれてるって事。

そう??兄さんみたいに。

だから頑張らなきゃ、カワイくないよねっ!!

「??ツ。」

ライスお姉ちゃんが焦ったのを感じた。ゴメンなさい、隠していたわけじゃないし手を抜いてたわけでもないの。ただ、お兄ちゃんが応援してくれる。カレンなら出来るって信じてくれている。その”想い”があれば、絶対負けないってだけ!

走って、走って、走って。景色がどんどん流れていくのを横目に感じて、どこまでも走る。ゴールの向こうで、カレンを待っていてくれる人が居るから。

「はあっ、ふう??いい、いつちや〜く?!!」

膝に手をつけて、そう口にした。あっついなあ??ちよつと見た目はだらしないかもだけど、ジャージのファスナー開けちやおうかな。お兄ちゃんは??あっ、なんか後輩さんと話してる。もう、ちゃんと見て

たかな？腕にぎゅつとしちやえ♪

「お疲れ。」

「お兄ちゃんの声が聴こえたから張り切っちゃった。」

「ああ。しつかり見てたよ。」

本当にく？でも嘘が付けない人だから、多分本当なんだろうなあ。何を考えてるのか、今はずっとカレンの事を見てくれてる。

あの日——お兄ちゃんと一緒に映画を見た、あの1日から??たまたに視界がチラつく。

お兄ちゃんに、兄さんの面影が重なって見える。

そんなはずない。だって、兄さんは居ないんだもん。じゃあどうしてそんな風を感じるんだろうって、それはカレンにも分からない。最近は重なる頻度が多くなってきた気がする??でも今はレースに集中しなくちゃ。

バクシンオーさんは、領域(?)に入ってるから一筋縄じゃいかない。お兄ちゃんとデジタルちゃんがそう言っていた。カレンには2人の言う”領域”が何なのかは分からないけど、そんな風に注意してくれるって言う事は本当に手強いんだなって思うの。『カワイイダービー♪』でも結構ギリギリだったし、ひよつとしたら——なーんて、走る前から負ける事なんて考えちゃダメ。カレンはいつだって本気で、カワイイカレンチャンでいなくちゃいけないもん。だって約束したんだから。

「じゃあウチの新人さんとデジタルさんも呼んで筋トレっすね。それで午前中終わりって事で。」

「そうだな。」

「腹筋からで良いっすか？」

「おう。」

「兄さん一緒にやろ？」

「おう。」

ターフの上に寝転がると、火照った身体を冷ますように優しく風が吹いた。ぽかぽか陽気が、なんだか妙に心地良い。ちよっぴりお眠なカレンです。

お兄ちゃん、また何か考えてるのかな？真剣な顔??なのに、ちよっぴり冷や汗?をかいてるし?。ん〜!やっぱりお兄ちゃんの事分らない!カレンの事知りたいうって言った時も、お兄ちゃんはこんな気持ちだったのかな?

ん??またまた後輩さんと2人でこっそり何か話してる。

「あのさ、後輩ちゃん??スタミナ練習は?今じゃなくない?」

「腹筋だっつったろうが。やっぱ話聞いてなかったなアンタ。」

スタミナ??えっ?腹筋だよね?むむむ??お兄ちゃんがどういう人なのか、また分からなくなっちゃった。それとお兄ちゃん?カレン??と言うより、ウマ娘つて耳はいいからあんまりコソコソ話はめっ、だよ?

大丈夫って分かっても、結構心配しちゃうからね。

あつ、お兄ちゃん蹴られてる。ライスお姉ちゃんからは『お姉さまはカレンちゃん達のトレーナーさんのこと尊敬してる』って聞いてたけれど??合ってる、よね?多分。

「デジタルさん、この人もうダメなんでカレンさんの相手をお願いします。」

「言つとくけどお前、俺よかヤベー奴に頼んでるんだからな?見ろこのキリツとした凜々しい顔。この段階でヨダレ垂らしてんだぞ。」

「??ウマ娘ちゃんの?カレンさんのスベスベ御御足??アタシの手で穢すなんて許されないツ?ならば?アルコール消毒すら、厭いません??ッー!」

「綺麗なんでOKです。はいスタート。先輩、話あるんでちよっここつちに。」

そう言つて、後輩さんは兄さんとスタンドの方へ歩いていく。カレンをチラリと一瞥しながら。

何だろう。あの眼??怖いとか、怒られるとかじゃない、カレンの事を心配するような??ううん、そんな事より練習しなきゃ。デジタルちゃんを待たせちゃってる。

「デジタルちゃ——。」

「アタシは重り??アタシは樹木??アタシは——アタシはツ！倒れるだけで腹筋ワンダーコアツ!!そう！これはウマ娘ちゃんの為に行う愛あるご奉仕!!やましい気持ちなどーミクロンたりとも存在しない神聖な行いっ！日頃から貯めに貯めた徳を解放する瞬間！言わば貯徳税の支払い義務！」

「あの?デジタルちゃくん??」

「これがカレンさんの勝利に繋がるのなら、アタシは粉骨砕身！断腸ウエルカム！トレーナーさん、アタシやり遂げます！この大役を終えて果てしなく続くウマ娘ちゃん坂を——！」

「お願い、デジタルちゃん♪」

「ふあい♡」

ふふっ、やつとこっちを向いてくれた。デジタルちゃんがお兄ちゃんに似てるのか、お兄ちゃんがデジタルちゃんに似ちゃってるのか分からないけど、2人ともたまーに自分だけの世界に入っちゃうもんね。

筋トレを始めると、この子の様子は更に変わっていった。

「はあ?はあ??し、しんどい??!」

「だ、大丈夫??んっ、デジタルちゃん?ふうっ?辛そう、だよ??」

足抑えてくれる側だけ。



「おおお構いなく!!アタシの事はピンクの藻だと思ってもらえれば!!」

「あはっ、そこは芝じゃないんだ。ふう??これで50っ回!!」

後輩さんからの指示は腹筋50回×4セット。間に3分間のインターバルがあるからちよつと休憩しつつ、デジタルちゃんには聴きかかった事を聴いてみよっかな。

「ねえデジタルちゃん。2人つてどうやって知り合ったの?」

「2人??トレーナーさん達の事ですか?」

「ううん、デジタルちゃんとお兄ちゃん♪」

「あつなるほどなるほど——ふぁー——ッ??!!」

「どしたー!デジタルー!」

「な、なんでもありませんよ!!へへっ、すみませえん??!」

そんなに驚かなくても大丈夫なのに。カレンも深くは聴いたりしないよ?ただ、デジタルちゃんがどうして距離適性の違う長距離を勝てたのかが知りたいの。3000mの阪神大賞典、3600mのステイヤーズS。

カレンだけじゃない。ウマ娘でデジタルちゃんと交流のあった人達なら皆気付いてると思う。

距離適性を覆したウマ娘。

戦場を選ばなかったオール真ラウンダー勇者。

マイルで負け無し??長くても中距離までだった筈なのに、デジタルちゃんは何度も常識を覆してきた。

カレン的には他の距離も走りたいって強くは願わない。チームの新人ちゃんも短距離ではあるけど、あの子はマイルだって走れる。純粹に短距離だけ走るのはカレンだけ。それでも充分だし、カレンは自分が一番輝ける場所で走っていたいから。

もっと強くなりたい。強くなって、皆にカレンを通して”カワイイ”を知ってもらいたい。

それが約束??兄さんとの、最後の――。  
だからデジタルちゃんとお兄ちゃんの事を聞ければ、何か分かるかもしれない。

「あの?・し、失礼を承知でお聞きしたいのですが??どうしてアタシなんでしょう?。」

「他にいないよ?お兄ちゃんの最初の担当さんは。」

「アハハ?ですよね??。」

困った様に、けれど気恥しそうに、デジタルちゃんは話し始めた。

「でも??そんなに大それた事はありませんでしたよ。模擬レースを見に来てたトレーナーさんに、アタシが一方的にウマ娘ちゃんの事をお話して??なんやかんやそれ以降もバツタリ会う機会があつて、トレーナーさんからデビューしないかと。本当にそれだけなんです。ただ――少しだけ、息苦しそうだったので。」

「あつ?。」

それは、カレンの知らないデジタルちゃんの顔だった。お兄ちゃんの方に向けられた眼はどこか悲しげで、それでいて慈しむようなそんな眼。

カレンの夢を肯定してくれた時のお兄ちゃんは明るい人だった。迷子のカレンを不安にさせないようにしていたからなのかは分からないけれど、少なくとも今のお兄ちゃんを見ても辛そうな雰囲気は感じない。

カレンの知らないお兄ちゃんをこの子は知っていて、お兄ちゃんはきつとこの子が居たから前を向けた。デジタルちゃんが強いのは、あの人の息苦しさを無くしてあげたから??それを理解するには充分すぎる言葉だった。

「アタシは、あの人と2人で初めて勇者になれるんです。URAFア

イナルズが終わって一区切りつきましたけど、そこで終わりたくなかったから”勇者御一行”を作って、ウマ娘ちゃん達の事を支えたいと思いました。もしも今勇者と呼ばれるのであれば、それはチームの皆さんが居て初めて呼ばれるものなんですよ。もうアタシ達2人だけの呼び名じゃありません。だって、それがアタシ達の夢でしたから。」

「そっか??うん、ありがとうデジタルちゃん。2人の事が少しだけでも分かった気がする。デジタルちゃんはきつと他の子が知らないお兄ちゃんの事を沢山知ってるんだよね。」

「逆もまた然り、です。そしてそれはきつと、カレンさん達にとっても大切な力になりますよ。」

「デジタルちゃんにそう言われたら心強いかも。」

ウマ娘が想いを背に受けて走る存在なら、自分の思いだって力になるはず。

誰の為に走るのか。

何を背負って走るのか。

それが一貫してたからデジタルちゃんは強かった。ううん??今でも強い。この子にはこの子の背負っているものがあって、カレンにはカレンの背負っているものがある。

夢も約束も全部果たせなきゃカワイくない。だから――。

「見ててね、兄さん。」

「??カレンさん?」

スプリンターズステークス。戦いの日は近づいていた。

## 第5R : 変化、兆し——それは。

「ライスさん、行っただけて下さい。」

「うっ、うん！行ってくるね、お姉さま！」

にこやかな微笑みを見せたライスは、スパートを掛けた瞬間目が座った。

ひえっ??後輩ちゃんに似てきた??。

今日はカレンのプリンターズSと、後輩ちゃんとの新人がメイクデビューを控えてるというわけで合同練習中である。午前の部は互いのチームの練習をざっと見て、その後は指導をしつつ合間合間に併走。基本メニューは勿論自分達で考えているのだが、違った視点が混ざれば新しい発見があったり効率的な練習になる??らしい。

らしいと言うのは決してサボって聴いていなかったわけではなく、後輩ちゃんのトレーナーとしての素質が高いからそもそも理解出来ていないだけです。

ウチよりチームの頭数が多いにも関わらず、俺とデジタル2人分以上の仕事をこなしては全体の状態を常に把握し、的確な指示を出す。中堅達からは合同練習に引っぱりだこであり、何より勝ち取った重賞累計数はみなまで言うまいて。ラノベ主人公かお前は。

トレーナーとしての期で言えば1期下にあたるものの、何度もトレセン学園の試験に落ちてはライセンス取得に手こずった哀れな俺トレーナー（しかも最低合格ライン）とは5歳差である。

期待のホープ。一部からは隠れ人気も高い、確かな実力者にして寡黙な超人美人。

ただ敢えて??敢えて言わせてもらおうならば。

「??どしたんすか?先輩。」

「後輩ちゃん、顔怖えな。」

「そっすか。喧嘩なら言い値で買いますけどコラ。」

この女、実にイカつい。キリツとしたツリ目はクールを通り越してクールド。明るい茶髪を後ろで束ね、そこから見えるヒト耳にはピアスがキラリ。女性としてはそこそこ身長もあるんじゃないか？俺よりも頭1つ分小さいだけだ。おまけに胸も小さい??って言ったら、この間死ぬ程ケツ蹴られたから言わない。

まあそれで成績は優等生なもんだから、頭の凝り固まったお上やベテラン達からは良くも悪くも注目の的である。

比較しない、自慢しない、説教しない。今を生きるオツサンの基本3ヶ条だと言うのに、後輩ちゃんを見る目が変わらないのは悲しいかな。

決して素行は悪くない。俺以外には。

決して口が悪い訳でもない。俺以外には。

だがボツチ。

ウマ娘達には尊敬の念を抱いている為、基本的に誰に対しても”さん付け”だ。もっと周りに愛嬌振りまけ。そして俺に愛情を下さい。

「ぼあつとしてると、ウチのライスさんがカレンさん追い抜きますけど。」

「何？カレン！最っ高にカワイイぞーッ!!」

「警察って何番でしたっけ？」

「声援を送って豚箱にぶち込まれる理由を10文字以内で述べよ。」

「いや、キショイんで。」

「100点満点の暴力振るうじゃん??ほれ、見な？」

後輩ちゃんはターフを見るなり、溜息をついた。

耳がピンと立ったかと思えば、カレンはにこやかに笑って急加速を始める。スプリンターとステイヤーの併走というハンデはあるが、ライスシャワーはその程度で振り切れるほど甘くはない。ましてや彼女が面倒を見ているなら尚更だ。

それでもカレンは少しずつ距離を離して??はえーな。どんだけぶっ飛ばしてんだウチの妹君は。

「勇者御一行??マジで意味分かんないっすわ。」

「だろ。俺も分かってない。」

「あーキレそ。」

「怒りっぽいのはあれだぞお前。足りてないんだよ。あの??コラーゲン。」

「OLか。カルシウムでしょうが誰がカルシウム不足だ。」

「OLに対する偏見。」

ヌツ。なんてやり取りしてる間にも俺の左腕は自由を奪われている。何だってお前はそうすぐに腕組みしたがるんだカレン。俺はどこにも行かないって。お兄ちゃん社会的にも股間的にもいつだってギリギリで生きてるって事を分かってくれ。

母さん、あなたのヒト息子は今日も元気です。ヒビン。

でも今日はジャージの上を着て走ってたもんな?この間のセントウルS見たいにピッチピチじゃないもんな?良い子だカレンチャン。それだけで大分助かる。本当に助かる。

「お疲れ。」

「お兄ちゃんの声が聴こえたから張り切っちゃった♡」

「ああ。しっかり見てたよ。」

今もな。

お前なんでジャージのファスナー下げてんだおいツ!!お兄ちゃんの左腕事故ってんじやねえかよ!助かってねえわツ!埋まつてるわツ!ギリギリだって今言ったよな!?!曲線のソムリエの下りはこの間やったばかりだろうツ!?

ムムっ、この感触??Oh!Lサイズ!ご一緒にお兄ちゃんのポテト(S)はいかがですか?ハハッ!ドーティは嬉しくなると、ついイキリ立っちゃうんだ! I'm Lov——後輩ちゃんの視線がクツソ刺さる。

ファインプレーだぜ後輩ちゃん。ちよつとハッピーセットだったわ。

落ち着けよ童貞??凹む。落ち着けよ俺。今日は後輩ちゃんだったいるんだぞ。このヒト娘、警察までは呼ばなくてもマジでたづなさん辺りは呼びかねん。と言うか呼ばれた(2敗)。それを緊張感として己の胸に刻み、今はトレーニングに集中する事を最優先事項としなければならぬ。

「じゃあウチの新人さんとデジタルさんも呼んで筋トレっすね。それで午前中終わりって事で。」

「そうだな。」

「腹筋からで良いっすか?」

「おう。」

「兄さん一緒にやる?」

「おう。」

集中?集中??筋トレなら過度に触れる事も無い。腕組みとかスクワットとかだろうか?精々カウントをしつつ、適宜アドバイスするだけだ。

あつ、そうじゃん!そもそも触らなきや俺がこんなに右往左往する事も無かったわけじゃん!後輩ちゃん優秀過ぎか?いやあ盲点だったわ??。

そうと決まれば——何でカレン寝てんの?

何??何を惜しげも無く美脚とブルマ晒してんの?

誘い受けのプロって言っても時と場所があるだろ。お前にはターフがシューツにでも見えてるのか?お兄ちゃんそろそろ社会からナーフされんぞ。

なっ、なんだその顔っ!何ちよつと眠そうにトロン??とした顔つきしてるんだ!それが中等部の出す色気かっ!?!ジャージのフアスナーも上げるか下げるかハッキリしろ!胸部はだけスタイル”が1番童貞には効くんのだッ!助かる。助かるんじゃない。

そういえば少し前にデジタルが言っていた。併走した時、カレンさんがとても魅惑的に見えた、と。

お前四六時中じゃねえかってその時は思っていたが、あれは一種の警鐘だったのか。

ゴクリッ??こ、これがカレンちゃんだけが使えるというウワサの”

カワイイ・ユニバース

「**悩殺術**” ツ!!仮に大人の女になりたいと常日頃豪語しているフェイスハガー・マヤちゃんと同じポーズをしたとしよう。あっほんうっふん言っつて自爆する所まで見える。いや、マヤノはそれで良いか。微笑ましい。問題なのは目の前の淫バである。大体にして、うまぴよいで鍛えられるのはスタミナと根性(♂限定)だろうがッ!ここはこっそり後輩ちゃんに尋ねなければ。カレンに聞かれると、後が怖いかもしれない。

「あのさ、後輩ちゃん??スタミナ練習は?今じゃなくない?」

「腹筋だつったろうが。やっぱ話聞いてなかったなアンタ。」

痛えッ!お前膝でケツを殴ったな!?!つか、何ッ!?!腹筋ッ!?

は、話が違げえよ!!俺にカレンの脚を抑えろって言ってるのか!!無知なフリして向けられたこのムチムチな脚を??何ッ!?!

ここで2人組の腹筋を行う際の一般的な形をおさらいしましょう。

1. 相手の爪先に座る。脚はどこに行きますか?股間ですね。
  2. 相手の脚を抱きかかえる。素足の感触はどこに影響を及ぼしますか?股間ですね。
  3. 相手の腹筋を数える。顔が急接近するとどこに反応が起きますか?股間ですね。
- それでは、今日もレッツマツスル♪

ふぎけんなッ!ムキムキにならなくて良いからそのムチムチを何とかしろッ!!



「デジタルさん、この人もうダメなんでカレンさんの相手をお願いします。」

「言つとくけどお前、俺よかヤベー奴に頼んでるんだからな？見ろこのキリツとした凜々しい顔。この段階でヨダレ垂らしてんだぞ。」

「??ウマ娘ちゃんのか？カレンさんのスベスベ御御足??アタシの手で穢すなんて許されないツ？ならば？アルコール消毒すら、厭いません??ッ！」

菌目線の葛藤止める。

「綺麗なんでOKです。はいスタート。先輩、話あるんでちよつとこつちに。」

ヌツ。何だ何だ。急に2人きりで話とかそういうイベントか？後輩ちゃん美人だから緊張??あつ違えわこれ。普通に怒られるかシバかれるかのどつちかだわ。だつて他人の二の腕千切りそうな勢いで引つ張つてんだもんこのヒト娘。他にリードする方法あんだろメスゴリラがよ??!

お前このやり方が罷り通るならあれだぞ？SNSの広告に出てくるサバサバ系ポツチャリデブ女子に合コンで目を付けられて急に『手を握ろ?』って言われた時に下っ腹ツマむのだつて許される事になるんだぞ分かってんのか。俺なら遠慮なく捻り千切る。

「単刀直入に聴きますけど、カレンさん何かありました？」

「エツ、ナンデ？」

「あつたんすね。」

「な、無いぞッ！後輩ちゃんが考えてるようなやらしい事なんか断じて、1つも無いッ！」

「人を痴女扱いしないで貰えますかね。んな事で怒らないですよ。童貞先輩が出来るわけ無いってのは分かっていますし。」

「おい、おぼい。」

「あ?」

「ごめんなさい。」

なんなんだこのヒト娘?? 24の女子おなごが出していい迫力じゃねえよ?  
?やっぱ顔怖えんだよ??。

「あー??つまりアレっす。カレンさん、走り方おかしいんで。多分ラ  
イスさんが1番分かってるんじゃないですかね。」

「まじ?」

「微々たるものですけど。それに??さつき、先輩の事『兄さん』って呼  
んだじゃないすか。だから何かしらあったのかなって思っただけで  
す。」

「そう言えばそんな気もする。は?俺はお兄ちゃんだが?」

「そんな自己申告要らんわ。取り敢えず目を離さない方が良いかもし  
れないっすよ。もしアレが、カレンさんの中で何か影響した上での言  
葉なら??間違いなくレースに出るんで。」

「心配してくれてんだ。」

後輩ちゃんは黙った。

何となく気持ちは分かる——と言うより、実際彼女の事は1年ば  
かし見てきたから何となく察せる。

後輩ちゃんはウマ娘達が好きだ。

だから自分が関与できる所は絶対に妥協しない。彼女らの気持ち  
に寄り添い、尊重し、その上で優しい言葉も厳しい言葉も掛けられる。  
それが自分のチームだろうと他のチームだろうと。

だがボツチ。(2回目)

負担が増えたとしても1人で踏ん張るしかない辺りは違うが、根っ  
こはデジタルと同じなのである。だからこっちとしても放っておけ  
ない。イジりたい。でも怒られる。全く難儀な女だぜ?。

「勘違いで困らせたいわけじゃないので??忘れて良いですから。」

「いや、素直に助かる。もう何度そうやって助けて貰ったか分からんよ。自分のチームとはいえ、見逃しが無いわけじゃない。俺とデジタルだけじゃ気づけない事もあるしな。」

「今更ですけど、首突っ込んで勝手にあれこれ言う若造の言葉鵜呑みにするって変わり者つすよね。先輩。」

「おう。変わり者のウマ娘の担当だから。それに教わるのに若造も年寄りもあるかっての。教えて貰えるならちゃんと聞かし、教えられる事は少なくとも教えるさ。」

「??そつすか。」

「まあその先輩に目を付けられたからには、後輩ちゃんも変わり者になるけどな。」

「あーキレそ。」

「なに?この。」

口でそんな事をボヤきながらも、後輩ちゃんは僅かに笑っていた。その愛嬌が人前で出ればね??。

さて、カレン達は腹筋の最中である。50回の4セット??この年頃の女の子ならばキツめのメニューではありそうだが、そこはやはりウマ娘だな。相手方の新人ちゃんは、ライスに激励されながら必死にやっている。

良いぞ、実にフレッシュ。彼女の未来はバラ色だ。

又ツ。ウチのカレンも全然余裕そうである。

良いぞ、実にダイナマイツ。お兄ちゃんの未来はドブ色だ。

??脚抑えてる変態の方が辛そうじゃないか?あの人先にぶっ倒れそうな勢いなんだけど。いや、まあ??偉そうな事は言えないかあ??。

真剣に取り組んでるカレンの顔と膝を交互に見ては、我が半身はチラチラとこちらにアイコンタクトを飛ばしてきていた。長年連れ添った仲ではあるので、今何を考えていて、俺に何を尋ねているのかはハッキリと分かっている。アイツはこう言っているのだ。

——膝、ペロツとして良いですか?

ダメに決まってるんだろ何考えてんだお前。さつきまで穢せない発  
言してた奴が何でここで本気になるんだよ。体操服で本気出すカレ  
ンといい、人の顔面に飛びついてくるマヤノといい、ウチのチーム本  
気出す場面がおかしいわ。

あーダメダメ、そんな泣きそうな顔してもN.Oです。それで押し通  
せると思うな。パチパチとクソ可愛いウインクしてちよつとだけア  
ピールしても許可しません。ヨダレ垂らした限界オタクがちよつと  
で済ませられるわけ無いだろうが。しゃぶるに決まったら。

ヌツ?カレンがデジタルに何か話している。取り敢えず腹筋は終  
わったのだろうか。説明全然聞いてなかったから4セットやる事ぐ  
らしいしか記憶に無い。

「ふぁーーーーー!!??」

突如、ターフに響き渡る奇声。

変わり者のウマ娘は、カレンに詰め寄られていた。なんだカレンの  
あのにやけ顔。待て、あれはよからぬ事を考えてる顔だ俺は詳しいん  
だ!俺をからかつてる時あんな顔してるもの!

お前お兄ちゃんが居ないからって半身に手を出すのはOUTだ  
ろツ!

「どしたー!デジタルー!」

「な、なんでもありませんよ!!へへっ、すみませえん?!」

おもっクソなんかあるやろがい。カレン、デジタル悦ばすのは良い  
けど攻略すんのは無しだぞ。俺のデジタルだからな?さつきも言っ  
たけど半身なんだからな?攻略されたらお兄ちゃんお前に打つ手が  
無くなるに等しいんだからその辺は手加減してくれよー?

「童貞先輩もやったらどうすか?」

「余計な単語外したら考えんでもない。」

「サーセン、童貞。」

「クソが。やらんでもこちとらバキバキだわ。へそで豆腐割れるつつの。」

「何と比較してバキバキつつつてんすか。」

「バカお前、木綿だぞ?」

「絹ごしよかレベル高いみたいな言い方したところで豆腐だわ。食い物粗末にするな。」

「ト正論。」

呆れた眼を向けてくる後輩ちゃんを横目に、俺はカレンチャンの事を確認した。デジタルと話しているその横顔はいつも通り??だが後輩ちゃんの言葉がただの勘違いで終わった試しは無い。

「——変化、ね。」

スプリンターズSは週末。どうか何事も無いようにと願うばかりだった。

対決 : さくらばくしんおー

——ウマ娘は”ユメ”を見る。

初めてのG1、阪神JFの前にアグネスデジタルが話していた事だ。

”夢”では無く、”ユメ”。

子供の頃に1度きり??だがそれは、確かに記憶に焼き付いている自分自身の姿であり、自分の知らない『いつか』の景色。ウマ娘達の誰もが必ず覚えているかは分からない。けれど、伝説や寓話として語られるようなウマ娘達は、誰もが自身の”ユメ”を分かっていたと言う記録もある。

記憶??或いは、魂なのか。

その正体が何であれ、ウマ娘という存在を形作る大切なファクターには違いない”ユメ”を、人はこう呼ぶのだろう。

ウマソウル、と。

『トレーナーさん??アタシ——』。

走って、走って、走り続けて?? URAファイナルズを勝ち、目尻に涙を浮かべたデジタルの笑顔。

その瞳には、俺の知らない勇者の魂が宿っていた。

とまあ、オカルトじみた隙自語はさておき??とうとうカレンチャンとサクラバクシンオーが競う短距離の一大レース、『スプリンターズS』の日がやってきた。

先にボーンと一緒に観客席に行ってもらったデジタル情報では、かなりの盛り上がりを見せているらしい。『カワイイダービー♪』の効果が未だに続いているのか、カレンチャンと言う魔性のウマ娘が振り撒くカワイイパワーなのか??なんにせよカレンへの注目度は以前に比

べると格段に高くなっているのは事実である。

そんなカレンが今控え室で何をしているかと言うと――。

「???」

「??カレン?」

やたらと大人しかった。黒と白を基調としたオフショルダー(ここ大事)の勝負服に身を包み、いつもの様に自撮りをするでも無くSNSを更新するわけでも無い。

ただ静かに目を閉じて、レースが始まるのを待っていた。

お兄ちゃんに抱きつく必要がある???

どうしたのカレン。何かしつとりしてるじゃない。普段はもつとこう??アレだったでしょ?

クソザコお兄ちゃんの事これでもかかってくらい惑わしたり、ドーテイムーヴを掛からせたりしてたでしょ?急にそんなモードに入ると、お兄ちゃんもポニーちゃんも心配しちゃうんだから。ヌツ、ポニーちゃんは寝ろ。

合同練習から今日まで、カレンの走り自体に大きな違和感は見られなかった。ただ後輩ちゃんが言ってたように、カレンの口からは時折『兄さん』と言う単語が出ていたのは確かだ。それも今日が近づくとつれ頻度が増えた状態である。

デジタルに貸してもらった勇者手帳にはカレンのプロフィールが書いてあったものの、家族構成は無かった。兄さんと呼ぶのは、本当に兄が居るからではないのか?お兄ちゃんプレイに発展しているのは、トレセンに来て離れてしまった兄が恋しいからではないか?

むんっ。そう考えればカレンちゃんもまだまだ年頃の女の子であるという事だ。

「??お兄ちゃん。」

「どうした?」

カレンは俺の手を取り、自分の頬へ添えるように持っていった。指や手の平に、僅かに吐息が当たる。顔を上げ、笑ってこちらを見上げるその眼は甘えたがりな妹の眼そのものだった。

カレン——俺がもし学生だったらその動きだけで確実に堕ちてたし、『あつ、俺の事絶対好きじゃん』っていう童貞特有の勘違い青春状態不可避だし、クラスで殴り合いが起きてたぞ。

飢えたペニー猥<sup>ワイス</sup>s共が、『ハアイ、情事イ?』待ったナシだ。心のビーバーも大絶叫である。もつと言おうか?

アッアッアッアッアッアッ!!!

お前センチなのかいつも通りなのか分かりにくいアクションはやめろッ! お兄ちゃんこの数秒数分でメンタルぐるんぐるん回されてんだよ! 心の三半規管で『ねるねるねるね』作れるわッ!! は? (困惑) 大体レース前なのに何でこっちが消耗させられてんだ! クッ?? しかしカレンのこの顔、こちらに手は引かせないという絶対的に強い意志を感じる。寧ろこんな?? どちらクソカワイイ妹から手を引くとか選択肢ある? 無い。

ヒト息子を宥めながらどうしたものかと考えていると、部屋の扉が爆速ノックされた。そんな芸当をするのは1人しかいない。ナイス委員長。

「失礼しますッ! サクラバカチンオーですッ!! ちよわっ!!」

「もう1回やる?」

「いえっ、お気持ちだけで結構??ッ! 何故なら私は学級委員長! 失敗はあれど発言に責任を持つ優等生なのですからッ!」

そこに責任持ったら君は今日からバカチンオーだよ。まあ良いか?? 大方自分のトレーナーにバカチンオーとでも言われたんだろう。彼女のトレーナー(1期上の2歳下)は委員長の事を可愛がつてるよ。うだし、愛称みたいなものだ。担当を可愛がりたがる気持ちも分かる



けどね。

「カレンさん！今日の私は絶好調ですよッ!!」

「あはっ♡カレンだって調子は良いですから、負けません♪」

「それは素晴らしいです！今となつては短距離も多くの人が期待を寄せる一大レースですからね！スプリンターの王を決めるのにこれ程良い日も無いでしょう!」

????  
???

「じゃあバクシンオーさん、カレン先に行きまーす♪お兄ちゃんもしっかり応援してくれなきゃ、めっだよ♡」

「ああ、行つてらっしやい。カレン。」

最後まで手を振りながらカレンは部屋を後にした。何を考えてたのか、何を見てたのかは分からないが??違和感を感じたのはもう1人だ。

「委員長、いつからそんなに短距離熱心になつたんだ?」

「はて?何の事でしようか?」

「お前さん??委員長は全距離走るんだーって、散々トレーナーを困惑させてただろう。」

「ハッハッハッハッ!何も変わっていませんよ!変わったのは運命の方です!」

「??はい?」

「だってそうじゃありませんか。私は——覆したんですから。」

『トレーナーさん??アタシ、覆しました。』

背筋がゾツ、とする。

こちらを振り向いたバクシンオーに、有《font:ul40》馬

《font》記念で見たデジタルの姿が重なった。強者であると語るその眼??そこに居たのは、誰も知らないウマ娘。

「??誰だお前。」

「私は私です。いつだって、”サクラバクシンオー”ですとも。」

踵を返したその背中を、俺はただ見送るだけだった。



『各ウマ娘ゲートイン??今一斉にスタートしました!』

開いたゲートから飛び出して、いつもの場所へ。うん? 出遅れなかった。逃げのウマ娘が前に2人、先行策はカレンも含めて4人。バクシンオーさんは1番前で逃げに走ってる。

何度かこの人のレースは見てきたし、カレン自身一緒に走った覚えもあるけれど、普段は先行策を取ってる人だった。何か考えがあるのか、本当に最初から最後まで逃げ続けるのかは分からないけれど??カレンはカレンに出来ることをするだけ。

1200mのレースだと大体1分ちよつと。その中で出来ることは余り無い。だから大切なのは、他の距離よりも周りに気を配り続ける事と速度を落とさない事。展開が目まぐるしく変わる中で、選択は1回きり。その1回で速度を落としたりすると立て直すのは難しいってお兄ちゃんも言ってたし、何よりカレンがそれをよく知ってる。短距離だって、差しや追込みをしてくる子達が勝てないわけじゃない。それもG1クラスなんだもん。

後ろからピリピリしたプレッシャーがあるけれど、ライスお姉ちゃんど走ってきたカレンなら乱されるほどじゃない。

だから後は――。

「???'」

(バクシンオーさん? やっぱり速い??っ。)

先に行くバクシンオーさんは速度を緩めない。1番前なら他の子達と競り合ったりする事も無くて自分の望むレース展開を組み立てやすいけれど、その分後ろからのプレッシャーもある筈。なのに全く動じてない。

でもそういうの、カレンの十八番ですから!

『さあ向正面から第3コーナーに掛かりまして、カレンチャンが僅かに進出でしょうか。サクラバクシンオー先頭のまま以前レースは縦長に続いています。』

少しだけ距離を詰める。内側は他の子達が詰まってる感じで攻めにくそう??その位置だとバクシンオーさんを交わす前に他の子達を交わさなくちやいけない。1番良い所でスパートを掛けるなら、ここで余計なスタミナを使うのは得策じゃないよね。

今先頭に行くのはあの人だけ。もう1人の逃げの子は後ちよつとで交わせる場所だから、そうなたらスパートを掛ける。今のカレンのスタミナなら、バクシンオーさんがスパートを掛けるより速く掛けられる。最後まで持つ自信がある。ブルボンさんやライスお姉ちゃん、後輩さんに沢山練習に付き合ってもらったんだから。

だから??勝たなくちや、ダメ。

勝たなくちやカワイくない。

そんなの、あの人??兄さんの望んだカレンじゃない!

行かなくちや。勝たなくちや。ここで――。

「行っちゃうからッ!!」

スパートを掛けて逃げの子を交わす。スタミナは持つし、そこまで集団に入らなかつたから脚だつて溜めてきた。

走る。走るの。前に前に行つて、バクシンオーさんに追いつく。目

測で後2バ身無いくらい。これなら?!!

「カレンさんッ!!」

「バクシンオーに引ッ張られるなッ!!」

???  
え?

あつ、あれ??何で、デジタルちゃんど兄さんの声?最終、直線???  
嘘。

嘘嘘嘘つ、だって全然距離が縮んでない??スパートを掛けるのに、追い抜けてないッ!

あの人に引ッ張られてなんかいないよ兄さんつ。だってカレンはずつとレースの事を考えながら走ってたのに。他の子達がどう上がってくるか、どのコースで攻めてくるのかも考えてた。バクシンオーさんがずつと先頭内側を走ってて、もう1人逃げの子がそれより少し外。後続の子達は2人が蓋になっていたから外に抜けるしかないけど、カレンが先に外へ——あつ。

もし??もしバクシンオーさんが、カレンの事を信じていたなら。カレンならここで上がってくるって、全部分かりきっていたなら。初めから——カレンしか狙っていなかったとしたら???

「ッ??そんな、事?!」

『最後の直線、残り200mを切った所で先頭はサクラバクシンオー!カレンチャン必死に粘るが苦しいかっ!』

まだ走れる。まだ負けてない。全部全部、こうなる様に誘導されてたなんて思いたくないッ!ここで負けたら、兄さんが悲しんじゃう。叶えなかった夢が叶わなくなる。また、おいていかれ——つ。

季節外れの桜。見間違えなんかじゃない。

眼が、こつちを向いていた。

カレンの知ってる、明るくて誰にでも元気をくれるあの優しくして強

い眼じゃない。

怖い？冷たい??春の花。兄さんがいなくなった、あの日と同じ桜吹雪。

バクシンオーさんは、ようやくスパートを掛けた。

『サクラバクシンオーがここに来て速度を上げた！何と言うウマ娘だ！G1の大舞台で、2着に5バ身差の堂々勝利！やはりドリームトロフィーリーグの最有力候補、圧倒的力を見せつけました！』

ゴール板を抜けた先は、あの人を称える歓声が割れんばかりに響いていた。さつきまで自分が居た場所が夢で、ようやく現実に戻ってきたみたい。

スタミナは残ってなかった。膝に手をつけて息を整えようとしても上手く出来ない。勝てなかった事、追いつけなかった事、全部バクシンオーさんの想定の内だった事??何より、あの眼が怖かった事。

自分でもこんなに気が動転するだなんて思わなかった。そんなカレンの所に、少しだけ息を切らしたバクシンオーさんが来た。

「高松宮記念です。」

「えっ??」

「お”2人”共、次は本気で走りましょうね！今日はありがとうございました！ではッ!!」

嵐のようにバクシンオーさんは自分のトレーナーさんの所へ帰って行った。

高松宮記念??そこでもう一度?ううん、そこじゃない。あの人は、2人って言った。

誰の話をしてるんだろう??バクシンオーさんは、何を??。

「カレンッ!」

「あっ??。」

スタンドの方から声がある。心配そうにこつちを見てるデジタルちゃんとしシアケボノさん。それから――。

ゆつくり歩いていく。皆の所に、お兄ちゃんの側に近づく度に、胸が辛くて息苦しくなる。

「お兄ちゃん??カレン?。」

「ん??ちゃんと見てた。最後まで見てたよ。頑張ったな。」

ぎゅつとしてくれる優しさが、こんなに辛いなんて初めて。泣いちゃうかもって思ったけれど??それ以上に、ごめんなさいっていう気持ちの方が強かった。

お兄ちゃんの胸に頭を当てて、顔を見せないようにするしか出来ない。

「本気、だったんだけどなあ??。」

聴こえてたのか、聴こえなくても察してくれたのか??お兄ちゃんは、ただカレンの頭を撫でてくれるだけだった。

## 第6R : メン・オブ・デステニー

スプリンターズSが終わってから、カレンは目に見えて元気が無くなっていった。『兄さん』と呼ぶ事が無くなったものの、練習中どこかボンヤリとしていたり、かと思えばオーバーワークにすらなりかねない練習をやっていたり??気持ちが悪くここに在らずという状態である。

メンタルケアと呼べるほどの事が出来ているか分からない。今日も練習はオフ。

更には、自分に任せて欲しいと言ったきりデジタルはカレンとどこかへ出掛けたようだ。

そんな中、哀れなお兄ちゃんとは言えば??。

「ぴえん。」

「アタシの部屋で落ち込む必要ありますか?」

「だってさあ??。」

後輩ちゃんのトレーナー室で睨り泣いていた。

初めは自分の所で横たわっていたのだが、カレンのぱかプチぬいぐるみを見る度にしんどい状態になっていたたまれなくなってしまうのだ。

カレンは1度も涙を見せてはいない。だからこちらとしても、そのメンタルの強さは知っているつもりだった。短距離G1で結果を残した後は、勝ったり負けたりはあっても安定した成績続き。実際『カワイイダービー♪』の時でも、多少の無茶は自分の意志だけでやり遂げてみせたんだ。

こんな状態になるまで、カレンの心境に気づけなかった。あの強さに甘えていたのだろう。今の今だってデジタル頼み??トレーナーとしてあまりに惨めな自分に情けない気持ちが湧き上がってくる。

「??トレーナーだって完璧じゃないっす。皆が皆ウマ娘達の気持ちに100%の理解を示せるわけじゃないんで。」

「そうだけどさ??いざこざいう風になると、今までちゃんと見てやれなかつたんだなつて?凹む??。」

「今のままで良いと思いますけどね。先輩が先輩だから、デジタルさも含めて皆先輩と一緒に進もうと思っただんじやないですか。少なくともアタシが知ってる中だと先輩はちゃんとウマ娘の子達を見てますよ。どんな内容であれ、あの子らの力になっていたのは見てれば分かりますし。」

「??慰めてくれんの?」

「いや三十路手前の魔法使い見習いにいつまでも泣かれてんのキツいんで。ワンチャン煽てたらさっさと帰らねーかなつて。」

「鬼かな?」

後輩ちゃんの方を見ると一瞬目が合った後逸らされてしまった。おい、何だその手の動き。何片手間にお兄ちゃんを追っ払おうとしてんだ。

「て事なんで、子どもの為にもさっさと家庭を円満にしてから戻ってきてくれます?」

「離婚話じゃねえよ。」

「先輩位の歳で童貞なら1回の浮気も許されますつて。知らんけど。」  
「離婚話じゃねえつて。しれつと暴言吐きながら浮気野郎認定すんな。」

「必要なら弁護士付けますけど、どうします?」

「違うつて言つてんだろうが!話聞けよツ!別に慰謝料とか請求されてねえわ!誰が請求すんだツ!」

「ん。」

「鬼かな?」

何だその手??やらねーよ。何マジな顔してこっち見てんだ小娘。やってもお駄賃だ。駄菓子でも買え。名前がパツと出てこないけど、あのやたらとうまい棒でも食つてろ。うまい棒だわ。



畜生！やってやろうじゃねえか！！今に見てろよッ！俺にかかったらアレだかなお前！もう秒で??何だ？アレだ！カレンチャンを速攻で元気にしてやるってんだよ！そしてポニーちゃんも速攻で元気にさせられる。なんなら秒でヒヒンと言わされる。は？負けんが？

「元気出たならそれで良いんすよ。じゃなきや周りだつて心配するんですから。はい、帰った帰った。」

クソっ、なんて雑に扱いやがる。だが後輩ちゃんの言う事は最もだ。ただでさえボーノやデジタルに色々任せてしまっているんだから、俺もトレーナーとして??いや、お兄ちゃんとして出来る事は全てやりきらなければならぬ。待っているカレン。

「あつ、先輩。」

「何よ。」

「出掛けるならお金出すんで珈琲買ってきて下さい。」

「おまつ??!き、今日だけだからなッ！」

追い討ち掛けやがってこの野郎ッ！

ちよつとヘラッとしてよお??満足そうな顔しやがって??!?しょうがないから行ってきてやるよ！可愛い顔してないで、がま口寄越せオラッ！

「良いか今日だけだぞ?!次は無いからな!!覚えてろよッ!!」

「小物のテンプレじゃないすか。」

「誰が小ぶりな天ぶらだッ！」

「言つてねえわ。」

結局、半ば追い出される形で部屋を後にしてしまった。本人居ないのにどうしよ??珈琲買いに行くの?まじ?ただのパシリじゃねえか。固めのがま口を開けば、僅かばかりの小銭が入っている。

220円で。何で2人分入ってるの？紙も入ってるし??レシートか？後輩ちゃんは何買ったか見て、後でクソ程弄り倒してやる。どれどれ――。

『今は休んでください。したら、話ぐらいは。』

???? あー、駄目だ。ぴえんばおん啜り泣いてたから鼻のあたりがまだツンとする。全く??何柄にもなくイケメンかましてんだ良い子ちゃんめ。

両頬を叩いて気合いを入れ直す。

今1番自分と戦っているのはカレンチャンだ。俺がきちんと面倒を見て分かせ??もとい正しい道に連れ戻さなければならぬのは、甘々脳トロボイス持ちふんわり彩フレグランスのカワイイカレンチャンであって、自暴自棄になって道を見失った今のカレン・サンでもダレン・シャンでも無い。初めにケツイを漲らせた筈じゃないか。

そう思ったら泣いてなどいられぬ。いい歳だろう、俺。どれだけ情けなくとも、こっちには29年培ってきた人生経験がある。童貞は女の子にクソほど弱いが女の子を蔑ろにする存在では無いんだ。やるぞ！えいつ、えいつ、ヌツ！

だから本人居ねえって。

「どうすんのよ??痛つでえツ!？」

不意に、頭頂部へ激しい痛みが走った。昔親父に食らったゲンコツに匹敵する良いパンチ。どのくらいかと言われればあまりの痛さに言葉を失うレベルのあれだ。

ふと視界に、トレセン学園の制服が見えた。腰まである黒くて長い髪。少しだけ可笑しそうに笑った後、そのウマ娘はしやがみ込んだ俺から逃げるように後ろへ回った。

「??どうしたんですか?？」

後ろを振り向けば、そこに居たのは扉の影から顔を出したウマ娘。相も変わらず綺麗な髪である。ミステリアスな雰囲気の中、目を隠すように伸びた前髪からは金色の両眼がこちらを見下ろしている。

「??君か?マンハッタンカフェ。」

「何の話か分かりませんが??多分違います。」

「カフェ?どしたの?あつ、勇者さんのトレーナーさん。」

僅かに開いた扉からこちらを覗くマンハッタンカフェ。そしてその後ろに立っている若い男が、俺の数少ない同期であり年下のトレーナー??通称”モルモット君”。マンハッタンカフェの他にアグネスタキオンの担当もしており、3人体制を徹底したチームを率いている実力派だ。ただし変人。

どちらも中・長距離で実績を残しているウマ娘で、対称的な性格や走りが人気を博している。学園内でもワケあり物件と噂されているそんな2人を纏めあげてG1を幾度となく勝利している彼に対する世間の評価も高い。ウチのマヤちゃんも何度か苦渋を舐めさせられた。ただし変人。

一時期は”GT”の称号を欲しいがままにしていた事もある。あつ、決して『グレートトレーナー』の略では無い。『ゲーミング乳首』だ。タキオン製薬の副作用で、かつて彼の乳輪が16万色に光り輝いていた事からつけられた称号である。その節は大変笑わせて頂きました。

いや乳輪なんかクツソどうでも良いんだよ。何故俺は頭にゲンコツを落とされたのか、これが分からない。大人しい顔して先に手が出るあたり後輩ちゃんと同じものを感じる。

「さつき頭どついた?」

「いえ?声がしたので出てきただけですけど??。」

「だって目の前に君が居たし??。」

「っ！見えて??いえ、それは多分”お友だち”かと。今日はちよつと機嫌がいいようなので??。」

「えっ?。」

「いやまあ良かったですね。”お友だち”に気に入られたみたいですよ。」

「えっ?。」

「アツハツハツフツハハハハハツフーツ!!!」

「うるっせえ??。」

何わろてんねん。どつかれたっちゅーねん。お前カフエの耳元でその笑い方止めてやれよ。すこぶる機嫌悪そうな顔してんじゃん。

まあ”お友だち”が何かは分からんが、どう見たってさっきのはカフエだろう。痛みが凄すぎて顔が見れなかったが彼女の独特な雰囲気は見間違えるようなものでは無い。いつまでその癖の強い笑い方で爆笑してんだGTがよお??。

と、ツツコんでやろうとした瞬間であった。

モルモツT君の両頬が何かに驚掴みにされたかと思いきや、そのまま部屋の中へと投げ飛ばされた。カフエは背中を押されたようによろけながら廊下へと出され、扉は内側から乱暴に閉められるのだった。

ヌツ、流石に今のは俺にも分かるぞ。怖いやつだ。はつきりと理解した。”お友だち”とはお化け的なやつである。あー??チビリそう。目の前で起きた余りにも早い1連の出来事は、カレンに勧められたホラー映画の冒頭で見たから間違いない。俺はそのシーンだけで4度気絶したし、その辺に居たデジタルに本気でしがみついたら4度落ちた。フィクションがノンフィクションになった瞬間である。

ホラーダメな男の前で霊障とか本気で止めてくれ。今すぐ全裸になつて絶叫して転げ回らなければ気が狂いそう。

「??。」

「??”お友だち”がご迷惑をお掛けしました。」

「気にしてないから命だけは助けて下さい。」

「いえ、取りませんが??。」

「中でガツタンガツタン音がしてるよ?命のやり取りしてるんじゃないの?。」

「もう4日目です。遊んでるだけです。なんて言うか?? 『祓って叩いてじゃいけんしよい』??」

「へえ。」

ツッコまんぞ。あつ、モルモツT君出てきた。頬に立派な手の跡が付いている。

「やー、負けました!今日は勝てそうだったのになあ。まあ向こうが何出したか見えないんですけどね!」

「じゃんけん破綻してんぞ。」

「ままつ、いつか勝ちますから。カフェ。少しだけ部屋で待っていてくれるかな?ちょっとこの人とお話したい事があるから。」

「??分かりました。」

マンハッタンカフェを部屋に戻させた後、彼は締りの悪い顔のまま俺の横に並んで外を見始めた。

「元氣無いですね。」

「??さつきまではな。今はそれでも無いよ。前向けって、若いのに背中押されちゃったし。」

「そうですね。トレーナーさん真面目ですから、ちゃんと謝れば相手さんにも浮気を許して貰えますよ。」

「何でどいつもこいつも人が離婚話で悩んでると思ってるんだクソが。」

「冗談ですって。この間のレースの事ですよね。サクラバクシンオーさんのトレーナーさんに伺いました。」

「??サクラバクシンオー。レース前に見た時の彼女は明らかに別人だった。それはレースにも顕著に現れていたようで、普段なら圧倒的スピードで驀進するだけだった彼女がカレンチャンのみに標的を絞って駆け引きを持ち込んだのだ。『カワイイダービー♪』で見た時の2割??いや、3割増しの速度も武器にして。」

カレンも恐らくは自分の中でレースを組み立てていた筈だ。今回に限って言えば、『サクラバクシンオーの舞台の上で』が頭に付くが。

「バクシンオーが戻ってこないかもしれない——彼女のトレーナーさんは、そう言っていましたよ。短距離の『王』に対する異常なまでの執着心はバクシンオーには芽生えてなかった。自分が『王』なのは当然だと常日頃言っていたみたいですしね。」

「ああ。けどあの子はそれをひけらかしたり、他人を下に見るような子じゃなかった。上に立つものだと自負してるから頼ってもらいたがるし、遠慮されると本気で凹むような名前通りの委員長だったからな。」

「ええ??けれど、何かが起因した。僕の好きなウマ娘もそうでした。」

彼は窓に背を向け、扉の向こうにいるのだろう好きなウマ娘の事を話し始めた。

「彼女の見ている”ユメ”を共に抜き去る。そう約束して契約したのに、途中で何かが狂ってしまった。”ユメ”が、彼女そのものすら喰い潰そうとしていたんです。当時はアドバイザーだったタキオンが、それでも良いのか??と。遠回しでも、僕に教えてくれたんです。」

「??ユメ”はどうしたんだ?」

「止めました。あの子には物凄くショックだったでしょうね。約束したはずの僕が一方的に裏切ったようなものですから。でも??だからこそ、今もこうして居られるんです。”夢”を追うのも、”ユメ”に殉じるのも、そのトレーナーとウマ娘それぞれの意思。けれど、もし

道が1つだけじゃないのなら??少しだけ欲張ってみても良いんじゃないですかね。怒られるかもしれないけれど、それでも僕は君が大事なんだよって。」

彼は、彼なりに色々と考えていたようだ。俺は彼とマンハッタンカフェの身に起きた事を詳しくは知らない。だが今の言葉を聞いた限り、彼らは乗り越えたのだろう。いや——覆した、か。

バクシンオーはカレンを高松宮記念の舞台に上げようとしている。カレンチャンでなければならぬ”何か”があるから、あそこまで執着しているのだろう。

カレンは走る事を望んでいるのだろうか。

俺の言葉が重荷になつたりしないだろうか。

まだ一緒に、『宇宙一カワイイ私』という夢を見させてくれるだろうか。

助けになるか分からないが、カレンと話をしたい。

俺は絶対に見捨てないという事は必ず伝えたい。

いつだってカレンを支える覚悟だと言ってやりたい。

かつて??アグネスデジタルにそうして貰ったように。

「何かスッキリしたよ。あんがとな。」

「いえ、僕は好きに話しただけです。ではそろそろ失礼しますね。これから購買にプリンを買いに行かないといけないので！」

「おつかい?パシリ?」

「違いますよ?カフェのプリンが無くなったんです。あの子は”お友だち”かタキオンが食べたと思つて??まあ食べたの僕なんですけどね!アツハツフツフツハツハー!!」

瞬間——部屋から出てきたマンハッタンカフェがモルモツT君の胸ぐらを掴んだかと思えば、部屋の中へと投げ飛ばした。片手で成人男性が飛んだのである。

えっ？

「??お借りしても?」

「差し上げるので命だけは助けて下さい。」

「いえ、取りませんが??。」

僅かに一礼したカフェは、部屋の中へと戻って行った。

こ、これがウマ娘??俺は確かに戦慄した。

もし俺が判断の遅いお兄ちゃんムーヴをかましてカレンが機嫌を損ねたなら??片手でオフトウンに投げ飛ばされる? 『#カワイイポニーちゃん』とタグ付けされて全世界配信されるのか?どんなプレイだよ。流石のポニーちゃんも配信はちよつと??いや何で負けること前提だし。

ヌツ?携帯がバイブした。メッセージを送ってきたのはアグネスデジタルだ。

「??本当に俺をよく分かってるよ、戦<sup>相棒</sup>友。」

届いた1文で改めてケツイを固めた俺は、2人が待つ場所へと向かった。

——三女神像で待っています。



## 第7R : いやー、きついでしょ。

さて。デジタルに言われた通り三女神像の所へやってきたわけなんだが??俺は現在壁の影に身を潜めて2人の様子を見ている最中である。

違う、これは決してここに来てチキったとか、上手く会話出来るかなという不安にかられたわけじゃあ無い。お兄ちゃんケツイ固めたら凄いなだよ。

何事もまずは情報収集が基本だろうと自らの行動に優先順位を付けただけだ。そう??童貞行動ドーティムーヴでは無い。ましてや覗きでも無い。

2人は互いにウマ娘であり、年頃の女の子。俺のような三十路1歩手前のオジサンには聞かれたくないような内容——ふふつ——だってあるのだろう。デジタルにしか、カレンも話せない事があるだろう。だからこそその情報収集。そこで得たものをカレンとの会話に使わせてもらうのである。

繰り返そう。童貞行動ドーティムーヴでは無い。覗きでも無い。

しかし微妙に距離がある上、デジタルはカレンに背中を向けてるからいまいち声が聞こえない。カレンの方も断片的である。聴力は悪くないけどなあ??。

ならば今ここで、トレーナー妙技の1つ——『お兄ちゃんイヤー』を発動する。お兄ちゃんイヤーとは、特定カレンちゃんの対象の甘々ボイスに全集中する事で、一時的に遠くの会話も聞き取れる(ような気がする)技だ。決して、『お兄ちゃん嫌ー??』では無い。そうなったら死ぬ。

「——は、——。——恐らく——ウマ娘ちゃん——。」

「デジタルちゃん??お兄ちゃんは、——?」

ダメだ全つ然聞こえん。所詮はそんな気がするという程度の弱小技、いざと言う時に使い物にならない。悲しいかな??お兄ちゃん、名ばかり技しか使えないんだよ??。まっ、まあ?今なら丁度2人とも背中向けてるし、多少身を??もとい耳を乗り出してもバレはしない??は

ず。

「—えい—！ちなみ—ど—で—？」

「—すきだつ—ち—。—、—。—??。」

なんだと？おい、今”すきだつち”って言ったのどつちだ。何でこのタイミングで”すきだつち”が出てくる。うまびよい伝説がどうしたって言うんだ。

チラリと覗けば、2人は真面目に話して??いや待て、カレンの様子がおかしい。今爆弾発言したのお前か？待て待て待て、ちよつとお兄ちゃん混乱してるわ。

現状把握。

1. カレンチャンがびよいの波動を撒き散らす。
2. 領域に入った委員長が驀進して敗北。
3. 落ち込むカレンチャンを立ち直ったお兄ちゃんとデジたんで元気づけよう！
4. 好きだつち♡↑今ここ。

絶対おかしいじゃん??何段階すつ飛ばして今うまびよいの話してるんだよ？何でそれをデジタルとしてるんだよ??デジタルもデジタルで何を普通に話してんだよ??。

いや、落ち着けて。そう決めつけるのは早計では無いか。こうやってすぐさまあらぬ方向に決断を下すから、俺はいつまで経っても早熟チエリーマンなのだ。凹む。

”すきだつち”はうまびよい伝説の一節だ。決してカレンが言っていたからといって、”すきだつち(隠語)”というわけではないし、お兄ちゃんが”朝だつち(隠語)”するのも何一つ関係無い??多分。うまびよい伝説の踊りや在り方について語っているのだ??きつと。それもおかしいな。

だが、実際俺もいい歳である。聞き間違えは充分に有り得るだろ



教師がちよつとSっ気があつて小生意気な教え子に同人誌でよく言われてる常套句じやねえか!!

そういえばデジタル、俺がいつも1人でしてるからダメだつて言つてたな??は?ソロぴよいの話か???

しっ、してねえよッ!こちとらどれだけ日頃から欲求の中でえいえいムンムン♡してても死ぬ気で我慢してんだよ!だからヤバいつて言つてんだろお!?!しかも何でそこにラスボスを当てがおうとしてんだッ!!あることない事で焚き付けるのを止めろ!!

カレン、お前実は元気だろ?デジタルと出掛けてもう絶好調なんだなっ?そうなんだなっ!?!もはや俺要らねえじゃねーかッ!何で呼ばれたんだよ!今出てった所で、お兄ちゃんかポニーちゃんを出して搾り取られてバクシンされるんだろ!?!で、『くそざこお兄ちゃん?みじめだね?♡』つてなるんだろ!?!分かりきつてんのに出れるかッ!!つかやつぱり”すきだつち(隠語)”の方だったじゃねえか!!

なんて事だ??俺が情けなくぴえんぴえん泣いている頃に、デジタルはカレンを元通りにしていたらしい。それでいつまで経つても俺が会いに行かないから、ここで不満とうまぴよい談義に花を咲かせていたと??アイツどんな魔法使つたんだよ。

そっかあ??もう元気だったかあ??。カワイイカレンチャンが戻つて来てくれて本当に嬉しいはずなのに、どうしてだろう??こんなにも心が虚しいのは。

「カレンさん??もし———すか?。」

カアッ!

「えっ???」

「ご自身の———を、———あげて下さい。誰の———思うのか、———背負うのか。———、カレンさ———??大丈夫です。アタシも———

———、”絶対”———。」

”絶対”———カレンは??。」

カアッ!カアッ!

??何か真面目な雰囲気になつてるし。信じていいの?ここままで

お兄ちゃん大分すり減らされたんだけど、まだ信じていいの？デジタルがカレンに何かをあげさせようとしてる時点で既にこっちは冷や汗かいてんぞ。

カアツ!!

ここ大事な所だから断片的じゃなくてちゃんと聞きたい。決死の覚悟で頭を出して??いやカラスうるせえな。何も聞こえねえよ。何ださつきからカアカア、カアカア??早く家へ帰れ。

「私は、お兄ちゃんとーカアツ!ー一緒にーカツ?アア”ーツ!!ーたいっ。だって、それが私の夢だからっ!妥協は絶対にしたくない!諦めたくないっ!」

テメエカラスこの野郎ツ!ー一番大事なところで発狂被せてくるんじゃないよツ!!

カレンもカレンだわ!聞こえた範囲だと、お兄ちゃんと一緒にしたって完全に”うまぴよい(隠語)”の話だろう!そこは妥協してくれツ!ちよつとぐらい諦めてくれよおツ!!

何最後ちよつと力強く宣言しちゃったの!?!それ夢として大宣言するもんじゃねえから!夕方とはいえ学園内だぞ!?

しかも今??『私』って言った?カレンの口調が変わったって事は??本気出したって事?

えっ、マジ?

今までだって結構ギリギリの戦いだっただのに、お兄ちゃんがあまりにも情けないから本気で貞操を”うまぽい(隠語)”させに来るのか?からかいで済ませてたけど『本気搾り』してくるの??やべえよ、震えが止まらねえ?!!

カレンがもし本気になったらどうなるか——もはやバジリスクタイムである。きつと優しさと激しさを併せ持った何かこう??すごいアレですんごい事になるのは間違いない??だってカレンだぞ?!

どんな顔して上に報告しろと言うのだ。やよいちゃん??はまだ大丈夫だろう。理事長という立場ではあるが、純粋なお子さんだ。多分

伝わらん。

問題は四六時中やよいちゃんのそばに居るたづな<sup>緑</sup>さん。ウマ娘の脚に追い付くと噂され、注射が嫌だと駄々を捏ねたウチのマヤノをパウーだけで押さえつけたあの人はマズイ。ホントに人間か？

彼女に事の顛末を報告しようものならば、一時のバジリスクタイムで身を滅ぼすのに等しいのだ。まじリスクタイム。右打ちの前に平手打ち、1発当たったのに人生大破産。確率変動なんて無かった。現実には確実に変態と罵られ、海物語ならぬトレセンの膿物語がここでもれなく終了である。ヒヒン。

デジタル??どうしよう?カレン元通りになってねえよ。すつつつごい強くなってるよ。ラスボス1回も追い詰めてないのにパワーアップするとかそんなRPGある?無理ゲーにも程があるだろ??。

攻撃UP 攻撃UP スツ! 攻撃UP 攻撃UP ぱふぱふ・ザオリク<sup>蘇生</sup>、二重の意味で無限ハメコンボ。クソザコお兄ちゃんはただピオリム<sup>速度UP</sup>を念仏の様に唱え続けるだけである。ウマ娘の耳に念仏、聞いてもらえるわけがねえ。そんな事されたら勇者から賢者にジョブチェンジ待ったなし。

あつ、しまった。この場合はパイキルト<sup>Kiri</sup>だわ。ふふつ??笑ってる場合か？

デジタルの勇者バフが他のウマ娘に効く事が証明されてしまった。どうすんだよ相棒<sup>もう一人の僕</sup>ツ!!あつ、アイツも不満持ちだった。

おおおおおおお!!俺に味方はいないのか!?!いや元はと言えば俺が撒いた種なんだけどさ??そういえば、俺の兄貴分だった先輩も言ってたなあ??1度うまびよいを決めた女は面構えが違う、凄く強いぞつて。あの親父ろくな事教えてねえなクソが。

フウ??仮にデジタルが俺に不満を持っていたとしても、わざわざメッセージでこの場所を指定してきた意味を考えるんだよ。

三女神像と言えば、トレセンに伝わる昔話的なアレである。3人それぞれが『過去』『現在』『未来』を表し、想いを繋ぐとかなんとか最初に説明を受けた気もするが、ぶつちやけウマ娘達の待ち合わせ場所とかトレセンのハチ公みたいなものでしょ?としか思ってたなかった。

もしかして本当にそんな事が起きるのだろうか???

「いかん、頭がハッピーカムカムしてる。オカルトの類はカフエと  
フクキタル珍だけ獣で充分だ。お腹いっぱいなんだって。」

意味なんて無かった。良いね？良くねーよ。

「嫌だ!!俺はまだ社会的に死にとうない!お前達とマヤノ、ポーノの  
他にも、141cmと144cmのちっこい新人ちゃん達??それから  
チームに誘って返答待ちの3人娘がいるんだぞ!フラワーちゃん?  
ロブroy??スイーピー??あれ?ポーノを抜いた走れるメンツだけだ  
と、ウチのチームって平均身長142.5cmじゃん。ちっさ??俺と  
の差は30cmである。もしかして俺、名実共にロリコンか?」

「たっ、たまたまだっつもの!人生そんな事もあるだろうがツ!!たかが  
29年、愛バに不満を持たれることだっつであるし、チームの担当に貞  
操をうまぽいされることだっつであるわ!!あつたらおしまいなんだ  
なあ、成人だもの。」

「あの〜??どうしました?」

「項垂れる俺に聞き知った声でした。顔を上げれば、そこに居たのは  
絶賛不満をぶちまけたであろう我が半身。どうしたもこうしたも、こ  
ちとら別の意味で限界化してんだよ。そしていつの間にもここ来たん  
だよ。カレンどうしたよ。」

「??ちよつと考え事をな?。」

「えっ?。」

「いや、良いんだ。」

「そ、そうですか??あの、アタシに出来ることはやったつもりです。後  
は??お願いしますね。」

「アグネスデジタルとは、ウマ娘を愛するあまり自分を低く見ている  
節がある。そのせいでコイツは自分が他のウマ娘にアドバイスをし  
たり進言したりする事に強い拒否感を示してしまう。本当は物凄い  
ハイスペックウーマンだと言うことは、俺がよく知っているんだ。」

そのデジタルが出来なお兄ちゃんの後始末として1人でカレンチャンを元通り??いや、パワーアップまでさせた。そこから今の発言に結びつく答えは――。

『不満はありますけど、アタシがここまでやったんですから最後は出来ますよね? (呆れ)』

『うまぴよいぐらいトレーナーさんならやってくれますよね?? (威圧)』

『骨は??拾った方が良いですか?? (嘲笑)』

これだ。ここまで来てサボるんじゃないぞ、という愛バからの事実上の死刑宣告である。悲しい。

『デジタル??。』

『はい?へえあツ!』

俺はデジタルを抱きしめた。

「あつ、あのあのあの!トトトトレーナーしゃんツ!」

「お前が俺の担当で、本当に??本当に良かったよ。ありがとな。」

社会的に死ぬ事が決まっているなら、最後の遺言くらいは残さねばなるまい。これでデジタルの機嫌が治るとは到底思えないが、無いより遥かにマシだろう??半身である俺の最後を見届けてくれ。

「??アタシも、良かったです。頑張って下さいね!」

めっちゃ良い笑顔だなお前え!これがトレーナー室での日常の1環なら耳に指突っ込んで撫で倒してたぞこの野郎ツ!いかん、そんな事するから不満を持たれるのだ。凹む。そんなに俺が死へ向かう事を喜ぶか??いよいよ泣くぞ?



あつ、デジタル行っちゃった??。しょうがない。覚悟を決めろ。ギャングのボスも言っていたじゃあないか。『人の成長は、未熟な過去に打ち勝つこと』だと。

お前もそうだろ?カレン。

そろそろどちらの立場が上なのかハッキリさせようじゃないか。お前がどれだけ強力な技でポニーちゃんをスタンドさせようとも、お兄ちゃんの幽波紋『キンガ・ヒルムゾン』は負けはせん!『トレーナー』はこの俺だツ!!依然変わりなくツ!!

だから本気出すのは3日後?1週間??いや、1年後にして下さいね?

色んな涙を堪えながら、俺はカレンチャンの元へと向かうのだつた。

継承 : Road to K

「サクラバクシンオーさんは、強い人です。短距離においては、恐らくあの人を止められるウマ娘ちゃんはいないかもしれません。」

気分転換にお出掛けしましょう。そうデジタルちゃんに言われて、カレン達はあちこち歩き回った。お買い物したり、デジタルちゃんが言つてた聖地巡礼(?)もして。

辺りは、夕日が橙色に染めている。途中、小さな女の子が自分のお兄ちゃんに手を引かれて歩いていて??見られなかった。

そうして今はトレセン学園に戻ってきた。想いを繋げてくれるつて言われている三女神様の前に。

「デジタルちゃん??お兄ちゃんは、やっぱりガツカリしてた?」

「いえいえ!ちなみに??どうして、そう思われたのでしょうか?」

「カレン、お兄ちゃんの事見てなかった。好きだった兄さんがチラついていたの。もうどこにも居ない、カレンのたった1人の??。」

「??なるほど?そういう事、だったんですね。あの人心配していたことが分かって、少し良かったです。」

心配??されてたんだ。お兄ちゃんにも。デジタルちゃんにも。あはは、ダメな子だな??カレン。こんなの全然カワイくない。デジタルちゃんならそんな事、無かったかな。お兄ちゃんにも信頼されて、カレン達ウマ娘の事をすごく良く見てくれていて、強くて??。

そんなカレンの心を見透かした様に、デジタルちゃんは笑って後ろを向いた。

「トレーナーさんは弱さを見せてくれなくて、いつも1人で抱え込んでやって??だから、まだ頼って貰えないアタシはダメダメなんです。」

「あはは??ありがとうございます。」

2人を見てると、似たもの同士だって良く分かる。きつとお兄ちゃんも、自分はデジタルちゃんに任せつきりだって思ってるんだよね。だから自分に出来る事、カレン達の事をずっと支えようとしていて?? それなのに??。

「お兄ちゃんはカレンの事を送り出してくれた。でも??どれだけ全力を振り絞っても、カレンはバクシンオーさんに追いつけなくて。それどころか、最後の最後で暴走しちゃった??怖かったの。みじめだよね??。」

何も見えてなかった。周りも、お兄ちゃんも、先に行くバクシンオーさんの顔も。だから、あの眼を見せられた時??すく疎んだ。心の底から怖いと思った。だってあれは、何もかも終わりを決めた兄さんと同じ眼だったから。

「カレンさん??もし、もう一度だけ勇気を持てたら——走れますか?」

「えっ???」

こつちを向いたデジタルちゃんは、真剣な顔でカレンのことを見る。

でも??変な感じ。優しくして強い眼をしているのに、カレンの知っているデジタルちゃんじゃないみたい。

じゃあ——この子は、誰?

「ご自身の”ユメ”を、思い出してあげて下さい。誰の為に走りたいと思うのか、誰の想いを背負うのか。そうすれば、カレンさんなら大丈夫です。アタシもトレーナーさんも、”絶対” そうだと信じてますから。」

「絶対」——カレンは??私は、お兄ちゃんと先の景色を見たい。

一緒に”宇宙一カワイイカレン”を目指したいっ。だって、それが私の夢だからっ！妥協は絶対にしたくない！諦めたくないっ！」

デジタルちゃんは笑っている。口が動いて、何かを言っている。声がしないけれど、大切な言葉を。

——カレンチャン。

聞き覚えのない声が頭に響く。

知らない筈なのに凄く懐かしい——なつかしい???

三女神様の像が、カレンを見ている気がする。不思議と目が離せない。離しちやいけない、気がする。

——カレンチャン。

呼んでる。

誰か分からないけど、カレンにとって大切な??。

『カレン。』

背筋がゾツとした。誰よりも近くで聞いていて、ずっと大好きだった人のするはずの無い声。自分がどうしてここにいいのか、そんな事も気にならないくらいの寒気と怖さが足元から這い上がって来る。

「??なん、で???っ。」

声が出た方——後ろを向けば、病院のベッドがあった。

無機質な白で固められた部屋。窓の外には、あまりにも不釣り合いなほど満開の桜。淡いピンクと白のコントラストが彩る世界で、小さなウマ娘がベッドに座る男の子に頭を撫でられていた。

『兄さん、カレンまた1着だよ！みんなカレンの事可愛かったって！』

『そうだろうね。カレンは、僕の自慢の妹なんだから。』

くすぐったそうに、でも嬉しくて??小さなカレン<sup>私</sup>チャン<sup>身</sup>が、兄さんに身を委ねていた。

「っ??。」

息がつまる。心臓がスゴい速さで動き続ける。呼吸が上手く出来ない。

見たくない。この先を知ってるから、知りたくない。思い出したくない。どんな顔をして、何を言ったのか良く覚えてる。これが絶対に変えられない出来事なのを知っている。願った夢じゃなくて、叶わなかった夢でもなくて、本当にあった事なのを知っている。

気付いたら部屋を飛び出して、長い長い病院の廊下を走り出していた。

病院の中には、カレン以外誰も居ない。看護師さんも、お医者さんも、他の患者さん達も居ない。ただ不規則に、カレンの靴の音が響くだけ。酷い目眩??何度か壁に寄り掛かりながらも走り続けた。

そうして病院の入口を乱暴に開けば——そこは見知った部屋だった。

『??兄さん?』

病室に。

戻ってきたんだ。

兄さんが居なくなつた日の——空っぽの病室に。

「??いや、だ。」

『兄さん、カレン1等賞だったよ。兄さん。』

「いや、いや、いやっ。聴きたくないっ。返事なんてあるわけない?!」  
『兄さん?起きて。今日もカワイイねって、皆——。』

ずっと眠ったままの兄さんの身体を、カレンは揺らしていた。まだ眠ってるって信じて。返事は無いのに。2度と??名前を呼んでくれない、のに。

ギョツと目を閉じて、耳を塞いで、扉の前に座ることしか出来なかった。なんで、今になって??こんな??。

——ダメ。

「??えっ??」

——目を背けちゃダメ。聞かないふりなんてダメ。起きた事は変えられないの。

懐かしい声が、頭の中でそんなことを言う。分かりきってる。だから見たくもないし聞きたくもないのに、ずっとそれを許してくれない。

——カレンチャン。どうして、貴女は走るの?何のために?誰のために?何故、青々としたあの緑の世界に立ち続けるの?

そんなの、カレンの夢だからに決まってる。兄さんとの約束だからに決まってる。

——なら、見て。聴いて。”ユメ”を思い出して。貴女が忘れたかった場所にあるものを?繋がりを??私を、見つけて。お願い??お願いっ、カレンチャン。

泣いてる??懐かしい、声が。

私の知っている筈の音が、悲しんでる。

『カレン。』

「にい?さん??」

あんなに真っ白だった病室は灰色に変わっていた。父さんと母さんも、小さなカレンも。時間が止まった様に、ピクリとも動かなかった。

眠っていたはずの兄さんが後ろに居る。

私の脚を、腕を、頬を??触る冷たい指は、ずっとずっと忘れていた懐かしいものだった。

ああ、そうなんだ。

カレンの時間は??ずっと止まっていたんだね。

この日で。

この場所で。

だから??今になって、こんな??。

『カレン。もう、良いよ。』

「良いって??何、が??」

『頑張らなくても良い。ずっと見ていたよ。カレンが真っ直ぐに、夢を追いかけていた事。だから??もう、休もう。ゆっくりしよう。』

「??良い?のかな??私は??。」

兄さんは笑っていた。私が覚えている中で、最後に見せてくれた笑顔と同じだった。何もかもが分かっている、終わりを決めた時の眼。ずっと会いたかった兄さんは、私を抱きしめてくれようとしている。

私は――。

――もし、もう一度だけ勇気を持てたら??走れますか?

――誰の為に走りたいと思うのか、誰の想いを背負うのか。そうすれば、カレンさんなら??大丈夫です。アタシもトレーナーさんも、

”絶対”だと信じてますから。

トレー、ナー???

——”宇宙一カワイイ私”だなんて大きな迷子ちゃんだなあ。  
うん、でも良いな、それ。素敵なお夢だ。

——??笑わないの？

——笑って欲しい？だったら、心の底から笑おうじゃないか。その夢が叶った時??君が今日の事を覚えていて、そばに居ても良いんだったらね。

——うん??良いよ。約束、してくれる?カレンなら出来るって信じてくれる?!

——ああ、約束だとも。だからほら、もう行きな。父ちゃん母ちゃんも心配してる。ちゃんと笑って、前向くんだぞ?可愛いカレンちゃん。

「??言わない。」

「??」

「兄さんは??そんな事言わないよ。1度だって、カレンに諦めてもいいだなんて言わなかった。頑張るカレンはカワイイって言ってくれた!そんなのは私の会いたかった兄さんじゃないツ!そんな人の為に今まで走ってきたわけじゃないよツ!!」

初めての拒絶だった。兄さんの手を突き放したのも、こんな風に言い切ったのも、全部全部初めて。

涙が止まらなかった。驚いて、悲しい顔をする兄さんが辛かった。もうそんなの見たくなかった。こんな悪い夢なんて早く覚めてしまえばいいのに。

『じゃあ??どうして、走るの?誰の為に?何の為に?』

「っ??それは?信じてくれてる人が居るから。大事な人がちゃんと約



束してくれたから。」

『それなのに迷ってる。こうして手を振り解けないでいる。まだ、怖がってる。前に進む事を。お別れを。』

突き放したはずの腕は、何本も真つ暗な世界から伸びてきていた。私を逃がさない、離れたくないって言ってるみたいだ。

『カレン??もう、良いよ???』

悪い夢なんて、覚めてしまえば良い。

早く、早く、早く。

お願いだから??早く、覚めて。

怖くて、辛くて、哀しくて。もう一度だけ強く眼を瞑った、その時だった。

後ろから私を抱きしめてくれる温もり。

ぶきつちよで、優しくて、カワイイものが大好きな人の腕。

私の夢を笑わないで、認めてくれて、そばで夢を見たいと言ってくれた人。ちゃんと笑って、前を向くんだった??言ってくれた人。

頬が緩む。やっぱり、来てくれたんだ。

耳元で息を吸ったその人は、力強く言い放った。

「どけ！俺はお兄ちゃんだぞッ!!」

風が吹いた。

陰鬱な世界を吹き飛ばして、その風が運んできたのは——青空と、どこまでも続く緑一面の地面。

くすぐったそうに揺れ動く草原の??その真ん中に、ウマ娘が立っている。

まるでこの場所が、その子1人を中心に廻っているみたいな、堂々とした立ち姿。

明るい茶髪鹿毛に、白と青を基調とした勝負服。

左右非対称のサイハイソックスに、2枚ずつ背中から伸びた細いマントが翼のように風にはためいて??振り返ったその子の眼は、綺麗な蒼だった。空よりも濃くて、海より深い群青色の瞳。右の耳に付けられた、私と色違いの小さな青いリボン。

トレセン学園で1度も見たことの無いその子を、私は知っている。カレンはその王様を知っている。

『??逢えた。』

「うん。逢えた??ね。」

『カレンチャン。ううん、”ウマ娘”のカレンちゃん。』

「貴女は??王様って言うには、少し可愛らしいかも。」

『そつ、そうかな??ねえ、走ろう?一緒に??どこまでも走って、走って、走って——ユメを、思い出そう!!』

手を引かれるまま、2人で駆け出した。楽しそうに前を走るその子は凄く速くて、きつと普通に走っても追いつけないのかもしれない。でも??なんだか、気持ち良かった。こんな気持ちで走るのなんて久しぶりで、思わず力んじやって??あはっ、カワイくない。けど??!

「負けないからねツ!カナロアちゃん!!」

『上等ツ!!』

追い風と一緒に景色が変わる。

歓声スタンドが観客席を覆い尽くした、電撃高松宮記念6ハロン。

兄さんが居なくなった日に見た??私の忘れていた、たった2人だけの”ユメ”の続きに。

——坂を上がった、カレンチャンが先頭！カレンチャン先頭！200mを通過した！内を狙ってるロードカナロア！まだ先頭は変わらないかカレンチャン先頭！

力いっぱい走って、後ろにピッタリ着いてくる彼女を絶対に行かせたくない気持ち湧き上がる。

ライスお姉ちゃんも凄かったけれど、後ろから迫ってくるカナロアちゃんのプレッシャーは今までで1番だった。  
ドキドキする。

怖い——なんて、気持ちは全く無くて。

どうして忘れてたんだろう。レースがこんなに楽しいって思ったのは、久しぶり。

うん??楽しい。すごく、すっごく楽しい!!

『まだまだアツ!!』

「行かせないってばっ!!」

——内からロードカナロア飛んでくる！カレンチャン！ロードカナロア！カレンチャン！ロードカナロア！並んでゴールツ!!しかしカレンチャンツ！カレンチャンですツ!!

「はあっ??はあ??っ、あはっ?ははは?!!」

『あつははは?!!あー、疲れたっ!』

「もう??なんで急に本気だすの?」

『つい、ね??ふふっ。』

息を整えて、カナロアちゃんは目線を上げた。一緒に上を見上げると、着順掲示板がある筈の場所には別の映像が流れていた。

——サクラバクシンオーまたしても快勝！これで重賞は怒濤の

7連勝!この子に敵うウマ娘は居るのでしょうか!?堂々たる凱旋です!!

膝に手をつけて、バクシンオーさんは肩で息をしていた。短距離のレースで、天性のスプリンターである筈のあの人が、こんな風になるなんて思えない。何より、あの人が笑っていないなんて事がある筈ない。

すごく辛そうで??今にも消えてしまいそうな、儂い夢。

『純潔?。』

「うん。桜の花言葉。」

『だから、王様はあの人を選んだのかもね。』

「でも??私を忘れないで」、なんて??少し寂しいよ。」

『私もそう思うな。何より、まだ一緒に走ってないんだ。だから——』

片膝をついた王様は、カレンの手を取って言った。

『今は??あの人を止めて欲しい。優しい王様の目を覚ましてあげて欲しいの。』

「??出来るかな。私に。」

『貴女だから出来るんだよ。それに??大丈夫。2人1緒なら、きっと。』

「そこは”絶対”って言って欲しかったなあ???’」

『えっ!?ぜ、絶対!絶対大丈夫ツ!!』

「冗談だよ?」

『もうっ!!』

「あははっ!?!また、会おうね。ロードカナロアちゃん。」

「うん??また会おう。カレンチャン。」

ゆっくり目を閉じる。

「握られた手から伝わる温かさが、身体中を巡っていく。そうして次に目を開けた時は、真っ白な天井が視界に入った。」

「カレン。俺はお前の兄さんじゃない。」

声がする。今にも泣きそうな声が。

「お前をこれでもかと愛してくれた兄さんには到底なれない。」

うん??知ってるよ。貴方は兄さんじゃない。でも——。

「でも??お前が俺をお兄ちゃんと言うなら、俺だってお前を妹の様に、家族同然に可愛がる。夢だっで一緒に見る。どんな事があっても支えるし、絶対に離れん。それだけは約束するよ。だから——。」

「ホント???」

驚いた表情で、お兄ちゃんは顔を上げた。カレン、今どんな顔してるんだろう??。お兄ちゃんを泣かせちゃうような、そんな酷い顔してるのかな?でも、嬉しいの。すごくすごく嬉しいんだよ。

「ホントに、一緒に居てくれる?」

「??ああ。」

「離れたり??しない、かな?」

「勿論。」

カレンのズル。お兄ちゃんに質問するフリして本当は自分が安心したいだけ。あの日の事、お兄ちゃんが覚えてなくて、全部カレンの1人よがりだっただけなのが怖いだけなんだ。

??それでも、カレンは——。

「カレン、約束しただろう？夢が叶う時、俺がそばに居ても良いなら笑ってやるって。こうしてチームという形ではあるが、ちゃんと夢を見させてもらってるんだ。そっちがもうイイって言うまで離れてやらんぞ?」

「っ?!お兄ちゃん?!。」

気づいた時には抱きしめていた。カレンもズルだけど、お兄ちゃんのそういう所は本当にズルっ子。そうやって知らないフリしてて、欲しい時に何もかも分かっているみたいに言葉をくれる。こんなの?!一緒に居たいって、思っちゃうに決まってるよ。

「お兄ちゃん。カレン、お願いがあるの。」

「何だ?」

「ちっちゃなお願い??聞いてくれる?」

「勿論。」

そうして、お兄ちゃんの耳元で囁いた。

「バクシンオーさんに勝ったら、教えてあげるね。」

笑ったカレンにキョトンとして、お兄ちゃんも困った様に笑った。サクラバクシンオーさん??カレンは、もう負けませんから。兄さんに貰った優しさも、デジタルちゃんが分けてくれた勇気も、お兄ちゃんと結んだ約束も??いつか訪れる、あの子の未来も背負うから。

無敵のカレンアチャンタが、必ず目を覚ましてあげますね。

1 / 2 : チェリーボーイ・ミーツ・ガールズ

「カレン??あの??。」

三女神像の前で立ちすくんだままの本気絞りモードカレンちゃんは、その存在感を否応なしに振り撒いていた。諭すか、うまぴよいか—— かつてここまでの Dead or Alive な人生選択があつただろうか。それも外で。せめて屋内でやれ。

第一俺が何をしたって言うんだ??そ、そんなにか?俺がカレンちゃんの面倒をちゃんと見れてなくて、からかいにも上手く対応出来ず、果ては1人泣いていた??それで社会的に死ぬ事が決まると言うのか??童貞が生き残るにはそれ以外無いとでも言うのか?

んなわけ??そんなわけあるかっ!こちとら後輩ちゃんにはパシリとして追い出され、霊障にも遭遇して、担当に不満ぶちまけられてんだぞ?!俺は絶対に勝つからなッ!お前の兄活の数々は今日で終わるんだッ!見てろよカレンッ!

人間がウマ娘に負けるわけないだろ!いい加減にしろ!!

「カレン??俺は——。」

その時だった。

まるで糸が切れた人形のように、カレンは不自然なバランスで倒れ込ん——。

「ぬおおおおおおおおんッ!!!」

あつぶねえッ!!お前マジで止めろって!頭とか打ったらシヤレになんねえよっ!お兄ちゃんがバカみたいな叫び声上げて、咄嗟の判断と機転を利かせなかつたらマジでヤバかつたんだからな!?

テイエム歌劇団のクールビューティ担当、アドマイヤベガに教わった”Shall we danceの構え??”死ぬほど嫌そうな顔

されたけど、教えてくれたアヤベさんには感謝しかない。死ぬほど恥ずかしい。二度とやらん。

とにかくカレンだ！急にぶっ倒れるとか何がどうなってんだよチクシヨー！オカルトは要らないって言っただろッ!?

「カレン！カレンッ!!」

「?すう??。」

「寝っ??ほ??。」

何寝てんだよ。お前名探偵だってもっと分かりやすい前フリあつてから倒れるわ。その速度で寝るのは野比家の子だけなんだ分かってんのか。

びつつつつくりさせんなよもおーッ！怪我なくて良かったなコノヤローツ!!今度やったらこっそり耳カバー外すからなお前!!

いや、その場合はセクハラになるのか？

いやいや、そもそも耳カバーというのは衣服の一部。それを外すというのは実質衣服を脱がすのと同義では？

いやいやいや、うまびよい一歩手前じゃないか。カレンに火が点いたらどうする。お兄ちゃんだつて大炎上するわ。

じゃあ特にお咎めはないけど金輪際勘弁してくれ！頼むから！そもそも何で急に寝たのかさっぱり分からん！取り敢えずこのままここにいれば寒いだろう。おぶるかプリンセス抱っこでもしてどこかへ運ばなければ??。だがどこに？

家??は、駄目だ。距離がある。お兄ちゃんが先にくたばるわ。トレーナー室はソファーしか——あつ。

「あるじゃん。保健室<sup>教会</sup>。」

完全防音というこちらに不利なフィールドだが、この際贅沢は言えん。腹を括ったばかりだろう。何を恐れる必要がある。

ふと振り返れば、三女神像がこちらを見ていた。心做しか笑ってい



るようにも見え??なくもないが最初からあんな顔だった気がする。  
これ以上は本当に止めて頂きたい。落ち込んで”お友<sup>霊</sup>だち”に遭遇  
して愛バの不満にへし折られて社会的に死ぬ覚悟を決めた直後に追  
い女神。ごつつあんです。

一体俺が何したってんだ！何もしてないぞ！して無さすぎてデジ  
タルに呆れられてるんだ！ちよつとぐらいハッピーカムカムしろよ  
！フンギヤロツ！

無茶な動きをしたガタガタの身体に鞭打って、俺はカレンチャンを  
のっそり運ぶのだった。



さて、と??保健室に來たは良いものの、またしてもオカルト発生で  
ある。今俺の目の前にある布団。それが何故もっこりしているのか。  
明らかに不自然な膨らみ。不自然にもっこり膨らむのはポニーちゃ  
んだけで充分である。やかましい。

この部屋に入れる鍵を持っているのは、俺とデジタル、それから  
ポーノ。しかしデジタルは無いだろう。先程俺に死刑宣告を下した  
と言うのに、ここに戻ってくる意味が無い。

ポーノはフラワーちゃんと一緒にお料理動画を撮影中だからそも  
そも居ない。因みに今日は春野菜のサグラダ・ファミリアだそうな。  
サラダかと思つて聞き直したけどサグラダ・ファミリア??ウチのガウ  
デイが何を作りたいのかは分からないが、兎に角フラワーちゃんは泣  
きそうだった。

違う、今はこの布団だ。

何だか運命のいたずらに腹が立ってきたぞ。良いだろう。どんな  
オカルトだろうが怪現象だろうがかかってこい。カレンをおぶつた  
お兄ちゃんは無敵だぞお前。なんとたつて背中マシユマロ支えてん  
だ。

ヌツ、滾るんじやあない。

鬼が出るか蛇が出るか。慎重に??されど大胆に、俺は布団を捲りあ

げた。

「???何してんだ。」

「ミホノブルボンです。」

「知ってるよ。」

サイボーグだった。

どこにI, l l b e b a c kしてんだ。坂路に帰りなさいよ。何他所様の部屋で体育座りしながらベッドにコロナしてんだ。自分が美少女なのを自覚しろ、無垢な高等部め。

「暖めておきました。」

「それが通用するのは旦那の帰りを待つ新婚の奥さんと秀吉だけだ。」

ムクリと起き上がったサイボーグはおぶられたカレンチャンを見るや、俺から引き剥がしてそつと布団に寝かせた。マシユマロは消え去り、ポニーちゃんは息を潜め、めでたしめでたと相成ったのである。

「で??なんでここに?」

「デジタルさんに開けて頂きました。ここにいればトレーナーさんに会えると。」

「要件は俺か。じゃあ布団にくるまっていたのは?」

「待機行動を実行中、外気温の低下を確認。記憶媒体に保管していたデータと比較、明確な差異を感知。非常事態と判断し緊急シーケンスを発動しました。」

「つまり?」

「寒かったです。」

「おバカ。」

トレーナー室から持ってきた椅子にブルボンを座らせ、俺が着てい

たジャケットと保健室に常備していた毛布を掛けてやる。少しブルつとしてんだボン。そりや寒いでしょうよ。何月だと思ってるんだ。

冷暖房完備なんだから使えば良かったのに??あつ、そうだった。機械触らせると破壊するんだった。又ウ、難儀なサイボーグめ。

な、なんだよ。なに人の顔とジャケット&毛布を交互に見てるんだ。まだ寒いと言うのか?暖房が機能果たすまで待ちなさい。そんなすぐには暖まらないんだぞ。

「何か手伝います。任務の指示を。」

「えっ。まだ寒いだろ。こっちは大丈夫だから暖まれ。」

「いえ??活動に支障はありません。」

「そつ、そう?なら良いけど??。」

はつや。ウマ娘って代謝も良いの?初耳なんだが。いや、確かにデジタルやカレン、マヤノも比較的体温が高い。子供体温だと思っただが元の代謝がヒト耳と違うのであれば、成程納得。

まあそうだな!そういう事にしておこう!ジャケットからステータス : 加齢臭を確認したので動いて気を紛らわしてますとかだつたら今すぐ窓から飛び降りていた所だ。1階だけど。

「??う?。」

「カレンさんに異変です。」

「熱くてしんどいのかもしれん。隣は厨房だから、コレ水で濡らしてきてくれるか?。」

「はい??厨房?。」

「色々あるんだよ。ウチには。」

毛布は椅子に置き、ジャケットだけ羽織ったまま厨房へ向かったブルボンはあつという間に帰って来た。仕事が早くて非常に助かる。流石後輩ちゃんが面倒を見ているだけあるな。

ところで??その持ってきたおしやぶりについて説明してもらおうか、おい。

「置いてありました。消毒済みだそうです。」

厨房へ確認しに行くと、確かにタッパーに入った大量のおしやぶりが真つ先に目に付いた。用意したどっかのママもそうだが、それを平然と持つてくるサイボーグも大概である。試供品じゃないんだぞ。後輩ちゃん、どうなつてんだハーバーは。

おしやぶりをじつと見つめていたブルボンは何を思ったのか、それをゆつくりカレンの口元に持つていった。は？

「おいっ、何しれつとカレンにおしやぶり啜えさせてんだ！怖いもの無しかお前は!？」

「人は行き詰まったり、苦しくなった時に本能で母性を求めるものだとクリークさんに教わりました。ミホノネットワークに保管してある63通りのデータ内では、これが最善かと。」

「ん?う??う”ツ?。」

「聞いた事無い呻き声出したぞ。」

「おかしいですね??こうするとデジタルさんは大人しく眠ってくれると仰つていたのですが?。」

「ミホノネットワークから変態とアグネスデジタルを削除しなさい。当てにならないから。」

「了解。情報更新——63件中、63件の削除を確認。」

「??何かゴメンな?ウチのに言っておくから。」

カレンの口から半ば引っこ抜く形でおしやぶりをもぎ取る。相変わらず苦しそうではあるが、あるよりはマシだ。おでこに濡れタオルを乗せてみるが状況は変わらない。まあ熱があるわけでもないし当然といえば当然なんだが??じゃあ何で魘されているのかという話である。

「どうしたもんか??。」

「悪い”ユメ”でも見ているのでしょうか。」

「ああ??悪夢見ると凄いい魔されるみたいだもんな。自分じゃ気づけないけど。」

「悪夢ではありません。悪い”ユメ”、です。簡単には振り解けない、運命。過去。或いは——。」

ブルボンの表情は変わらない。だがカレンを見下ろすその眼は、勇者御一行に挑戦を叩きつけた強者のものでは無かった。

恐れか悲しみか。どちらにせよ始めてみる表情だ。俺には悪夢と悪い”ユメ”の違いは分からん。デジタルなら分かるだろうか??あつ、死刑宣告して帰ったんだつた。

「??に??さ??。兄、さん??。」

久しぶりにカレンの口から出た『兄さん』という単語。僅かに目尻には涙が浮かんでいる。

お兄ちゃん分かっちゃった!!

つまりどういうことか?答えは1つしかない。

カレンチャン、ホームシック問題である。

間違いない。俺は勇者御一行のトレーナーだぞ?確かにデジタルには少し不満を持たれてしまつて失敗しているが、いつだって良バ場ハッピー☆カワイイだらけのチームなのだ。勇者の半身であり、カレンのお兄ちゃんであり、マヤの管制塔であり、ポーノのちゃんこ??それが俺だ。分からないはずが無いだろうッ!

しかしどうだ。ここで兄さん??うむ、カレンはウチのチームで共に夢を追いかけるエースプリンター。年頃の少女なのに普段は全くと言っていいほど弱みを見せない為、溜まりに溜まった兄さんへの寂しさがとうとう限界を迎えたのだろうか。

顔も名前も知らないカレンの兄よ??どんな愛し方してたんだ。

たまごつちの様に愛情たっぷり育てた妹さんが担当を本気でぴよいしようとしてるんだぞ。少しぐらい様子を見に来てくれても良いじゃないか。このままじゃ、うまだつちしたお兄ちゃんのためごつちは好きだつちされてしまうんだ。女々つち（い）、みみつち（い）、トドメにくちぱつちならぬくち封じ。#お兄ちゃんのポニーちゃんは小物つち。クソが。

このままでは300万人のカレンフォロワーにどんな目に合わされるか分かったものではない。ボタン1つで水に流せるたまごつちと違って、こつちはボタン1つで通報と炎上のハリケーンである。水にも流せない事案。待て、これでは俺がフン以下じゃないか。糞ギヤロツ!!

???何か腹が立つてきたぞ。

今カレンの夢を共に追いかけているのは誰か?そう、お兄ちゃんです。

日々カレンの面倒を見たり、逆に色々と助けて貰ったりしてるのは誰か?そう、お兄ちゃんです。

肝心な時に兄さん呼びになるのは、何だか分からんが妙に落ち着かない。頼られている感じがしないのだ。今はウチのカワイイカレンちゃんなんだぞ。兄さんがどうした。悪い”ユメ”がどうした。

!!  
そんなもんは??俺にかかればティッシュに纏めてポイじゃオラツ

魘されているカレンの耳に顔を近づけて、俺は宣言した。

「どけ!俺はお兄ちゃんだぞツ!!」

ピクリと反応したカレン。あれだけ魘されていた筈の寝顔は穏やかになり、静かな寝息を立て始めた。

よーし、満足。これがお兄ちゃんパワーだ。わっはっはっは!!  
ブルボン居たの忘れてたわ。

目の前でクツソ恥ずかしい宣言したぞ?。チラリと横に目をやれば、ブルボンは僅かに目を見開きながらポカンとしていた。や、やめ

ろその顔??違うんだって?あの???.違うって??。

「??何故。」

「な、何が???」

「いえ??こちらの話です。ところで要件ですが——ずっと、聞いた  
い事がありました。」

ミホノブルボンは少しの沈黙の後、口を開いた。

「私と父の夢クラシック三冠を初めて肯定した貴方は——何故、私を選ばな  
かったのでしょうか。」

こちらを見つめるその眼は??まるで親の機嫌を伺う子供のよう  
に、揺れ動いていた。

## 2 / 2 : チェリーボーイ・ミーツ・ガールズ

「今のマスターも、共に三冠を目指してくれた以前のマスターも、私の気持ちを理解してくれました。ですが初めて私の夢を、父の夢を肯定したのは??貴方です。」

「??あったかな、そんな事。」

「ありました、そんな事。」

ブルボンはじつとこちらを見てくる。シラを切ろうとするも無駄だった。

ええ、分かってますよ。覚えてますとも。

高い短距離適正を買われ、スプリンターでなら強くなれると周りのトレーナーが言う中でブルボンはただ三冠の夢を追い続けた。意固地に、頑固に。それが父親との約束なのだからと譲らなかつた。

良く知ってるよ。それで担当が見つからなかった時、取り敢えず契約結んだトレーナーさんに契約破棄されてるもんな。

けどなブルボン??それを思い出すという事は、同時に俺の黒歴史を掘り返すことになるのだ。

あの時スレてたんだよなあ?!諸事情で後が無かつたし、意地でトレセンに受かった自分とブルボンが重なったおかげで、『ウマ娘がやるって言うなら絶対出来る』とか、『本当に惚れたトレーナーなら手伝ってやるもんだろ』とか滅茶苦茶に啖呵切つたんだ。若造が。適正距離は気合いと気持ちと根性でなんとかなると本気で思っていたのである。良くトレーナーになれたな? 勿論今はそんな事は考えていない。

ふふっ??最近忘れてたのに1字1句思い出してきたぞクソがツ!!

『俺は最高に良い夢だと思うよ。』

とかね。

『誰が何と言おうと、君なら出来る。だから自分を曲げるんじゃないぞ。』

とかね。



おおおおおおおッ!!くっ、こ、又ウンッ!!

はっ、恥ずかしいッ!物凄く恥ずかしい!キョトンとしてたね君!そりやるよね!しかもそこまで言っておいて契約結ばなかったんだもんね!

こちらら言うだけ言っつてクールに去るぜ??みたいな場違いムーブかましてたけど、ベテランさん達にクツソ失礼な事しちゃってたんだよねッ!!やべえ、変な汗出てきた。俺も倒れそう。今すぐ理事長室で転げ回りたい。

ブッ、ブルボン??良いか?お前が俺に何を求めてるのか分からないが、立派な答えなど期待するな。何も無いんだよ。だからこれ以上俺の古傷をエヴァンゲリオンみたいに広げていくのは止めてくれ。今ならATフィールド張れんぞ。

「デジタルさんを見ても思います。そして今のカレンさんへの対応も??貴方はウマ娘が欲するものに理解を示す。望むものを共に追う。手を伸ばし、誰よりも前で道を先導する。」

止めろっつて!そんなジャンヌ・ダルクみたいな尾ひれ付けないで!いたたまれねえッ!こっちはオルレアンの乙女じゃない、ただの童貞だぞ?!掲げる旗はいつだって白旗じゃない!!は?掲げんが?

「??ふっ、深い理由は無いさ。ただやっとの思いでトレーナーになれたんだ。力ぐらい貸したくなるし、当の本人達が必死こいてるならこっちもそれに見合うだけの事をしたと思うてる。それだけだよ。」

「なら?あの時??もしも、私が貴方の背中を追いかけていたら。手を取り、共に夢を叶えて欲しいと願っていたら??私は叶えられていたでしょうか。」

「無理でしょ。」

「えっ。」

「えっ?」

ミホノブルボンは、ひと目で分かる驚愕の表情を浮かべて俯いてしまった。膝に置いた手を固く握りしめ——もしかして泣きそうかお前。

なに!?なんだと!?ちよつ、ちよつと待てえいッ!!

「ちつ、違うぞッ!お前さんがどうかじゃなくて、あの時の俺じゃ口だけだったから無理だって話だ!お前だろうと他のウマ娘だろうと、最悪怪我させてたかもしれないんだって!」

「???私は何でも?。」

「ダメです。ダメダメ、許しませんよ。自分の体は労りなさい。お前に夢を託した親父さんは、夢の為なら身を滅ぼしても良いと言っていたか?」

「??いえ?。」

どう考えても絞り出している声。待て、今のは言い方キツかったし、ちよつとイジワルだった。傷ついたかもしれない。いや、でもブルボンだし?でも??ヌツ!年頃の娘が何考えてるのか童貞に分かるわけないだろっ!!下向いてるから怒ってんのか泣いてんのか落ち込んでるのかも見えん!多分全部だわ。

こっ、後輩ちゃん!ライス!!助けてくれッ!!くそっ、トレーナーの恥め!とりあえずきちんと説明しよう??。

「俺の母親はウマ娘で、親父はトレーナーだった。」  
「??。」

「ド田舎だった地元じゃ、それはそれは期待されてたよ。ここから新しいウマ娘が生まれて、名を馳せてくれる——夢を見せてくれる子が出るんじゃないかってな。で、蓋を開けてみたら人間の小童<sup>こわっば</sup>。”外れ”だって言葉もあったらしい。」

「??そんな風に言われる必要があるのでしょうか。」

「そういう時代だったんだよ。今とは違って、名だたるトレーナーは

その道のお家が輩出するっていうのが当たり前だった。親父のように必死こいてトレーナーになった人間はまず期待はされないし、余程の物好きなウマ娘じゃない限り選ばない??そんな時代だ。それでも俺にとっては、親父のトレーナー姿が誰よりもカッコよかった。」

勿論直接見たわけじゃないし、周りの人らも俺の事は可愛がってくれた。だから恨み辛みがあるわけじゃないし、仕方ない事だったと納得もしている。当の本人達なんか「1週間くらいで”外れ” 発言忘れてたらしいし。」

爺ちゃん婆ちゃん達め。もっと長生きしろ。

「そつから色々あつて、何度もトレセンの資格取得に失敗して??ようやく受かった時には、親父は病気を患って病院さ。頑固で口の悪いアంతタに目に物見せてやると思ってた。ウマ娘にはなれなかったが、アంతタらの息子が名前を上げてやるってバカみたいに口先だけで突っ張ってた。何したいのかも決まっていなかったのにな??だから”怪物様”にも振られてるし。」

「??最初からデジタルさんでは無いのですか?」

「おう。最初に声を掛けたのは、兄貴分だった先輩のチームに居たマルゼンスキーだ。”今楽しいか” って聞かれたから、分からないと答えて??そしたらあつさりNOと言われたよ。どうしてだ、何がダメなんだって、そのぐらい余裕が無かった。実績があつて強い子なら誰でも良かったんだ。そんな半端で杜撰ずさんな人間が、必死に夢見てるウマ娘の面倒なんか見れるわけないだろう?」

押し黙るブルボンをよそに、俺は心の中で悶絶と雄叫びをあげていた。昨日の事のように覚えてるぞ。忌々しい己の過去め。いつかデジタルやウチのカワイイウマ娘達と共に完膚無きまでに消し去ってくれるわ。

勇者御一行を無礼なめるなよ。ちゃんこの具にして無礼無礼なめしてやる。

「お前さんがこれからも後輩ちゃんの中で走り続けて、たまには違う気持ちで走りたくなったら———そしたら、あの時見れなかった面倒ぐらい見てやるさ。勿論お前さんが望むなら、だけどな。??期待させるだけさせて悪かった。」

「??私、自身の選択に後悔はありません。成し遂げた功績も、積み上げた勝利も、胸を締めつけた敗北も??今までマスター達と歩んできたその1つ1つの道を誇りに思います。そして今後も、その気持ちは簡単には変わりません。」

「ふふっ??それでいい。だからお前さんは強いんだ。その強さがあるなら前を向ける。真っ直ぐ伸びた自分の芯があるから、しゃんと胸を張れる。そして??まだ上を目指すんだろ?」

「当然です。」

力強く顔を上げたミホノブルボンの眼に、闘志が溢れていた。

よーしよーし、ここまで100点満点である。すっかり元通りじゃないか。実は優秀か、俺。何故愛バに同じ事が出来ないのか、これが分からない。

「そして理解しました。運命も過去も、置いていかなければならないと。やはり、私は貴方達を超えなくてはなりません。」

「えっ。」

「勇者御一行??それを築いた2人の”絶対”を必ず置き去りにする。これを最重要任務とします。2度と遅れは取りません。覚悟をしておいて下さい。」

「えっ。」

おっ、おかしい??!何故だ!?!完璧だったろう!?!

おしゃぶりから泣きそうになって割と本気の宣戦布告とか、情緒の振り幅バグってるだろお前!今の黒歴史語った数分でミホノネットワークに何干渉したんだよ!ヌツ、これでは俺の黒歴史がウイルスでは無いか。同じ事を愛バに出来なくて良かった??いや、何も良くな

い。ブルボンまで本気モードである。なに？俺はウマ娘に不満と怒りの炎を燃え上がらせるプロフェッショナルなのか？不名誉すぎるわ。

だが待つて欲しい。最近茶目つ気を覚えたミホノブルボンの事だ。お茶目なジョークも多少？3%ぐらいはあるかもしれない。機械壊す癖にやたらと家電量販店に行きたがる女だぞ？これが茶目つ気でないのなら新手的サイバー攻撃である。グイグイ迫ってくるなら、こっちだってその綺麗な瞳を覗いてやろうじゃないか。今が茶目つ気何%か見せてみるがいい。

??? 無えな！

瞳孔ガン開きだよ。お茶目の”お”の字も見当たらんわ。

あつたとしても、”お前だけは許さん”という意志だけである。これにはポニーちゃんも萎縮せざるを得ない。ヒヒン??。

ゆっくり目を閉じたブルボンは一転、穏やかな顔になった。微笑んだ顔で、ベッドに眠るカレンチャンを見る。

「ですが??今はこの可憐なスプリンターが、桜の王様を悪い”ユメ”から覚ましてくれることを望みます。”絶対”出来ると、私も信じていますから。では、失礼します。」

そうやってブルボンは保健室<sup>教会</sup>を後にした。ジャケット置いていけよ。

何だったんだ??本当に、俺が何をしたと言うんだ??こっちは黒歴史を自分から紐解いたと言うのに??。どれだけあの時の俺に恨みを持っていたんだ。悲しい。

彼女が出て行った部屋にはカレンの静かな寝息だけがする。

どっ??と疲れた。思わず下を向いてしまうが、仕方が無いだろう。ここまでの短時間に色々ありすぎてもう何が何だか。ホラーに遭遇するし、デジタルは不満持ってたし、カレンはぶっ倒れるし、ブルボンは人の黒歴史ほじくってガン飛ばして帰るし??あー?泣きそ。

カレンが目覚ましたら即うまぴよいなんだろうか。教会は勇者

が目覚める場所であって、『ゆうべはお楽しみでしたね。』する場所じゃない。宿屋でやれ。いや、やるな。相手は教え子だぞ。

だがデジタルから借りた勇者手帳によると、カレンは合気道の有段者らしい。今ではその情報が何よりも怖い。無駄に抵抗しようものならあつという間にいなされてポニーちゃんが嘶いななくのだろう。

カレン。俺はお前の兄さんじゃない。お前をこれでもかと愛してくれた兄さんには到底なれない。

でも??お前が俺をお兄ちゃんと言うなら、俺だつてお前を妹の様に、家族同然に可愛がる。夢だつて一緒に見る。どんな事があつても支えるし、絶対に離れん。それだけは約束するよ。

だから――。

「ホント???」

うまびよ――何?

顔を上げた瞬間、カレンと目が合った。お兄ちゃんの2つ目の心臓が、ゆっくり息を引き取った瞬間である。

どつ??どつ、どどどど、どどつどこから聞かれてた!?また口に出してたのか俺!?!いい加減にしろコラッ!最後の最後で自滅かましてんじゃねえよッ!!あつ、いかん。涙出てきた。クソが、もうおしまいじゃあ??。

「ホントに、一緒に居てくれる?」

「??ああ。」

「離れたり??しない、かな?」

「勿論。」

ゆっくり起き上がったカレンは、俺の手を取って大事そうに両手で包み込んだ。

涙引きそう。

お兄ちゃんはやはり童貞、少々ドキリとして早漏??もとい候。

ポニーちゃん、どう、どう。落ち着くのだ。俺は大人である。無様な様相を呈しているが、無様に貞操を散らすつもりは無い。これっぽっちも無い。ここは心を落ち着かせるのだ??考える?こういうのは初めてじゃない。カレンちゃんのスキンシップとしては日常茶飯事だ。それにアレだ。迷子のロリカレンと約束した時は俺が愛でていたじゃないか。そうだ、そういう日もあったぞ。なんてことは無い。ヌツフハハハ!あれ通報案件だな。

「カレン、約束しただろう?夢が叶う時、俺がそばに居ても良いなら笑ってやるって。こうしてチームという形ではあるが、ちゃんと夢を見させてもらってるんだ。そっちがもうイイって言うまで離れてやらんぞ?」

「っ?!お兄ちゃん??。」

何びっくりしてるのキミ。あつ、カレンが抱きついてきた。うひゃくモチモチしてるく??えっ?いい、良いの?これ??ギユツとしても良いの?タダで?マジ?ひよっ、ひよえく??。

キツシヨツ!!!

落ち着けつて、童貞!限界化はデジタルがやるから可愛いのであつておっさんがやるものではない!こんなもの、まだ記憶に新しい駿大祭の時に比べればなんだ!あの時の葛藤を思い出せ!!

和装に身を包んだゴールドシチーやユキノビジンに混じって、カレンも和装に身を包んでいたあの日を??いやあ??。

吉原に迷い込んだかと思つたね。

1人だけ花魁なんだよ。真っ先に俺の所へ来た時にはあまりの色気っぷりに、『カレンちゃん!?ハレンちゃん??。』と戦慄したし、『花魁はオイラなんだ!』とでも言わんばかりにポニーちゃんが暴れ出した時はどうしようかと冷や汗をかいたりもしたよ。カレン、お前からすれば『良いでは無いか?』とお兄ちゃんとお代官追剥ぎごっこをする感じかもしれないが、俺からしたら羅生門追剥ぎだぞ。

ヌツ?何故少し活気を取り戻したんだポニーちゃん。寝ろと言つ

てるんだ。ええい、止めろ！人をまるでロリコンの様にっ、このっ！！  
言う事を聞かない息子めッ！お前から分からせるぞ！！

「お兄ちゃん。カレン、お願いがあるの。」

「何だ？」

うまびよいだ。

俺には分かる。これは完全にうまびよいの流れだ。ビーストモードが発動したカレンゲリオンに為す術なくクソザコお兄ちゃん♡されて、俺は第<sup>1</sup>、<sup>2</sup>の使徒<sup>ス</sup>の様に十字架で晒されるのだろう。

「ちつちやなお願い??聞いてくれる?」

「ああ。」

うまびよいだ。

お前にとつてはちつちやなお願いでも、お兄ちゃんにとつては人生のクソでかいターニングポイントだぞ。ちつちやいのはポニーちゃんである。はっ?

完全防音の保健室。夕方から夜に変わる時間。そしてこのカレンちゃん。明日は休日。冷蔵庫に炭酸水とウコンも常備。

場所、ヨシ!

時間、ヨシ!

1番大事なムードもヨシ!

今日も1日、ご安全にーッ!!

ご安全にじゃないが。

何言ってるんだ俺は。自分から退路を断つてどうするんだ。

カレンの手に僅かに力が入る。ヒエッ??に、逃げられねえ??ッ!合気道ならぬ愛気道!

やめろ、うまびよい伝説。頭の中でイントロを始めるんじゃない。



位置に着いたら終わりなんだぞ。ずきゅんどきゅんゴールまで一直線だ。ヤケクソで投げたビート板だつて返つてこねえ。代わりに返ってくるのはカレンフォロワーから浴びせられる罵声と袋叩き。

ああ、近いッ！カレンの顔が迫ってくる！ヌツ、顔が良い。

待て！待てつて！話せば分かる！ヌヌツ、彩フレグランス。

分からせようとか思ったのは悪かった！だからまだ人生歩ませてくれっ!!

「バクシンオーさんに勝つたら、教えるね♡」

このメスウマ娘があツ??!

紛らわしいんだよッ！しれつと人に死亡フラグ擦り付けるんじゃない！

でも首の皮1枚繋げてくれてありがとうナツ!!

## 決戦　：　驀進王

「ライスさん、ちょっとそこキープで。今肩にレアなのが居ますから。」

「どんな子なの???お姉さま。」

「ほら。ギンシヤリボーイ。」

「何してんの君ら。」

高松宮記念。

電撃6ハロンの戦いと言われるスプリンター達にとって大切な春のG1。カレンもここで競った事があるし、俺とデジタルを導いてくれた心の師匠——一流のウマ娘”キングヘイロー”が、自身の生き様を世間に見せつけた大舞台でもある。あの日の偉大な後ろ姿と涙の高笑いを、勇者御一行はいつまでも崇拜しております。

スプリンターズSに負けないほど大勢の観客が集まった中で、後輩ちゃん達はそんなやり取りをしていた。

「何って知らないんですか?」Jコレ」。

「知らんよ。何の略だし。」

「JAPAN WORLD CUP Collectionってアプリですけど。あつ、折角なんでライスさんにギンシヤリの名前付けて貰いましょうか。」

「じゃ、じゃあ???うんと???ブルボンさん!」

「ブルボンを何だと思ってるんだ。」

慣れた手つきで後輩ちゃんが名前を入力し、ここにミホノブルボン(Jコレのすがた)が爆誕した。これは???どうだ。いや、ブルボンなら喜ぶかもしれない。なんなら頭の中のブルボンは真顔でピースしてるまである。

その様子を見てみると、反対側から若者2人の会話が耳に入った。

「サクラバクシンオー??去年ニシノフラワーに勝ってから今日まで無敗。対戦相手のカレンチャンとは、『カワイイダービー♪』を含めて今日が3度目の戦いになる。」

「どうした急に。」

「高松宮記念は向正面スタートから緩やかに上り坂。コーナーから直線に入るまでは下り坂になる。長い最終直線??純粋な末脚勝負になれば、”スパートを2度掛ける”と言われてるサクラバクシンオーにカレンチャンがどこまでついて行けるかが、勝敗の分かれ目だろう。」

「ですが、今日のカレンさんは絶対好調です。レースに絶対が無いと言われてる以上、アタシはカレンさんの走りを最後まで信じ続けます。」

『ふふっ??それな。』

若者2人と目が合った。あつ、どうもすみません??ウチの子が??。

デジタル。どうしてくれるんだこの空気。子供同士が友達なのにママ友間は初めましてみたいない気まずい空気だぞ。

「デジタル??どちら様?」

「界限では有名なお2人ですよ!なんでもトレセン学園に居るウマ娘ちゃん2人が小さい頃から知り合いの最古参様らしいです!」

「あつ、そうなの。」

礼儀正しくペコリとお辞儀されてしまった。あつ、今後ともウチの愛バをお願いします??ふふっ、可愛いでしょ?この子。ド変態なんです。

まつ、まあ??それはさておき。どうやらバクシンオーの異常は、分かる人には分かる程度に現れているらしい。観客席の声だけでなく、前評判でも『人が変わったような強さ』だの『スプリントの王』だのと話題に困らない現状だ。今彼らが言ったように、”スパートを2度掛ける”と言うのもあながち間違いではない。それほどまでに、今の

王様は異常なのである。

そんな王様に挑むは、勇者御一行が誇るエースプリンターにしてサキユバス——もとい、お兄ちゃんの本操を喰らわんとするカワイイカレンちゃん。バクシンオーに勝ったら『ちっちゃなお願いを教えてあげる♡』と言われてしまった。実質うまぴよい。なんかアレな作品のタイトルみたいだな。

トレーナーとしてはカレンに勝って欲しい。

大人としては教え子とうまぴよいするのは気が引ける。腰も引ける。

つまりは感情が板挟みである。絶対にお兄ちゃんが逃げられない約束の取り付け方しよってからのあの妹は。

「盛り上がってますね。」

「だな。ここまでバクシンオーが勝ち続けてるなら、皆期待もするだろう。」

「まあ??賛否両論はありますけど。」

隣で携帯を見ながら後輩ちゃんがそんな事をボヤいた。

連続勝利を期待する声。たった1人で重賞を荒らし続けている事への懸念。それを黙認し続けるトレーナーへの意見。SNSでもチラホラとそんな議論が飛び交っている程には世間様も賑わっているらしい。

1番キツイのは、分かった上で何も出来ないと感じているバクシンオーのトレーナーだと言うのに。

「それにしても悪いな。こんな風にライスと応援しに来てくれるなんてさ。」

「良いですよ、別に。一応アタシらも面倒見たんで。」

「カレンちゃん??大丈夫、かな??。」

「大丈夫だよ。なんたってう——。」

「う?。」

「ウマ娘だからな。」

「えっ?う、うん??うん?」

あつぶねえ、うまぴよいって言うところだった。ライスはお淑やかではあるが、ブルボンよりも中身お姉さんな部分を感じるから伝わってしまうかもしれない。見ておきなさいライス。あれがうまぴよいに全てを捧げた覚悟ガンギマリ乙女の姿だぞ。そしてここに居るのがすっぴんわっしよいを約束されたお兄ちゃんである。

しかしやはりと言ってはなんだが??ことある事に隣や後ろに出没していたブルボンが来ていないのは何とも言えん。そ、そんなにこの間の件について怒っているのだろうか??いや怒るよなあ??。

「後輩ちゃん??ブルボンさんは??。」

「何ですかその敬語。ライスさんの肩に居るじゃないすか。」

「ギンシヤリじゃねえよ。」

「冗談です。あの子なら、”カレンさんは負けないから大丈夫”って言ってましたね。今日は学園で練習するそうです。」

「そっ、そう??じゃあ後輩ちゃんの担当は?俺もデジタルもまだ知らないんだけど、来てない?」

「あー??本人は来る気満々でしたよ。お前デートすんのかってぐらいバッチリおめかしまでして気張ってました。ただ??。」

「ただ???」

後輩ちゃんは1度俺の方を見た後、再び携帯に視線を落としながら言った。

「勇者御一行とレース見るって言ったら、泡吹いてぶっ倒れましたね。」

「冗談言うのはこの口か?」

「までいっふマジっす。」

「そんなデジタルの亜種が何人もいてたまるか。」

「トレーナーさん、アタシ泡までは吹いたことないですけど??どうします?。」

「伺いを立てるんじゃない。どうするも何もN.Oだよ。」

相変わらず腕定位置の中で耳をぴよこぴよこさせおつてからにこの美少女が?? お前今でもたまに白目剥いてんのに泡まで吹いて気絶したら、いよいよただの失神だぞ。結局お前の不満が何なのかも、今許して貰えてるのかもこっちは分からないんだ。あまり変なボケ方するんじゃないよ。

『ほら。』と、俺に頬をつねられながらも後輩ちゃんが携帯で見せてきた写真には確かに布団で寝ているウマ娘だろう少女が居た。辛うじて髪は見え??どうだコレ。芦毛か?そもそもなんで顔に新聞紙掛けられてるんだよ。扱い雑つ。

「気付いたら来るんじゃないすか。知らんけど。」

「随分お前さんにしては??その??。」

「良いですよ。雑にしてんのは分かってるんで。他人のパソコンから学生時代の写真引つ張り出してきて勝手に壁紙にする子なんすよ。それ見てこっちの反応楽しむんです。あの野郎。」

「口わつる。」

「まあ??仲良くやってますから。目標も一致してますし。」

「ふうん??まっ、後輩ちゃんと言うなら間違いないだろう。目標が何なのかは分からないけどさ。」

彼女は、再び俺を一瞥した。

「そんな事より始まりますよ。」

「おう??いつになっても、”頑張れ”ってしか言ってやれないのは辛いもんだよな。キツイのは分かりきってんのに。」

「それでも言わなきゃつすよ。トレーナーアタシに出来る事は、それが本当に最後なんですから。」

「??そうだなあ?。」

デジタルが、少しだけ強く俺の手を握った。  
ウマ娘達がゲートに入り、観客は息を潜める。

電撃6ハロンの戦い??サクラバクシンオー対カレンチャンの決戦が始まった。



『カレン、大事な話がある。』

レース前の控え室で、お兄ちゃんは真剣な顔をして言った。

『スプリンターズSの後、デジタルと2人で話をしたんだ。”領域に踏み込んだサクラバクシンオー”について。』

『うん。』

『そもそも”領域”なんてデタラメなもんは、誰でも踏み込めるわけじゃない。だから前例が少ないんだが??少なくとも、俺達は大まかに2通りのパターンがあると思ってる。1つはデジタルやシンボリルドルフのパターン。他のウマ娘にプレッシャーと恐怖心を抱かせて、限界以上の末脚で何もかも差し切る方法だ。』

『じゃあバクシンオーさんは??もう1つの方だね。』

お兄ちゃんはゆっくり頷く。

『そのもう1つって言うのは、そもそも周りなんか何も見ちゃいな  
いってパターン。』

『えっ?でも?。』

『ああそうだ。スプリンターズSの時、カレンは誘い出されたって  
思ったんだよな?けど??実際は、そう思わされたんだ。アイツは何も  
見ちゃいない。自分のしたい事、自分のレースを、自分だけの世界で

最善最短を突き進んでいるだけだ。あの時引つ張られるなど言ったのは、バクシンオーの出方を見すぎるなど言う意味なんだよ。”領域”を完全には物にしていないバクシンオーと競うには、それが何よりも大切な事だと思ってる。』

『バクシンオーさんが物に出来てない??あれで、かな?』

『あれで、だよ。信じられないかもしれないけどな。あのパターンを完全に物にしたウマ娘を見てきたから、俺には分かるよ。だからアイツは??。』

『??お兄ちゃん?』

お兄ちゃんは目を伏せた。

何を考えているのかは分からない。どうしてそんなに辛そうなのかわからない。口を開いたお兄ちゃんの声は、少し——ほんの少しだけ、震えていた。

『——無敗の怪物、”マルゼンスキー”。』

生涯戦績無敗。

誰よりも早くて、誰よりも強いウマ娘。トレセン学園の中でも、あの人の事を知らない人は居なかった。

絶対なる皇帝シンボリルドルフが影を踏めなかった。

常識破りの走りミスターシービーでも追いつけなかった。

魔性の青鹿毛メジロラモーヌですらも、ただ見蕩れていた。

『そんな芸当に近付いているという事は、もう相手は普通じゃない。それでも??俺は信じてるよ、カレン。』

『??うん。』

『もう一度言う。バクシンオーに意識を向けるんじゃない。自分の道を見失わない事を重要視してくれ。俺に夢と一緒に見させて欲しい。そうしたら、お前さんは誰よりも強く駆け抜けられる。”絶対”に大丈夫だ。頑張れ、カレンチャン!!』



『??分かった。行ってくるね、お兄ちゃん!』

第3コーナー手前。上り坂はそんなに急なものじゃないから、場所取りさえ間違えなかったら余計な体力を消耗させなくても良いはず。カレンは空いてる内側にポジション取り。バクシンオーさんはカレンの1馬身前、少し外側。この間は逃げてたバクシンオーさんだけでなく、今日は前目に出るみたい。確かに逃げより先行策をとった時の方が、この人の勝ち方としては安定していた気もするけど??それが意味するのは、この間とは違うって事なんだ。

本気で来てる。

まだ何も始まってない、何もされてないのに、身体が奥の方からビリビリする。バクシンオーさんに近づけば近づくほど、自分の考えがこの人に筒抜けなんじゃないかって思っちゃう。

スプリンターズSで走った時よりずっと強い。今相手をしてるのは??。

ダメ。ダメだよ、カレン。意識はあくまでも自分に向けてなくちゃ。あの人は自分のレースをしているだけ。それならカレンも自分のレースに集中するの。

『さあ第3コーナー回って先頭はナビゲートライト!続いてアーリースプラウトが2番手につき、1番人気サクラバクシンオー外から僅かに進出か!それに続いてカレンチャンも徐々に上がってくる!』

最高時速60kmかそれ以上のウマ娘。外側を走れば走るほどかなりの遠心力が掛かってくる筈なのに、この人は無抵抗っていう感じで走り続けている。誰も居ない道を突き進んでいる。

どうしよう??予想以上に、この人の速度が落ちない??ッ。本番になるまでどんな展開になるか分からないって思っただけだけれど、ここまでだなんて正直キツイ、かも。

『ここで2番手入れ替わりますバクシンオー、サクラバクシンオー外からぐーんと上がってくる！1馬身後方カレンチャンも追いかけるが苦しいか!? さあ最終直線！サクラバクシンオーがここでスパート！速度を上げていきます!!』

スパート???

違う。これがスパートなんて、そんなわけない?? まだ桜の花弁は舞っていない。

分かってきたよ。お兄ちゃんが言ってた、自分のしたい事を最善最短でやるって意味。

『サクラバクシンオーがまだ速度を落とさない！先頭が入れ替わってサクラバクシンオーの独壇場!』

この人はただ避けただけなんだ。自分の通り道に他の子が居たから。そうして目の前に誰も居なくなったら——王様は、ようやく誰も彼もを引き連れて凱旋する。

まだ先がある。

桜の花弁は見えない。けれど、今のバクシンオーさんは前より全然速い。なら?? カレンの知らない、真正正銘最後のスパートがある。

怖い?? 止められる気がしない。抜ける気がしない。追いつける姿が想像出来ない。

どこで仕掛けるべき?? スプリンターズSの事を考えると、きつと0.2秒でも遅れればもう取り返せない。どれだけこの人に迫ったところで、ゴール板を抜けるその一瞬に抜け出す事なんて出来ないっ。

一瞬のチャンスを逃したら??!

「うっ、ぐう?? ツー!」

「???'」

追いつけない??届かない??!ここじゃ、ない??!バクシンオーさんならどこで仕掛けるか考えなくちゃ??っ、ダメ!!またバクシンオーさんに引っ張られてる!カレンはカレンの道を??でも??っ、これ以上は??!!

—力を抜いて。

「えっ??」

—指を伸ばして、重心を下げる。気持ちを足に乗せるの。

あの子の声。

身体が勝手に動いていく。1度もやった事のないそれはあの子の??心の底から楽しそうに走っていた、カレンの王様ユメの走り方。

—聴いて。あの人の息遣いを。足音を。心を。

先に行くバクシンオーさんの目元に舞う花弁。けれどスパートはまだ。何もかも足りないあれは??見せラフかけ。我慢して。粘って。最後の最後まで。

—駆け巡る血潮を。滾り続ける貴女の本能を。スピードに全部全部乗せて。追い風は、いつだって貴女の為に吹いているから。

??うん。ここからなんだ。

呼吸を整えて、溜め込んだ脚を爆発させる??バクシンオーさんのスパートに合わせて??ッ!

「今あッ!」

—今アッ!

「っ。」

『なんとここでサクラバクシンオーとカレンちゃんの同時スタート！200mを切って残り僅かになりましたカレンちゃん！サクラバクシンオーも逃げる逃げるッ！差を詰めさせない！』

まだ??まだっ、届かない??!!

こんなに全力を出しても、あの子と一緒にでも追いつけない！

こんなに力を振り絞っても、まだバクシンオーさんはカレンを見てくれない！

あっはは??やっぱり?凄いな。こんなに差があるなんて、思ってたなかった。最初から、カレンだけじゃどう頑張っても勝てないって分かるよ。

驀進——ただどこまでも、前に進み続ける王様。けれどその先にあるのが、”私を忘れないで”なんていう言葉なら。認めない。カレンは、そんなの絶対に認めない。

「カレンちゃん!!」

「カレンさんッ!!そこっす!ぶち抜けッ!!」

「あと少しですからあッ!踏ん張って下さいいいッ!!」

ライスお姉ちゃんに後輩さん。

デジタルちゃん。

それから。

「夢中にさせてやれエッ!カレンッ!!」

お兄ちゃん。

兄さん。

カナロアちゃん。

皆一緒に居てくれる。ずっとカレンのことを応援してくれている。

ねえ、王様??一人で走るの、苦しいですから。

——孤独にユメを追い求めるのは、辛いから。

一緒に走りませんか。

——この自由な世界ターフを。

今日、ここにいる全員に??とびつきりカワイイカレン達を見てもらいましょう。

誰もが夢見たレースを。

カレン達が”ユメ”見たレースを、見せてあげましょう?

カレン私はここに居居ます。

だから王様??いい加減に??ッ!

「カレン私を見てッ!バクシン進オーさん!!」

一瞬だった。

穏やかな眼で、あの人がこっちを向いた。終わりを決めた怖い眼じゃない??きつと、ほんの少しだけ残ったバクシンオーさんの意思なんだ。

声は聴こえなかった。けれど、確かに口が動いたの。桜吹雪が舞う中で。

——共に。

走っているのに、そんな事知らないって言うみたい??あの人は息をめいっばい吸い込んで——来たっ!!

「バックシイイイイインッ!!!」

「まだまだまだアツ!!!」

研ぎ澄まされた感覚が色んな声を拾う。湧き上がるお客さんの声。

必死に叫んでくれるお兄ちゃん達の声。笑うバクシンオーさんの声。釣られたカレンの声。激しさを秘めたあの子の声。

自分自身が熱くなっているのを感じる。心臓が破けそうなくらい速く脈打ってる。

限界??ううん、そんなの必要ない。全部全部出し切る。倒れても良い。今だけはこの熱に抗わない。歯を食いしばって。脚を前に出して。腕をもつと振って。もつと、もつと振り続けて!

この場に居る誰よりも強く、駆け抜きたい。1番先で笑いたい。立っていたい。ゴール板を抜ける一瞬で良いの。この人よりも先へ。

閃光——その輝きよりもはやく、早く、速くツ!!

『カレンチャンの猛追!恐ろしい脚で上がってくる!!サクラバクシンオー逃げ切れるか苦しいか!横並びで今、ゴールツ!!僅かにカレンチャン先頭!1着はカレンチャンですツ!!』

——観客席の大歓声が遠く聴こえる。何もかも出し切ったんだもん??もう、倒れてしまいたかった。けれどそれ以上に、隣に居た王様は精神も体力もすり減らしていた。速度を落として、ふらつくその身体を何とか支えて、一緒に座りこむ。虚ろな目は、それでもカレンに合わせようとしてくれていた。

「???私は何?負けた、ん?ですよね??。」

「はい??カレン達の勝ちです。」

「そう?ですか??。」

それ以上何も言わずに、バクシンオーさんはただ俯いた。顔を両手で覆って、不規則に頬を伝う雫が溢れて芝を濡らしていく。

それは——何の雫??なんだろう。

悔しさ。重圧。自由。意思。何もかもひっくるめて、バクシンオーさんの身体から”ユメ”が流れ落ちていくようにも見えた。きつとこのまま、王様も居なくなってしまうのかもしれない。そうすれば??

皆大好きなバクシンオーさんもきつと戻ってくると思う——けど。

「サクラバクシンオーさん。」

何もしないなんて、カワイくない。カレンらしくないよ。だってカレンの夢は、”宇宙一カワイイ私”だもん。カレンのカワイさに夢中になって、見てくれて、幸せになってくれなきゃダメ。何もかも諦めちゃって居なくなるなんて??そんなのはカレンが許しませんっ。

「今は??ゆつくり休みませんか?お休み??そう、少しだけ眠っちゃうんです。また今度、貴方が本気で走れるその日まで。」

「??その日は、来るんでしょうか?。」

「約束します。いつか??いつか必ず、貴方に会いに行く子がいますから。カレンなんかとは比べ物にならないほど速い子が。だからその未来までは——バクシンオーさんを、戻してあげて下さい。見守ってあげて下さい。」

「??私は。」

ふと、カレン達に被さるように影が伸びた。後ろを向くと、そこに居たのはバクシンオーさんのトレーナーさん。震える手で、今にも泣きそうな顔で??そうして、力強くバクシンオーさんを抱きしめた。

「バカチン。」

「トレーナーさん???」

「バカチン??バカチン!こんなになるまで1人で突っ走って!バクシンするなら私も一緒だって言ったでしょ!?!夢を見てるのは貴方1人じゃないの!怪我したら??貴方が戻って来なかったら、元も子も無いのに??!」

「??何故でしょうか。こうしてもらうのも、何だか久しぶりな感じがします。」

「久しぶりなんだよ??お帰りなさい。カツコよかったよ、バクシン

オー。」

うん。きつともう大丈夫。確証は無いけれど、”絶対”大丈夫だって??分かる。あの子の声も聴こえない。全部終わったんだ??と、思う。

「カレン!!」

お兄ちゃんが呼んでる。観客席で、沢山の人が見てくれている。今日のカレン、カワイかったかな?夢を見てくれたかな??  
戻らなきや。

「あれっ???」

目眩がする。真っ直ぐ歩けない。  
戻らなきや。

頭がボーつとして??手が震えて??。

戻らなきや。

戻らなきや。

もどらなきや。

1歩踏み出した足は力なんて入らなくて、もう倒れるので精一杯だった。

??痛いかな。怪我??しちやうかな。

そしたら??お兄ちゃんは、泣いちやうかな??。

でも、いつまで経っても衝撃は無かった。痛みも無かった。

ボンヤリする頭でゆっくり目を開けば、優しい顔がカレンを見下ろしている。霞む視界の中でも、確かにその人は力強く笑っている。

「確かに??約束しました。」

「バクシンオー?さん???」



「新時代の王と、今この場にいる新しいスプリンターの覇者にはなむけの言葉を——楽しかったですよ。いつか、ターフの上でお会いしましょうね。」

大好きな春の温もりの中で、カレンはゆっくりと瞼をとじた。  
??お休みなさい??私の王様。

——お休みなさい。カレンチャン。

最終R : # Look at Curren.

「お兄ちゃん♪」

『お誕生日おめでとうーッ！』

トレーナー室にクラツカーの音が響き渡った。テーブルの上には、彩豊かな食事に『三十路』と書かれたケーキ。そして何よりも目を引く春野菜のサグラダ・ファミリアが鎮座している。完成してたんだな?? デツカ??。

高松宮記念は大盛況と困惑の内に幕を閉じた。

カレンがレース後直ぐに意識を失ったり、それを運んで来てくれたバクシンオーが『次は天皇賞・春でお会いしましょう！ハツハツハツハー!!』と高笑いしながら気絶したりと、最後まで慌ただしかったが?? まあ良い思い出だろう。因みにバクシンオーは倒れ込んだカレンを支える際に脚を軽くグネったように、トレーナーからは追加のバカチンをお叱りを受けたそう。ありがとう、バカチンオー。南無三。

さて。そんなスプリンター達の祭典が終わった翌日、カレンちゃんのお疲れ様会を予定していた筈だが?? 実はそれこそがカレン考案のドッキリだったらしい。本当は皆で俺の誕生日会をしてくれる手筈だったのかなんとか。ふふつ、この歳になってきやびきやび(死語)した教え子達に祝って貰えるとは?? 会場準備の8割を自分でやったんだけどな。

三十路を迎えたお兄ちゃんは、2人の新人ちゃんが持ってきてくれたドレスコードで完全パーティー仕様お兄ちゃんである。お馴染み三角帽子と『アンタが主役』タスキ、それから紐を引くと瞼が閉じるすごく面白い眼鏡。

これいる? トレーナーさんバカ浮かれてるおじさんみたいな構図じゃない??

僅かに戸惑っていると、パシヤリとカメラの音がした。

「ん?? カレンか?」

「そうだよ。お兄ちゃんのお誕生日だもん、フォロワーの皆もお祝いしてくれるかなって♪」

えっ、バカみたいなおじさん300万人に晒されるの？

カレンがそう言うてからものの10秒だろうか。

ポケットの中で携帯のバイブがエライ事になっている。ウっ、ウマスタの通知が止まらない。俺の携帯という事は??DM??まじ？

元々SNSはあまりやっていなかったのだが、折角カレンのトレーナーにもなったという事でウマスタを入れたのが随分と前の事である。今ではカレンのおかげもあり、フォロワー60万人程のお兄ちゃん。トレセンに在籍しているトレーナーの中で1番フォロワーが多いと自負できるわ。投稿したのはカレンのレースだったり練習風景だったり??後はおやつに食べてた芋けんぴ。

すごく面白い眼鏡を外して携帯を見てみると、沢山のお兄ちゃんおめでどうコメントに混じって謎のワードも幾つかあった。その際たるコメントが、”うp乙”である。お兄ちゃん若者言葉とかネットスラングに弱いんだ。今デジタルに教えて貰ってる最中??何だ”うp乙”って。何をどう略したらそうなるんだよ。

こっそり相棒に聞いてもいいが、今は新人ちゃん達と盛り上がっている最中。マヤはボーンと話しているし、いつの間にか隣に座ってるカレンは何の笑顔が分からんがニッコニコ。俺の知識欲を満たす為だけに彼女達のカワイイ空間をぶち壊してはならない。つまり自分の頭で考えるしかないのだ。流行の最先端に行くウマスタグラマー??更にその先陣を突き進むカワイイCurren。そんな彼女のトレーナーが、若者言葉1つ理解出来ない時代遅れ行き遅れの情弱クソザコナメクジおじさんであってはならない。お兄ちゃんの矜持がそれを許さん。

考える??恐らくは、”うp”と”乙”の付く何かだ。昔デジタルに教わった事がある。”乙”と言う一言だけでお疲れ様の意味を兼ねているんですよ。普通に考えたらそちらの意味合いが強いのだろうが、ここはカレンチャン。閃光乙女の異名を持つウマ娘ならば、”

乙女”の略もあるのではないか？そして問題の”うp”なんだよコレ。マジで分からねえ。誰だこんな言葉作った奴は。うぱ、うぴ、うぷ、うぺ、うぽ？うび？

ハッ!!

『x・+y||うp×うp+乙||う<sup>うびうびはにー</sup>pうp乙女』win Q. E. D.

俺の愛バがツ!!!

そういう事か!?皆おめでとうって言いながら、実はただうまびよいを見たがってるだけなのか!?60万のド変態共が??ッ!ダメに決まってるだろツ!!

「お兄ちゃん?すごい汗だけど??どうしたの?」

「いや??その??。」

「あつ、そう言えば??お兄ちゃんのうまびよいが見たいって感想、結構来てたんだよね。」

「そつ、そうなのか??」

先越された!知ってるよ、だっていっぱい来てるもんなツ!!でも別に全部に答える必要は無いってお兄ちゃん思うぞ!?確かにお前さんは伝説級のインフルエンサーだが、この峠越えたら伝説級の裏垢配信者になるんだからちよつと冷静になれ!!

少しだけカレンが寄ってきた。

指と指が触れ合うか触れ合わないかのギリギリを攻めた童貞を殺す動きである。これをされると童貞には最早為す術が無い。触れたら最後、『お兄ちゃんどうしたの?』びよいする?♡』となるし、触れなければ『お兄ちゃんどうしたの?』びよいしよ?♡』となるのは目に見えている。正しい対処法を随時募集中です。知恵袋、頼む。

そんなカレンは、周りに聞こえないように耳元で小さく囁いた。

「今??やっっちゃおつか♡」

ヌツ!!今やるの!?!お兄ちゃん別にそのプレゼントは求めてねえつて!!脂汗で察してくれよ!『春だから卒業式も♡』って安直な事しなくて良いんだぞ!?

「し、しかしな??あつ、ほら!結構音もするだろうし!」

ストレートに最低である。反省。

「隣の保健室が防音なの、カレン知ってるよ?」

おごオツ!!逃げられねえ!!ちよつと小突いたらボディーブローで返してくるのやめろ!今軽く反省しようとしてただろうが!!大体何で防音だつて知ってんだ!!

カレンの距離感が完全にうまびよい1歩手前のそれである。お兄ちゃん担当の事なら何だつて知ってるんだ詳しいんだ。デ、デジタル??マヤ?ボーノ??誰かこのハートに火が点いたインフルエンサーを止めてくれツ??。

「ファンの人達に知ってもらうなら??動画かなー?」

「ど、動画で。」

「やっぱり生が良いよね。」

「生ツ!」

「あつ、段取りとかは任せてね。撮影は毎日やってるから心配しなくていいよ♪」

「撮影を毎日ツ?!?!」

とんだドスケベサキユバスじゃねえかツ!!怖いもんなしかお前は!?!俺どえらいもんと一緒に過ごしてたんだな!?!本気絞りモードになった途端どうした!?!

か、怪物??これが芦毛の怪物ツ!!毎日生で動画プレイって童貞には

想像つかねえよ？レベルが異次元すぎんだろ??お兄ちゃん何されるんだ??お前は朝から晩まですっぴんわっしょいぐらの感覚かもしれんがなあ??ツ、こっちは1ぴよいだつて無いんだよ！ワールドワイドにお兄ちゃんの醜態を晒そうとすな!!

おかしい??デジタルから預かった勇者手帳にはそんなハレンちゃんな真実は書いて無かった筈。アイツなんだかんだ常識人だもんな。匂いとか足音でウマ娘判別出来るぐらいには変態だけど、その辺はしっかりしてる。

「じゃあデジタルちゃんも呼んでくるね。」

「エツ?」

「3人の方が見栄え良いでしょ?それに??カレンが個人的に見たいだけっていうのもあるから♪」

3人がノーマルと言いたいのかお前は!?アブノーマルだよ!した事ないけど多分普通じゃないよそれ!よりによつて常識的な変態を呼ぶんじゃない!何だ個人的に見たいって!いい、嫌だ??長年連れ添った相棒に情けないとこ見られたくない?デジタルだけは待ってくれよ??いや、もう情けないところクソほど見られてたわ。

そしてお前だよポニーちゃん。何さつきからちよつと元気になろうとしてるんだ。お前にそんな根性とスタミナがあるわけないだろう。張り切るんじゃない。寝ろ。

「と言うわけで??行い?」

「??はい。」

「あつ。」

何やらカレンが立ち止まった。何だと言うんだ??まだ何かあるのか。お兄ちゃんバカみたいなパーティーグッズつけてこれからうまぴよいする覚悟決めなくちゃならないんだぞ??。すぐく面白い眼鏡でもつけなければ気が動転してしまいそうだ。うくん?眠くなつて

きちゃった??。

「随分楽しそうな眼鏡を付けていらっしやいますね。」

キュツと心臓が縮まった。ついでにポニーちゃんも萎縮した。

ヤバイ、冷や汗が背中と脇を湿らせていく。

僅かに高い、落ち着いた女性の声。これは後輩ちゃんでは無い。あの意味トレセン学園内で最も目を付けられてはならない、俺達トレーナーのトップの声だ。

恐る恐るメガネを外すと、目の前に居たのは小柄なボブカットの女性。キツチリとスーツに身を包み、後輩ちゃんとは対称的な穏やかな目元??の割に2歳下の彼女から発せられるオーラは最早ベテランですらない威圧感を孕んでいる。

「??お疲れ様です、ヨシエさん。」

「はい、お疲れ様です。誕生日会ですか。」

「はい??。」

彼女の名はヨシエさん。

皇帝シンボリルドルフのトレーナーであり、同時にトウカイテイオーとキタサンブラック（仮入部）の面倒も見ている素性が分からない女性だ。トレーナー室を持たず、基本的には生徒会室で作業をし、ウチの子達が”しん??”となる位には恐ろしい人である。

いや度々ウマ娘達や他のトレーナーと笑顔で会話しているのは目撃しているから悪い人とかただの怖い人では無いと思う??のだが、俺には1度も笑いかけてくれたことは無い。俺が何を言ったって言うんだ??。

「ルドルフから言伝です。今回の高松宮記念で面白いレースを見せて貰ったお礼に、要望があれば出来る範囲で取り合おうと。」

じゃあ今すぐこのカワイイ妹のうまぴよいを止めて頂きたい。

「ルドルフ会長も見てくれたんですか？」

「ええ。”ハーバー”、”お友だち”、”勇者御一行”この3つのチームは、今やトレセン学園の中核を担うチームです。生徒会だけでなく、生徒達や世間も注目していますからね。皆さん積極的にメンバー募集をかけてはいないようですが、公の場で募集をかければ希望する生徒は多くいると思いますよ。」

「恐縮ですよ。ルドルフ達生徒会にもヨシエさんにもお世話になっているのに。」

「彼女は好きでやっているところもありますからね。自らの道??突き進むと決めた覇道<sup>ユメ</sup>の為に。カレンさん、本当にお疲れ様でした。」

「ありがとうございます、ヨシエお姉さん♪」

ヨシエさん相手にお姉さん呼び。カレン、お前さん無敵か？

しかし??要望。いざ『何か欲しい物は』と求められると、咄嗟に出てこないのが人間である。メンバーの募集と言っても取り敢えずは返答待ちの3人娘がいるし??あの子ら忘れてんじゃねえかな??。

あつ、そうだ。

「ヨシエさん。それは特別移籍でも可能ということでしょうか？」

「私達に出来る範囲なら可能です。無論、本人の意思が最大限尊重されますが??。」

「構いません。勇者御一行、集合ー！」

そう言ってデジタルの方を向けば、小さく頷いて俺の机にパタパタと走っていった。引き出しから取り出したのは、俺の我儘??もう俺達か。2人の意思が書かれた1枚の用紙だ。

「少しだけ待ってて下さい。すぐに済みます。」



一通りメンバーの顔を見渡し、デジタルが持ってきた紙をテーブルの真ん中に置く。

「これはデジタルとチームを作った時に、いつか叶えたいと思った願いなんだ。今特別移籍という形で要望を聞き入れて貰えるチャンスなら、この機会を活かしたいっていうのが正直な気持ちでな。けれど、もうこのチームは俺達2人のものじゃない。こうして6人になって、取り敢えずは何事も無く成績も残せてるチームだ。だから皆の意見を聞きたい。特に——カレン。」

「え?」

「今回はカレンの頑張りが大きかったからな。この機会はお前さんがくれたものだ。俺としては、カレンの気持ちを尊重してやりたいと思う。」

そういうところしつかりするからな俺は。うむ、出来るお兄ちゃんだ。でもお兄ちゃんの貞操が欲しいとかはNGだぞ。それはヨシエさん達の管轄外だから自分で勝ち取ってくれ。

いや与えねーよ。いかん、頭の中でうまぴよい伝説がイントロを奏で始めている。お黙り。

「??お兄ちゃん。カレン、ずっと思ってたんだ。」

優しい笑みを浮かべながら、カレンは俺の机からボールペンを持ってきた。

「お兄ちゃんもデジタルちゃんも、凄くカレン達のことを考えて色々助けてくれる。でも2人の悩みとか考えは、いつも2人だけで解決しちゃうでしょ? だから??もっと頼って欲しいなって感じてた。それは皆同じなの。」

カレンの言葉に釣られて周りを見渡せば、ボーノが、マヤが、新人

ちゃん達が??笑って頷いている。同じ気持ちと言うのは本当らしい。確かにあまり頼りはしなかった気もするけど??いや頼ってねえな。うん。

「だから、今度はカレンが??ううん、カレン達が2人のお願いを聞く番。この紙にこうしちやいまーす♪」

「あつーじゃあマヤもいっぱい書きちやお!!」

「ポーノなお願い聞いてもらいたいね〜。」

「私も書く??。」

「はいはいー!あたしもー!」

俺とデジタルが目をぱちくりさせている間に、どうしたものか特別移籍願が寄せ書きになってしまった。2人で顔を合わせれば、笑いしか出てこない。いつの間にかこんな頼もしいメンバーになってたんだな。

「??俺らも書くか。改めて。」

「ですね。改めて。」

寄せ書きの一番下に、でかでかと最後の言葉を書いたそれをヨシエさんに渡した。うん、ビックリしてる。これ寄せ書きにしちやったから効果無くなるとかないですよね?

「本当に良いんですか?彼女は??。」

「知ってます。だからこそ、今なんです。」

「私とルドルフでも届かなかった怪物に、首輪を付けられると??。」

「怪物??確かにそうですね。でも俺の知っている彼女は、いつだって楽しそうでした。だから世間からも、スーパーカーと呼ばれていた筈なんですよ。それなら帰る家が必要だと思っうんです。勇者御一行が、彼女の家になります。俺とアグネスデジタルの2人で、怪物の悪い夢にトドメを刺します。」

ヨシエさんは僅かな逡巡の後、踵を返した。心做しか肩の荷がおりたようにふつと息を吐くと、続けて言う。

「ルドルフなら??きつと笑ってくれるでしょう。特別移籍願、”マルゼンスキー”。確かに承りました。」

「そう言つて部屋を後にする。」

ほえく??やたらと緊張した。だがこれで準備は全て整えたんだ。ウチのチームの結束力も再確認出来たし、万々歳である。これからどうなるかは分からない。だが、俺たちはやれる事をやるだけ――。

「じゃあ、隣行こっか♡」

台無しだよツ!!

今終わつたらろ!?!お兄ちゃん頭の中でエンディング迎えようとしてただろうがツ!!!どんだけうまびよいに掛けてんだお前は!!

い、いかん、とうとうデジタルもカレンに手を引かれてしまった。逃げ場などどこにも存在しない、春のこの頃。親父、母さん??貴方達のポニーちゃんは、今宵満開の栗の花を咲かせてみせましょう。

やってきた保健室<sup>教</sup>。隣の部屋の可愛い声達が何一つ聞こえないという、あまりにもパーフェクトな防音性能。うーむ、流石やよいちゃん。ありがとうございます。しんとした室内で、カレンが携帯をセツティングする音だけがする。

デッ、デジタル?どう思う??今なら逃げられると思うか?

あつ、目を逸らされた。なんで?

さつきまで普通だったじゃん??なんなら今だって、別に不満とかはないですけどく、みたいな雰囲気出してるじゃん??いや不満無いのもマズいな。ん?不満があった方が良いのか?それはそれでおかしな事にならないか?あつダメだ動揺し過ぎてワケわからん事になってきた。

取り敢えずデジタル??尻尾を足に巻きつけるのどうにかしないか?

「あつ、ごめんなさい！カレン、ちよつと隣に忘れ物してきちやっただから取ってきまゝす♪」

「おう。」

なんならそのままゆつくりしてきて良いぞ。切実に。

『???』

???何、この空気。えつ、デジタルさん?やたらと大人しいけどどうしたのよ。お前普段はこう?なんかあるだろ?尻尾巻き付けるとかじゃなくて、オタク同士のわかりみが深いな??そう、新刊の話とか推しカプの話とかさ。今までされた事ない距離感の詰め方されてこつちも変に困惑してるんだぞお前。

これじゃあいざカレンから逃走する時に逃げられ??はっ!!お前、もしかしてカレンに攻略されてるのか!?カレンが忘れ物を取りに行つたこの間に俺が逃げないように2人で話を合わせて??いやいや、流石に考えすぎだろう。なんたって俺のデジタル、言わば半身だ。余計な心配はするまいて。

「あの??トレーナーさん。」

「どうした?」

「トレーナーさんに??そう言えば、まだプレゼント渡して無かったなあと思うんです。アタシ。」

「お、おう??いや、別に気にしなくても——。」

すごく面白い眼鏡の紐がグツと引っ張られる。数値化するならパワー1200位から繰り出される圧倒的ロリパワーに首を持っていかれ——。

近付いたアグネスデジタルの気配が、頬に触れた。

足に巻きついてた尻尾が離れていく。

眼鏡を投げ捨てて愛バを見やれば、手の甲で口元を隠しながら目を泳がせていた。

「カツ?!かかかカレンさんが、ですね???その、プ、プレゼントならこれが一番だと?仰いまして??その!!おつ、推しの案件なら?聞くのが??ウマ娘ちゃん好きのオタクとしては!やるべき対応と言いますか!!あつ、あの?その??ちよ、ちよつとだけ、失礼します??。」

最後の最後によく目を合わせたデジタルは、そのままそくさと部屋を後にした。

ははあん????さては萌え殺す気か?

ビツクリしたわあ??何よ、急に可愛くなるじゃん。いやウチの愛バ元から可愛いわ。変態なのにああいうとこ初心<sup>うぶ</sup>ちゃんなのは実に微笑ましい。後でお返ししてやろうか??ふふつ。

教え子に頬チューしたら完全に事案やろがい。

いかん、冷静になれ。幾らこちらがキョン死しそうになつたからと言って、大人の一線を踏み越えてはならない。俺は出来る大人だろう。そうだ、別にやましい事は——なんで扉ちよつと空いてんの?なあ??カレン?

「あはっ♡」

「??ははっ。」

「プレゼント、貰えた?」

「お、おう??貰えたよ?」

「そっかあ??じゃ、撮影終了♪」

はっ?

部屋に入るなり、カレンは置きっぱなしだった携帯のカメラを切った。撮影だと？撮影??撮影っ?!?!?

おあああああああアツ!!全部撮られてたツ!見られてたツ!弱味握られたアツ!!

おまつ、お前、まさか??全部分かってこの段取り仕組んだのか!?天才か!?デジタルが言ってたカレン案件ってこういう事かよ!!ハナっから撮る気満々だったんだなツ!!なんでデジタルもそっち側なんだよ!!

うまぴよいの為にお兄ちゃんの弱味握るのはやりすぎだろ!?言っちゃなんだけど、あと一押しくらいされたらお兄ちゃん完全に分からされてたんだから正攻法で来いよ!

やはり??童貞がカレンチャンを相手にするのは間違っていた?早すぎたんだ??。いや、童貞かどうかなど最早関係無い。カレンチャンというウマ娘が予想以上だったのだ。頭の回転の速さ、一挙手一投足、距離感、彩フレグランス??全てにおいて、まさに小悪魔ガール。何年経っても勝てる未来が見えねえ??。

「じゃ、隣戻ろっか♪」

「え?う、うまぴよいは???」

「??したいの?♡」

墓穴ツ!!もう何やっても自滅すんだから喋るな俺ツ!!

しかし可愛いカレンチャン、相変わらずの色気である。ヌツ、本当に中等部か?

「いや、忘れてくれ??そう言えば、結局カレンのお願いって何だったんだ?」

「んく??なんだと思う?」

こちらを振り向いたカレンは、どこか切なそうな表情を浮かべ、俺の口元に人差し指を当てた。

「お兄ちゃんに知って欲しいから、やっぱり??なーいしよ♪」

ポニーちゃんがギブアップ宣言を告げた瞬間であった??後でお前のオフショットに#Look at Current付けてやるからな。

【ウマ娘】 社会的ゲート難共のスレ 【語ろう】

1：名無しのゲート難  
聞いて

2：名無しのゲート難  
うわ

3：名無しのゲート難  
出たわね

4：名無しのゲート難  
まさかとは思ったが??2年ぶりか?

5：名無しのゲート難  
『聞いて』だけで全てを察する有能兄貴達

6：名無しのゲート難  
久しぶりやん。駆逐してやる

7：名無しのゲート難  
元気しとったか?くたばれ

8：名無しのゲート難  
誰だ囚人呼んだの

9：名無しのゲート難  
やだ、数年ぶりなのにこの扱い?最高。よもや実家

10：名無しのゲート難

>>>9



実家に謝れ

11：名無しのゲート難

>>>9

実家に帰れ

12：名無しのゲート難

>>>9

よもやお前の実家修羅場？

13：名無しのゲート難

>>>9

お母さんこんな子に育てた覚えありません

14：名無しのゲート難

良いから聞けって言ってたんだろ。自撮り晒すぞ

15：名無しのゲート難

ええ?? (困惑)

16：名無しのゲート難

自分から晒すのか

17：名無しのゲート難

新手法

18：名無しのゲート難

まま、ええやん。元気そうやし。取り敢えず誰かは予想つくけど、お初もいるから>>>14コテハン頼む。

19：ヨシエ

はい

20：名無しのゲート難  
ひえっ??

21：名無しのゲート難  
知ってた

22：名無しのゲート難  
安定のド変態

23：名無しのゲート難  
通報案件おばさん!?通報案件おばさんじゃないか!!

24：ヨシエ  
好き勝手言いやがってよオ??もつと頼む。正直ノリが懐かしすぎてちよつと上がってる

25：名無しのゲート難  
それは分かる

26：名無しのゲート難  
変態とは言え良い奴だからな??変態だけど

27：名無しのゲート難  
ヨシエさんは有名人なんです?

28：ヨシエ  
スレ民たちのアイドルだツピ☆

29：名無しのゲート難

うわキツ

30：名無しのゲート難

はい原罪

31：名無しのゲート難

生きる罪人

32：名無しのゲート難

ヤベー女

33：名無しのゲート難

なんでトレセンにいるのか分からんレベルの危険人物

34：名無しのゲート難

滅茶苦茶な功績を奇行と思想で台無しにする女

35：名無しのゲート難

悪態つく女

36：名無しのゲート難

ド変態

37：名無しのゲート難

どんな人か分かりました

38：ヨシエ

お前らさあ???とにかく聞いて。ヤベーのよ

39：名無しのゲート難

おまいう定期

40：名無しのゲート難

一応聞いたるわ。何よ？

41：ヨシエ

カレンチャンにヨシエお姉さんって言われた。いきそう。

42：名無しのゲート難

聞いて損したわ時間返せ

43：名無しの乙女

要するにいつも通りじゃねえか

44：名無しのゲート難

流石に芝

45：名無しのゲート難

また発作が始まった??

46：名無しのゲート難

先生！お薬をッ！

47：名無しのゲート難

赤チンでも食ってろ

48：名無しのゲート難

辛辣で草。食っても治らんで。末期なんだから

49：名無しのゲート難

カレンチャン

高松宮

凄かった

50：名無しのゲート難

あれな。バクシン相手にわけわからん鬼スパ決めてたの半端じゃなかったわ

51：名無しのゲート難

生で見ただけでもはや別人やったぞ。走り方から何まで全部違う。少なくともスプリンターズSまでは普通だったわ

52：名無しのゲート難

見てないんだけど動画ある？

53：名無しのゲート難

URAのサイトで直近のレースは見れるぞ

54：名無しのゲート難

見てきたけど予想の3倍エグかった??

55：名無しのゲート難

どっちもゴールしてすぐスタミナ切れ起きてたからギリギリだったんじゃね

56：名無しのゲート難

バクシンオーはここ最近目に見えてヤバかったけど、それについて行ったカレンチャンまじカワイイカレンチャン

57：名無しのゲート難

>>>56

さてはフォローワードなオメー

58：ヨシエ

でね？私の手を取って、『ありがと♡ヨシエお姉さん♡』って

59：名無しのゲート難

ヴおえッ！

60：名無しのゲート難

もしかして今までずっと一人で回想の説明を???

61：名無しのゲート難

怖い話やめろよ

62：名無しのゲート難

闇深けーな??

63：ヨシエ

だって聞いてくれないんだもん

64：名無しのゲート難

てかヨシエ、カレンチャンと同じチームだっけ？移籍したん？

65：名無しのゲート難

寝とつたんでしょ（鼻ホジ

66：名無しのゲート難

やりそう。ヨシエだし

67：名無しのゲート難

ヨシエだもんな

68：ヨシエ

上の3馬鹿は後でトレセンな  
カレンチャンはウチのチームじゃない。勇者御一行。

69：名無しのゲート難  
ファっ!?

70：名無しのゲート難  
また勇者か??

71：名無しのゲート難  
なんか納得した自分が居る

72：名無しのゲート難  
そりやあんな走りするわ。

73：名無しのゲート難  
新参者のワイ、ハーバーとお友だちしか知らんのやが。勇者御一  
行ってそんななん?

74：名無しのゲート難  
芝ダート問わずマイルは負け無し(内2回G1レコード)、ダート1  
900の東海ダービーもレコード

霸王と名将の王朝時代に終止符を打って香港飛んで世界相手にも  
勝って、距離適性外の3000と3600でもなんか知らんが勝つて  
たぞ

75：名無しのゲート難  
はえくすっごい??で、何人の成績なんです?

76：名無しのゲート難  
1人

77：名無しのゲート難

は？

78：名無しのゲート難

芝

79：名無しのゲート難

芝

80：名無しのゲート難

そうなるんだよなあ??

81：名無しのゲート難

他には全部の脚質でG1勝ってる天才とか、遠近感狂わせるちゃん  
ことか居る

82：名無しのゲート難

後半何言ってるか分かんなかったです

83：名無しのゲート難

まあ変態ウマ娘と変態トレーナーを掛け合わせたチームだし??多  
少はね

84：名無しのゲート難

多少???

85：名無しのゲート難

でも勇者御一行って距離感近いよな。正直裏山

86：ヨシエ



あ？

87：名無しのゲート難  
あつ

88：名無しのゲート難  
バカツ！

89：名無しのゲート難  
距離感コンプレックスの夢女が怒るぞ！

90：ヨシエ  
コンプレックスじゃねーし。こっちだってお前??ルナちゃんに??  
手を繋いで貰ったことあるし

91：名無しのゲート難  
勇者御一行は大体懐に収まってるけどな

92：ヨシエ  
詳しく。詳しく説明して呉。私は今冷静さヲかこうとしてぬほる  
んつぶ

93：名無しのゲート難  
ヨシエw

94：名無しのゲート難  
動揺してバグつとるやんw

95：名無しのゲート難  
PCの前でガッタガタしてるんやろな??

96：名無しのゲート難

詳しくも何も聞いてみたら？ルドルフのトレーナーなら皆話してくれるっしょ

97：ヨシエ

聞けたら苦労しないよ??向こうのトレーナー、こっちを見る度にフリーズするんだもん??

98：名無しのゲート難

本能的危機感

99：名無しのゲート難

なんかばら蒔いてんだろ

100：名無しのゲート難

抑えられない変態オーラ

101：名無しのゲート難

おかしいな??1文だけ見たら恋する女の悩みなの??

102：名無しのゲート難

なお現実

103：ヨシエ

いや、ルナちゃんとは現実でも相思相愛だし。結婚するのは確定事項だから。ウマ娘産んでテイオーに妹つくる

104：名無しのゲート難

きっしょ

105：名無しのゲート難

何この??なに？

106：名無しのゲート難

ワイは今何と交信してるんや???

107：名無しのゲート難

SANチエック、どうぞ

108：名無しのゲート難

ヤベエw

109：名無しのゲート難

そういうとこやぞ

110：名無しのゲート難

大丈夫？初見さん引いてない？

111：名無しのゲート難

ごめんなさい??こういう時、何を生やしたらいいか分からないの??

112：ヨシエ

ち○ぽ

113：名無しのゲート難

ヨシエえッ!!!

114：名無しのゲート難

お前w

115：名無しのゲート難

最っ低だな!!w

116：名無しのゲート難

ええ加減にせえよマジでツ!!

117：ヨシエ

だってそう教わったもん!取り敢えず心にち○ぽ生やせって教  
わったもん!

118：名無しのゲート難

信じられるか?シンボリルドルフのトレーナーなんだぜ、これ??

119：名無しのゲート難

お前顔が良くて有能だから許されてる事を自覚しろ

120：名無しのゲート難

悔しいがこのイカレが有能なのはファン感謝祭で証明されたから  
ね??

121：ヨシエ

ふふん、もっと褒めても良いよ?

122：名無しのゲート難

はい腹パン

123：名無しのゲート難

腹パンだな

124：名無しのゲート難

腹パン

125：名無しのゲート難

すぐ調子乗る

126：名無しのゲート難  
腹パンASMRまだー？

127：名無しのゲート難  
顔が良いクソ生意気女に腹パン出来るスレはここですか？

128：ヨシエ  
ゴメンて??お腹壊れる??。

129：名無しのゲート難  
でも実際好き。顔は。

130：名無しのゲート難  
顔は良いよな。

131：名無しのゲート難  
もう顔だけで生きる

132：名無しのゲート難  
それでも僕はハーバーのトレーナーが好きです

133：ヨシエ  
分かる

134：名無しのゲート難  
お前が肯定すんのか

135：名無しのゲート難  
皇帝のトレーナーやし、そらね

136：名無しのゲート難

エや下

137：名無しのゲート難

だからクソみたいなギャグでエアグルーヴのやる気は下がらないとあれほど??

138：ヨシエ

だって美人なのに可愛いちゃんだよ？嫌いにならない理由がない。この間だってちよつとだけお話したもん。

139：名無しのゲート難

やべー女に絡まれるハーバーのトレーナーちゃん可哀想

140：名無しのゲート難

自重してやれよ

141：名無しのゲート難

相手の気持ち考えろ

142：ヨシエ

それを言われる私の気持ちを考えろ。大体1人だから暇してま  
すって言ってたから、先輩として面倒見てるだけだしやましい事は無  
いから

143：名無しのゲート難

ち○ぽ発言のせいで説得力0なんだよなあ??

144：名無しのゲート難

言うほど1人か？ワイトレーナーやけど、大体午前中は勇者御一行

のトレーナーおるぞ。喫煙所の通り道にウチのトレーナー室あるから間違いない。土日以外同じ時間に2人で歩いてる

145：ヨシエ

あ？

146：名無しのゲート難

あつ

147：名無しのゲート難

さつきも見た流れ

148：名無しのゲート難

度々ヨシエが動揺させられてんのほんと芝。もっとやれ

149：名無しのゲート難

つか、このスレにトレーナー居んのかよw

150：名無しのゲート難

ヨシエの立ち位置大丈夫？首飛ばない？

151：名無しのゲート難

>>>150

別に広めるつもりないから大丈夫やで。それはそれ、これはこれ。ヨシエには世話になっとるし

152：名無しのゲート難

土日以外ってつまり??ふーん（察し）

153：ヨシエ

違うね絶対違う。だってあの子煙草吸わないって言ってたもん

154 : 名無しのゲート難

話したい口実だろ察してやれよ

155 : 名無しのゲート難

画像見てたけど、どれもクール系だったのにそんな可愛いところあるんですか

156 : 名無しのゲート難

推します

157 : ヨシエ

で、でもあれでしょ？先輩後輩の間柄でしょ？私だって毎日会話ぐらい出来るし

158 : 名無しのゲート難

ストーカーになるからやめときな？

159 : 名無しのゲート難

訴えられたらまず勝てない

160 : 名無しのゲート難

弁護士要る？要らんよね

161 : ヨシエ

扱い違くない？

162 : 名無しのゲート難

同じになると思うなよ

163 : 名無しのゲート難



行動を省みて、どうぞ

164：名無しのゲート難

ハーバー情報もつと無いんか？

165：名無しのゲート難

あるにはあるけど??

166：ヨシエ

勘弁して下さい

167：名無しのゲート難

じゃあ言うわ。ハーバーのトレーナーだと長いから後輩ちゃんで。

多分トレーナーの半分は知ってるけど、勇者御一行のトレーナーに『後輩ちゃん』って言われた時だけ耳が少し動いてる。気づいてないの当事者達だけじゃないかな

168：名無しのゲート難

は？かわよ

169：名無しのゲート難

マジのやつですやん

170：名無しのゲート難

声拾おうとしてるの小動物

171：名無しのゲート難

後輩ちゃん応援したいわ

172：名無しのゲート難

結構分かりやすく合同練習のデータを纏めてくれるし、ウマ娘第1

のところもあるから見た目で距離置かれてるだけで隠れ人気はある。  
でも目に見えて口数が増えたり雑な扱いしたりするのは勇者御一行  
だけだぞ

173：名無しのゲート難

あかん、ヨシエ完全敗北しとる

174：名無しのゲート難

勝てんな

175：名無しのゲート難

ヨシエ息してるー？

176：名無しのゲート難

ほら。何か言うことは？

177：ヨシエ

クソがツ!!!!

178：名無しのゲート難

悪態つき始めたぞw

179：名無しのゲート難

キレんなw

180：名無しのゲート難

分かってるだろうけど台パンしたら腹パンだぞ

181：ヨシエ

死体に腹パンすんな。オーバーキルじゃボケ

182：名無しのゲート難  
死体（自己申告）

183：名無しのゲート難  
死体に腹パンとか言うパワーワード

184：ヨシエ  
なんでなん???私の欲しいもん全部持つとるやん??私だつてテイ  
オー抱きしめたいしルナちゃんに抱かれないし後輩ちゃんに雑に扱  
われない??

185：名無しのゲート難  
最後お喋りで良いやろがい

186：名無しのゲート難  
泣いてそう

187：名無しのゲート難  
ええやん。もつと喚け

188：名無しのゲート難  
泣かれるとご飯が進む

189：名無しのゲート難  
スレ民たち優しい??優しくない？

190：ヨシエ  
優しくねえよ。目にガラス刺さってんのか

191：名無しのゲート難  
悪態つき始めたからフオローしとくけど、ヨシエも何だかんだで凄

いやつだゾ

192：名無しのゲート難

せやな。米騒動の時にマスコミに啖呵切ったのは正直スカツとした

193：名無しのゲート難

何したんです？（無知晒し）

194：名無しのゲート難

ライスシャワーがブルボン三冠とマックイーン春天三連覇を阻止した時ヒール呼ばわりされてたやん？あれにブチ切れて一際強烈な記事書いてた出版社の代表呼んで学園側の公開インタビュー名目で散々虐め抜いた挙句3日で騒動終わらせたのがこの女

195：名無しのゲート難

ちなみにライスとブルボンをハーバーに移籍させて、ステイヤーとしての結果を残させたのもこの女。後輩ちゃんの指導も相まって流石にマスコミも黙ったわな

196：名無しのゲート難

なんて言ってたっけ

197：名無しのゲート難

要約

・本人達の気持ちも調べないで余計な尾ひれ付けんな

・世間の声を代弁？じゃあその世間様黙らせてやるからそれも記事にしろ

・レースに絶対は無い。勝ち負けしかない世界で八百長望んでんのか？ブルボン三冠の夢、マックイーン春天3連覇への想い、ライスの願いに唾吐いてんのと同じだぞ

・ウマ娘達から走る為の理由も夢も奪うな。アスリートの前に一学生の女の子だろうが。常識的に考えろよ

・守れんなら2度とトレセンの敷居を跨がせんからなクソが  
なお他にもボロクソに言ってもよう

198：名無しのゲート難

サンクス。よく覚えてたな

199：名無しのゲート難

これがさつきまでち○ぽ言つて悪態ついてた女と同じ???

200：名無しのゲート難

スレで性格の帳尻合わせてるんやろな。夢女が現実で暴れないように

201：ヨシエ

私こんなこと言ったん？マスコミに？絶対最後の”クソが”って言つてないだろ。言つたかもしれない

202：名無しのゲート難

しかも一切笑顔崩さず淡々と言い放つたからな。ちよつと薄目を開いてたのが、”殺すぞ”って宣言してるみたいで怖かった

203：名無しのゲート難

なんで本人が忘れてるんだ???

204：名無しのゲート難

こういう奴だししやーない。ただ覚えてると思うぞ

205：名無しのゲート難

いざ持ち上げられると無駄に恥ずかしがるもんな。無駄に

206：ヨシエ

無駄ってなんだ。分かっただけなら控えめにしてくれ。恥ずかしい

207：名無しのゲート難

おかわり？

208：名無しのゲート難

急に照れるやん

209：名無しのゲート難

そっちの性格だけで生きていければね??

210：名無しのゲート難

戦績もあれよね。マルゼンスキーと競うまでシンボリルドルフは無敗。3回骨折をしたトウカイテイオーに1年ぶりのレースでG1取らせて、今はキタサンブラックが重賞連勝中だっけか。G1だってもう何個か取ってるやろ？

211：名無しのゲート難

エツグ

212：名無しのゲート難

マルゼンスキーとルドルフのレースは緊張で死ぬかと思った

213：名無しのゲート難

クビ差やもんな??あの怪物相手に

214：名無しのゲート難

歓声とか忘れてたわ

215：名無しのゲート難

せやね。雰囲気だけで言ったら冗談抜きに殺し合いのそれやった

216：名無しのゲート難

マルゼンスキーが変わったのってそこからか？

217：名無しのゲート難

多分。最近は流してるとってわけじゃないだろうけど、全力さは見えないかな。あんまり楽しくなさそうと言うか??まあそれでもこの間16バ身とかワケわからん事してたが

218：ヨシエ

マルゼンちゃんはそつとしといてあげて

219：名無しのゲート難  
りよ

220：名無しのゲート難

ヨシエがそう言うなら

221：名無しのゲート難

まあ、時間が解決するやろ。

222：名無しのゲート難

スレ民達って何だかんだでヨシエのお願い聞いたりするよね

223：ヨシエ

えっ?だって私だし。聞くでしょ

224：名無しのゲート難

はい腹パン

225：名無しのゲート難  
調子乗んな腹パンすんぞ

226：名無しのゲート難  
1人3発でいい？

227：名無しのゲート難  
こつちが黙ってやってんだよ

228：名無しのゲート難  
感謝しろ

229：名無しのゲート難  
ヨシエさんまた腹パンされてる??自分も良いすか？

230：名無しのゲート難  
トレーナー兄貴、後輩ちゃん情報流したって

231：ヨシエ  
やめろ！このスレがバレたら後輩ちゃんに嫌われる！

232：名無しのゲート難  
でも冷めた眼で幻滅されたら？

233：ヨシエ  
性癖破壊される

234：名無しのゲート難  
それは分かる



235：名無しのゲート難  
寧ろご褒美

236：名無しのゲート難  
ヨシエが強過ぎるから忘れてたけどこのスレ大概変態だったわ

237：ヨシエ  
こんなクソみたいなスレに集まってるクソ共の時点だね？

238：名無しのゲート難  
そのクソみたいなスレ立てたクソ女が何言ってるんだ

239：ヨシエ  
はっ？1人ずつかかって来い。分からせてやんよ

240：名無しのゲート難  
じゃあ北から腹パン

241：名無しのゲート難  
俺左に腹パン

242：名無しのゲート難  
3時方向から腹パン

243：名無しのゲート難  
下界から腹パン

244：ヨシエ

1人ずつって言ったろうが！せめて方向の呼び方ぐらい統一しろ  
！1人どっから殴る気だ！ツッコミきれんわボケエツ！！

245：名無しのゲート難

悪態つきながらツツコミ返すとか出来る女だな。つか、なんでカレンチャンにお姉さん呼びされてんのこのクソ

246：ヨシエ

今クソって言ったか？

勇者御一行に用事あって行ったら誕生日会しててそこで言われたのよ

247：名無しのゲート難

は？トレナーになるとうマ娘達から祝って貰えんの？トレナーなるわ

248：名無しのゲート難

アグネスデジタル、カレンチャン、ヒシアケボノ、マヤノトップガン、期待のホープ2人（ロリ）??成程、続けて

249：名無しのゲート難

あーそれですか。後輩ちゃんが小さい包み持って歩いてたの

250：名無しのゲート難

お？

251：名無しのゲート難

新たな後輩ちゃん情報か？

252：名無しのゲート難

というより予想はつく

253：名無しのゲート難

誕プレやろ

254 : 名無しのゲート難  
誕プレやろなあ??

255 :  
はい違います嘘ですー！私が勇者御一行のところに行った時包みとか無かったしあの子もいませんでしたー!!へーん!!

256 : 名無しのゲート難  
いよいよおかしくなってきたw

257 : 名無しのゲート難  
入れ違いでしょうが察しろ

258 : 名無しのゲート難  
つか、ヨシエが先に話してたから入るの躊躇ってたのでは？

259 : 名無しのゲート難  
外で待ってたらおかわ案件

260 : 名無しのゲート難  
それは天才

261 : 名無しのゲート難  
最高か？

262 : 名無しのゲート難  
アオハルかよ??

263 : 名無しのゲート難  
トレーナーになりたい

264：ヨシエ

なってみろお前ら。私の独断で全員はじいてやるからなクソ共が

265：名無しのゲート難

変態に権力持たせるところなるのか（戦慄）

266：ヨシエ

邪なヤツを入れるわけないだろ！いい加減にしろ！！

267：名無しのゲート難

おまいう

268：名無しのゲート難

おまいう

269：名無しのゲート難

おまいう

270：名無しのゲート難

1番邪な奴が何言ってるんだ腹パンすんぞ

271：名無しのゲート難

お前そういう事言いまくってたのがルドルフにバレて昔ちよつと怒られたの忘れたのか？

272：名無しのゲート難

怒られてないもん。控えめにしてくれろと助かるって言われただけだもん

273：名無しのゲート難

怒られた方がマシ

274：名無しのゲート難

反省して、どうぞ

275：名無しのゲート難

その内ルドルフに腹パンされんじゃね？

276：ヨシエ

何それ孕む

277：名無しのゲート難

ひえっ??絶対真顔で言ってるよ?。

278：名無しのゲート難

夢女が

279：名無しのゲート難

ルナちゃん優しいから手加減するだろうな。ルドルフなら内蔵出そう

280：名無しのゲート難

個人的にはルナちゃんモードよりルドルフモードに期待。ヨシエの口から神威出して欲しい

281：ヨシエ

口から神威ってなんだよ。あと気安くルナちゃん呼びすんなぶち転がすぞ

282：名無しのゲート難

お前次のファン感謝祭覚えとけよ

283 : 名無しのゲート難  
やはり(確信) 腹パン

284 : 名無しのゲート難  
腹パンでウイニングライブしてやるからな

285 : 名無しのゲート難  
響けファンファーレ

286 : 名無しのゲート難  
本能スピードとBLOW my GALEどっちがいいか選べよ

287 : 名無しのゲート難  
どっちもなかなかエグくて芝

288 : 名無しのゲート難  
おまいらの腕どんだけビート刻めんだよ

289 : 名無しのゲート難  
ヨシエに腹パンする日を夢みて1万回正拳突きしてる

290 : 名無しのゲート難  
それな

291 : ヨシエ  
それな、じゃねえよ。もっと時間の使い道あるだろ

292 : 名無しのゲート難  
お前の事が好きなんだよ(だから殴らせろ)

293：名無しのゲート難  
愛情だから（くたばれ）

294：名無しのゲート難  
クソが（クソが）

295：ヨシエ  
暴言じゃねえかクソ共が！ちよつとキユンとしかけた私の純情返しやがれッ！折角次スレ立てるまでの話題提供してやろうと思ったのによ!!

296：名無しのゲート難  
しやーないから聞いたるわ

297：名無しのゲート難  
また賑やかな日々が始まるんですね??

298：名無しのゲート難  
取り敢えず言ってみ？期待はしないが

299：ヨシエ  
ら  
近々アグネスデジタルちゃんとマルゼンちゃんがタイマン張るか

300：名無しのゲート難  
はっ  
?????

## 特別R : 花嫁讃歌

ジュニアブライド。  
June bride。

それは6月に行われる結婚式の別名のようなものであり、世間一般的には『生涯の幸せな結婚生活』という意味もあるらしい。女性達にとっては1つの憧れが有るとか無いとか。

さて??本日勇者御一行がお邪魔しているのは、とある教会である。保健室では無く、マジな方の教会。と言うのも、何と雑誌の特集記事の仕事が舞い込んで来たのだ。

その名も——『ミューズ特集』。

ミューズとは何か??ふふつ、実は俺も詳しく知らない。ビューティードリームカップと言うレース(?)に勝ったウマ娘達を選ばれる、何か特別な称号的なものと相棒は言っていた。選ばれたウマ娘達には、ビューティー何とかさんという人からスペシャルな衣装を進呈されるのだとか。それならウチの子達を選ばれないわけが無いな。なんとってキュートでビューティーなんだから。何故デジタルが居ないのかは謎だが。

勇者御一行からはカレン、マヤ、ポーノ。後輩ちゃんの所からはライスとベロちゃん??もとい、エアグルーヴ。他にも何人かのウマ娘達が居るが、午前の部はウチらの撮影がメインである。

あつ、トレセン内でも唯一抜きん出た精神安定剤のウララちゃんを忘れてはならない。うつらら。

話が逸れてしまった。ビューティードリームカップ??確かに俺はなんだか良く分からないのに、3人娘が出たいと言った時には秒でGoodサインを出してしまった節がある。

カレン曰く、もっとカワイイカレンになりたいと。

お前さん可愛さカンストしてんのにまだ上目指すの?お兄ちゃんそろそろEclipse First決めんぞ。ポニーちゃんの出走準備も整ってんだよ。整うな。寝てろ。



マヤ曰く、もつとキラキラな大人のレディになりたいと。

充分キラキラだよ？いつまでも純粹キラキラ可愛いマヤちゃんて居ておくれ。後はトレーナーちゃんの顔に助走つけて飛び付いて来なかつたらバツチりだから。いよいよ腰いわすわ。

ポーノ曰く、もつと皆でちゃんこになりたいと。

なに？

まあそんなこんなで、現在ミュージズの皆様方は花嫁姿に身を包んで写真撮影中である。因みにウチのオタクも撮影中だ。カメラマン側でな。

「はあ？しゆてき??ウエディングドレスから溢れ出るウマ娘ちゃん達の真っ直ぐな想いや愛がふつふつと滲み出て??デジたんも頭がぐつぐつしそう??♡匂い嗅ぎたい??♡」

「お前の変態発言にこっちはお肌がぶつぶつだよ。何でいつもよかヤバみ増してんだ。」

「はあ??(クソデカため息)。」

「(クソデカため息) って口で言う奴初めて見たわ。そんなに?」

「そりやそうですよ!ウエディングドレスというのは皆さんの想いが込められた本当の勝負服!言わば人生一度きりの正装!自分の気持ちという名のクソデカ感情を『これでもかッ!』と表現しつつ大切な人に綺麗な自分を見てもらいたいという健気な乙女達の儂くも美しい夢の形なんですよ!それに見とれずして何が変態か!!」

「近いって??発電出来そうな熱量で迫るな??。」

先生は今日も絶好調。楽しそうでなによりです。

しかしまあ言っている事もよく分かる。普段は可愛いに身を包んだウチのウマ娘達だが、今日という日は綺麗を着飾っていつもとはまた違った印象だ。一緒に写真を撮っているマヤとポーノ然り、カレン然り??なあんて1人だけ黒ドレスなんですかねえ?。

毎回思うけどお前さんの気合いの入り方だけ凄いだよ。中等部

が出していい色気じゃねえんだって。そんなにお兄ちゃんを惑わしたいのか？喜んで狂い飛ぶぞ俺は。

「黒のウエディングドレスって、”貴方以外には染まりません”って言う意味らしいですよ。」

「ふむ、やはりガチか??何で心を読んだの?」

「もしや口に出した自覚がお有りでない?」

「ヌツ!」

「しかも喜んで狂い飛ぶと仰る?」

「ヌツツ!」

「わかりみが深い。」

「そういうところ好きだぞ。」

「アタシもトレーナーさんの割とガバな発言は好きですよ。」

『へへへへ?!。』

サラツと毒づかれたが許されたらしい。だが今のは非常に危なかった??これがカレンの耳にでも入ろうものならお兄ちゃんが狼狽えている事がバレてしまう。動揺を見せるな。傍観者として過ごす撮影会とは言え、油断をしてはならない。

あの芦毛の怪物は俺の抜け目を決して見逃しはしないのだ。少しでも隙を見ればすぐに手玉に取られてすっぴんわっしょいの大騒ぎ、ポニーちゃん改めヌヌの亀太郎も色欲アンテナピンピンからの朝まで寝床で運動会である。目玉の親父ならぬ、三十路の親父が大目玉だ。玉入れの会場はこちらになりまーす!中止に決まってるんだろ。

まあ、今回はいつもみたいな距離感で詰められることは無いけどな。だって見てるだけだし。この分には最早父親の様な気持ちで彼女達の仕事ぶりを傍観するのみである。あーはっはっは!!

そうしてふんぞり返っていたら、後輩ちゃんと同い年か、もう少し若そうに見える女性カメラマンさんがパタパタとこちらへやって来た。

「じゃあ次、トレーナーさんが新郎役でお願いします。」  
「えっ。」

「皆さん写真映りが素晴らしいですからね。彼女達の事をよく知っているトレーナーさんと接すれば、最高の花嫁姿を見せてくれるはずですから??と、予めアグネスデジタルさんから伺っています。」

「お前えっ!!」

「言いましたッ!今回はちゃんと言いましたあッ!!」

「そんな記憶無いんだよ!嘘つくのはこの可愛いお口かオラ!ベビースキンがッ!」

「トレーナーさん『楽しみで寝れない』って遠足前の小学生みたいな事言って寝不足続きだったじゃないですか!知りませんよそんな事ッ!!」

「えっ、あつ、ぐ、ごめん?。」

普通に怒られた。めっちゃ凹む。

ウチの愛バは自己肯定感の低いハイスペックウマ娘ではあるが、俺にはたまにこうしてカミさんというか??おかんみたいに怒る。正直かなり怖い。普段温厚な子を怒らせてはならないと言うのは、人もウマ娘も共通らしい。

「場を盛り上げる小道具も、人数分学園側から提供して頂いたので、どうぞこちらも使って下さい。」

「使って下さいって指輪しかないじゃないですか??花束とかじゃダメだったんですか??」

「YES/NO枕なら有ります!」

「1番自信满满に出されたくないものですよそれ。」

??本当にやるのか。三十路の良い大人が、教え子の女子学生相手にプロポーズの真似事を。

いやーキツイでしょ??。

マヤとかボーノにやるのにも気恥しさと抵抗があるのに、1人真似

事じゃ済まなそうなのが居るんだって??チラ。

「???あはっ♡」

ほらあツ!!あの芦毛はこつちを喰う気満々なんだよ!ただでさえ弱み握られてんのに何で自分からポニーちゃんも握られるような真似しなくちゃならねえんだ!大体何でもう乗り気なんだよ!さては俺以外全員知ってんな!?またこのパターンじゃねえか!!

カレンの顔は完全にこつちを手玉に取るソレだ。今まで何度も見えてきてはすぐさま実行に移されたんだから俺は良く知っている。

可愛い+綺麗+お兄ちゃん以外に染まらない意志を着飾ったウマ娘相手に、たかだか童貞に何が出来ると言うんだ。これには又又又の亀太郎改め子泣きじじい??もとい俺の子並みじじいもヒヒンと泣かざるを得ない。

お前泣いたら固くなる妖怪なんだから絶対泣くんじゃねえぞバカヤロウ。

仕方なく指輪を受け取りつつ教会の壇上に立つと、1番手にマヤちゃんが前に立った。

はえく??すっごい綺麗??印象がガラリと変わるのね。その黄色を基調としたドレスはよく似合ってるぞマヤ。ビューティー何とかさん、グツジョブ。

あつ、でもそんなにデコルテ出して寒くない?建物の中そこそこ冷房入ってるからトレーナーちゃんちよつと心配。

「トレーナーちゃん??マヤね。キラキラした大人の女になりたいっていつも言ってたけど??それって、トレーナーちゃんにちよつとでも近付きたかったんだ。」

「うん。」

「この勝負服にも、マヤのそういう想いとか、大好きっていう気持ちを沢山込めたの。だから??だからね。トレーナーちゃんの言葉が欲しいな、って。」

普段ならこの段階で真っ赤になる純情トツプガンのマヤちゃんだが、今日は恥ずかしさの中にも決意がこもった眼差しである。成程??勝負服と言うのも納得。女性とは服装でこころも変わるものなのか。

これにはトレーナーちゃんも気の利いたイケメン台詞を??いや浮かばねえな。そもそもさつき聞かされたのに用意出来るわけがねえ。身長差30cm、目線の高さが犯罪臭に拍車をかけている。大人としての良心と抵抗が??いや。俺は大人である以前にトレーナーだ。ならば彼女達の想いに応えねばなるまい。

こちらら友人の結婚式は出席率100%の、言わばブライダル童貞!俺を無礼るなよ!!

「マヤ??今日のマヤはいつもよりキラキラしてるよ。凄く綺麗で??キラキラしてて??綺麗だ。」

「はいカット!!」

相棒の声が教会に響いた。えっ?何そのこつち来いつてジエスチャー。ダメ出しあるの?。

「トレーナーさん??語彙力、何処に置いてきちやっただんですか?」

「だっ、だつて??用意してなかったし??折角なら記憶に残る日にしたいじゃん?。」

「だからって無理に格好つけようとしなくても良いんです。いつも通りのトレーナーさんの言葉が、皆さんは欲しいんですよ。思った事をそのまま言っただけ下さい。そして早くアタシに可愛いウマ娘ちゃん達のナイスショットを。」

「この野郎。」

「トレーナーさん!!」

突然大きな声を出して、カメラマンさんが走ってきた。

「どうしました?」

「あの??この枕、YESしかないんです!」

「貴女は何の話をしてるんですか。」

気を取り直してtake2??とは言うものの、思った事って何を話せばいいのよ。『綺麗』とか『可愛い』ではありきたりすぎやしないか?だって毎日の様に言ってるぞ俺。

ヌツ??詰み。砂かけババアならぬ、愛バからのけしかけバ場は稍重です。

「トレーナーちゃん??やっぱり、マヤだとダメかな?魅力??無い?」

アツ!マヤちゃんが分かりやすくしよんぼりしちゃった!

いかん、頭をフル回転させろ!今日はある種の記念日だ。こんな顔をさせるのはトレーナーとして頂けないし許されん。デジタルにもボコボコにされちゃう!!

「マヤ。俺にとってはさ??マヤは出会った時からずっとキラキラしていたんだよ。純粋で、物分りが良くて、たまに駄々をこねるけど素直な子で。『夢中になっちゃった?』ってマヤは聞いてくれるけど、夢中じゃなかった時なんて無いさ。」

「トレーナーちゃん??じゃあ、えっと、今のマヤ??キラキラ、してる?」  
「キラキラっていう言葉じゃ足りないな。」

地面に膝をつき、マヤの左薬指へと指輪を通した。

「とつても素敵だよ、マヤ。これからもずっと一緒に居てくれないかな。」

「??はい。」

「はいカットー!!OKです!」

フウ??良かった、マヤの表情を見るに納得していただけたよう。  
ウチの相棒もこれには満足——いや逆うーツ!!なんでお前がカ  
メラやってんの!?それ隣で枕持つてる人の仕事だから!カメラマン  
さんも枕でYES表示されても分かんねえよ!それYESしかねえ  
んだろツ!?仕事しろ!!

「はい、ではどんどん行きますよう!」  
「??良いけどさあ。」

思う所があるが、取り敢えず新しい指輪を受け取り壇上へ。  
うおっ、ヒシアケボノさんおつきい??女神??。普段の勝負服が青と白  
を基調としたパティシエチックなものに対して、ドレスはピンク??ピ  
ンク!?!やはり女神は実在した。

頭のお団子もいい塩梅である。ただデコルテを出してるせいで、勇  
者御一行随一の大きさを誇る”アケ”と”ボノ”が物凄い存在感。  
ダスカといいドトウといい、ロボロイといい??どうなつてんだ中等部  
!

だが動揺することは無い。ボーノはウチの女神。真っ直ぐな気持  
ちで向き合えばなんてことは無いんだ。例えどんな面白発言が飛び  
出してもな。

「トレーナーさん。」

「うん。」

「あのね??うーん??言いたかったこと、いっぱいあったんだけど??忘  
れちゃった。」

カワイイな。

「でもちゃんと言おうと思ってた事は分かるよ。あのね??私に居場所  
をくれて、ありがとう。」

「えっ?。」

「私、怪我でもう昔みたいに走れないでしょ???皆は普通にお話してくれたりしてくれるけど、やっぱり気にはしてたの??自分だけちやんと夢を追い掛けられない事。それでも、ここに居てもいいのかなって。でもトレーナーさんは、『必ず自分が治すから居て欲しい』って言うてくれたこと、本当に嬉しかったの。デジタルちゃんにも、皆にも、いっぱいありがとうって言いたくてね??あれ?これだと花嫁っぽくないかな?」

「いや、良い。良いんだ??ボーノ。」

鼻の奥がツンとしてきた。普通にそんな事言われるなんて思ってた。鼻の奥がツンとしてきた。普通にそんな事言われるなんて思ってた。なかつたもの。いつものちやんこ発言どうしたの?あつ、泣きそう。なんなら相棒はダメだったらしく、嗚咽が聞こえてくる。

「必ず約束は守る。皆が好きだった、ダイナミックな走りをするヒシアケボノを取り戻してみせるから。これからも一緒に居てくれ、ボーノ。それから??毎日美味しいご飯、ご馳走様。」

「??うん!」

「ビューリフオーツ!!」

相棒かと思ったらカメラマンさんだった。あの人??何なんだろう。とは言えだ。ボーノの本心をちやんと聞けたのは嬉しいし、俺もトレーナーとして今以上に頑張らなければならぬと改めて思う事が出来た。それだけでもやって良かったと思うのは単純だろうか。

「??よし。決意が漲ったぞ。ふぐふぐ嗚咽を零している相棒から最後の指輪を受け取りつつ、壇上へ。」

さあ残す所最後の一人となりました。ブライダルステークス1枠3番1番人気のこのウマ娘。

「お兄ちゃん♡」



カレンチャンでえええええすッ!!

目の前に立った芦毛の怪物はニコニコと微笑んでいた。魔性の笑みである。遠目に見たら黒ドレスしか気にならなかったが、こうして近くで見るとより一層大変な事になっているじゃないか。

まず何だそのスケスケお耳は。普段カチューシャみたいな耳カバで隠してるのに、何でここでそんなものを出してきた。お前さんは軽い気持ちでシースルーにしたかもしれないが、お兄ちゃん流石にseeスルーは出来んぞ。

確かに以前、カレンとマヤ2人のお出かけに付き合った時はそんな話も出たさ。『お兄ちゃんは多分こっちの攻めた方が好きだよね♪』とか言われて『うん好き。』と賢さ下がり切った返答もしたよ。

絶対今じゃねえだろ!?何でこのブライダルタイミングでスケスケハレンチャン状態になるんだよ!小物として用意された筈のYES/YES枕が小物で済まなくなるんだぞ!?あとその脇出しスタイル!所々に装飾されたレース生地!お前さん300万人以上に可愛さバレてるのにその攻めに徹した格好なんなの!?300万人へお兄ちゃんを堕とす♡って優先順位おかしいから!全力をそこに注ぐんじゃないよ!ジューンブライドどころか不純ブライドだわ!!

「お兄ちゃん?どうしたの?」

「何でもないぞ。うん。今日のカレンは、YESだね。」

「ありがと♡」

はあんカワイイーツ!!待てポニーちゃん落ち着け。バクシンしようとするんじゃない。落ち着いて思った事をそのまま口にするだけでいいんだ。簡単な事じゃないか。

カワイイ??いや、違う。カレン相手にカワイイは、俺に童貞と言ってるぐらい今更だ。なんだと?

なら、いいスケスケだ??違う違う、そうじゃない。事案発生だよ。

あつ、ダメだ何も出ねえ。出るには出るが人前で口に出しちやいけないわこれ。

デッ、デジタル！助けてデジタル！！何言ったらカレンが喜ぶのかお兄ちゃん分かんねえよ！！

なに？なんだそのジュエスチャー?? 『グツときて♪Chu』？ふざけているのか貴様ツ?? お前は俺を社会的に殺したい程恨みがあるのか!? カレン相手に出来るわけがねえだろう！ 『ギユツとして♡天誅』されるわ！

「なんだかドキドキするね?」

「?? そうだな。きつとカレンが、いつも以上に魅力的に見えるからだと思うよ。」

「本当にそう思ってくれてるー?」

「本当さ。」

ヌツ!? お、お前そつちからお兄ちゃんの手を握るのはレギュレーション違反だぞ!! 待て、指を絡ませるんじゃないツ!! それは実質指びよいだ! ああ~~~~ 手袋の素材こだわってるう~~~~ ツ!

「?? お兄ちゃん。今日のカレン、本気だよ。」

「犯行予告かな?」

「本気のカレンが、本当に”カワイイ”勝負服を着て、お兄ちゃんの前にいるの。お兄ちゃんならきつと?? この意味、分かるよね?♡」

本気のカレン

←

お兄ちゃん以外に染まらない意志

←

分かるよね? (威圧)

分かりたくないよおっ!! DEAD ENDじゃん! どう足掻いて

も美味しく頂かれちゃうじゃん!!この世は諸行無常かもしれんが、何が悲しくて教え子からの無情な所業で最後を迎えねばならんのだチクショーツ!!

これに回答しろと?100点満点のスパダリムーブを披露しろと??無理に決まってるんだろこんなもん!

ああ、三女神様??やるだけやってみせますから、どうか何事も無く全てが平和的に終結しますように??。

そうしてカレンの指に指輪を通し、小指で指切りをした。

「??気の利いた言葉は、カレンに言えないけれど。約束も、運命も、糸みたいにこうして繋がっていたから、俺は今日こうしてカレンの前に立てているんだと思う。だから——もう一度約束を誓うよ。俺はいつでも、カレンの傍に居る。」

「??お兄ちゃんらしいね。だから好——。」

『パーフェクトツ!!』

デジタルとカメラマンさんのけたたましい声が教会に響き渡った。やかましいよ。今カレンが何か言ってたでしょ?何でちよつと2人で仲良くなってるんだ。本来なら俺もそっち側だったんだぞ??クソ??。

「いやー流石ですよトレーナーさん!これで編集長の顔面に有無を言わず写真を叩きつけられます!」

「そうですか??。」

「じゃあ午後からはハーバーと他の皆さんの撮影になりますので、一旦休憩にしましょう!トレーナーさん、こちらも差し上げます。」

「指輪??まだあったんですね。他のメンバーの分が足りなくなるのでは??。」

「いえいえ、間違いなく勇者御一行さんの分ですよ。人数分用意してもらいましたから。では!」

嵐のように彼女は行ってしまった。フレッシュというか爽やかというか??方向性間違えたバクシンオーみたいな人だな、あの人。しかし人数分と言われても、もうウチのメンバーに勝負服を纏った花嫁はいないワケで。

「ウマ娘ちゃん達のブライダルショット??はあ??♡」

??相棒はビューティードリームカップに出ないのだろうか。いや、自己肯定感クツソ低いからなこの美少女。多分出ないだろう。すると何が起きるか?

花嫁のアルバムに相棒が居ないのだ。

いや??うん?。しようがないとは言え??見てえくくくッ!

見たら見たで何か悲しい気持ちになりそうな気もするが、それでも見たい欲の方が強い。

あつ、そうじゃん。返答待ちの3人娘が合流したら、勇者御一行完全結成記念で撮影して貰えば良いんだ。恥ずかしながら俺が可愛いもの好きというのはチームメンバー全員にバレてるし、皆心は乙女だから多分誠心誠意頼んだら着てくれるかもしれない。最悪カレンだけどもこちら側に引き込めれば、実質ボスみたいな可愛いムーブで説得してくれるはず。

今日の勝負服ほど煌びやかなガチ衣装では無いかもしれないが、そこはまあ??自費で出来る範囲。

そうと決まれば、皆に指輪を渡したわけだし??よし。

「デジタル。」

「うえへへ??はい?。」

「指、出しな。」

そうしてデジタルの左薬指に、指輪を通した。

「いつか、ちゃんとした物用意するから。その時に交換な。」

「??????  
えっ?」  
「よし、皆休憩しようか。」

恐らく午後からも忙しくなるだろう。あのカメラマンさん結局最初の方しか仕事してなかったし、何よりウララちゃんの晴れ舞台もバッチリ撮っておかねば。今日来れなかった彼女のトレーナーに申し訳が無い。俺は約束を守る男なのだ。ふふっ。

「トレーナーちゃん??デジタルちゃん、動かなくなっちゃった。」

「えっ。」

「今度は何言ったの?」

「何か言った前提なの?」

「うん。」

「ええ??. デジタル? おーい、おデジ!?!?ダメだこりゃ。」

結局、引き摺りながら一時教会を後にすることになった。

## 2章・UNLIMITED IMPACT

プロローグ： \*ぼうけんのしよを よみこみますか？

『ごめんね。君のトレーナーには??なつてあげられない。』

頭を殴りつけられたようだった。

自惚れていたわけじゃない。それでもあの人の次は俺の番だと思っていた。サブトレーナーとして経験を積んで、荒削りでも力になれると思つてたんだ。

あの走りを近くで見れるなら。

誰よりも楽しそうに走る彼女のそばに居られるなら。

そうしたら??親父にだつて??。

——マルゼンスキーが先頭！2着に7バ身、8バ身と差をつけていく！もはや彼女の一人旅です!!

ああ、そうだ??楽しそうに走る君が、あまりにも綺麗だった。

綺麗だった、のに。

『ねえ??今、楽しい?』

『??分からない。けど俺は——!』

『じゃあやつぱりダメ。楽しさを知らないなら、君までこつち側に来る必要ないわ。』

『なら??なら、君はどうなんだ。』

『??どうかしらね?ふふつ、自分でも分からなくなっちゃった??もし私のトレーナーになりたいのなら??教えてくれるかしら。』

耳元まで顔を近づかせた彼女は、諦めたように言葉を絞り出した。

『私は後、どれだけの夢を奪<sup>殺</sup>えばいいの?』

意志を持った言葉は??その時確かに、俺の喉元に喰らいついていたんだ



」。

」!

薄ぼんやりした意識の中で声がする。俺は確か??新人ちゃん達のレースについて情報を集めていたはずだ。

ボーノの手厚いサポートや、カレンとマヤの2人の指導にデジタルの並走と至れり尽くせりな事もあってOP戦は順調に勝っている。そろそろ初の重賞を視野に入れてもいいかと作業していたが??成程。さては寝落ちしたな?

どれだけ寝てしまったかは分からないが、ちよつとスッキリした気がする。懐かしい夢を見た気もするが??まあ良いだろう。さつ、仕事仕事――。

「はいデジタルちゃん、笑ってくださいーい♪」

「きゃっ、きゃっ♡」

「託児所かな?」

目の前で絶賛赤ちゃんプレイが繰り広げられていた。地獄再びである。

前々から思ってたけどな、クリークママン。お前さんウチのトレーナー室に育児セット丸ごと置いてるだろ?おしゃぶりと哺乳瓶は許すけど離乳食は許さんぞ。ウチの変態が口にしたらどうする。喜んでやるぞ、ソイツは。

デジタルもデジタルだ。ガラガラで喜ぶんじゃない。

「なあ、お2人さん。」

うおっ!?何で揃って真顔でこっち向くんだ!怖いからやめろ!特にそのおしやぶりを啞えたヤツ!めっちゃやれ合ってた犬が急に”すんっ??”ってなった時のリアクションだぞそれ!

「デジタルちゃんのトレーナーさんもどうですか?」

「誘おうとするな。人は退行する様に出来てないんだよ。」

「ばぶ。」

「お前は何だ。」

ばぶ、じゃねえよ。

ソファアから起き上がったデジタルは、スーパークリークが俺に用意したおしやぶりを手に取るや無言で隣にやってきた。

おい。何差し出してる。

やらねえって。誰が三十路にもなってBe<sup>幼</sup> the<sup>児</sup> baby<sup>退行</sup>すると思ってるんだよ。いくら半身だからって理性はあるんだぞ。1度啞えたが最後、俺の尊厳はクリークママによって尽く溶かされてしまおうだろう。それは良くない。大体そういう時に限って誰かがやって来て気まずい空気になるのだ。年頃の少年達がエツチな本とか動画を見てる時に限ってお母さんがやって来るだろう?あれだ。

しかしこの愛バ、今日に限ってはNoと言ってもYesを強要してくる。中々手を引かない。普段なら放っておけば勝手に子守唄コースで寝落ちするのだが、やはり首を突っ込んだのが不味かったか??このまま無言の圧でおしやぶりを差し出され続けるのも非常に仕事がいやりにくい。

ならば――。

「デジタル。俺は今、可愛い成分が不足している。だからそろそろぬいぐるみで癒されようと思ってたんだか??お前が俺の可愛い成分を



満たせたら、それを貰っても良いぞ。」

トレーナーの立場を利用して教え子に接近させるという大人としてもわりかし下の下に入るであろう選択。うむ、実に最低である。まあこつちもおしやぶり啞えて尊厳がおぎやるかどうかなので目を瞑ってもらいたいぞ??。

俺は知っているぞデジタル。お前が可愛いだの推しだの言われるのに猛烈に弱い事を。出来るわけないよなあ?? 頬チューはカレンがいたから出来ただろうが、自分からそんな事した事ないもんなあ?? これぞ対愛バ戦略、『押ししてくるなら押し返せ』だ！ふはははっ！完璧な戦略——えっ、膝の上座るの？

『???'  
』

沈黙。

膝の上でこちらに背を向けるデジタルは何も言わない。真の勇者は多くを語らない。ただ後ろを向いたまま、肩越しにおしやぶりを差し出してきた。口にはしないが背中が言っている。確かに強い意志で、己の想いを込めている。

——Be<sup>しゃ</sup> the<sup>ぶ</sup> baby<sup>よ</sup>。

お前こういう時だけ行動力半端じゃないよな。もう良いよ?? 俺の負けだよ。お前はいつだって可愛いよこんちくしょうが。

おいクリーク。何花丸ジェスチャー出してんだ。見世物じゃないぞ。おしやぶり啞えて花丸出された三十路の気持ちを考えてみる。いたたまれないんだ??。同じ母親属性を持つと噂のフラワーちゃんだってこんな事はやらないからな。

いや、フラワーちゃん影響受けやすいかもしれない?? ふむ?? はっ！何甘やかされてる場面を想像してるんだ俺は！ロリにバブみを感じる程疲れちゃいないぞ！それもこれも全部このおしやぶりのせいだ。

ええい、魔道具め。

膝の上で相変わらずデジタルは黙っている。耳だけぴよこぴよこさせおつてからにこやつは??お前??。

「デジタル。少しだけ声を上げたい。」

「?」

「耳がガラ空きじゃオラアツ!!!」

「おぎやああああ!!」

「あつ、産声上がった。」

「何してんすかオツサン。」

あまりにも冷たい声。うむ、最早聞き馴染んだ歳下のヒト娘である。呆れてる顔してらあ。

「相も変わらず仲良しですよねえ。あつふふはっはあつふー!!」

クソうるせえなモルモツT君。音量下げろって??えっ、何で居んの?後輩ちゃんならクリークママン絡みだろうけど、お前さんとカフェが来る理由は本当に分からんぞ?

あつ、あれ??何か忘れてる?今日会議かなんかあつたっけ?いや、でもあつたらメールぐらい——あつ、新着来てる。聖蹄祭に関する催し物、及び特別レースについて??from?ヨシ、エ???

「皆さんお揃いですか。」

「ぶおっ!」

「いだっ!!」

吹き出したおしゃぶりがデジタルの後頭部に直撃した。

おお、勇者よ。現実に戻ってきたか。なら今すぐ膝から降りて何事も無かった様に振る舞うのじゃ。トレセン学園の女王の御前であるぞ。

ほ、ほら見ろ！ヨシエさんスゲエこっち見てんじやねえか！早く降りろって！いや俺も降ろすには惜しい所はあるが、なんて言っても皇帝のトレーナー。ウマ娘と適正な距離感を保てないトレーナーは口リコン認定されて悪即斬だろう。

「そんなに慌てなくても結構ですよ。ウマ娘達と親密なのは、こちらがとやかく言うことではありませんから。」

「そつ、そうですか？すみません??。」

の割には顔が笑ってない。

「赤ちゃんプレイって親密に入るんですかね。」

「おい、そのヒト娘。余計な事を言うな。」

「先輩の評価がアタシの中でダンゴムシになりました。今後は頑張つて下さい。」

「ダンゴムシってなによ!？」

「評価が蜘蛛になった瞬間シバキに行くんで。よろしく。」

「聞けって！せめて基準を説明しろッ!」

「んっ、んんッ!?!?よろしいでしょうか?」

『あつ、すみません??。』

ほれ見ろお前。ヨシエさんちよつと怒ったじゃないか。眼で俺のせいみたいな事言ってるけど2割ぐらいお前さんも原因だからな。

「取り敢えず始めましょうか。」

「あの?会議があるって今知ってしまつて??すぐに準備します。」

「いえ。今日はここでやらせて頂きたいのですが。」

「えっ?あつ、いや?ウチは構いませんけど??。」

「ハーバーのトレーナーさんから、近々勇者御一行のルーキー達が重賞を控えていると伺っています。ここで済ませてしまえば、すぐにもそちらの作業に没頭出来るんじゃないかと。」

こっつ??後輩ちゃん!!ダンゴムシだなんだと言っておきなながらこの  
ファインプレー!

「??あー?まあ、そういう事なんで。」

「ありがとな??後で血の腸詰分けてやるから。」  
ブラックブディング

「あれ。アタシ恩を仇で返されようとしています?」

しょうがないだろ。デジタルが某国の殿下から貰ったんだから。  
流石のボーノもどう料理するか悩んでるんだよ。

それはさておき、ここで何やら会議をして貰えるなら好都合である。ぱかぷちぬいぐるみのあるソファアに腰掛け、隣には後輩ちゃん。正面にはモルモット君とカフェ。偉いぞモルモット君。正面ヨシエさんは俺に敵しすぎる。今だって何か凄いい見られているんだ。

「トレーナーさん、何したんですか?」

「身に覚えは無い??多分。」

「今回皆さんに集まって貰ったのは他でもありません。来月開催予定の聖蹄祭??その最終日に行われるエキシビジョンレースについてです。」

「エキシビジョン??そんなのありましたっけ?」

「まだ公にはしていない情報なので??個人的にはお話した方もいると思いますが、今この場に居る3チームは世間からも大きな期待を寄せられているチームです。」

ヨシエさんは手にした書類に顔を向けた。

「芝・ダート問わず、今なおマイルで負け無し。距離適性すら覆したオールラウンダー、アグネスデジタルさん。無尽蔵のスタミナと止まる事の無いスピードを持ち、ただ1人向こう側に踏み込んだマンハッタンカフェさん。それから——。」

その時、後輩ちゃんの携帯が着信を示すバイブ音を響かせた。

「??すみません。」

「いえ。彼女でしよう?」

「はい。??もしもし。アンタ今どこ居んの?」

『。』

「いや部屋の前なら入ってこいし。別に誰も怒らんで。ん??まあ、勇者御一行のトレーナー室なんだからそりや居るでしょ。」

『!!』

携帯の向こうから悲鳴の様な訴えの音がする。後輩ちゃんは深いため息をつけてソファから立ち上がると、勢いよく部屋の扉を開けた。

「往生際が悪い。さつさと入れつて。」

「ぎゃああああ!!トレーナーの意地悪っ!バカっ!まだ心の準備が出来てない!無理無理無理無理無理無理ツ!!」

「うるさ??すみません。遅れましたけど、ウチの担当です。」

「あつ??。」

デジタルの小さな声。かくいう俺も部屋に入ってきたウマ娘から眼が離せなかった。

涙を浮かべた、ぱつちりと開いた眼。芝とダートを走れる力強いトモ。後輩ちゃんに首根っこを掴まれたその芦毛のウマ娘を??俺達は良く知っている。

ああ、そうだ。忘れもしないマイルカップ。

忘れもしない——天皇賞・秋。

『もしアタシが出る事で??あの子の夢を摘んでしまっているのなら??出ない方が??ッ!』

『悔しい想いをした娘たち！その想いを無かったことにしたくない！だから——アタシは持つていきます。この先のレースに全部、自身自身の力に変えて。それが??ウマ娘”アグネスデジタルです。』

デジタルが勇者として覚悟を決める事になった、1人のウマ娘。トウインクル・シリーズに残してきた唯一の未練??その子が目の前に居る。

僅かに微笑んだヨシエさんは、再び書類に目を通した。

「それから、アオハル杯決勝で大差勝ち。ダート界においてはがいせいのさい蓋世之才とも謳われるハーバーのエース——”クロフネ”さん。」

名前を呼ばれた彼女がこちらを向く。

1度は葉を挟んだ冒険の書が、再び開かれた音がした。

## 第1R : \*むてきの チームアップ

「では、全員揃ったという事で??エキシビジョンレースについての説明を再開させて頂きます。」

あの後おどおどした動きで部屋に入ってきたクロフネは、後輩ちゃんの隣に座った。チラチラとこちらに目を向けては俯き、スーパークリークに諭されて??と言うのを繰り返している。デジタルも思わぬ来客に落ち着かない様子で、どこか目線が泳いでいた。

そんな様子を見て何かを察してくれたのか、ヨシエさんに話題を振ってくれたのはカフエだった。

「その??エキシビジョン?と言うのは、私達が競うんでしょうか??全員得意な距離やバ場が違うと思うんですが??。」

「そうですね。なので今回は皆さんが競うのでは無く、1つのチームとなつて、私が用意したウマ娘達に挑んでもらいます。」

「??アオハル杯のマルチプレイっすね。」

後輩ちゃんの言葉にヨシエさんは頷いた。

ふむ?アオハル杯??分らない。いや名前自体は知っているんだが、どんな内容なのか分からない。何かこう??エモの波動を感じさせるレース内容なのだろうか。デジタルが出ていたら死ぬ程喜びそうなレースだな。

あつ、いかん。ヨシエさんがめっちゃ見てる。俺がアオハル杯も知らないにわかトレーナーだと言う事がバレているらしい。キョドるとすぐバレるとか、洞察力完ストしてんなこの人??。

頭を悩ませていると、モルモット君が”あつ”と声を上げた。

「そういえば勇者御一行さんって、その時世界を飛んでましたよね。」

「ああ、ですね。先輩らの活躍はウチも見てました。」

「そ、そうなのか??。」

「香港カップで他所の国のウマ娘達泣かせたやつですよね？」

「いや言い方。合ってるけど???つか思い出したぞ。その時期って後輩ちゃんも榎本さんとバチバチ決めこいて、たづなさん泣かせてただろ。『どうしたらいいですか?』って香港まで電話来たんだからな。」

「ちよつと記憶無いですね。」

「??うそつき。キレ散らかしてたクセに。」

「アンタこういう時だけ口開くのな?」

「痛い痛い!ほっぺ伸びるッ!伸びるからあッ!!」

デジタル、ときめくんじゃない。何だかんだ平常運転だなお前。

まあ要するに??俺達が世界で大暴れしている時に開催されていたのが、皆の言うアオハル杯らしい。

モルモット君に説明を求めると、簡潔に言うならチーム対抗戦。各距離3人まででメンバーを組み、人数が足りない所も臨時でフリーのウマ娘達をメンバーにして競い合っていたのだとか。そこで榎本さん率いる優勝候補、チーム『ファースト』相手に完全完封完勝したのが隣のヒト娘。やっぱキレるとヤベーなこのラノベ主人公。

「今回の聖蹄祭はファン感謝祭も兼ねています。より多くの方達を学園に招く為、皆さんの力をお借りしたいんです。」

そう言ってヨシエさんは、用意していた資料を配り始めた。

「タイムスケジュールに関しては今後他のトレーナーや教員、教官一同にも周知する予定です。今皆さんに関係するのは最後のページです。」

「特別指導体験?ですか???」

「ファンと言うのは、何もレースを見に来てくださる人達だけではありません。いつかはトレセンの門を潜り、自身の夢を叶える為に努力し続けるウマ娘達原もまたファンの1人です。今世間から注目を集めている皆さんの指導を受けられるなら、彼女達にとってもまたとない



機会でしょう。」

「それで??それが終わったら、エキシビジョンと。」  
「ええ。ただし今回一番大切なのは勝敗ではありません。人を集めるという事??それからここに居る皆さん含めて、訪れた全ての方が楽しめるレースにするという事です。」

「大丈夫だと思いますよ。」

後輩ちゃんの一言に、ヨシエさんは微笑んだ。どちらもうマ娘第一主義の思考がある為、あまり言葉にしなくとも内心はウキウキなのだろう。モルモット君やカフエも珍しく乗り気である。

そういう事なら勇者御一行も幼きウマ娘達の為に脱ごうじやないか。ヌツ?字面が犯罪のそれだ。ひと肌、ひと肌脱ぐだけである。

しかし集客か??幸いにも芝マイルとダート、長距離は既に事足りている。3チーム内からメンバーを選べと言うのなら、短距離ならカレンがいるし、中距離なら後輩ちゃんの所やアグネスタキオンの様な切り札もあるが??。

「あの??ヨシエさん。」

「何でしょう。」

「ここに居る3人は決まりとして、短距離と中距離は少し時間を貰っても良いですか?確かに俺達のチームから選出しても良いんですが、それぞれの距離に適した人材がいると思うんです。期待されたチームなら自分達でも良いかもしれないですけど、トレセンには色々な子達が居ますから??その道のプロともチームアップした方が、集客面においては効果が有るか。」

「ふむ??確かに。その適した人材に心当たりが有ると見てもよろしいですか?」

「その辺も大丈夫ですよ。この人、なんか知らないですけどウマ娘達と交流広いで。」

「ですね。アグネスデジタルさんだけじゃなくトレーナーさんも含めて、勇者御一行は彼女達から注目されていますから。色々な意味で。」

色々な意味ってなんだ。

あつ、あつ！ヨシエさんの目力強くなった!!何で!?えつ、今のもダメだった!?何がダメでしたか女王陛下!?すつ、すみません??女性の気持ち分からなくてすみません?童貞ですみません??凹む。

「そういう事ならよろしくお願いします。こちらとしても、今回の聖蹄祭は必ず成功させたいので。では??すみませんが、後の事は御三方にお任せしますね。ああ、そうだ。カフエさん。」

「はい??」

「<sup>貴女</sup>長距離には特別な相手を<sup>ご</sup>用意します。退屈はさせませんからね。」

そう言つて笑つた彼女は、カフェの少し上をじつと見つめた。そこに居る”誰か”に話しかけるように、ふつと頬を緩ませる。

「よろしくお願いします??”お友だち”。それでは。」

そう言つて部屋を後にした。

えっ?あの人”お友だち” 見えてんの?今挨拶したよね?カフエがあんなに驚いてるのを初めて見た気がする。あの反応、多分件の”お友だち”すらビツクリしてるんじゃないだろうか??やっぱ、おっかねえな??ヨシエさん。

まっ、まあ??何はともあれ、トレセンが誇る(自分で言うのも恥ずかしいが)この3人がチームアップというわけで。いつもアツセンブルしてるヒーロー物で言うならば、キャプテン米国とアイアン男とマイティーなソーミたいなもの。即ちドリームチーム。デジタルとクロフネは互いに??うん、距離感がある。まずは軽く挨拶でもして場を和ませようじゃないか。率先して挨拶、これ年長者の使命。

「じゃあ??その。取り敢えずこれからどうぞよろしくつて事で。クロフネも——。」

「ひえあいつ??!!」

名前を呼んだ瞬間に後輩ちゃんを差し出された。ふふっ、もはや反応が拒絶のそれである。凹む。

そしてクソほど近いな後輩ちゃん。差し出されても俺にどうしろと?。

「何アタシを盾にしてんだコラ。挨拶から始まる魔法を知らねーのかアンタは。」

「ぼ??:ぼぼぼーん??:。」

「実は余裕あるだろ。」

「いやあでも、この様子なら大丈夫じゃないでしょうか。僕達結構良いチームだと思いますよ。先程の話だと、残りの2枠は勇者御一行さんにお任せするって形になりそうですけど??:。」

「おう、それで良いぞ。こっちからも相手方のトレーナーに連絡してみるからさ。」

とは言っても、1人はまず確定だろう。あの子はこんなに美味しい役は絶対に断らない筈だ。となると気になるのはもう1人だが??:まあ連絡してからだな。もしダメでも、そういうのが好きそうな世界の怪鳥もいる事だし。

「あの??:??:トレーナーさん。」

「どうしました?クリークさん。」

「そろそろ皆で企画の打ち合わせをしたいので、お先に失礼しますね。」

「ん、もうそんな時間ですか。分かりました。この芦毛も連れて行ってください。」

「何かあるのか?。」

「ウチのチーム、特別指導体験とは別で子供らの面倒見る事になってるんですよ。」

「ああ、そう言えばカフェとタキオンも喫茶をやるんだよね。そろそろ準備を進めなくて大丈夫かい？」

「はい??期間には余裕がありますし??。」

「でもこの間タキオンが店を出す新薬がどうって言うってたけど。」  
「今すぐ戻ります。」

一礼したカフェは急ぎ足で部屋を後にした。クリークに連れられて、クロフネも部屋を出ていく。一瞬こちらを振り向いたが、まだまだ距離を縮めるのは大変そうだ??なんだかんだ初めてだもんな。こうして会うのは。

思う所があるのはデジタルも同じ??僅かに下を向いて逡巡している様だった。

時間が解決するのかもしれない。だが折角こうして同じチームになり、トレセンのトップが用意する強敵達とぶつかろうと言うのだ。出来ることなら当人達には話をしてもらいたいし、その手助けが出来るなら何だつてしてやりたい。

そんな事を考えていると、デジタルが重く口を開いた。

「トレーナーさん。」

「どうした?。」

「あの子??やっぱり推せますよねえ??。」

「ああ、推せ??なに?。」

「だつて見ました!?!あのキュートなおめめ!かつて見た時より逞しくなったお身体!色白の美肌!サラリとした芦毛の髪!元からアタシの中の推しランキングトップレベルに入っていたのに間近で見た時の感動と興奮??はあ??たまりませんよねえ?・しゅき??。」

「??ヨダレ出てんぞ。」

もしかしてさ??真面目な顔して、ただぶっ倒れないように踏ん張ってただけなの?マジ?ちよつと真面目にあれこれ考えてた俺の時間と決意どうしてくれるのよ。後輩ちゃんとモルモット君居なかった

ら秒で耳に指突っ込んでたからな。

「ふっ??はははっ! やっぱり半端ないっすね、先輩方は。アタシらも、ちよつとは気が楽になります。」

そう言うなりソファァーから立ち上がった後輩ちゃんは、俺とモルモット君に一礼した。

「じゃ、取り敢えずお世話になりますんで。よろしく願います。」  
「おう。こっちこそよろしくな。クロフネにもそう言っておいてくれ。」

「楽しいレースにしましょうね。あっはははあっはっふーツ!!」

それからすぐにモルモット君も部屋を後にし、俺とデジタルだけが残された。

まさかのタイミングでまさかのサプライズではあったが、取り敢えずは大丈夫そうだろう。俺達のやる事は変わらないんだ。

「取り敢えず??メンバー候補に連絡だな。」

「ですね。頑張りましょう。」

そう言って笑うデジタル。その瞳には、有《font:ui40》馬  
《font》記念の時と同じ??俺の知らない勇者の姿があったように見えた。



疲れた。

いや、開口一番でこれはなんとも情けないのだが??本当に疲れた。こんなに歩く羽目になるとは思わなんだ??。

あの後デジタルもオペラオー率いるテイエム歌劇団の手伝いとか

で抜け、マヤは生徒会の手伝いに行き、カレンとポーノは後輩ちゃんの手伝いに駆り出され??三十路のオツサンはただ一人、学園中を歩き回っていた。

こういう時に限って目的の人物が捕まらないんだ。ウマ娘だけじゃなくてトレーナーでもある。何度行き違いすれ違いの連鎖を繰り広げたことか。

結果としては、どちらもあつさり承諾してくれたというオチ。なので後はヨシエさんに送る選手名簿の作成だけなのだが??。

「ムリ?久しぶりにこんな疲れ方したわ??。」

パソコンを立ち上げたは良いが、まるで作業出来ん。可愛い成分をぬいぐるみで摂取してもまだ足りない。新人ちゃん達も帰っちゃったし。

薄ぼんやりとデスクトップを眺める。壁紙はエンパイア・ステート・ビルと、ニューヨークの街並みである。都会の生活はあまり慣れないが、それでも好きな物は別枠なわけで。

1度でいいから登ってみたいよなあ??蜘蛛柄タイトのヒーローだつて登ってるし。でもどうせ行くならチームの子達も連れて行きたいしなあ??ふあ?眠くなってきた??。

「お兄ちゃん、おつかれ?♡」

ヌツ!!

耳元で囁かれるスイートカップケーキばりの甘い声から繰り出される圧倒的ASMRは、まさにカワイイ的童貞殺しの小宇宙<sup>ディストピア</sup>。後ろから手を回してくるこの密着度。萌えたら炎上<sup>もえ</sup>と言わんばかりの理不尽な距離感。そして何より背中に当たる”カレン”と”チャン”。

エンパイアならぬええ胸<sup>ばい</sup>や!!これにはポニーちゃん改め、俺の親愛なる隣人しよっぱい駄男<sup>ダーマン</sup>もセンスをビンビンに働かせざるを得ない!!いや、どつちかと言えばヴィランだな。ヴィランヴィランだ。アツ

ハッハッハッハッ!!えっ?

「カレン、残ってたのか?」

「ずっと居たのに、お兄ちゃんってば気づいてくれないだもん。カレン寂しかったな〜?」

「ん、それは悪かった??ゴメンな?」

「良いよ♪お兄ちゃんはまだお仕事?」

「ああ??でもカレンのおかげで元気になってきた。」

「あはっ、ホント?無理しちやダメだからね♡」

「ありがとうな。」

色々元気だよ。お兄ちゃん、やっぱり童貞なんだな??これで元気になるんだもん、単純すぎでしょ?。

しかしさっきから背中当たってる感触のせいで話に集中出来ん。カレン、お兄ちゃんが理性で本能を押さえつけてる間に少し距離を空けてくれると助かる。凄く助かる。

「これ??レースの出走表?」

パソコンの画面を見ようと、カレンは若干前にもたれかかっていた。

アーツ!!お客様困ります!その体勢は余計に押し当たってしまいます!それ以上はいけない!お前のぷよぷよが2チューするとこつちだつて大連鎖ファイバータイムなんだ!炎上!ファイヤー冷たい眼!ばよえくん!社会的にばたんきゅ〜?。あつ、待ってめっちゃいい匂いする。

「クロフネ??!。」

「どした?」

「ううん、なんでも。ただこのクロフネちゃんって??ちよつと運命的な何かを感じるなつて。」

クロフネツ！逃げろ！なんか分からんが目を付けられたぞっ！！俺にはもう止められねえからなッ！！

「今度の聖蹄祭で、このチームがレースするんだ。ヨシエさんに送ろうと思つてな。」

「あつ、そうなんだ??これ、勝てるチームいるのかな?」

「いやあ??どうだろうな。」

苦笑したカレン。

意見を出しておいて、自分でもそう思うよ。チーム名未定のドリムチーム。後輩ちゃんやモルモット君も文句無しと言ってくれた、間違ひ無くベストメンバーの名前が並んだ選手名簿を、俺はヨシエさんへと送った。

宛先 : ヨシエさん

件名 : 聖蹄祭エキシビジョンレースへの出走選手

短距離 : サクラバクシンオー

マイル(芝) : アグネスデジタル

中距離 : サイレンススズカ

長距離 : マンハッタンカフェ

マイル(ダート) : クロフネ



第2R : \*ティエムかげきだん が あらわれた

4つの星が空を奔る。片田舎の街の、売れない画家の、イーゼルに立て掛けられた濃紺のキャンバス。そこに撒き散らされた色とりどり、大小様々な輝き。星空と呼ぶにはあまりに色が多くて、それ故に誰一人として同じものは無い星空。

画家は空を仰ぐ。

初めに落ちたのは、何よりも強い輝きを放つ一等星。

次に光を失ったのは、誰をも等しく照らす優しい頂の星。

残った2つはまだ奔る。互いに競い合い、螺旋を描き、輝きを放ち続けながら、どこまでも??いつまでも奔るのだ。

新月の夜——輝く者は出会った。

語り合った夢がある。

共に示そうとした道がある。

誰にも譲れない物がある。

新月の夜——堕ちた者は向き合った。

共には行けぬと。

道など最初から違っていったのだと。

それは夢物語だったのだと。

なればこそ??お前と私、どちらか1人になるしかないのだろう。

「??ティエムオペラオー。貴方は眩し過ぎる。その光が、存在が、何もかもが。この夜を彩る星々の光さえも殺していく。奪っていく。」

「それは違うね。星の光とは、この霸王ただ1人を照らすものだ。だからこそ、より1層の輝きを放つのだよ。一等星の名を持つ君なら、理解してくれると思っただが??。」

「出来ないし、するつもりも無い。私の命は夜と共にある。この星々と共に生きている。だから——貴方を討つわ。」

「そうか??ならば受け入れるさ。嗚呼、闇夜に愛された一等星よ!その煌々とした輝きすらも、霸王の前に跪かせてみせよう!!」

新月の夜——2人は剣を抜く。  
さらば、と想いを込めて。

確かにあったはずの友情に別れを告げて。

決別??されど笑み。そうして互いの剣がぶつかりあう時——。

「グツフ。ヴウツフ。」

1匹のタヌキが迷い込んだ。

「はいストップです!!」

「あつ、ああ〜!その子、あの、ごっごごごめんさい〜!!」

メイシヨウドトウの謝罪が舞台に反響する。彼女の顔見知りだらうタヌキと言えば、アヤベの足元をウロウロしてはチラリと顔を伺い、再びウロウロ??アヤベはただ身動き取れずにいた。

かと思えば、今度はオペラオーの足元をウロウロと。

うむ、茶色い毛玉が動いておるわ。

「何ツ!?ドトウ、君までもが僕の敵に回るといのか!」

「え?ええ〜ツ!?ち、ちち違いますよ〜!!」

「ふむ??どうやら僕の美しさは、星々を魅了するだけでなく野生の嫉妬心すら昂らせてしまうということか??おお、何という罪!だが!これが僕の罪なら甘んじて受け入れようじゃないかツ!さあ来たまえメイシヨウドトウ!そしてチュウシヨウドトウ!」

その中小企業みたいなのはタヌキの事か?

「はあく??オペラオーさんとドトウさん?同じ夢を志し、無二の友と

して契りを結んだ2人が今ここで決闘を??なんて?なんて禁断の展開ツ!こりやもうスポットライトは2人を照らしだす恒星の光!アタシも全力でいかせて頂きますうツ!!」

「落ち着けデジタル。それミラーボールのスイッチだ。」

高笑いを続けるオペラオー。パニツクのあまり謎の手の動きをしたドトウ。タヌキを撫で続けるアヤベ。それを見て笑うトップロード。ミラーボールを回すデジタル。收拾つかん。動物と触れ合えるクラブかここは。

音響兼、照明係兼、特別演出兼、フライヤー制作e t c. 担当の愛バは、鼻息荒く機材のダイヤルを弄り回している。お前そこまでやったらいいよオタクじゃないよ。ジョブだよ?

テイエム歌劇団??トレセン学園非公式の広報活動。こうなった事の発端はつい先日。の事。

珍しくテイエムオペラオーがトレーナー室を訪ねてきたかと思えば、聖蹄祭で行う特別演目のお披露目に招待しようとの話だったのでやって来たわけだ。蓋を開けてみればそれはお披露目などではなく、ただ現状を見て気になる点があれば言ってみようか?つまり、客観的な感想を貰いたかったらしい。言葉足らずのオペラオーに半ば強引に連れてこられた感じになった為、トップロードが凄く申し訳なさそうにしていた。うん、そこは良いんだ。

問題は今の段階でツツコミどころしかないという点である。台本とかね。

あらすじやプロローグ的なものはまだ分かる。売れない画家が夢に見る星達の物語。(その星達と言うのが、この世代の4人)

丁度アヤベがオペラオーと決別する、舞台でもそこそこ後半に差し掛かる部分だが——スタートからここまでの間で、分厚い台本に台詞は無い。なんなら動きの指示も無い。ただ一言——。

『オペちゃんに合わせよう!!』

台本とは?

いやね??脚本:ハルウララって書いてたからもしかしてとは思った

よ？出来ても何かこう、ぽわぽわした暖かストーリーかなって思うじゃん？まさか無いとは思わねえだろ。

だがそれでしつかりと劇になっているのは、やはりこのメンバーならではという事だろう。

度々ドトウが起こしてくれる失敗も全部劇に繋げるオペラオアの適応力、そのオペラオーに合わせるアヤベのアドリブ、それらを統括してデジタルに指示を出してくれるトッププロード。ここには居ないが、黄金世代に囲まれて”もぎり”と客引きの練習をしているだろうウララちゃん。デジタル曰く、大きさと速度がバラバラではあるが同じピッチの歯車なのがこの世代との事。分かるような分からないよ  
うな??。

「一旦休憩にしましょうか。」

「ん??だな。」

トッププロードの一声に同意。なんだかんだ長い事練習していたから、ここらが良い区切りだろう。タヌキをドトウに任せ、オペラオーとアヤベはこちらへ戻ってきた。

「良いね！凄く良い。僕の美しさを一際輝かせてくれるデジタル君の技術とアヤベさんの演技には賞賛の拍手を贈りたいよ。」

「あつ、あつ、そんな、勿体ないお言葉あ??!」

「それにしても意外だな。アヤベはこういうのに参加するのは絶対拒否するって思ってたよ。やっぱり同期の間柄だからか?」

「??別に。オペラオーをボコボコに出来るからやってるだけ。」

「あははっ！アヤベさん、劇に入り込む為に意識高めでするも  
んねー！」

「えっ?」

「えっ?」

「???えっ?」

「よーし、この話はここまでだ。」

ややこしい事になる前に終わらせねば。ただ一つ分かるのは、アヤベを怒らせてはいけないという事である。後でウチのカワイイ妹に色々聞いておかねば??。

「時にデジタル君のトレーナー君。」

「どうした? オペ。」

「君達は同じ舞台上に上がらないのかい?」

「いや?? そういう柄じゃないしなあ。舞台なら今のメンバーでも充分事足りてると思うが??。」

「ふふっ、そうじゃないさ。僕が話しているのは、君達のレース演目の話だよ。まさか、ここがカーテンコールとは言わないだろうか?」

オペラオーがこちらを見る。世紀末霸王と呼ばれたその力強い瞳には、期待と慈しみが含まれていた。

「僕達はトウインクル・シリーズを走り終えた。君達に敗れたこともあるし、1度はこの王冠も脱いだ。だからこそ、次の舞台で共に競う事を望んでいる。それは僕やドトウだけでなく、アヤベさんやトップロードさんもね。」

後ろで作業をしている相棒の方を見れば、作業の手を止めてぼんやりとしていた。こちらの目線に気付いたのか、何やらバツの悪そう顔で笑っている。

「気にするなよ相棒?? 分かってるさ。」

「すまん?? まだそつちには行けない。俺には俺の、あいつにはあいつのやり残した事——やるべき事があるんだ。お互いにそれが何なのかは、多分分かってないけどな。」

「構わないよ。僕も急かしているわけじゃないさ。ただ?? それに付随する事を、一つだけ覚えておいて欲しいんだ。」

凜とした笑みを浮かべて、オペラオーは静かに言い放った。

「——セントエルモの火は灯された。」

「??何だ?」

「それってあれですよ。聖エラスムスが由来の??船乗りのおまじない?。言い伝えでしたっけ。確か聖人が神に祈りを捧げると嵐が止んで、船の帆柱に青い炎を踊らせたって言う。」

「ありがとうトップロード。それで??それに何の関係が?」

「僕とドトウが君達と競った天皇賞・秋??あの日戦っていたのは、僕らだけでは無いと言う事だよ。」

「ふむ??嵐?。船乗り??。」

「まだ弱かったが、確かに炎は2つ踊っていた。さしずめディオスクロイというところだね。」

ディオスクロイ——ギリシヤ神話に登場する双子の神。星座に纏わる話に詳しいアドマイヤベガ曰く、セントエルモの火が2つ灯つた時は、その名を冠するカストールとポリュデウケースの名で呼ばれる事もあるらしい。

あの天皇賞・秋は雨だった。それこそウマ娘達が普段のポテンシャルを十二分に発揮出来るかどうかという程の大雨。どんなバ場状態だろうと、ものともせず走り切れるデジタルに回ってきた最大級の得。あれを嵐と比喻するのならば??船乗り、そして火の灯った船は??。

思考するこちらを他所に、オペラオーはいつものように仰々しく声を上げた。

「かくして、かの者は大海原へと旅立った!それは終わる事の無い旅路だろう!世界を駆けた旅人の背を追う為か、はたまた自身の幻影に知らしめる為か——どちらにせよ、君たちの旅路の向こう側で僕は待っているぞ。」

「オペラオー??。」

「そしてその時こそ、新たな霸王??新生ニュー霸王になった僕が！横にドトウを添えて！再び君たちと相見えようじゃないか！ハーツハツハツハ!!」

高笑いをしながらオペラオーは背を向ける。そうして再び、静かに口を開いた。

「君達の新たな演目に、期待しているよ。」

歩き出したオペラオーの背中では、世紀末霸王の名に違わない程の尊大さと強さを秘めていた。

他者を受け入れ、その全てを肯定し、自身の存在が誰かの壁になる??それが分かった上でもなお真正面から全てを打ち砕く。自分こそが霸王だと信じて疑わないウマ娘。だからこそ、人はその走りに夢を見るのだろう。

ふっと肩で息を吐いたアドマイヤベガは、呆れた顔でオペラオーの後ろ姿を見ていた。

「オペラオーは??いつだってそう。賑やかして、他人を巻き込んで、好き勝手に意味が分からない事を言いまくって??疲れるわ。」

「随分手厳しいというか??ふふっ、ボロクソだな。」

「そうね。でも??どれだけ意味の分からない事を言っていたとしても——。」

目を逸らした彼女は、優しい声で続けた。

「意味の無い事は、言わない。」

「??ああ、そうだな。」

それは彼女なりの信頼の表れだろう。同期であり、共にクラシック

戦線を走り抜けてきた彼女??いや、彼女らこの世代にしか分からない、オペラ  
オーに対する心情。

『じゃあ。』と言って、アヤベは立ち去ろうとする。

セントエルモの火は灯された。

船乗りの性格を考えるなら??恐らく近い内に、2つの炎は激しく燃  
え上がるだろう。それは自身の乗り込む船すら焼き尽くす程の業火  
になる。

ならばこちらも出来る事をやらなくてはならない。後腐れも後悔  
も無いように、出し惜しみはしない。

持てる全てを出し切って、あいつの先輩として真正面から叩き潰  
す。

その為には今ここを立ち去ろうとしている一等星さんの力も借り  
たいのが正直な所なので、取り敢えず待つて貰わなければ。

「アヤベ。実は頼みが——。」

「嫌。」

????  
あれ?

「あの。」

「嫌。」

「まだ何も??。」

「嫌。」

「??アヤベさん。」

「絶対に嫌。」

あつ、あれえ???

おかしい。アヤベが話を聞いてくれない。な、何故だ?

『アヤベさんは優しいから、押せばイケルよ♪』と、ニッコニコだった  
カレンの笑顔が頭をよぎる。妹よ、話が違うぞ。どこ押ししても鉄壁の  
城塞なんだがどう攻めろと?お兄ちゃん冗談抜きで、目の前の一等星



さんと心の距離が光年単位で離れている気がするんだが。

「えっと??ち、因みに?どうして?」

「どうして??身に、覚えは?」

こちらをゆつくり振り向いたアヤベの顔は、苦虫を噛み潰したような顔——もとい、ゴミを見る眼である。

まつ、待て!これ本気モードじゃねえか!?何だつて俺はこう??、ええいッ、思い出せ!今すぐ思い出せ俺!

そういえばこの前、布団のふわふわ具合を確認してる最中に寝落ちしたとかで、耳だけ布団から飛び出た彼女のオフショットがカレンから送られてきた事があった。ゴッ丁寧に寝顔のアップ付きで。デジタルと2人で奇声を上げながら悶死しかけたのだが??えっ、それ?バレてんの?

いやまさかあ??仮にバレていたとしたらデジタルとカレンも呼んで皆で今頃正座コースだ。皆保存したから皆共犯。

後は??カレンが三女神像前で意識を失った時にやった、『Shall we danceの構え』とか言うクソほど恥ずかしい決めポーズ。二度とやらねえと心に決めたあれ。あれをアヤベに教わったぐらいである。

あつ、やべえ。

「??思い出した、つて顔してるわね。」

「その節は??あの?大変お世話になりました??。」

「あの後??オペラオーに見つかって。巻き込まれた歌劇の中でやらされて。カレンさんに写真を撮られて。ファンサービスでもやる羽目になって——。」

「はいっ、すみませんでした!!」

良い大人が、とかそんなものはクソ喰らえである。全力謝罪しかないだろう。それ程までに実際やると恥ずかしかったポーズなのだ、あ

れは。簡単に世に出していいものではない。そもそも何でそんなものを教わろうとしたのか、あの日の俺に聞いてやりたい。

アヤベさんはこう言っているのだ。

あんな辱めをさせた責任を取れと。

謝罪だけで済むはずが無いだろうと。

布団乾燥機の1つでも献上しろと。

その通りでございます??ヒヒン??。

「まあまあ??ここは1つ、お話を聞くだけでも良いんじゃないですか? 私もさつきお願いされましたけど、アヤベさんにとってもメリットがあるかもしれないですよ!」

そう言ってくれたのは、後ろで見ていたナリタトップロードだった。

あれ??俺君に何かお願いしたっけ? いや、ちゃんと後で面と向かってお願いしようとしていた事は確かにあるのだが??。

チラリとトップロードの方を見ると、彼女はパチリとウィンクをしてくれた。

トッ、トップロードツ!!!

お前はっ、お前というウマ娘は??! バクシンオーといいお前さんとい、委員長というのはどうしてこうもおデコがチャーミングな聖人ばかりなんだ! ありがとう! 本当にありがとうツ! 今まであまり接点無かったけど、もはや俺の心のトップロードだ! 後でおデコ触らせてくれ!!

あつ、許可無くお触りしたらデジタルに怒られるんだった。寧ろこの世代に対しては誰に許可を取っても怒られそう。

「??そうなの?」

「ああ! もちろん! 前のような変なお願いじゃないぞ!!」

「じゃあ??聞くだけなら。あとは内容によるから。」

「な、何も難しい事じゃないよ。ウチのデジタルと併走をして欲しいんだ。」

「併走?」

「ほら、聖蹄祭の最終日にエキシビションをやるだろ?最近デジタルは表立ってレースに出てないから慣れさせようと思つてな。最終直線で突き刺さるようなアヤベの末脚を、デジタルにも経験させたい。」

「??。」

あつ、考えてる。よし、よし!イケるぞ俺!とちるなよ!絶対にとちるなよ!!

「それに気にならないか?君の同期2人を打ち破つて、戦場を選ばない勇者だなんて呼ばれているウマ娘の底力を。あいつは??強いぞ?」

「??そう。良いわよ。」

おつしやあああいつ!!ネゴシエーション完了!!これも全部ファインプレーを決めてくれたトップロードのおかげだ!後でおデコにしっぺさせてくれ。

「ついでもみたいになつて申し訳ないんだが??トップロードもよろしくな。」

「任せて下さい。ご期待には答えてみせますよ。オペラオーちゃんとドトウちゃんを打ち倒した子からも、勉強させて貰いますね!」

「ああ、存分に。」

「ところで??念の為に聞いておきたいのだけれど。」

「どうした?何でも聞いてくれ。」

「私が走るメリットって何?」

??あつ、考えてなかった。

そう言えばメリットがあるかもって言つてたもんな。すっかり終

わったと思つて油断してたわ。

どうすんだポケエツ！ここまで来て『えっ？無いよ？』とか言えるわけねえだろうが！

アヤベの事だ、恐らくは無いなら無いでも引き受けてはくれるだろう。しかし頼むなら頼むなりの誠意があるし、アヤベのモチベーションに関わるものなら殊更大切な事。何としてでも彼女には全力で向かってきて貰いたいのだ。

ク、クソ??折角交渉成功まで漕ぎ着けたのに、最後の最後で失敗とかしたくない??トツ、トプロ?そんな、『もう一声!』みたいな期待の眼差しで見ないでくれ??何も浮かんでないんだ?助けて??。

「??じっ?。」

「じ?。」

「自慢ツ、出来るぞ。」

僅かにアヤベさんの目が見開かれた。

そりやそうでしょうよ。バカみたいな理由だもの。なんだ自慢出来るって。誰に自慢すんだ。

ええい、ままよ!デジタルの凄さを俺が自慢してやろうじゃないか!本末転倒、これ如何に。

「2000人以上いるトレセン学園のウマ娘。その中でもダートデビューから芝G1を取って、海外だって勝って、適正距離外の3000m級長距離レースを取ったウマ娘は??アグネスデジタルただ1人だ。”唯一抜きん出て並ぶ者無し”。そんなのを相手にしたら、アヤベにとつても大切な誰かに出来る自慢話になると思わないか?」

半ばやけっぱちである。それでも目の前の一等星は??アドマイヤベガは、確かに笑った。上を見上げ、遠くの誰かに誰かに思いを馳せる様に。

ふっ、と短く息を吐いて再びこちらを向いたその眼には、有り余る

ほどの闘志が満ち満ちていた。

「そう??ね。きつと語らうには、充分過ぎるほど??予定が決まったら教えて。そのただ一人を、私は必ず捉えてみせるわ。」

そう言つて手を上げたアヤベは、クールビューティに去つていった。

あつぶねえツ!!OK貰えた!えっ、貰えたよな?ギリギリだったよな!?怖かったよお??ふええ??キツシヨ!!!

トップロードもアヤベの後を追つて休憩へに行った。ありがとう、ナリタトップロード。ありがとう、心のトップロード。後でおデコに何かさせてくれ。ところで肉と米、どっちが好きだ?

「トレーナーさあん、少し手伝つて貰いたいんですが??。」

「ん?おう、良いぞ。」

ひよっこり機材の中から顔を出したのは我が半身、勇者デジタル。

「どうしました?何か嬉しそうですね。」

どうしたもこうしたも、この短時間に完璧なまでのネゴシエーションを済ましてトップロードと関わりを持ち、アヤベにもレースの併走を依頼出来たのだ。三十路はもはやウツキウキなんだよ。お前にも俺の華麗な交渉術を見せてやりたかつたくらいだ。ふふ??何したかって言われたら何もしてないんだが。

「デジタル喜べ、アヤベとトップロードの2人と併走が決まったぞ!」

「へっ?な、何故にそんな大御所2人と???」

「そりやもう俺の華麗な話術と誠意がだな——。」

「あつ、また土下座しました?」

「何だまたつて。俺がいつ土下座したんだ。」

「保健室教会を作る時に理事長様と一緒にしましたよね？」  
「なにイ???したわ。ヌウ、どうも最近忘れっぽいらしい。」  
「んもうトレーナーさんってば、しっかりして下さいね。」

『アツハハハハ!!』

「歳?ですかね??。」

「やめ??そういう事?やめろよ??。」

相棒の言葉に恐怖心を覚えつつ、小突き合いながら2人で機材の調整を進めたのだった。

第3R : \*おおきな えいゆう Rob Roy

昔の事と言うのは、何をキツカケにして思い出すものか分からない。

例えば??今日の前で聖蹄祭の準備をしているウマ娘がいる。名前をゼンノロブロイ。大きな耳にこれまた大きな眼鏡。身長は何とデジタルよりも小さいというロリっぷり。可愛い。

違う、待て待て、俺はロリコンじゃない。ロリだから可愛いのは無く、可愛いと感じるものがたまたまロリだったただけだ。割合的に今までの出来事もそう。絶対そう。

話が逸れた。つまり図書室でせかせかと働く彼女の姿に、俺は昔の友人を思い出しているんだ。田舎町から電車で通っていた隣の男子校??その図書室に居た友人の事である。彼も身長はかなり小さく、眼鏡をかけていた大人しい男子生徒だった。

名前を——”ドスケベむっつり丸”。

あまり接点の無かった彼だが、ひよんな事から少しばかり仕事の手伝いをする事になり、どこかオドオドしていた彼との心の距離を何とか詰めようと軽い下ネタジョークで場を和ませたんだ。それが彼の導火線に着火してしまつたらしい。彼はかつてこう言っていた。

『図書委員の8割は官能小説読んでるよ。』

んなわけねえだろ。何で図書委員全方向に喧嘩売る発言してんだ。だがその時の俺はと言えば、あまりに衝撃的な事実に『えっ、マジで?』とGレベルの賢さを全面的に押し出してしまった。じゃあ残りの2割は何を読んでいるのかと聞いたたら、彼は眼鏡をクイツとしながらこうも続けたのだ。

『快樂天。』

バカにしてんのか。それ結局のところ図書委員の10割はエロ本

読んでるじゃねえか。しかもアイツが2割の方だった衝撃たるや。

だがそんなスケベ男も今となつては妻子持ちである。それどころか結婚式の友人代表挨拶もやってやったさ。この世は無情。幸せに暮らせよクソが。

「あの、デジタルさんのトレーナーさん??。」

「はいよ?。」

「すみません、少しだけ?あの、手伝ってもらいたい事があつて??何か考え事をしていた様なので、お忙しいなら??。」

「いや、大丈夫だよ。」

いかんいかん、快樂天だのなんだのを考えている場合では無かつた。今日はロボロイが聖蹄祭でやる図書室での読み聞かせの為に、レイアウト替えをしたいと頼まれているのだ。うちのチームに誘っている3人娘の内の1人であり、未だ返答待ちな彼女のサポートをしつつ絆ゲージを上げようという魂胆である。

尚デジタルはトレーナー室に籠ってフライヤー作ってる。アイツ本当に何者だ?

「俺は何をしたらいいかん?。」

「この本達を1度棚に戻そうと思うんですけど??脚立は他のところに貸し出してしまつていて??。」

成程。届かないから手を貸してくれとのことらしい。お易い御用である。

こちらら低身長のウマ娘を持ち上げるのはプロ中のプロ。今まで何度マヤちゃんに高い高い改め、Fly Flyをしてあげたことか。因みにその都度天井に頭をぶつけている。この間で通算14回目だったな??。

いや、あれはトレーナー室の天井が低いからだ。図書室はそうでは無い。よし。



「よいつしょ。ほい、どうぞ。」

「えっ、ええッ!? あ、あの、トレーナーさん!？」

「ん、どうした?」

「あの、どうしたって?? その??。」

何やらキョロキョロしている。ははあん、さては俺が三十路なのに無理していると思ってるな? 安心してくれロブロイ。

めっちゃ無理してる。辛い。

違う、決してロブロイに重みがあるとかそういう事を言っているんじゃない。ただマヤちゃんやデジタルにやった時より俺のパワーが落ちているというだけだ。年頃の女の子が傷付くような事は言わないぞ。ん? これ遠回しに言ってることにならんか? 言ってる俺はそんなおじさんじゃない。

本っていっぱい持つと凄く重いから、その分が加算されているのだろう。そしてロブロイ?? 出来る限り迅速に対応して頂けると三十路の1度も使っていない腰が砕けなくて済むからお願いします本当に。

「うう? あの、お、終わりました?? もう大丈夫です??!」

「ほい、了解。」

腰をいわさないよう、ゆっくり下ろすと、ロブロイはパタパタと自分の持ち場へと戻って行った。心做しか耳と尻尾がエライ動き方をしていた気もするが?? まあ良いだろう。

さて! 味方を増やすにはまず情報からである。俺はジャケットの内ポケットから、デジタルの書き纏めた勇者手帳を取り出した。

ゼンノロブロイについて知っているのは、本の虫と呼ばれるほど本を読む事が好きであり、控えめな性格とは裏腹に”英雄”に憧れている1面も持つという事だ。即ちその2点を上手いこと攻めていけば、ワンチャンここで勇者御一行の頼れるメンバーにもなりえる。情報を制するものは戦を制すとはよく言ったものである。

どれどれ。

ゼンノロブロイさん : 140cm / B89 / W56 / H78

9?  
アイツ??また開幕スリーサイズなんて纏め方しおつてからに??8

ちらりとロブロイの方を見る。ふーん??勇者手帳をちらり。

そうかそうか??成程??。

デツツツツツツツツツ  
!?!?!?

ちゆ、中等部だロイ!?!これおかしいだロイツ!?!だってポーノと身長40も違うんだぞ!?!何でここは10しか変わらねえんだよ!!どんなバランスしたらこんな事になる!?!本格化ってなんだ!?!

リアルか?大きさにビツクリ、ロイヤル級なあの子——Rob Roy.

確かに何度か彼女の勝負服は見た事あるが、あんなにだったのか??おのれスコットランド衣装??ッ!普段控えめに見せておきながら時間差で童貞を殺しに来やがって。カレンだつてもうちよつと早めにお兄ちゃんを搾りに来るんだぞ。

しかし落ち着けよ。

女性はそういう目線に敏感なのだ、昔酒の席で後輩ちゃんに教わった事がある。”お前さん見るもん無いじゃん”と言つて割と本気な蹴りが頬を掠めて飛んできたのも懐かしいものだ??桐生院 葵ちゃんが手刀で瓦を割るエビワラーなら、足でそこそこの角材へし折るサワムラーが後輩ちゃん。スタイルも目つきも似てるし。いや??これは流石にデリカシー無かったね。ゴメンよ後輩ちゃん。でも無いもんは無いから。

フウ??しかしあれだな。逆になんか一周回つてちよつと落ち着いてきた。カレンのようにグイグイ来るわけじゃないから心のゆとりが違うのだろう。これで距離感バグってたら股間のスコットランド



俺は未だに黒歴史を作り続けるおじさん。こんな台詞本当に言うやつ居る？居たわ。

ヌツ、ロブロイちよつと元気なくなっちゃった。心做しかRob Roy。も元気がない様に見える。いや、俺は見えていない。視界の隅でそうなってるだけだ。

「??大したことじゃないです。今までも、夢物語だつて言われてきたので??。」

「それがゼンノロブロイっていうウマ娘を動かす原動力なら、俺は尚更知りたいと思う。無理にとは言わないけれど、それで君へのチーム勧誘を取り下げるとな事は絶対に無いよ。」

Rob Roy。が上がった。

あつ違う、ロブロイは顔を上げた。クソがツ！話に集中出来ねえツ!!俺はトレーナー、俺はトレーナー??よし、穴が空くほど眼だけ見てる童貞。凹む。

「??昔、夢を見たんです。子供の頃に1度だけ、自分なのに自分じゃないみたいな感覚の夢を。ターフの上をめいっばい走って、それが凄く気持ち良くて??今でも覚えています。沢山のウマ娘??の子達が居て、一緒に競って、勝ったり負けたりして??そんな時でした。私の前に、あの人が見れたのは。」

「あの人?」

「はい！周りにも沢山のウマ娘達がいる中で、その人だけは違いました。黒い髪を風に靡かせて、まるで空を飛んでいるように走って！衝撃でした！本当に、凄く綺麗で強かったです!!」

ギアが入ってきたのか、瞳を輝かせたロブロイがこちらに顔を寄せてきた。同時にRob Roy。も飛ぶように跳ね、僅かに腕を掠める。

はい致命傷。

こつちも衝撃だよ？トレーナーさん、今あまりに唐突な出来事に反応出来なかつたけど後ろに吹っ飛びそうだったからね？

視界の隅に入れてるだけなのにさっきから89が主張を止めないんだ。聞いたいてなんだけど話が全然入ってこねえ??。何なんだこの状況は。ただ会話をしているだけなのにここまで取り乱されるのは流石に俺も初めてだよ。勇者御一行には居なかつたタイプである。

「いつかあの人に追いつきたい。夢の中だけの話かもしれないですけど、必ずいつか??そう、思つてて。あの人に聞いた事もあるんです。どうしたら貴方のようなれますか?」

俺も聞きたい。どうしてそんな本格化が起きたんだ。

話の内容が一応頭に入つてはくるが、記憶に残る間もなくぬるりと滑つて流れ去つていく。いかん。眼を凝視しすぎてこつちの眼が乾いてきた。ずっとニコニコしてたから表情筋もエライこつちやだ。

しかし考えれば考える程凄まじい。

いや、何も女性は大きさが全てと言うわけじゃない。ただ童貞には些か刺激が強すぎると言うだけである。良く考えても見ろ。ウチの可愛いチームメンバー、大半がロリ。まあロリよかちよつと大きいものにも、お兄ちゃんをベッドの上で足蹴にせんと攻めてくる芦毛の怪物がいるわけなんだが。ヒヒン。

そう??別に大きいからと言って俺の可愛い基準がブレるわけじゃない。あない。

「そしたら??『貴方は私にはなれない。』って、言われちゃつて??。あはは、そうですよね。だってあの人と私じゃ、全然?違うから??。」

いやいや、だからと言って大きい事を大事にしているポーノをどうこう言うわけでもない。ポーノはウチのチームのお料理サポーターであり女神。たまによく分からんデカブツを作り出すがそれも愛嬌だ。彼女はいつも言っているじゃないか。

「大きい事は良い事だ。」

「えっ?」

えっ? あ、ヤベエツ! ついうつかりボーノの口癖が! これでは俺が Rob Roy の事を考えていた挙句、その大きさにスタンディング オベーションしたようなものではないか! 座れ、ムスコットランド。ハギス食わずぞ。

だ、だつて無理じゃんこんなもの?? 逆にどうしろつてんだよ。これでも精一杯頑張ったんだぞ??。そんな衝撃携えておいて善のロブロイは無理だろ??。

ロブロイはどこまで話した? 何を言っていた? そ、そうだ夢? なんか夢の中に出てきたウマ娘がどうか?? 夢? ヌツ!!

「夢の話だよ。夢物語?? 周りからそんな風に言われても、君は今こうして眼を輝かせながら話をしてくれた。それは君の中で大きくなつた夢を、君自身がいつまでも信じていたからだ。ならば始めるだけさ。」

「で、でも、私は? 休みも多いですし、デビューしても全然結果を残せていなくて??。」

「本格化が始まっても遅咲きの子は居る。これは俺とデジタルに色々教えてくれた”世代のキング”が言っていたことなんだが—— 出遅れたつて取り戻せるんだ。決して諦めず、頭を下げなければ必ず夢が向こうからやってくる。君の歩む道に花を添えさせて欲しいってな。」

ロブロイは下を向き、キュツと唇を噛んだ。

はあい深呼吸ーツ!! 危ねえツ、何とかそれっぽく話を繋げたぞ??。

いや、元々話を聞いてなかった俺が全て悪いのだが、如何せん Rob Roy の影響力が凄まじいのだ。これでカレンばりに距離感バグってたら、俺は今頃スコットランドの刑務所で勇者御一行に手紙を

書いていた頃だろう。トレーナーさんは今日も元気にシコツトランドです。はい国際問題。

「??私は?英雄になれるでしょうか??」

「ははっ、トレーナーじゃない俺がそれに応えてあげるには難しいな。けれど俺が夢の中のウマ娘だったとしても??きつと同じ事を言うかもしれない。君は誰かと同じ様にはなれない。それが、君の憧れた夢の中の英雄であつてもだ。どうしてか分かるかい?」

「??どうして、ですか?」

「これは他ならない、”英雄”ゼンノロボロイの物語だからだ。」

ハツとしたように顔を上げたロボロイ。その目尻には僅かに涙が浮かんでいた。

「主人公はただ一人。君だ。誰かに自分の憧れを映すんじゃない、君自身が憧れて、誇れる自分になれば良い。今は時間がかかるかもしれない??それでも明日は、その次は、必ず。そうして我武者羅に追い続けたら、きつと夢の中の彼女だつて君を見てくれるんじゃないかな。」

「トレーナーさん??。」

ふむ、この反応??どうやら中々にいい線を言ったらしい。ふふっ、自分の勧誘スキルが怖いな。まあもつと怖いのが、視界の隅でチラチラしている89なのだが??あつ、そうじゃん!俺が上から見下ろす形になつてるから視界に入るんだ!つまりロボロイの目線に合わせてやればそんなに気になる事は無いのでは?ヒュー、冴えてるうー!!

ようし、ちよつと屈んで目線を合わせて??ここから畳み掛けるぜ!!

「君は強い子だ、ゼンノロボロイ。誰がトレーナーになるかは分からないけど??約束するよ。君なら”絶対”に夢を叶えられる。憧れに手が届く。だから胸を張るといい。」

あつ、因みにこの場合の胸を張るといふのは気持ち的な問題だから、何も本当に張らなくても――。

「はいっ、頑張ります!!」

いって言うおうとしたロオオオオイツ!!! 圧があッ! 眼前の圧が凄つごおいッ!! 目線を合わせたことによる波状攻撃が顔を掠めていくウツ!! 中等部の固定観念が壊される! 観念破壊は楽しいロイ!! デデ大王ならぬデツデツデツツツ!? 『私が先導します!』とでも言いたげな自己主張はまさにBIG BOSS!! 結果、逆効果です! 何の成果も得られませんでしたッ!!

そ、そんなに元気出たのか? はち切れんばかりの胸が?? あつ違う、胸がはち切れんばかりの思いがオツパ?? じゃなくていつぱいなのか? 俺もいつぱいな。もうマトモに思考が働かない位には動揺してるの。ふふつ、流石童貞。伊達に30歳迎えてないな。凹む。

しかし今までの話の流れを考えれば、まるでロブロイのトレーナーが誰であっても応援するぞ、みたいな形に収まってしまった。本末転倒である。俺は何としてでもロブロイをウチのチームに参加させたいのだ。

あつそうだ! 合宿に参加してもらえばいいじゃん!

何しろ最近の流行りは、”仲の良いあの子とドキドキ♡友情トレーニング!” (デジタル談)らしい。こうすれば後はウチのメンバーがあの手この手でロブロイを仲間にしてくれるだろう。その繋がりですイーピーやフラワーちゃんも来てくれれば万々歳。

スィーピーとは1度しか話した事が無いが、勧誘した時は『ふふん、考えてあげてもいいわ!』と上々の反応ではあった。彼女の面倒をよく見ているフジキセキ曰く、”自分の気持ちを素直に出す子”との事。ふふつ、良いぞ?? 俺そういう子好き。気掛かりがあるとするれば、何故かフジの顔が終始ニッコニコだった事と、『流石勇者は怖いもの知らずだね。』と言われた事だが?? 分からんものは分からん。

ヌツフフフ?? 次の合宿は熱くなるぜツ!



去年はカレン水着Ver.の誘惑が半端じゃなかったからな。ロ  
ブ Roy 達も混じえて何とか距離を??水、着?

「??ト、トレーナーさん?どうかしましたか?」

終わったわ。助けてデジたん。

## 第4R : \*ゆうしや の めざめ

聖蹄祭の本番が近付き、いよいよトレセン学園内は盛り上がりを見せてきた。

そんな中勇者御一行のトレーナー室には、後輩ちゃんとブルボン、向かい合うように俺とデジタルが座っていた。『頼みたい事があるんで、ちよつと時間下さい』と言われたのが今日の午前中である。

空気が若干ピリついているのは気の所為だろうか。

ブルボンはじつとこちらを向いているし、後輩ちゃんはソファアに腰掛けたかと思えば目を閉じて黙るし、デジタルはソワソワと落ち着かない様子。やっぱ気の所為じゃねえわ。気まずいもの。

おい、止めろ相棒。人の顔見て”また何かやっちゃいました?”みたいな視線を向けるんじゃないよ。何でもかんでも俺が原因で事が進んでると思つたら大間違いだからな。そうだろブルボン。

あつ、目を逸らされた。

まあ大方想像はつく。ここに来たと言う事は、以前本気の宣戦布告をぶつけてきた事に関係しているのだろう。何だと? やっぱり俺じゃないか、たまげたなあ??。

「??ここに来たってことは、何かあるんだろう。この間の件か?」

「はい。簡潔に申し上げます。アグネスデジタルさん??私と走っては貰えないでしょうか。」

「??へっ? ええッ!?ア、アタ、アタシですかあッ!」

「だと思つたよ。ただ何でこのタイミングなんだ? 聖蹄祭が終わつてからの方が時間に余裕があると思うんだが??。」

「確かにそうかもしれませぬ。ですが、デジタルさんが最終日のエキシビジョンに出る事を考えるなら、そちらにとつても都合が良いかと。」

あつ、ふーん??そちらにとつても、ねえ??。

チラリと後輩ちゃんに目を向けるが、相変わらず目を閉じて黙だんまりを

決め込んでいる。どうやらこの場はブルボンに任せているらしい。俺はてつきり彼女が仲介役となり段取りを組むのかと思っていたが??ううむ。

「だそうだぞ。どうする?。」

「アタシとしては願ったりですけど??その?。」

「??もし何か思う所があるのでしたら、こういうのはどうでしょうか。」

ブルボンは僅かに言葉を溜め、固く手を握りしめて言い放った。

「私が勝ったら、デジタルさんをハーバーにお借りすると言うのは。」  
『えっ?』

何それ聞いてない。

えっ、ヤダ。普通に嫌ですよ。

お前ウチからデジタル引き抜いたらこのチーム大変な事になるんだぞ。憐れなお兄ちゃんはカレンに喰われて、ポーノとちゃんこを食べ過ぎて太り気味になり、管制塔としてマヤちゃんを大人の女にしなければならないことが始まってしまう。トレーナーちゃん理解<sup>わ</sup>ちやった!メーデーメーデー、社会的死亡案件発生<sup>か</sup>の疑いあり!

新人ちゃん達も、普段は大人しいが時たま距離感おかしい時あるし??この間なんて無言でフジツボを頬に押し付けられた。テロか。今後3人娘が来た時の事も考えれば、俺だけじゃ対処しきれねえ??特にRob Roy。——じゃなくてロブロイ。ヌツ、もしかして俺はトレーナーの中で最底辺なのでは?凹む。

「デジタルさんの持つ知識。ウマ娘としての在り方。レースで見せる末脚と勝負勘の良さ。そして距離適性すら覆したその力を借りられぼと。」

「??それは、何だ?合同練習で、とかじゃ??ダメか?。」

「はい。」

「そ、そうか??ならウチが勝つたら?」

「考えていません。負けるつもりはありませんので。」

こっわ!!ちよつとブルつとしたボン!今日のサイボーグやりにくいボン!お前さんそんなキャラじゃなかったじゃん!もつとこう??中身幼女みみたいな無垢娘だったでしょうが!高等部だけど色々無知な無知無知つ子だったでしょ!?

た、確かに元からデジタルの事考えてた節はあつたし、この間の宣戦布告もあるから戦意マシマシな気分なのかなってのは思ったよ!

何だよ??そ、そこまで怒らなくても?いや、俺何も言えねえわ??。

「トレーナーさん。」

「??何だ?」

「どうしたいですか?」

アグネスデジタルは笑っていた。

「どうって??何が?」

「どう、したいですか?」

お前はお前でクソリプロbotみたいになるんじゃないよ!こっちは質問の意図汲み取れてないんだって!あと聞くんだったら”どうしたいか”じゃなくて”どうしますか”でしょ!一緒に考えてくれるよ!それだとお前が俺の意志絶対尊重するウーマンみたいになるだろ!ウマ娘だけに。ふふつ??は?!

えっ?本当にどうしたらいい?何が正解なのよ?こ、後輩ちゃん、何か言って——何驚いた顔してんのお前さん。驚きたいのはこっちだわ。こちとら訳分からん内に半身と離されそうになってんだぞ。2人揃って1・5人前位なのに1人前の部分を持っていくんじゃないよ。

ええい！負けたら引き離されるならとことんやってやろうじゃねえかつ!!

「??勝つ。以上。」

「はい。」

「では、レースの条件に関してはそちらにお任せします。マスターのおかげもあり、マイルでのレースも想定したトレーニング、及び実績は取得済みです。距離の面に関しては、適正の問題はありません。」

うむ。確かにここ最近のブルボンは、ステイヤーと言うよりマイルーバりのレースローテーションを組んでいた。成績も残せているし、仕上がりもほぼ完璧に近いまである。

あつ、全部後輩ちゃん情報です?!

だが甘く見るなよブルブルボンボン。こちららマイル負け無しの半身、強くて可愛いデジただぞ。香港で世界のウマ娘達を舐め回すように見た挙句全員抜き去って泣かした実力は伊達じゃあ無い。だよな、デジ??なんかビツクリするぐらい大人しいなお前。ずっと笑ってるし。お、おい??変な事言わないよな?..なつ?

「では芝2400mでどうでしょう?..」

デ、デジタルツ!

今話聞いてたツ!?それ中距離じゃねえか！中距離ってお前??勝つたり負けたりしてる距離だぞ?!?よりによってブルボンが1番得意な距離で何ガチンコやろうとしてんのよ！折角条件決めさせて貰えるんだから1600mで良いだろう!!あつ、いや、勿論デジタルが負けるなど微塵も思っていない??思っていないぞお?!

「折角ブルボンさんと走れる機会ですし??なら、アタシだけじゃなくてブルボンさんにとっても有意義なものしたいと思うんです。」

「??それは?..」

「それにほら！アタシはどんな距離でもバ場でも走っちゃいますから！ウマ娘ちゃんがいるだけで適正距離は変わるつてものですよ！これでも——オールラウンダーなので。」

「??分かりました。では、明日の放課後に。よろしくお願いします。」

立ち上がったブルボンはそのまま部屋を後にした。

心做しか顔が怖かった気がする。お前もそう思うよな？ポニーちゃん。

「デジタルさん。この人ちよつと借りていつでも良いですか？」

「はい。どうぞどうぞ。」

「えっ？何？何？」

「ちよつとこつちに。」

後輩ちゃんに手を掴まれて俺達も部屋を後にした。

やって来たのは、もう俺らしか使っていない学園の端も端。パイプ椅子が2つ並んだだけの簡素な喫煙所だ。いや、訂正。使ってるのは俺1人だったわ。このヒト娘は駄べりに来てるだけである。

彼女は俺の方を向いて、頭を下げた。

「すみません、先輩。」

「待て待て待て！何で頭下げてんだよ。説明してくれなきゃ俺はさっぱり分からないんだ。お前さんやヨシエさんみたいに、察しの良いタイプじゃないんだから。」

「ブルボンさんを焚き付けたのはアタシです。」

爆弾発言。

ヒュー！<sup>だんま</sup>黙り決め込んでると思ったらお前さんかーい！だがこのヒト娘が意味も無くそういう事をしないと云うのは良ーく知っている。だからこそ説明が欲しいのだ。無知な男にどうか状況説明をして頂きたい。

「ブルボンさんは??本気です。ウチのチームに来て、初めて言ってくれた頼み事でした。勇者御一行——アグネスデジタルさんと、先輩の2人と競いたいって。」

「ああ??まあ、そこは何となく伝わったよ。ぶち抜くとか直接言われてたし。」

「あの子は本気のデジタルさんを望んでいます。勿論、デジタルさんが優しさから手を抜くとかそんな事微塵も思っていないですけど。んで、分かりやすく本気を出させるなら条件でも出してみれば良いって言ったんです。その時はあの子も、”考えてみます”って話してたんですけどね??。」

「??さてはお前さんにも言っていなかったな。」

「はい。ただ間違っても、あの子は——。」

「分かっているよ。あんな風に煽るタイプじゃない。そしてお前さんが、それを知ってたら無視出来るような性分じゃないって事もな。」

どの道いつかはこうなると思っていた。向こうにその気があるのなら、遅かれ早かれ決着をつけなければならなかったのだ。

だがここで1つ気掛かりなのは、何故ブルボンがそうまでしてデジタルを唆そそのかしたのか??ううむ。それが分からない。

デジタルは確かにウマ娘相手には、やたらと自分を下に見る。それでもトウインクル・シリーズの中で色々なウマ娘と競い、キングヘイローにその在り方を教わり、オールラウンダーとして戦ってきたんだ。アイツはいつだって本気だった。それでも足りないと言うのだろうか。本気ってなんだい?

「??もつとも、1番予想外だったのはデジタルさんですけど。」

「えっ?何で?」

「何でって??それマジで言ってます?」

後輩ちゃんは訝しげな表情でそう聞いてきた。

いやだつて??笑つてたし。ウマ娘達は耳やしっぽに、その感情が顕著に表れる。流石に俺もトレーナーの端くれ、耳を絞ったウマ娘は機嫌が悪いと言う事くらいは知っているぞ。だがデジタルにそんな様子は見られなかった。

まあちよつと食い気味というか矢継ぎ早にブルボンへ言葉をかけていたものの、それ以外は至つて正常である。

「あのデジタルだぞ?ちゃんとブルボンの為にもつて言つてたろう。」  
「それですよ。今まで勇者御一行とはそこそこ合同練習させて貰いました。ブルボンさんがマイルを問題無く走れるようになってる事も、デジタルさんが中距離で安定してない事も??デジタルさん自身が良く知つてるはずなんです。その上で、中距離でどうぞつて言つたんですよ。」

「うん??つまり?」

「ブルボンさんは最初に、エキシビションの事もあるからつて言つたはずですよ。あの子マイルですよ?距離が変われば走り方もレースの展開方法も変わります。こつちの為を思つて中距離に??逆を返せば、マイル走るのに付け焼き刃じゃ自分には、絶対、勝てないから、ブルボンさんの得意距離でやりましょうねつて話をしてるのと同じですよ。」

「??アイツがブルボンの煽りに乗つかつたつて事か?」

「個人的には煽り返したぐらいに思いますけどね。それか??あえて怒らせた、か。だからおつかないんですよ。あの笑顔見せてた事が。」

いや??いやいや、まさかあ??。アイツは単純に、相手を自分の得意分野に引きずり込んで走るつて言うのが好きじゃないだけだ。現にオペラオーやドトウと競つた時も、天皇賞を選んだんだし。

だが??うーん??。

「想像は出来ないなあ??。」

「まあ??でしょうね。ただ1つだけ言わせてもらおうなら、勇者御一行



は結束力がトレセンの中でもトップクラスに強いですけど、着火のしやすさもダントツって話らしいですよ。」

「??マジ?」

「さあ??でもそれが本当なら、そういう心理状況だったって事ですね。そうなる理由なんて1つじゃないですか。そのクソボケ読解力で理解してあげて下さい。」

「今クソボケって言ったか?ファル子のトレーナー程じゃねえだろう。」

「あの人引き合いに出てくる段階で大分ヤバいっすから。」

胸ポケットから煙草を取り出して火をつける。

静かに燻り続けるその熱は、デジタルの??或いはブルボンの心情の様に思えた。

「なあ、デジタル。」

「はい。」

夕焼けがターフを真っ赤に染める。

隣に立つのはジャージに着替えた我が半身。ミホノブルボンがやってくる前に、どうしても昨日の事を聞いておきたかった。

「昨日——。」

「アーツ!!あれはデジたん一生の不覚!大罪!煮ても焼いても食えない業! カルマ につちもさつちもねエ!ニツチなのはトレーナーさんの趣味だけで充分ですよツ!!」

「うるっさ。まだ何も??お前今なんつった?」

可愛いオタクには毒がある。いや毒素しか無いが、まあ目を瞑ろう。どうやら何かしらの自覚はあるらしい。反応からして??やはり後輩ちゃんの言ってた事なんだろうか。

「うう??ウマ娘ちゃん達を推して早10数年?アタシはなんて事をお??」

「ちよつと怒ったのか?」

「怒る??誰がです?」

「デジタル。」

「誰に?」

「ブルボン。」

「いーいーいーいーいーや無い無い無い無いありえませんが!ブルボンさんがアタシに怒るのは分かりますけどその逆う!?かあーッ!それでもアタシのトレーナーさんですか!何年変態やってきてるんです!」

「1年たりともやった覚えねえよ。じゃあ昨日のは??。」

「あれは??怒ってなんかいないです、けど?おつ、怒らせようとは??しちゃいました??。」

ぶち上がったリフォールダウンしたり??ベストアルバムのラインナップみたいなテンションだな。

慣れない事をしたせいか、或いはウマ娘に対してそういう事をした自分を許せないのか??デジタルは珍しくしおらしかった。

「??もし?あれが、ブルボンさんにとって必要な事だったって言ったら??信じてくれますか?」

自信の無い声音。余程堪えているのか??まあ返答など1つしかないが。

「ふふっ??俺が今までお前を信じなかった事があつたか?」

「結構ありましたね。」

「そうかもしれないけど台無しだわ。」

「あはは??なら信じるついでに、もう1つだけお願いします。」

そうやってデジタルはこっそりと俺に耳打ちをしてきた。

「??良いのか?」

「はい。」

デジタルはたまに分からない時がある。何を考えているのか??と  
言うより、何を見ているのかが分からない。ただ間違いないのは、い  
つだってウマ娘の事を考えている事だ。

ウマ娘全てが推しなら、その推し達の手伝いをしたい——そうし  
て2人で作ったのが勇者御一行なのだから。

もうじき日が沈む。遠くからブルボンと後輩ちゃんが歩いてくる。  
何年一緒だろうと、きつと俺はデジタルの全てが分かっているわけ  
じゃない。それでも——。

”最推し”がそう言うんだ。やってやるさ。だから??勝ってきな、  
相棒<sup>同±</sup>。」

”最推し”がそう言うんです。みつともない走りはしませんよ。だ  
から??見てて下さいね、戦友<sup>同±</sup>。」

戦場を選ばない勇者と、坂路の申し子。

決着の時がやって来た。

## 決戦　：　坂路の申し子

『??これでもまだ三冠を目指すのか？勝てるレースをわざわざ捨てて。』

最初のマスターはそう言いました。

2000mの模擬レース??それをまともに走り切れなかった私を見る彼の眼は、最初こそ心配はあったものの、いつからか呆れの眼に変わっていて。

どういうウマ娘になりたいか。

どういう存在で在りたいか。

何を夢に見るのか。

何を証明するのか。

誰もが自分自身の特別な想いを持っている様に??私にとっては、それが『三冠ウマ娘』。

誰よりも速く、誰よりも運が良く、誰よりも強い。

レースに出る者にとって。

或いはレースを見ている者にとっての、特別な存在。

そんな特別になる事が、私の夢。そして私と父の——大切な約束。

『もう良いだろう、ブルボン。君のスタミナでは2000mも走り切れない??三冠を取るには、菊花賞だって挑まなくちゃならないんだ。私には、到底君のスタミナが持つとは思えない。』

『それは??次は必ず——。』

『聞き飽きたんだ。』

『っ?。』

『分かったはずだ。今の自分がそこを目指すのは、どれだけ厳しいのか。クラシック路線はただでさえ中・長距離を得意とするウマ娘達が鎬を削る。そこに適正の合わない君が出てどうなる?ただ悔しい想いだけで、何も残せず終わりたいくないだろう。』

自分に合った走りを。

自分の走れる道を。

叶わぬ夢より、叶う夢を。

あの人の言う事は正しかった。いつでも正しかった。だからこれは、私の我儘なのだと理解している。何も出来ずに終わるくらいなら、何度も思考を繰り返し、分析し、判断してきた。今の自分に足りないものを埋める為、自主練習も欠かす事はありませんでした。

『ブルボン。君が三冠ウマ娘になると本気で信じているのは——もう、君だけなんだ。』

その言葉に、周りのトレーナー達は何も言わなかった。ただ目を逸らし、より現実性のある方へと歩き出していく。

目の前のトレーナーは諦めなさいと言っている。私の眼を見て、より確実な方へと歩ませようとしている。私の為に??それは、間違いない彼の本心。

それでも……それでも譲れないから、私は走り続けているのに。

『いつから言ってるんです?それ。』

『??何だね、君は?』

『あつ、すみません。通りすがりのサブトレーナーです??へへっ?。』

言葉に詰まる私の前に、その人は現れた。

『どころでさっきの話ですけど、いつから言ってるんですか?』

『??契約してからだ。この子にはスプリンターとしての才能がある。だが中々に頑固でな??三冠ウマ娘になると、ずっと聞かないんだ。』  
『スプリンターが三冠ウマ娘??へえ?。』

サブトレーナーを名乗るその人は、私の顔を見て少し考える素振り

をしていた。

また、無理だと言われるかもしれない。

或いは他のトレーナーのように、当たり前障りなく諦めを諭されるかもしれない。

私の走れる距離は決まっっていて、無理をするなど??普通のトレーナーなら、そう言いたい筈です。

けれど私のそんな気持ちとは裏腹に、目の前の人は笑っていた。

『イイじゃんか。俺は最高に良い夢だと思うよ。』

『なに?』

『適正距離なんか気合と根性と努力で跳ね飛ばすって事ですよ。並大抵の事じゃないですよ。正直??超カツコイイって思いますけど。』

掛けられたのは、私の知らない言葉。

『契約してからずっと??余程大事な夢なんでしょう。むしろ、それを叶えたいが為にトレセンにやって来たんじゃないですか?』

『無茶なものに挑戦しても、傷付くのは彼女だ。それは挑戦じゃなくて無謀だろう。』

『だから諦めろと?契約してからずっと言い続けてきたんですか?じゃあ何でこの子と契約結んだりなんかしたんですか。無茶な事だつて、他でも無いこの子が1番理解している筈です。それでも契約してくれたアンタと一緒に叶えてくれるかもしれないって思ってるからこうして頑張っつてんでしょうが。なら自分の目の届く範囲で一緒に無茶やって、叶えさせる為に最善の道歩かせるのがトレーナー<sup>達</sup>の仕事じゃないんですか?』

『君はサブトレーナーなのだろう。まだ1人も担当したことがないから簡単に言えるんだ。』

『そっすね。でも凝り固まった考えよかマシだと思ってます。』

肯定の言葉が続く。そう??肯定。

この人は、私が正しいと言っている。胸の内が熱くなる。  
これは??理解不能の、温かき。

『君の物言いは??皇帝のトレーナーに似ているな。いや、他人の胸ぐらを掴まないだけマシか??なら本人に聞けばいい。君はどうしたいんだ。まだ三冠ウマ娘を目指すのか?』

私は――。

『??私の夢は、父との約束を果たす事。即ち”三冠ウマ娘”の称号です。そこは??諦めたく、ありません??。』

『??なら、お終いだな。好きにきなさい……もう少し聞き分けの良い子だと思っていたんだが。』

最初のマスターとの別れは、そうして訪れた。

『へーんだ、だったら最初っから手出すなっつーの。バーカバーカ。さて??頑固なおっちゃんも行ったことだし??君はどうする?』

『私のやる事は変わりません。目標は三冠ウマ娘の達成です。』

『まっ??だよな。誰が何と言おうと、君なら出来る。だから自分を曲げるんじゃないぞ。俺はサブトレーナーの身だからあれこれしてやれないが、応援してるよ。頑張れ――ブルゾン。』

『ブルボンです。』  
『又ッ。』

笑ったその人は、背を向けて歩き出しました。サブトレーナー??もしもその縛りさえなければ??貴方は、共に歩んでくれたのでしょうか。

2人目のマスターは、それから直ぐに見つかった。私の夢を理解し、共に歩むと誓ってくれた新人トレーナーの彼女は、根気強く練習

に付き添い、思考し、最善の案を出し続けてくれた人でした。

だからこそ、ただの1度も負けることは無く、ダービーまで勝ち進み——世間の眼は大きく変わっていったのです。

無敗の二冠ウマ娘。皇帝シンボリルドルフ以来の偉業。世間がそんな風に話題を立てた頃??変わっていたのは、世間の眼だけではありませんでした。トレーナーは??。

見ていて分かるほど、疲れた顔をするように。

気を使って笑うように。

大丈夫だと、何度も自分に言い聞かせるように。

そう??なってしまうた。

クラシック路線最後のレース。

三冠ウマ娘を目前にした私は、菊花賞でライスに敗れた。父との約束を叶えられなかった。

悪役——<sup>ヒール</sup>ライスがそう呼ばれている中で、私達に??いえ。トレーナーに待っていたのは、世間からの手のひら返し。

”ミホノブルボンのスプリントが見たかった”

”適正を無視するから”

”ああ、やっぱり”

”あの子が可哀想”

マスターは優しい人。

優しすぎる人??でした。

だから??その声を全て自分が背負い、自分が悪かったのだと言いかせ、非は自分にあると言いつづけていたのです。走って、負けて、夢を叶えられなかったのは私だと言うのに。

私は??1度も彼女を恨んだことはありません。彼女と組んで後悔した事など、1度だつてありません。無謀だと言われた道を走り抜けた事を誇りにすら思っている??なのに…何故、貴女はそんなに自分を責めるんですか。

何故今まで一緒にいた私ではなく、向けられた世間の声に耳を傾け



るのですか。

貴女を知っているのは私で、私を知っているのは貴女じゃないですか。

『ごめんね、ブルボン。今日も取材で??練習、見れない、かな??。』

いつからか、彼女はそう言うようになっていました。

それが嘘か本当かはどうだって良い??ただ、私は貴女と新しい目標に望めれば??そう思っただけ??思っただけ、いたんです。

ある日ヨシエさんと一緒に現れたマスターは、私に言った。

『あのね、ブルボン??今日から、別のチームに移籍になったの。』

『えっ??』

『ご、ごめんね、相談も無しに??でも、新しいところはきつと良いところだよ!知ってる?ハーバーっていうチームなんだけど、もうかなり成績を残してるんだって!あつ、ライスちゃんも一緒だからね!だから??だからね??。』

隣に居たヨシエさんは、僅かに唇を噛んでいた。

ああ、そうなのかと。自分でも驚く程すんなりと理解してしまっただ。私は??この優しいトレーナーを——。

プレッシャーで潰してしまったのだ。

『理解、しました。マスターも??トレーナーの道を——。』

『??私、トレーナーは今日で最後なの。』

『ッ??そう?ですか??。』

2人目のマスターは、そうして自ら別れを告げました。もう2度と会うことは無い??別の道へと。

そこでようやく気づいたのです。私の夢は、単なる我儘だったのだと。望まれるものではなく、叶えることも出来なかった??そんな、身

勝手なもの。

もし勝てていれば。

もし最初から夢など見なければ。

もし。もし。もし。

『??マスターの情報を、変更。目標未設定??ごめん、なさい??。』

遠くなる彼女の背中を見つめながら、私は下を向く事しか出来なかった。

新しいマスター。3人目。

ヨシエさんが見繕ってくれたその人の元へ、ライスと2人で訪れた日の事をよく覚えている。

『ようこそ、ハーバーへ。ブルボンさんにライスさん、話はヨシエさんから色々聞いてますけど??取り敢えず、お2人つて前のトレーナーの事好きですかね。』

『えっ??』

『??質問の意図が不明です。』

『まあ??言っちゃえばウチに預けてどっか行っちゃった感じですし。実際どうなのかなって。』

『マスターはっ?!?彼女は、私の我儘に付き合ってくれた人です。共に歩んだ道に後悔など有りえませんが。』

『??ライスも、同じ、です。ちよつと??まだ、走るの怖いけど?でも??。』

『そうですか??トレーナーさん達、幸せ者ですね。こりや責任重大だわ??。』

『ねえ??大根役者のトレーナー。茶番続けてないで全員見返そうって、さっさと言えば————いったあツ!!痛い痛い、もうツネないだよおツ!!』

芦毛のウマ娘??クロフネさんの頬をつねりながら、彼女は笑っていた。

『了解です。ならそのまま優しい2人で居て下さい。吹っ切れるまで、無理についてこないなんて言いません。アタシは出来る範囲で最大限、勝手に手伝いさせて貰いますから。取り敢えず——クソムカつくんで、好き放題言ってくれてる世間様でも黙らせますか。』

イタズラ好きな子供のような笑みを浮かべ、しかしその眼は燃えたぎる炎が渦巻いていた。

ライスと私の前で膝を付き、手を取ってくれた彼女には絶対の自信が満ちていて??それから——それから?

レースで走り、勝利し、幾度となく賞賛の声を掛けてもらった。2人目のマスターと歩んだ道は正しかったと証明し続けてきた。

なのに??何故。

何故、私は満たされないのだろう。

何故この期に及んでも、彼だったならと淡い期待を抱いてしまうのだろう。

もう我儘は言わないと決めたはず。

もう望むものは無いと言い聞かせたはず。

破れた夢の事など、考えないと誓ったはず。

それなのに??。

『ブルボンさん!これからも一緒に頑張ろうね!』

アオハル杯が終わり、私にそう言ってくれたライスの笑顔。

これからも一緒に——本当に?

ウマ娘には全盛期があると、以前のマスターは言っていました。それは??夢が叶わなかった時、怪我によって追い込まれた時??『悪いユメ』に抗えなかった時。

ライス??貴女は、もう充分1人でも強い人になりました。私は??貴

女と同じ距離を走っても、もうG3クラスの重賞でしか勝てません。恐らくは、ここが私の終着点<sup>ピーク</sup>。

だから終わりにしようと思っんです。

最後にマイルの王者——距離適性すら覆し、オールラウンダーと呼ばれたウマ娘へ挑む事で。或いは、彼女を選んだ運命<sup>彼</sup>に抗う事で。

「はあっ、はあっ?!」

アグネスデジタルさん。

貴方が中距離??それも逃げウマ娘の相手を不得手としている事は承知しています。

本気で勝つ——その為には、大逃げに近い手を打ってでも貴女を引き離さなくてはならない。だからそうしたのに、貴女は私に付いてきた。ここに来て距離を詰めたのではなく、最初からピツタリと。普段の貴女では絶対にやらないような、ハイスピードの消耗戦。苦しいな表情には、いつもの明るく元気な笑顔は無い。

何故、ですか?貴女は何の為に??そんなになってまで走るのでしょうか。

有利なのは私の筈。スタミナの残りとスパートを計算しても、ペースが乱れたデジタルさんにとって厳しいものであるのは明白です。それなのに——勝てない。

走れば走るほどに。

ゴールが近づくほどに。

そんな気持ちだけが強さを増していく。

ダートも芝も、国内も国外も問わず走り続けた、ただ1人のウマ娘。いえ??それも、もう良いのです。勝敗に拘りはありません。これは1つの区切り??ウマ娘”ミホノブルボンを終わらせる為のレース。夢を持たない私は、走る事が出来ない。

私の夢は、他人を巻き込む我儘でしかない。

だから――。

「ブルボンさあん！」

「っ。」

「あのですね！こんな時に言うのもおかしいんですけど??っ、昨日はすみませんでしたあっ!!」

思わず後ろを向いてしまった。彼女は必死に走りながら、尚も叫び続ける。

「アタシ如きが余計な事を！でもっ??でもっ!やっぱり言わなくちやっと思っただんですっ!ハッキリさせたいなって思っただんです!」  
「何を??。」

そうして彼女は、一際大きく息を吸い込んだ。

「どーっうせトレナーさんが何かやっただんですよね!」

「??はい?」

??理解、不能。

「あの人大体そうなんです！真面目な顔して全ツ然違うこと考えてたり!でも言ってる事は間違ってるからウマ娘ちゃん達が勘違いしちゃったり!なんで上手く回ってるのかさっぱり分からない位には話が噛み合ってるなくて!アタシが契約する前も後もその辺なんにも変わってないんですよ!カーツ!!何なんですかね!」

「いえ?あの??分かりません。」

それは??なんでしよう。愚痴?文句?怒り?

??ステータス、『困惑』。

「だからブルボンさんも困ってるんですよね！本当はもっと走れるのに！本当は、諦めたくない事があるのに！無理して諦めようとしてるんですよね！！勘違いさせるような事言われたばかりに、自分の願っても分からなくなってるんですよね！！」

「私は??私には、そんなものはありません。」

「嘘ですッ!!」

「っ?!」

「ずっと見てきたから??ウマ娘ちゃんが好きなアタシだから分かります！分かっちゃうんです!!苦しんでる事、悩んでる事、精一杯もがいてる事??。その全てを知りたいんです！アタシに何もかも我武者羅にぶつけて下さい！本気のブルボンさんを見せて下さい！アタシにも、あの人にも!!その為なら”勇者御一行のアグネスデジタル”として、鬼にも悪魔にも変態にも——勇者にもなりますからあッ!!!」

彼女は速度を上げた。1バ身後方へと迫ったその顔に、いつぞやのライスと重なる鬼気迫るものが宿っている。

いつだったか、彼女のトレーナーに聞いたことがある。どうしてアグネスデジタルさんはあんなにも走れるのかと。

『デジタル?あー??すまん。正直分からん。でもアイツは、あのちっこい身体に色んなもん背負ってるんだ。自分が競ったウマ娘に恥じないように、想いを全部全部持っていくってな。世代のキングにそう教えられたからって言うのもあるが、元の性分だろうなあ。だからアイツと競うんだったら相應の覚悟がいるぞ。』

『それは??誰かの為に、というものですか?』

『いいや。”自分を貫き通す”覚悟だ。』

——覚悟。

今の私に無くて、彼女にあるもの。

私には??もうそれを持つだけの理由もありません。なのに何故貴女は私に期待しているのですか。

全部終わりにしようと思った私に、これ以上何を求めているのでしょうか。

私は??私は、どうすれば良いんですか。

「走れッ！ミホノブルボンッ!!」

その声は、私の名を呼んだ。

「後ちよつとだ！諦めるんじゃないっ！」

フエンスから身を乗り出して、声を荒らげて、必死になって。

理解不能。

貴方が応援すべきは??アグネスデジタルさんの筈です。貴方の担当は……貴方が選んだのは、彼女の筈です。

「相手が誰だろうと関係あるか!!お前は前を向けたんだろう!ならこんなところで負けたりすんな!デジタルにも!自分にも!」

後ろでデジタルさんが笑った。

それはあの人と同じ強い眼差し。

ふと??お父さんの言葉が頭をよぎる。

もし三冠ウマ娘の夢が叶って、目指すものが無くなったらどうすればいいか。私のそんな問いにお父さんは――。

『そうだね……簡単な事だ、ブルボン。お前は――。』

「お前はお前自身の願いの為に走れば良い!だからっ、だから頑張れッ!!」

??自分でも、呆気ないものです。

僅かに頬が緩む。ステータス、『高揚』を感知。

全ては、最初からこの2人の筋書きでしか無かったのだと、ようやく理解しました。

それはあの日と同じ、胸の内に熱を滾らせるたった一言の指令<sup>オーダー</sup>。

ああ??成程。私は——ただ、言って貰いたかったのかもしれない。  
ん。

「??状況の把握。後方1バ身にアグネスデジタルさんを確認。過去のデータより、スパートまで残り40mと推測。自身の体力、足の状態、概ね良好。自身の願い??認証。」

あの人に。

誰よりも最初に私の夢を認めてくれた彼に。

”頑張れ”と。

”強くなった”と。

それが——私の願い。

ここに来て、まだ諦めるなど言うのなら。

足掻けと。走れと。負けるなど言うのなら。

願っても良いと、言うのなら。

——存分に後悔して下さい。

「つーブルボン、さん……!」

私は確かに、負けるつもりは無いと言ったのですから。

「目標 : 『勇者御一行への完全勝利』に設定。これより全身全霊を以て——指令<sup>オーダー</sup>、『頑張れ』を遂行しますッ!!」





『アタシがスパートをかける前に、ブルボンさんを応援してあげて下さい。』

そんな事をこっそり耳打ちしてきた相棒だが??あの野郎、何レース中に俺への不満ぶちまけてんだア???聞こえないとも思ってるのかアイツは。いつ俺が勘違いさせるような事をウマ娘達に言っただ全く。しかもそれをブルボンに言うんじゃないよ。俺に言え。いや、やっぱり待って??多分凹む。

しかし思わず声援のフルコースを送ってしまったが……ブルボン、加速してね?お、おい、相棒?!大丈夫だよな!?!お前負けたらぶっこ抜かれるんだぞ分かってるよな!?!そっから間に合うんだよな!?!

あわわわ??あ、明日からトレーナー室にお前が居ないとかゴメンだぞ俺は!脱皮直後のザリガニ並にふにやふにやした三十路とか見たくないだろうが!!むしろ俺が後輩ちゃんのチームに行くからそれで良いだろう!

ヌツ?これでは本末転倒。後輩ちゃん曰くウチは着火しやすいらしいから何が起因で発火するのか分からん。そもそも俺が行ったところでマイナスである。良いとこ蹄鉄磨きだな。ハッハッハッ!!凹む。

「なんの吹き回しです?先輩があの子の応援なんて。」

「いやデジタルがそうしろって。ああでも……多分そうじゃなくても応援はしてたな。どうも俺はああいう真っ直ぐなタイプに弱いらしい。可愛い担当達然り、ブルボン然り、お前さん然り。」

「そっすか……ん?」

「何よ?」

「いや……別に。」

何だし。おい、露骨に眼を逸らすんじゃないよ。そういう時って大概何か思う所があるリアクションだぞ。そして1番傷つく動作でもある。凹む。

「でも良いもん見れました。ブルボンさん、なんか吹っ切れたみたいですし。デジタルさんの末脚が半端ないのは知ってましたけど、領域に入ったあの子に勝てんなら——。」

「入ってないぞ。」

「……は？」

「後輩ちゃん、まだ見た事ないもんな。入ってたらとつくの昔にブルボン追い抜いてるさ。多分今回は……絶対持たねえ。」

大逃げなんて柄にも無いブルボンの策にピッタリくつついて、今もその加速に何処までも食い下がっているアイツにそんな余裕は無い。そうじゃなくても俺への不満ぶちまけるのに体力使ってるし。何をやってるんだあのクソカワロリオタクは。

だがそれで負ける程ヤワな走りしてない事も確かだ。

アグネスデジタルより速いウマ娘は多く居るだろう。現に中距離ならマヤノの方が勝率が高いし、マイルに関してもタイムや着差だけ見ればチラホラと強い子はある。

だが、ここぞという勝負所は絶対に外さない。勝つと言ったら勝つ。

ほら見ろ、行くぞ？ウチの半身が行く……抜けっ……ちよ、おま、やめっ??あ、あつ、あつぶねえなあツ!!アタマ差じゃねえかよ!どんだけ博打かましてんだ相棒!ギリギリ楽しむスタイルはやめろ!!

「??はあ。願い叶って夢届かず、か。」

「危ねえ……絶対間に合わないと思った……引き抜かれるかと思った……。」

「領域なんてデタラメなもんに踏み込んで、そうじゃなくてもあんな走りして、適正距離も覆す……あの子、いよいよ天才っすね。」

「変態だが？」

「いって、お前ケツを蹴るな。ゴメンって……。」

「取り敢えず、アタシはデジタルさんのところ行ってきます。お礼も兼ねて、ちよつと今後の話もしたいですし。」

「おう。まあ何だ……今日は走れてよかったよ。サンキュー。」

「ごちらこそ。ブルボンさんのところ行っただげで下さい。あの子に今必要なのは……多分先輩の言葉なんで。ちゃんと良い言葉掛けて下さいよ。」

「任せとけて。」

とは言ったものの……先程相棒に『アイツ勘違い野郎だから！』と大声で叫ばれたばかり故、少々怖気付いているのも事実。なあに、普通にすればいいのだ。いつも通りクールに、スマートに。だから落ち着け、生まれ、俺の心臓。違う、止まるな。

「あつ、そだ。ウチらが勝ったらデジタルさん借りるって話……あれ全部嘘つす。」

「??なに?この。」

「”焚き付けたのはアタシ” って言ったじゃないすか。どつかで言おっかなーぐらいには思っていましたけどね。あんまりにも先輩がガチで狼狽えるもんですから……。」

「……………言うタイミングが無かったって?」

「いや?普通に見てて面白かったんで。めっちゃ信頼されててウケる的な?本気出してくれんならいつか、つって。」

「表出る小娘。」

「もう表つす。」

コイツ……ッ!人が担当を持っていかれそうになってる現状を、心の中でずつとニヤニヤしてやがった!ホントに5歳下の娘か!?大人

をからかいやがってこの、ううつ……!!

「て事なんで。ご馳走様でした。じゃ。」

「お前……あ、後で覚えてろよ！絶対泣かせてやるからなツ!!」  
「うつす。」

片手でヒラヒラとあしらわれてしまった。ヤロウ……しようがねえ、まずはブルボンである。

膝に手をついたブルボンはかなり疲労していて??というより、目元を手で拭っていた。

あれ？俺この状態のブルボンに無策で挑むとか無茶じゃない？何言っても逆効果じゃない？バカ言ってるじゃあないよ。

いや、待て待て、まだ分からん。なんてったってブルボン。強い子ブルボン。

「ブルボン。お疲れ様。」

「はい。今日は付き合って頂きありがとうございました。」

ほら見ろ、思ったよりも普通である。こちらを向いてはくれないが??怒っている感じでは無い。さっきのも目元の汗を拭ったとかそういうやつだと思うんだ。うむ。

「??トレーナーさん。何故貴方は私を応援したのでしょうか。私には、何度考えても分かりませんでした。」

「そりゃあ簡単だよ。ブルボン??お前さんがそれを願ったからだ。」  
「っ??。」

デジタルに言われたから??事実ではあるが、それはきつと彼女の求める答えでは無いのだろう。ここで間違えれば後戻り出来ないレベルでボコボコにされかねん。ブルボンに右頬、後輩ちゃんに左頬??そして愛バにはメンタル。ひえっ??。

だが俺だつてトレーナーの端くれ。後輩ちゃんにはクソボケ読解力と言われてしまったが、ちゃんと理解はしているんだぞ。

ブルボンはやたらとウチに勝つ事へ執着していた節がある。つまりはそれが彼女の願いなのだろう。ジリジリと追い詰められた中で対戦相手のトレーナーから飛んできた声援というのは、挑発野次以外のなんでもない。デジタルは優しいところあるから口にはしなかつたんだろうけど、要はウマ娘が本来持つという“闘争心”に火をつけて能力を爆発させようと言う話だよな。分かっているぞ、相棒。

ん？これだとレース終わってから俺ボコボコにされんじやねえの？

そもそもさつき後輩ちゃん、『願い叶って夢叶わず』とか言ってたな。デジタルに勝つ事が願いなら叶ってなくない？

あ、ダメだよっぱり分かんね。いかんいかん、今は会話を続ける事に専念しないと。

「デジタルもそうだが、お前さんだつてずっと夢の為に努力していただろう。それこそ適正距離なんか覆しちまう程にさ。さつきの走りに俺は??お世辞とか、冗談抜きで夢を見た。ミホノブルボンっていうウマ娘の、強い意志を感じたんだ。」

「それは??私の我儘です。」

「何言つてんだ。少なくとも、お前の我儘なんて1度も聞いた事無いし感じた事も無いよ。だから応援したくなつた。お前さんの願いも??夢も。それはきつと特別な事じゃない。必然だよ。」

ヌツ?ブルボンの手がブルブルしてるボン。何ならグー??グーツ!?!おま、お前グーはアカンつて!!なに振り向きざまに良いもん1発かまそうとしてんのツ!?!怒られてもビンタぐらいなら5発までは許さうと思つてたけどウマ娘のパワーでグーはやべえだろツ!!顔面ボンするわツ!ま、待て、落ち着け!俺もお前も一旦落ち着けっ!えつと、あれだ、ブルボンの健闘も讃えつつやんわりと良い感じに?!?!

「ああ、でもちよつとだけ??いや、かなりお前さんに対しての後悔がある。」

「後悔???」

「今までお前の走りや夢をちゃんと見れなかった事だ。勿体ないことしたよ。ブルボン——お前、本当に強くなったな!!」

はいここですかさず頭を撫でる!この完璧なムーブ、これで全ては丸く収まった。あとは皆でお疲れ様を兼ねて、ポーノのご飯で祝杯といこうじゃないか。ハッハッハ!だからその力一杯握られたグーを納めておくれ。

振り返ったミホノブルボン——その顔は、大粒の涙がとめどなく流れていた。

「ふあつ?」

「つ?私、は……。」

「ま、待て!どうしたブルボン!?ああいや、どうしたって俺のせいなんだろうけど??!す、すまん!いや本当にスマンツ!あの、あれは本気の声援であって決して煽ったわけじゃ??!まさかそんなに泣くとは? なつ、ちよ、あのツ??。」

いつものポーカーフェイスっぷりはどこにも無く、くしやりと顔を歪めたウマ娘が年相応の少女の姿で泣いている。

思ツクソ答え間違えたヤツじゃんコレ。クソボケ読解力め。ヒヒン??俺も泣きそーなの??。

デ、デジタル?後輩ちゃん??助けて??お前ら何遠目に笑ってんだコラツ!!その『泣ーかせたー』とか、『ちよつとチエリー、ブルボンちゃん泣いちゃったじゃんー』みたいな空気止めるよ!生あったけえ目線を送るな!童貞だって必死に頑張ってたんだろ!トレーナーになるまで女の子と接した経験皆無に近いのにパーフェクトな対応出来るわけねえでしょ助けて下さいッ!!お願いしますッ!!

何???何だデジタル、そのジェスチャー??おまつ、抱けって言ってる

のか!?出来るからお前ツ!!ああっ?許可出したから良いって?そういう問題じゃ??この、やってやろうじゃねえか!後で耳差し出せよなツ!!

「ブルボン??あー、えつと??何だ?今まで頑張ったんだよな。色々な事を取り越えてきたんだよな。やっぱり超カッコイイよ、お前さんは。今日??夢を見せてくれてありがとな。」

「トレ、ナ?さん??。」

おっふ、この罪悪感。しかも結局ミスって泣かせるやつ。やはり無垢ノブルボン。

結局ブルボンが泣き止むまで、そつと抱きしめることになった。

????  
ぶるんぼるん。

「と言うわけで、短い間ですがお世話になります。ミホノブルボンです。」

「何ですって?。」

翌日。何故かミホノブルボンはウチのトレーナー室で自己紹介をしていた。

「何でしょうか。」

「何でしょうかっていうか??状況理解出来ないのに自己紹介始められてもな?。」

「今日からお世話になります。マスターからは話がついてると聞いていますが。」

「何それ怖い。」

「あれ？アタシ言ってますませんでしたっけ？言ってますませんでしたね。」

「耳出せオラアツ!!」

「アーーーーーッ!!」

勝手に話進めてやがったこの半身！そういうのはちゃんと言えっ  
ていつだか言ったのにも関わらずこのっ、ロリオタ美少女ウマ娘が  
よオツ!!

「後輩ちゃんは了承してんだな？」

「はい。」

「お前も納得してるんだよな？」

「はい。」

「??やりたい事、見つかったか？」

「??はい。」

「ならよし！はい、皆で歓迎会の準備ー！」

『おー!』

そうだよね??俺以外皆知ってるなら?歓迎会の準備、してないわけ  
ないよね??オラツ、暴れんなこのオタクツ!今日という今日はマジで  
許さんからなツ!1人だけ空気読めないおじさんみたいになっただ  
ろうが!!レースの時も好き勝手言いやがってこのっ!

「トレーナートレーナートレーナー!!」

「おう、どうした可愛い新人ちゃん達。」

「フジツボ??食え??。」

「食えー!食えー!」

「こらこら、頬に海産物押し付けるんじゃないよロリ共。せめて調  
理してから持ってきなさいって。」

「はーい!ボーノ先輩のどこ行こー!」

「行く??。」



どっから持ってきたんだか??好きな物共有したい気持ちもよく分かるが、生の甲殻類を押し付ける距離感は何から??磯臭ッ!!

「好かれていますね。チームの皆さんから。」

「まあ??有難いことにな。そのチームに今日からお前も入るんだ。やっていけないとは言わないよな?」

「はい。」

ブルボンはフツ、と頬を緩めた。やはりウマ娘は顔が良い。そして服の上からでも分かるブルンボルン具合。本格化ってこわ??。

「私は??多分、認められたかったのだと思います。」

「ん?誰に?」

「貴方に。頑張った??強くなったと、ただそれだけを。」

「??そうかい。俺はそんなに出来た人間でもトレーナーでもない。買すぎだな。嬉しいけど何もしてやれんぞ。いくら欲しいか言ってみなさい。」

「5000マニー程で。」

「どこの通貨?」

ボケなのか素なのか分からんが??ブルボンが満足気なら別に構わんか。ふふつ、賑やかになるなあ??。

「改めて——よろしくお願いします、仮性のマスター。」

「その呼び方絶対外でするなよ。」

トレセン学園から少し離れた駅近の飲み屋街。仕事終わりのサラリーマンやOL、なんかよく分からんパーリーなピーポーで渋滞している金曜日の夜。

趣のある裏路地の居酒屋も、この日ばかりは賑わいを見せている?? 筈なのに。

『??。』

沈黙。

カウンター席には俺とヨシエさんの2人。胃にズキユンドキユン穴あきそう。誰か助けて。デジたん? ボーノ? マヤ? カレン?? いやカレンはそのままお持ち帰りされかねん。大人しく待っててくれ。それ以前に全員未成年の為OUTだ。

こうなつた経緯は少し前、学園での話。

エキシビジョンに参加する俺たち3チームのトレーナーとヨシエさんでスケジュールの最終確認をしていた時、モルモットの奴が要らん事を言つたのだ。

『勇者御一行さんって、ヨシエさんの事避けてますよね! ふっふっふあつはあふー!!』

と。本人の前で。

俺はあの時、初めてヨシエさんから笑顔を貰つた。素敵な笑顔だ。海は恥ずかしさから蒸発し、太陽は照れから入道雲で顔を隠し、俺はスコールの如き悲しみの大雨を降らせるのだろう。あの恐怖を、生涯忘れる事は無い。

ついでにモルモットの大罪も決して忘れん。一緒に頑張つてた同期の平社員が、『あつ、専務! この人専務の事苦手らしいですよ! 僕定時ですけど2人で残業頑張ってくださいね!』って言ってるのと同じ

だからなクソ野郎。1050年地下行き。

モルモットはバカみたいに笑ってるし、後輩ちゃんは露骨に目を逸らして知らんぷりするし??ドリームチームとは何だったのか。そんな折ヨシエさんの口から飛び出した、『今日2人で飲みますか』と言う有難いお言葉。

で、今に至るってワケ!

何?今がどんな状況か?そりやもう最高さ。

ヨシエさん俺のネクタイ驚掴みしてんだよ!一言も会話してねえのに絶対逃げられねえようになってんだクソがツ!!どんな気持ちで15分黙々と酒飲んでると思ってるんだ!!モルモットの野郎??アイツ?アイツだけは??ツ!!

『??。』

ひえっ?か、会話が出来ない??仮にヨシエさんがフレンドリーな性格だったとしても、童貞には荷が重いんだよ??。

2歳下とは思えない、ショートボブで可愛い系の顔。出るところ出たスタイルのキャリアウーマン。オマケにトレーナーのトップで皇帝の担当。どうしろと?人だからデジタルの手帳も当てにできないし。と、とにかく会話??会話のキャッチボールから??。

「せ、聖蹄祭も後ちよつとですねー??。」

「私の事避けてたんですか?」

おつごあッ!!キャッチボールにならねえッ!!玉投げたらピッチングマシンで返って来やがった!!その首関節壊れた人形みたいな振り向き方止めて下さい!

「いや、避けてたというか??尊敬からくる畏ろしさ?的な?あは

はっ。」

「嘘は私も好きです。でも、自己保身から来る嘘なら私には止めた方が良いですよ。親切心がある内に。」

ネクタイにもう片方の手が添えられた。

???徐々に絞められて――。

「度々見られてる視線がかなり怖くて近寄れませんでした本当に申し訳ありません。」

「??まあ、そんな気はしてました。」

殺されるかと思った?!絞め殺されるかと思ったツ!!

ネクタイから手を離れた彼女はジョッキをグイッと飲み干すと、横に置いていた瓶ビールに手を掛けた。

「そこに関しては私が悪いですね。昔から言われるんです。あんまり関わり無い人に向ける視線が強いつて。だから気にしないで下さい。もともと??私に見られて困る様な心当たり”が無いのなら、ですけどね。」

「ありません!本当に無いです!たっ、多分??。」

「ふふ??冗談ですよ。どうぞ。」

「あっ、すみませ――。」

差し出された瓶ビールを受けようとグラスを持ち上げた時、彼女の左手がグラスごと俺の手をテーブルに押さえ付けた。Why?

「どうぞ。」

「??瓶ごと、ですか?」

「他にありますか?あっ、店員さん。いつものーっ。」

あっ、あっ、怒ってる!?怒ってない!?で、でも笑ってるし??クソ、こ

の手がビクともしねえッ!!何だこの力!?何だって俺の身の回りの女性陣はこうもパワーに極振りしてんだよ!後輩ちゃん、葵ちゃん、ヨシエさん、たづなさん??おかしいですよね!樫本さん!!

いや、まあ??一気とは言つてないし、ただちよろつと飲むぐらいで??うん。

「やましい事が無いのなら、トレーナーさんも堂々としてて良いんですよ。あまり学園内でオドオドされると、何だか私が貴方を脅してるヤベー奴じゃないですか。ふふっ。」

「そ、そうですね??ん?」

何だ今の違和感。

「ビール、私も貰っても?」

「はい、どうぞ。」

そう言うなり、彼女は俺の飲んでた瓶ビールに思いつき口を付けて酒を煽った。んん???

「ああ、そうそう。確か勇者御一行さんは、聖蹄祭の特別グッズ企画にご協力頂いてましたよね。サンプルって持って来て頂けました?」

「えっ?あつ、はい!ここに!」

いかん、要らぬ違和感は忘れてしまえ。今はこのおつかねえ人との時間を乗り切らねばならんだ。平常心忘れるべからず。

彼女の言う特別グッズ企画と言うのは、今回から始まった新しい企画だ。一般トレーナーやウマ娘に希望を募り、各々が企画した商品を販売してみようというものである。言い出しっぺはこの人。

因みに後輩ちゃんはやらなかつたらしいが、モルモット君達”お友だち”は参加したとの事。カフェとタキオン厳選の珈琲豆と茶葉にオリジナルドリッパーとティーマグを付けた、休日の朝セットであ

る。

俺はヨシエさんの前に、紙袋から取り出した箱を置いた。勇者御一行渾身の拘りとクオリティと欲望を詰め込んだ至極の逸品。ふふっ。自分に自信は無いがこれには自信がある。

「いやあ、まさかヨシエさんがあの企画書を通してくれるとは思いませんでした??ありがとうございます。変な所ってありませんでしたか?」

「見てないので分かりません。」

「???はい?」

「出来る限り楽しみは取っておこうと思って、皆さんのサンプルが届くまで私見てないんです。全部サインだけして通しました。だってそんな変な物作りませんよね。」

彼女は嬉しそうにニコニコと笑っていた。

成程??話が違えぞオイ。冷や汗が止まらねえ。至極の逸品が地獄の一品に変わった瞬間である。

待て待て待て、俺もデジタルもヨシエさんが止めてくれる前提でこの産物を生み出したんだ。本人の許可は了承済みだが、あちこち変態目線で拘ったんだぞ。それをこの人の前に出すのか?死ぬんじゃないか?助けてデジたん。

「どうしました?さあさあ、勇者御一行さんの品を見せて下さい。」

「えっ、あっはい??あの??ヌツ?。」

??腹を決めるしかない。俺は箱から、とあるウマ娘の形をしたブツを取り出した。勝負服に身を包み、笑顔で両手を後ろに組んだ立ち姿はデフォルメと言ってもかなり可愛い仕上がりである。

生睡を飲み込み、そのウマ娘の”電源”を入れた。

『はい、カレンチャンです♪一緒に頑張ろうね?お兄ちゃん♡』

「??????」

「あの？喋るカレンちゃん貯金箱、です。」

ヨシエさんは笑みを浮かべたままフリーズした。

「??変態の構想する品ですね。」

「??変態と構想した品です。」

サンプルと一緒に入っていたヨシエさんのまだ知らない企画書を見ながら取り敢えずプレゼンする事にした。いや、もう色々終わったけど??デジタルの頑張りもあるし??協力してくれたカレンの事もあ  
るし??。お兄ちゃん、最後まで頑張るよ??。

「全長15.5cm??1/10スケールです。」

「つまり10個集めるとカレンさんに?」

「なりません。」

「そうですか??。」

「ボイスパターンは初期設定時、目標金額設定時、投入金額、目標達成時に加えて待機モードとその他諸々合わせて30パターン以上。音声はカレンに頼んで収録してもらいました。」

「その音声はASMRで同時販売を?」

「致しません。」

「そうですか??。」

「色合いやポーズ、造形に関してはカレン本人が立ち会ってるので、普通に可愛いです。」

「質感も本人と同じ柔肌ですか?」

「プラスチックです。」

「そうですか??。」

質問おかしいだろう。

淡々と答えてだけど流石に無視出来ないレベルの違和感だわ。俺の中の何かが警鐘を告げている。多分これが本能的危機感というやつなのかもしれない。

”もう止めておけ”と。

”おい、その先は地獄だぞ”と。

俺はもしかして??何か開いてはいけないパンドラの箱に、『ノックしてもしもーし!』をかまそうとしてるんじゃないのか?だが??ここに来て引く事など出来ない。仮にヨシエさんがNGだとしても、カレンのカワイさとデジタルの拘り、そして俺の欲望がそれを認めさせてみせようじゃないか。

「??1つ、お聞きしたいことがあるんですけど。」

「何でしょうか。」

「カレンさんは女性フォロワーも多いウマスタグラマーです。今の仕様だと、女性ファンは手に取りにくいのでは??」

「耳飾りを押して頂ければ”お姉ちゃん”モードになります。」

ヨシエさんは目頭を抑えて天井を仰ぎ見た。

「??出来る変態の??嗜好品ですね。」

「??出来る変態と??思考した品です。」

『はい、カレンちゃんです♪一緒に頑張ろうね?お姉ちゃん♡』

ヨシエさんの肩がワナワナと震えていた。心做しか手も震えている気がする。デジタル?皆??今まででありがとう。この聖蹄祭が終わったら俺??ヨシエさんに首絞められて死ぬんだ??。

「あの、た、試してみても良いですか???」

「え?あ、はい。」



彼女の眼は、普段俺に向けるような鋭いもので無く??今日ずっと向けてきた柔らかなで恐ろしい笑顔でも無く??どこかで見た様な頬の緩み方をしていた。

又ツ。どこで見たんだ?少なくとも心当たりは——。

『あはっ♡千里の道も一歩から、だね!でもカレン、お姉ちゃんと一緒ならずうくと一緒でも??良いよ?♡』

「んっ??ふはっ??。」

『こんなにくれるの!?!お姉ちゃん優しい♡♪じゃあ??カレンもお姉ちゃんにお返し、してあげるね♡』

「うっ、へっ?へへ??んふふっ??あゝ堪んねえ??。」

デジタルじゃん。えっ??デジタルじゃん。

この人どうしたツ!?!僅かな時間で一体何が??うっわ、顔がダラしねえ??皇帝のトレーナーの姿か?これが。俺は今何を見ているんだ。

マズイ、思いの外ぶっ飛びすぎてて脳がキャパオーバーだ。何一つ情報の整理が出来ん。ヨシエさんはずっと財布から小銭出して入れ続けてるし、カレンは全パターン喋る勢いだし。

「あの??ヨシエさん?」

「ふんふふくん??♪」

「ヨシエさ——あっ、すみません、お札対応してないんです。ヨシエさん。ヨシエさん!お札ダメですって!無理ですからカレンに握らせようとしなくて下さい!倫理的にも!!」

「あっ、ゴメンなさい。お金貢いでると思ったら興奮しちゃって??。」

「ド変態の思考じゃないですか。」

「ええ、よく言われます。」

「よく言われるんですか!?!」

俺の中のヨシエさん像にバキバキとヒビが入っていく。ち、違う??この人が普段からこんなぶっ飛び方するわけがない。俺は以前後輩

ちゃんにも言ったんだ。デジタルの亜種が何人も居てたまるかと。つまりヨシエさんはお酒が入ると少々緩むだけだ。うむ。

「あゝ勿体ないことしたなあ??こんなに良い物作ってくれるんだったら、もつと早くから仲良くすれば良かった??。」

「いえ??恐縮です??。」

「トレーナーさん、ちよつと固くないですかあ? 気楽にやりましょうよ。」

いやゆるつゆるじゃねえか。何なら顔もふにやふにやだわ。普段のオーラも威厳も威圧感も何一つ無い。机に突っ伏して、俺のネクタイをプラプラしている。

「それとも??ここまで素を見せても、まだ私の事怖いって思いますか?」

「いや、怖さは無いですけど??正直、ビックリの方が強いと言いますか??。」

「ふくん???」

いじらしく笑う彼女から眼を逸らす。クソつ、顔が良い?!何だかんだでトレセン学園在籍中の女性トレーナー達だって普通に美人だよ!知ってるよ!この人も後輩ちゃんもバクシンオーの所も!だからそう言う経験の無い男には厳しいって言ってるだろう!この学園に童貞の安息の地は無い。生き残れるのは既に機能を失った男か、覚悟ガンギマリ野郎??後ホモだけだ。

「トレーナーさん、なんか似てますね。」

「だ、誰に???」

「私の師匠。ガード固いんだが弱いんだか分かんなくせに、勘違い発言して周りを掻き回すタイプでしょ。で、担当の子に色々やって貰う。違います?」

「どう??ですかね。ああでも、担当には頭が上がりません??マジで。」

ヨシエさんは再びネクタイを掴んだかと思えば、急に顔を寄せてきた。

近つか!!鼻と鼻が接触事故ツ!!あつ、吐息が??!ひええ、まつ毛長い!顔が良い!!

「その眼??やっぱり似てる。綺麗で、優しくて、何もかも信じますって善人の眼。言葉で色々取り繕って、本当は臆病なのをひた隠している人。あの人——シンザンのトレーナーと同じ。」

透き通る声が耳元で囁かれた。

心臓がドンドンと叩かれる速さで脈打つ。じんわりと脂汗が額に浮かぶのも感じる。

ただ悲しいかな、これは男としてのトキメキによるものでは無い。そんなものじゃあ全く無い。

シンザンのトレーナーと。

師匠だと、彼女はそう言っていた。

俺は自分自身の運命を恨まなくてはならない。理解してしまったのだ。

もう2度と、彼女から逃れることは出来ないのだと。

「まつ、勝手に学園から居なくなつたあの人は違うと思いますけどね。昔の話なんて忘れて、貯金箱見ながら飲みましょ♪」

「??ヨシエさん。シンザン、結婚したの知ってますか?」

グラスを口に付けようとした彼女はそれをカウンターに叩き付けた。

「??ん??  
??」

「??そのトレーナーと、結婚したの??知ってますか?」

「知りませんが?なぜ貴方がシンザンの現状を知っているんです??」

「??サブトレーナー時代、お世話になってました。多分同じ師匠です??あのハゲですよね?式には呼ばれてないですが??。」

「そうですか?そうですかあ??私、結婚の報告すら貰ってないですねえ??。」

再び壊れた人形の様はこちらへ顔を向けたヨシエさんの表情には、笑みが浮かんでいた。ついでに青筋も浮かんでいた。

「私、連絡先知らないんですよ。トレーナーさん、持ってます?持ってたらちよつと2人で文句でも言いませんか?」

「??良いですね、それ。」

あの人には言いたい事がごまんとある。式に呼ばなかった事、マルゼンスキーの事、ヨシエさんとまさかの師弟関係だった事。

ヌツ。これは酒のせいだろうか。或いは隣に居るこの人のおかげだろうか。今だけは、この人と同じ顔をしている自信がある。

あのハゲオヤジに文句の3つでも4つでも叩きつけてやらねば気が済まない。いつもより少しだけ気の強くなった弟子の文句を聞いてもらうからな。

連絡先にある”ハゲ”の名前。電話するのはいつぶりか??どれ、楽しいお話にしましょうかね、ヨシエさん。

『おう、何だ何だ。久しぶりじゃねえかよ若坊主。』

「久——。」

「死ねッ!!!!」

静まり返った店内。  
触れてはならないパンドラの箱が、遂に開かれた瞬間であった。

大人のぷりていジャーキー（2／3）： —悪女—

「よくもやってくれたなハゲ??ッ。私に仕事全部ぶん投げて自分デメエはシンザンちゃんと熱々か? ああ!!」

「ヨシエさん??あの、他のお客さんがビツクリしてます??。」

「オマケに弟子も隠し持ちちゃってさあ???私の欲しいもん全部手に入れたこのゴール・D・ロジャーに、どうせ男同士でウマ娘達と仲良くするテクでも教えてたんでしょ???」

「それ俺の事言ってるんですか?や、それより落ち着いて??。」

「私には心にち○ぽでも生やしとけてしか言わなかったくせによッ  
!!!」

「ヨシエさん!公共の場です!!」

『何?お前律儀に守ってた?バカじゃねえの。』

「フーツ!フーツ!!」

「頼むから今は黙ってる!マジでツ!!」

『いやお前から電話してきたんだろうが。』

と、止まらねえツ!パンドラから出てきた怪物が全ツ然止まらねえツ!!俺の携帯がミチミチと音を立てて泣いてやがる!い、い、い、このままではウチの可愛い愛バ達と撮った数々のオフショットが葬られかねんツ!バックアップ取ってねえんだ!それだけは避けねばならないツ!!

『しっかし、久しぶりだなあおい。何でお前ら2人で??さてはくっ付いたか?ヒュー。』

「ああっ!?!んなわけねえだろハゲツ!!私に失礼だろうがツ!!」

「えっ、あつ、そーだそーだ!」

『んだよ面白くねえな。似たもの同士くっ付いたかと思つたのによ。』  
「ウチはルナちゃんがいるしこつちにはデジタルちゃんが居るんだからそんなぐらい知つとけ!!」

「そーだそーだ!えっ、そうなんですか?」

「違うんですか？その気無いのにあの距離感とかロリコンですけど。豚箱行きます？」

オゴオツ!? ストレートの切れ味が半端じゃねえっ!! 何で矛先こっちに向くんだよッ! 暴言のトリガーハッピーか!!

『デジタル??? ああ、そーいやお前の担当そんな名前だったな。何かスゲー事やってみたみたいじゃねえか。検索したら出てきたわ。お前チームも作ってた。へえ。』

「興味ぐらい持つてるやハゲツ! ウチのデジタルとロリ達の可愛さ舐めんじゃねえぞコラツ!!」

『急にキレルじゃん。え? ちよつと見ない間に弟子がクソ女とロリコンに変わってたけど?? いやクソ女は元からクソだな。ははは!』

「うるっせえよダボツ!! それより何許可無く私のシンザンちゃんご結婚なんかしちゃってんの!? ふざけるのはそのスツカスカの頭だけにしてくんないっ!」

『禿げてねえよ。別にお前のじゃねえし。』

「はあっ!? 私ヨシエだぞッ!」

『だから何だよ。』

フウ?? 急に愛バを出されて熱くなってしまったが、俺までヒートアップしてはいよいよ止める人間が居なくなってしまう。落ち着け、童貞。お前は三十路だろう。いい歳だ。

でもどうしよう。ヨシエさんが三面怪人ダダの如き表情変化を見せるので、こちらも脳がこれ以上情報を受け付けたくない駄々を捏ねていますよ、これは。本日の営業は終了しました。

「?? 取り敢えず、何でめでたい式に俺達呼ばなかったのか説明してくれよ。」

『ああ?? それで電話してきやがったのか。確かにお前らにはして無かったもんな。』

「取り敢えず理由だけは聞いてやるハゲ。さっさと答えろハゲ。」  
『禿げてねえよ。』

「いや、先輩禿げてますって。そよ風に吹かれて7割地肌見えたらそれはもう禿げてます。」

『俺の毛は繊細なんだよ。そよ風っていうには、強烈過ぎるんだ。』  
「アンタの毛なんか子供の寝息でも散らかすでしょうがッ!!良いからさっさと答えろッ!!」

『わーった、わーった。いや俺も連絡はしようとしたんだよ。ただ若坊主はトレーナー業が板について忙しそうだったし、ヨシエに聞しちゃ連絡先も知らねえ。シンザンは、調べようか?」って言ったんだが??まあアイツらだし要らねえだろうってなーハッハッハッハ!!』

ヨシエさんと顔を見合わせた。

要するに、めんどくさかったと。

俺らにや別に要らねえだろうと。そういう事らしい。ははっ。

「先輩、今からこつち来ませんか?残りの毛根死滅させてやりますから。」

「グラスでモグラ叩きしてやる??絶対に中ジョッキでやってやる??。」

『何でお前らそんなに殺意高いの?ストレスか?トレーナー業大変だもんな。』

『オメーのせいだよポケッ!!!』

「こつちがどんな思いで枕濡らしたと思ってんだハゲッ!ああっ!?ちよつと生意気すぎたかな??とか無駄に気にしてたんだぞオイッ!!」  
「自分のやり残し放ったらかしてシンザンちゃんと乳くりあつてんじやねえよハゲッ!昔っからそうじゃん!!いっつもフラフラ適当にほつつき歩いて、適当にちよつかいかけてきて、居なくなるのも突然でッ!!突然で??ッ?。」

ヨシエさんは言葉に詰まった。隣を見ると、下を向いた彼女の眼からは大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちていた。



「??俺は構わないですけど、この人にはちゃんと謝った方が良いでしょう。ただでさえお酒で情緒不安定なんですから。」

『酒で情緒不安定?何言ってるんだお前。ヨシエだぞ?情緒不安定に決まってるんだろ。』

??何だと?

『お前が知らねえって事は??ハハハツ、ヨシエ!さては普段猫被ってるんだろ!』

「こつちだつて立場があんだよツ!うううう!!」

『若坊主。知らねえなら知つとけ。そいつはお前が思ってるような、ヤワな女じゃねえ。なあ??ヨシエちゃんよ。何でトレセン入ったんだっけ?』

「??シービーちゃんと毎日ちゅっちゅしてイチャつきたかったから。あわよくば結婚?。」

『ルドルフになんて言つて契約結んだ?』

「ウマ娘全員幸せにするから契約して??結婚を前提に。あれ?ルナに結婚の事言つてない。」

『今の夢は?』

「ハーレム。全員扶養する。」

『良い夢だな。』

「えっ?そう?そうでしょ!えへへ??。」

『頭ヨシエかよ。んなわけねえだろバァカ。』

「フーツ!フーツ!!」

いや漫才。

ヨシエさんもヨシエさんで大分??あ、携帯!携帯がツ!

これ、デジタルの亜種どころじゃ無いんじゃないか!?もしかして夢見る女性と言う奴では?ハーレムって要は顔の良い子達に囲まれてホストやりたいただけなんじゃ??。

ヌツ！いかん、そうになると俺には扱いが分からない。限界オタク化したロリの相手ならまだしも、夢女と化した上司などどうしろと言うんだ。

『分かったか？顔は良いし、乳はデカいし、天才的に勘も冴えてりや人を自由に操るカリスマも有る。知らん奴から見たら超優良物件だ。だが蓋を開けりゃ悪態はつくし、嘘だけは絶対に通用しねえ。オマケに自己肯定感異次元レベル。万年発情期、進化を間違えたホモ・サピエンスだな。』

「頭部万年氷河期でシービーちゃんとマルゼンちゃん誑かした紀元前ハゲのクセに私の事そんな風に思ってたのか貴様。残りの髪もワールドにアイスブレイクしてやろうか？おっ？」

「??いや、まあ。それでも色々助けて貰ってるしさ。何もヨシエさんの事そこまで言わなくても??。」

「トレーナーさん??もしかして優しくしてくれてるんですか？ふふつ、そこまで言うなら慕ってくれてもいいですよ？1日3万で。」

何だこの人。

『ふうん??まつ、仲良くやってんなら良いさ。お前ら第一印象最悪だったからな。片や”いけ好かない態度で鼻に付く女”って悪態つくし、片や”才能も無いし顔も特段良くない羽虫とか興味無い”って切り捨てるし。』

ヌ” ツ!!矛先があツ!

ヨシエさんの手が俺の胸ぐらにツ!!!ビクともしねえツ!!絞まる絞まる絞まる!!デ、デジタル!デジタル助けて!!ポーノ!マヤ!カレンツ!

いやカレンはそのまま絞め落とされた所をパツクンチョ♡されかねん。大人しく待っててくれ。

何でモルモットといいこのハゲ親父といい、要らん事ばかり本人の

前で暴露しやがるんだクソがつ!!

「待て待て待て!んなわけねえだろが!!俺そんな事言った記憶ねえよ!会った事だつて??ッ!」

『真つ先にお前らを合わせてやっつたろうが。どっちもまともに顔見ねえで悪態ばつかついでるからだつつの。』

「はあっ?!んなわけ?!ヨシエさんは覚えてますか!?!」

「???うん。思い出した??。」

「??そうですか?なんか、こつちもすみません??。」

??えっ、気まずっ。

『トレンディなら俺のいないところでやれよ。』

『だあってろやハゲツ!!!』

「さつきからちよいちよいわざとやってんだろ!?!」

「顔面ぶん殴る??絶対中ジョッキでぶん殴つてやる??。」

『なあ、その犯罪者予備軍どうにかなんねえか?』

「アンタの愛の巣どこにあるか教えてよ。枕の中身カエルの卵でいっぱいしておくから。生命の躍動感しながらその死んだ野池みたいな汚きつたない頭でオタマジャクシでも飼つてろハゲ。」

『発想が気持ち悪いな??まあでも、安心したのは本当だ。お前らには色々迷惑だけ残しちまったからな??。』

「??なんすか、急に。」

『年寄りの感傷さ。気にすんな。』

電話の向こうから聞こえるあの人の声には、茶化しのない安堵が入っていた。少なくとも??現役の頃、俺はそんな優しい声音など一切聞いた事が無い。

別によく怒るとか、厳しいとか、そんなんじゃないかって??なんと言うか、余裕が無かったのだ。それは多分シンザンの事。自分が居なくなつてからのマルゼンスキーとミスターシービーの事。俺達の事。

ようやく落ち着いて、初めて生まれた言葉なのかもしれない。

「??そう思うんだったらさ。聖蹄祭、遊びに来てよ。久しぶりに顔見たいし??。」

『まあそのつもりだよ。シンザンはちよいと忙しそうだし、俺一人かもしれんがな。』

「はっ?こちとらシンザンちゃんの顔見たいから誘ってんのにハゲ一人来たところで誰に需要あんの?ウチ育毛製品とか扱ってないからN Oサンキューなんだけど。リピーター志望なら別行ってくれる?。」

『じゃあ説得しといてやるよ小娘。クソ女つぶりに磨きかかってきたじゃねえか。取り敢えず仲良くやれよ。??若坊主、お前にはまた掛け直す。じゃあな。』

そう言っつてハゲとの電話は切れた。

俺??特に何も言えなかつたな??ヒヒン?。

「??飲み直し、ますか?。」

「??うん。」

嵐は止み、彼女と2人で静かにグラスを傾けた。

同じ師匠を持つというまさかの共通点に驚きはしたが??何となく、仲良くやれそうだなと、俺はそう思った。

で、今に至るってワケ!! (2回目)

今がどんな状況か?

ヨシエさん出来ちやつた??スツゴイ勢いで『いつものー!』って、飲むわ飲むわ止まらねえのよ。果ては顔見知りだろう店員さんに絡んで『腹パンすんぞ』と言われる始末。あの店員さんもスゲエな??。

今はハリケーンも落ち着いたのか、彼女は俺のネクタイをプラプラさせながらカウンターに突っ伏している。

「でさあ?? U R Aの偉い人だかなんだか知らないけど、毎日ハゲの相手してるんですー??。」

「??はい。」

「こんな事ありますかあ? 毎日毎日ハゲ、ハゲ、ハゲ! 外は晴れでも部屋はハゲッ!! あーキレそう??。」

要約すると??昇進的なものである。お偉方は彼女の功績と手腕に目を付けて、是非ともウチに来ないかと連日お誘いの言葉を掛けに来ているとの事。確かに酒が入るとアレな部分が出てしまうが、伊達にトレーナー達のトップを張っていないのも事実なわけで。

「で、でも凄いじゃないですか。相手方もヨシエさんに期待してるって事ですよね。」

「あのクソハゲ共、そんな事考えてないですよ。」

「クソハゲ??。」

「私に嘘なんかついてても無駄なのに??舌先三寸、まだ分かってないんです。立場、自由、福利厚生、お金??聞こえの良い言葉だけつらつら並べ立てて、本当のところは首輪付けて飼い慣らしたいだけなんですよ。しかもウマ娘の未来の為とか簡単に言っちゃって。あの子達の”未来”はあの子達で作るんです。私達がやるのは、”今”を後悔させない事、土台を支えて作り上げる事じゃないですか。」

「それは??まあ。」

「1回噛み付かれたから野放しにしたくないって魂胆を隠そうともしない。自己保身に走ってマスコミに媚び売るような連中が、成績残したら今度はこっちのご機嫌伺いとか気に入らないんです。何もかも。ああいうのは他人を切り捨てるのも早いんですよ。」

「??噛み付いたんですか? 本部に。」

「昔1度だけ。流星に師匠にゲンコツ落とされましたね。『何やってんだバカヤロウ!』って。あつ、思い出したらムカついてきた??まあ、あんな安い首輪なんて付けられたところで千切ってやりますけど。」

深く溜息をついた彼女はカウンターに突っ伏した。

どうも立場が上になると、トレーナーと言えども色々に対応しなければならぬ事があるようだ。年齢など関係は無いんだろうけど、素直にこの年下さんは凄いなと思う。

ふと、目が合った。

若干眠いのか、どこかトロンとした目付きのまま彼女はこちらへと手を伸ばす。人差し指と中指を足に見立てた手が、ゆっくりと歩いてきた。

「もし飼いやられるなら??私の言う事に文句を言わないで?私と同じような事考えられる人?素直で、何度も騙されてくれるような人かなあ??あれ?あれ?もしかして??もう居たり?」

そうして彼女はいじらしく笑った。

ワイシャツの襟元を開き、鎖骨まで見えるように首を傾げて言う。

「トレーナーさん——私に首輪でも付けて飼ってみませんか?今なら優しく噛みついてあげますけど。」

「お酒、だいぶ回ってますね。」

「え〜?回ってないですよ。」

「いやいや、めちゃくちゃ飲んでたじゃないですか。それ、ジントニツクですよ。水じゃないかって勢いでしたよ。」

「だってこれ、ライム入れただけの炭酸水ですし。『いつもの』がお酒だなんて一言でも言いましたかね?」

??何?だと?

「な、何でそんな事??。」

「私、嘘って大好きなんです。人間っぽくないですか?あーでも、強いて言うなら??勇者御一行が気になったから。」

ヨシエさんは何も言わず、ただニコニコと笑っていた。いや、ほぼ素面であのぶっ飛び方出来るならそれはそれでヤベエだろ。

違う、待て。じゃあ何だ？この人は最初のジョッキと瓶ビール1口しか酒を飲んでないのか？

冷や汗が止まらない。心臓は止まりそう。あつ、どうしよう。帰りたい。泣きたい。俺変な事言ってるよな？変な事言ってたのこの人だもんな？

「トレーナーさんは素直ですねー。担当達に??あつ、違うか。アグネスデジタルちゃんだけに向けてる一方的な信頼。楽しみが増えました。」

「??どういう意味です?」

ヨシエさんは。この人には一体。

「いつ、壊れますかね?」

背筋がゾツとした。

何が見えている。何が壊れるのを知っている。

何でそれを、楽しみと言える？

一方的な信頼??まさか。俺とデジタルは??いや、俺はアイツのやりたい事を知ってるか？アイツはレースに勝った時、必ず上を見上げている。その理由を聞いた事は？

待て、待て待て??だつて、それは関係無い??筈。壊れるつて言うのは何の話だ。関係??或いはデジ——いや、それだけはさせん。

何だか気ままずくなり、彼女から目を逸らした。

「そんな思い詰めた顔をしないで下さいよ。もしかして??」

心当たりでもありませんか?」

ヨシエさんはそんな言葉を囁いた。

何も返せない。そんな俺とは対照的に、彼女は笑っていた。

『そろそろ帰りましょうか。』と、ただ一言だけ残して。

店の外に出るや、ヨシエさんはくるりとこちらへ向き直り相変わらず楽しそうに笑っている。最近まで鬼のような目力でこちらを睨み付けていた人と同一人物とは思えん?? あつ、でもさつき店の中でち○ぽとは叫んでたな。何? 本当に同一人物か?

「ここまでで良いですよ。家まではそんなに遠くないですし?? 今日楽しかったです。ふふつ、さつきの事気にしてますか?」

「えっと?? はい?。」

「そうですね。目の前でこんな美女が誘って来たら気になりますよね。」

「あ、そこじゃないです。」

「本当は首輪付けてあんな事やこんな事したくなるのも分かります。」

「全く思ってないです。」

「隠れて欲情してましたもんね。」

「微塵もしてないですから。」

「何でしてねえんですか? こちとらヨシエですよ?」

「あつ、む、胸ぐらはやめ?! ぎゃ、逆にして欲しかったですか!」

「え? 童貞風情がおこがましすぎませんか? まあ童貞じゃなかったら頭かち割ってましたけど。」

本当に酔ってないんだよなこの人!?

じゃあ尚更ヤベエじゃねえか! 俺の中でヨシエさんが怖い人から近寄り難い人にグレードアップしたわツ! 少なくとも公共の場を一緒に歩ける自信は無えツ!!



「じゃ、じゃあ帰りましょーね!?ほら、ルドルフでも呼んで——。」  
「あ?。」

又” ウウウウンツ!!”とうとう両手で胸ぐらがあ!!

何で!?何でちよつと過激になった!?俺どの地雷踏んだんだよおツ!!  
!!キれるとこ多過ぎて最早マジックカットじゃねえかツ!!

「なあんでルナの連絡先持ってるんですかねえ???そういうのって担当の特権じゃないですかあ。私の欲しいもん全部持つてるクセに私の特権にまで手出すとか、そんな所まであのハゲに似なくて良いんですよお弟子さあん。」

「やつ、ちが、連絡先の話じゃなくて——。」

「じゃあ私がデジタルちゃんの連絡先持つててあれこれしてたらどうするんですか。」

「えっ???いや、別に良いんじゃないですかね?。」

「自分の嫁テメエは自分で面倒見ろって話してんですよ分かってんのかこのクソボケがあツ!!」

「ヒヒインツ!!!」

あ、俺この人ダメだツ!!やっぱ無理無理無理ツ!!おつかねえよ!  
見た事無いキレ方してんだって!!後輩ちゃんだつて一発キレたら終わりみたいなどこあるのに、この人マウント取ってボコボコにするまで止めそうにねえもん!!

おい、お前さんの担当だろ!今だったら両手塞がってるんだから、頼ツンでも何でもやって止めてくれよ!そんな所でカッコよく『やれやれ??』みたいに笑ってないで、早く助けてくれって!!

ルドルフ  
皇帝ーツ!!

「シンザンのトレーナーに『迎えに言って欲しい』と言われた時は何事かと思ったけれど——今日は随分と楽しんだようだね。ヨシエさん。」

ようやくやって来たシンボリルドルフは、ヨシエさんの頬にフレンチなキスをした。ワオ。

「??あれ? ルドルフ?? え、待って今?!」

「ん? そちらのトレーナー君が執拗に頬を指さしていたから、こういう事かと思っていたんだが?? 違ったかな?」

クツソ顔が良い。なんだそのハニカミ。そりや夢女も増えるわ。違わない。パーフェクト。ブンブンと首を振って皇帝に肯定する。

店の僅かな灯りでも分かるほどに紅潮したヨシエさんは、俺の胸ぐらに手を掛けたまま寄りかかってきた。

「??トレーナーさん?? 私、今なら?? 産卵できます。」

「哺乳類の自覚があるならしないで下さい。」

「あ、首輪付けます? 今日の事生涯忘れません。悦んで飼い慣らされます。」

「色々重いので止めて下さい。担当の前でしょう。」

「じゃあ靴舐めましょうか? 年の離れた弟をベロツベロに舐めまわしてたので自信あるんですよ。」

「ルドルフ。」

「さっ、帰ろうかヨシエさん。」

担当に支えられながらヨシエさんはようやく引き剥がされた。よほど満足だったのか、ウツキウキでこちらに背を向けて歩いていく。

これ?? 疲労感半端じゃねえわ。今まで飲みに行くところ一番疲れるのは後輩ちゃんだったけど、もれなくトツプ更新。

何なら人の首に歯型付けてくる後輩ちゃんがまだ可愛く思えるよ。おねむの副反応だから引き剥がすのに労力を使うだけで、ルドルフが居ないと手に負えないこの人とは疲れの方向性が違う。

ふと、ルドルフが俺に言った。

「時にトレーナー君。君に会いたいと言う子が居るんだ。お酒の入った体に無茶をさせるようですまないが、行ってあげてはくれないだろうか。」

「俺に???ん、分かった。」

「助かるよ。」

「トレーナーさあん!」

ヒエツ!!

い、いかん、身体が完全にトラウマを植え付けられている??ツ!笑うな!ドルフツ!お前の担当なんだぞ!

「来週の朝イチ、生徒会室に来てくださいねー! 2人でグッズの事お話ししようー!」

「えっ。な、何故朝イチなんですかあ??」

「だってトレーナーさん、バッジも無いのに学園歩いてたらたづなちゃんにこっぴどく怒られますよおー!」

「??はい?あ、あれ?えっ?!嘘オっ!」

言われて初めて自分の胸元を見た。

無い。仕事終わりに来たから、本来付いて無ければならない筈のトレーナーバッジが??どこにも付いていない。

怒られるどころの話じゃねえだろコレツ!ど、どこに落とした!?カウスターか!いや、そもそもいつまで付いてた!?ヤベエよ、何も覚えてねえ??ツ!!

「アハハっ、だから取りに来て下さいねー!」

????なあんである人、胸にバッジ2つ付けてんだ?いつ??あー?師匠に似てるって言われた時かなあ??多分そうだよなあ??。

手癖悪すぎんだろウガツ!!

「なあ、ルドルフ。」

「ふふっ??皆まで言わずとも分かっているよ。気に入られたのならそういう運命だったんだ。私も、君も。」

「??はあ?。」

「ルーナー! 帰ろー! あつ、休憩してく!?! ホ別5万ならすぐ出せるから!!」

「ホベ???」

「良い、ルドルフ! 気にするな! 大丈夫だから、なっ!?!」

全てのウマ娘が幸福である為に――。

結局、俺にはヨシエさんと言う人が何を見ているのか??最後まで分からなかった。

――いつ、壊れますかね?

その言葉を反芻しながら、待ち人の元へと向かうのだった。

待ち人、と言うのはすぐに見つかった。

というよりも、何となくそんな予感はしてたんだ。先輩に連絡を貰ったルドルフが、『会いに行つて欲しい』とまで言っていた彼女は??少し開けた路肩に車を寄せて立っている。

白地のワンピースに緩つと首元に巻いたカーデイガン。何故か一昔前の居酒屋にあつたポスターのモデルのようだが、学生である。その上真つ赤なスーパーカー——と言うよりランボルギーニ<sup>カウソク</sup>。これ<sup>タック</sup>を乗り回している学生など、世界広しと言えども彼女だけだろう。

「久しぶりだな??マルゼン。」

「ふふっ、おっひさくサブトレ君??つて、あら?トレーナーバッジが無いなら別人かしら?。」

「色々あつたんだよ??色々??。」

「ふくん?ヨシエちゃんですよ。」

よくご存知で。

クスリと笑つたマルゼンスキーは、『ドライブでもしましよ。』と車のドアを開けた。

独特な機械音からのV12気筒エンジンの炸裂音。分かっちゃいたけど??酔つ払いにカウンタックのエンジン音は非常にBADである。腹の底から全ての内臓をドンドン殴られている気分だ。これでマルゼンがいつもの様な走りをするとなると——ヌツ、考えるのも恐ろしい。彼女の言葉で言うなら、文字通り『ゲロゲロ』だ。

「すまん、程々に頼む??ヨシエさんに一杯食わされたんだ??。」

「いっぱい食わされたんでしょ?あの子、そういうの得意みたいだし。」

「ああ??ははっ、違うないか。」

行き交う人の声があちこちから聴こえてくる夜の街で、一際大きな唸り声を上げた”タツちゃん”は、ゆつくりと走り出した。

車内に会話は無く、ただマルゼンスキーが気の向くままに車を走らせる。ボンヤリと窓の外を眺めていたら、橙色の街灯が流れ星の様に幾つも視界を流れていった。

隣に座る彼女はご機嫌だった。そう言えば??サブトレ時代にも何かと理由を付けてドライブに駆り出されていたのは俺だったな。あのオッサンは歳だから嫌だって言うし、シンザンは酔うから勘弁して欲しいと引きつっていた。似た者同士というか??同じ様な顔してたか。唯一ノリノリだったのはシービーぐらいである。

??いかん。

酒か、歳か。過去を懐かしむのはそこそこ年齢の過ぎた大人がうっかりやる事だ。決してそういうのが駄目とは言わないが、今だって捨てたもんじゃない事を忘れてはならない。”あの頃は”では無く”あの頃も”楽しかった。俺はまだまだ人生楽しんでるマンなのさ。

独身三十路貴族と呼ぶが良い。凹む。

「??今日はどうした?」

「ん〜??久しぶりに君と走りたくなっちゃってね。」

「そうかい??嘘、下手になったな。」

「元から上手くないの、知ってるでしょ?」

「まあ、確かに。いつもシンザンとかあの人にバレてたっけか。後輩達の面倒見るからってこっそり模擬組んできてさ??わざとらしくシービーが変な話の振り方して。」

「そうそう!それでこっちも釣られて変な話し方しちゃうのよね。」

「??何か、ずっと昔の事みたいだな。」

「もうそれくらい時間が経ってるもの。そうでしょう?勇者御一行の名トレーナーさん。」

何やら含みのある笑いだ。大体こういう時はこっちをからかう時である。

「何だよ、ずっと見てきたって顔しちやつて。」

「だって見てきたもん。あの人に、君の事お願いされちゃつてたからね。」アイツは半人前だー、しっかり見てやれー」って。ふふっ。」

「あの親父め??俺がマルゼンにフラれた時は大爆笑してやがったクセに。」

「あら、気にしてた?ゴメンね。」

「??なあ。何かあつたんだろ。と言うより——楽しくない、か?」

一瞬の戸惑い。その後すぐに困った様に笑った彼女には、到底世間が”怪物”と謳うような恐ろしさは無かった。

1人の??自分の在り方を見失ったウマ娘。

誰よりも強く、誰よりも自由を望んだだけなのに、誰からも追われる事の無くなった絶対強者。

優しいからこそ、後身の夢を奪う事を恐れた少女だ。

「??ルドルフに勝つてからね。ちよつと、楽しくないかな??。」

「あのレースか??まあルドルフが早熟だったのもあるけど、結果的にはかなりギリギリだったろう?燃えなかつたのか?」

「だって気付いちやつたから。私ね——あの日、あの時、あのレース??途中で手を抜いちやつたの。」

「??そうか。」

「楽しかった??それは間違いないわ。だから本気で走ろうとして、走りたくて、ルドルフならきつと付いてきてくれるって信じてあの子を見たの。でもね??あの子は、精一杯だった。だから——。」

そこまで言つて、マルゼンスキーは言葉に詰まった。

ウマ娘だけでなく、トレーナーや世間からも尊敬された”皇帝”。ヨシエさんと言う強過ぎるパートナーと共に走り抜けた彼女は、間違い無く学園内でも”最強”と呼ぶに相応しかった。ヨシエさんの築き上げた土台に威風堂々と立ち、ウマ娘達を奮い立たせ、誰もが幸福

である世界を??夢を見せつける。その先達となる。

ならマルゼンスキーはどうか?

その実力は誰もが認めていた。人はその走りに確かに魅了されたし、ウマ娘達は楽しそうに走る彼女に惹かれていた筈だ。

無敗の皇帝と、無敗の怪物。どちらが勝ってもおかしくない、伝説と呼ばれた者同士の対決。

その皇帝が全力を出しても届かなかった。ウマ娘達は、そこで初めてマルゼンスキーの中に眠る”怪物”に気付いたのだろう。1人、また1人とマルゼンスキーに勝負を挑む子は減っていった。世間のプロパガンダも多少は影響してしまったのかもしれない。

それでも彼女はまだ本気を隠しているらしい。自分自身が楽しんだ末に発揮される、自分自身の為の自由な走り——スーパーカー足り得る本気を。

??有難い。実に好都合である。

「なあ、マルゼン。」

「ん〜?」

「本気で楽しめるレースに??興味無いか?」

一瞬沈黙が漂ったが、反応は直ぐに返ってきた。

いつの間にか高速を走っていたタツちゃんは、ゆっくりとサービスイリアへと入っていく。

「??届かないわ。”怪物”には。」

「ふーん??そうかい。それはつまり、お前さんが勇者御一行を何も見てなかったって事だな!全く!何も!見えてませーんってこった!」

「えっ、ええ???なあに?そのテンション??。」

「なあ??お前さんから見てデジタルはどう思う?」

「??優しい子、かしら。勿論強いっていうのもあるけどね。」

「ああ、優しいし強いぞ。なんたってウマ娘全員がライバルで”推し”だ。その上、今まで走ってきた全員の気持ちも背負ってんだから



な。これからもそれは変わらない。誰の気持ちも拾って、世話焼いて、”てえてえ”って変わった鳴き声出して??俺がもし居なくなっても、全員と一緒にに行ける所まで行こうってやっていくのさ。例外なんて無い。距離も、強さも、国も。そんな勇者がな——。」

車が止まる。

これは??俺の過去との決別だ。

そして約束でもある。あの人??そして、阪神JFで俺に背中を見せてくれた1人の勇者との。

だからこれが——最初で最後の宣戦布告だ。

「たかだか一人旅してきただけの怪物如きに負けると思うなよ。」

ネクタイが引つ張られ、鼻と鼻が触れ合う程近くまでマルゼンスキーの顔が来る。可愛げのある整った顔立ちに浮かぶのは、ゾツとするほど闘争心に満ちた笑顔だった。

後輩ちゃんとも、ブルボンとも、ルドルフとも違う??まるで比べ物にならないくらい威圧感。

??喰いついたなあ、おい。なあにが楽しく無いだ。タツちゃんみたいにギラついた目付きしちやってよ。おっかねえ??けれど、どうしようも無く燃えてくる。この動悸も、震えも、全部全部武者震いだチクシヨーめ。

「良いわよ??乗ってあげる。勇者の怪物退治なら、甘噛みくらいは抵抗しようかしら。楽しむのに夢中で噛み千切っちゃったらゴメンね?。」

「はんっ、ポコパンしてそのままウチのチームにご自慢のスーパークー共々納車させてやらあ。自分が何なのか思い出させて——。」

あっ。吐きそう。

「すまん、ネクタイはちよつと??酒が??うつ。」

「??あははっ!もう??そういう締まらないとこ全然変わらないのね。」  
「首は絞まつてるけどな??あつ、待って、本当にギアがバックに入る。」  
「ちよつとちよつと!?!タツちゃんにゲロゲロくっつてするのは止めてよ!?!」

「じゃあエンジン切ってくれ??頼む??。」

か?開放された??クソウ!珍しく決まったかなつてちよつと自信あつたのに??あー気持ち悪い??. ヨシエさんに最後絞められたのがダメだったかなあ??。

ヌツ?なあにクスクス笑ってるんだこの美人は??顔が良い。何処と無く可愛い系の顔立ちはスペちゃんやチヨノオー、カレンに通ずるものがある気がする。あくまで気だが。

「じゃあゆつくりしてから帰りましょうか。お水いる?」

「助かる??これで負けたら、最っ高にかっこ悪いよなあ??。」

「思っても口にしなければパーペキかもね。??勿体無い事したなあ。」

「んあ??何が?」

「お誘いを断っちゃった事。」

「??そうかい。それ聞けただけで満足だよ。」

結局、20分はダウンした後を送り届けてもらう事になった。

煽られた腹いせか、帰りはタツちゃんてぶっ飛ばしやがったけどな

!!

うつぶ??。



「??送り届けてくれるとは聞いたけどさあ??なあんで俺こんな豪邸に

居るんだよ??。」

「だって??ウチの方が近かったんだもん。あのまま乗せてたら君、本当に戻しちやいそうだったし。」

「それは??何も言えん。」

実際ヤバかった。いやそもそもこの美人がぶっ飛ばさなきゃ済んだ話なんだが??。

質素だがめちやくちやに広い部屋と、ガレージに繋がっている2つ目の玄関。ここに1人暮らしとは中々に成人男性には夢のような話であり、ロマンでもある。俺のアパートなど、こここの半分も無い。凹む。

ソファーにダウンしながら辺りを見渡すと、思いの外室内はさっぱりしていた。

「??失礼承知で聞きたいんだが、何か綺麗だな。1人暮らしは色々雑になるとか言ってたか?」

「んー??そうなんだけどね。もう様子を見に来る人も居ないから、いい。」

「??すまん。」

「もう、どうして君が謝るのよ。」

そうだ。大体マルゼンスキーの様子を見に来ていたのは、シンザンと先輩だったんだ。

ん?だが普通は、逆に悲惨な事にならないか?俺はしよっちゅう油断してる時に相棒や後輩ちゃんが来るからその都度呆れられていると言うのに。

「??いや、余計な詮索だな。カレン的に言うなら『カワイクない』。勇者御一行のトレーナーとしてはやってはならない事である。」

そんな事を考えていたら、ポケットの中で携帯が鳴った。相手は??『ハゲ』。

あつ、閃いた。

「すまんマルゼン。ちよつと電話していいか？」

「どうぞ。水でも持ってくるから。」

「サンキュー。??もしもし。」

『おう、さつきぶりだな若坊主。』

立ち上がったマルゼンスキーの足が止まった。

「どうしたんすか？」

『掛け直すって言ったろう。まあ??大した事じゃねえ。お前が約束を覚えてるのか、気になってな。』

「??ああ、覚えてますよ。」

『そうか??なあ、若坊主。実はこの間マルゼンスキーのレースを見たんだ。相変わらずスゲエ走りだな??だが、あれはマルゼンスキーじゃねえ。アイツの中に居る、何かだ。楽しく走らねえアイツはアイツじゃねえって、やっぱり思っちゃまったよ。途中で面倒見るのを他人任せにした俺が言えたもんじゃねえけどな??。』

「それで約束の事心配になったんすか?随分弱気になりましたね。」

『歳とるところなるんだよ。お前もすぐ分かるからな。髪だって抜けらあ。』

「一緒にすんなハゲ。」

こちとらまだ三十路、それどころか可愛いの極みを集めた勇者御一行のトレーナーだぞ。あの子らに恥じない様に身なりの努力はしているつもりである。モルモツT君の様にイケメンという訳では無いから、ここで手を抜いては見放されてしまう。ヤダ!そんなの小生ヤダ!

そもそもやらないと怒られるし??悪意の無い純粹さ程、恐ろしい言葉は無い。

『ハハハッ!まあなんだ??アイツにもシービーにも何も言わずに出て

きたようなもんだからな。でも1つだけ、今のマルゼンスキーに言える事がある。アイツの鍵キは刺さったまんまだ。エンジンだって充分過ぎるほどに暖まつてる。ただ目的地まで一緒に運転してやるトレーナー運手が必要なんだ。』

「??それが分かってんなら、頼みがあるんだけどさ。1日だけで良いんだ。聖蹄祭が終わった後の、ほんの数十分で良い??マルゼンスキーのトレーナーに戻ってくれないかな。」

「っ??トレ——!。」

「しーっ??心残りなんだろう。だったら戻ってきて、直接言つてやつてくれないか。」

『??あー、何だ。そりやお前に必要な事か?』

「俺にも必要だし、先輩らにも必要だと思う??多分。」

『そうかよ??ヨシエだけならまだしも、お前も何考えてるか分かんなくなってきたなあ?』

「素直な弟子はいつでもアンタの教えを守ってますよ。”面白えつてのは大事な事”、でしょ?そういう訳だから、後は2人でどうするか決めてくれ。俺は寝る。」

『あ?2人——。』

携帯をマルゼンスキーに投げ渡した。こっちは言うだけ言つてやったし、何より酔いのピークが半端じゃねえ。頭痛いし??気持ち悪いし??うえつぶ。あつ、無理無理??ちよつと本当にソファア借りなきや??こ、これ幾らのソファアなんだ?ゲーはマズイよな?。

いや幾らとかの前に、女学生の家上がり込んで1発りバースとかイカれてるわ。

耐えろ、俺。頑張れ、マルゼン。

「??もしもし?えつと??お久しぶり?」

『っ??マルゼン??そうか、あのガキ?最初っから??。』

「先輩!クソガキからの宣戦布告、アンタのウマ娘には出したからなら!さっさと俺が寝た後にトレンディでもやって、全力で相手してもら

うからヨロシクツ！お休み！」

それだけ叫び、俺はとうとう死んだ様に眠りについた。

『なあ、若坊主。もし俺が居なくなったらの話だが??お前が1人前でも半人前でも良い。ちゃんとトレーナーやれるようになった後で、マルゼンスキーがみつともねえ走りをしてたら——面倒、見ちやくれねえか。なんならケツ叩いてもいいぞ。』

『白昼堂々セクハラか?アンタ、この間もあのいけ好かない女トレーナーにボコボコにされてたろ。』

『アイツは良いんだよ。天性のクソ女だが、泣き虫で面白え奴だから俺は好きだ。』

『そうですか??俺に面倒見れるって、本気で思ってます?』

『ああ、思うね。お前にしか頼めねえ。』

『そつすか??じゃあ、まあ、約束します??。』

『ハツハツハツ!!なあにひよってんだよ!お前はやりたいようにやるだけで良いんだっつ?!?アイツの事、頼むわ。』

『??うす。』

## 第5R : \*むかしむかしの ことじやった

『そこを頼む！君をスカウトさせて欲しいんだ！この通り！』  
『えっ??その??ご、ごめんなさい!』

スカウト失敗、通算5人目のウマ娘が走り去っていく。俺はその背中をただ見送る事しか出来ない。あの人が居なくなっただけから早いもので1週間??サブトレーナー上がりの実質新人トレーナーの現実など、こんなものだ。

”お前はもう一端のトレーナーだ”、と言っていたあのハゲ??いや仮にも先輩なのだが。やはりハゲのお墨付きを貰った所でこのザマである。

必死こいて中央トレセン学園のトレーナーになったは良いもの何も始まらない。そりやそうだ。担当が居なければ、暇人のトレーナーに出来る事などボケっとしてるか模擬レースを見て数打ちするしか無いのだから。

ウマ娘を選ばなければ契約の話はきつとすぐにでも結べるのだろう。しかし同じ目標を見据える事が出来なければきつと上手くやっていけないのだから、”妥協する”という形は絶対に取りたくない。しかし??。

『ごうも上手くいかないもんかね??あー、キレそう。』

人柄だろうか。それとも俺が自己中野郎だと言う空気が滲み出ているのだろうか。何にせよ??この子だと思っただけの子は大抵他のトレーナーに先を越されるか、断られる始末。結局今日もボケっとな練習風景を眺めている事ぐらいしかやる事は無い。

親父の前で啖呵切っておきながら、なんとも惨めでダツサイ奴だ。マルゼンスキーに振られたところからズルズルと始まり、先の見えない契約というスタート地点。サブトレ時代に声を掛けたミホノブルボンと言うウマ娘はすっかりデビューしていた。俺とは違い、彼女

は彼女に合ったトレーナーを見つけてる事が出来たのだろう。つまりこの段階で俺に打つ手は無い。また次の模擬レースが始まりでもない限り目星も付けられない。

”迷ったら面白い奴を見つけてやれ”と言っていたハゲの言葉が脳裏をよぎる。何だ面白い奴って。アドバイスも薄毛と同じでふわふわじゃねえか。都合よくそんなウマ娘がいるわけねえだろうがハゲ。

最早ため息しか出ん。ため息で呼吸してると言っても過言では無いほどに。

そんな項垂れた俺の視界に、1人のウマ娘が映った。

ジャージを着ているクセに、何故か練習に混ざらずこちら側で深呼吸をしている背丈の小さなツーサイドアップ。そうして徐にポケツトへ手を突っ込んだかと思えば、取り出したのは2本のサイリウムだった。なに？

『さあ、本日も始まりました夢見るウマ娘ちゃん達のキラキラ練習風景。汗と涙を流しながらひたむきに夢を追いかけるあの子達にアタシが出来る事??それは精一杯の応援!練習のお邪魔にならないよう最小限の声と最大級のすこすこクソデカ感情を念として送り届ける事で——えっ?!もうライブル関係を築いてらっしやる?!昨日までそんな空気が無かったのに?!ああつ、なんて残酷な青春??っ!昨日の他人は今日の友!明日のライブル!しかしそのライブルが貴女を強くする!勝ったり負けたり色々なことを乗り越えて、流した涙の数だけ前へと進み、貴女だけの夢を掴み取る道へと踏み出したその勇気を一生掛けて推します推せます推してみせますともッ!!はあく好きッ!!♡♡♡♡』

変なのが居た。

えっ???変なのが居た。何だあれ。何でライト振ってた。イベント会場じゃないんだぞここは。最大級のクソデカボイスに最小限の配慮みたいになってんじゃねえか。ツッコミどころが多過ぎて最早



どこからツツコんでいいのか分からん。

いや、出来る事ならそつとおきたい。俺が関わられたくないとかそういう話では無いのだが、本人が楽しんでるのなら別に首を突っ込むことも無いだろうと言うわけだ。そう、寧ろ善意の距離感。気になるなら場所を変えれば良いとも思うが、別にそういう訳では無い。うえに負けた気がするので俺もここで陣取らせて頂こう。

結局その謎のウマ娘は、練習が終わるまでずっと1人で喋り続けていたし、なんなら20回は『しんどい』だの『ひよあっ!』だの『ミッ』と叫びながらその場で倒れていた。何なんだアレは。奇声を上げる度にビクツとするこちらの身にもなってくれと言いたい。全く練習風景が頭に入ってこなかったわ?? あっ、やべ、眼が合った。

『あつ、どうもすみません1人で盛り上がっちゃって??へへへ??。』  
『いや??良いぞ、別に。』

その日はそれで終わった。強烈なインパクトではあったが、まあこの先会う事は無いだろうと思いつつ帰った??が。何の因果か、行く先々にあのちびっ子ウマ娘——アグネスデジタルは現れた。

と言うより、行く先々の物陰でウマ娘達の青春を覗き見てはぶっ倒れているので、最早不審人物そのものである。

俺の前で倒れる事通算44回目。

流石に放置し続けるのも心苦しく、かつその情熱（と言うより限界オタクじみた愛）に僅かばかり興味が湧いたので保健室に運ぶ事にした。

目を覚ましてすぐ、デジタルは余程テンパったのかマスオさんの様な悲鳴をあげ、何故か俺の前で涙ながらに罪を認めた。

重いよ。そのレベルのもん誰も求めてねえから手を差し出すなお前??別に逮捕もお縄もしないよ??。

何とか落ち着かせて話を聞けばやはり濃いめのウマ娘オタクであつたが、しっかりとした動機があつたわけだ。

昔から背丈が小さくパツとしない見た目も相まって、周りからは走

る事をあまり期待されていなかった（心配とも言うのだろう）らしく、そんな時見たウマ娘のレースに強く惹かれ、愛とオタク心に目覚めた末にトレセンの門をくぐったとか。自分が勇気を与えられたから、恩返しの意味もあると。

『トレーナーさんはどうしてトレーナー業に？あつ、やはりウマ娘ちゃん達が好きで支えたいからとかですかね!?いや、先日あんなに熱心に練習も見られてましたし、そのお気持ちはよおっつく分かりますとも？つて、どうしました？』

『いや？俺は？その？。』

脂汗が滲む。デジタルの眼を見れずに、俺は目を逸らしてしまった。

オタクモードの時は分からなかったが??デジタルにはデジタルの想いがあつて、真っ直ぐな眼をしていて。

見られたくなかった。

俺は何か、そういう真っ直ぐな気持ちなどあっただろうか。少しでも早く親父に良い所を見せようとして、ロクにウマ娘達の事を考えて行動してきたわけでも無い。そのクセ”俺が妥協したくない”だなんて自分優位の考えを持ち続けて??。

だからマルゼンスキーの問いにも答えられない。

だから先輩の期待にもきつと??応えられない。そう気付いてしまった。

言葉に詰まる俺を他所に、デジタルは耳をぴんと立たせながら言った。

『??あつ!!何処からかエモの鼓動がする!こうしちゃいられねえツ!愛故に、愛のままに——デジタル、参ります。じゆるっ。』

『ん??行ってらっしゃい。今度は変な場所で倒れるんじゃないぞ。後ヨダレは拭きな?』

布団から降りたデジタルはパタパタと扉の前へと行き——こちらを向いた。

『トレーナーさんもどうですか?』

『えっ?俺は??すまん。俺は、お前さんと違って全然??ウマ娘達に向き合う気持ちというか、覚悟が無いらしいから。ははっ、トレーナーとして恥ずかしいよな。どうなんだって話だ??だから——』

『はい。だから、行ってみるんです。』

小さな手が俺の手を包んだ。相変わらずどこまでも真っ直ぐな眼なのに、さつきと違って逸らせない??と言うより、逸らしてはいけない気がする。

『古代の哲学者は言いました。”我々の性格は、我々の行動の結果なり”、と。つまりは逆のパターンも考えられるわけですよ。”行動すれば性格が生まれる”。アタシがウマ娘ちゃん達に勇気を貰えたように、トレーナーさんもきつと変われます。』

『??俺はそんなに出来た人間じゃないさ。変わるのだって簡単な事じゃ無いだろう?』

『根っこから変えようとすれば確かに大変かもしれないですけど??トレーナーさんの根っこって、もう出来てるじゃないですか。アタシみたいなのを保健室に連れてきてくれたり、何も知らなかった自分が恥ずかしくてウマ娘ちゃん達に申し訳ないって思えちゃうぐらいには優しい人だと思いますよ?』

何も言えなかった。ただ目の前のウマ娘が——アグネスデジタルの話す言葉の1つ1つが、不思議と心の中にストンと落ちた。

繋がれた手の温かさが、とても久しく忘れていたものにも思える。そんな俺を見て、デジタルは笑いながらこう続けた。

『トレーナーさん。知らないって言うのは、知る楽しさがまだまだ沢

山あるって事です。さあ??沼へようこそ。』

『沼って??俺も、そんなドツボにハマれるかな。』

『ハマれますとも。アタシ基本的には人見知りですけど、トレーナーさんには同じものを感じるんです。こっち側の素質、有りますよ旦那さん。』

『引きずりこもうとするんじゃない??ははっ、分かったよ。じゃあ未熟なトレーナーにご教授して頂けますか?先生。』

『モチのロンです!そうと決まれば急ぎますよ!エモはいつでも一瞬、あっという間に流れて別の場所へ向かってしまふんですから!!』

それからはトレーナー勉強の合間を縫ってはデジタルと共にウマ娘達の練習風景や模擬レースを見る機会が増えていった。

『あああああああッ!!オペラオー様素敵イ!!♡あっ、あっ、ドトウさんが足を滑らせてオペラオーさんの左頬にビビビビンタをつ!!?それすら笑って許すどころか右頬を差し出すと!?!?ぐう聖人。』  
『その情緒の振り幅は真似出来んな?。』  
!?!?

ある時はアイツの熱量に圧倒されたり。

『本当に模擬レース後のウマ娘に”好き”って叫ばなきゃダメか???』

『1回声にしたら慣れますよ。アタシも言うのでファイトです!』

『そ、そう???じゃあ??せーの。』

『好きー!!』

『がんばえく!!』

『お前話が違うじゃねえかよッ!!番組の趣旨間違えて叫んじゃった未成年の主張みたいになっただろうが!耳出せオラアッ!』

『あーッ!!いや、直前になってアタシのパトスがこうしろと囁いて、耳は、耳はあーッ!!』

またある時はデジタルのペースに振り回されて。

何故か2時間ぐらいの講義やアイツのウマ娘愛を聞く時間もあつたが、何となく分かりみが深かった。あつ、言語が移り始めてる。しんどみ。あつ、言語が（ry

そうして過ごしている内に、デジタルに関しては新しく分かったこともあつた。適性距離が恐らくマイルか中距離だというのもそうなのだが、まさかの芝とダート、両方出来る勢だったという事。模擬レースやウマ娘達の練習が終わった後、デジタルは単純に2倍の練習量をこなしていたわけだ。全ては推し達の尊みを全身で感じる為に——とか言いながら残り香を嗅いだり甲子園ばりに砂をかき集めていたわけだが——まあ、ポテンシャルが凄まじい事だけは良く分かった。

”面白い奴を見つけてやれ”。

あの人はそう言っていた。何て大雑把でふわふわしたアドバイスだと、少し前は悪態をつけていた訳だが??。

『??面白い奴、ね。うん??最高に面白い相手、見つけたよ。』

それから——それから?

一緒に過ごす内に、自分の中で確かな変化を感じていた。心に余裕が出来たのかもしれない。それを自覚し始めて、ようやく俺はアグネスデジタルをスカウトしたのだ。自己肯定感の低いウマ娘ではあるが、走ってウマ娘達を近くで見たいという意志はあったらしいから。

だから??。

”ウマ娘が俺を変えてくれたと言うのなら、それは間違いなく1人のウマ娘のおかげだ。俺は、俺を変えてくれたウマ娘と一緒に居たい。これから先の夢や未来を、好きになつたウマ娘の隣ですつと過ごしていたい。2人でやりたい事やって、練習して、エモを感じてバカもやって??だからアグネスデジタル。どうか、俺と一緒に歩んでくれないだろうか”。

そう言つて何とかOKを貰えて、2人でデビューして。チャレンジしてみようと臨んだジュニア級のG1レースの1つでもある阪神JF。

その前日に——親父は逝つてしまった。

山場を越えられなかったのだと、母親から連絡を貰った。

俺達の晴れ舞台を見る事無く。俺に最後の見送りも言葉も掛けさせず。最後の最後まで、頑固な親父のまま安らかに眠った。

流石に動揺どころの話じゃない。だって俺がトレーナーになったのは、あの人に一言言いたかったからだ。”凄えだろ”、と。

一言言つて貰いたかったんだ。”やったな”、と。

『トレーナーさん??アタシ、走ります。約束します。トレーナーさんのやりたい事、夢が見つかるように一緒に居るつて。トレーナーさんのお父さんに、アタシ達のやった事が届くように勝ち続けるつて。だから——ゴメンなさい。』

レースはデジタルが勝った。あの時——デジタルはどんな顔をしていただろうか。目標を見失つた俺に。やりたかった事が2度と叶わなくなつてしまった俺に。

覚えているのは、名前の付けられない感情からくる涙を流した俺の手を包んでくれた温かさだけだった。



鼻の辺りにほんの僅かな息苦しさを感じて眼を開く。まず視界に入ってきたのは??ヨシエさんのクツソ整った顔だった。近い近い近い。何で人の鼻つまんでんだこの人。

「??おはようございます。」

「グツモ。遊びに来ましたよ。良い夢見れました？夢の中で誰とオフパカしたんです？怒らないから私にだけこっそり??。」

「何の話——オフパカってなんですか!？」

「思ってる通りの事ですが？あんまり動揺すると童貞丸出しで滑稽ですよ。」

「ヌツ?! うっ、ぐう?!」

「ところで今何時かご存じですかね。」

そう言われて部屋の時計を見る。現在午前10時。今日はいよいよ始まった聖蹄祭の初日であり、9時半にはルドルフの開会宣言があったはずだ。そして俺を含めた、特別スタッフの腕章を付けたトレーナーとウマ娘のペアは1度ミーティングを挟む為9時にはヨシエさんの所へ集合、開会宣言終了後に持ち場で巡視と助っ人を??30歳独身、まさかの寝坊。

それどころか昨日マヤちゃんと夜更かしした奇跡の天才ウマ娘——トウカイテイオーも一緒に寝坊。なんなら俺が寝落ちするまでトレーナー室のソファで寝ていたはずの彼女は、隣にあるデジタル用の椅子の上で丸まりながら人の脚に頭を乗せて爆睡中である。起きなさいホラ！女王の御前だぞ！それにそんな寝方したら身体痛くしちゃうでしょ！

い、いかん？今はとにかく謝罪を??。

「??あの？すみませんでした??。」

「あの時計、私が1時間半勝手に早めたのでまだ8時半です。ビックリしました?。」

「なんて事を。」

「私の許可無くテイオーに膝枕した仕返しです。くたばれ。」  
「ひん??。」

30年生きてきて笑いながらくたばれて言われたの初めてかもしれない。凹む。そもそも俺の意思じゃないの??。

あつ、携帯に通知が。このタイミングで一体誰が——ヌツ。女神ポーノ様じゃないか。昼の弁当に使うおかずが厨房の冷蔵庫にあるらしいが、他に何か必要かという連絡だった。こんな連絡が飛び交うのもウチのチームならではだろう。

良いんだポーノ。その気持ちだけでトレーナーさん嬉しいよ。通販で送られてきた地鶏だけでも豪勢なのにこれ以上何を要求する事があるうか。コツペパンぐらいだぞ。ふふつ、可愛いヤツめ。

「誰からですか?」

「ポーノです。おかずが足りるかって言われちゃって??地鶏があるから別に良いんですけど。」

「へえ??自撮りがおかず。トレーナーさん割とド変態だったりします?」

「何でそうなったんですか。」

「送って貰った自撮りがおかずなんですよね?しかも足りるか心配までされちゃって。」

「確かに送って貰ったと言えばそうなんですけど??あれ?今共通の話題ですよね?」

「ですな。」

??じゃあ何でド変態呼ばわりされてんだ俺は。わ、ワケが分からんぞ???こういう時はスパッと話題を変えよう!そうしよう!!

「そつ、そう言えばデジタルに聞いたんですけどね?最近ヨシエさんのこのキタちゃんが熱いらしいですよ。何でもキタ×スイの時代が来てるよ。」

「キタ、吸い??私そのブーム知らない??テイオーしかやってない?。」

「やる??いえ、むしろやって貰ってると言いますか??。」

「はっ?クンカしてると?」

「クンカ!?しつ、してないです!」

「何でしないんですか?したくないんですか?キタちゃんに不満があ



ると?。」

「あつ、いや、ほ、本人の意思があるなら寧ろ好きにやってくれた方が??。」

「やらせるわけないでしょ童貞が。殴るぞ。」

「あれ?今共通の話題ですよね?。」

「ですね。」

じゃあ何で胸ぐら掴まれてんだ俺は??ッ!ま、まるで分からんぞ!?  
何の話題提供しても正答出せる気がしねえッ!

そんなやり取りの中、俺の脚で寝ていたテイオーがゆっくりと起き  
上がった。

「何一つ共通の話題じゃないよ。思わず起きちゃったよ。さつきから  
何話してるのさ。」

「グツモ。良い夢見れた?。」

「ヨシエに半年間嗅がれる夢。」

「わあ、吉夢。」

「悪夢だよ。」

「えく?もう、テイオーがどうしてもって言うから、勇者御一行とペア  
にしてあげたのにそんな事言うんだー。」

「??それは、そう?だけど??。」

相手がヨシエさんだからか??テイオーは珍しく僅かに眼を泳がせ  
た。

「まあでも、取り敢えず起きたなら良いや。私先に行くから、トレー  
ナーさんも遅刻しないで下さいね。」

「はい??。」

「ああ、そうだテイオー。」

ヨシエさんはこちらに背を向けたまま、どこか楽しげな声で言っ

た。

「何言うのも自由だけど、大きなネタばらしはNGだよ？興が削がれるからね。」

そうして彼女は部屋を後にした。時間のズレた時計の秒針の音だけが静かにリズムを刻む。テイオーは緊張が解けたように、深くため息をついた。

「どうしたんだよ急に。ヨシエさんと何かあったのか？反抗期？」

「違うよ。あのさ??ヨシエのチームとレースするんだよね。」

「ああ、無敵のチームだぞ。」

「メンバーがメンバーだから凄く強いんだけどさ——気を付けてって言いたかったんだ。」

いつもは明るく元気なテイオーなのだが、今の顔は真剣そのものである。どことなくデジタルがたまに見せる”別人の様な眼”にも見えるが、気の所為なのかもしれない。

それ以上にこのチーム、我ながら完璧な布陣だと思うのだが何をそんなに心配する事があるだろうか??いや、統括が俺なら心配しかないな。凹む。

「このエキシビジョンレース、集客目的って言う話だけど??多分違うんだよね。ヨシエ、この間『神様に電話してた』とか言ってたし。」

「神様?いや、あの人してそうだな?。」

「エキシビジョン??ううん、聖蹄祭そのものがきつと、ヨシエにとっての”手段”なんだと思う。何か??誰かの為の。だから気を付けてね。ヨシエだけじゃなくて、ボク達チーム『ポラリス』全面協力で鍛えてきた『ベジタリアン』は強いんだから。」

「そうか??『ベジタリアン』?。」

「そっちが『T☆K☆G』なんてチーム名付けるからヨシエも変な方向

に走っちゃったんだよ。言っておくけど、ボクは止めたんだからね。」

テイオーがじとつと見てくる。じつとりテイオーめ??あれは酒に飲まれた良い大人3人がうっかり決めてしまったものなのだから許して欲しい。バクシンオーからは好評だったんだ。『強く、カツコよく、ガンガンバクシンとは素晴らしいですね!』と。

テイオーはふうつと息を吐いた後、いつも通りのやんちゃなお転婆娘のごとき笑顔に戻った。

「まあ、それだけ!後は今日がはちみーの移動販売が学園に来る日だからなんだよねー♪明日はマヤノと仕事が変わるからさ。」

「いや、そこは別にお前さんでも良いんだが??待て。さてはハナから奢らせる気満々だったなお前。仕方ないから2000円迄なら奢ってやらんことも無い。」

「ボクが言うのも変だけど財布の紐緩すぎない?」

「俺はウマ娘にベタ甘だぞ。いつも通り硬め濃いめ多め野菜マシカラメアブラチョコモランマ蜂蜜少なめで良いよな。」

「何その胸焼けしそうなギットギトのドリンク??。」

「ギットリテイオー。」

「ボクが脂ぎってるみたいない方やめて。取り敢えずボク達も行くよ。ホントに遅刻しちゃうよ?。」

「おう。」

テイオーはそのままこちらへ背を向け、「ねえ」と声を掛けてきた。その声にさつきまでの元気さも勢いもない。

ただ独り言の様に、静かに呟くのだった。

「——」ウマ娘皆が幸せな世界 って??何だろうね。」

## 第6R : \*れきしの はじまり

「何っ!?!地鶏全部食べていいのか!?!」

「うん!おかわりも良いよ♪」

「うめ?うめ??うめ?。」

「先輩これから死ぬんですか?」

「何て事言うんだお前。」

時刻は午後1時半。午前中の激務——主に後輩ちゃんのチームが開いていた、託児所という名の『性癖破壊教室』での激闘を終え、俺とボーノ、それから後輩ちゃんは今日の為に準備された特別レース会場の観客席で遅めの昼食である。

とは言っても、レジヤースートをひいただけの簡易な観客席なのだ?あつ、因みにテイオーはというと、はちみーを奢った後ヨシエさんの元へ合流したので不在。飲み切ったクソデカ容器だけ俺に預けて行きやがった。野郎??カワイイじゃねえか。

午後2時から俺達3チームのウマ娘が、会場を訪れたトレセン入学生望の子供達にあれこれレースに関してのことを教えてあげたり、交流したりする特別指導体験イベントが始まる。最後には勿論子供達だけのレースもあるとの事。

ウチのチームからはデジタルとカレン、マヤ。後輩ちゃんのチームからはクロフネとエアグルーヴにライス。モルは当然カフエとタキオンだ。因みにタキオンが割と乗り気だった事に驚いている。

いや、アレは何だかんだでおチビちゃんには優しいからな??:『君にだけは言われたくないねえ』と返された事にもこの際眼を瞑ろう。

まだ開始前ではあるが、会場はさながら運動会の昼休憩の如し家族連れで賑わいを見せていた。宣伝というのは凄まじいもので、前評判だけでも結構な人気だとヨシエさんからも聞いている。

「そういうえば先輩、デジタルさんどこ行きました?」

「あそこでカレン達と話してるぞ。」

「どれですか。」

「居るだろ、おしやぶり啜えた美少女が。」

ようやく気付いたのか、後輩ちゃんは『パネエ』と一言零して笑っていた。

彼女が気付かないのも無理はない?? なんてたつて今日の相棒は本気のオタ活モード。ツーサイドアップの髪は全て下ろして後ろでキュツと結び、眼鏡をかけたスーパー美少女デジたんなのだ。初めて見た時は俺も分かんなくて、気づいた時には危うく卒倒しかけたさ。ふふつ、流石ポテンシャル激高オタク。お前のような普通のウマ娘が居るか。

但し中身は変わっていないので、性癖破壊教室から今までずっとおしやぶりを啜えている始末。

なに? 俺これからアレを筆頭に子供達の前に立つの? めっちゃ緊張してきた?? おい相棒。頼むから親御さん達の前で Be<sup>幼</sup> the<sup>児</sup> ba<sup>退</sup> by<sup>行</sup>するんじゃないぞ。クリークママから貰ったかもしれないが、そのおしやぶり没収だからな。

全く——んあー! 腕を襲う%<sup>バイスラ</sup> ツ!!

「お兄ちゃん緊張してる?。」

「カ。ツ、カレン??。」

横を向けば妹。その登場の仕方止めろって! お前さん距離感近いんだから急に出てこられるとお兄ちゃんはビックリ、ポニーちゃんはビックリしちゃうでしょ! その距離の詰め方、他の子に教えるんじゃないぞ!

「緊張してるなら?? さっきフラッシュユさんにおまじないを教わったから、お兄ちゃんにも教えてあげる♪」

うん、そうだね。君達ってば性癖破壊教室で意気投合してたもん

ね。それで男の子も女の子もお構い無しに猛威を奮ってたまんね。

絶対ヤベエだろ??!

エイシンフラッシュと言えば男性トレーナー達から見ても『センチブ勝負服部門』堂々の1位を掲げるウマ娘。ドイツの民族衣装を模した勝負服から見えるダイナミックなフラッシュはまさにデッカー!それが押し強さストロングなカレンチャンと手を組もうものなら向かうところ敵無しなのは分かりきっている。まさにミラクルな相乗効果。

「自分に頑張れって言ってあげるんだって。こうして??”toi, toi, toi, toi”って。」

そう言いながらカレンは、人差し指で自分の胸元を3回ノックした。

だが俺は知っている??これはブラフ。俺の視線を自分の胸元に持っていかせ、後になって『お兄ちゃん、カレンのどこを見たのかな?♡』と弱みを握りながら迫ってくるに違いない。そのまま頑張れ♡頑張れ♡されてノックアウトです。間違いない。

確かにお前さんからしたらお兄ちゃんは手頃なtoy, toy, toy, toyなのかもしれんが、ここで俺がその誘いにhoi, hoi, hoi, hoiと乗る事は断じて無い!そんな事をすれば明日には社会からpoi, poi, poiなのだ。わざわざそんな選択をすると思うか?いや、nai, nai, nai, nai。

「先輩また何かアホな事考えてませんか?」

「至って真面目だぞ俺は。カレンのおかげで適度な緊張感を維持出来ている。」

「そすか。まあ何でもいいですけど、今日は普通にしてて下さいね。小さい子相手だとすぐやらかしますし。」

「お前さん俺の事なんだと思ってるの?」

「男性観だけ壊していく通り魔的勘違い野郎。」

「さては俺の事嫌いだな貴様。心配しなくても、そんな事出来るほど器用じゃねえつつの。そもそも子供の段階でそんな年上に好意持つような子も居ないだろうに??なあカレン。」  
「そうだね。」

そう言いながら我が妹は微笑んで耳絞ってるッ!!!

えっ!?何で!?何でこのタイミングで怒り出したの!?待て、落ち着け、カレンは笑顔のままじゃないか。俺の考えすぎという線もある。よーつく考えてもみる。カレンはいつだって『もく!カレン怒っちゃう!ぷう。』とか、あざとさ全開のクソカワムーブをしていた筈だ。その度にこっちも『もく!ポニーちゃん掛かっちゃう!ヌツ。』となっていたし間違い無い。こんな事1度もあつた事など無いだろう。

それだけ本気で不機嫌ってことですね、分かります。分かりたくねえ。

「よ、よし!飯も食つたし、昼から皆で頑張ろー!なっ、カレン!!」

笑顔のままこちらを向いたカレンちゃんからの返事はなかった。ヒヒン??。

そうして迎えた特別イベント。

ゼッケンを付けてグループ分けされた幼女達がワラワラと各チームへと散らばっていく。やはり知名度と言うのは凄まじいもので、カワイイカレンちゃんは勿論の事デジタルやマヤにも早速質問攻めの嵐である。

元々ウチのチームで新人ちゃん達の世話をしてくれているカレンとマヤだ。指導に関しては全くと言っていいほど問題無い。

子供達の扱いに長け、自身が最も大切にしている”カワイイ”の中にレースでの要点を伝えているカレン。

天才的な勘を持ち味に、子供達とフィーリングを合わせながら逐一こうした方がいいと教えてくれるマヤ。

そしてデジタルは??言う事などあろうか。まず適性を見抜くし、クセを見つけるし、それぞれにあつた練習量や内容を個別に教えている姿は、本気のオタ活モードも相まって最早トレーナーそのものである。

ヌツ。負けてはいられぬ。どれ??俺もトレーナーらしく面倒を見てあげようじゃないか。

「カレン、調子はどうだ?」

「うん。皆すつごく良い子でカワイイ♪」

「ふふっ、そうか。何か手伝うよ。」

「大丈夫!お兄ちゃん、多分やり過ぎちゃうから!」

「えっ。あつ、うん??マ、マヤゝ?何か手伝う事——。」

「トレーナーちゃんは休んでて良いよ!絶対やり過ぎるもん!」

「??デジタル?。」

「取り敢えず観客席で全体を見てあげて下さい。気になる所を指摘して貰えれば大丈夫ですから。」

やんわりと遠ざけられるのが一番ツラいつて分かってるのか相棒。何だよ皆してやり過ぎるつて??もっ、もしかして普段のトレーニングが厳しいって思われてる!?!ロリ相手に過剰な練習させかねない無能トレって事か!?

皆の練習見直さなきゃ??ヒヒン??。

まあ実際三十路のおっさんに教わるよりも可愛いウマ娘達に教わる方が楽しいし、感覚的にも分かりやすいかもしれないが??いや、しかし??こ、後輩ちゃんもモルモットも指導している。まあ??あの2人はビジュアルが完成されてるからな??。

女の子目線で見てもカツコイイ系の部類に入る後輩ちゃんと、そもそも地がイケメン因子で構成されているモルモット。

つまり入る隙も無く暇を持て余しているのは俺だけというわけだ。何だと!?



「なあボーノ？俺、トレーナーだよなあ??。」

声を掛けるが返事は無い。成程、つまりそういう事らしい。泣きそう。

「大きいおねえちゃんは料理をもってくるって言ってました。」  
「そっか??ん?。」

初めて聞く声だ。どこかおつとりとしていて少し高めのだ??まるで子供みたいな声。

チラリと横を向けば、そこに居たはずの女神ボーノはどこにも居らず、代わりに座っていたのはロリだった。何を言ってるか分からねーと思うが、ガチロリだった。

11番と書かれたゼッケンを付け、何故か練習に混ざるでも無く隣で豆菓子をポリポリ食っている。

鹿毛で毛先がふわつとしたセミロング。後ろに真つ赤な大きなリボンをつけ、左耳には水色と赤のストライプが入った小洒落た耳カバー。何より特筆すべきは、その整った顔立ちだろう。幼いながらもどこか大人びた印象を受ける美人寄りな眼——言うなれば。

「??アーモンドアイ。」

「あーちゃんの名前をしってるんですか?。」

「名前?ああ、もしかして本当にその名前なのかい?。」

「はい。でもみんなはあーちゃん、って言います。」

予めヨシエさんに渡されていたグループ表を見れば、確かにゼッケン11番にアーモンドアイと名前が書かれていた。ふむ、名は体を表すとはよく言ったものだ。ふふっ??ウチのチーム担当やないかい!!

いかん、これでは名実共に職務怠慢である。頑張ってくれているチームメンバーに申し訳ない。あつ、でも俺が面倒見たらやり過ぎっ

て言われるんだ??何とか合流させてあげられないだろうか??。

「あーちゃんは良いのかな?練習。」

「いいのです。あーちゃんは変わり者らしいので。」

「ほう。」

「みんなは走るのが楽しいって言うけど??あーちゃんには分かりません。あまり走りたくないのです。でも??そう言うと、おとももおかも、ちよつと悲しい顔をします。学校の間みんなも、そんなあーちゃんが変わり者だつて。」

「成程。そのお父さんとお母さんは?」

「??おしごと。明日は一緒にいるって言ってました。今日は貴重な経験だからと、おつかない顔のお姉ちゃんの前につつといたのです。」

そう言うと、あーちゃんは再び黙々と豆菓子を口に放り続けた。

少し不思議な子ではあるが、走る事が嫌いなわけでは無いらしい。しかもあの性癖破壊教室の生き残りだと。ふむ??要するに気分的な問題か。

やはり家族連れの中に1人だと少々居心地が悪いのかもしれない。子供はその辺かなりデリケートで繊細な筈だ。そして今彼女の相手が出るのは暇を持て余している俺のみ。よ、ようし??俺は本業のトレーナーだ、やれる。t o i , t o i , t o i ??。

「よし。あーちゃん、俺と練習するか!」

「できません。おじちゃんはスタッフさんですけど、トレーナーさんじゃないので。」

「えっ。」

一瞬何故?と思ったが、賢い俺はすぐに理解した。今俺の腕には特別スタッフの腕章が付いているだけで、トレーナーバッジはジャケツトに付けたまま。そして始まる前に、『暑いから良いや。』とジャケツトをデジタルに預けてしまったのだ。

つまり??今の俺は何を言ったところでフラれる特別スタッフのおじさん。それどころか『お、おじさんと友情トレーニングしよつか??。』と声を掛けてしまった真正銘の変態不審者さんである。

このガバツ!!あれ程バツジは手元に置いておくとヨシエさんとのやり取りで痛感したはずだろう!これじゃデジタルのが本当のトレーナーじゃないの!

正直俺よりトレーナーとしての適性は高いと思われれます。凹む。

「それにウマ娘が走る気分じゃないって??そんなのは、やっぱり変じゃないですか。」

「そうかなあ??わりと普通だと思うよ。」

「なんでですか?」

「トレセン学園の子達だって、何も毎日全力だったり、走る事に対してのめり込んでいるわけじゃないからさ。」

あーちゃんは言っていることが分からない、とでも言うように首を傾げた。

「参加しなかったイベントに行けなくてソファアで延々しよげるのも居る。チョークを折った罪悪感で泣きながら練習出来なくなるのも居る。尊敬する人の冗談に気付けない己の不甲斐なさにやる気を下げるのも居る。そういう日々も大事にしながら、皆楽しくやったり必死に踏ん張ってるもんさ。」

「??じゃあ?ちよつとだけなら、良いです。」

そこからはあーちゃんの気が変わらないようにボチボチと練習に取り組んだ。

軽く流してもらいつつ豆菓子と一緒に食い。

フォームの確認をしつつ豆菓子と一緒に食い。

指スマしながら豆菓子を食べい。

なんなら『もつと食え』と口に豆菓子をつつまれ、戻ってきたボー

ノに入れてもらったお茶で一息??あれ?何してたんだっけ?

『さあ、楽しい練習時間も終わりが近づいてまいりました。これから子供達の模擬レースが始まります!皆様大きな声で声援をお願いしまーす!』

場内アナウンスと共に子供達がそれぞれの親御さん達の元へと帰っていった。ウチのチームメンバーや後輩ちゃん達、モルモット達も戻ってきたが??人の顔見るなり、何とも言えない表情を浮かべている。何だその顔。揃いも揃って『あつ、やったな。』みたいな薄ら笑い浮かべやがって??。

「先輩??攫うのはマズイっすよ。」

「攫ってねえよ。仕事してたっつ。なあ、あーちゃん?」

「豆菓子食え。」

「え、うん。ありがと。見てろよお前、俺とあーちゃんのペアなら優勝間違い無しだぞ。」

「もつと食え。」

「え、うん。ありがと。」

「うまいですか?」

「おいしい。おいしい。」

「キツチリ餌付けされてるし??その子のレース、確か1発目っすよね。」

何だレースって??それよりもつと豆菓子?レース??レースッ!しまった!脳死で豆菓子を食い過ぎたッ!!

だ、大丈夫だろうか??いや大丈夫じゃねえな。ゴメンよあーちゃん、こんなおじさんの餌付けに時間を取らせてしまっつ??うっ?やはり無能??。

あーちゃんは何かを察してくれたのか、ポケットの中も含めて持っていた豆菓子を全部俺の手に渡してくれた。計20袋の大所帯であ

る。

「??やるからには、ちゃんと走ります。でも??きつと、なにも変わりません。」

そう言って彼女はゲートへ向かった。横顔に、どこかで見た事のある僅かな恐れと悲しさを浮かべながら。

『子供達がスタート位置につきました。練習の成果が出せるように頑張ってください!』

「ヤベエ?緊張してお腹痛くなってきた??どうしようデジタル??。」

「括ってみてはどうでしょう。」

「上手いこと言ったつもりか?ありがとう。」

『どういたしました。』

『位置について?よおい??スタート!!今一斉に飛び出しました!ハナを進むのは4番、続いて7番がそれを追走!全体やや縦長のレース展開になっていきます!』

子供達とはいえ流石ウマ娘、それも未来のトレセン候補生達だ。運動会みたいな空気感とは対照的に走りに関しての迫力はやはり凄まじい。800mという半端な距離ではあるが、あーちゃんはやや後方の位置取りをしつつ非常に良く周りを見れている。

如何せん距離が子供のレースに合わせて短い為、スプリンターの考え方も通用するかどうか疑わしい。俺らや現役のウマ娘達から見れば短くとも、子供にとっては長く感じるかもしれない。俺だったらあのぐらいの歳で800mなんて距離は走れない。なんなら今だって絶対走れない。

『さあ徐々に後続の子達も追い上げてきました!集団が見る見る内に縮まっていきます!ハナを取っている4番、このまま押し切れるのでしょうか!僅かに開いた真ん中、3番と9番が突っ込んでくる!先頭

は3人の争いかー!?ここで遂に動いた11番、最内から一気に——  
えっ?』

会場の空気が変わった。

足跡がくつきり残るほど地面を強く踏みしめたあーちゃんは、その目付きを鋭いものに変えて一気に突き抜けた。

接戦——それが起こる間もなく、彼女は末脚を爆発させて先頭争いをしていた子達を置き去りにしていく。

2馬身、3馬身、止まることの知らないそれは、下手をすればデビュー前の現役ウマ娘達とだって競える程の走り。

遅れて湧き上がった歓声を聞いて、俺はようやく彼女が先頭でゴールしたのだと理解した。

圧倒的、という言葉が1番しっくりくるだろう。彼女の走りは、幼いながらもそう感じさせる物で??それなのに、1着で走りきったあーちゃんは俯いていた。

そこでようやく分かったんだ。

あの子が言っていた、『走るのがあまり好きじゃない』という言葉。あれは——孤独からくるものだ。マルゼンスキーと同じ様に??自分の走りが周りから遠く離れた場所にある事を知ってしまった。自分が勝てば、努力した末に泣く子がいるという事実気付いている。

だから、彼女は笑わない。

だから彼女は楽しめない。

自分が置き去りにした子達の声に耳を傾けて、力強く手を握り締め、黙って下を向くだけだった。

もしあの子が本格化を迎えたトレセン学園生だったら、きっと多くのトレーナーや周囲の環境は言うだろう。『勝者は誇る事が責任だ』と。『それが競った相手に対する敬意だ』と。だがあの子はまだ幼く、その中で1歩引いた大人びた考えも出来る子だ。言葉一つで簡単に

気持ちは揺らぐし、恐らく彼女の今後にも関わってしまう。そんな子に今からどうこう強く言うのはあまりに容赦がない。

あの子に掛ける言葉はそうじゃない。

走った後に残るのは、勝ちか負けしかないと思っているから。

その次が??或いはそのまた次が必ずやってくる事に気づけていないから。

なら——変わり者のトレーナーが教えてやらあ。

デジタルの方を向けば、こちらが何か言う前に相棒は俺のジャケットを差し出してきた。

「??お見通し?」

「と言うより、顔に出てますね。」

「うーん??お前さんの前だと顔にも口にも出るな。じゃあちよつくら”推し活”してくるよ。」

「はい。あの子の夢を??歴史を、始めさせてあげて下さい。」

デジタルからジャケットを受け取り、フエンスを乗り越えたその足で真っ直ぐあーちゃんの方へと向かった。正面でしゃがんで顔を覗けば、あーちゃんの目には僅かに涙が溜まっている。

「あーちゃん。」

「??やっぱり、走るのはいやです。皆あんなに頑張ってたのに?楽しそうだったのに??泣いてる。あーちゃんが勝っちゃったから、泣いてるんです??。」

「そうだね。頑張って練習して、走って、それでも君に負けちゃって??悔しいと思うよ。でも——本当にそれだけかい?」

「えっ???」

こちらを向いた彼女に、後ろだと指で促す。そこに居たのはたった今2着でゴールし、あーちゃんと同じ様に涙を浮かべた子だった。この子は確か後輩ちゃんが面倒を見ていたはずだ。なら??きつと、大切

な事を教わっているだろう。

「一番難しくくて大切な、”諦めない”という心を。」

「あの??つ、次はっ！次は負けないからっ！」

「次??？」

「うん！次は私が勝つの！だ、だから??おめでどう?!」

最後まで堪えきれなかったのか、その子は泣きながらあーちゃんの勝利を称えて戻っていった。

あーちゃんが本当に走るのが嫌だと言うのなら、俺の思ったようにはいかない。だがこの子にウマ娘としての本能があれば、絶対に思う事がある。

「??わかりません。全然、あーちゃんにはわかりません。だって、勝ったのはあーちゃん？あの子は泣いてて??なのに——。」

「”勝ちたい”。」

振り返ったあーちゃんの眼はギラついていた。胸に手を当て、自分の中に生まれたであろう”熱”に戸惑いながらも、その顔に先程までの悲しさは微塵も見当たらない。泣きそうで、でもそれ以上に嬉しそうに笑っている。

「次も、その次も、何度でも。自分が勝ってやりたい??違うかな?」

「おじちゃんは知ってるの?」

「知ってるさ。もう何人も見てきたからね。あーちゃん??君は変わり者なんかじゃない。他の子よりもほんの少しだけ色んな事を感じられる、優しい子だ。さっきの子は、負けたから必ず強くなる。そしてあーちゃんも、これからその”勝ちたい”っていう気持ちと優しさを忘れなければ?そうだなあ??もしかしたら、偉業を達成しちゃうくらい強くなれるかもね。」

「いぎぎよっ??」



「皆がびっくりするくらい凄いことさ。」

「あーちゃんがすごいことしたら、おじちゃんは嬉しい?」

「ん? 勿論。だっておじちゃんは、あーちゃんの最初のファンだからね。」

その言葉に耳をぴんと立てたあーちゃんは、しかし次の瞬間には僅かに気を落とした顔で下を向いてしまった。

「??おじちゃんが、トレーナーだったら良かったのに。」

「おや。どうしてかな?」

「おかんが言ってた??トレーナーとウマ娘は仲良しなほど一緒に強くなるって。あーちゃん??おじちゃんなら仲良しになれるのに??。」

「そっか??そう言えば、君にまだきちんと挨拶してなかったね。」

そう言っただけはジャケットを羽織った。

今度はちゃんと、胸についたバツジが見えるように。彼女だけに聞こえるように、こっそりと耳打ちをする。

「実は俺、トレーナーなんだ。1着おめでどう。あーちゃん。」

「?トレー、ナー??おじちゃんが?トレーナー??」

「ああ。そヴツ!!」

眼をぱちくりさせた彼女は若干後退りをして——腹部への急襲、もとい重心低めの本気タックルを、惜しげも無ければおっさんへの配慮も無い勢いで見せつけるように飛び込んできた。

んアーツ!!三十路の身体が地面に叩きつけられていくう!!何でちよつと助走つけたんだこの子!?

あつ、あつ、そんなに頭を擦らんといて!少しばかりこそばゆい!最近お腹出てきたのがバレる!絵面がゾンビ映画で喰われてるそれなんよ!ちよつと待ていッ!!

「すごい！すごい、すごい!!おじちゃんトレーナーだった！ただのス  
タッフって言ったのに！おかんが言ってた通りだった！」

「ゲッホ??おっ?お母さんは、なんて言ってた???’」

「大人は嘘つき。」

「英才教育かよ。」

なんとか立ち上がるが、あーちゃんは完全にコアラ状態。俺の両腕  
ごとガツチリホールドして離れる気配も落ちることも無い。いかん、  
他の親御さんの前である。そうでなくとも勇者御一行の娘たちだっ  
たり後輩ちゃんだったり、未来の原石を見に来た他のトレーナー達も  
居るんだぞ。既に目立ちまくっている。こういう時は何もありません  
でしたよという素振りですれっど帰るのだ。

そそくさと観客席に戻れば、デジタルと後輩ちゃんが温かい目で迎  
えてくれた。

「トレーナーさん。」

「先輩。」

『やらかしましたね。』

「ハモんな。普通に”やりましたね”でいいだろうが。」

「やらかしてんすよ。現在進行形で。」

「いや予想はしてましたけど??流石特效持ちと言いますか??。」

「それだと俺が誑かしたみたいなんだよ。カレンと同じ様な事した  
だけで、何にもねえっての。なあカレン。」

「そうだね。」

そう言いながら我が妹は微笑んで耳絞ってるツ!!!

だから何でだよ！今怒るとこ無かったじゃん！お兄ちゃんそんな  
にガバな判断してた!?!今日の情緒どうしたの!?!お兄ちゃん泣きそう  
!!ヒビン??.

「トレーナーのおじちゃん！おかんが言ってました！トレーナーから

契約の話がされたら生涯契約と同じだと！」

「契約ってそんな終身保険みたいな話だった？そもそも俺契約の話したかな？」

「さっきあーちゃん最初のファンって言いました。これはもうトレーナーのおじちゃんがあーちゃんと契約するという事と同じです。おかんが言ってたので。」

「英才教育が過ぎる??ッー！」

あーちゃんはその後も降りてはくれず、結局そのまま子供達によるレースイベントは終わりを迎えた。

????  
で。

「何攫ってきてるんですかロリコンが。」

「いや??懐かれました??。」

所変わってエキシビジョンレースの会場。ヨシエさんからの辛辣な一言と視線が物凄く痛い。丸めたパンフレットを手に腕組みしながら立つ姿はまさに絵に書いたような上司か現場監督のそれである。

確かに三十路のおっさんが身体に幼女を装備した状態で現れればそういう反応にもなる。不本意です。

一応離してみようと努力はしてみたし、なんならこっそり見に来てたあーちゃんのご両親に引っ張って貰ったりもしたのだが??背骨の方が先に折れそうなパワーだったので諦めたのだ。人に懐くのが珍しいのでそのまま面倒を見て欲しいと親御さんからも了承(という名の妥協)は得ているし、その親御さん達も念の為関係者席に来て貰っている。

「初めまして。お名前はなんて言うのかな。」

「??あーちゃんです。」

「おっほ、カワよ。」

「あーちゃん。この人は凄い人なんだよ。おじちゃんより偉いしね。」

「すごい??？」

「そう、私凄いの。確実にトレセンで1番凄い。寧ろ私がトレセンと言っても過言では無いくらい凄いし美人。怖いもの無し、常識知らずの恥知らずの女王とは私の事。エツヘン！」

あれ程引っ付いて離れなかった彼女はようやく自分から降り、何故か両手をバツと広げてヨシエさんと相対した。これは??まさしくミナミコアリクイの威嚇ッ！

「あーちゃんの方が凄いです??たぶん。」

「え〜本当?でもでも、私ぐらい凄いと、このおじちゃんメロメロになっちやうかもなあ〜。」

「あ、それは無いです。」

「黙ってる。」

「ヒヒン??。」

「おじちゃんはあーちゃんのファンです!あと、トレーナーです!」

「そうなんだ。じゃあ私がこのおじちゃんのヒト娘になろうかなあ。」

「あーっ!あーっ!!」

あつ、この人全部分かってやってる。子供相手に結構マジなからかい方してるよ。後輩ちゃん助けて??眼逸らされた。モルモット、ヘルプ??何光ってんだお前。巫山戯るなよドリームチーム??ツ!協調性どこいったんだ!?

あーちゃんは悲鳴を上げながら懸命に俺からヨシエさんをひっぺがそうとしている。もうそろそろ止めた方がいいだろうか??いや、止めよう。結構本気で泣きそうなもの。

「ヨシエさん??あんまりやり過ぎると、その子マジで泣いちゃいますから??。」

「(こ)うい(う)可愛い子が見せる泣きそうな顔って興奮しません?正直もう辛抱堪らんって感じでえッ!」

突然横から現れたグーパンが彼女の頭を直撃した。お手本のよう  
なゲンコツ、余りに鈍い音??痛そう??（小並感）。

頭を抑えてしゃがみ込んだ彼女に変わって前に現れたのは、馴染み  
のベレー帽を被ったハゲ——もとい、先輩だった。

「そういうところだぞお前??子供相手に何やってんだ。よお、若坊主。」

「来てたんだ。久しぶり——横、横オツ!!」

「あ?横——ぬあツ!!」

瞳孔ガン開き、殺し屋の様に目の座ったヨシエさんが先輩の胸ぐら  
を掴み、頭目掛けて全力でパンフレットを振り抜いた。スパアンツ!  
という子気味良い音と共に、流石のこの人も響いたのかその場にしや  
がみ込んでしまっている??痛そう??（小並感）。

「おお痛てえ??久しぶりだつーのに随分なご挨拶じゃねえか?一番  
弟子。」

「弟子になった、なんざ私の口から一言でも言った事あったか?そも  
そも先にご挨拶かましたのはオメーだろ殺すぞ。」

「悪かったつて??まあそんなカツカすんなよ。」

「じゃあ貴様が殴ったとこ普通にジーンジーンするから撫でろ。私の気が  
変わらない内に。」

「しょうがねえな??。」

「気が変わった。触んな。ハゲが遺伝する。」

「クソ女め。相変わらず好き勝手しやがる??おい若坊主。どこ行こう  
としてんだ?」

ひえ??ツ!捕まった!!

漫才してる内にシレッと皆のとこ戻ろうとしたのにダメだった!  
クソつ、このハゲ??ツ!

「だ、だって子供の前ですし?? 2人とも手が早いんだから、あーちゃんにシヨツキングな映像見せられないでしょ??。」

『1番手出すの早かったやつが何言ってるんだロリコン野郎。』

「うぐつ?! あ、あれは昔の事で?!」

「お前にも散々いい蹴り貰ったからなあ。」

「私も胸ぐら掴まれた事、死ぬまで忘れないですから。」

あわわわ?! ま、間違いなく師弟! どうしてここに来て息ピッタリで矛先こつちに向けるんだチクショーツ! いや、元はと言えば年甲斐もなく思春期みたいなスレ方してた俺の責任なのだが。凹む。

「はあ?? とにかくもう始まりますから、トレーナーさんも早く場所に行きますよ。」

「えっ? 俺、あっちのチームじゃ??」

「いや、私の隣ですけど。」

「聞いてない??。」

「じゃあ俺も——。」

「オメーは呼んでねえからどっか行けよハゲ。あっちのチーム行つてればいいじゃん。」

「ちえっ??。」

チラリとタワーの方を向けば、今回の為に特別に用意されたステージの上で勝負服を身にとった4人のウマ娘が、互いの相手と向かい合っている。

短距離においては絶対王者の驀進王。サクラバクシンオー

不屈の覚悟で自分の道を走り続けた世代のキング。キングヘイロー

戦場を選ばないと言われたマイル無敗の勇者。アグネスデジタル

その勇者よりも早く、国内外で無敗を達成したマイルの支配者。タイキシャトル

まさしくドリームチーム同士の激戦が始まるうとしていた。

ところで横に転がってるクソでかいじやがいもの抜け殻はなに?????

エキシビジョン　：　誰より今、強く駆け抜けたら

「ヨシエちゃんよ??お前、俺が面倒見てた時から何も顔変わってねえのな。24って言われても信じるぜ。バケモンかよ。」

「恋する女の子はいつまでも若いんだっつもの。今バケモンつったか?」

「睨むな睨むな。じゃあルドルフがいる限りは半永久的に若いな。と  
ころで??何をそんなに不貞腐れてんだ?」

「いちいちうるせえハゲだな。」

拝啓——お空の親父、地元の母さん。貴方達のいい歳した息子は、非常に居心地が悪く泣きそうです。今は、膝の上にあーちゃんと言うとても可愛い子を乗せているので正気を保っていますが、これもいつまで持つのか分かりません。助けて下さい。助けて下さい??。

何で俺を挟んでちよつとバチバチしてんだこの2人はあ??ツ!!いや、バチバチしてるのはヨシエさんだけなのだが、如何せん先輩の言葉の1つ1つがさつきからぶつ刺さってんだよ!隣に座って勝手にやってくれよお!

「私はまだ納得してないんだから。理事会が仕方なく下したっていう決断も、それを妥協して飲み込んだアンタら夫婦の事も。」

「??まあ、だろうな。そこに関しちや何も言えねえし、悪かったよ。」

「はっ??どうだか。話が済んだら、さっさとあっち行った。しっ、しっ。」

「わーっただよ。」

渋々引き下がるかと思えた先輩は俺の腕を掴み、こつそりと耳打ちをしてきた。

「アイツは間違いなく天才だが、教えはピーキー過ぎて人を選ぶ。だが刺さるやつにはぶつ刺さるんだ。」コイツなら勝てる」だなんて

先入観は捨てとけよ。」

「心が不安になる助言ありがとうございますクソツタレが。」

そうしてようやく離れてウチのチームへ——あつ！あのハゲ俺の後輩ちゃんナンパしてらあツ！おい待てつ、要らん事は言うなよ！その娘容赦も手加減も知らねえんだよ！思春期の中学生みたいなスレ方してた黒歴史勝手に話したら酷い目に合わせるからなツ！！

『さあいよいよ始まりました、聖蹄祭特別エキシビジョンレース！実は私、ツルマルツヨシと！』

『トウカイテイオーだよー！早速だけど、キタちゃんに回して一言貰っても良いかな？』

『いいともー！』

こちらの空気とは打って変わり、会場のボルテージはMAXに近い盛り上がりを見せている。デジタルとタイキは一旦自分達のチームに戻り、特別ステージの上にはバクシンオーとキングの2人が残っていた。

いかん、向こうが何話してるかクソほど気になる??やめろよ？やめろよ??。あつ、後輩ちゃんがようやく目を合わせてくれた。

「??いっつ。」

あのハゲ言いやがったツ！絶対何か言いやがったクソがツ!!じやなきやTHE・嘲笑みたいな顔されるかよツ！また弱み他人に握られたじゃんチクシヨーツ！

おい、デジタルはやめとけ。それはマジでシャレにならん。頼むからやめて下さい。ウチの子です。

いや??アイツはグイグイ来るタイプの人間は苦手だからな？心配は——何でちよつと打ち解けてお話出来ちやつてるのオツ!?話が違うじゃん相棒ツ！こつち見てサムズアップすんなよオツ!!



「??ヨシエさん。例えばの話ですけど、好き勝手にあれこれしまくるハゲが居たらどうしますかね。やっ、例えばなんですけどね。」

「ガムテープ持ってこよつか?」

「あつ?大丈夫です??すみません??。」

『こちらキタサンブラックです!ではまずバクシンオーさんにお話を伺いましょう!一言お願いします!』

『ハッハッ——ッハ!!』

クソデカボイスに耐え切れなかったマイクが盛大なハウリングを引き起こした。会場が耳を塞ぐレベルの圧倒的バクシンdB<sup>デシベル</sup>。最早マイク要らねえ??慌ててあーちゃんの耳を塞いだは良いが、俺は大ダメージである。何してんだ委員長。

因みにキタちゃんほぼゼロ距離で地声とハウリングのダブルパンチを食らったらしく、完全に伸びていた。

『おや、失礼しました。どうやら昂る気持ちがマイクをもバクシンさせてしまったようですね!キタサンブラックさんも大丈夫ですか?』  
『うくん??はっ!?だ、だ大丈夫です!えつと、ではバクシンオーさん、一言お願いします!』

『そうですね。相手がキングさんという事であれば、このサクラバクシンオー全力でお相手させて頂きましょう!どの距離も走れるという彼女のセンスや心持ちには、バクシンに通ずる素晴らしいものがありますからね!』

『ありがとうございます!それでは次に、キングハイローさん——』

『おーっほっ——ほッ!!』

ハウリンググウツ!!耳があッ!!キタちゃんがまた伸びたーツ!!何で今の今で全く同じ事やってるんだあのお嬢様は!2人とも高笑いの声量デカいんだからそうなるよ!寧ろ声質が高い分、キングのが刺さ

るッ！

『あら、失礼。ようやくこの珍妙なじやが着ぐるみもを脱げたものだからつい。』

『うくん??はっ!?で、ではキングさん、相手はスプリンターの絶対王者バクシンオーさんですが、お気持ちはどうですか?』

『そうね??正直な所、このキングを持つてしても今回は相手が相手だから厳しいとは思うわ。けれど——だからと言って、”退く”なんて言葉は最初から無い。困難に立ち向かってこそそのキングであり、困難な道こそ私が行くべき道。今日は下剋上ではなく、私が一流であるという証明を改めてさせて頂きます。』

『おおおおおっ!!』

そう言ってお辞儀したキングに合わせ、会場は大盛り上がりを見せた。

だが相手がバクシンオーという事もあって、盛り上がりは見せてもキングの勝利を感じている観客はそこまで多くないらしい。チラホラとそんな声が聞こえてくるのも事実だ。

今日ばかりは相手チームとは言え、俺とデジタルはキング信者だし、彼女は勇者御一行の心の師匠。少し複雑ではある。

だがキングは多くを語らない。ただにこやかに笑い、サクラバクシンオーに視線を向けるだけだった。

『ありがとうございます!では御二方、ゲートへ——あ、あれ?バクシンオーさん?』

キングヘイローの前に立ったバクシンオーはふうつと息を吐き、真っ直ぐに眼を見つめていた。

そこにさつきまでの愉快的学級委員長バクちゃんの姿は無い。あれは??カレンと競った時と同じ、王者の眼差し。

——気を付けてって言いたかったんだ。

テイオーの言葉が脳裏を過ぎる。ここに居る何人が、この勝負の結末を見えているのだろうか。

キングの言葉が会場を盛り上げたのは確か。だがそれは直接的な勝敗の結果とは結び付かない。鼻目無しに考えるのなら??バクシンオーの走りを間近で見してきた俺やデジタル、カレンがその異質さをよく知っているつもりだ。

だが当の本人だけは違うらしい。

『困難に立ち向かう——その気持ちには強く同意します。そして貴女には、それを成し遂げてきただけの心根も覚悟もある。その上で教えましょう。貴女の前に居るのは困難ではなく、越えられぬ壁だと言うことを。それでも挑みますか?』

『あら、言っただけです。これは私が一流である事の証明だと。厳しいとは言いましたが、”勝てない”とは一言も言った覚えはありませんから。私は、ただ私の道を行くだけです。』

『成程??では、楽しみましょうか!』  
『ええ。楽しみましょう。』

彼女達は笑う。

しかし次の瞬間にはもう笑みなど無く、多くのウマ娘を導いてきた王たる2人の声が重なるばかりだった。

『王は1人で充分です。』  
『キング』

レースが始まると、直ぐに違和感を感じる事になった。

どちらかと言えば最後の直線で末脚を發揮させるタイプのキングが、最初っから飛ばしに飛ばしてバクシンオーの後ろ1バ身以内にピッタリとくっついているのだ。その速さたるや、クラシックでキングが沈んだ日本ダービーを彷彿とさせるものである。

無論2人しか走っていないから実際のレースと位置が変わる事は多少あるとは思っている。だが逃げ・先行を得意としているバクシンオー??それも恐らくは本気モードである彼女のペースに合わせると言うのは、キング自身の走りにもかなり影響を及ぼす筈。

1200mという短い距離で前につけるなら、もう少し控えても大丈夫だと思うが??。

『両者接戦のまま、間もなく最終コーナーに差し掛かります！思いの外レースの展開が早いですね！』  
『うくん、キングがちよつと掛かっているかもしれないね。』

ああそうだ??なのに、この腑に落ちない感じは何だろうか。キングへイローだって場数の多さなら黄金世代の中でも多い方だ。いくら相手が短距離の絶対王者とは言っても、レース前に見せたあの落ち着き様からここまで急ぐレース展開になるものだろうか??教えてデジタル。

あつ、アイツ今居ねえわ。凹む。  
もし1つだけ可能性があるとするのなら――。

「焦ってるのかよ??キングへイロー。」

「ううん、おじちゃん。みどりのお姉ちゃんは待ってます??たぶん。」

「あーちゃん??待って、何を?。」

「勝てるどころです。」

「わあ驚いた。あーちゃん、眼が良<sup>い</sup>んだね。」

いつの間にかストップウォッチを手にしたヨシエさんが、あーちゃんに笑いかけていた。

「あのお姉さんはね??君の言う通り勝つ為に待っているし――私を試してるんだよ。」

ヌツ、ポケットで携帯が震えておる。誰だこんなタイミングで電話を掛けてきて——相棒ツ！お前を待ってたんだよツ！ふふっ、さあ見解を聞かせておくれ。お前の言葉なら信じられるし、もう何も怖くない。勇者も変態もあるんだよって事を教えて欲しい。意味分かんねえな？

俺達の座っている反対側。チーム『T☆K☆G』のベンチでデジタルはこちらを見ながら電話を手に行っている。その顔は焦りを浮かべているようにも見えるし、何より若干引きつっていた。あらヤダ、嫌な予感しかしないわ。

「すみません、ちょっと??どうした?おデジ——。」

『バクシンオーさん、掛かってますッ!!』

「嘘オーッ!?!」

「あっははははっ!!」

こちらのリアクションが余程お気に召したのか、ヨシエさんは大笑。そして俺は自分の身体から血の気が引いていくのを感じた。

ペースを乱されていたのはキングじゃなく、王者の方。引っ張られていたのではなく、そもそも走らせていた。

であれば??サクラバクシンオーは、もう本来の全力には届かない。トップスピードと言うのは当然ながらスタミナの量によって変動してくる。そしてバクシンオーは天性のスプリンターと言っても過言では無いほどスタミナが無い。絶望的に無い。

だからこそ短い距離であればある程に、彼女は真価を發揮する。少ないスタミナだろうと最後の直線に持ち越せば誰にも止められない速度で驀進するのだから、純粋なスプリンター同士（或いはマイラー含め）のレースなら間違いなく苦しめられる相手ではある。

だが??今回は分が悪い。

クラシック戦線を駆け抜けてから高松宮記念を制したウマ娘が相手なら、その段階でスタミナの絶対量が違いすぎる。数多のG1レースを走っていたキングなら尚更だ。実際、キングヘイローの適正距離

はどこかと聞かれれば、”分らん”だの”キングが走れる距離 等”と言った方が早いくらいにはどの距離も満遍なく走っている。

それなら多少前半に無理をしたところで、それがバクシンオーのスタミナ切れ、加えてトップスピードまで落とせるのならお釣りが出るだろうさ。

大外ぶん回しで撫で切った高松宮記念。4着に終わったものの、上がり最速の末脚を爆発させた有《font:ul40》馬《/font》t》記念。彼女の脚はまだ生きている。

つまり簡単に言うのならば——ヤベエ。

「短距離の王者相手に万全のスパート決められたら、どんな手を打ったって届かないですよ。だったら万全のスパートなんて、そもそもやらせなきゃいい。スパートを掛けるなら”ここからここまでの範囲で”っていう選択肢を、”ここしか無い”に変えてあげる。その選択肢に目星を付けられれば、後はバクちゃんスタミナ量と速度から逆算して、それよりワンテンポ早い仕掛けどころをキングちゃんに教えておくだけです。」

「ぎゃ？逆算？？」

「トレーナーもウマ娘も、得意な武器を全部活かして勝ちに行く。相手に有利な走りなんかさせないで、敗北要因になりそうなものは徹底的に潰す。それがレースの駆け引きってものじゃないですか。2人しかないレースほど、やりやすい場面は無いですよ。」

??どうしよう。この人が何言ってるのか本気で分からん。

いや、内容としては分かるんだ。展開が目まぐるしく変わる中での駆け引きがどれだけ大事で勝負勘が試されるのかと言う事も分かっている。

問題は、”いつそんな指示を出していたのか”。

2人がゲートに入る前、バクシンオーはトレーナーと少しばかり話をしていた。だがキングは1度だってヨシエさんの元には来ていない。

走っている最中にキングが自分で仕掛けどころに気付いたとしたらまだ理解出来るが、この人は『教えておくだけ』と言った。

要するに——バクシンオーが本気モードになる事も。

キングの圧にバクシンオーがどう対処するのかも。

両方のスタミナの限界値とトップスピードの差も。

このレースの展開がこうなるって確信してなきや、前もって仕掛けどころをピンポイントで教えるなんて芸当が出来るものか。ぶっ壊れ性能じゃねえかよッ!!

「バクシンオーッ！スパート、Go！Go！Go!!」

俺達のチームの方で、バクシンオーのトレーナーが大声を上げた。さっきのデジタルとのやり取りを聞いていたのか、或いは自分でその答えに辿り着いたのかは分からない。

だがキングが動く前にスパートを促したと言う事は、恐らくはスタミナが激減しているのを考慮した上で、差し切られるよりも早く残り200mを逃げる事に賭けたんだ。

無謀か、信頼か——サクラバクシンオーは、ターフの上で笑っていた。

『最終コーナー曲がってまず飛び出したのはやはりサクラバクシンオー！しかし1呼吸遅れてキングヘイローが負けじと食い下がる！残り200mを切って迫るキングヘイロー！届くか！届くか！差した差した差したッ！しかしサクラバクシンオーが最後に差し返す！僅かに先頭はサクラバクシンオー、今1着でゴール！驀進王は未だに頭在だアーゲエツホ、ゴツホッ!!』

『興奮しすぎだよ。』

予想だにされていなかっただろう展開に大歓声が巻き起こる中、どつと疲れが押し寄せてきた。俺？今日と明日でこの緊張感をあと4回も味わうの???ハゲそう。

勝ち負け関係無いって聞いていたエキシビジョンの筈なのに、何故こうもバチバチになるのか??いや、ウマ娘だしなあ?そりゃあ勝ちたいかあ??テイオー、忠告どうもありがとう。

結果はアタマ差。ヨシエさんはと言えば、隣で楽しそうに拍手をしながら喜んでいた。

「あくあ、負けちゃったー!やっぱバクちゃんは強い!」

「??ヨシエさん、いつから分かってたんです?」

「何の話ですか?私はただ、あの子達に関するデータを死ぬ程読み耽っただけですよ。キングちゃんに元から備わってた地デカラにちよつと付け加えるぐらいはしましたけど、流石一流のトレーナーさんとそのウマ娘ちゃんですよね。」

あつ、何か適当に流されたっぽい??凹む。

はあ??とため息をついたところ、膝の上に座っていたあーちゃんが手を伸ばしてきた。

「おじちゃん、豆菓子あげる。食べ。」

「ありがと。」

「ねえねえ、あーちゃん。お姉さんにも頂戴?頂戴?」

「??さっきの事、はんせいしてますか。」

「してるしてる。」

「もう、変なことしませんか。」

「しないしない。」

「じゃあ??どうぞ。」

「やった!頂きまあー!すれろれろれろれろれろ。」

ブワアツと尻尾が逆立った。静電気でも起きたんじやないかってぐらいには凄まじい事になっている。要するにそういう感情らしい。

ようやくヨシエさんの口から指が解放されれば、あーちゃんは黙ってベチヨベチヨになった指を見つめ、俺の顔を見上げ、また無言で指



を見ていた。

「???これが、大人の、やり方??。」

「もう1個頂戴♡」

「ヨシエさんメンタルどうなってるんですか。取り敢えず次はデジタルなんで??一旦離れますね。」

「おじちゃん、あーちゃんを置いていけないでください。」

「ん?うん、置いていけない??いだだだだつ、そんなにしがみつかなくても??。」

「置いていけないでください。お願いですから。」

「だつ、だから置いていけないって??。」

「後生ですからこの人と2人にしないで下さいッ!!!」

「迫真すぎるッ!!」

ひゃーすつごおい!ウマ娘って、なんてパワーなんでしょつ!アーツ!言ってる場合じゃねえツ!背骨が逝くウツ!頭擦られすぎてお腹周りがまた削れるツ!大人は嘘つきで汚いやり方をして指をしゃぶってくるという新しい知識が、トラウマという形で教育されてしまった??マジで容赦ねえなこの人??ツ!

「あーあ、嫌われちゃった。」

「手加減してあげてくださいいよ??じゃあ、また後で。」

「トレーナーさん。」

立ち上がった俺に声を掛けてきた彼女は、いつの間にか手に持っていた豆菓子を1粒口に放り込んできた。

僅かに彼女の指先と口が触れる感触。

呆気にとられるこちらの事など気にもしないかのように、彼女は自分の指先をペロリと舐めて言った。

「(ご)馳走様。」

かーっ！見んねミーク！卑しか女ばいッ！

しかし顔が良いッ！俺が勇者御一行のトレーナーだったから助かったものの、この人の中身を知らないただの童貞トレーナーだったら確実に命を取られていた！

??カレンと引き合わせないようにしなきゃ？最強の生物が生まれるのだけは阻止しなきゃ??ッ！

ワケの分からん決意を胸に、あーちゃんと共にこの場を後にした。

「ウマ娘を形作る要因その1——」 不屈の闘志”。あはっ♪??後、4つ。」

## エキシビジョン : ”約束”の進化系

昔の詩人が言いました。

『あの人が私を愛してから、自分が自分にとってどれほど価値あるものになっただろう。ゲーテの言葉』

愛とは——献身。アタシが今迄幾度と無く、自分の推しウマ娘ちゃん達に向けてきたもの。

愛とは——無償。見返りを求めない善意が行き着く、1つの答え。

愛とは——信頼。あの人がアタシを信頼してくれて、アタシはどれ程変わったのだろう。

自分に自信を??そう考えれば確かに自信はついたのかもしれない。何をするにも奥手で、自分が関わってしまっってはきつとひたむきに頑張る彼女達の迷惑になると。そう信じて疑わなかった自分が、今はチームの一員で。まだ、不安になる事はあるけれど——その度にあの人から言われる言葉があつて。

『大丈夫。』

『お前さんなら出来る。』

『最後まで一緒に。』

その言葉が、脚を前へと進ませる。

その言葉だけで、幾百、幾千の戦場を駆け抜けられる。

アタシは??変わったのかな。あの人のやりたかった事も、夢も叶えられなかったのに。

アタシの自分勝手な気持ちの為に、あの人の時間を奪ってしまったのに。

『タイキシヤトルが先頭、コーナーから最後の直線に入ります!後方アグネスデジタルとはおよそ3バ身、いよいよ厳しいかアグネスデジ

タルツ!!』

勝ったり、負けたり。レースの中で、何度もウマ娘ちゃん達の声を聴いた。想いを受け止めてきた。必ず次の場所へと連れて行くからと、何度も反芻してきた自分の気持ち。

なら??あの人は?今のあの人の気持ちに、アタシは何かを返せたんだろうか。あの人は、今も変わらずに昔の事を覚えているのだろうか?分からない??分からないけれど。

あの人が願っている。頑張れと思ってくれている。勝ってこいと、託されている。

それなら——この脚は止められない。止めちゃいけないんだ。

2人で勝つと決めたマイル<sup>この距離</sup>だけは、絶対に??誰にも負けられない。だって、今のアタシに出来る事なんてそれしか無いから。”約束する”と言ったあの日から、勝つと誓ったんだ。必ず届けるって決めたんだ。

何処だろうと関係ない。相手が誰であっても構わない。

雨。

走るんだ。泥濘む地面を踏みしめて。

走るんだ。視界を全て奪う大雨<sup>スコール</sup>の中を。

”約束”を果たす為に。あの人の夢を必ず届ける為に。

アタシは??私は——。

「——<sup>アグネスデジタル</sup>オールラウンダーなんだから。」

レース前の控え室。あーちゃんを後輩ちゃんへ預けてきた俺は、デジタルと共に出走前の最終ミーティングに来ていた。

相も変わらずカラフルな勝負服??だが、それを見るのも随分と久しぶりな感じがする。何だかんだで長いことG1級のレースは出ていなかったし、新人ちゃん達の面倒を見てもらったり、あれこれトレーナー業の手伝いもして貰ってたからな??担当ウマ娘に仕事手伝って貰う時点で無能では?凹む。

栗毛（と言ってもほぼピンクだが）の尻尾に手櫛を通せば、指の間をサラリとした感触が流れていく。もう幾度となくやってきた願掛けのような物なのだが、不思議と新鮮な気分である。

「緊張してるか?デジタル。」

「まあ?そうですね??。」

「流石に相手がタイキじゃあそうもなるか。」

「あつ、そつちじゃなくて。」

「じゃあどつちよ。」

「えっ???何でもないです??。」

「ふくん??。」

何だと言うんだ相棒。怖いからその妙なりアクションやめ——  
ええい尻尾を振るんじやあないよ!やりにくい!そんなに下手くそか、俺の手櫛は??凹む。

どこか強ばっているようにも見える相棒だが、まあタイキ相手に緊張しているわけじゃないのなら心配はしなくて良いのかもしれないが??。

「なあデジタル。俺はさ??正直、今回ばかりは分が悪いつて思ってるよ。元々の段階で相手は間違い無くお前と互角かそれ以上。ましてや今回は1400mに、ヨシエさんっていう規格外のトレーナー付きだ。」

「ですね。アタシはどちらかと言えば、1600から中・長距離向きですし??恐らくトップスピードや加速の力強さ、この距離に対しての走り方は短距離に寄ったタイキさんの方が強いです。アタシが本気で

走る事も、多分お見通しかと。」

「ああ。そしてどっちもマイルは無敗??今日、初めての黒星をどちらかが付けることになる。公式戦じゃないとは言えな。」

だが予想していなかったワケじゃない。並大抵のマイラーなら負ける事は無いだろうから、必然的にデジタルと競う相手は限られてくる。もしかしたら”マイルの皇帝”辺りが飛び出してくると思っただが、そこは杞憂だった。

それでもさっきのキングのレースがあるし、油断出来ないのは間違いないんだが??。

——いつ、壊れますかね？

??ああ、クソツ、何でこのタイミングで思い出す。惑わされるな。俺はデジタルを信じている。なんたって相棒だろう。でも??。

「デジタル、調子は大丈夫か？脚に違和感とか、変な感じとかは無いよな?。」

「はい。無いですけど??どうしました?。」

「いや、良いんだ。ちよつとトレーナーらしく気になっただけさ。」

何ですそれ、とデジタルは笑った。いつもと何も変わらない、出会った頃と同じ様な笑み。そしてその眼には、並々ならぬ覚悟の火が宿っている。

「そうだ??大丈夫。コイツがやるって言うなら、俺は俺の相棒を信じるだけだ。」

「デジタル。相手は間違い無く世界クラスだ。香港カップの時と同じように、最初は少しばかり前目に付けても良い。お前の末脚だって、タイキの脚に負けちゃいない。やる事は??分かってるな?。」

「勿論ですとも！全身全霊で相手をさせて貰いますから。そして——

」。

「ああ——マイルの支配者のご尊顔、最前列で拜んで来いッ！」  
「はいっ！」

そうしてデジタルをステージの上へと送り届け、俺はあーちゃんを  
引き取るべく関係者席に迎えに行った??のだが。

ヨシエさん  
廃人がいらっしやった。

深く、深く項垂れて??もう、何かいたたまれない??。

「??後輩ちゃん。この10分ばかりの出来事の説明をしちゃくれな  
いかい。」

「そつすね??あーちゃんさんにちよっつかいかけすぎたって事で、結構  
マジなトーンでドルフさんとウチのエアグルーヴさんが説教した  
ところです。親御さんへの謝罪付きで。」

「ああ?うん??でしょうね??。」

「まあ親御さんは大爆笑してましたけどね。元々感情をあまり出さな  
い娘が、今日一日で泣いて笑って恋して大忙しだったつって。成長万歳  
三唱してましたよ。」

「親の鑑か——エッ!?あーちゃん恋したの!?!」

「うーわっ??出た出た、通り魔が。」

「なに?この。」

「トレーナー君、少し良いだろうか。」

ふと呼ばれたほうに顔を向ければ、そこに居たのはたった今話にな  
がっていた皇帝様だった。

えっ?俺も一緒になって怒られるの?ち、違うよな??いや、確かに  
ずっと横に居ながら止められなかったし、あーちゃんとの距離感は  
少々思う所があるけど?で、でもデジタルとはそんならいだし??んっ  
?これだといつも怒られる距離感って事じゃないか?じゃあ違うわ。

ルナちゃん、笑って??笑って??。

「君にも迷惑を掛けてしまったね。」

「ああいや？それは良いんだけどさ??あの人にはなんて？」

「1日口を聞かない、とね。」

「1日でああなるの!?!いや??想像したら多分俺もなるわ??。」

「ふふつ、聖蹄祭やファン感謝祭で彼女が羽目を外すのは、今に始まった事じゃない。例年通りなら全日程が終わった後に、私や彼女の大勢のファン達の眼の届く範囲で盛大に外してもらっていたんだが??流石に今回は予想外だったよ。」

そこでルドルフは、ようやく困った様に笑った。

「悪い人では無いんだ。ただ？言動と行動が少々特異と言うべきか??うん??。」

「大丈夫、ちゃんと伝わってるから??お疲れ様。」

「??でもね、トレーナー君。彼女のおかげで守られている存在も確かにある。守ろうとして守りきれなかったものもだ。彼女が今の立場を外れないからこそ私やテイオー達も走り続けられるし、何より——私の夢には彼女が必要だ。彼女の夢にも、私が居なければならぬ。私達は、私達を貫かなければならないんだよ。」

「??何の話?。」

「彼女の事、宜しく頼むよ。お弟子さん。」

そう言つて、トレセン学園が誇る皇帝様は戻って行った。

いや聞けよッ!んもーッ、何で皆こっちが分かつてる程で喋るのおツ!?!俺はそんなに要領良くもなけりや勘だつて冴え渡つてねえんだよチクショーツ!!せめて何に対しての話題だったかぐらいは教えてくれたつて良いじゃないッ!

しかし宜しくされてしまったからには、あそこで無に帰している美人さんをどうにかしなければならぬワケで??ううむ?。

「あつ、後輩ちゃん。あーちゃんは?。」



「横。」

「え？ヴツ!!」

んあーツ！三十路の身体が観客席に叩きつけられていくウツ！普通に痛てえツ!!俺は怪我しても良いけどあーちゃんはダメエツ!!三十路秘伝奥義、”固くなる”ツ!!違うポニーちゃん”硬くなる”じゃねえんだバカヤロウ。お前それはいよいよだからな？

「おかえりなさいました。」

「た??ただいま帰りました?危ないから、ここでアタックは止めようね??。」

「うい。」

「よしよし??あの、ヨシエさん??」

「??ルドルフに嫌われた今?生きる理由など何処にも無く??私はただ無に帰る??お家にも帰る??婚姻届も破棄せざるを得ない??。」

声ちっさツ!今婚姻届って言ったか!?

ヌウ??かなりのメンタルブレイクをされているのは眼に見えて分かりきっている。童貞に傷心中の女性の相手なんぞ出来る気がしねえ。

待ってくれシンボリルドルフ。何をどう宜しくされれば良いんだ。助けてくれ。この際ハゲでも良い、何か教えてくれ??。

「あー??えつと?ヨシエさん、ルドルフに愛されてますよねー??。ちゃんと怒ってくれて、それでもヨシエさんが必要だって言ってくれてるんですから。ねっ?」

「??遠い過去のお話?もう、ヨシエは必要不可??お話?お話、してくれないって??ヨシエ、涙不可避??。」

「言語機能どうしちゃったんですか???」

オロオロした哀れな三十路を他所に、引っ付いていたあーちゃんは

なんと自ら離れて、半ば強引とも言える形でヨシエさんの膝の上に陣取った。

「はじめから、皆で仲良く見ればよかったです。お姉さんは隠し事してる人の顔です。わざわざ1人にならなくてもいいじゃないですか。」

「あーちゃん??怒ってない?」

「あーちゃんは過去を気にしないのです。できる女なので。」

「君は優しいね??ふふっ?本当に??顔が良い。クツソ元気でたわ。」

「よしよしヨシエ?髪サラサラ?お耳かわよ??。」

「むむっ??やぶさかではありません。」

あーちゃん??なんて健気で優しい子?!おじちゃんその成長ぶりに涙が出そう。でもほんの僅かな寂しさもあるんだ??。

なんだと?これでは俺が四六時中近くにロリを置いていないと落ち着かない変態野郎ではないか。違う、そうじゃない。

だがヨシエさんの元気が出たならそれで良いさ。皆で見よう、そうしよう。ふふっ??隣にスっとお座り。

そして俺の隣にカレンがスっとお座り♡なんで?

「デジタルちゃんの応援頑張ろっか♪」

「そうだな。」

そうだな——じゃねえよツ!!

えっ!?何で何の打ち合わせもなしに現れたの!?お兄ちゃん確かに寂しいとは思ってたけど規格外ってあるだろ!?それは流石に洒落にならねえツ!ルドルフが意味も無く1往復して戻って来るんだぞ!!お前さんがsit downするとポニーちゃんはstand upするの!漢字で表すなら凹凸なの!!ストレートに最低である。するなよ愚息。もぐぞ。

『これより1400m右回り、エキシビジョンレースマイル部門を開催します！お互いにマイル無敗でトウインクル・シリーズを駆け抜けたアグネスデジタルさんとタイキシャトルさん！世界をも相手に戦った最強のマイラー同士が火花を散らしますッ！』

ツヨシのアナウンスが流れ、ステージの上ではデジタルとタイキが向かい合っていた。先程のキングとバクシンオーのようにバチバチし過ぎていないのは、2人の性格故か??。

デジタルは確かに『領域』なんてものに踏み込んだ。相手がそうなっているとは今の所聞いた事は無いが、ヨシエさんの事なのでそうとも言いきれないのが辛いところ。ヌツ。

「どうしました？さっきからチラチラと。」

「えあつ、や、何でもないです??。」

「言っておきますけど、タイキちゃんに関しては特に何か指示出しただりはしてないですよ。強いて言うなら毎週末にBBQしてました。」  
「何故???」

「その方が強いからです。以上。」

畜生、また適当に流された??凹む。

『両者の準備が整いました！本日ラストを締めくくる夢のレースが今——スタートですッ！さあやはり先行飛び出したのはタイキシャトル、その2バ身後ろにアグネスデジタルがつきます！』  
『この距離だったらタイキに分があるから、デジタルがどこで仕掛けるのがポイントだね。』

ああ、そうだろさ。だから相棒は最初っから本気だ。

スタート直後に何かを感じ取ったのか、タイキシャトルは僅かにデジタルの方へと顔を向けて引き攣った笑顔を浮かべた。

おつかねえだろう？普段温厚で可愛くて謙虚で可愛くて控え目で

クソ可愛い、率先して前に出たがらない勇者様から繰り出される飛びつきりのプレッシャー。アイツの『領域』は、脚が重くなる程度には強烈だぞ。

「お兄ちゃん？デジタルちゃん??大丈夫?」

「ああ勿論。ちよつとの有利・不利に振り回される程、相棒は脆くないさ。」

「そうじゃないの?そうじゃ、なくて??。」

「カレン?」

心配そうな顔で、カレンはターフの上を見つめていた。

「ウマ娘の子達って色んなタイプがいますよね。不屈の闘志で何度も立ち上がる子、純粹に強い相手と競いたい子、自分の世界をどこまでも進みたい子に、誰かの夢を背負って走る子??でも私は、1番強いのって何もかも楽しんじゃうような子だって思うんですよ。」

「楽しむ??ですか?」

「逆境もプレッシャーも、1度きりで今しかないレースを楽しむ為のスパイス。自分の気持ちを高めてくれる大事な要因なんです。それを全部力に変換出来ちゃうような子を相手に打ち勝つには、自分も楽しむしか無い。純粹な力比べに根比べ。支配者様はその辺満点なので、こつちがあれこれ言う必要は有りません。じゃあ——勇者様は、どうですかね?」

『アグネスデジタルはまだ後方で抑えたまま、展開は未だ変化ありません。タイキシヤトルが出方を伺っているようにも思えますが、どうでしょうタイオーちゃん。』

『??あつ、うん。タイキが珍しくプレッシャー掛けられてるようにも見えるけど?今回は、デジタルの方が何か??うん。』

『タイオーちゃん?あつと、ここでアグネスデジタルが僅かに前方へ進出!タイキシヤトルにジリジリと迫っていく!』

デジタルがどうか？アイツがレースを楽しまなかった時なんて1度だってあるものか。大のウマ娘好きなオタクでオタク達の味方なんだから。

そうだ行け？行けっ??そこまで上がればお前の勝ち確パターンだッ！もう充分に差し切れる！外ぶん回して直線に入れば、タイキの脚でも簡単には——簡単、には??何だ？

『しかし縮まらない縮まらない！タイキシャトルがここでラストスパート、アグネスデジタルとの差を再び広げていくッ！およそ2バ身、3バ身と距離を伸ばしていきます!!』  
「なんで、アイツ??伸びない??!」

展開によって仕方なく伸びないワケじゃないだろう？お前がその判断を付けられないはずが無い。絶対に無い。

いくらタイキシャトルがレースで起きる全てを楽しめる様な強者だろうと、ヨシエさんのサポートがあつたとしても——お前の限界はまだじゃないか。お前のスパートはそんなものじゃない??のに。

「あの状態のアグネスデジタルが勝てるわけないでしょバアカ。さつさと負けちゃえば良いんですよ。」  
「は?。」

「何もかも投げ捨てて、負けて、抱え込んだ大事な物もボロボロにされて。そうすれば無駄に苦しまなくて済むのに。手だって伸ばして貰えるのに。強がりや優しきなんてそんなバカげた事??あるわけないのにさ。」

「??好き勝手言いやがって。」

「えく何？またスレちゃったのかなあ？ダツサ。」

「チツ??いちいち回りくどい言い方なんかしないで、さつさと教えてくれりゃ良いだろうが面倒くせえな。」

「あつそ。じゃあ今度からゼーンぶ正直に話してあげる。それでアンタらがどうなろうと私には知った事じゃないし。精々みつともなく

共倒れでも何でもすれば?」

言葉の一つ一つが癩に障る。

そう言えば昔っからこういう人だったわ。ああそうだ、こんな事平気でベラベラ喋るような女だったもんな。だから俺もいけすかねえって反抗してたんだクソが。腸はらわた煮えくり返りそうだ。

「結局変わってねえのな。自分だけが物事知り尽くしてるって言い草じゃねえか。そのクセ茶化して遠回しばっかりだ。他人様ヒト振り回してそんなに楽しいかよクソツタレ。アイツは絶対に負けねえ。」

「ここで勝つ方が異常なんだっつーの。アグネスデジタルがおかしくなってる原因の半分はアンタのせい。自分の嫁は自分で面倒テメエみろって私言っただでしょ? ほら見なよ。勇者はもう戦場タチマを選べない。向けられた信頼の為だけに走るしかない道具になってんだよ。分かったのかボケナス。」

「ああつ?」

「はあ?」

「はい、そこまで。」

一触即発の中、俺達の間割り込むようにして後輩ちゃんが座つた。

「間をね、失礼しますよーすみませんね??あーちゃんさんもカレンさんも、そんなに心配そうにしないで大丈夫です。昔から、”喧嘩するほど仲睦まじい奴らは犬も食わねえぞべらぼうめい”って言いますから。だから——ちよつと耳、抑えてて下さいね。」

「??うい。」

「は、は??い??。」

「どーも。さてさて、尊敬してる先輩方??今レース中。何なら子供と教え子の前。見られてないとは言え他のお客さんや親御さんも居るんですよこれが。OK?」

『??OK。』

「ですよ。流石に分かってますよね。ははっ、分かってんのにコレとかウケる——舐め腐ってんすか？場所も弁えずにまた同じ様な事してみる。纏めてシバき倒すぞバカ共が。2度とこんな事言わせんな？」

『??ごめんなさい。』

一気に憤りの心が冷めていった。

淡々と話してはいるが、後輩ちゃんの目元には僅かに青筋が見える。1年ちよつとの付き合いの中で初めて見る表情だが、一目見ればそれが本気で怒っていると理解出来る。

カツとなつて言い過ぎたかもしれない??いや絶対言い過ぎたわ。正論過ぎて最早何も言えん。相棒のレースで何やってんだ俺は??ヨシエさんに、カレンやあーちゃん、後輩ちゃんにも後で謝らなければ??そしてデジタルにも。

「とかいうジョークですよジョーク。でも反省してる割には良く聞こえなかつたつすね。」

『ごめんなさい?すみませんでした??。』

「状況察してたおハゲさんに感謝して下さい。じゃっ、アタシ戻るんで。皆仲良し、トレセンサイコー。そういう事で頼みます。」

『タイキシヤトルが先頭、コーナーから最後の直線に入ります!後方アグネスデジタルとはおよそ3バ身、いよいよ厳しいかアグネスデジタルツ!!』

??後輩ちゃんのお陰で冷静を取り戻した頭で現状の再確認だ。

デジタルは変わらずタイキの後ろで走り続けている。アイツの『領域』は、本来相手に極度のプレッシャーを与え続ける事。それは最初から最後の直線に入るまでそうだ。ジリジリ詰まった状況で相手が早めに出るか遅めに出るか、集中しきったアイツだから相手の事が分かる。ウマ娘が誰よりも好きなデジタルだからこそ、相手の出方を先

読みして立ち向かえるんだ。

だが、タイキシヤトルは笑っている。結局ヨシエこさんが言った通りだ。デジタルの異様なまでのプレッシャー??タイキシヤトルは、それすらも楽しんで走っている。

体格差はそのままパワー——加速度に直結する。ただでさえギリギリの状態のデジタルがここで伸びてこれないなら?この先は??。

「デジタル??ッ。」

『雨。』

カレンとあーちゃんが同時に口にした。釣られて上を見上げるが、雨どころか空には雲ひとつ無い。西へと傾き始めた優しい日差しがターフを照らしているだけだ。

そうして視界をもう一度ターフの上に向ければ——戦場を選べない勇者は、マイルの支配者を完全に捉えていた。

『残り200mを切ってタイキシヤトル先頭のまま!マイルの支配者が——ッ!飛んできた!飛んできた!!飛んできた!!!アグネスデジタル外を回つての猛追!ここで差し切ってゴールッ!!ゴール手前でなんとという末脚!なんとという勝負強さ!真の勇者は戦場を選ばないッ!!』

『うおおおおおおおっ!!』

「??勝つ、た?」

勝った。デジタルが、あの位置から差し切って??嬉しいはずなのに、まるで納得していない自分が居る。

大きく肩を上下させながら、デジタルは上を見上げ、必死に呼吸を整えようとしていたからだ。相手が格上霸王達の時、場所が世界香港Cの時、距離が長距離適正外の時??そしてミホノブルボンとの一騎打ちの時でもあんな風にはならなかった。あんなに??辛そうじゃなかった。



信頼の為の道具。

勇者は戦場を選べない。

ヨシエさんはそう言っていた。デジタルに何かが起きているのは確かだろうが、俺にそれが何なのかは理解出来なかった。

「さつきは??言い過ぎました。ゴメンなさい。でも、言った事は本当です。そして私が全部を話した所で、結局何の解決にもならない。最後はトレーナーさんが向き合っただけで、あげなくちゃダメなんです。」

「??俺は、そんなに察しが良い方じゃないです??分らないんですよ。貴女の事だっただけだ?なんで??そんな辛そうな顔、してるんですか??。」

「??私の事なんて良いんですよ。人並みな感想だけれど??デジタルちゃんは凄く良い子。優しく、気を使えて、強くて。だから——。」

「シンザンの様にはさせないで、ですか?」

ヨシエさんの表情が変わった。それは今まで1度たりとも見せることの無かった驚愕と、古傷を抉られた様な渋い顔だった。

そしてその傷を抉ったのは——。

「お取り込み中すみません。風の噂で聞いたものですが、少々興味がありません。貴女は勇者御一行——いえ、デジタルさんとシンザンさんを重ねている節がある。これは決して皮肉でもなんでもないですが、他人の意志に惑わされずに自分の考えを押し付けると言うのは、皇帝のトレーナーらしく実に傲慢で素晴らしいと思いますよ。」

「??何の話してるのかなあ、モルくん。」

「貴女に聞きたい事が有るんですよ。」今回も、でしたが??人前でやりたい放題しているそのわざとらしい演技の理由と、ウマ娘の事についてなんですけれど。」

「演技???」

モルはこちらに目を向けて、ニコリと微笑んだ。

「円まじか ヨシエさんという女性はそういう人です。4手5手先まで見据えられるこの方が、シンボルドルフのトレーナーであるという自分の立場とその影響力を理解していない筈が無い。それに効率性と自分の優位性を何よりも大事にする人だ。余程の理由が無い限り、人前で醜態を晒すような趣味は無いでしょう？」

「面白いすぎ。私そんなに大層な人間じゃないから。」

「妥当な評価です。貴女は大層な人間だ。だから時代は貴女と皇帝を選んだんです。神《font:ui40》馬《font》と呼ばれたシンザンに引導を渡したその走りと心持ち、僕にもご教授頂けませんか？」

「??そう。聞きたいんだ。へえ。」

一瞬何かを考える素振りを見せたヨシエさんは徐に携帯を取り出して操作する素振りを見せたが、直ぐに自分の懐へと仕舞い、あーちゃんを膝から下ろした。モルの顔を覗き込んでいじらしく笑った彼女は言う。

「良いよ。お話しよつか。生徒会室で君の知りたいたい事も教えてあげる。どうせウマ娘の”可能性”だの”運命”だのって話をしたいんでしょ？物好きだねえ、君も。ああ——アグネスタキオン。電話越しに盗み聞きなんて趣味の悪い事しないで、貴女も直接おいで。」  
「???ふうん、成程。やはり隠し事が通用しないというのは、本当の話らしいねエ。』」

「あつははーまあ、2人共歓迎するよ。気分はクソだけど。」

そうして2人は会場を後にした。

俺は??いや、俺もデジタルに顔を見せに行かないと。一旦控え室に戻っただろうし、トレーナーの仕事ぐらいはちゃんとしなきゃ??。

「あーちゃん、カレン??今日は嫌な空気にしてごめんな。もういい大人なのに。」

「ううん、カレンは平気。お兄ちゃん、あんな風に怒る事あるんだね。」

「恥ずかしながら??昔はああだったんだ。」

「おじちゃん!あーちゃん、おつかい頼まりました!あのお姉さんに!」

「おつかい???」

「んっ!20ぷんごに、これしてって!」

あーちゃんが自信満々で見せてきたのは一枚のメモ帳だった。そこには綺麗な文字で言葉が書かれていた。

——” ミュートで参加。勇ましき者達に真実を。”

ヨシエさんが残したものらしい??が、さっぱり意味が分からん。そしていつこれを書いていたのかも分からん。

もしもの仮説を立てるなら??モルが自分の所へ来ることが分かっていた。いや、モルの言う通り、彼女の行動の全てが演技で、アイツを呼ぶ為のブラフだったとしたら?だがアイツだけならまだしも俺に何の関係があるのか??ええい分からん分からんッ!第一そんな事本気でやってみろ。それこそ未来予知だっつて出来る怪物じゃねえか。

「ありがとう、あーちゃん。今日はもうお終いだからお父さんお母さんのところに戻りな。明日は家族で楽しんで。」

「??おじちゃん、またあのお姉さんと喧嘩する?」

「??しないよ。君にも約束する。皆仲良し、トレセンサイコー。」

「うん??。」

あーちゃんはいいつも通りコアラ状態で張り付いてきたが、親御さんの元に帰るまで、その顔はヨシエさんの後ろ姿を見つめ続けていた。

そうして聖蹄祭の初日が終わり、控え室に繋がる地下バ道。俺は控え室に居るであろう相棒の元へと向かっていた。

レースの結果は??上々、なのだろう。マイルの支配者相手にあんな走りをする事が出来たのだから。だが、明らかにデジタルの様子は今までと違っていた。最初っから本気で走っていた筈のアイツの『領域』は伸び切れず、寧ろカレン達が”雨”を見た後に力が爆発していた。それは今までに無い傾向でもある。

アグネスデジタルにとつて極度の集中状態——『領域』に踏み込む為の条件が変わったという事だろうか?変わるだなんて話聞いた事が無い。それこそ前代未聞だ。

アイツはレース前、脚や調子は大丈夫って言ってたし、何か嘘をついていたとも思えない。考えられる事があるとすれば今までの疲労??いや?全盛期?分からねえ??ああ、クソっ。今はとにかくアイツと話をしよう。それで今後の事を——。

控え室の前に着いた時、中から鈍い音がした。  
ガンツ、と。

もし着替えてたりでもしたら非常に気まずいかもしれないが??寒気が止まらない。嫌な予感を抱えながら、扉を開ける。

「あー??デジ——ツ、おいツ!デジタル!デジタルツ!!」

部屋の中に居たのは——勝負服姿のまま、ロッカーへもたれ掛かるように座り込んだ相棒の姿だった。

閑話　：　真偽、決意、可能性

「なあ若坊主??それなんだ?」

木で出来た喫煙所の小テーブル。その上に鎮座している物体を指差しながら、先輩はそう言った。

「??コケシ。脱臭機能付きの。」

「へえ??鼻から煙吸ってんぞ。」

「後輩ちゃんの趣味だよ。煙を直接当てると目が光ってキレル。」

「あの姉ちゃんやっぱ面白えな。センスがぶっ飛んでらア。どれ??ふうー。」

『煙てえな。配慮しろ。ド屑が。』

「需要あんなのかコレ。」

「俺にはある。」

聖蹄祭の初日が終わった。

デジタルは??結果だけ見ればなんて事は無かった。あの後直ぐに俺に気付いたデジタルは、右手を真つ直ぐ上げて言ったんだ。

『タイキさんのご尊顔にゴールドラッシュの伊吹を感じてスパート忘れてましたあッ!!』

堂々たる宣言。もはや選手宣誓ばりの勢いと圧で、そのままどれだけ間近で見たタイキが凄かったのかを何故か正座させられて語られたのである。大きな声を出した事で、遅れてやってきたウチのチームの面々もデジタルを胴上げしたり身だしなみを整えたりお祭り騒ぎ。新人ちゃん達に男子禁制と言われ部屋からはじき出され、渋々ここで時間を潰していたところでの人がやって来た。俺が何したって言うの。

部屋を出る前、デジタルはこっちを見て笑っていた。明らかにいつ

もと違うのに、歯を見せて、心配要らないとでも言いたげにだ。カレンだけはそれに気付いていたが、あとは任せて欲しいの一言。悲しい。

念の為検査とか色々様子も見たいから、終わったら連絡をくれとは伝えてあるが??。

「相方が必死の時に何も出来ねえもどかしきつてのは良く分かる。ヨシエと口論になったつてのも、どうせアイツがズバズバ言ってきたんだろ。ありやあ加減を知らない女だからな。」

「まあ??でも、俺が担当の事分かってやれていないのは本当だから。」

先輩は深く煙草を吸って、溜息のようにはいた。

「アイツは??元々あんなんじゃねえ。常識がぶっ飛んでて口が悪くて情緒不安定で顔の良い女好きなただのおもしれー奴だった。」

「今と違う特徴あった?。」

「急くな急くな。よく笑うし、すぐ泣くし、自分の心に素直だったんだよ。悪態だつて今ほどついちやいない。最初に変わったのは??お前が俺のここに来てからだな。」

「??俺が生意気だったから気に入らなかつたとか?。」

「あん?。ありやヤキモチだろ。俺がお前にばっかかまけてたからな。俺アイツに好かれてる自信だけはある。」

何を根拠に言ってるんだこの人。ケツは蹴られ悪態はつかれと散々されてきたのにメンタル強過ぎん?どこの世界にそんな猛烈な愛情表現があんだよ。

「お前信じてねえな?。」

「そりゃあ。信じろつてのが無理だよ。」

「いやマジだつて。」

「はいはい??。」

「俺アイツとキスした事あるし。」  
「ブエツホ、ゲツホツ!!はっ!?な、アンツ、ゲツホゴホツ!!!」  
『煙クセエんだよ口臭便所。死に晒せクソが。』

コケシに滅茶苦茶罵倒された??凹む。

違うそうじゃねえツ!!このハゲ今なんつった!?何しれつと爆弾発  
言かましてんの!?!そんで何ふつくうの顔して煙草吸ってんの!?!えっ、  
怖い怖い怖いツ!!

「冗談でも言っている事と悪い事あるだろ!嫁持ちが女に節操無さす  
ぎだツ!!」

「嫁持つ前に決まってるんだろ。別にそういう仲でもねえし。」

「尚更悪いわボケツ!!」

「大荒れだなあ??シンザンは爆笑してたぞ?」いつかやるって思ってた  
”って言われ——あつ、俺が話したってヨシエちゃんには内緒な。  
共犯と見なされて殺す気で殴り掛かられるぞ。」

「デツケエ爆弾だけ持たせて俺にどうしろってんの!?!嘘は100%バ  
レんだろ!?!どんな顔して明日1日乗り切れば良いんだよチク  
ショーツ!!後シンザンの言葉は罪犯した奴に言う台詞だからな!?!」

「弟子が元気で師匠は嬉しいなあ。」

「喧しいツ!!」

終わった??俺にこの事実を隠し通せるとは到底思えない。物理的  
にマウント取られてボコボコにされた挙句ダートに埋められる??あ  
れ、急に怖くなってきた。俺なんで今日あの人と口論してたんだろ。  
泣きそう。

「俺がシンザンと引退するってなった時、あのバカは本部に文句垂れ  
に行ってたな。問題起こされたらアイツとルドルフは目を付けられて  
自由が利かなくなる。だから説教付きでキツイの1発お見舞いした  
ら、お返しに顔面グーパーンされてよ。」勝手に首突っ込んで勝手に居

なくなるぐらいなら最初つから面倒なんか見るな”、”置いていかれる側の気持ちなんて考えた事もないんだろ??”そんな風が大泣きされた。」

「??あの人全然分からねえ。何考えてるかも、何がしたいのかも??そんな風になれる人なのに、俺はデジタルとの事??”いつ壊れるか”って言われたんだよ。楽しみだって。」

「ああ?だっはっはっは!!そりやお前、アイツが120%悪いな!俺に言うならまだしも、バカ正直に他人の言葉信じる奴にそんな事言っただって伝わるわけねえつての!」

「お?今バカにしてるか?」

「ああ、してる。」

うぐつ?こ、この親父、好き勝手言いよつてからに??つ!

煙草の火を消した先輩は立ち上がって、満足そうに笑った。

「アイツがそう言うつてことは、何も心配要らねえ。”しがらみなんかさつきとぶつ壊してその先を見せろ”つてこつた。——担当の心を過信しすぎて、もう走りたくないって言わせちゃった、バカな師匠みたいになるなつてよ。」

「何だよそれ。」

「??いや。何でもねえわ。まあ、アイツの変化を見てきた男が居るように、お前の変化もちゃんと見てきた女が居るワケだ。お前はただ何にも考えず、トレーナーとしてやる事をやりな。」

やる事——今はとにかくデジタルの話を聞きたい。俺は、俺に前を向かせてくれたパートナーの心ときちんと向き合わなくちゃならない。

きっとデジタルは心配要らないと言うだろう。いつものように笑って、何でもないと。けれど??。



——トレーナーさん??アタシ、走ります。約束します。トレーナーさんのやりたい事、夢が見つかるように一緒に居るって。トレーナーさんのお父さんに、アタシ達のやった事が届くように勝ち続けるって。だから??ゴメンなさい。

「あつ??アイツ?まさか??その為に走ってるのか?だから上なんか見て??3年、だぞ??3年も1人で??何がゴメンだつ、あのバカツ!!」

「??ウマ娘だつて年頃の娘だ。やる事なす事完璧じゃねえし、それは大事な誰かの為に、必死になってるだけかもしれないねえ。だからお前の言葉で、お前の気持ちを教えてやるんだ。そう言うのは何十回言っただつて問題ねえだろ?」

「先輩??。」

「これは昔ヨシエちゃんが言ってたことなただけだな。”ユメ”も、”運命”も、”限界”も超えた先??トレーナーとウマ娘が同じ道を歩いたなら、辿り着くのは”可能性”らしい。」

”可能性”——良く分からないっす。でも??ありがとうございませす。」

「何だ急に。ハハツ、じゃあな。キスの件は明日上手く隠し通せよー。」

「台無しだわツ!忘れてたのに思い出したじゃねえかおい!ふざけんなツ!!」

景気よく笑ったハゲはそのまま喫煙所を後にした。えっ、普通に酷くない?あの弟子をなんだと思ってるの?あつ、ヨシエさんも弟子だったわ?嫌だ?まだ死にたくない??ヒヒン??。そもそも恋仲じゃないのにキ、キスするとかどんな状況?飲み?あつ、きつとそうだ。多分そう。明日マジでどうすんだよコレ??。

項垂れた俺の事など知らなくても言うように、ジャケットの内ポケットで携帯が震えた。登録してない番号だが??恐らくは彼女だろう。20分後にやってくれとあーちゃん伝手に回ってきた伝言に

は、ミユートでと書いてあつた筈。要するにこっちの声は必要無い状況というワケだ。通話ボタンを押すと、向こうから聞こえてきたのは生徒会室に居るであろう3人の会話。

『あつたあつた！これ探すの苦労したんだよ？2〜3ページだけコピーしてたんだ。』

『これがその昔話??？』

『ほう、実に興味深い。少々拝見させて貰うよ。』

う〜ん??俺にまるで関係無い話題じゃない？昔話ならこっちも今しがた終わったところよ？クソデケエ爆弾だったがなッ!!いや、落ち着け俺。早まるのはいつもの悪い癖。

しかしふと思う。そもそも何でこの人は、先輩らが辞める時にわざわざお偉方の所へ乗り込んだのかが分からない。そりゃあシンザン達は期待されていたし、お偉方主導で色んなキャッチコピーとか特集組まれてた事はあつたけども。

『ねえモル君??読んでるとこ悪いんだけど、1つだけ聞かせてよ。シンザンのトレーナーって——知ってる?』

『ええ、勿論。有名な人ですから。確かその道のお家の跡取りでしたね。貴女と同じ位の歳の優秀な人だったはずです。理事会が直接見繕ったトレーナーだと。』

『ああ、うん、そうだね??君の、言う通りだよ。』

それは??俺の知らない歴史だった。



——舐め腐ってんすか？場所も弁えずにまた同じ様な事してみる。纏めてシバき倒すぞバカ共が。2度とこんな事言わせんな？

??言い過ぎでしょ。思い返す度に羞恥心でクツソシンドいんだけど。何であんな事言ったかなあ。

先輩があんな風に誰かを敵視するのは初めて見た。普段人の話聞かない勘違い野郎のクセに世話焼きな優男で、やたらとちびっ子達に好かれる謎の能力者ぐらいにしか思ってたし。

ヨシエさんだって、普段は生徒達からも好かれてるっぽいからあんな態度取ってた理由が分からない。アタシが知ってるあの人は、ブルボンさんのトレーナーやウマ娘達が学園を辞める時に生徒会室で1人泣いてるような人だったから。

2人の知り合いだって言ってたおハゲさんは、昔からあだから放っておいて構わない、とは言ってたけども。

??昔から。アタシが来る前から、あの2人はあんな感じで互いを知ってたんだろうか。普段は人前だからどっちも外向き用の顔とか??昔見た漫画だと、大概そういう喧嘩っばやい2人がくっついてたっけ。

はっ?つか、何マジに考えてんの?頭少女漫画かよ。

んでもってメールで呼び出しあったから理事長室に来たのはいいんだけどさ??よりによって榎本さんと2人。絶体絶命。

やっ、嫌いじゃないけど。嫌なワケじゃ全然無いんだけど。

アオハル杯——トレセン学園のチーム対抗戦。榎本さんが理事長代理として学園に戻ってきた時、徹底管理プログラムってのを出した事で存亡の架かったイベント。ウマ娘の自主性を主にしたトレセンの在り方を根本から変えようとする半ば無理矢理なやり方に反対して、アタシは自分のチームや何人かのウマ娘達と一緒に榎本さん率いるチーム『ファースト』と競った。

結果は平均5バ身差でアタシらが勝ったけど??蓋を開けてみれば、榎本さんのトラウマからくる策だったっぽくて。何にも知らずに、アタシはあの時も滅茶苦茶に反抗した覚えがある。

レース後に和解??はしたけれど。ワリと引き摺ってるお陰で今日までこの人とは何となく接し方が分からない。

「姫野トレーナー。」

「??あつ、はい。」

いっけね、そういやアタシ姫野だったわ。何か久しぶりに名前呼ばれた気がする。誰かさんが”後輩ちゃん” ってばつか呼んでくるから。

そもそもアタシもあの人の名前知らねーし、多分向こうも知らねーな??えっ、そんな事ある?自己紹介したろ?あつ、してないわ。何?自己紹介しないまま1年ちよつとの付き合い維持出来てんの?揃いも揃ってコミュ障の未来形かよウケる。

「実は先日、勇者御一行のトレーナーさんとお話する機会があったんです。」

「ああ、えっ??そうなんですか。変わり者ですよね。」

「はい。ですが、独特な距離感と言いますか??何となく、あのチームがまとまっているのも納得したんです。毎年商店街の福引で温泉旅行を当てているとも聞きました。」

あの人ヤベーな。榎本さんに何の話してんの。あつ、信じて送り出したブルボンさんが急に心配になってきた。

「どことなく円まじかトレーナーとも似た空気でウマ娘第一の思想。見習うべき部分は多く有ると感じます。」

それ皇帝のトレーナーもヤベーって事になります。いやヤベー人ですけど。見習ったら榎本さんも同じ道辿りますよ間違いない。ヤベー理子ちゃん爆誕です。

「学園内でも注目を浴びる『ポラリス』、『勇者御一行』、『お友だち』、それから『ハーバー』。きつと貴女も含めて同じ考えを持っているからこそ、生徒達からの信頼も厚いでしょう。」

アタシもヤベー奴の括りになってません？あと『お友だち』のことは頭がヤベー人なんでベクトル違います。いやネタには困らんけども。人柄は良い人達だけれども。

「すみません！遅くなりましたっ！」

謝罪と共に勢い良く理事長の扉を開けてやってきたのは葵さん。先輩の同期さんだけだけどあの人よりは全然若い、正しくその道のお家柄の人。ハッピーミックさんと2人でマンツーマン体制を取ってるフィジカルモンスターな先輩で、URAファイナルズの決勝ではデジタルさんと良い勝負をした。はず。

「私達も先程来たばかりなので。」

「っすね。理事長直々に呼び出して何でしょう。」

「うくん??心当たりは無いですけど??あつ、なにかお話しされてたんですか?」

「勇者御一行や他のチームのトレーナー方について少し。」

「ああ、成程！同期ですけどあの人、物凄く真っ直ぐウマ娘の子達に向き合ってますよね！私とミックも何度か助けて貰いましたし、毎年商店街の福引で温泉旅行当ててるって聞きましたよ！次出したら出禁とも！」

あの人ヤベーなマジで。同じ話を何人にしてんの？ほんでもって何ネイチャさんのホームでアウェイになりかけてんのよ。そら毎年特賞だけ撃ち抜く奴いたら出禁にもなるわ。アタシにはそんな真似出来んつつて、やかましわ。

「ふふっ、あのチームは皆仲良しですし、私もそういう所は憧れが——あつ！ち、違いますよ!!今のは尊敬の念を込めてる意味なので安心して下さい姫野トレーナー！」

「矛先の向け方エグすぎてビックリしました。安心して下さいの意味が謎なんですけど。」

「えっ、あの、いつも一緒に居るので??そういう感じなのかなあ、と??。」

??あれ?ウチらそんな風に見られてたん?マ?

そりや確かに尊敬はしてるし、変人で人の話聞かねえロリコン気質ではあるけどウマ娘第一の所とかは素直に良いなって思うし、やたらと気に掛けてくるっつーか”後輩ちゃん後輩ちゃん”ってかまちよしてくるとは思ってるけども。わりかし楽しませてもらってる節はあるけども。ボツチの時から面倒見てくれてる辺りは感謝してるけども。

そういう??はっ?いや、いやいやいや。そういう感じってそういう感じ?っべーな、賢さ足りてないわアタシ。

「諸君!急な呼び出しにも関わらず集まってくれて感謝したい!」  
『お疲れ様です。』

ここぞとばかりに威勢の良い挨拶でやって来たトレセンの理事長秋川やよいさん。子供。合法ロリかと思ったら脱法ロリだった、多分先輩<sup>ロリコン</sup>好みの偉い人。

労働基準どうなってるんだって最初の頃は思ってたけど、最近はまだ慣れてしまった自分が居る。ツツコミ出したら身が持たんし、少なくとも知り合いの歳上に3人ほどツツコミ塗れのヤベー男女が居るから。

そもそも学園自体は言う程おかしくはないワケで。

「皆に集まってもらったのは他でも無い。実は新しくウマ娘用に向けた楽曲の話が上がってきた為、学園内でも顔の広い諸君らに、歌い踊って広めてもらいたいのだ!」

「はあ??楽曲。この資料で良かったですかね?」

ずっとテーブルの上に置かれていた裏向きの資料。めくってみれば、恐らく曲名だろう題目がデカデカと書かれていた。

——びよい♪つとはれるや！

あつ、違うわ。学園規模でヤベー所だったわ。

なんなん”びよい♪”って。うまびよい伝説の時も思ったけど、どんだけこの学園”びよい”って単語に情熱注いでんのよ。そんで何この人ウチらにびよい♪させようとしてんの？びよい♪するってなんだし。動詞？んな動詞ある？

まま??言っても？題名ぶっ飛んでるけど普通の歌とか有るし？多分そのパターンっしょ。

——笑顔で滑り台を滑る（※重要）

あつ、違うわ。これ尊厳根絶やしにするつもりだわ。

ええ？こわ??アタシの職場こわ??もはやびよい♪の要素何1つとして無いのが更に拍車をかけてこわ??。

「あー??理事長？やるのってアタシ達3人だけですかね？ヨシエさんとかこういうの好きそうですけど。後はヨシエさんとか。ヨシエさんとか。」

「姫野トレーナーは彼女に何かあるのだろうか??ゴホン。無論彼女にも声は掛けようと思ったのだが、これ以上の協力はこちらとしても忍びなくてな。」

「円トレーナーって何かされてましたっけ?。」

「ウイニングライブも含め、ウマ娘達が歌う楽曲に関しては彼女が最初に歌ったものを音源としているからな！ライブの練習で使われている曲は、その音源を元にウマ娘達が歌ったものへとアレンジされている。今回はその??少々、笑顔が引き攣っていて?あの??ちよつと、もう、頼みにくい??。」

流石のヨシエさんも”びよい♪”は辛かったんですね。分かりません。

いやそんな事よりオリジナル音源のボーカル全部あの人とか初耳  
なんだけど。ブッチギリでヤベー人じゃん。リーニユ・ドロワツトの  
時も、モルさんとペア組んで踊ってたからウマ娘よか目立つ美男美女  
コンビだったし。何？逆にあの人何が出来ないの？常識的行動？普  
通に失礼だったの。

理事長がパソコンから流してくれた音源は、確かにヨシエさんの  
(ちよつと可愛いに寄せた) 声で——いや歌詞がファンシーだな  
この歌。いい歳した大人が歌って踊るもんじゃないってマジ。ファ  
ンキーまつしぐらだつつの。んで滑り台滑るんでしょ？はれるやど  
ころか荒れるわ。

「では諸君、忙しい中申し訳ないが、よろしく頼みたい！」  
『分かりました。』

あれ？今時間飛んだ？会話何段階すつ飛ばして了承されたん？ア  
タシまだOK出してないんだけど。何で2人共そんな乗り気なん  
ですか。

榎本さんとか、この間遂に前転出来たみたいな話ファーストの子か  
ら聞いたんだけど運動大丈夫なんかな。命掛けてません？

葵さんも葵さんで『ミークの為』って言ってますけど、多分ミーク  
さん踊らないです。もう『ミークの為』って言ったもん勝ちなミーク  
みたいになってます。

これアタシの感覚がズレてんのかな？多分そうかも。ちよつとウ  
チのエアグルーヴさんにツツコミしてもらわないと。”なわけ”、  
つって。やかましわ、たわけ。

結局断れない流れのまま話が終わってトレーナー室。理事長から  
幾つか貸して貰ったオリジナル音源のライブ楽曲を垂れ流してるわ  
けだけでも。

『~~~~~♪~~~~~♪~~~~~』

バツツツクソカッケエなこの人の『w i n n i n g   t h e   s



ou』。何でトレーナーやつてんだろ。普段女性って言うより女の子した声出してんのにどんな声帯したらこうなる?』びよいと♪はれるや!』のギャップもあるから余計にインパクト強え。丁寧にハモリパートも別録してるし??。

「なーに聴いてるの?トレーナー。」

「クロ、アンタも『UNLIMITED IMPACT』聴いときな。多分もう2度と聴けないから。」

「えっ。私ダートクビ宣告?ライブ練習でもう何回も聴いて——誰これうつま!」

芦毛の髪を揺らしながら、小生意気な妹分が鼻歌を奏でる。こうしていれば普通のウマ娘なのに、一言多いわ勇者御一行の前じゃ失神するわと賑やかしてくるアタシの担当。そんなクロフネは、こっちを向いて思い出したように言った。

「そう言えばさつきお客さん来たよ。暇が出来たら連絡してって言うてた。」

「誰が?」

「ミスターシービー先輩。」

「???はっ?」



タキオンと共に生徒会室に呼ばれて約10分。知りたい事を教えてくれると言っていた筈の彼女は、向かいの席で楽しげに笑っていた。

と言うより——。

「ねえお茶菓子食べる?手作りなの。紅茶にもピッタリ合うように味も整えたんだ。」

「おや、それは期待出来そうだ。君が食べさせてくれるのかな？」  
「えっ!?やるやる!はい、あ〜ん♪タキオンちゃん、巷で夢女製造機つて言われた事無い?」

「覚えは無いが、その呼び名に興味はある。教えて貰っても?」  
「毎秒でも恋しちゃう人って事♡」

「ハッハッハッハッ!デジタル君のような事を言うねエ君も!」

完全にホストクラブ。ああいや、2人共女性だから、この場合は変わってくるのだろうか?何にせよ本題が無いまま延々とこの空気が続いているのは確かだ。時折タキオンと眼は合うが、どうもアイコンタクト的には様子見との事。全く??タダでお茶菓子食べたいだけでしょ。

『ポワリス』に出来ない?歓迎するよ?」

「魅力的な提案だ。けれども、そこで辛抱強く待っている彼の眼がイカれている内はどこにも移るつもりは無いよ。料理も捨て難いし、何より果てを見せると約束してしまっただからね。」

「そっかあ??残念だけど、しょうがないね。と言うわけで担当の子達にこれでもかと愛されているモル君?お待たせ。私と君の仲だから何でも聞き給えよ。虚言、妄言、持論、考察、夢小説。さあ選ぶが良い。」

「ありがとうございます。しかし、ここはタキオンに任せようかと。彼女の知りたい事が僕の知りたい事ですから。」

「だってタキオンちゃん!彼ピの許可出たよ!」

「彼ピと言うよりモルピさ。カフェがへそを曲げてしまうから、内密にね。」

タキオン、人差し指をヨシエさんの口に当てるのはやり過ぎだよ。その人、今にもトんでしまう。

満足気に笑ったタキオンはティーカップを手にながら僕の際へと座り直した。足を組んでリラックスするのは良いけれど、どこに

行っても態度が大きいね、君は。

「聞きたいと言っても、君の見解が昔と今でどう変化したのか教えて欲しいだけさ。度々ウチに来ては、君は興味深い意見を言うだけ言って去っていっただろう？例えば——ウマソウルという概念。」

「うん、言ったね。人とは根本的に違う身体の構造だけじゃなくて、食べる量とか勝利に対する執着心とか云々かんぬん。」

「実は研究が行き詰まってねえ??また君の意見があればと——。」

「嘘おっしやい。キミの眼はそんな事言っていないよ。有るのは私への興味と関心。持つてる引き出し全部開けさせようって魂胆の顔してる。好き。」

「ふふつ、ダメか。しかしウマソウルというものに興味があるのもまた事実。良いかな?」

彼女の笑みが深くなった。徐に立ち上がったヨシエさんは、自分の作業機の引き出しを漁っては分厚い冊子を何冊か取り出して、タキオンの前に置いた。

「少し昔話をしよっか。奇跡のウマ娘、トウカイテイオーの復活劇。」  
「ああ。」

「あの子、3回骨折してるでしょ?それで1年休んで出場した有《font:ui40》馬《font》記念で、1番になって帰ってきた。でもさ??1回目の骨折でルドルフみたいな”無敗の三冠ウマ娘になる”っていうのが叶わなくなった時、思い出したんだって。あの子??昔、そうなる”ユメ”を見たんだよ。」

冊子の1冊を手にとって流し見すると、おびただしい迄の文字がページを埋めつくしていた。

ウマ娘達の名前。”ユメ”の内容。それが起きた日。前兆。起きた時の状況。レースの内容。本人談か彼女の予想か。

事細かに記されたそれは、ウマ娘という存在に関係した伝記にすら

思えてしまう。

「それ、”ユメ”と同じ道を歩んだ子達。こっちの冊子は自分が出場したレースに”運命レベルの何か”を感じた子達の情報。学園中走り回って色んなウマ娘達に話を聞けば、まあ出るわ出るわ大豊作。途中で人雇おうかと本気で思ったよね。モル君、46ページの上から3人目。」

「えっ?はい——”アグネスタキオン”。」

「キミが自分で言ったんだから、見解の変化なんて私よりも感じてるんじゃない?ねえ——皐月賞で終わる筈だった、超光速のプリンセスアグネスタキオン。」

「??君は。」

「要するに、タキオンちゃんにはタキオンちゃんの、テイオーにはテイオーのウマソウルがあつてさ。怪我とか勝ち負けとか色んな要因全部が予定調和の道でしか無かつた。その道にある障害が”ユメ”。越えるには分岐点を探す必要が有るけれど、基本的に認識なんて皆曖昧だから、トレーナーとウマ娘??後は周りの環境や関係性が必要不可欠。そんでようやく越えたその先に有るのが”可能性”——つて言うのが、調べた事に基づく私の妄想!はい、質問は?」

沈黙。僕とタキオンは彼女の顔を見て、ただ黙るしか無かつた。  
妄想?

1人でこれ程までの情報を集め、恐らく誰よりも真実に近い話を述べながら??彼女はこれを妄想と切り捨てるのか。

「無い?おっけ、じゃあそれあげるから好きに使つて。あつ、そうそう!昔話で思い出したけど、君達??特にモル君に見せたいものがあるんだよ!ちよつと待つてて?確か胸ポケットに??無いな。スーツの内ポケかな?うーん、胸が邪魔。」

演技か本心か、彼女は矢継ぎ早にそう話すと自分の内ポケットに手を入れて——足を踏まれて痛い。

「余りジロジロ見るもんじやないよ、君。」

「見てないさ。もしかして拗ね——痛たたたた。」

「そろそろ無神経に効く薬でも作ろうか？」

耳を絞られた。どうにもこういう時のカフェやタキオンは扱いが難しい。僕が君達から離れるわけ無いのに。

「あつたあつた！これ探すの苦労したんだよ？2〜3ページだけコピーしてたんだ。」

「これがその昔話??？」

「ほう、実に興味深い。少々拝見させて貰うよ。」

渡された用紙にはギツシリと文字が羅列されていた。”運命に噛みついたウマ娘”との事らしいが??これを今の時間だけで読み解くのは骨が折れそうだ。

「ねえモル君??読んできるとこ悪いんだけど、1つだけ聞かせてよ。シンザンのトレーナーって——知ってる？」

「ええ、勿論。有名な人ですから。確かその道のお家のお家の跡取りでしたね。貴女と同じ位の歳の優秀な人だったはずです。理事会が直接見繕ったトレーナーだと。」

「ああ、うん、そうだね??君の言う通りだよ。」

彼女の顔は浮かないものだった。

ふむ??シンザンの事に関しては、僕の興味本位で調べた事。昔話はタキオンに読み解いて貰うとして、こっちの引き出しを開けてみてもいいかもしれない。恐らく??彼女の本心がここにある。

「シンザンの事は少しばかり調べました。多くのウマ娘達を導き、支え、神《font:ul40》馬《font》と呼ばれていた彼女

の在り方は、どこかデジタルさんにも似ている。それは僕も思いますよ。だからこそ貴女は目を掛けているし、庇おうともしているのでしょうか。」

「??庇う?」

「貴女と理事会が犬猿の仲なのは、ある程度学園で過ごしたトレーナーなら知られている事です。そしてデジタルさんは特異な生徒。バ場も距離も問わない、適正を覆したオールラウンダー——”戦場を選ばない勇者”なんて最もな広告塔を使わない手は無い。けれど貴女は、理事会に対して宣言をした。”そのチームに手を出したら噛み付く程度では済まさない”、と。」

「盗み聞きしてたんだ。良い趣味してるね。」

「たまたま聞こえたんです。通りがかった際に。」

「ふくん?」

笑ってこちらを見ているだけなのに、肌がヒリつく。恐らく今のが嘘だと言うことは既にバレているのだろう。目に見える地雷原に足を踏み入れたのだから多少は覚悟の上だ。

「貴女は何がしたい。誰の為に、どうしてあんな演技までして動いている。まるでお偉方を敵視している様にも見える貴女の本心を——」。

「してるよ。敵視。だってシンザンのトレーナーはちゃんと居るんだから。」

「??えっ?」

「居るんだよ??冴えない顔して放任主義の、自由気ままなバカ親父が。」

彼女は膝の上で固く手を握り締めた。真っ赤になるほど力強く。そしてその眼にはやり切れない哀しさがあった。

「昔はさ??トレーナーなんてウマ娘のおまけだったの。その道のお家

柄じゃなきや見向きもされない、誰も興味を持ったりしない時代。話を聞いたかつたら、ウマ娘に直接聞けばいいんだから当然だよ。シンザンのトレーナーもそうだった。一般上がりの、ただの物好きでウマ娘好きなトレーナー??。私とルドルフが成績を残してきた時、私以外のトレーナー達と違って表舞台にバンバン顔出したから、少しずつ世論は変わっていつてき。時代の変わり目に気付いた上の連中は、シンザンとそのトレーナーに話を持ちかけたんだよ。”シンボリルドルフに託してみないか”ってね。」

「託す??それは、良い事なのでは? 貴女方が期待されていたと言う話の筈です。」

「そう信じて2人も了承した。で、蓋を開けてみれば——シンザンを取られたんだよ、あのバカ。ルドルフと一般上がりトレーナーに時代を切り替えるには、トレーナーの方にも分かりやすい下克上が必要でしょ? だから理事会が見繕った坊ちゃんにシンザンを渡して、私にそれに見せたの。」

作られた歴史。作られた常識。その話が本当なら、”新時代の到来”と大々的に言われていた過去の記事や意見が全て間違っていたことになる。時代は??シンザンの時に、既に変わっていた。

「ですが、それは学園側が見逃したという事になって騒がれるでしょう。知っている人だって居るはずだ。」

「知つても理事会に楯突く人間なんて居ないよ。タイミングが悪かったんだ。理事長がやよいちゃんに本格的に変わる前だったから??前任、トレーナーの意見もウマ娘の意見も尊重する優しい人でさ??シンザン達の意見を尊重したんだ。”自分達は良いから、これから見守って欲しい”って。結局2人揃って共倒れしたけどね??ねえ、モル君。」

「はい。」

「自分は大丈夫って言い聞かせて、使命感に駆られて——ゴールしても大好きなトレーナーが居ないウマ娘の気持ちって??どれだけ辛

いんだらうね。」

「??あまり握りすぎると、手を痛めますよ。」

「??そうだね。歴史の授業はこれでお終いにしよつか。」

内ポケットから携帯を取り出した彼女は、そのまま静かにテーブルの上に置いた。

どれだけ辛いか??その答えを僕は持たない。

ただ分かるのは、どれ程強い精神を持っていたとしても、年頃の少女達には耐えられ難い痛苦でしかないという事。もしそうだとしたら??恐らくシンザンの引退レースは、彼女本来のポテンシャルを發揮出来ないまま終わった不完全な出来レース。ヨシエさんの中では、1度たりとも勝った事など無いのだろう。

ついさつきまで恐ろしささえ感じられた目の前の彼女が、酷く弱々しいものに思えた。

「演技してるって、君は言ったね。それも結局は子供じみた理由で理事會相手に嫌がらせしてるだけ。巻き込んだあーちゃんとか、あのトレーナーさんには申し訳ない事したなっとは思ってる。でもさ??私にとつて、大事な日常だったんだよ。あのトレーナーさんともつまらない事で毎日喧嘩して、それを”仕方ない奴らだ”って笑う人が居て。そんな普通が大事だった??それで良かった。」

「1人で動く必要は無いじゃないですか。あの人にも言つて、一緒に出来ることはある筈です。」

「それはダメ。言つたでしょ?理事會相手に喧嘩なんか売ったら、それこそまともに動けなくなる。あの人は私みたいに好き勝手やれる人間じゃないし、担当の子達でいっぱいいっぱい。それに??あーちゃんつていう大事な原石も、きつと『勇者御一行』に未来を見てる。私とドルフがやるしかないんだ。あははっ、私達はもう終わり方を見つけているからOK、OK。」

間近で見てきたからこそ悔やんでいる。時代の変わり目になった



のが自分だから責任を感じている。

心など、とうの昔に折れているのかもしれない。それでもやらなければならぬから、虚勢を張り、心に嘘を塗り固め、同じ轍を踏ませないようにしか出来ない??不器用な人だ。

「ルドルフの夢は叶えさせる。その上で私は神様の歴史を戻すよ。在るべき歴史を、あるべき人達に??それが私のやりたい事。」

「余程その人を慕っているようですね。」

「かもね。でもさ??仕方無いんだ。だって——。」

彼女は優しく笑う。目尻には僅かに涙が浮かんでいるけれど??恐らくは、これが本当の。

「惚れちゃった相手なんだから。エゴでも、ちゃんとお返しぐらいやりたいよ。」

いつから話を聞いていたのか、隣で資料を読み耽っていたタキオンが静かに笑った。

「げーっ!こんな時間!ヤバイヤバイ、クソ共——あ、違う。ファン連中に腹パンされる!」

「急に情報量増やしますね。何か予定が?」

「打ち合わせがあるの!羽目外す為の大事な打ち合わせ!」

「おや、まだ羽目を外すおつもりで。」

「そりゃあね。なんたつて聖蹄祭兼ファン感謝祭だから。つて事で私先に上がるから、適当に寛いでて!カップとかは放置でヨシっ!じゃあね!」

最後まで慌ただしく過ごしながら彼女は部屋を後にした——と思

いきや、扉が勢いよく開けられた。

「そうそう、タキオンちゃん！あの子の脚、見てくれてあんがとね！」  
「構わないよ。彼女も大切な研究対象だ。オフサイドトラップ君によるしく伝えておいてくれたまえ。」

「りよー！じゃっ！」

本当に慌ただしい。

??思う所は色々あるけれど、あの本心はルドルフ以外に見せていないのだろう。恐らくは昔馴染みな『勇者御一行』のトレーナーさんにも。

やはり伝えた方が良いんじゃないだろうか。

「惚れた弱み、ね。全く耳が痛い??。」

「タキオン?。」

「何も。君も、誰かさんに伝えようなどと野暮な事を考えるんじゃないよ。」

「けれど——。」

口を塞ぐように、彼女の人差し指が口に触れた。

「意見は不要。彼女が良いと言ったなら放っておけばいい。顔で無関心を装いながら首を突っ込むのは君のクセだ。」

「あのまま1人でやらせるのかい？彼女、いつか本当に自分を見失ってしまう。」

「寧ろ何もしない方が邪魔にならない。それに考えても見たまえ。どれだけ天才と呼ばれようが、皇帝と呼ばれようが??1度定着した歴史を変えるには余りにも小さな水源。しかし幸か不幸か支流は3本生まれたワケだ。もしその内の1つに変化——例えば雨すら味方に付け、他の支流全てを巻き込む激流へと変化したものがあんならどうか？『ウマ娘がこういう存在である』と体现する2人が居れば？彼女は

「1つ確信している。だからこそずっと待っているんだよ。」  
「何を？」

疑問を浮かべるこちらの顔を見て、タキオンはわざとらしく、大袈裟に溜息をつきながら言った。

”可能性”という剣を携えた——勇者の目覚めさ。」

特別R : \*はちくの えいゆう Rob Roy

『主人公はただ1人。君だ。誰かに自分の憧れを映すんじゃない、君自身が憧れて、誇れる自分になれば良い。』

そんな言葉を掛けて貰ったのは初めてだった。

子供の頃に憧れた、物語の主人公。”英雄”になりたいという自分の憧れ。それはとても子供っぽい理由で、控えめな自分にとっては、余り大きな声で言える事じゃなかったけれど。

その夢を誇っていいと言ってくれた人がいた。

胸を張ってもいいと、真っ直ぐ眼を見て認めてくれた人がいた。

単純かもしれないけれど、それは私にとつて何よりも嬉しくて??だから私は、カレンさんに聞いてここへやって来た。

『勇者御一行』——トレーナー室の中はとても煌びやかで可愛らしい物で溢れている。チームの方々が成し遂げた沢山の功績と、ファングッズだったり写真も。”勇者達”が手にしてきた数々の宝石が散りばめられた宝物殿。

カレンさんが言ってた事が頭をよぎった。

『お兄ちゃんはずるい人なんだ。普段はデジタルちゃんと一緒に色々な事考えたり、他のトレーナーさん達と同じ事してるの??1番欲しい言葉を、カレン達が1番欲しい時にちゃんと言ってくれる。だから頑張りたいって思えるの。きつとロブロイさんの言葉もちゃんと聞いてくれるから、頑張ってね♪』

それ以上聞かなくても、それがどれだけ信頼を寄せている言葉なのか分かる。

私もそうなりたくて——ああでもっ、信頼でもそういう意味じゃなくて!——ただ一言、チームに入りたいって言いたかったの??もう、何分も言い出せないでいる。

「そうだ、折角来てくれたんだからお茶でも——。」

「おっ、お気になさらずッ!!」

「えっ、あ、そう?そう?。」

さつきからずつとこの調子?うう?スイープさんにも”やりた  
いなら素直に言えればいいだけ”って言ってもらったのに?。

「最近はどうだい?調子。」

「?あまり、良くは無いです?。有《font:ul40》馬《/font》  
nt》記念でも、クリスエスさんには全然届きませんでしたから?。」  
「ありやしようがないって。まさか2着に9バ身付けるとは誰も思わ  
ないよ。デジタルだって追いつけなかったからな。」

多分、デジタルさんが有《font:ul40》馬《/font》記  
念を2着で走ってる事の方が凄いと思います??適正的にも、何でマイ  
ル王と一緒に走ってるんだらうって思っちゃいましたし?。

「クラシックレースもダメダメで?いまいちパツとしないっていう意  
見も聞こえましたし??自信、無くて?。」

「ふむ??成程?。」

そう言ってトレーナーさんは、分厚い手帳??手帳?えっ、辞書、か  
な?ざつと流し見しながら小さな声で呟いた。

トレーナーさんの持ち物にしては可愛らしいような??でもデジタ  
ルさんは、『あの人マトモな変t——変わり者ですよ。』って言った  
し??あつ、ううん。失礼だよね?。

「凄いな本格化??これなら破竹の勢いでまだ先を目指せる。暮れの中  
山も悔いを残さず走り切れるな。ヨシっ。」

「あつ、あのっ!!」

「んっ!ど、どうした?。」

「今、本格化って??聞こえて?デ、デビューしても本格化が来ない事って、あるんでしょうか!」

トレーナーさんは僅かにたじろいだ。

??ど、どうしよう??つい勢いで聞いちゃったけど困ってる。この人はトレーナーであって、お医者さんとかじゃない。そういう事知ってる職種の人じゃないのは分かっているのに??言い難いこと、聞いちゃった、かな。

「??ある。ただ正確には来ないんじゃないかと、まだ来てないんじゃないかな。」

「まだ??」

トレーナーさんは大きく頷いた。

「言ったらろう?遅咲きの子も学園には居るのさ。成績不振の原因が、自分の努力が足りないからと間違った解釈と努力で身体を壊してしまいう子も居る。中々デリケートな部分でね??ロブロイはこっちだよ。多分。」

「??もしそうだとしたら?結果を残したりするのは難しいですか?周りの子達に遅れてしまったりしませんか?」

「もしかしたらな。けれどそういう子達の執念こそ凄まじいものだし、俺はそれでも走り続けている子を知っているからね。君も覚えがある筈だ。年間グランドスラムを達成し、”世紀末霸王”と呼ばれたウマ娘の1番近くで走り続ける強い子を。」

「あつ??ドトウ、さん。」

そうだ。あの人も自分に自信が無くて??いつも失敗ばかりの自分が嫌だと言っていたけれど、今は見違えるような輝きを放っている。それこそテイエムオペラオーさんや、アヤベさんにトップロードさんと並ぶくらいに。

「ドトウさんは??凄いですね。」

「ああ、凄い。けどロボロイだつて負けてないさ。」

「えっ?」

私の声に顔を上げたトレーナーさんは、子供のようにキョトンとした顔になって??笑った。

どうしてだろう??何故だか自分が物凄く子供っぽい理由を聞きたいみたいで、少し恥ずかしい??。ううん、きつと大事な話だから、ちゃんと聞かなくちゃ。

「前に会った時もそうだ。君は自分に自信が無いと言っているけれど、まだ夢を見ているんだろ?そして??どうしても言いたい事があるから、今日ここに来た。教えて欲しい、”英雄”ゼンノロボロイ——君は何が見たい?」

また、だ。

また、この人は私を——”英雄”と呼んでくれる。何も結果なんて残せていない、ダメダメな私の事を??私の夢を、本気で信じてくれている。

「私は??。」

誰かに言うのが怖かった。

子供じみた理由で走り続ける事が心配だった。

私が夢見た私に変わりたかった。

今なら——言える。

「私は、私の夢を見たいです。私に出来る事を全部やって??それでもまだ、足りないかもしれないですけど??でもっ、やっぱり”英雄”になりたいから!だっ、だから、あの??私を、『勇者御一行』に入れて下さい!!」

震えた声で??堂々となんて、言えなかつたけれど。私の夢を、この人に預けてみたい。聞いてもらいたい。私の声を??っ。

「良かったあ??。」

「??えっ?」

フウつと深くため息をついたトレーナーさんは、安堵した声でそう言った。その顔は柔らかい笑みで、思わず目を逸らしてしまった。

あ、あれ???どうして私、目を合わせられないんだろう??。

「君がそう言ってくれて嬉しい——。」

「ロブroyさんおめでとうツ!!」

「うおあツ!ラ、ライス!?何で窓から顔だしてんの!」

「あ、あのね!ロブroyさんが今日、ここに来るって聞いて??だ、だから頑張つて欲しいなつて思つてたの!」

窓の向こうでライスさんが喜んでいた。スイープさんと一緒に、ライスさんには沢山相談に乗ってもらつたし??私にとつては、その?お、お姉さん??みたいな人で。うう、なんだかさつきから色々と恥ずかしい??。

そんな私の隣に座つたのは、最初にトレーナーさんの事を教えてくれたカレンさんだった。

「ロブroyさん、言つたとおりでしょ?♪」

「カレンさん?はいっ??!トレーナーさん??あの、こ、これからよろしくお願いします!」

新しい自分。新しい居場所。自分で決めたこのチームで、私は夢を叶えたい。トレーナーさんは、一瞬驚いた様に固まっていたけれど——  
——やっぱり嬉しそうに笑いながら、私の手を取つて言った。



「ゼンノロボロイ。」

「は、はい??。」

「英雄」の力になれるなら光栄だ。俺が、君の英雄譚を一生語り継ごう——約束するよ。」

胸の辺りが熱くなる。

やっぱり私は??ほんの少しだけ、おかしくなってしまったのかもしれません??。

今でも、ふと自分の交友関係を思い出す事がある。

やはり1番印象深いのは高校時代。当時気の合う連中とバカをやっていた日々だったが、そんなバカ達に崇拜されていた1人の神が居たわけだ。俺の旧友にして未だに連絡を取り合って飯を食いに行く仲なその男。丸眼鏡に小柄な体躯、そして元図書委員という典型的な草食系男子。

名を——『ドス<sup>D</sup>ケベむ<sup>M</sup>つつり丸<sup>M</sup>』いや待て、なんか前にも思った事あるかもしれん。

??まあ、良いだろう。脳細胞の1片までピンク色になっている彼は、昔一緒にゲーセンのエアホッケーで遊んでいた時、ふと言った事がある。

『エアホッケーってさ??ピンク色に塗ったら乳首だよね。』

うるせえよ。何言ってるんだ。

だがその時の俺はと言えば、暫し考えた後で、『確かに??』と納得してしまった。酷い頭だし、なんなら点数も取られた。凹む。

彼の方とは言えば、元々少ない体力のせいで虫の息だったのだが、  
続けてこうも言った。

『僕達は乳首で遊んでいる。愛撫??つまり愛を取り合っているんだ。』

病気だよお前?そもそも乳首じゃねえつて。墓まで持って行って  
やるから自分の娘に話すなよ?

しかし案の定俺は、高校生にしてそんな哲学的思想を持っていたあの男に戦慄し、尊敬した。そしてそれは他の友人達も同じであったから、あの男は俺達の崇拜対象になったのである。バカ共が。そして俺以外皆結婚してんだ??幸せに暮らせよ。

因みにエアホッケーは『乳首攻め』と言う名前に認定されたのである。

さて、それは良いんだ。別にあの妻子持ちの話をどうこう鮮明に思  
い出したいワケでは無いからな。問題は別にある。

俺に用事がある生徒が居るからと相棒にトレーナー室へと呼び出され、1人のウマ娘がおどけた様子でソファアに座っていたのだ。

名を——”ゼンノロボロイ”。助けてデジたん89の暴力ががが??。

もうかれこれ5分位話題に触れず悶々としている。彼女から出た言葉と言えば、『あっ、大丈夫です!』と『気にしないで下さい!』の2つだけ。気にしちゃうよ?俺そんな事言われたらもれなく気にしちゃうタイプの男だよ?

ソファアの上で気恥しそうにずっとモジモジしているのも可愛  
いと言えば可愛いし、何なら普段よりも余計小さく見えて  
デツツツツツツカッ!!!収まってない!RobRoy。——がまる  
で収まってねえよ!寧ろ腕に圧迫されて余計に強調されちゃってる  
よ!!リラックス、リラックス!

分かるかなロボロイ。もう5分も君の顔だけ見てるんだよこっちは。だって女の子はそういう視線にすぐ気付くんではしょ?

あんまり大きな声で言えないけど、今日来た要件っていうのもこの

間必死に目を逸らしてた事言及されに来たんじゃないかってビクビクしてるの。ポニーちゃんもちよつと怖がってるの。お前はそのまま黙ってる。スコットランドでシバくぞ。

しかしこのままというワケにもいかない。俺は勇者御一行のトレーナーであり、ウマ娘を推すオタクを推す雄。となれば俺も可愛いウマ娘を助けるのは必然。任せろ。

「そうだ、折角来てくれたんだからお茶でも——。」

「おつ、お気になさらずッ!!」

「えっ、あ、そう?そう?。」

ふふっ??食い気味の全力否定。凹む。

おかしい。この間は満更でもなさそうにしていたのに。これ友情メーター減ってね?やっぱり??言及、されるんじゃないか。俺の友人達を待て、ここは何気ない話題で様子を見ようじゃないか。俺の友人達を思い出せ。アイツら揃いも揃って10回ぐらい友情メーターがリセットされるクソ仕様だった。たかが1回、俺にとっては無問題。モーマンタイ

「最近はどうだい?調子。」

「??あまり、良くは無いです??. 有《font:ul40》馬《/font》記念でも、クリスエスさんには全然届きませんでしたから?。」  
「ありやしようがないって。まさか2着に9バ身付けるとは誰も思わないよ。デジタルだって追いつけなかったからな。」

まあその本人はツヤツヤしながら戻ってきたけど。長距離に関しては勝率7割程だから、ぶつちぎられても2着なら偉いと撫で転がしたのも良く覚えてるぞ俺は。ふふっ??ロブロイが困ってしまっている。

いかんいかん、ちよつと待って。今のは選択肢間違えたからやり直しさせて。

そりゃあ自分の話聞いてきた人間が急に担当の話題出したら、”

えっ？そこまで聞いてないんですけど？”からの愛想笑い＋内心なんなんコイツ判定待ったナシ、俺の友人達は全員合コンで通って来た道らしい。

「クラシックレースもダメダメで？！いまいちパツとしないっていう意見も聞こえましたし？！自信、無くて？！」

「ふむ？？成程？？」

アーツ！RobRoy。——じゃなくてロブロイがメンタルよわよわな時のライスみたいになってるう！！待て待て待て、これが始まると俺に止める術は無いぞ！！『ライス、何やってもダメな子だから？ふふっ？笑って？』と己を極限まで下げ続ける雑炊モードは、何でも肯定してくれる絶対無敵のお姉さま（ライス談）な後輩ちゃんでも無い限り童貞には対処出来ーんツ！

デ、デジタルの手帳？？そうだアイツの情報なら何かあるかもしれない！突破口が必ずB89!?!デッツツツツツツツカ!!!

あわわ？？つ、強い？？ツ！全てにおいて、カワイイカレンチャンとは別ベクトルの強さ！是非ともウチのチームには欲しいがカレンとタッグを組ませたら間違い無くボスクラスの逸材ツ！寧ろ2人目のボスツ！ビックリする大きさ、凄く凄いです” !!BOSSツ!! 1400ツ!!

凄いな本格化？？これなら89の勢いでまだ先を目指せる。90の中山でも91を<sup>悔い</sup>残さず走り切れるな！ヨシっ！

「あつ、あのっ!!」

「んっーど、どうした？」

ビックリした！ビックリしたッ!!えっ、えっ、何!?キミそんな大声出せんの!?それ法廷で『異議あり!』って言う時の音量だと思っただけど異議あった!?

「今、本格化って??聞こえて?デ、デビューしても本格化が来ない事って、あるんでしょうか!」

全部言ってたーッ!!いつもの『口滑り◎』発動してたーッ!!

えっ、逆に聞きたいんだけどまだ本格化来てないの? (戦慄)

じゃあ何が来てるの? 高度成長期??

しかしRobRoy。——改めロボロイの顔は真剣。ならばこちらも正しく向き合ねば無作法と言うもの??いや真剣っつーか眼力凄いな。あつ、あつ、怖い怖いッ!!鋭い!よく見たら眼力が思ってた以上に鋭いこの子ッ!前々から思ってたけど『ドスケベむっつり丸』と顔似てんだよ!髪整えてそのおっきな耳隠したら最早本人なの!違う所と言えば、アイツの場合眼光が鋭くなるのは図書室でエロ本を吟味している時なのだが。仕事しろ。

はあ??っ、はあ??っ!何だ??ゆ、揺さぶりを掛けられているのか、俺は。さっきの『本格化』発言の意図を問われている??どうやらこのゼンノロボロイというウマ娘相手に早とちりは厳禁なようだ。流石はボスクラス、カレンと同じく間違い無く頭が切れるとみた!ここは冷静に言葉を選びつつ、レース中のデジタルのように相手の出方を伺うべきだろう??そもそも相棒どこ行ったんだよッ!助けてデジたん!!

「??ある。ただ正確には来ないんじゃないかな、まだ来てないんじゃないかな。」

「まだ???」

「言つたろう?遅咲きの子も学園には居るのさ。成績不振の原因が、自分の努力が足りないからと間違った解釈と努力で身体を壊してしまふ子も居る。中々デリケートな部分でね??ロボロイはこっちだよ。多分。」

自分で言うっておきながら、それで本格化来てないは無理だろ。あつ、でもロボロイの実力が足りないと言いたいワケでは無いぞ。

「??もしそうだとしたら?結果を残したりするのは難しいですか?周りの子達に遅れてしまったりしませんか?」

「もしかしたらな。けれどそういう子達の執念こそ凄まじいものだし、俺はそれでも走り続けている子を知っているからね。君も覚えがある筈だ。年間グランダムスラムを達成し、”世紀末霸王”と呼ばれたウマ娘の1番近くで走り続ける強い子を。」

「あつ??ドトウ、さん。」

そう、ドジっ子ドトウちゃんことメイショウドトウ!何だか彼女の背中をデジタルと押して競い合ったのも懐かしい??ふっ、久しぶりに手帳でも見返してB99!?!デッツツツツツツツカ!!!ええいダスカと言いマーベラスと言い、一体どうなってんだ中等部ツ!!ポーノはよし。

「ドトウさんは??凄いですね。」

「ああ、凄い。けどロボロイだつて負けてないさ。」

「えっ?」

だつてその身長でそれは唯一抜きん出てるでしょ。善のロボロイは無理でしょ。

あつ!?!つか俺今ストレートにセクハラ発言しちゃった!!ごごごごめんRobRoy。——じゃないロボロイ、今のは眼力凄ツ!!怒ってる!絶対バレてるし怒ってる!!

??いや。ここまで来てしまったのなら腹を括ろう。彼女にフォーローを入れつつやんわりと遠回しに本題を振って、甘んじてお叱りを受けようじゃないか??サヨナラ『勇者御一行』。トレーナーさんは明日スコットランド行きの際に乗ります。

「前に会った時もそうだ。君は自分に自信が無いと言っているけれど、まだ夢を見ているんだろう?そして??どうしても言いたい事があるから、今日ここに来た。教えて欲しい、”英雄”ゼンノロボロイ—

——君は何が見たい？」

「私は??。」

一層ロボロイの眼力が凄いいことになった。あかん、もう泣きそう。

「私は、私の夢を見たいです。私に出来る事を全部やって??それでもまだ、足りないかもしれないですけど??でもっ、やっぱり”英雄”になりたいから!だっ、だから、あの??私を、『勇者御一行』に入れて下さい!!」

言えたじゃねえか??じゃあ俺はスコットランド行き——えっ、今なんて?今なんて??

俺の聞き間違いじゃないよな?ウチに入りたいてって言ったよな!!おっしやーいッ!やった!やった!!ネゴシエーション成立じゃーいッ!見たか相棒!俺はやったぞ相棒!!お前今日に限ってどこ行っただよマジで!!

そして怒られるワケでは無かったのか??そうか?それはもう??。

「良かったあ??。」

「??えっ?」

あっ、また言っちゃった??もう良いよ、大丈夫だよ。何も怖くない。この子は俺の味方だと確信したわ。ふふふっ、meとyouはお友達。Rob Roy。——の脅威はあれど、恐れる事などあるものか。こつちも安堵の笑みを浮かべて君を迎え入れ??なあんお隣で教会の扉空いてるんですかねえ???

おい、相棒。お前その触角みたいなツースイドアップ見えてんだよ。可愛いな。三つ編みにしてやろうか。マヤちゃん、顔丸出しよ。可愛いな。隠れる気ゼロなん?そして??カレン?カレンチャン?なあに?その拍手。可愛いな。携帯持ってるところは全く可愛さも安心さも無いけどな?お前さんだけは前科持ちだからな??

まっ、まあ良いだろう??ふふっ、やったぜ。

「君がそう言ってくれて嬉しい——。」

「ロブロイさんおめでとうツ!!」

「うおあッ!ラ、ライス!?何で窓から顔だしてんの!？」

「あ、あのね!ロブロイさんが今日、ここに来るって聞いて??だ、だから頑張っただけなの!」

にしても窓から急に出てくるんじゃないよ!そういうところがボケか素なのか分からんと言っておるのに!後輩ちゃんが面倒見るようになってから度々メンタルつぶつぶよライスになるのがとても怖い!『えっ?ライスが勝ったんだからライスの方が強いですよ。』とか真顔で言っただけで怖いッ!実際何回か言っただけ!!

ええ??皆に見守られてたの?全員1から10まで知ってるの?じゃあヤベえよ。少なくとも俺の挙動を全部知ってる奴が1人いるんだから。冗談にならないボスが居るんだからッ。

「ロブロイさん、言っただけでしょ?♪」

「カレンさん?は、はいっ??!」

ほらなあツ!?

しかも言っただけで事は、前もって俺の挙動ロブロイに教えられてんじやん!とうとうお兄ちゃんの思考全部読まれ始めてんだよチクショーツ!!折角お友達になれると思っただのに全部読まれた上で営業対応されてたの!もうこの段階で『勇者御一行』ってか『カワイイカレンちゃん仲間達』になりつつある??乗っ取られる??ッ!

「トレーナーさん??あの、こ、これからよろしくお願いします!」

しかしポニーちゃんはバカ正直。Rob Roy. ——じやなくてロブロイが仲間になるのはとても嬉しく思うのだ。



こちらこそ——そう言おうとした時、変なのが目に入った。真顔のままカンペを持って佇む勇者と、これまた真顔でカンペを指差す天才児。

『ここでトドメのイチコロ決めゼリフですぞ〜!』

『ロボロイちゃんもおとしちゃえ!♡』

恋愛バラエティじゃねえんだぞお前ら。こっちはいつでもドキュメンタリーでやってんだよ。無茶ぶりにも程があるだろ。そしてそのテンションのカンペを真顔で出すんじゃない。絵面がシユール過ぎるわ。

ところで、”も”ってなに?言っておくがデジタルは俺がおとされた側だから違うぞ。他のメンバーは??いつもダメトレーナーの面倒を見て下さって感謝しております??ヒヒン??。

それはそれとして。珍しく大人しいなどは思ってたけど、何してんのマヤちゃん?そっち側?もしかしてそっち側だった?このチームボケの比率高過ぎない?ボケ5 : センシティブ1 : ツツコミ1だよ。

ええ??浮かばねえって?こちとらいつぞやのプロポーズだって帰ってから羞恥心に殺されかけたのにここでもやれと申すか?そんなにトレーナーちゃんを辱めたいのかこのロリ共は??クソ、可愛いじゃねえか??やってやらあッ!!

「ゼンノロボロイ。」

「は、はい??。」

”英雄”の力になれるなら光栄だ。俺が、君の英雄譚を一生語り継ごう——約束するよ。」

そう言っつてロボロイの手を両手で??あっ、ちっちゃい?ええ??可愛い??そしてクソほど恥ずかしいんだがあああのロリ共どう成敗してくれるか。

ロブロイもロブロイで何かもちよもちよしてるし、カレンはずつとにこやかに微笑んでるし??ヒエツ。おい、真顔組。これで満足かよ。俺はやってやったぞ。だからニコニコ笑ってないで結果を教えてください。

『お触りしたから60点。』

2度とやるかチクショーツ!!

話はまとまった。新しく仲間になったロブロイとウチの愉快な仲間達が部屋を後にして僅か数分??先程までライスが居た窓の外に、とても大きな帽子が見えた。ともすれば、それは魔女の帽子にも見える。ふふつ、そんなの1人しか居ないだろう。見てろよ、俺は今絶好調だからな。この場で2人まとめて勧誘を成し遂げてやんよ。どれ、そろりそろりと??。

「珍しいお客さん。今日はもう営業時間外だが、話はいつでも聞くぞ。」

僅かに肩がピクリと動いたそのウマ娘——スイープトウショウは、こちらを向くや否や口を開いた。

「ロブロイ、入ったの?」

「ああ。勇気、出してくれたよ。」

「ふーん??そつ。」

素っ気ない返事ではあるが、つばの大きな帽子の下でスイーピーはどこか嬉しそうに笑っていた。お可愛いが過ぎる。見れば見るほど可愛い。だがその中にも確かに美人寄りの要素を感じる為、最早最強

では無いか。

よ、ようし??勧誘頑張れ、俺!大丈夫やれる!『俺と契約してお前も魔法少女にならないか?』と言えば良い話なのだ!えいつ、えいつ、ヌツ!!

「ところで以前君に出した勧誘の返事を聞かせてもらっていないんだが??どうだろうか。何をどうしたいかは君に任せるし、意見も尊重する。スリーピーの夢はウチのチーム総出で応援するよ。」

「嫌。」

「そうか????とところで以前君に出した勧誘の返事——。」  
「嫌。」

聞き間違いじゃなかったらしい。死ぬしかない。

「アタシの事はアタシが決めるの!だから嫌!べーっだ!」

そう言ったスリープトウショウは歯を見せてニカツと笑いながら、スタコラサツサと掛けて行った。ふふつ??振られた——と、一般童貞の男性諸君なら思うだろう。かく言う俺も心という心が折れて捻ねじれて踏まれてぴえんぴえんなのだが??。

だが良くも考えてみたまえよ。嫌だ、やらない、絶対言うこと聞かないと否定の意志を向けた相手に、本当にあんな反応をするだろうか。あんな風に茶目っ気に満ちた素敵な笑顔を見せてくれるだろうか。否。否否否。

答えはただ1つ——。

「絶対俺の事好きじゃん??守護ろ??。」

かくして、今日から俺の魔法少女仲良し大作戦が始まったのであ



## エキシビジョン : 願い焦がれ、走れ

アグネスデジタルは優しいウマ娘だ。

自分の好きな事には全力で、好きな物には出来る限りの配慮と推し活をするウマ娘。他人の心を感じ取れる力が敏感と言うか、自分の事のように捉える節がある。

阪神JFで勝った時、アイツは俺に言った。『勝ち続けると約束する』、俺の親父に届く様に『走り続ける』??それから、『ゴメンなさい』。要するにアイツは、その為だけに走ってたんだ。俺が親父に認めてもらいたかった事を知ってたから。

『自分がもつと早く契約を結んでいけば。』

『もつと早くに決断していれば。』

そんな罪悪感から出た謝罪の言葉。だからアイツは走っている。勝ち続けている。なんて事ない顔して、ひた隠して、3年以上もそんなもの背負いながら1人で走っていた。俺が気付いてやれず、『デジタルなら大丈夫』と思っていたばかりに。アイツに??『もうとつくに救われてる』とちゃんと話さなかったばかりに。

だから俺は、アグネスデジタルのトレーナーとしてやるべき事を??背負わせてしまった気持ちを吐き出させなければならぬ。そして今度こそ、ちゃんと俺の言葉を届けなくてはならない。アイツの望みは、自分の好きなものを1番近くで見たいという、ただそれだけの筈だったんだから。

それから――。

「??昨日の話、本当なんですね。」

「うん。初耳だったでしょ?あのハゲ、何にも言わないで出てったんだから参った参った。」

2日目の午後。エキシビジョンレースの会場??PC作業の傍らあちこちへ業務連絡を出していたヨシエさんの手が空くタイミングを見計らい、そんな話をした。肩を竦め、”やれやれ”とでも言いたげ

に溜息をついた彼女は、改めてこちらへ向き直った。

「正直??何が何だかさッパリですよ。デジタルの事もあの人の事も問題だらけ。自分が何も知らずにのうのうとやってきたって事だけは分かります。貴女は??全部知ってたんですか?」

「知ってました。トレーナーさんの事だって最初から全部知ってます。知ってて黙ってました。言いたい事あると思うので、何でもどうぞ?」

言いたい事??それなら山ほどある。山ほどあるが――。

「そうですか??なら――全部任せていたみたいで、すみません??。」

「??はい?いやいやいや、もつと有るでしょ。『何で黙ってた』とか、『また回りくどいやり方で』とか。」

「まあ??でもそれ以上に申し訳ないと言いますか。実際あの人居なくなつた時、俺はへこんでました。担当だつて本気で探すだけの気力も無かつたですし、今は今でいっばいっばい。だからその??多分ですけど。俺が”大丈夫”って分かるまで、言わないでいてくれたんですよね?潰れないようにと言うか、キャパオーバーにならないように。」

あつ、いかん。何かキョトンとしてる。よくよく考えてみれば、”えつ、俺の事守つてくれたんですね嬉しいな!”と自惚れ精神M A Xで発言している様なもの。何か急にクツソ恥ずかしくなってきた。待つて待つて、発言やり直したい。えつ、恥ずツ!恥ずツ!!

「??変わり者つて言われませんか?」

「実は良く言われます。イカつい顔した娘に。」

「はあ??身構えて損した。」

「ただその上で言わせてもらおうなら??今回の件、まだ手伝えません。俺はやる事を先にやります。ようやく分かったので――アグネス

デジタルの担当として、アイツを最優先にしたい。俺のエゴで、昨日そう決めました??だから——。」

こちらが言い切る前に、彼女は赤ペンを取り出して俺の手の甲に大きな花丸を書き出した。

「花丸あげちゃいます。トレーナーとして100点満点。貴方もデジタルちゃんも、もつとエゴで動いて良いんですよ。優しさは薬にもなるけれど、それ以上に劇薬なんですから。」

「ど、どうも。」

「ああそうだ。ハゲから伝言ですけどね??あのチキン野郎、やっぱりマルゼンちゃんのトレーナーにはなれないみたいです。どこまで言っても自分はシンザンのトレーナーだからと。」

「??そうですか。」

「代わりに——お話は出来たみたいです。誰かさんのお陰でシービーちゃんとマルゼンちゃんの2人と話をして、皆それぞれの道を行こうとしている。誰も彼もが目的地を決めてふっ切れ状態。そしてそんな状態の片割れを預かっちゃいましたね。」

満足気に笑った彼女がこちらを向く。それは今までの誰よりも純新無垢で、背筋がゾツとするものだった。ヤダ待って、ホントに怖い。

「初代『ポラリス』の一番弟子として——私と無敗マルゼンの怪物スキーが『勇者御一行』の御相手をします。甘噛みなんてしません。噛み千切るつもりで行くので、楽しませて下さいね。」

「??上等です。もうアレです?あの??ポコパンですよ???」

「そこはもつと強気に出来ませんか?クソも締まらないんですけど。」  
「ヒヒン??すみません??。」

心做しか、彼女の笑顔が柔らかい気がする。いや怖えけど。怖えけども。脚ガツクガクだけれども。それでも今までの張り詰めた笑顔

とは違う様にも感じた。

「ところで、何で今日はジャージに帽子スタイルなんですか？」

「だってこうしないとたづなちゃんに怒らう”え”ッ!!」

とても人間が出してはいけない声を上げながらヨシエさんが飛んできた。自分でも何言ってるのか分からねーけど飛んできた。ここは観客席??しかも関係者しかない特別席だから、他の人が巻き添えになることは無い。無いからこそ、間違いなく座席にぶち当たる事が目に見えている。

ならばこちらとて紳士的に受け止めねばなるまい??死人が出る前にイツ!!

アドマイヤベガ直伝、『Shall we danceの構  
んあーっ!三十路の身体が3度叩き付けられていくうッ!!

「いったあ??何?何?」

「喧嘩しないって、言いました??おじちゃんもお姉さんも!今日は喧嘩しないって言いました!!」

「あ、あーちゃん???してないしてない!今日は喧嘩してないから!ほら、おじちゃんこのお姉さんに花丸貰ったんだよ!」

「??じゃあ??何であーちゃんは突撃したのでしょうか?」  
「えっ??ゴメン、分かんない。」

ヨシエさんの腰にダイレクトアタックした弾丸ことあーちゃんは、眼に涙を浮かべていた。どうやら俺達が真剣な顔で話してたのを喧嘩と勘違いしてしまったらしい。余程昨日見せた醜態が響いてしまっているようだ??申し訳ない。

そして下腹部辺りにヨシエさんの豊満Styleが乗っかっている為非常に居心地も悪い。い、いかんぞこれはッ!!とてもいかんッ!!落ち着けポニーちゃん——えっ、何でお前今日はそんなに落ち着いてるの?やだ逆に怖い??俺がロリコンみたいじゃん??違うそうじゃ



ない。

「ほ、ほら！2人とも超仲良し！友達！ですよねヨシエさん白目むいてるツ!!!」

「アーツ!!女王が泡吹き出したーツ！大丈夫かこれ!?死んでんじやねえの!？」

「あ、あーちゃんは??大罪を?!」

「してないしてない!この人こう見えて元気だから!ねっ!？」

「b e . . . b o r n . . . . m o t h e r . . . . f u c k e r . . . . . 産まれちまうよクソツタレ。」

「ほら!ちゃんと喋れるから元気、元気!!」

何言ってるかは分からねえけど。多分大丈夫とか元気とかそういう事言ってるんだと思う。

じゃなくてツ!誰か助けて下さい!救護班ツ!レース始まつちやうし死人が出ちやうし救護班ーーツ!

「――」

「えっ――うおっ。」

手を差し伸ばしてくれたのは、手足の生やしたクソデカイ人參だった。胸の辺りにはご丁寧に『ベジタリアン筆頭』の名札もぶら下げている。それももうベジタリアンじゃねえんだわ。ベジタブルなんだわ。違う違う、誰か助けてって思ったけども。人を呼んで欲しかったの俺。お野菜に來られてもどうしようもねえのよ。そしてめつちや声籠ってるから何言ってるのかまるで聞き取れねえ。

人參はあーちゃんに何か言ったようで、申し訳なきそうにあーちゃんはペコリと謝罪していた。ヌツ、こつちを向くな人參。ヒト耳には聞き取れねえって。あと圧が凄い。

「??」。

「ああ??うん。あの、よろしくしても??」  
「」。

大きく頷いた人参さんは、そのまま気絶した女王をプリンセス抱っこし、あーちゃんを腰に巻き付け、この場を後にした。

その背中に『K A I S E R』とクソデカプリントを貼り付けて。

仕事選べよ会長オーーツ!!

『やあ、お一人?精が出るねえ。』

彼女は、突然僕の前に現れた。いつから居たのか分からない。気付かれないようにコソコソしていたのか、僕自身気付かないほど練習にのめり込んでいたのか。

”皇帝シンボルドルフのお騒がせトレーナー”。ニコニコと笑いながら座り込んでいる彼女は、世間でも余りに有名な存在。

『何か??御用ですか。』

『御用改めである。ウチ来なよ、オフサイドトラップちゃん。』

『??お断りします。僕は僕の手で走りを取り戻さないといけない。もう一度レースに勝って、自分を証明しなきゃ——。』

『トレーナーも居ないのにどうすんのさ。我武者羅にやって身体ぶっ壊したい系?君のトレーナー、天皇賞が終わってから定年で辞めちゃったじゃん。勝ちたいんでしょ?ほれほれ、今なら超優良物件な皇帝のトレーナー様が空いてるぞ??』

茶化しているのだろうか。飄々とした——悪く言えば、あまりにも軽い勧誘。どんな自信があればそんな事が言えるんだろう。勝ちたいなら自分と手を組めだなんて、少なくとも初めて会話する相手の口から出るものじゃない。

それに——もう、遅いの。今更不治の病屈腱炎を再発させた僕に何を期待してるのかが分からない。

『すみませんが、やはりお断りさせていただきます。貴女は“皇帝”のトレーナーです。僕では無く、もつと他に探した方が良いでしょう。でも??ありがとうございます。』

これで良い。あとは練習に戻って——。

『今更怪我人に何の用だ』、”軽々しく勧誘するだなんて言うな”、ぐらい言ってみたらどう?優しい言葉で嘘つかれるのが一番悲しいなあ。』

『ツ!なん?。』

『茶化してるわけでもふざけてるわけでも無いんだよね、コレが。”君が良い”。オフサイドトラップちゃん??君の中の、ずっと深いところで燻ってるその火が欲しいんだ。』

『火なんて??ありませんよ、そんなの。』  
『無いならとつくに辞めてる。走る事も。頑張る事も。諦めない事も。だって無駄でしょ?そう思っていないから続けてるんだよね。』

今思えば、何で僕は逃げなかったのだろうか。笑いながらゆっくりこちらを歩いてくる彼女に向き直り、ただ言葉を待っていただけだった。

『心の熾火を私が燃やしてあげる。下らない”ユメ”も”運命”も丸ごと燃え上がらせるような熱い火??舞台も燃料も全部全部私が用意

する。もう一度だけ言うよ、オフサイドトラップ。”ポラリス”に出来ない？君が勝つ為に何でもしてくれるなら——それこそ悪魔にでも魂を売っていいんだったら。私が君だけの”悪魔”になるよ。』

彼女の??円 ヨシエトレーナーの言葉に、嘘偽りは無かった。その眼は、今の僕にとってはゾツとする程の恐ろしさと、同時に何故か優しさを感じた。だからだろうか——その悪魔の誘いに乗ってしまったのは。

『どうもありがとう。じゃ、今日から暫く走るのはダメね。』

『っ??どうして??。』

『1回だって怪我したら、元の走りに戻すのはキツツイんだよ。だから今の君の走りを完成させる。その為には100%怪我を治さなくちゃいけないの。って事で専門家の所へ行こー！あつ、手繋いでいい？正直顔がドタイプ。』

『えっ、あ、いや??。』

そうして半ば無理やり連れてこられたのが、学園内でもワケありウマ娘と噂されていた変わり者——アグネスタキオンの所だった。

彼女は僕の顔を見るなり満足気に笑いながら、”観察対象が増えた”と喜んでいた。被験者扱いされるのはあまりいい気分じゃなかったけれど??自力で怪我から復帰した彼女ならばと思ったのも本当の事だ。

『そんなに怖い顔をしないでおくれよ。何も取って食おうとするワケじゃない。天皇賞の件は私も見ていたからよく知っているよ。優勝おめでとう。』

『??良してくれ。あれは、スズカが——。』

『途中離脱したからだど？勝ちも勝ちだ。最後まで走り切ったのは君だろうか？ならば大衆の声に耳を傾ける必要などあるものか。胸を張りたまえ。』

言葉に詰まる僕を他所に、タキオンは??それから僕をここへと連れてきた張本人は、ずっと笑っていた。

『”夢”はまだ終わってないよ。オフサイドトラップちゃん。』  
『えっ??』

『終わってなんかない。もし本当の意味で終わりを迎えていたとしたら、サイレンススズカは今怪我と戦っていない。自分だけの先頭の景色を必ず取り戻しに来る。』

『自分だけの??景色??。』

『さあ、夢の片割れ——立ち上がる時だよ。私達に”可能性”を見せて欲しいな。』

それから——僕とポラリスのリハビリの日々が始まった。

奇跡のウマ娘が、身体の使い方を細かに教えてくれた。

皆のお助け番長が、夜遅くまで練習に付き合ってくれた。

黄金世代の秘密兵器が、怪我の様子を逐一確認してくれた。

皇帝が、僕に道を指し示してくれた。

長い時間をかけて。『ポラリス』の隠し玉として。

僕には??ヨシエさんが言う、”運命”とか”可能性”は分からない。けれど——。

——オフサイドちゃん。これが君の”悪魔”からの最後の言葉。もう、脚は大丈夫だよ。だから??覚悟を決めて。

そんな日々があったから、僕は今日ここに居る。

”彼女”と同じこの場所で走り続けている。

『さあエキシビジョン第3Rがスタートしました!先頭はやはりサイレンススズカ!今日も快調に大逃げのスタイル!!オフサイドトラッ

プは5バ身ほど後ろで様子を伺います!』

コースは芝2000mの左回り。レース場としての細かな違いはあれど、それは奇しくもあの日の天皇賞と同じだった。

大櫂を越えられなかったサイレンススズカ。人も、ウマ娘も、誰もが夢見たその走りを携えて。より洗練された大逃げを武器に彼女が前に行く。

「??っ??全然、速いな??ッ!」

予めヨシエさんからも聞いていた。恐らく今のスズカは、トウインクル・シリーズで走っていた時の比では無いと。

挫折を知っているから。

怪我の恐怖も、痛みも乗り越えたから。

そして何より、自分だけの景色を取り戻す——そのエゴが、前へと進ませているからだ。

僕は??どうだ?脚の痛みは無い。けれど、恐怖が無いと言えば嘘になる。もし今日、この場で、再発したら。あの痛みがまた襲ってきたら。

背中に悪寒が走る。あれ程皆に手伝って貰った筈なのに、僕の心は本気を出すなと言っている。

レース前だっそうだ。スズカの前に立った時の会場の空気が、脚を震わせた。今更だっ言うのは分かっている。あの目線が責め立てるものじゃなく、どうしたらいいのか分からないだけだっ言う事も伝わっている。

ただ??それでも分かっちゃったんだ。僕に笑いかけてくれたスズカが、僕よりも遠い場所に居る事が。

きっと届かないかもしれない。

彼女の方が速いのかもしれない。

もしここで負けたら。

もし、『ポラリス』の看板に泥を塗ったら??僕は??ッ。

——君は真面目だねえ。誰かの為に、なんて考えなくて良いよ。それが力になる子は間違いなくいるけれど、無理してそう思う必要は無いの。

笑いながら彼女はそう言っていた。

自分を僕だけの”悪魔”だと。軽口ばかり叩いて、やたらと距離が近くて、何考えてるか分からなくて??さっきだって、どうしてか白目むきながら人参衣装のルドルフさんに抱えられてて、何してんだろって思ってたけど。

——オフサイドちゃん。君の心には、もう火が宿ってる。後は燃え上がらせるだけ。炎になるまで風を送り続けるの。風は??君の前に在るからね。

「風??僕の前に在る??風?ッ!」

怖気付くな。退くな。立ち止まるな。

前だ!前だっ!!前だッ!!!前を向き続ける!走り続けるッ!お前はオフサイドトラップ、不撓不屈のウマ娘だろッ!!

風を捉えろ!夢を追いかけ続けろ!先頭を走るあの姿を、絶対に引き離すな!

——覚悟を決めて。スズカちゃんに勝ちたいなら。自分を証明したいなら。残り1000m、そこが君の分岐点。それより仕掛けが遅いと必ず逃げ切られる。早いとペースに飲み込まれるだけ。それさえ理解出来たなら、遠慮しないであの子の世界に踏み込んだりしないよ。

”悪魔”<sup>悪人</sup>の言葉が脚を進ませる。心とは裏腹に、僕の脚が、”まだ走れる”と言っている。なら走るだけだ。走るしかないんだ。

サイレンススズカ??きつと、君の方が僕よりも速いんだろう。だけど——強いのは、僕だ。

今度はどこにも行かせないから。

もう一度走りたい。あの日の続きを——僕達の”夢”を。

僕は、君と夢を駆けるよ。

子供の頃から夢見てきた景色があった。

レースの度に見える景色があった。

先頭に立つと、決まってる見える私だけの世界。私だけの”領域”<sup>居場所</sup>。

どこまでも続く青い空。足元に青々と広がる大地。走って、走って、走り続けて??熱く火照った身体を撫でていく、心地良い風。

誰も居ない、静かな場所。

私は——天皇賞でその景色を失った。怪我による途中離脱??そういう”ユメ”を子供の頃に見ていて、本当にその通りになってしまった。思い出したのは病院で目が覚めた時。スぺちゃん横で泣いていて、トレーナーさんが青ざめた顔の中に安堵を浮かべてくれて??けれど不思議な感じだったのを覚えている。

ああ、私は、まだ走ってもいいんだって。

誰かにそう言われた気がしたから。背中を押された気がしたから。

今日、私の前に立った”彼女”は怯えていた。あの日の勝者である彼女も、怪我を乗り越えて立ち上がったと聞いていたけれど??今にも壊れてしまいそうなほど弱っていて。それなのに——ずっとずっと、心は燃えていた。

だからかしら。

ようやく取り戻せたはずの目の前の景色が??私だけの筈だった大切な物が、その色を変えても輝いて見えるのは。

青空は夕焼けに焼かれた様に赤く燃えていて。



足元に広がっていた芝は稲穂の様に金色の輝きを。

そして風は——後ろから吹く追い風は、私の身体をもつと熱くする熱風へと。

「スズカアあああッ!!!」

『オフサイドが来た！残り1000を切ってオフサイドトラップが上がってくる！サイレンススズカへとその距離を縮めていきます！』

トレーナーさんが言っていた。オフサイドさんは、悲劇の天皇賞覇者と呼ばれ??下手をすれば、心だつて折れているかもしれない。けれどもし——何かが。或いは誰かが起因し、それすら乗り越えて私の前に立ったのなら。

先頭の景色は、私だけのものじゃなくなるかもしれないと。

「??熱い。とても、熱いのに??ふふっ。」

楽しい、だなんて思うのは??後ろから迫る彼女がこのまま勝つてしまつても良いんじゃないかと思うのは、ウマ娘として間違っているのかしら。

ああ、うん。やっぱりそうね——失礼だし、私だつてようやく取り戻した場所だもの。

だから??先頭の景色は、譲らないツ!!

『しかしここでサイレンススズカが再び突き放す！逃げて差す走りは今日も健在か！』

いいえ、まだ。まだ突き放せてなんかいない。彼女はまだ私の世界に居る。不撓不屈の追跡者は、どこまでも追ってきている。そんな走り、トウインクル・シリーズでも見た事ない。

きつとヨシエさんが何かしたんだと思う。スタートしてすぐ、白目をむいたあの人が視界に入って思わず2度見しちゃったけれど??そんな芸当が出来るのは、”皇帝”のトレーナーぐらい。だって普通のトレーナーは、ここまで来るのに沢山の時間と信頼関係が必要だと思うから。

それに何となく分かる。『不治の病』なんて言われている怪我を誰が面倒見たのか。

ねえ??タキオン。見ているのでしょうか?あの日と同じように、どこかで愉快そうに。貴女が何を知りたがっていて私の元にもやって来たのかは分からないわ。ウマ娘の”次のステージ”というのも分からない。

けれど——ありがとうございます。こんな勝負をさせてくれて。

オフサイドさん。まだ、上がありますよね?

一緒に走りましょう。このターフ自由な世界の上で。

だって私達は——この先もずっと、ずっと??走っていいんですから。

「先へ?先へ??限界を超えたその先へッ!私はッ!」

「僕自身の証明の為と??恩返しのために??僕はッ!」

『勝ちたいッ!!』

『オフサイドトラップがついに逃亡者を捉えた!しかし差し返すサイレンススズカ!残り200m、両者壮絶なマッチレースッ!!1歩たりとも譲らないッ!』

ギラつく眼差しが横に並ぶ。

身体を焼き焦がす執念の炎が燃え上がっている。

私の中にも宿ったそれは、彼女の”領域”。決して消えない不屈の炎。

誰にも何も言わせはしない。今私達はここに居る。ここで走り続

けている。

あの日——有り得たかもしれない、私達の”可能性”。

こんなのにゃ足りない。引き離せない。まだまだ満足出来ない。

ふふっ、ねえ??オフサイドトラップ——もつと燃え上がらせてあげる。

だから追いかけてきて。最後の最後の、最後まで。

「やあああああああああッ!!」

「ッ、だあああああああッ!!」

『先頭サイレンススズカ!先頭サイレンススズカ!しかしその差は僅か、ゴールは目前だ!外から届くかオフサイドが!オフサイドが!オフサイドが!僅かに差し切ってゴー—ールッ!!先頭オフサイドトラップ!!異次元の逃亡者を、不撓不屈のウマ娘がついに捉えたア—ッ!ゲエツホゲツホ、ウツ!!』

『ツヨシ、落ち着きなつて??。』

ゴール板の向こうで、彼女は震えていた。必死に呼吸を整わせ、立つ気力も無いのか、上を向きながら座り込んでいた。

ゴールしたというのに、余りにも静かな会場??音の全てを置き去りにしてしまったんじゃないかと思うぐらいの静寂。

けれど——うん。分かる。分かるわ。だって、まだ熱が残っているもの。この会場全てに広がった熱が。

「スズ、カ??。」

「??はい。」

「僕は?勝った、のかな???」

「ふふっ、そうですね。それは——聞いてみたらどうでしょうか。」

「えっ——。」

『おおおおおおおッ!!!』

「なんだあの2人、すっげーな！」

「スズカー！カッコよかったよー！」

「オフサイドもおめでとうー！最っ高にイカしてたぞーッ!!」

溜まりに溜まったその熱が、とうとう抑えきれずに溢れ出した。

”沈黙”は今———歓喜と祝福に変わる。

1人の勝者を称える、”栄”えある”光”景へと。

「これ??。」

「次は勝ちます。必ず、私の方が速かったと言わせてみせますから——

——おめでとうございます。」

「スズカ??ああ、そうか??ありがとう。僕は??。」

ふらつく足取りで必死に立ち上がったこの人に肩を貸すと、彼女は自分の顔を抑えていた。

指の間から、大粒の涙が零れては落ちていく。

「長かった、なあ??っ。」

「??手を振りませんか?きつと私達、あんまり話すのが得意では無いと思うので??。」

「そうだね??うん、そうだ。君の言う通りだよ。でもどうしよう??何を伝えたらいいか分からないよ。伝えたい事があり過ぎてさ??。」

「大丈夫です。きつと伝わっていますから。だから、私達が言うのは一つだけ——。」

私の表情で何かを悟ってくれたのか、オフサイドさんは笑った。泣きながら、とても眩しい笑顔で笑っていた。

2人で手を挙げれば、観客席の声が一層大きくなる。

私達はこれからも走り続ける。

だって、それが許されたんだから。

何度だって走り続ける。

どうかこの”願い”が、永遠に終わりませんように。

『ただいま——』。

エキシビジョン　：　待ちわびた鼓動

『ここで先頭入れ替わってシンボリルドルフ!!しかし1バ身後方にマンハッタンカフェ、序盤からハイペースだったとは思えない速度で前を狙っている!超ロングスパートがいよいよ皇帝を追い詰めるか!』

「異常ですよ、皇帝は。もうカフェには止められません。」

モルが隣でそんな事を言いながら笑っている。えっ、怖い。

スズカとオフサイドのレースが終わり、長距離の部が始まった。カフェの相手としてヨシエさんが用意した特別な相手と言うのは、先程まで人參の着ぐるみで会場内を勇往邁進していたシンボリルドルフ。驚きはしたが、ヨシエさんの事だから考えても見れば妥当というか当たり前というか??何より人參の格好をしてたインパクトの方が強かった。

出だしから早々に飛ばしていたカフェは、1500m付近から徐々に速度を上げていった。元々”無限のスタミナ”なんて言われるほど疲れ知らずな彼女。3000m走ってちよつと疲れてる程度しか疲労が無いのはそれこそ異常なワケで、ウチのマヤちゃんがやられた時も実は同じパターンで捕まっている。

仕掛けを早めればジリ貧で潰され、カフェに合わせればトップスピードの差で逃げ切られる。どの脚質でも満遍なくこなせるマヤちゃんが、どの脚質の作戦を練っても偶にしか勝てない。そもそもカフェは、レースに出ている相手など誰1人見ていない。

”お友だち”が自分の前に居ると言う事実だけで走っているのだ。要するに異質。掴み所がまるで無い影のようなウマ娘。そんな影を、トレセン学園の皇帝は相手取っている——”鎧袖一触”の一言で。

『シンボリルドルフが今先頭でゴール!マンハッタンカフェ相手に3バ身差をつけての勝利!これで”T☆K☆G”と”ベジタリアン”

が共に2勝2敗となりました!』

”カフェの元に行きます”とだけ言い残して、モルはこの場を後にした。

シンボリドルドルフ??本気では無かったとは言え、マルゼンスキーと互角の接戦を繰り広げたその実力は確かなものだ。もし彼女と走った所で相棒は厳しいかもしれん。いつかそういう日が来たらの話だが、『ポラリス』の面々とも戦えるようにしておきたいのが本心だ。

その為にはやはり――。

「デジタルだな。」

「はい?。」

「ヌンツ!?!お、お前いつからそこに??!?!」

「レース中ずっと居ましたけど??!。」

流石普段から見えないフィルター越しにウマ娘達を舐め回すように見ているHENTAI。まるで気配が察知出来なかった??!いや違うな。普段腕定位置の中に収まってるからだわ。ちよつと腕定位置の中来いお前。

「どう思う?。ドルドルフの走り。」

「??ヨシエさんは、きっと会長さんを走らせたくないと思いますよ。レース中、会長さんは仕掛け所を2回見送っていました。最後のスパートも、ここだって思ったタイミングからワンテンポ遅かったんです。思った所で身体がついて行っていません。きつとピークピークが来るかと??だから、暫くお休みするんじゃないでしょうか。次に走るとしたら――。」

「??引退レース、か?。」

デジタルは俯いた。今までトレセン学園の象徴として上に立ち続けた皇帝の限界。それでも尚カフェ相手に勝利した意地。モルが言っていた異常という言葉の意味も、何となく分かる気がする。

となれば??マルゼンスキーも、恐らくは。

「んっ??電話だ。もしもーし、後輩ちゃん。」

『ども。先輩、そつちにデジタルさん居ませんか?ウチのクロにちよつと会って欲しいんですけど。』

「おう、良いぞ。けど急にどした?」

『深い意味は無いです。ただまあ??憧れた相手』から声掛けられたら、アイツぶつちぎると思うんで。』

「はいよー。デジタル、後輩ちゃんが控え室に来てくれってさ。お前イチオシの後輩もしつかり推してきな。」

「えっ!?良いんですか!?!ひよおくく!!クロフネちゃあああん、今参りますぞくく!!」

相も変わらずのウマ娘オタク、耳をびよこつかせやがって可愛いなコイツ。だが――。

「??なあ。俺に隠してることあるだろ。」

「??えっ?」

喜びながら向かおうとしていたデジタルは身体を強ばらせ、恐る恐るこちらを振り向いた。

心のどこかで嘘だと思いたかったけど??真っ黒じゃねえか。

「心当たりは??ある。お前がレースの後に上を向いてた事も、関係あるんだろ。多分、さ??俺が今までお前に背負わせてたんだよな。」

「っ??あの、ち、違っ??アタシは??。」

「安心しろって。今は何も聞かないし、何も言わない。内緒にしてくれているのは、お前なりに考えてくれたんだろ?だから??お前が言いたくなった時でいい。その時は俺に教えてくれ。」

「トレーナーさん??はいっ。」



そう言つて、デジタルは控え室へと向かった。

心が痛い。言いたくなつた時でいいなど、よくもまあそんなでまかせが口から飛び出すものだ。

何はともあれ??ダートのレースは勿論ダートコースで行われる為、ここからは少しばかり移動しなくてはならない。向こうは向こうで観客が満員の為、現在芝のコースに居る観客達はライブ中継で観戦することになる。関係者はまた別の話なので、取り敢えずはそこに向かいたいのだが??。

後ろからの圧が凄い。3人組の圧が??ヒエツ、変なのがいっぱい居る??。

「Y O ! Y O ! Y O ! そのダンディーそれでいいのかY O !」

「ちえけ。ちえけ。ぼん。」

ダボダボのパーカーにつばがフラットなキャップ。そして顔のバランスに不釣り合いなほどのクソデカサングラスを装備したファル子ことスマートファルコン。どこに売ってんだそれ。

ブルボンはサングラスこそ付けていないが、何があつたかは想像出来る断線してボロボロのヘッドホンを首から下げていた。HIPH OP に対する偏見そのままコーデしましたと言わんばかりの全身装備である。しかもこれが午前のライブ衣装という迷走っぷり。

そしてそんな2人の横に無言で佇む、『quiet』の名札をぶら下げた緑のお野菜。そこは『silence』じゃねえのかよ。

「3人はどういう集まりなんだっけ?」

「今をときめくウマドルユニット、『逃げ切りシスターズ』だY O !」  
「ちえけ。」

「??ツッコまんよ」DJ・AKAONI”。それでいいのかつてのは、デジタルへの先延ばしの事か?」

「そうなの!あのねトレーナーさん??きつとトレーナーさんが1番分かつてると思うんだけど、デジタルちゃんって色んな事に気を使つて

くれるでしょ?」

「まあ。それがアイツらしさでもあるし。」

「今ね、デジタルちゃんは凄く苦しんでる。ずっと1人で戦ってきたの。先延ばしちゃうと、これからも1人で戦わなくちゃいけないんだよ!自分でもどうしたらいいのか分からなくなった気持ちと??そんなの、凄く辛いと思うな??。」

本当に良く見えていると思うが、ファル子はそういうウマ娘。だからこそ、彼女のファンでありライバルでもあるデジタルの事を気にかけてくれている。それはとても嬉しい事だし、勿論俺もそう思っている。

「ありがとうな、ファル子。でも大丈夫。先延ばしなんて元よりしてやらん。本心を聞くのも道を正すのも、汚れ役を買うのも??全部トレーナーの仕事。俺の仕事だ。他の誰かにやらせるつもりは無いし、自分のやる事をやるよ。」

相棒の事は知っている。きっと簡単には話してくれないだろう。

だからこそ、俺はアイツにとって1番最悪なタイミングで聞き出す。もつと良いやり方はあるかも知れない。後輩ちゃんやヨシエさんなら、他のやり方で出来るかもしれない。けれど俺にはこれ以外思いつかなかった。俺がデジタルだったら、きつとこれで話が出来ると信じているからだ。逃げ道なんか最初から用意してやらねえ。バカなやり方でバカな男の声をぶつけてやるつもりだ。

「うん??信じてるね、トレーナーさん。」

「ああ。それで??さつきからユラユラどうした、ミホノちえげぼん。」

「シエケナブルボンです。」

「なんて?」

「ブルボンちゃんが1番ライブを盛り上げてくれたの!ヘリオスちゃんとかトレーナーさんに色々聞いたんだって!1発かましちやいな



沈黙の silence のズツキーニの肩に、ゆっくり近付いてきた玉ねぎがそつと手を乗せた。

何してんだよオフサイド。

「あつー見て見てトレーナーさん！クロフネちゃん出て来たよ！」

お野菜に捕まってしまったもののレースには間に合った。

ファル子の声で特別ステージに目をやると、クロフネはマイルカットプぶりに見る勝負服を着ていた。芦毛の髪は後輩ちゃんと同じ様に後ろで束ね、耳飾りも後輩ちゃんのピアスと同じデザイン。黄色と白ベースの上下に黒と青のアクセントが散りばめられた彼女だけの勝負服——顔イカツツ！

俺やデジタルの前であんなにびーびー泣いていたウマ娘と同じ人物には到底思えない程イカツツい。寧ろただの後輩ちゃん。相棒??お前何言ったの？お前の勇者バフってウチのチーム以外にも影響する感じ？パツシブスキル？

そしてクロフネの前に立つのは、地方から飛び出して重賞を悉く荒らしてきたウマ娘。レースの歴史や常識すらも自身の走りを変えてしまった、まさに古兵——『シンデレラ灰被り』。

『いよいよエキシビジョンレースも最後のレースです！泣いても笑っても決着のダート部門、クロフネVSオグリキャップだぁー！！』

会場のボルテージなど言うまでもなく、ドえらいこっちゃだ。オグリキャップが有《font:ul40》馬《font》記念で見せたその走りは、『神はいる』とまで言われたのだから。

皆の期待に応える事——それを走る力に変えるオグリキャップに、クロフネがどう走るのかは分からない。実際クロフネがダートのG

1に出たという話も聞かないし、俺も彼女の走りはまだしつかり見れていないんだ。アオハル杯だつて知らなかったし?。」

「ダート限界が盛り上がってくれて嬉しいな♪みんなみくんな強くて凄いい子ばかりだもん。」

「重賞9連勝に年内無敗。中距離ならデジタルからも逃げ切る”赤鬼”がそれ言うとおっかねえな。」

「今はファル子だよ！真っ直ぐ想いをぶつけてくれる皆と走れるのはとっても楽しいし嬉しいから。」

「そうか??とところでトレーナーには真っ直ぐ想いをぶつけられました?。」

「うるしゃ☆い☆」

いたつ、痛い??ポカポカ叩いてくるんじゃないよ。陥没する。それはそうといつまでも立って見ているワケにはいかない。

早いとこ関係者席に——来たは良いが。カレンチャン貯金箱3つ並んでるけどここじゃねえだろうな。デジタルとヨシエさんと俺の分で丁度3つ必要だけど、ここじゃねえよな??ツ!?俺嫌だぞ!!ここ座るの!ヤベー団体様の席だろコレ!どんな顔して教え子の貯金箱抱えて座ればいいんだよ!絶対ヨシエさんの仕業だろ!?!2人同居ないんだから俺だけ被害被るじゃねえかチクショー!!

立ち往生している俺の横から、今のクロフネと同じくイカつい顔をした娘がひよっこり現れた。

「ども。デジタルさん助かりました。」

「おう、おかえり後輩ちゃん??あつ、座るんだ?クロフネはどうよ?」「聞きます?控え室で3回気絶した話。ただまあ調子はどうかって言われたら??負ける要素無いっすね。仮に相手がアンタんとこの担当でも。」

「何っこの。」

珍しく笑いながら煽りよるわ小娘め。ウチのデジがそんな簡単に負けるかってんだ。

クロフネだつて緊張して??あれ大丈夫?ガン飛ばしてない?

キタちゃんからマイクを受け取ったオグリが、ゆっくりとその歩みをクロフネに近づけて行つた。会場が徐々に静まりを見せるほどの圧は流石怪物である。

『??1つ、言わせて欲しい』

『??はい。』

『お腹が減っていないか?』

誰もがすつ転んだのは言うまでも無い。

『顔が強ばっている。緊張している時は、何かを食べるといい。実は私もお腹が空いていてな??レースが終わったら、タマがご馳走してくれるらしい。一緒にどうだろうか?』

『えっ、良いんですか??正直腹ペコです。』

『ふふっ、そうか。それは良かった。ならこの勝負を楽しもう。君の事はヨシエさんから聞いている。私の心も、もう待ちきれなくてウズしているんだ。だから——本気で勝ちに行くぞ。』

『お願いします。私には——勝ちたい人が居ますから。止まってなんかいられません。怪物を打ち倒すのは私です。』

クロフネと眼が合った気がした。ひえっ??やっぱ後輩ちゃんじゃねえか?隣からも視線を感じるし??ひえっ、クロフネじゃねえか??。

セントエルモの火は灯された。少し前にオペラオーが言っていたのは、やはりこう言う事だつたらしい。ならば後はクロフネの走り次第??そして、俺が相棒を”本物”に出来るかどうかだ。

『両者がゲートに入りました、今——スタートです!おおっとこれは両者横並びでのスタート!』

『クロフネもオグリも早めに出てるね。こうなると、オグリの圧にどれだけ冷静でいられるかが大事だと思うよ。』

横並びとは言え、ほんの僅かにクロフネが前に出ているだろうか。そうなると相手の出方こそ伺いやすいが、テイオーが言うように怪物の気迫を受け続けなければならぬ。

デジタルも一度だけオグリとは競った事がある。安田記念のレコードホルダー同士、得意距離も脚質もほぼ同じ2人だ。最終的にはデジタルの気合い勝ちではあったものの、正直今までで1番実力が拮抗していたと思う。

人の想いを背負って走るウマ娘と、人の応援を力に変えるウマ娘。その在り方は似ているようで違う。オグリの怖い所は、周りから与えられるその応援が姿を変えて、怪物みたいなプレッシャーが放たれることだ。

その中でも”自分が勝つ”と言う決してブレない意志が何より恐ろしく、そんな彼女だからこそ人は夢を見る。

相手は間違い無く、歴史すら変えてしまった伝説級?!だから頑張れ、クロフネ。

『オグリキャップ、やや前方の様子を気にしているようですね。』

『うん?!気になるだろうね。アオハル杯の走りはあったけど、実際クロフネのダートに関しては情報が少ないから。武蔵野Sへの出走も回避した事があるし、今は牽制しながら様子見が良いかな。』

『成程。依然先頭クロフネのままレースが進んでいます。間もなく第3コーナーに——ちよっ、えっ!?!ク、クロフネ加速!上がってきた上がってきた!オグリキャップがここで第3コーナーに差し掛かりますが、クロフネが今第3コーナーを抜きました!!』

????  
はっ?

「おいおい後輩ちゃん!あの子暴走してねえか!?!いくら何でもスパ―

ト早すぎんだろ！」

「ありや気迫に当てられてますね。ウケる。」

「いやいやいや！ウケとる場合ちゃうで!？」

「タマさんに怒られますよそのキャラ。確かにアオハルでもあんな事しなかったですけど、”勇者様のおかげ”って事でーっ。」

「ええ?。」

何でなん？ウチ関係無いやん??デジタル、お前本当に何言っちゃったの？

ああほらッ！オグリのやつ笑ってんじゃん!!怖っ！もうハチャメチャに迫って来てんじゃん！幾らダートがクロフネにとつてベストマッチだからつつつても、無茶だつて！観客もザワついてるし、あんなの記録保持者ばかりなダート面子だつてやらねえよ!!

「あー、腰痛った??間に合ったっぽい?」

「ヨシエさん??生きてたんですね。」

「いえーい。かつ飛ばしてるねーあの子。”蓋世之才”なんて言う位だから、そんな事だろうとは思ったけど。あー、あー、『ポラリス』に業務連絡。レース終了後は結果発表のアナウンス無しでよろしくー。」

無線を片手にそう指示を出しながら、彼女は携帯を取り出しては続けて連絡を入れていた。

「もしもくし。どうだ凄いでしょ、今の子達。2日間楽しんでくれた?うん、手筈通りに??お仕事引き受けてくれてありがとね。」

『縮まらない縮まらない!第3コーナーを抜けたままクロフネが先頭!何というウマ娘だ!オグリキャップが6バ身差から追いかけるが、未だ差は2バ身!これがダート界の超新星!舶来の衝撃!!クロフネ今先頭でゴーーーーールッ!!!』



??勝っちゃった。いや嬉しいけど。嬉しいんだけど。

後輩ちゃんの手前カッコつけてあれこれ言っちゃったよ??勝てる未来見えねえ??。

第3コーナー手前からゴール板を抜けるまで、ダートコースには地面を強く抉ったクロフネの足跡が残っている。スマートファルコン、コパノリツキー、ホツコータルマエ??ダートを走る子達には、誰をも唸らせ、納得させるだけの記録を叩き出してきた子達が居る。だがクロフネのそれは、記憶に焼き付くほど鮮烈な衝撃だ。そしてそれを証明するだけの実力。誰が呼んだか”舶来の衝撃”は、その名前が伊達では無い事を教えてくれた。

「そんじゃ、ちよつくらクロのとこ行ってきま。」

「お、おう、行ってらっしゃい??。」

「へいへーい、勇者ビビってるー。」

「べつつにいく!?!ほ、ほら!さつさと行ってやれつて!!」

「りよ。あつそうだ先輩。」

「んだよ??。」

「後で大事な話がありますから。じゃ。」

??何だし。

っべーなマジで??ウマ娘同士の実力もそうだが、トレーナーとしての能力がそもそも段違い。今まで使ってきた作戦など、後輩ちゃんは徹底的に潰しに来るだろうし??俺の考えなど通用する相手じゃない。

本当にもう――。

「どうしましょう、ヨシエさん??。」

「急に話振らないでよ。知らんし。それと前々から言おうと思ってたんだけど、私と2人の時ぐらいその畏まった態度と話し方するのやめない?もう知らない仲じゃないし、正直ゾツとするんだけど。」

「??善処するよチクショー。」

だつて怖えんだよ。昔毎日の様に喧嘩してた仲とは思えないぐら  
い今のこの人何やらかすか分からねえんだもん??あつ、俺が丸くなつ  
たのかもしれない。多分そう。ウチの可愛い娘達のおかげで毎日ポ  
ニーちゃんが元気だから??お前が元気になつたら終わりだぞ?寝て  
ろ。

ふとヨシエさんの方を見れば、彼女は観客席の何処かに目を向けた  
まま笑っていた。

「ねえ、聖蹄祭終わったんだし2シヨ撮ろうよ。ギャルみたいに、指を  
内側にしてピース。」

「ええ??ぴ、ピース??。」

「じゃあ次は観客席に向かって。なるべくあの上辺りにギャルピース  
!」

「ギャルピース??。」

「はい、そのまま人差し指畳んでー。」

「人差し指畳んで——いやダメでしょこれ。やつちやつたけど。ほ、  
ほら??何かめっちゃこつちにガン飛ばしてる人ら居るじゃん??知り  
合い?」

「知り合いってか理事会。」

「ふざっけんなお前ツ!!お偉方に中指立てちまったじゃねえかよツ  
!」

「この女マジで??ツ!!」

「まあまあ落ち着きなつて。私だつて理事会が全員嫌いなわけじゃな  
いよ?1番トップの奴、あのド真ん中でふんぞり返ってるクソがシン  
ザン絡みの張本人で、やたらと自分の意見を押し通したがる自己中野  
郎なのよ。」

「だから??まだ手伝えないつて言つたばかりだろうが。」

「分かつてゐるつてば。でもねえ??私聞いちやつたんだよねえ??あの

男、『勇者御一行』の事を成績残してるだけで距離感が不誠実とか、SNSにかまけてレースに本気じゃないとか言っちゃってるところ。」「???何だと?」

「ちゃんと説明したんだよ?信頼関係の上で成り立った成績だから良いんじゃない、とか。SNSだって、カレンちゃんもマヤちゃんもポーノちゃんも??得意分野を活かしてウマ娘達やレースを盛り上げてくれるし、とか。でも納得してないみたいでさあ??もしかしたらアンタだけじゃなくて、可愛い教え子達に直接対応が来るかもしれないわけなのよ。だってそういう事平気でやる奴だし?」

俺らからすれば上司より遥かに上の存在。大人だってそんな話を切り出されたらYESとしか言えない立場関係である。

対応と言うのはつまり??注意喚起的な何かそういうのだろう。ウチの担当達は思春期真っ只中のうら若き乙女達。距離感がバグっているからと言って第3者が立場を武器にあれこれ言うのは非常に面白くないし、俺の監視の目がある中で自由にやって貰ってるのだから余計なお世話だ。いや、監視されてる側かもしれないが??。

大体、その距離感を正しつつ大人を揶揄うと怖い目に合うと教えるのは俺とポニーちゃんの役目であり、当初の目的だ。違う、ポニーちゃんは黙ってる。

「きつと皆悲しい顔すると思うんだ??1人の独裁でそんなギスギスした関係になるのは、バカらしいって思わない?」

「??バカらしいよなあ。」

「っ??色んな事して頑張って勧誘してきたのにねえ。何よりも、デジタルちゃんがアンタの定位置から居なくなるかもしれないんだから許せたくない?」

「許せねえよなあ。」

「ん”っ?くっ??じゃ、じゃあどうするのが良いと思う?」

「潰すしかねえよなあッ!!」

「ダ、ダメだお腹痛い?!ちよつとは疑う事覚えろって!私が嘘ついて

て、良いように使おうとしてたらどうすんだよ！ロリ達に命かけすぎだっつーの!!」

「ハゲ絡みで嘘ついた事無いだろ。そんなぐらい分かってんだよ。」

考え出したら理事会には無性に腹が立ってきた。今だって何か笑って指差しやがる。横の奴ならまだしも、俺まで差される筋合いは無えんだよ。確かに人見下したり好きそうな顔だもんな、あのオツサ

ン。  
彼女程では無いが、俺だってシンザン絡みの件では思う事がある。世話になった人達でもあるし——。

だがッ！それ以上に自分のお気に入りに手を出されるのが気に入らない。俺のロリ達——違う、語弊。俺の担当達だぞ。手伝えないとは言ったが、『勇者御一行』を天秤にかけられるのなら話は別だ。

「ひーっ、ひーっ??死ぬ程笑ったわ??。」

「手伝っても良いけど、俺は”最推し”と担当達を最優先するからな。」

「最初からそれで良いって言ってんじゃん。お好きにどうぞー。」

「それともう1つ、絶対守って貰う条件が有る。」

「何よ偉そうに。」

「辛いとかヤベエってなったらちゃんと言えよ。すぐ手伝うから。」

「???何だ、きよつとーんとして——アカン、今究極に恥ずかしい事言った。あつ、あつ、そうだ絶対そうだ!!」

だって今のごぼ先生の恋愛漫画で見たからッ!!

急に冷静になってきた??うわ、うっわ、三十路が恥ずかしい!!木の下に埋まりたい!!だからあれ程感情的になるなと昔っから——!

「口説いてんの?ロリコンが烏澁がましくない?」

「寝言は寝て言えよクソ女。あと俺はロリコンじゃない。」

そんな事は無かった。1周回って安心感すら覚えるこの悪態、本気で頭を心配されているらしい。張り倒すぞお前。

あつ、おまつ、何腕引っ張って??黙って携帯のインカメラ起動すんな、つたくよお??。

『ギャルピース。』

画面の中で真顔の俺達。その後ろで、こちらを向いた栗毛のウマ娘が——俺達にとっては何よりも大切だった『神さま』が笑っていた。

あつ、マーちゃんも写ってる。

## 決戦 : スーパーカー

「何のつもりだよ。」

「何が?」

「表舞台に『神さま』なんか引つ張り出して。あの人に何も言っていなかったら。」

「向こうが出演OK出したんだから良いじゃん。ハゲなんか知るか。」

聖蹄祭が終わり、もうそろそろ日が落ちるだろうと言う時間。観客達が帰って静まり返ったレース場で、俺はヨシエさんと2人でそんな話をしていた。

夜間用の照明が明滅を繰り返してコースを照らし出す。生徒達は一大イベントの片付けに駆り出されている為、この時間は俺達にデジタルとマルゼンを入れた4人しか居ない。

いや??もしかしたら、件の『神さま』がどこかで見ているかもしれないが。

エキシビジョンレースが終わり、お偉方に2人で殺伐とギャルピースをお見舞いしたあの後、1人のウマ娘がターフの上へと飛び出した。

誰かさんとお揃いなのか、或いは勝手に持ってきたのかは知らんが??馴染みのあるベレー帽。何故かトレセン学園用務員の格好でカモフラージュしていたが、その優しい顔も声色も変わっていない、俺達——と言うより、多くのウマ娘達にとっての”神さま”。

『以上で聖蹄祭の全日程を終了致します。勝者、チーム”T☆K☆G”』。改めて10名の選手、それから全ての関係者各位に盛大な拍手を。見届け人は私——シンザンでした。イエイ♪』

帽子を脱ぎ、笑顔を見せた彼女の姿に会場が静まり返ったのをよく覚えている。なんなら何人かはあのスマイルにトキメキを感じた事だろう。全員が全員シンザンと言うウマ娘の事を知っているわけで

は無い。それ程時間が経ってしまったし、今の時代を駆けるウマ娘達の残してきた走りだつて印象強いからだ。

それでもその瞬間の歓声は、エキシビジョンレースとは比べ物にならない規模で——波は少しずつ広がり、SNSを皮切りにシンザンの事が広まり始めているのも事実。今はウマッターやウマスタでもトレンドになりつつある。

分かりやすい挑発行為だろうなあ??お偉方は血相変えてこつちを見てたし、何にも聞かされてなかったであろうおハゲ先輩は完全にフリーズしていた。

世間に対して隠そうとしてたものが堂々と出て来たんだ。恐らくヨシエさんは今まで以上に目を付けられるだろう。自由に動けなくなる事でどう影響が出るのかは今の所分からないが??少なくとも、黙って大人しくするタイプじゃない事だけは良く分かる。それも含めて彼女の思惑通りなんだと今なら分かるし、まあ、なんだ??正直ちよつとスカツとはした。

「私からも聞きたいんだけどさ。」

「あんだよ。」

「ちやんとご自慢の相棒と話出来たって事で良いんでしょ?ここに来てレースするって事は。」

「いやただだけど——続きあるから石拾うんじゃねえよ!!聞けつて!!」

「あと3秒言うのが遅かったら頭がち割つてたぞバカ野郎。次紛らわしい事言ったら殺すかな。」

ヒエツ??だ、駄目だ、怖え??何で昔より悪態の付き方だけじゃなくて殺意までパワーアップしてんだよ??こつちは弱体化してよわよわポニーちゃんなんだぞ??。

「俺がマルゼンスキーにどんな感情を持っているのか、デジタルは良く知ってる。だからこんな我儘にも付き合ってくれてんだ。そんな

俺が普通に話をしようとしても、デジタルは遠回しにはぐらかすと思う??けど、今回ばかりはそれでどうこう出来る相手じゃない。」

「だからレース前に本心を問いただして逃げ道塞ごうって?」

「それだけじゃない。デジタルを??このレースで吹っ切れさせる。これはアイツに賭けた、最初で最後の博打だ。」

「ふーん??。」

ジャージのポケットからロリポップキャンディーを取り出して、彼女は一言だけ言い切った。

「バカじゃん。」

「知ってるよ。俺の我儘に付き合わせた挙句、自分の担当のメンタル揺らがそうってんだから。お前や後輩ちゃんならもつと上手くやれたんだらうけどな??しようがねえだろ。」

「あのさあ??博打って、偶然の成功を狙って敢えて危険な事するって意味なワケ。言ってる事分かる?必然的に成功するものは博打って言わねーのよ。だからバカだってんの。」

「??えっ、なんて?」

痛ってえよ、蹴るなお前。

「誰がアグネスデジタルの担当をやってると思ってるの?一人しかいない担当がやるって決めたやり方を人と比べるのがそもそも無意味。トレーナーとしての判断なら、見栄でも虚勢でも空威張りでも強がりでも何でもいいから、『予定調和だぜ』とか言って黙って格好つけてろ。」

「ヨシエちゃん??。」

痛ってえよ、蹴るなお前。

「ちゃん呼びされんのストレートにキシヨい。死ね。」



「??好き放題言ってくれちゃってよお。今に見てるよお前!後輩ちゃんの前にお前を泣かせてやるからな!」  
「あつそ。がんば。」

クツ??なんて余裕の表情。これもウラスボスのハッピーセットじゃねえか?!正直言つて後輩ちゃんとかクロフネ以上に勝てる未来なんか見えねえ。

だがそれは、今のデジタルだからだ。相棒には———確証は無いが、もう1つ”先”があると思っっている。エキシビジョンレースでタイキシャトルに見せたあの走り。あれを完璧なものに出来たら??元からアイツが持っていた”領域”なんてデタラメなものを確実な強みに出来たら。

マルゼンスキーと2人、会話をしているデジタルをこちらへ呼んだ。公式戦でも無いし、ただの併走と言えばそうだが??今2人は勝負服である。それ程までに、大事なレースだから。

「デジタル、調子はどうだ?」

「バツチリですとも!可もなく不可もなく!」

「それは多分バツチリとは言わん??緊張、してるか?」

「??実は少々。やつ、でもスパーカーと呼ばれる無敗のマルゼンスキーさんと走れるなんてまたと無い機会ですからね!!全力で楽しみますよ!」

「そうか??なら、楽しんでこい。それで、勝っても負けても———上なんか見るんじゃないぞ。」

「はい———えっ?」

デジタルは僅かにたじろいだ。何かを察したのだろう。目が泳ぎ始め、こつちが何かを言う前に言葉を探して切り上げようとしている。

逃がさねえ。その不完全な状態でマルゼンスキーの相手なんかやらせるものか。

「デジタル。」

「ト、トレーナーさん??アタシは、そのっ??ちゃんと走って来ますから——。」

「デジタル、そうじゃないんだ。聞いてくれ。」

逃げようとした相棒の手を掴む。余程思う所があるのか、その力はかなり強いものだし、相変わらずこちらを向いてはくれない??が、それならそれでもいい。

「言いたくなかった時で良いなんて嘘をついたのはすまなかった——  
けど、どうしても聞いて欲しい。もう??俺の夢の為に走るな。親父の事、気にしながら走るのは止めてくれ。」  
「??。」

「誰かの為に走るのも、誰かの想いを背負って走るのもお前の良い所で優しい所だ。けどな??その根底に有るのが、ウマ娘達を近くで見たい、助けになりたいって言う気持ちじゃなくて、俺への罪悪感から来るものなら??持たなくて良い。」

「っ??持たなくて良いだなんて??今言われたって??今更、どうすればいいんですか??っ。」

掴んだ手を振り払われる。こちらを向いたデジタルは、今にも泣き出しそうな顔だった。

そりゃあそうだ??3年以上も自分の中で飲み込んで、無理やりにも納得させて溜めこんでた気持ちをトレーナーに否定されたら??ワケが分からないだろうよ。どうすりゃいいか分かんないだろうよ。

けど——ようやくこっち向いたな、相棒。

がっちり頬を押さえ付け、額がぶつかる距離で顔を寄せた。絶対に目を逸らせないように。俺の言葉を聞いてくれるように。

「どうすればいい、だなんて簡単だ。自分の為に走れ。このレースの

間だけでも良い。これが終わったらお前に死ぬ程言いたい事言わせてやるし、自分勝手なトレーナーをぶっ飛ばしてくれても構わん。だから頼む、デジタル——今日だけは、今だけは俺を見ていてくれ。俺の声だけを聞いてくれ。」

「っ?は、い?。」

諦めたように、デジタルはゆっくり離れていった。浮かない顔のまま走る事には変わらないだろう。アイツの性格を考えればそれがどれだけ辛い事なのかは想像に容易い。

ああ、いや?簡単そう言うのは失礼か。ヨシエさんはああ言っていたが?やっぱり間違えたかなあ?もつと良いやり方、あったんじやねえかな?。

アイツならきつと聞いてくれる、だなんて、それも結局は俺からアイツに向けた一方的な信頼で。やっべえ、何か辛くなってきた?。

「シヤキツとなさい。貴方、あの子のトレーナーでしょう?」

「キング?えっ、キング!?何でここに?。」

ジャージ姿で現れたのはキングヘイロー。エキシビジョンでサクラバクシンオーとギリギリの勝負をした、俺とデジタルにとつては大切な『走る人生教本』であり、一流の心構えを教えてくれた偉大なウマ娘でもある。

「スタート係で呼ばれたのよ。ねえ、デジタルさん、今から走るのでしょう?少し借りるわよ。」

「えっ。良いけど?今のデジタルは、さ??多分何言っても?。」

「今だから言うの。それに、勇者はいつだって王様の言葉に耳を傾けるものでしょ?。」

そう言っただけでキングはデジタルの所へ言っただけで終わった。

ヨシエさんの方を見れば、何やらマルゼンスキーにノートを見せな

がら指示を出しているっぽい。会話の内容は聴こえないが、時折こちらを向いては笑ってるその顔がどれ程恐ろしい事か。

トレーナーに出来るのはここまで??後はレースが始まらなければ何も分からないし、何もしてやれない。

「??頑張れデジタル。俺は、最後まで一緒だから。」

推しの前で浮かかない顔をした相棒を見ながら、ただそう祈るしか無かった。

『なんて顔してるのよ。』

突然現れたキングさんが、笑いながらもそう言っていた。

アタシには何も答えられない。自分がどんな顔でこの人の前に立っているかも分かっていない。ただトレーナーさんに言われた言葉が、”もう考えなくて良い”っていう言葉が??何度も頭の中で繰り返されていた。

それは??アタシが勝手に思っていた事に対する否定の言葉。これだけは守らなくちゃいけないと、ずっと隠し持っていた本心。その本心をあの人に否定された事に、全然理解が追いついていなかった。

今までそんな事1度だって無かったのに、時折トレーナーさんはいかような事を言う。勘が鋭いのか、誰かに教えて貰ったのかは分からないけれど??何で、どうして今だったんだろう。だってこのレースはあの人にとって本当に大事な?大事なレースで??。

『何を言われたのか分からないけれど、そんな顔して勝てる相手じゃない。見なさい、デジタルさん。』

『えっ????』

キングさんが向いた方?? スタンドの方で、トレーナーさんは目に見えて落ち込んでいた。自信無く、誰かに祈るように手を組んで下を向いていた。

『貴女に言葉を掛けてからあなのよ。トレーナーの役目はあそこで終わって、もう貴女の事を願うしか出来ない。2人で1人の勇者なら、あの人に言葉を掛けさせた事、後悔させるような顔をしては駄目よ。堂々となさい。』 真の勇者は、戦場を選ばない”のでしよう?』  
『??怖いんです?? 今までであったものが急に無くなるのが。戦場を選ばないとか、勇者とか、そんなのじゃなくて。アタシはっ、ただそうする事が正しいって思い込んでたんですよ。走るしか無かったんです。相手を選ばない、バ場を問わない勇ましい者だなんて?? アタシには相応しく無かったんです。』

『?? そうね。元々貴女達に相応しいのは、勇ましい者、じゃない。』

顔に両手を添えられ、キングさんの方を向かされた。その顔には優しい笑みが浮かんでいて。

『貴女達は、” 勇気を分けてくれる者” よ。』

『キングさん??。』

『全部じゃないわ。ほんのちよつと、あと少しだけ前に進みたい? 怖くて踏み出せない?? 誰かがそう思った時に背中を押してくれるのが貴女達。大好きなウマ娘達にそうしたかったから、チームなんてものを作ったのでしよう?』

『それは? そう、ですけど??。』

目を逸らしたかった。けれども、キングさんの眼は逸らしちゃいけない—— そう思わせる程の力強さと温かさに満ちていて。どうしてもこの人が一流か、心の底から分かる気がする。

『もう一度考えなさい デジタルさん。自分がどういうウマ娘なのか。』

何を力に変えて走っているのか。どうして勇者御一行なのか。貴女のエゴを、貴女自身に認めさせてみなさい。』

『で、でも?!アタシなんか——。』

『もう??貴女に教えてあげた事、何にも伝わってないじゃない。貴女はウマ娘が好きなのでしよう?自分なんか、なんて言っちゃ駄目。他ならない貴女自身を好きになれなくてどうするのよ。少なくとも貴女じゃなきゃダメだって言う人を私は知っているわ。足並みを揃えて、一緒にやって来た人が傍に居たはずでしょう。なら信じなさい。貴女達が、勇者御一行なら。』

そんな言葉を貰って、ようやくレースが始まったけれど——。

(全然追い付けない??走りが、分からない?!?)

マルゼンスキーさんはそもそものエンジンが違う。競ってきた相手の格が違う。レースに対する勝負勘も、他の逃げウマ娘ちゃん達と速度も違う。ペースを乱す為に揺さぶりや圧をかけてみてもまるで反応しない。先が読めない。

まるで、最初から最後まで1人で走っているかのような人。

もしもズカさんやバクシンオーさんの走りが完成したらこうなるのかと思いき知らされる。この人の眼に、今アタシは映っていない。それどころか、何も映っていないんだ。本当に自分しか居ない場所で、自分の走りをしているだけ。

差は4バ身??仕掛け所を間違えたら2度と追い付けない。追い付いた所で引き離されるし、それじゃあこの人の眼にアタシは映らない。もつとだ??もつと、粘って、耐えて??勝機を見逃さない。

勝たなくちゃ。勝たなくちゃ駄目なんだ。だってこの距離は、マイルは、絶対に負けないって決めたんだから。そうしなくちゃいけないんだからッ!

そうじゃないと??アタシは、トレーナーさんに顔向け出来ない。沢

山の物を貰っておいて??あの人のやりたかった事を、奪うだけ奪っておいて、またここで叶えられないだなんて、そんなの——許されない、のにつ。

肌のヒリつく感覚。マルゼンスキーさんは、その速度を頂点まで上げた。

限界を超えた速度、その先の——”完成された領域”まで。

差が広がっていく。

もう、止められる気がしない。

追い付ける気が到底湧かない。

これがルドルフ会長にも泥をつけた、この人の本気なんだ。

自分だけの世界で、誰にも邪魔されない自分だけの走りをする——

—そうして辿り着いた”究極の自己完結”。

言葉にすれば簡単でも、実際にやるのはワケが違う。ましてやルドルフさんだけじゃなくて、シービーさんやシリウスさん、ラモーヌさん達を相手にしてきた上での無敗の走り。どこまでも止まらない、他とは比べ物にならない加速を生み出すから”スーパーカー”なんて呼ばれていて。

??嫌だ。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。負けられない。負けられないのにつ??。

ああ、また??まただ。また、雨が降る。

視界を全部奪うような、大雨が。

脚が泥濘んで走りづらい。

マルゼンスキーさんが、凄く遠くに感じる。身体が思うように動かない。

トレーナーさんは罪悪感なんて持たなくていいとは言っていたけれど??止めてくれと言っていたけれど??っ、やっぱり、出来ないですよ。だってアタシは、心のどこかで思ってたんです。もし自分が走る事になるなら??自分の好きな事に付き添ってくれたあの人が良いと。

空いた時間でトレーナーとしての勉強をしていた事を知っている??他の子達のスカウトだって出来た事を知っている??アタシは、自分の我儘である人を繋ぎ止めてしまっていた。もう少し。

あと少しだけ。

この楽しい時間が続けばいいって??その結果が、阪神JF。

あの人のお父さんが亡くなって、レースが終わった後の泣き顔を今でも鮮明に覚えている。

そうだ??奪ったのはアタシなんだ。アタシの我儘なんだ。アタシがもっと早くに決めていれば良かったんだ。なのに——どうして、もう大丈夫だなんて、言えるんですか??。

重い。

脚が。

身体が。

呼吸が。

??アタシ、何の為に走ろうって思ったんだっけ??。

でも??でも、走らなきゃ??だってトレーナーさんは、マルゼンスキーさんをチームに入れたがってる。アタシのやらなくちやいけな事。走って、走って??はしって??はしるのって、こんなにっらかつたかな??。

ああ——雨の音が、鳴り止まない。

「デジタル・アグネスデジタルッ!!」

??トレーナーさんの声だ。自分の声だけを聞いて欲しいと言っていた、アタシの??。

「お前良く聞けよ相棒!難しい事ゴチャゴチャ考えんじやねえ!お前が俺を”最推し”だって言うなら、俺にとっての”最推し”はお前な



「なんだ！それだけなんだよ！」  
「??トレーナー、さん??。」

フエンスから身を乗り出して叫んで。今にも泣きそうな顔で、必死に??やっぱり、根っこは出来てますよ。アタシとは違います。誰かの為にそんな風に必死になれる事、良く知ってますから。

だから??アタシじゃなくても良かったんですよ。

キングさんが言っていた言葉——どうして勇者御一行なのか。

勇者御一行は、ただのチーム名で??2人で作った居場所で??大好きなウマ娘ちゃん達を近くで見えて、近くで支えてあげたい、そんなアタシ達の我儘の——あつ。

??そうだ。もし、アタシとあの人が似ているのなら??きつと” 勇気を分けてくれる者” は1人じゃない。

だって同じ道を歩いて来たから。同じ夢を持っていた筈だから。

何で分かってなかったのかな??今更なのはアタシの方だ。

ずっと余所見ばかりだった。後ろに、上に、下に??トレーナーさんは、いつだって横を、私の方を見ていてくれたのに。

トレーナーさん。

ゴメンなさい??私はやっぱり弱いです。今だって、走るのが怖いですよ。脚が重くて、辛くて、苦しくて、どうしたらいいかもうぐつちやぐちやで分からなくて。

本当は??本当は、やめちやいたって、思ってます。

だって、そうしたら今まで通りで居られるから。何も失わなくて済むから。

でも??勝ちたい。

だからトレーナーさん??もし、許されるのなら。

私の気持ちが届いているのなら——。

私に、勇気を分けて下さい。私の勇者として。

「俺あな、デジタルッ！一緒に前を向きたいから、いつだってお前と勝ちてえんだバカヤロウッ！だから勝てッ！俺の勇者としてッ!!」  
「っ、だあああああああッ!!!」

前だ！

前だ!!

前だ!!!

一緒に勝ちたい——私だっと思ってた！それだけで充分じゃないか！

雨がなんだ！

泥濘む地面がなんだ！

アタシは”ウマ娘”アグネスデジタル！勇者御一行のエースで、あの人の勇者で、たった1人のオールラウンダー!!

だったら??道なんて最初っから1つなんだ！前に向かって進むしかないッ!!

「マルゼンスキーさんッ!!」  
「??。」

最後の直線、捉えるならここしか無い。いつだってここが、このストレートが私の戦場だった。けれど今まで通りの走りで追いつけるだなんて思わない。集中しろデジタル。マルゼンスキーさんの走りのクセを、今ここで掴め！

息遣いを！

足の運びを！

今の思考を走りから読み取れ！

何百何千とウマ娘ちゃんを見てきたアタシにしか出来ない事??ア

タシだから出来る事!!

レースに絶対が無いのなら、必ず勝機は有るんだ! 考えろ、考えろ、考えろ、考えろ!! あの人の今の速度がスパートなら、差し切れるタイミング、その瞬間が——ッ!!

「ここだあああああ!!!」

「??おいで。」

まだ余裕がある。ならまだ脚を動かせる。腕だつて前に前に振り続けられる。

トレーナーさんが勝つてつて言ったんだ。

アタシ自身が勝ちたいつて思ったんだ。

この人に。伝説に。怪物に。スーパーカーに。

詰める詰める詰めるッ!! 後ちよつとなんだ! もう少しなんだ! ゴール板を抜ける一瞬でも良いからッ! 前にッ!!

届け!

届けッ!

届けッ!!!

『届けええええええええええッ!!』

トレーナーさんと声が重なった。

もうマルゼンスキーさんが横に居る。横に並んだ——時だった。

聞き慣れない音がしたのは。

何か、重い音?? 『ガコッ』つて言う?? 切り替わりの——ギア? 車の、ギアチェンジ——。

「楽しかったわ。デジタルちゃん。」

「??強えんだよ畜生。」

あと少しだった。横並びしてからゴールまで100mも無かった。デジタルの走りだつて文句無し走り、仕掛けるタイミングも間違っちゃいない。真正正銘、アイツの全身全霊を賭けた走り。

なんでそんな相手を、その短い距離でもう1回ブツチ切れんだ?? 言つてこつちはマイル王だぞ??。

「良かったんじゃない? 思惑通り、デジタルちゃん吹っ切れたじゃん。」

「??そりやどーも。」

「まあ、あの子が吹っ切れたからウチが勝つただけ。もし不完全燃焼な半端に強いデジちゃんだったら、マルゼンちゃん負けてたわ。」

「あん??」

「マルゼンちゃんは、元々”楽しさの象徴”みたいな子なワケ。あの子のハートに火を点けたらまず止まらない。それどころかギアは上がるだけ。自分達が『勇者御一行』なら、楽しませる要因になるかもつて思わなかつたかね? ん? ん?」

??何も言えねえ? そしてウゼエ?? 顔が良いのに中身が他人を煽らなきや死ぬみてえな性格してんなコイツな。周りをウロチヨロするなマジで。ニヤニヤしながら顔を覗き込むマジで。

あー?? 凹む。

デジタルはゴール直後に座り込んでいた。レース前からかなりメンタルがギリギリの状態だった筈。その上後半は限界以上の走りを見せたワケだ。俺は?? アイツにとんでもない無理をさせて——ケ

ツが痛エツ!!

「何で蹴るんだよお前ツ!」

「三十路がいつまでぴーぴーへこたれてんだ鬱陶しい。折角レース中にカツコつけたんなら、最後までカツコつけるバカ。トレーナーなら??やる事有るでしょ。これ持ってさっさと行けよホラ。」

「??何だ、この封筒。」

「ラブレター。」

「そんな冗談に構えるように見えるか?」

「ちえっ、つまんねーの。じゃあ私これから仕事あるから帰るわ。おつー。」

そう言つてデカイ封筒だけ手渡した彼女は、それっきり特に何を言うわけでもなくこの場を後に――。

「おーいクソボケー。」

「??んだよクソおんっ、なあツぶねえな!!」

したと思った矢先、人の顔面目掛けて何かを全力投球してきた。クツソ重いし硬いし痛い。受け取った手の平がジンジンする。冷たい感触のそれを見れば、本物か偽物か、車のキーだった。達筆な文字で書かれた『Have a nice Day!!』のプレートがキーホルダー代わりに付いている??はっ?そのテンションで投げていいもんじゃねえだろコレ。普通に怪我するんですが。

「それやるわ。もう要らん。マルゼンちゃん、帰るよー。」

??せめて何の鍵か言つてから帰れよ。結局この封筒も何だし。

いや、この際後で良い。まずはデジタルを??大事なパートナーをどうにかするのが先だ。

フェンスを乗り越えてゴール付近まで歩けば、近づく程にデジタル

がいったばいいつぱいだと言う事に気付かされる。アイツはこんな状態になつても、レース中に俺の声を聞いてくれた。俺のエゴに答える為に、自分自身の為に走ってくれたんだ。本当に??誇りに思う。

「デジタル。」

「トレーナーさん??。」

「立てるか?。」

「少し、待ってもらえれば??。」

「そっか??強かったな、マルゼンスキー。」

「はい??全然、追いつけなかったです。アタシ、本気で走ったんですよ。」

「ああ、見てて分かったよ。今日のお前は今までで一番の走りだった。間違い無くマイル最強クラスの走りだよ。」

「??なのに、引き離されたんですよね。勝てなかったんですよね。この距離で??マイルで??一緒に、勝ちたいって、そう思ってたのに??っ。」

「そうだな??一緒に負けちまったんだ。だから一緒にリベンジだなっ?。」

「マルゼンスキーさんがっ、言ってたんです??ゴールしてすぐ??最後に楽しませてくれて?ありがとうって??だ、だから、もう??もう??っ。」

「??そっか?勝ち逃げされるか??。」

薄々そんな予感はしていた。ルドルフにピークが来ているなら、それと近いウマ娘達もそろそろだとは思っていたさ。届かなかったのも間に合わなかったのも、デジタルのせいじゃない。そういう時が来たんだらう。

泣きじやくるデジタルを抱きしめてやれば、胸の辺りがじんわりと暖かく濡れていく。余程気力を出し尽くしたのか、しがみつくようにしてジャケットを掴む手に、もう力は残っていない。

「トレーナーさん?? トレーナーさん? ごめんなさい?? っ。」  
「?? おう。俺も、ごめんな。今まで1人で走らせてきて。」

初めて付けられたマイルでの黒星。この敗北を、俺は2度と忘れる事は無いだろう。

デジタルはただ、嗚咽をこぼすばかりだった。

## 最終R(?) : 勇者の目覚め

レース後、俺とデジタルはトレーナー室へと戻って来た。ばかプチだらけのソファアーの上で相棒は落ち込み??いやもうすつつつごい凹み方してる。俺が度々後輩ちゃんのとこでナーバスポニーちゃんになるレベルとは比較にならない程にはガチ凹みだ。

取り敢えずはさっきまでグズグズに泣きじやくっていたので厨房から飲み物でも取ってきてやろうかと思っていたのだが??戻って来たらアイツ、ソファアーの上で体育座りしちやっつてんの。

いや、凹んでるんだよ。間違はなく心がボツキボキにへし折れてんだよ。だがそれはそれとして??制服で体育座りはやめない?

お前それ、スカートの中見えんど。直下着じゃないとは言え目のやり場に困る。

そう思った矢先、相棒はスーツと脚を下に降ろして耳絞ってるツ!!

だから声に出すなって言ってんだろバカタレツ!!お前どこの世界に『スカートの中丸見えーる』って思春期真っ只中な女子中等部に直接言う奴が居るんだよ!!ここに居たわ。凹む。

「あ、あの、デジタル??今のは違うんだ、本当に。別に見えてたワケじゃないし見ようとしたワケでも無くて??なんだ??こ、こちらウララちゃん絶賛のにんじんジュースになりまーす??。」

あかん、終わった。今からちよつと真面目なお話モード、やる時はやるポニーちゃんとして奮起しようとしていたにもかかわらずこの体たらく。そう言うところだぞ俺。

辞職願は持ったな!?行くぞ!!

「??なあ。何か言っているんだぞ。その??勝手に色んな事言った俺に對してとか?い、今の発言とか??文句無いの???」



「??トレーナーさんは、無いんですか??」

「俺?何で俺がお前に。」

「だって、トレーナーさんも分かってるじゃないですか。アタシがもっと早く判断してれば??自分からトレーナーさんに担当になって欲しいって言ってれば、お父さんの事??間に合ったって。」

「ん??まあ。」

「なら、言えればいいじゃないですか。『お前のせいだ』って——痛っ。」

凹むデジタルの前にしゃがんでデコピンしてやった。

「??え?えっ?」

「他には。何か言いたい事あんだろ。」

「??マルゼンスキーさんにも負けました。最後に楽しかった、って??また、トレーナーさんのしたかった事、叶えてあげられなかったんですよ。アタシはいっぱいして貰ったのに、何にも返せなくて??担当がアタシじゃなかったら、こんな事にならなかったのに——痛ったアツ!!あーツ!おデコがアーツ!!」

思いつつつきりデコピンしてやった。

何を言うかと思えばバカヤロー。俺は文句言えつつあったのにもかかわらず、やれ自分のせいだ、自分が担当じゃなきゃ良かったとかバカヤロー。

??言わせちゃまった俺も大概バカ野郎だが。

「お前2度とそんな事言うなよ。俺の前でも、誰の前でも。こっちはお前に返しきれないほど恩も有るし、感謝もしてんだよ。」

「なんで??そんなのおかしいじゃないですか??。」

「おかしくない。」

「おかしいです。」

「おかしくないって。」

「おかしいですよッ！」

「おかしくメエツフツ!!」

ばかプチぬいぐるみを顔面に押し当てられた。なんだその反撃。痛くも痒くも無いけどよりによってカレンチャンのクソデカぬいぐるみを顔面に当てるんじゃないよ。前から思ってたけど、お前カレンの事俺に対するリーサルウェポンみたいに扱ってるだろ。それはそう。効果はバツグンだ。

本人が見てたらドえらい事になってたからなお前。笑顔なのが余計に修羅場みたいな空気感醸し出してるじゃねえか。ぬいぐるみなのに。

圧が凄い。そして素材が良い。

「おかしいです??なんでそんな事言えるんですか??なんで、そんな事言うんですか??。責めてくれても良いじゃないですか。」

「そしたら気が楽か?じゃあ幾らでも責めてやるからそのベビースキンなモチモチ頬っぺ差し出せオラッ!オラッ!!」

両手でぐにぐにと頬っぺを揉みくちやにしてやれば、デジタルは何かを言ってるがさつぱり聞き取れない。いやもう??悪いけど、聞かんぞ俺は。俺がちゃんと言わない限り、コイツはいつまでも自分で自分を責め立てる。冗談じゃねえ。

「なにしゆるんれふは?!」

「この美少女がよオ??口を開けば自虐ばつかしやがってよオ??お前は何でも出来て、他人に優しく、強くて、可愛くて、いつだってカッコイイ奴だって俺は知ってるのによオ??ずっとお前だけに背負わせて、悪かったな。」

「トレーナーひゃん??。」

「なあ。少し話をさせてくれないか?お前がずっと気にかけてくれた親父の話をさ。」

デジタルの顔を解放した後、俺は改めて持ってきた飲み物をデジタルに握らせ、隣に座り直した。

「あの人な??典型的な昔気質の頑固者で、精神論とか平気で実行するような人だったんだ。『男ならメソメソするな』、『へこ垂れる前に気合い入れろ』ってよ。俺がトレーナーになるって言い出した時、あの人は絶対に首を縦に振らなかった。認めようとしてくれなかったんだ。ようやくトレーナーになって、病気の親父のところに見舞いに行ったらさ??あの人、なんて言ったと思う?『そんな事言う為に1人で来たのか』、『お前が言うトレーナーってのは、なって終わりか』って言われたんだ。流石に頭に來たもんで、今に見てる、ふざけんなって言っちゃまった。それが??最後の言葉だったんだけどな。」

思い返してみても後悔しかないというか、無駄に突っ張ってたとは思う。

隣を見れば、デジタルはまた俯いていた。もう終わった事、過ぎ去った事??俺自身の問題なのに、握り締めた拳に涙を落としてくれていた。

気にするなって言っても、きつとデジタルの性分なんだろう。そういう所がお前らしくて好きな部分でもあるが??俺は、何もお前にそんな顔してもらいたかったんじゃない。

「お前に話してないのはここからだ。良いかな?」  
「??はいっ。」

「俺さ??お前が阪神JFで勝った時、泣いたろ?あの時確かにワケ分かんない感情になって、帰ってきたお前に何か言おうとしたのに何も言えなくて??でも、ワリとすぐに気付いたよ——??死ぬ程嬉しかったんだよな。」

「っ??トレーナー、さん??。」

「『自分が担当に必要とされているなら、愛されてるって思えたなら、

どうしても我慢出来なくなった時ぐらいいは泣いていい』って、1度だけ親父に教えて貰った事があるんだ。子供の時の話な?けどその時全部分かったつーか??そーういや親父、首を縦に振らなかつたけど、1度だつて俺にトレーナーは無理だなんて言わなかつたなつて。」

病院で俺にあんな事言つたのも、自分の事など気にしなくていいからさつさと1人立ちしろつて事だったのかもしれない。だから帰ってくるなら1人じゃなくて、担当と一緒に勝ち星でもあげてから来いって言いたかつたんじゃねえかなつて??何となく思う。

ああいう不器用な所と言うか言葉足らずな部分、間違い無く俺も受け継いでんだろーうなあ??。

「だからデジタル??あの日お前に言いたかつたのは、お礼なんだ。俺を”トレーナー”に引き戻してくれた。親父が教えてくれた大事な事を思い出させてくれた。色々足りなくて駄目な俺でも、一緒に居るつて言つてくれた事や勝ち続けるつて言つてくれた事??それが本当に嬉しかったんだよ。だからありがとな、相棒。」

「ちが??ちがいますよ??ア、アタシは、そんなじゃなくて??アタシは??。」

「違わないさ。」

「ちがいますよ??。」

「違わないつて。」

「違いますつて!」

「違わメエツフツ!!」

だからカレンを武器にするなつて言つてんだろお前ツ!ぬいぐるみとは言え本人並みの愛嬌と魔力が込められてるんだから!何でぬいぐるみのクセにめつちやいい匂いするんだコレ。本人と違わぬ彩フレグランス??えっ怖??違う違うそうじゃない。話題を変えられてしまう。検証は後にしろポニーちゃん。

「アタシはツ！トレーナーさんの夢も叶えられなくてツ！いつだって余所見ばかりでツ！自分勝手に、弱くて、どうしようも無くて??！トレーナーさんは、ずっとアタシの事を気にかけていたのに、アタシは自分の事ばかりで??お礼を言われるような事なんかしてないんです！言われたくないんです！言われたら？アタシは??どうすれば、良いんですかあ??。」

見た事も無い必死な剣幕で、今もずっと自分を責めるように捲し立てて??デジタルは、また涙を流し始めた。

一体どれだけの想いを抱え込んでいたのか。3年以上という期間を考えれば、その考えはもう簡単には変わらないのかもしれない。それ程までにデジタルは自分の心に重責を背負わせている。『やらなくちゃならない』という言葉を呪いのように唱え続けて、意志の鎖で雁字搦めになって??。

遅かったのかもしれない??もう、普通に話をして解決出来るような状態じゃなかった。

まあこっちは普通じゃねえけどなツ！変わり者のトレーナーだけどなツ!!

「○??クイズしようぜ。」  
「??へっ?」

「第1問！アグネスデジタルは勇者御一行のエースであるが、カレンチャンが実質的なボスである。○か??か?」

「えっ?えっ??ま、○?です。」

「ピンポーン。やっぱりそう思う?俺もなの。」

「あの??。」

「どうした?」

「情緒、バグリそうなんです?。」

「そうか。第2問！」

「ええ??。」

何か言いたげな顔をしているが無駄だぞ。出題者が問題始めたんだから大人しく聞いてろお前。

「トレーナーの夢は親父に良い格好を見せたかった事、マルゼンスキーをチームに入れたかった事である。○か??か?」

「??○、です。」

「はい残念賞。後で寮にタワシ送つとくからアグネスのヤベ一方と仲良く使いなさい。第3問！」

「ま、待って下さい！」

「待ちません。答え合わせはこの問題の後にまとめて行います。あちこち余所見して担当を見ない事は自分勝手にいけない事である。○か??か?」

「○ですっ!!」

「??です。何年変態やってきてるんだお前。愛でるぞ。」

「っ??、??!」

最早言葉が出てこない程の情緒らしい。泣きじやくつていた為に目元が真っ赤になっていたデジタルは、必死に何か言葉を探しているようにも思えた。

因みに俺が同じ事されたらキレる自信が有るし、後輩ちゃんも多分キレるし、ヨシエさんにやったら恐らく刑事事件になる。モルは?? まあ光るだろ。

「お前が一生懸命守り抜いてくれた俺の夢はな?? 厳密に言えば、夢じゃなかったんだ。改めてちゃんと伝えなかったからお前だけを苦しめちゃった?? お前がウマ娘観察に俺を連れ出してくれた日から。お前が俺のスカウトにOKを出してくれた時から、夢は変わってたんだよ。」

「??じゃあ?トレーナーさんの本当の夢って、なんなんですか???」

「あー??実は、もう言ってるんだ。スカウトした時に。」

「えっ???」

??そうか。ピンと来てないか。結構言い直すの恥ずかしいんだぞこれ。あの時はまだ年齢的にも勢い的にもイける! って思ってたから言っちゃったけど??か、構わん! 知るか!

「俺は、俺を変えてくれたウマ娘と一緒に居たい。これから先の夢や未来を、好きになったウマ娘の隣ですつと過ごしたい——それだけだ。」

「??~~~~っ!」

ほれ見ろ。だからちよつと恥ずかしかったんだ。もによもによしないでくれ相棒。三十路、結構ダメージ。己の羞恥心が首を締めにかかっている。

要するにお前はずつと俺の最推しだぞ☆というニュアンスなのだが、まあそこは長年連れ添ったパートナー。理解しているだろう。なれたつてもう1人の僕であり半身。そうでなければ今頃勇者御一行の面々と手を組み、ポニーちゃんがさよならバイバイしていた筈だからな!

「それとな??あちこち余所見するのが悪い事だってお前は言っただけ——お前の好きな物はなんだ?」

「それは?ウ、ウマ娘ちゃん達??ですけど??。」

「ならここはどこだ?」

「トレセン学園です??。」

「そう! 天下の中央トレセン学園だツ!!」

勢いよく立ち上がると、相棒はその小さな身体を僅かにビクツと跳ねらせた。何だかヒートアップしてきたかもしれん。ええい、止まる

な俺。止まるなポニーちゃん。押し押しして推しまくれ!!

「在学生徒2000人以上!あちこちでお前のパワーの源、ウマ娘達  
のてえてえが繰り広げられている、言わばウマ娘オタクにとっての  
樂園だぞ?!<sup>ユートピア</sup>1人の夢の為に上ばっか向いて見逃すなんざあ勿体  
無えツ!違うか同士!」

「ちっ??違わないです??。」

「青春の中で繰り広げられるライバル関係も、夢を追い求めてひたむ  
きに努力を重ねる姿も見放題!不純な動機で結構!己のエゴで結構  
!そんなウマ娘達を支えるのが勇者御一行!そうだろ同士!」

「そっ、そうですともっ!!」

「なら??めいっばい余所見しな。あちこち寄り道して、尊み感じて、萌  
えパワーチャージをフルMAXにして満足したら——隣を見ろ。  
お前の相棒が、いつだって尊みに共感してやるから。」

俺は、デジタルを強く抱き締めた。

「今までと何も変わらない。失うものなんてあるものかよ。そうだろ  
??同士?」

「トレ、ナー?さん??。」

「??なあ。楽しかったか?3年間。ちゃんと、自分が見たいもの??見  
てくれたか?」

「見れ、ました??見れましたあ??っ!」

「なら良い。それで充分だ。俺をお前の”最推し”でいさせてくれ。  
お前の”勇者”でいさせてくれ。俺はお前の??戦友なんだから。」

背中に細い両腕が回された。小さく嗚咽を零しながら、それでも身  
体にグツと巻き付いてくる腕は力強い。僅かに痛い、それはコイツ  
が抱えて来た痛みの万分の1にも満たないだろう。

??思えば、デジタルから返されたのは初めてかもしれない。いつ  
だって俺が勝手に盛りあがって感謝をして、あれこれしてきたワケな



のだが??それも結局は一方的な信頼。ヨシエさんの言ってた通りだ。だが——今、分かった。

アグネスデジタルはもう、誰にも負けない。こいつは誰よりも強く優しいウマ娘だ。希望とか願いとか信頼じゃなくて、そう確信している。

気の済むまで泣けよ相棒。したらまた仕切り直しだ。俺達勇者御一行の、ちゃんとした道を作らなきゃな。

「??あの?もう、大丈夫です。」

「おう。スカツとしたか?」

「はいっ。」

良い顔しちやってまあ??こっちは今になってちよつと冷静になってきたぞお前。

恥つつつず!!!

えっ!?何してんの三十路が!歳を考える歳を!お前感情に身を任せたら毎度自滅してる事に何故気付かないツ!昔からそうじゃん??ハゲに悪態付いてた時も、ヨシエさんの胸倉掴んじゃった時も??バカは死んでも治らんのかもしれん??ヒヒン。

転げ回りたい気持ちに悶々としている中、トレーナー室の扉が3度ノックされた。

「どうぞー。」

「??。」

「ん?開いてますよー?」

返答は無い。何だし。ちよつと怖いから止めろし。

ゆっくりと近付いて扉を開けた瞬間——俺は言葉を失った。

「あの?勇者御一行のトレーナー室って、ここで良かったかしら??」

恐る恐ると言うか申し訳なきそうにと言うか??とにかくそんな自信なきげな声で、目の前に立つ無敗の怪物はそう尋ねてきた。

「??どっ、どうした?・マルゼンスキー。」

「えっと、ね?私もさつき?本当にさつき聞かされたし、デジタルちゃんに最後って言った手前恥ずかしいのだけれど??昨日付けで勇者御一行に移籍されてたみたいなのよね?だからその??あ、挨拶?的な?」

「??はい?」

「あつ、あれ!?だってさつきヨシエちゃんがそう言ってたわよ!?もう書類は渡してるからって——。」

ダツシユでテーブルの上に投げ捨てていた封筒を取りに行き、中から1枚の紙を取り出した。

勇者御一行殿。当人の強い希望により、以下のウマ娘の特別移籍を承認する

・マルゼンスキー

横からひよっこり顔を覗かせたデジタルもスンツ?としている。聞いてた?と視線を送れば、N Oと首を横に振られた。だよな??俺も聞いてないんだ。

1周回って冷静になった頭が、今までのヨシエさんの発言を整理してくれている。

『代わりに——お話は出来たみたいですよ。誰かさんのお陰でシービーちゃんとマルゼンちゃんの2人と話をして、皆それぞれの道を行うこうとしている。』

『自分達が”勇者御一行”なら、楽しませる要因になるかもって思わなかったかね?ん?ん?』  
『ラブレター。』

『私、嘘って大好きなんですよ。』

「やりやがったなあ女のくっくッ!!!」

何が昨日付けだコノヤロー! この書類の日付半年前じゃねえかよッ!! つまりマルゼンスキーちゃんってば半年前からウチのチームの幽霊部員だったの!?!嘘でしょっ!?

一緒に飲みに行ってマルゼンとハゲ先輩を電話させたのが聖蹄祭の準備が始まってから??その後シービーも含めて3人で話をしたのなら恐らく2〜3週間前??って事はよお?!?!

俺だけじゃなくてマルゼンとハゲ先輩と、書類の承認してくれたやよいちゃんにも纏めて嘘ついて移籍を押し通しやがったなアイツ!!

本人の気持ちが一番優先って言ってたじゃん! 言った奴がガン無視してんじゃん! 何してくれちゃってんのマジでっ!?!

「??マルゼン。正直今何が何だか分からん。どうやら半年前からウチに移籍してたらしい。」

「半年??えっ、半年前っ!?!」

「だ、だから1つだけ教えてくれ??良いの? 本当に?」

「えっと??まあ、そうね。そこに関しては本当かな。実は結構前から思ってたりにしていたのだけれど??今更言い出すのもちよっと、ね?」

??要するに、だ。

本人の気持ちなんかとつくに理解してて。

特別移籍願を出した時、すれ違ったままの俺とデジタルが怪物にとどめを刺すと言ったばかりにレースする事を見越されて。

更には今日デジタルが吹っ切れる事を前提に、あわよくばマルゼンスキーも触発させてパーペキに仕上げた状態でウチに明け渡すと。

半年前からそう算段立てていたわけだ。

それはもう人間の所業じゃねえんだよ。未来予知でも持ってるのかあの人。

「??あー畜生? 掌の上でゴロゴロ弄ばれたのによお?? 心臓がバクバクしっぱなしだ。今クソ程にやけてんだろうなあ、俺。」

「??マルゼンスキー。お前は勇者御一行のマルゼンスキーで、良いんだよな? 本当に?? 本当に、良いんだよなつ?」

「??ええ。これからよろしくね。トレーナー君。」

「いよおおおっし!! よし! よし! よおしッ!! やったなデジタル! お前のおかげだ! お前が居てくれたからだ相棒ッ!!」

「いえ、今回は本当に何も耳ーッ! あつ、あつ、耳は止めてください耳はあーッ!!」

許して欲しい。もうなんか、物凄く浮ついてるのだ。いや浮ついてなくても指は突っ込むけど。

あつそうだ。なら最後にぶん投げられた鍵もそういう事だろうか。

「なあマルゼン。これ何か分かるか? 車のキーっぽいんだが??。」  
「あつ??。」

俺から鍵を受け取った彼女は、大切そうに両手で包んで目を伏せた。

「これは?? あの人からの贈り物よ。」スーパーカーなら必要だろ”って、願掛けみたいなものね。レプリカだけれど?? 次に私の事を見てくれる人がいるなら渡してやれって言われたわ。だから?? 改めて、私から君に渡させて頂戴。」

「?? そつ、か? なら、有難く受け取らせてもらうよ。にしても『Have a nice Day!!』なんてキザな台詞書き残すキャラじゃないよな、あの人。」

「えつ? そんなの書いてたかしら??。」

「いやここに—— ああ、そういう事か。」

よくよくキーホルダーを見てみれば、隅の方に小さな顔マークが描かれていた。デフォルメされたボブヘア、小憎たらしい笑みの似顔絵??1度は自分も面倒を見たからこそ、マルゼンスキーへ最後に送った餞別の言葉代わりだろう。

あの性格だ。間違い無くやるわな——1番弟子さんよ。  
よし！

「勇者御一行の新しい門出だな！じゃあ景気付けに三本締めで——」

「あっ、トレーナーさんの携帯鳴ってますよ。」

「何だし。次から次へと??後輩ちゃん?もしもーし。」

『ども。先輩今どこに居ます?』

「トレーナー室。デジタルとマルゼンも一緒だよ。どした?」

『なら丁度良かった。正門に来て貰えませんか?迎いのリムジン来てるんで。』

????  
はっ?

## 最終R : 世界を駆ける愛しのキミへ

「トレーナーさん、次こっちの子をお願いしまーす！」

「はいだらー!!」

オフサイドトラップの呼び掛けに応えたは良いが、ウマ娘達で溢れたこの控え室では動くのも一苦労だ。スタッフさんやメイクさん達だって仕事中だし??そもそも俺がここに居る事自体おかしいんだけどな。

デジタルやマルゼンスキーとのあれこれが終わり、後輩ちゃんに呼び出された俺達はそのまま正門へと向かったのだが??迎えに来ていたのは1台のリムジン。何故かメジロ家からの御出迎えだった。

呆気にとられてる間に、これまた何故か正門前でテントを張っていたゴルシ&マックに俺達は全員リムジンへと叩き込まれ、揺られる事20分——連れてこられたのはウイニングライブの会場だったのだ。

到着するや否や、無駄にクオリティの高いヒヨコのマスクを被ったウマ娘達に後輩ちゃんやデジタルとマルゼンスキーが拉致され、俺は『KAISER』とプリントされた皇帝人参にプリンセス抱っこをされたまま、このウマ娘達で溢れかえった楽屋にぶち込まれたのである。仕事選べって会長。

因みにここまでで1時間以内の犯行だ。ヒヨコ含めてこれ『ポラリス』の計画的犯行でしょ。あのクソ女どこ行きやがった。

「あ、あの??アグネスデジタルさんのトレーナーさん、ですか?」  
「ん?..そうだよ。」

いかん、考え事をしていたらオフサイドに任されたウマ娘がビクビクしながら話し掛けてくれているじゃないか。理解は追いついていないがオフサイドにはウマ娘達のおめかしを手伝って欲しいと頼ま

れているのだ。

ならば自分の仕事はしなければ——えっ!?この子可愛い!!ちっちゃい!!黙れポニーちゃん。お前本当にそういう所だぞ。

し、しかし何だこの雰囲気??心做しかデジタルにも似ている様な気がしないでも無い。いや顔は全然違うけど。違うけれどもこの可愛いに極振りしましたみたいなの見た目に控え目な性格は実にGoodです。ヒビン。

黙れってポニーちゃん。もう寝てろよ。

「わ、私、勇者御一行のファンで!あの??い、いつかチームに入りたいなって?その??。」

「ああ、そういう事か。ありがとう。皆に話したらきつと喜んでくれるよ。えっと??今年入った子かな?」

「は、はいっ!私、”カゼノコ”です!よろしくお願いします!!」

数の子???

違う違うバカを言うな。風の子??いやまあ、子供は風の子って言うし、元気が取り柄とかそういう感じだろうか。ふふっ??何で今それ教えてくれたの?可愛いな。お可愛いが過ぎる。栗毛のセミロングが実にcute。くりくりおめめもso much。」

「い、今はまだ入ったばかりですし??チームに入れるような実力も無いですけど??あの、でもいつか??。」

「ああ、了解したよ。最初はそれでいいんだ。ゆっくりでも構わない??ウチはいつでも歓迎するから、自分の気持ちに決心がついたらおいで。さっ、準備——。」

「オラアツ!!メジロ宅急便じゃあ!!」

「貴女の奇行にメジロの名を使わないで下さい??メジロにきますわ。」

頭にこいよ。

控え室の扉を蹴り開いたのは、俺達をここに連れて来た張本人達——と呼ぶかは微妙だが——のゴールドシップとメジロマックイーンだった。なんだその肩に担いだデツケエ麻袋??脚出てるんですけど!!拉致の現行犯じゃねえか!!怖っ!!

「??誰を拉致ってきたんだお前ら。」

「私は無関係です!ゴールドシップさんが手っ取り早いからと勝手に——!」

「マックイーン、紐固く縛りすぎだぜ?全然解けねー。」

「そんなはずないでしょう?ちゃんと優しく縛りましたわ。」

「加担してんじゃねえか。どの口が言ってるんだ名優。」

風の子(仮称)の髪をお団子に結いながら麻袋に視線を落とすと、ピクリともしていない。大丈夫?息してる?

いかん、気になって手が覚束無い。これでは風の子(仮称)ちゃんも怒——クツソモジついて照れてるんですけど可愛いなこの子。

「はい、これでOK。頑張ってるね。」

「あ?ありがとうございます??。」

「さて??その拉致してきた子も解放していいんだよな?うおつ、固つてえ??マックちゃんさあ??。」

「で、ですから!本当に優しく縛ったつもりです!ただその??少々急だったので、ほんの少しだけ強めになってしまったかもしれませんが??。」

芦毛の2人に変わって何とか紐を解き、麻袋を引っぺがすと??中から出てきたのはこれまた芦毛のウマ娘だった。

「というかクロフネだった。」

竹輪を握り締めながら全てを諦めたように横たわってベソをかいている。いたたまれねえ??。」



「??トレーナー??どこお??。」

「何で他所様の担当連れてきちゃったの?」

「だってよー。ヨシエちゃんか主役を連れて来いってんだからしょうがねーって。逆らうと何するか分かんねーし。許可はとったもんな。」

「そうなのか?クロフネ。」

「??竹輪、あげるから付いてきて欲しいって??わ、私、まだ何も言っていないのに袋被せられて??気付いたらここに居て??。」

半分以上食われた竹輪はそういう事らしい。

「いや無理だろ。どうしてそれでイけるとか思ってたんだこの2人。それともアイツか?どっちにしても後輩ちゃんはここに居ないし、この場合はオフサイドと他のスタッフさん達に任せて後輩ちゃんを探しに行つてあげようか。流石にね??可哀想??。」

「クロフネ。お前さんのトレーナーを呼んでくるよ。何が何だか分からないだろうけど、取り敢えずあそこに居るオフサイドトラップを頼れば少なくとも間違いは無いから。な?」

「はい??何で勇者御一行のトレーナーさんが居るんですかあぁッ!」

「今気付いたの?」

「ス、スタッフのおじさんかと思つてました??地味だし??。」

結構エグい毒吐くなこの子。流石第2の後輩ちゃん。距離取られるのはかなり凹む。

仕方ないので泣く泣く楽屋を後にした——所だった。廊下に出てすぐ、ふと視線を感じて横を向けば、断末魔を上げた様な迫真顔の鶏マスクをした謎の女がこちらを見て立っているではないか。ヒエツ??マスクキツシヨ??下手なホラーよりこえーよ。

あと何だその胸は??凄けしからんな。小柄な体格より一回り大きいはずのレザージャケットを着ているはずなのに、ファスナーが『まぢ無理』と言わんばかりに突つかかっているじゃないか。これマジ?

じやあやっぱりRobRoy——改めロボイってドえらい成長したんだな??。

ぎやあ! 鶏が近付いてくる! デジタル! デジタルーツ!! あれ、これヨシエさんじゃね?

「おぶれ。歩きたくない。」

「何してんだクソ女。」

「何でそう思った?」

「??お前しか居ねえだろ。そんなマスク付けるの。」

「はいダウト。反応に間があった。人の乳見て判断したろ。」

「??? 違うけど?」

「童貞丸出しじゃん。」

凹む。

「案内してやるからおぶれ。今日の借りは今日返せマルゼンちゃんの借りを今すぐ返せ。」

「それはズルだろ。じゃああれだぞお前。飲み行った帰りにルドルフがフレンチキスしたのは俺のおかげなんだから借り返せ。」

「それはズルじゃん。いーいーかーらーおーぶーれークソがツ!!」

「分かったからローキックを止めるテメェツ! 執拗に脛だけ狙ってくんな!!」

仕方が無いのでおぶる事にしたものの、背中への弾力プッシュが半端じゃない。何だこの豊満Styleは?? ファスナーが上まで締まりきらないレベルとか、そんなの漫画の世界だけかと思ってた?? ポニーちゃんが大人しいのは幸いだがやはり童貞には少し刺激が強すぎる。中身はクソだけど。

「ステージまでよろぴく♡」

「ウザ。何だそのキツシヨイマスク。子供泣くわ。」

「はあ〜〜? キシヨくないですー。後輩ちゃんが『クツソファンキーで好きですね』って言って選んでくれたんですー。まあ勝手に被せられたから見てないけど。」

「後輩ちゃんに何やらせてんだよ?? それ外して見てみる。」

「何だ偉そうに——うわキツシヨ。何これキツシヨ。」

ほれみろ?? 顔が近え。無駄に良いのが実に腹立たしい。おぶっているせいで余計にハッキリくつきりその整った顔が目に入ってしまった。中身はクソだけど。

いや、そこじゃねえな。

「どうしたその前髪?? めっちゃ色付いてんぞ。」

「んー? 良いでしょ。ポラリスカラーでメツシユ入れてもらった。」

「だから1日帽子被ってたのか?? メツシユって何?」

「分かんねえなら勉強しろ年寄りが。」

「畜生。んで? そろそろ今からやる事教えてくれ。」

「何で知らねえのよ。ルナが説明したでしょ。」

「あの人参の着ぐるみ、遮音性高すぎて何も聞こえねえんだ。こっちはお前わけも分からずウマ娘達のおめかししたんだぞ。」

「アンタって昔から変なところでクソ真面目よね。」

澁々と言った様子で彼女は今日のイベント——『ファン感謝祭・

夜の部』の事を教えてくれた。

曰く、元々は年一でこういうイベントがあったらしい。名前こそ『グランドライブ』と言って違うものだったらしいが、ウマ娘主体の元、ファンに日頃の思いの丈をライブとしてぶつける場だとか。ウイニングライブが理事会主体で出来てから自然に消滅してしまっただけらしいが、ウマ娘達がライブをするのはそもそもそのグランドライブがあったから。

風の子(仮称)ちゃんのように新入生として入学してきた子達だけでなく、デビューしても成績の残せていない子やドリームトロフィー

リーグで一線を走る子達も好きにライブを行い、好きにファンヘメツセージを送る舞台??これはそんなグランドライブのパチモンであり、盛大なお祭り事だと言う。

そのパチモン祭りで本家の会場丸々貸し切るのはヤベえんだよ。どんな人脈してんだこの人。

のらりくらりと歩いて、ようやくウマ娘達で賑わっているステージ脇が見えてきた。楽屋ほどでは無くとも結構な人数がライブ衣装に身を包んで集まっている。中には黄金世代の面々や、霸王達、勇者御一行の面々も——えっ、君達知ってたの?おじさんクソビツクリなんだけど。俺ハブられた?

「まあつまり、今まで非公式でこつそりやってたイベントを今回から本格的にやりましたって話。エキシビジョンパワーも相まって、ファンもわんさか。グランドライブ復興も近いかもね。」

「ふーん??じゃあその再建も目標の内ってか。良くやるよ。」  
「いややらんけど?もう私にそんな時間無いし。ルドルフが引退するってなったら——私もトレーナー辞めるから。」

思わず脚を止めた。

「??何て?」

「ルドルフと一緒にトレーナーも辞める。あの子とはそういう契約なんだ。」

「それは??お前——。」

「シヤラップ。今は要らない。取り敢えず、アンタにお話があるって子が居るんだから行ってあげなよ。ここままで良いからさ。」

そうして背中から降りた彼女は、ステージへと歩いていく。ニンジン——では無く勝負服に身を包んだシンボリルドルフ、マンハツタンカフェと半ば強引に腕を組み、初めて見る子供みたいな笑顔をこちらに向けて言った。

「後輩ちゃんと見てな。観客もトレーナーもウマ娘も——皆纏めてぶち上げてやらア。」

「???  
ウマ娘のライブだろ？」

「遅かったですね。何手伝わされてました？」

「色々だよ??マジであの女??。」

2階の関係者席について早々、後輩ちゃんが何かを悟ってくれたのかそう聞いてくれた。当のヨシエさんはと言えば、俺が2階に向かっている最中に延々とやる気があるのか無いのか分からんMCをやって会場を笑わせていた。どうやら結構な人数の知り合いが来ているらしい。

結局デジタルとも拉致されて以降会っていない為、今頃何をしているかは分からない。恐らくはライブに出される事確定なのだろうが、それにしたってちよつとぐらい俺に手伝わしてくれたって良かったじゃないか??凹む。

「先輩知ってました?ウイニングライブの楽曲って、1番最初の音源歌ったのあの人らしいですよ。」

「誰?」

「あの人。」

後輩ちゃんが指さしたのは、今まさにステージの上でゴルシとマツクを引き連れてリンボーしてる変態鶏頭だった。ドラムの音に合わせてステージでは火柱が上がり、どこの国か分からん民族の掛け声がウオツホウオツホ流れている。ライブってか奇祭じゃねえか。何でまたそのキモイマスク被ってんだよ。ルドルフがちよつと引くレベルって相当だぞ?カフェなんかめっちゃ距離取ってるじゃねえか。

「んなわけねえでしょ。」

「やっ、聴いたら分かりますって。あの人バチクソカッケェんすよマジで。」

『コツケコツコーーーーーッ!!!』

『Foooooooooooooooo!!!』

「アレがカツコよくなるとか天変地異でも起きなきや無理だろ。」

「起きますよ。ヨシエさんなんで。」

『あー、あー、テストス。じゃあ例年通りOPは私らがやりまーす。今回はエキシビジョンレースがあつたから、急遽カフエちゃんが来てくれましたー。何でそんなに離れてるの?おいで?』

『??こつちを見ないで頂ければ、助かります。』

『凹む。いやあ本当はさー、ウマ娘達にとって大切なウイニングライブの??それもG1楽曲をこんな風に私物化すのはどうなのって話なんだけどー。理事長からOK出たし?ウマ娘の子達からも要望あつたし?クラシック路線で勝ってる子達も一緒だし?そもそも皆がやれって言ったわけだから?取り敢えず——歌ってやるから上がっていけよ。”winning the soul”。』

マスクを投げ捨てた彼女の声に合わせて、ギターの音が唸りを上げた。まさかの生バンドである。ステージでは本番同様の火柱が吹き上がり、照明が激しく明滅する。先程まで引いていたルドルフや距離をとっていたカフエもスイツチが入ったようで、相変わらず完璧な振り付けでダンスを見せていた。そして——。

『—————♪—————♪』

「??天変地異。」

「でしょ。アタシ元の音源聴いてるんで何となく分かりますけど、あ

れ多分ルドルフさんとカフェさんの声に合わせて自分の声弄りながら歌ってますよ。」

さつきまで謎リンボーしていた人間とはおよそ同一人物に思えなかった。

普段出してる声よか全然低く、ウマ娘2人がメインとでも言うように邪魔をしない音域で、尚且つ自分の存在を明確に主張するようにも歌っている。かと思えば、それぞれのソロパートの際はやたらと高音で裏方に回り、ハモリに徹してメインを引き立ててもいる。

サビに入ってからのはもつとえげつない。本家”winning the sou”でバックダンサーズが立っている後ろのボツクス型高所ステージには、クラシック路線で勝利を飾った錚々たるメンバーが勝負服でズラリである。オマケにそれぞれパート分けがされており、メインステージの3人は後ろの彼女達に合わせて歌っているときた。

いつからこのプラン練って練習をしてたんだあの人??あつ、マヤちゃん可愛い。頑張れ。

♪—————♪

ルドルフやカフェと違い、スクリーンに表示された彼女の顔に笑みは無い。メッシュの入った前髪が憂いを帯びた表情を僅かに隠し、色んな感情を孕んだ声が次々と言葉を吐き出していく。

ウイニングライブとはウマ娘達が応援してくれたファンに向けて感謝を伝える場。なら??自分の終わりを決めているアイツは、今日のこのライブで誰に向けて思いの丈を伝えているのだろうか。

俺には普段あんなだし、駄々こねるし、手は出してくるしで色々アレな女だが??彼女は紛れも無く、無敗の三冠ウマ娘の名を持つ『皇帝』のトレーナー。

多くのウマ娘達の夢を見てきたはずだ。

多くのウマ娘達の前にも立ちはだかつて来た。

学園を去った子達の背中だつて??嫌という程見送りもしてきただろうさ。

だからこそ歌える歌がある。” winning the soul”と言う歌詞の意味合いも、その重さも変わってくる。クラシック戦線だけじゃない??勝利に拘るウマ娘達だからこそぶつ刺さるものがある筈だ。一つ一つのフレーズが命を与えられ、会場の熱気をこれでもかと上げていた。

??やっぱスゲエよあの人。こういうところあるから狡いんだよなあ??隣の娘も、最早ただのファンと化している。眼がキラッキラじゃないこの子。

そうして楽曲はラスサビ前のCメロ——センターヨシエちゃんのソロパートに差し掛かった時である。

「??後輩ちゃん。俺、今英語聴こえるんだけど気の所為じゃないよな。」

「えっ?なんか言いました?」

「ゴメン、そのまま楽しんで。」

脳死かこの娘。絶対今英語で歌ってるし、ラスサビだつてもれなく英語でハモってるわ。どんだけアレンジぶち込んでんだあの人——あつ、あつ、マイクに這わせる指の動きがどエロイッ!!!落ち着け童貞。どこで上がったんだ。

最後の” winning the soul”のフレーズを全員で歌い上げ、ライブのOPは終わりを迎えた。

照明と火柱の熱気で汗をかきながら、ヨシエさんは笑っていた。満足気に、やりきったと言わんばかりのピースサインを掲げている。全く??トレーナーを辞めるとか言ってた癖によ。

「??そんなに楽しいなら辞めんなっつーの。」

『はいどうもね、どうもどうも。勢い作ったから、後はメインの子達に頑張ってもらいましょーねー。って事で次の子達力モーンヌ。』



『あはは??どうも??。』

次の子達と言うのは、先程まで拉致されてベソをかいていたクロフネと、どこに行ったか分からなかった相棒の2人だった。

エキシビション組ならそれぞれタイキやオグリとセットな筈なのに、何であの2人がセット——デジタル三つ編みやんけクソアツ! 巫山戯んなオイツ!!それやっぱり俺の仕事だっただろ!?!だ、誰だよ許可無しに弄ったの??勿論写真は撮ったんだろうなあ?!?!いい値段でも言い値で良い。

相棒、お前もお前だよ。プライベートで聖地巡礼する時、俺が三つ編みしようぜって言ったらお前死ぬ程拒否ったじゃん??拒否り過ぎて俺の事パワーだけで組み伏せたじゃん!身長30cmも違うのに!大人なのに!!何で今日は良いんだよチクショーツ!!!  
だが全てを許そう。そなたは美しい。

『と言う事でねー。オシヤレしたマイル王とキュートさ満点なダート王に来てもらったわけだけどー。何か言う事あるかなー?』

『そうですね??アタシ、マイル無敗とか言われてましたけど実はさっき伝説クラスの方に負けちゃいまして。だから今後は、勇者御一行のマルゼンスキーさんをよろしくお願いします!』

『??あれ?今デジたんなんて言った?』

『マルゼンスキーが??き、聞き間違いじゃないよな?』

『あのチームヤベえよ。』

相棒??己の謙虚な姿勢を維持しつつもしれっとマルゼンスキーの事を報告してチームの広告してくれるあたりは流石と言ったところだな。実はドリームトロフィーリーグでしれつと報告しようかと思っていたが、まあ会場もザワザワしていてほんの少し優越感。ふっ。

『だから』からは絶対に繋がらねえ爆弾発言だけだな?接続詞のマエストロかお前は。

『あつ、因みにマルゼンスキーさんがどれだけ素晴らしい走りをしたかはですね——!』

『尺足りないから後で学園のホームページによろしくねー。はい次クロフネちゃん。』

『あつ、あつ??ひゃ?ち??!』

『??後輩ちゃん、クロフネって。』

「お察しの通りあがり症です。しかもデジタルさんのガチファンなんです、今すぐ泣くか倒れるかどっちかしたいと思いますよ。」

「致命的じゃん。今までライブとか大丈夫だったの?」

「アイツ設定間違えた加湿器並にアドレナリンドバドバ出るんで、レース直後ならいいんです。直後なら。」

「難儀だねえ??。で?大事な話つての、教えてくれよ。」

「??本当はもっとちゃんとした場所とか、そういう雰囲気で言おうかと思ってたんですけどね??何もかもヨシエさんにバレてて、こういう場を用意してもらったんです。クロがデジタルさんと2人になれるこの舞台を。」

という事は、やっぱりそういう事らしい。何となくそうかなとは思っていたが、別にそんな告白しますみたいな中で言わなくても??童貞は勘違いをする生き物なのだ。丁重に扱ってくれ。

「受けて立つき。全力でな。」

「何の話すか?」

「エッ。」

「そっちは別に改まって言う事じゃ無いですよ。どうせバレてんだし。」

「じゃ、じゃあ??何?」

親指でステージを指さした後輩ちゃんに釣られて顔を向ければ、デジタルはクロフネの手を握っていた。ずっとアイツの中で心残り

だった、自分にとって覚悟を決める転換期になった後輩。その後輩に  
対する、デジタルなりの無言の声援なのだろう。

本来なら2人揃ってぶっ倒れる場面だが、デジタルの顔は先輩とし  
ての優しい笑みを浮かべたものだった。本当にそういうところだぞ  
お前は??いい女め。

『私??私は。次のフェブラリースで、ここに居るアグネスデジタルさ  
んと戦います。自分の力を全部出し切って、戦場を選ばない勇者を打  
ち倒します。』

ぎゅつと手を握り返したクロフネは前を向き、堂々とした面持ちで  
そう宣言した。勇者バフ恐るべし。だが??あいつの嬉しそうな表情  
が全てを物語っている。

その宣言は他でも無い、俺とデジタルがトウインクル・シリーズに  
残してきた最後の心残りなのだ。それならやはり、こちらも全力で――  
――。

『それから??そのフェブラリースが終わったら、私は次の舞台に進み  
ます。航路を中東へ向けて――皆さんがくれた”舶来の衝撃”の  
名前をその舞台へ叩きつけてきます。』

堂々とした態度に、力強い意志を宿した鋭い瞳を向けながら、彼女  
はそう宣言した。会場内が静まり返ったが、1人、また1人とクロフ  
ネの発言の意図を理解した者達から上がった声が、徐々に大きなもの  
へと変わっていく。

フェブラリース後の中東。それはつまり??。

「先輩。アタシらやっぱ負けず嫌いなんで――ちよつとドバイで  
頂点取ってきますわ。」  
デッペン

「大事な話って、お前??。」

「??泣いてんすか?」

「いや??ビックリつつーか、嬉しさつつーか??何だ?成長したなあ、ぼっち?!」  
「キレんぞ。」

『ハーバーの皆さんが力を貸してくれました。そしてアグネスデジタルさんという目標が、私にもう一つの道を教えてくれました。私はそれを力に変えたい??私は、私の憧れた人を超えて、ウマ娘としてここに居る事を証明したい。お姉ちゃんとそう決めましたからーだから、応援よろしくお願いします!!』

??何だ。あの子、すっかり喋れるじゃんか。どっちが本性か分かったものではないが、間違いないのは俺達にとってかつてないほどの強敵になるって事だ。それならこっちだって出し惜しみは無し??やれる事は全部やるしかねえ。

まだ明確な策も戦法も浮かんではないが、レースに絶対が無いなら勝ちへの道は必ずある。茨の道だろうが悪路だろうが、俺とデジタルなら”絶対”——何で頭抱えてんだ後輩ちゃん。心做しか耳が赤い気もするし、何よりもその引きつった笑いがクツソ怖え。

『あー??水差すようで悪いんだけどねークロフネちゃん。君お姉ちゃん居たっけ?』

『???トレーナーと、決めました??。』

『だよねー。ライブ出来る?』

『無理でずう??ごめんなさあいいい??!!』

『あんのバカ??。』

『よっ、愛され系お姉ちゃん。』

『あーキレそう。』

両手で顔を抑えながら天を仰いだクロフネと、両手でサムズアップをしながら床に倒れたデジタルはゴルシとマックに運ばれて行った。会場内からは、『てえてえ』『挟まりたい』『処すぞ』と言う野太い鳴き声が幾つも聴こえてきた。何たる絵面。あれが現マイル王と現ダー

ト王の姿である。

俺らが言えた事じゃないけど?。

『締まんねえな。』

ファン感謝祭・夜の部——そして色んな思いが交差した今年の聖蹄祭は、こうして終わりを迎えていった。

1週間が経ち、レース場。ドリームトロフィーリーグの舞台となる会場は、スタンドを埋め尽くすほどの観客で溢れ返っていた。

『さあ今日も始まりますドリームトロフィーリーグ。夢を求めたウマ娘達の行き着くステージで、会場内が主役の登場を今か今かと待ち侘びています。3番人気に上がったのはスペシャルウィーク。黄金世代と肩を並べる日本総大将が満を持して登場しました。2番人気はサクラチヨノオー、前走ではヤエノムテキ、メジロアルダンを下しての1着。威風堂々たる面持ちで、レースの時を待ちます。そして2人のダービーウマ娘と鎬を削る1番人気はやはり——。』

控え室に来る前、場内アナウンスがそんな事を言っていた。

ドリームトロフィーリーグ??トウインクル・シリーズを勝ち進み、数多の成績を残してきた強者達が集うこのステージは特別な物だ。多くの人が、ウマ娘が、彼女達の走りに夢を見る。テイエムオペラオーを筆頭とした世代も既にこの場所でそれぞれが活躍を見せていた。

いつかはデジタルにもそういう日が来るのだろう。この舞台を戦場にして、沢山の想いをあの小さな身体に背負って。

そんな中控え室では、真っ赤な勝負服に身を包んだ堂々の1番人気が大きく伸びをしていた。

「緊張??は、してないか。」

「そう見える?でもそうね??緊張と言うよりワクワクかしら。」

「お前さんの背中を追って、ダービーウマ娘が2人も揃ったんだ。初お披露目にしちや、最高の舞台だよ。」

今日この場に勇者御一行の面々は来ていない。今頃生徒会室で映像でも見せて貰っている筈だ。

改めて皆にマルゼンスキー加入の件を話したところ、『じゃあれーすだね!』とマヤちゃんの一声が皮切りとなり、あれよあれよと今に至る。何より俺が彼女をチームに入れたがっていた事は皆が知っていた為、背中を押されてしまった。気を使ってくれたのか、わざわざ2人で行ってきて良いとお言葉も頂戴したし。

勿論相棒からの後押しがあつたのも大きいが??頭が上がらん。

「そろそろ行くか。皆、1番人気を待ってる。」

「ええ??そうね。」

そうして控え室を後にして、長い地下バ道を2人で歩く。トレナーに出来るのはここまでだ。何となくジャケットのポケットからヨシエさんに投げつけられた車のキーを取り出す??未だに夢なんじゃないかと思うところは正直あつた。あんまりにも突然で、突拍子も無い預け方をされたんだ。そうもなるわ。

「その鍵。」

「ん?」

「その鍵にはね??もう1つ意味があるのよ。持ってくれた人が、”スーパーカー”の運転手。自由気ままに目的地を決めて走ってくれる人の証。君はどこへ連れて行ってくれるかしら?」

「先輩は何て言ってた?」

「行ける所まで適当に行くわ、ですって。」

「何だそれ。」

おかしくて、2人で笑ってしまった。あの人??光景が目には浮かぶほど期待通りの返答してんな。

「そうだなあ??俺なら”行きたい所へご自由に”、だ。」

「その心は?」

「悪いが、俺は運転手なんて柄じゃ無い。いつだって楽しそうに車を走らせるお前さんの隣で景色を見てきた男さ。俺にとつての運転手はマルゼンスキーなんだよ。だから行きたい所へ行ってくれ。自由気ままに走ってくれ。したら昔と変わらさず——他愛も無いお喋りしながら、助手席でナビでもしてやるさ。」

「??あははっ!何か今の君、あの人にそっくりよ。」

「そりやどうも??褒め言葉か?」

「勿論。ねえ??1つだけ教えてくれる?」

足を止めてこちらへ向き直った彼女は、真っ直ぐ見つめてきた。

それはあの日??初めて彼女をスカウトした時と同じ状況。けれどその眼に未来への恐れは無い。ただ望む答えを待っているかのような、そんな信頼の眼差し。

「今、楽しい?」

「最っ高だよ。」

「そう。なら——。」

「ああ。だから——。」

『ドライブの時間だ<sup>ね</sup>。』

地下バ道に反響した観客達の声が大きくなってくる。絶対強者がやって来たのだと、分かっているんだ。彼女はその声に応えるようにレース場へ歩みを進めた。

「マルゼンスキー！」

その背中に何かを言おうとした。

振り向かずには足を止めてくれた彼女に、トレーナーとして気の利いた言葉の1つでも送りたかったのだが??思いの外何も出てこない。

まあ——ずっと言いたかった事はある。

初めて彼女の楽しそうな走りを見たら??その勝負服に彩られた姿を見た時からずつと言いたかった事。

ようやく叶った夢の1つに向けて。

「??やっぱり、君には赤が良く似合う。」

「でしよ?♪」

満面の笑みでピースを送ってくれた彼女は、ターフへと駆けて行った。

さて??帰りはどこへ寄り道しようか。

『マルゼンスキー先頭のまま最後の直線!外からスペシャルウィーク!内からサクラチヨノオー!しかしここでマルゼンスキーが離す離す、まだ突き放す!無敗の旅路はまだ続く!4バ身引き離してマルゼンスキーが今、ゴールッ!これが”世代を超えたスーパーカー”!』



## 特別R① : 聖蹄祭初日のこと

「1500円になります。」

「にしし♪ご馳走さま〜！」

聖蹄祭が始まり、10時という業務時間の一区切り——と言ってもトレーナー業にそんなものは無い——になり、特別スタッフの腕章を付けた俺とテイオーは“はちみー”と呼ばれる糖尿病まつしぐらな激甘聖遺物の移動販売店に来ていた。若いつて凄いわね??おじさんそれ飲んだら1発で健康診断に引っかかる自信がある。

つつか1500円もすんのコレ!?高つけえ!!煙草3箱買えるわ!!  
しかしテイオーが満足気なので良し。

「次どこの巡回だっけ?」

「学園内だな。催し物やつてる所も有るけど??取り敢えずは後輩ちゃんん所へ行こう。あの託児所は毎年人手が足りないらしい。」

「りょーかい。あつ、1口いる??」

「遠慮する??見てるだけで胸焼けが凄い。」

「ちえつ、美味しいの??ズゾゾゾゾッ!」

「食い物の音じゃねえだろそれ。」

俺にとっては二郎系ラーメンと何も変わらねんだよその激物。

ブツブツ言ってるテイオーを引き連れて、俺達はトレーナー室が固まっている棟へと向かった。

移動した先では既に廊下まで子供達の元気な声が響いてきている。あそこは割と人気だからなあ??そもそも親御さん達がウマ娘のファンだったりするので、託児所とは名ばかりの触れ合いスポット。大体家族一緒に来たりするパターンが多いものだ。

エアグルーヴ、ヒシアマゾン、フジキセキ、クリークママにイナリワンと、かなりの実力者が集まったチーム。勿論多くのメンバー達も安定した成績を残しているし、ファンだって多い。俺やモル、ヨシエ

さんが特定のウマ娘にしか対応出来ないピーキー性能に対し、後輩ちゃんは相手を選ばない万能型である。

あつ、因みにクロフネとお米ちゃんは別の所でお仕事中。

しかしこの人気っぷりは何より後輩ちゃんの隠れ人気の高さよな。寡黙でクールな若手の美人トレーナーとして世間では紹介されている為、しつかりとファン層が出来上がっているのが彼女。抱かれないイケメントレーナーランキング（非公式）堂々の第1位。即ちパーフェクトウーマンで、ヨシエさんや葵ちゃんとは別ベクトルでヤベー女なのだ。俺から見ればイケメンってよりは可愛い系だけど。

まあそんな主人公みたいな5歳下の娘だが、実際は飲み口のサイズに関わらずコーンポタージュが上手く飲めなくて口の横からダダ漏れするおもしれー女??彼女の尊厳の為にも黙っていようじゃないか。空になったクソデカはちみーを俺に渡してきたテイオーは、大きく息を吸って勢い良く扉を開いた。

「やあやあ、吾輩が最強無敵のトウカイテイオー様だ！わっはっはー

♪」

「あつ！トウカイテイオー！」

「テイオーだ！」

「すっげ〜本物!!」

人もウマ娘も関係無し、あつという間にちびっこ達にワラワラと囲まれる辺り流石は奇跡の天才ウマ娘。おじさんあつという間に居場所を失ったし、そもそも一緒に入ったのに廊下へ弾き出されてしまった??凹む。

「??ヘルプ助かります。」

「あらまあ??今年是一段と揉みくちやにされてんな??。」

既に満身創痍の後輩ちゃんがのっそり現れた。よほど質問責めにあったのか、はたまたおチビちゃん達の遊びに付き合っていたのか??

髪も服もボロボロである。顔のイカつきが2割増しで凄みを増しているが、若干むず痒そうにニヤついているあたり満更でもないらしい。言っとくけどその愛嬌を他のトレーナーに見せたらお前1発でモテるからな。顔の良さを自覚しなさい。

取り敢えず襟元を正してやり、腕章もピツと貼り付け直してやれば、あら不思議！身なりの整ったイカつい小娘の出来上がり!!これがイカ娘ですか？墨じゃなくて毒吐きそうな勢いなんです。あつ、眼逸らされた。

「??どーも。」

「どういたしました。相変わらずスゲエ人集りだな??絶対人手が欲しいやつだろ。助っ人頼まんの?」

「頼みたいのは山々ですけどね??あんまし離れられないってのと、そもそも生徒さん達にも仕事があるでしょうし。そんな都合良く手の空いた子は見つけられないですよ。」

「ははあくん?さては後輩ちゃん、『Yシステム』を知らないな?」

「この海外の通販みたいな流れ何すか。知らないですけど。」

後輩ちゃんが普段仕事で使っているPCを持ってきてもらい、中央トレセン在籍者御用達の『Yシステム』について臨時の説明会を開くことにした。子供達の方は、取り敢えず無敵のテイオー様に任せておけば安心だろう。

「ハーバーみたいに出し物してるチームとかクラスつてのは、このソフトを使って人手を集めれんのよ。生徒の自主性を重んじるなら、教員やトレーナー達が最初から最後まで面倒見る必要は無い、別にリソース回せって言った人が居てな。その人が作ったのがこれだ。助っ人、何人欲しい?」

「まあ??あと2人も居れば回りますかね。」

「じゃあその項目に”2名募集”って入れな。そうしたら、このソフトと連動したアプリを携帯にインストールしてるウマ娘達から返

事が来るはずだ。因みに定員に達したら勝手に募集が切れるから、返信のダブリとかは心配しなくて良いぞ。」

「はあ??ども。でもこれやってる子って結構居るんですかね。やつ、生徒の性格考えたらやってくれていそうではありますけど。」

「その辺も大丈夫だろう。一定回数自主的に動いてくれた生徒には、出来る範囲で生徒会が要望を聞いてくれるらしいからな。」

そもそもこのシステムを作ったのが皇帝のトレーナーだから基本的には動くだろう。あの人、割と生徒と仲良いみたいだし??ただ仕事はトレーナーの仕事じゃねえけどな。何でトレーナーやってんだろ。

「便利つすね??Yって何のYです?。」

「ヨシエ。」

「だと思いましたが。あの人にしては名前がまんまと言うか。」

「いや、正式名称はあるんだよ。あるんだけど??公に言えない。」

「どんな?。」

「耳貸しな??デリバリーヘルプ。」

「デリヘルじゃないっすか。」

だから公に出来ないんだよ。あの時ばかりは俺を含めた男性トレーナー陣が心を1つにして『それだけは止めてくれ』と懇願したものだ。言って女性との交際経験が無い男性トレーナーは結構多い。流石に複雑な気持ちになりかねないし、TPO的にもバツチリOUTだし、なんならウチのチームには冗談じゃ済まないのがあるわけで??あつ、もう返信来てる。

・カレンチャンさんとエイシンフラッシュユさんがリクエストを承認しました。

冗談じゃねえのがキターーッ!!

ゴ、ゴメンよ年端もいかぬ少年達ッ!性癖ぶつ壊れたら俺のせい

だッ!!こんなグーテンタークからのニルンベルガー小さいソー  
セージもブリュー・ヴルスト大きいソーセージもポークビツツポーク  
ビツツもダンケダンケでオニャンコポン☆だぞ?!しかも300万人  
の男女を手玉に取るインフルエンサーとの閃光セット!!お子様ラ  
ンチ頼んだら満漢全席にポップジードイツ生まれのリキュール。精○  
のボトル。通称エロかわ坊やも出てきたようなもんだよ!やり過ぎ  
だよ!この後の展開、氣ーづいちゃった氣ーづいちゃったトーイトイ  
!

誰かフラッシュのトレーナー呼んでえ!あの伊達男しかこの状況  
は変えられないの!!なんて言っても『一目惚れした』とか担当に直接  
言う男だからな。童貞にはハードルが高過ぎて絶対に真似出来ない。

ふう??一旦落ち着こう。俺にはまだ出来ることがある筈だ。あの  
男はまず来ない。無い物ねだりした所で現実が変わらないし、そもそ  
もあいつが来たらフラッシュとセットで子供達が男女問わず脳を焼  
かれかねん。だからこそ、今は彼女達冗談じゃないのが来る前にそれを考える??何  
か?何かある筈——腕を襲う%バイスラあッ!!

「あはっ♡お兄ちゃんも来てたんだ!」

はえーよ。まだリクエスト受けてから30秒経ってねえだろ。物  
理的に閃光なの?そんなに子供の相手しなかったの?それともお兄  
ちゃんの愚息狙って来たの?3つ目なら勘弁して下さい。

「随分早いな2人共。」

「たまたまこの近くをカレンさんと歩いていたものですから。出来る  
限りの事をお手伝いさせていただきます。」

「そ、そうか??なら後は任せて、俺はテイオーと一緒に——アイツど  
こ行った!?!」

「テイオーさんなら今しがた『ポラリス』の呼び出しがあったから抜け  
るって言っていましたよ。アタシもそろそろモルさんと交代なんで、後  
はよろしくお願いします。」

嘘じゃん??あの娘、人に空っぽのはちみー置いていきやがった?。  
えっ!?俺この性癖破壊教室に1人残されるの!?間近で子供達の脳  
が焼かれていくのを主犯格として見せ続けられるの!?どんだけ重い  
罪状叩きつけられてんだよ!

相棒はステージの方でテイエム歌劇団の手伝い??モルも居ねえし、  
葵ちゃんも今頃はミークと自分の持ち場でむんむん仕事をしている  
頃だろう。詰みです。誰か助けて下さい。

あつ、そうじゃん。もう1人呼べばいいんじゃない。この状況を打破  
してくれるような子??例えば背が小さめの和やかムードを醸し出し  
ているような子とか。背が小さい子供好きの子とか。

そうと決まればもう1人呼んでしまえ——あつ、早い、もう返信  
来た。

・ダイタクヘリオスさんがリクエストを承認しました。

チエエエンジツ!!何でも肯定してくれる光のギャルはマジでヤ  
ベーって!あれは勝負服姿だけで実際何人も少年達のハートを無自  
覚にぶち抜いてる実力者だぞ!!破壊活動押し進めちゃったよ!この  
3人集まったらもれなく男の子も女の子も大変な事になっちゃうよ  
!そもそも後輩ちゃんのチームメンバーだけでも色々ヤベーの忘れ  
てた!!

終わりだ??俺はここに居る子供達と共に脳と性癖を焼かれてしま  
うのだ??南無三。

「??カレンはよくこういうのに参加するの?」

「うーん、手が空いた時にしてるぐらい?でも後ちよつとで回数分参  
加した事になるから、生徒会の人達の所に行こうかなって。」

「何かお願いしたい事でも?」

俺の問いかけにいじらしく笑みを浮かべたカレンは、急に距離を詰

めて囁いた。

「お兄ちゃんの事——かもね?・♪」

ドーキドキドキドキドキドキドキ。

俺の立バがツ!!!

子供の前だからそういうの止めろって! あっ、前じゃなくてもだ。

と、兎に角ポニーちゃんが吼えるからその距離感と思わせぶりな発言と彩フレグランスと耳ピコはマジで止めろツ!! お兄ちゃんにかいかいムーブしてんのか好き好きアピールしてんのか社会的に抹殺したいのかハッキリしてくれお前はツ!! もう良いじゃん! 弱みなんかとつくに握ってるじゃん!

これで誘い受けに万が一乗りでもしたら、愛の武道合気道でぐるんぐるん回されて布団にうまぽいされるんでしょ? それで『黒帯のカレンは誰にも染まらないの。だからお兄ちゃんが染めてくれる?』とか、『白帯はもう卒業だね♡』とか、『天井のシミ?? 幾つ有った?・♪』とか言われるんでしょ?? 勝ち目ねえじゃねえか!! どうしたポニーちゃん、落ち着けよ。

しかしクツソ可愛い事に揺るぎは無いので俺は全力でお兄ちゃんを遂行したい今日この頃。

ここで少しでも牽制を試みよう。俺の役目は大人の怖さを分からせることなので、時には敢えてカレンの言動に乗る事で『俺はお前に人並みにはときめいてるしセンチティブみを感じてるから気を付けよ。お、襲っちゃうからな☆』と言う意味を込めて伝えてやるのだ。実際には逆だし、ヤマカガシに啜えられたアマガエルの関係。必死な抵抗である。

まあカレンなら多少言葉足らずでも理解してくれる筈だ。賢いからね。

「可愛いカレンちゃんはいつでも俺の事を考えてくれているんだな。」  
「ダメかな??？」

「嬉しいに決まってるさ。カレンのそういう所も好きだから。」  
「っ??うん、知ってる♪」

あつ、あつ、距離ちつか??何見えないとこで指さわわしてるの？  
それ社会的にザワザワしちゃうやつよ? 8割呑み込んだアマガエル  
を甘噛みしてんのと一緒よ? その時のカエルの心境を述べよ。

ふふっ??これ伝わってねえな。華麗にスルーされたよな。手強い  
とか言うレベルじゃねえよこの妹。ノーダメージだよ。それどころ  
か、『お兄ちゃんの考えなんか知ってるよ?』、『何でちよつと抵抗して  
るの?』、『“動画”』と言う意思表示までされてしまった。やっぱラ  
スポスヤベーよ??ぴえん。

「うえーい!ヘリオス登場馳せ参上!!遊びに来たよー♪おん?デジた  
んのトレピじゃん!おつ〜!」

ぴえんとか思っちゃったから太陽神も降臨なされた。だから  
えーつて。何にも策浮かんでねえよ。でもカレンがスつと離れたこ  
とに関しては助かった。ポニーちゃんが『The WINNER』と  
言い出しそうだったからな。お前はいつだってLOSERだろ。

「おつ〜??。早いな、ヘリオス??。」

「ウチらこの辺歩いてたかんね!とりまキッズらのバイブスあげみぎ  
わ的な?カマしてフレンズって祭りだゴツホっつって!」

「そうか?皆この辺歩いてたか??ウチら?」

「パーマー連れて来た。パーマーしか勝たんっしょ?」

「あつはは、どうもー??人手、まだ要るかな。」

「うん、たすかる。」

どうすんだこの部屋。



女帝、女傑、イケメン×2、江戸っ子、ママ、ギャル、可愛い、ダンス。性癖のごった煮じゃねえか。大人でもヤベーでしょこれ。俺じゃなかったら耐えられなかった??嘘待って、1人絶対無理なのが居る。それ以外なら大丈夫だから。

後輩ちゃん??それからテイオーよ。揃いも揃って普通に俺へとバトンパスしてるけど、俺まだ仕事あるからね?見回りこただけじゃないからね?ゴミ持たされて置いてきぼり喰らってるけどさあ??。

だが??任されたからにはこれも1つの業務。そうだ業務だよ。そう考えたらずいしが楽じゃないか。出来る気がしてきた。やれるな?ポニーちゃん。うん、トレーナーさん!駄目だ気が動転してるキツシヨ。

もうええわ!やりやあ良いんだろやりやあよツ!やってやろうじゃねえかツ!童貞舐めんなチクシヨーツ!!

結局——この後大勢の子供達が、ウマ娘に脳を破壊される事になったのだった。

あつ、お父さん達も性癖を捻じ曲げられていた。多分。

## 特別R② : 聖蹄祭2日目のこと

「トレーナーちゃん??大丈夫?頭。」

「大丈夫、大丈夫。」

無垢な罵声。マヤちゃん、言葉の順序は気を付けようね。トレーナーちゃんいい歳して泣いちゃうから。そんな三十路見たくないでしょ?

だがマヤちゃんがそう言うのも無理はない。現に俺の視界は今絶賛ブラックアウト中。頬に肌触りの良い洋服の布地が当たっているし、首から肩にかけてのラインが凄まじい過負荷状態。色々な意味で辛いのだ。おまけに頭が拘束されている為に身動きが取れん。

「??あーちゃん。1回降りてもらって良いかい?おじちゃん首もげちゃう。」

「うい。」

アーモンドアイ——先日の特別指導体験でのレースでブッチギリの優勝をしてみせた、未来あるお子様ウマ娘である。何度見ても顔が良い。いやもう??顔が良い?。

そんなあーちゃんは、今がっしりと俺の顔面にしがみついている。あれ?今お返事したよね?一向に降りる気配無いんだけど。マヤちゃんがレース後によくやるフェイスハガー形態のままよ?。

まあマヤちゃんの場合は助走をつけてからのジャンプだから、ボーノとカレンとデジタルを含めた4人体制で何とか受け止めている日々だけ??それをこの子がやるって意味分からんだろ?俺もなの。でもポニーちゃんなら分かるかも??分かるわけねえだろバカが。

そもそもこうなったのは、マヤちゃんと学園内を巡回中にあーちゃんのご両親とバツタリ遭遇したことに始まった。

曰く、昨日の礼がしたいと。あーちゃんは元々ここまで誰かに懐くタイプでは無かったらしい。レースに対しての考えも前向きになっ

たとか何とか??だからまあ、気恥ずかしいがお礼を言われたのはまだ分かる。いやそんな大層な事してないけども。ほぼ豆菓子食ってたつーか一方的に口へ振じ込まれてただけなんだけれども。

曰く、クソ可愛い愛娘の事をもっと知ってもらいたいと。学園関係者にして色々な意味で有名チームのトレーナーに見て貰えるなら願ったりだと言っていた。色々な意味って何よ。めっちゃ怖い。

でも??だからかな?あーちゃんが顔面目掛けてジャンプした途端、ご両親が笑顔で距離をとったのは。『満足したらステージに連れて来てもらいなさいね』と、俺へのサブミッションも同時に飛んできたわ。そして曰く、クツソ可愛い愛娘を今日の半日よりしくお願いしますと。

あれ??これ、預けられてね?責任重大案件じゃね?確かに特別スタッフは名ばかりの暇人集団ではある。ましてや俺に関しては手が空きまくっているさ。でもこんな急に??こ、心の準備が??助けてデジたん。

そういや先輩が言ってたっけなあ??トレーナーとして1番大事なのは、周りに気を付ける事だつて。気付いたら外堀なんかねえぞつて。説得力皆無じゃねえかあの人。無事ゴールインしてんだから。

「おじちゃん??えつと??。」

「マヤノトップガン!よろしくね、あーちゃん!」

「??マヤ、お姉ちゃん??。」

「はう??ッ!」

クツツソ可愛い愛娘把握。

これ最強のロリでは??そのちよつと照れの含んだ声でそんな事を言われたら、大人に憧れるマヤちゃんにはぶつ刺さる事間違いないだろう。ロリがロリに墮とされてる??俺も余りの衝撃に膝をついてしまった——あつ、違う、これ首限界のやつだわ。そんな余裕ねえわ。

「トレーナーちゃん!マヤ、お姉ちゃんだつて!」

「うん、そうね。嬉しいね。この子剥がしてもらっていいかい。」

「マヤもくつついていい?」

「お話聞いてたかな?」

どこにくつつくんだ一体。もう限界なんだって。あと空いてるのなんか腰周りしか無いのよ。そこはダメだからね?ポニーちゃんがテイクオフしちゃうの。そんでもって何処からともなく妹が現れてテイクアウトからの満面スマイルテイクダウンツ!カワイイカレンチャンツ!!ヒヒーンツ!!

それにさつきから色んな言葉が聞こえてくる気がするんだ。『ほら、あれが噂の??』とか。『低身長チームの??』とか。人目につくところであれをやられちゃあ、たまつたもんじゃないぜ。ヌツ、でもあーちゃん分は補給出来——無理無理無理、本当に首折れる!助けて!誰かあツ!!

「人前で何をしてるんだアンタらは。」

「ふあっ??。」

抜けた声を出しながら、あーちゃんは顔面から離れていった。どうやら誰かが助けてくれたらしい。本当に感謝したい。いや、もうマジで死ぬかと——なんだア、テメエ??何で俺の前にデツツツケエブロツコリーが立ってんだ??。

「あつ、ブライアンさん。」

「血迷ったか生徒会。」

「エアグルーヴよりはマシンな方だし、そもそも好きで着ていない。血迷ってるのはいつも会長のトレーナーだけだ。ああ、いや?会長は?? まあ良い。」

めっちゃ声籠ってて聞き取りづらい。

抱っこされたあーちゃんは、脚をぶらぶらさせながらブロツコリー

をじつと見つめていた。はい可愛い。

あつ、あつ、房掴んでる！ちっちゃい手でグイグイ引つ張っちゃってる！それ多分引つ張っちゃダメなやつだから！今はそんなんでも”怪物”って呼ばれた三冠ウマ娘だから！あーちゃん、優しく扱ってあげて!!しかし君のそんな姿も百合の花。萌ゆるポニーちゃんは栗の花。もう喋るな。

「それより??前からそういう趣味だとは思っていたが、とうとう人前でか。あまり生徒会の仕事を増やすんじゃない。私が面倒になる。」

「何か滅茶苦茶失礼な誤解してないか?」

「誤解は無いだろう。そのチビ??と言うかチビ達は大概アンタが面倒を見てるんだから。」

「ふうー!今日のマヤはチビじゃなくてお姉さんなのー!!」

「そうか。それは良かったな。」

「もげた。」

あーちゃーん!!ナリタ!ナリタ横!房取れてる!!両手でゴツツソリ収穫してるよその子!気付いてブーさん!!いや、その衣装だと首の可動性0だな。

「ブロッコリーのお方、よほどのお野菜とおみうけしました。あと、もいじやってごめんなさい。」

「構わん。寧ろ着なくて済むから好きなだけ収穫しろ。そんな事よりちっこいの——名前は?」

「あーちゃんです。」

「アーモンドアイって言うんだ。昨日ブッチギリで優勝かつさらってった凄い子だぞ?」

「えへん。すごいです。」

「??そうか。良い眼をしている。もう少し磨けば、狩人になるな。」

カレンみたいになるってこと?それ狩人違いじゃない?さくらん

ぼ狩りの話してんの？

「ブロッコリーさん、この紐何ですか？」

「気になるなら引っ張ってみろ。壊してしまっても構わん。」  
「うい。」

あーちゃんを地面におろしたブライアンは、そのままあーちゃんが紐を引きやすい高さまで屈んだ。何だかんだで子供には優しいのよね、ブーさん。

そうしてあーちゃんが千切れんばかりの勢いで紐を引っ張ると——ぶるんと震えてカリフラワーになった。何言ってるか分かんねーよな。直接見たって分かりやしねえよこんなもん。マヤちゃんが放心するレベルだもん。でも白くなったんだからしょうが無い。

「??姉貴のビワハヤヒデだ。」

『んふふ??っ!』

「身内ネタは卑怯だろお前!実の姉をカリフラワーだと思ってたの!?!」

「でもトレーナーちゃんにそっくりだよね。」

「えっ、怖い怖い??どの辺が?頭白くなってきたってこと?」

「ううん。ヒモの部分。」

「何て事言うのマヤちゃん。」

騒ぎを起こさないように楽しみ——そう告げたブーさんは、そのまま俺達の前を後にした。やっぱおかしいよ、生徒会。

昼には大混雑が予想される食堂で早めに昼食を済ませることにした俺達だったが、食堂は予想よりも早く賑わいを見せていた。日曜日効果半端じゃねえ。

昭和のアイドルみたいに袖のヒラヒラを風に靡かせたワールドワ

イドウマ娘・パール姉さんがテーブルへ料理を運び、勝負服とは違ったガンマンの格好をしたタイキがりボルバーから料理にあつた調味料をぶっぱなすと言う、コンセプトが謎に包まれた。パフォーマンス。オマケでフクキタルの『開運、フンギヤロみくじ!』もセットなお得仕様らしい。お得か？

様々なグループが料理を提供しているが、堂々の一番人気はこの世代だった。

俺ら3人はその混雑した群衆の中では無く、食堂の隅にひっそり佇む屋台でその様子を見ていた。

「??物好きとは思つとったけど、とうとうその年齢に手エ出したんか。」

「お前もブライアンも何で俺が手を出した前提なんだタマ。」

「トレーナーちゃんの日頃の行いだね。」

「何て事言うのマヤちゃん。」

屋台の中で頬杖をしながら、タマモクロスは呆れた声でそう言った。ヒドイ言い分だ。俺だつてお前、ご両親からクツツソ可愛い愛娘預けられるなんて聞いてなかつたんだよ。いや聞いてても引き受けはしたけど??俺がロリに節操ないみたいな言い方はやめろ。可愛いッ!!って思った相手にロリが多かつただけだ。

そしてマヤちゃんがさつきから地味々に言葉でボディーブローキメてくる。

「しかしあれだな??タイキ達の店に比べるとこう、なんだ??落ち着いてると言うか。」

「気い使わんでもええって。ウチらは食ベ歩き用。そもそも狙つとる客層が違うし、あんまり繁盛してもオグリと2人じゃ回しきれんからな。なあ、オグリ?。」

「ああ。クリークもイナリも居ないから、今ぐらいの方が落ち着いて食事が出来る。」

「さつきからずつと食つとるやろ。」

屋台の奥——相変わらずのデカ盛りでテーブルを圧迫しているオグリキャップを見て、あーちゃんは口みたいな栗をしていた。あつ、栗みたいな口をしていた。

圧倒されるだろうな??でもあれが元祖芦毛の怪物の標準食事量だからね。仕方ないね。聴こえるかい?エンゲル係数の断末魔が。

「それで??そつちの子供は、君の連れ子か?」

「昨日のイベントで知り合つてな。懐かれた。」

「なつきました。今はおじちゃんとマヤお姉ちゃんと学校探検です。」

「そかそか。ウチにも同じ歳ぐらいのチビ共が居るから、親近感湧くわ。」

「私は一人っ子だからよく分からないが??そうだな。タマがお姉ちゃんなら間違いない。」

「一人っ子??オグリ、お姉ちゃん。」

食べ物をお口へ運ぶ手をピタリと止めたオグリキャップ。何!?!あのオグリが食を止めた!?!

「お腹が減っていないか?好きな物を食べて良いぞ。」

「じゃあ?んと??きゆうりください。あーちゃん、キューカンバー大好きなので。」

「そうか。こつちのお好み焼きも食べて欲しい。タマが作ってくれたんだ。」

「おーおー、可愛い妹が出来たなあ??オグリがお姉ちゃんならウチはオカンか。ハハハッ!」

「タマちゃん。」

「何でなん?いや、ええけども。」

「うまみ!うまみ!タマちゃんうまみつ!!」

「あくはいいい、どうもな。オグリの一口サイズに合わせんでええか



ら。口の周りどえらい事になつとるで。」

なんて微笑ましい光景。まるで実の姉妹のようじゃない??ふふつ、マヤちゃんも行っておいで。そんなにうずうずしたなら即行動が君らしいからね。写メ撮つて相棒に送つたら。

「やっぱりタマはお姉ちゃん気質というか手馴れてるといふか??色々凄いな。尊敬するよ。」

「褒めても何も出んからなー。まっ、悪い気はせんし?好きな食いもん——。」

「ぶづぶづぶづぶづ〜ツ!!」

小さな獣が唸り声をあげた。

今しがた口元をふきふきされていた末っ子あーちゃんは、何故かタマの方を見ながらアクリイの如き威嚇のポーズを取っている。

逡巡し、溜息をついたタマはお母ちゃんの様な眼差しを俺に向けてきた。あれ?なんかツライ。

「??怒らんから言ってみ。心当たり??あるんやろ?」

「ね、ねえよッ!本当に知らんからその眼を止めてくれ!いい歳の大人にそれは効くッ!」

「そんなら試してみよか?マヤノ、オグリ。ウチって凄いか?」

「うん!タマモさんは強いしカツコイイし、皆のお姉さんだよね!」

「ご飯も美味しいし、自分のトレーナーを”ダーリン”と呼ぶのは凄いい事だ。」

「お前どこの世界線で生きとんねん。呼んだこと無いわ。でもま??あんがとな。なあ、トレーナー??ウチってそんなに凄いいんか?」

「凄すぎて夜しか寝れない。」

「ぶづぶづぶづぶづ〜ツ!!」

あつ、あつ、無言の眼差しが辛いッ!『何か言うことあるかボ

ケエ』って、暖かい目を向けられるのが本当にシンドい!!それは本当に暖かい目と呼ぶのか?ポニーちゃんは訝しんだ。

「ち、ちがつ、待って!待ってくれ!俺が聞いてみるから??あーちゃん?どうしてタマをそんなにライバル視してるのかな??」

「だって?だって??おじちゃんは背が小さくてすごい子が大好きじゃないですかーッ!!」

「おっきな声で何て事言うのあーちゃんツ!!」

「昨日知り合ったばかりのちびっ子にまで己の”癖”バレとるやん。」

「へ、”癖”とか言うなお前!たまたま小さい子に寄っちゃっただけだ!ポーノだっているし、あの、あれ??俺はブルボン大好き人間だぞ!!」

沈黙——ただ、そう??沈黙。タマ、オグリ、あーちゃん、マヤちゃんが揃いも揃ってこちらを見て固まっている。

いや違うな??これ、俺の後ろ見てんな?トレーナーちゃん、理解っちゃった!一昔前のギャグ漫画とかラブコメで見た事ある!

つまり理事長案件だね!!首を括れポニーちゃん。お前の首どこ?

「??どうしましたかミホノブルボンさん。」

「??マスターに用件がありました。が、記憶媒体に該当するデータを確認出来ません。よって——。」

そこで言葉を切ったブルボンは口を閉じ、僅かに下を見てから再び目線を合わせてきた。そして栗みたいな口でポカンである。キョドってるのかお前。俺もなの。ポニーちゃんとも仲良くしてあげて。ブルルンツ!ブルルンツ!

「思い出したらまた来ます。」

「そっか??うん。了解です。」

それだけ言ってミホノブルボンはやや足早に踵を返し、この場を後にした——と思いきや、ド派手にテーブルへと激突した上ですつ転びました。

『ブツ、ブルボオオオオンツ!!!』

「どうした急に!?!ドトウみたいな転び方したぞ?!」

「怪我とかしてへんか!?!頭からドツカーン突っ込んだっただけ!!」

「??問題ありません。ウマ娘ですので、この程度の衝撃であれば行動に支障は無いですボン。」

「言動に支障きたしてるじゃねえかつ!」

「進路、オールクリア。」

「そら自分が全部ぶつ飛ばしたからな!?!」

「おっ、おとおおち、落ち着けタマモクロスッ!こういう時は迅速にサポートセンターと特別アドバイザのライスに電話してだな——!」

「いや自分が落ち着けっ!呼んだところで、2人揃って”突いてく突いてく”されて終わりやろがっ!!アカン、ウチも動揺しとる。」

「何の騒ぎかと思えば??本当に何をしてるんだ。」

おお、その声は生徒会唯一の良心!後輩ちゃんにとつて頼れるオカシなウマ娘ことエアグルーヴ——違った、でっかいナスだったわ。これがベロちゃんなわけない。名札に『見ろよビーンナス』とか書いてるし??いやこの立ち方やっぱエアグルーヴだわ。何してるってこっちのセリフだ女帝。

『血迷ったか生徒会。』

「??好きで着ておらん。取り敢えず、事情だけでも説明してもらおうぞ。そっちの子供も含めてな。」

この後??エアグルーヴには『程々にしろ』と呆れられ、たまたま通

りかかったミホノブルボン特別アドバイザーのメンタルつよつよラ  
イスにも、シリコン製の短剣で『突いてく突いてく』された。ブルボ  
ンは耳飾りの角度を変えたら工場出荷モードになるからOKなん  
だって。ふふっ。

なんだこの学園。

## 特別R③ : なんでもない日のこと

今日は勇者御一行のオフの日。時計は昼過ぎを指し、今頃はウチの可愛いチームメンバーも思い思いの休日を過ごしている事だろう。

外に行く子供らの声を耳にしながら、アパートの一室ではもうひとつ、包丁がまな板をリズムカルに叩く耳触りの良い音が鳴っている。隣で野菜を切っている我が半身アグネスデジタルも、休日を過ごすその1人——というわけでは無かった。

聖蹄祭が終わり、クロフネと後輩ちゃんから改めて宣戦布告を叩き付けられた俺達はチームメンバーに内緒で午前練習を行った。アヤベとトツプロードの2人をお願いしていた併走である。

まあ??まずはアヤベさんへの謝罪から始まったのだけでも。正座する羽目になったわけだけでも。

あの2人にはデジタルが聖蹄祭で走るから協力して欲しいとお願いしていたものの、実の所そんな予定はまるで無かった。最初から、いつか訪れるクロフネとのレースを想定してお願いしたかったのが真実である。

正直に言っても良かったのだが、なにせお願いをした時にはクロフネの走りがどれ程のものかが分かかっていなかった。それに後輩ちゃんにも悟られたくは無かったから、出来る限り他の生徒の耳に入らぬ様こっそりと進めていた事だったのだ。何処からポロツと漏れるか分からないからね。

クロフネに関しては俺のリサーチ不足と言えばそれまでなのだが??あの走りを見た今なら分かる。

恐らく、吹っ切れた今のデジタルでも勝つのは厳しい。クロフネはまだまだ化けるだけのポテンシャルがあるし、そうなったら今までの攻め方じゃ絶対にダメだ。

フェブラリース——決戦の地はダート1600m。であれば、同期であるモルや葵ちゃんも知らないデジタルの走りを磨ける可能性があった。

契約前にデジタルが2回出場した模擬レースの内、初めに出たダー

ト部門。他のデビュー願望持ちウマ娘ちゃん達に見とれていた相棒は、盛大に出遅れをカマして殿から先頭に躍り出た実績持ちだ。そう??つまり追い込み適正持ち。まだデビュー前の子達が相手とは言え、あの時のデジタルの走りには可能性があった。

その追い込みの走りを磨くには、アヤベの走りを基盤にしつつ、トップロードと競うことで攻め方を知る必要がある。勿論アヤベだけじゃなく、他にも頼んでいる子は居るのだが??今は基盤だけで良い。天才マヤちゃんも手伝ってくれるし。ふふっ、完璧な布陣。

逆にお前は何が出来ないんだ万能オタク娘。

「あつ、ここら辺で一回。」

「はいよ。味見なら任せておけ。」

「???」

「えっ?食わせてくれんの?」

「えっ?はい。」

「そうか??。」

「???」

「あの??少し屈んで頂かないと??。」

「あつ、スマン。ビックリしてた。頂きます——うん、相変わらず美味いわ。ウマ娘だけに。ふふふっ。」

「張り倒しますよ。でも良かったです。」

満足気な顔をした相棒は、そのまま野菜炒め用の食材切り作業に戻った??が、何やらチラチラとこちらを見て集中出来ていないようにも思える。指切るぞー。

「??良かったついでにトレーナーさんにずっと聞きたかったんですけど。」

「どうした?」

「その??何故先程から隣で見ているのでしょうか?あつ、別に嫌とかそう言うワケじゃ無いですよ。ただまあ??ちよつと落ち着かないと

言いますか??。」

「どうしてつてお前??脚見ろ、脚。」

「へ?脚?。」

そう言つてすつとぼけた顔をしたクソかわ勇者は、俺の脚を見て固まった。

「味見して欲しいので来て下さいって言われてから、ずーつとお前の尻尾が絡まってんだよ。何か怒られるんじゃないかねえかと思——。」

「わあああああああああツ!!」

「そこでテンパるな!危ねえからっ!!」

「ちつ、ちがつ、これ、これはそういうのじゃッ!」

「分かつてるから包丁置かんかいッ!!」

??たまーに、こういう所が有るけれど。愛嬌、愛嬌。

取り敢えずは相棒を落ち着かせ、何とか生きて昼食になった。

テーブルの上には彩り豊かに、サラダや煮物、野菜炒め??後はポーンに教えて貰った小料理の数々が並んでいる。ありがとう、ポーン。君のおかげで俺は死なずに生活出来ています。ありがとう、女神。無人島から今日までの恩は、最早返しきれません。トレーナー人生を賭けて返します。大きいのは良い事だよね!静まれポニーちゃん。この小心者が。

『頂きます。』

「あつ、お醤油無くなりかけてましたよ。」

「ん??じゃあ買いに行かなきゃな。」

「ですね。」

「ところで、午前中の手応えはどうよ?。」

「上々、でしょうか。アヤベさん、やはり同世代の中でも特に末脚の鋭さが際立っていると言いますか??目を見張るものが有りますよね。オペラオーさんやトップロードさん、ドトウさんとはまた違った感覚

と言いますか??。」

ふふっ、もうその感覚を分析して己の物にしようとしているのか。流石俺よりトレーナー適性の高い女兒。

まあ??お前さん2人まとめてぶっちぎったけどな?しかもあのクールな美人の方は負けず嫌いだから延々やる羽目になったけどな?なんならちよつと??ほんのちよつとだけ、ムキになってたけどな?

心のトップロードが止めてくれなきや無限併走コースだったぞ。正直コイツなら悦びかねん。

でもカワイイカレンチャンには報告させて頂きました。後で布団乾燥機の刑に処されたいと思います。カピカピポニーちゃんとお呼び。

「後はトレーナーさんがスイープさんをお仲間に取り入れてくれるのなら完成しますかね。」

「それはイける。だってスイーパー、絶対俺の事好きだもん。」

「草。」

「キレそう。」

「好きかはさておき、確かに相性だったらお2人共バツチりだと思えますよ??もし担当がアタシじゃなかったら、きつとトレーナーさんはスイープさんと上手くやってたかもしれないですね。」

「担当はデジタルだったよ。遅かれ早かれ。」

「またまたあ。」

「俺の根っこは出来てたんだろ?なら、それだけは絶対に変わらない。」

モジモジと居心地の悪そうに反応したデジタルは、それっきり黙々と飯を食っていた。その怒ってんのか笑ってんのか分からない顔つてどんな感情から来てんの?もしかして俺今シバかれそう?や、やめ??怖くなってきた??。



いやしかし、流石ウマ娘??めっちゃ食うな。それはお前、ちよつとした運動部だぞ。あつ、アスリートだったわ。

そうして静かな(?)昼食タイムを終え——俺とデジタルは今、神棚の前である。そこにはとあるBlue-rayBOXが供物として捧げられていた。

「同士よ??今日の本来の予定、覚えているな?」

「勿論ですとも同士。して、どのライブ映像を吟味するんですか?」

「ふふふ??これをしかと刮目せよ!!」

「それはッ!?『トレセン学園在籍ウマ娘ちゃん並びに関係者が選んだもう一度みたいウイニングライブ100選永久保存版』ッ!しかもトレセン学園内限定Ver.ッ!Blue-rayディスク4枚の中にありとあらゆるウマ娘ちゃん達の栄光と夢の輝きが詰まったまさにウマ娘ちゃんオタクにとつての宝箱に等しき聖遺物!!生きてて良かったッ!!!」

「早口ありがとうオタク君。今日はこのDisk3だ。勇者御一行の割合が多いし、何より最後にはお前の香港Cでのウイニングライブが——。」

「別のにしましょう。」

「嫌です。絶対に。嫌です。」

ごねるデジタルを他所に、クソデカテレビに繋いだレコーダーを起動した。やめつ、裾を引っ張るな??ええい諦めろお前!俺はなあ!香港Cの時の思い出に浸りてえんだよ!ライブ後に後ろのセットが軽く爆発してお前がビククリした時の??あの時の楽しかった思い出に!!

まあ現地のスタッフさんと共同で爆発させようって話したのは俺だが。やってくれるって言うし??デジタルのファンになったって言うてくれたし??なんならお前、スタッフさんと連絡先だって交換したんだぞ俺は。

「そんなに嫌がるなって。なっ?」  
「??良いですけど。」

口を窄めたまま、いつの間にか両手にペンライトを持っていたデジ  
タルは渋谷体の前<sup>定位置</sup>にすっぽり収まった。ウチはソファアとか椅子と  
かその他諸々を犠牲にしてクソデカテレビ君を買った為、必然的にこ  
うなる。背もたれ替わりにされるから、胸から腹辺りまで非常に温  
い。あと尻尾がくすぐつたいわ。えっ、ちっちゃ。今更だけど143  
cmちっちゃ。

テレビではカワイイカレンちゃんによる『本能スピード』が流れて  
いる。赤色のペンライトを持ちながら、相棒は感嘆の溜息を零してい  
た。生まれればこつちのものよ。

しっかし相変わらずカメラワークが仕事し過ぎてスゲエとしか言  
いようが無い。余す所なく可愛い妹分の猛烈な可愛さとセンチテイ  
ブさが詰まっているじゃあないか。このクオリティで関係者は無料  
配布とか太っ腹過ぎる。

「??カレンさんって、可愛いじゃないですか。」

「宇宙一可愛い。」

「歌う曲がどれもカッコイイに寄ってるの??正直——。」  
『堪らん。』

分かるマーン!

何かのキャンペーンだったか忘れたが、センタータマモクロスにカ  
レンと殿下が歌った『BLOW my GALE』の映像を見た時に  
も思った。ああいうとこ狡いんだよなあ??これでポニーちゃんさえ  
大人しければ??。

いや、だからカレンがポニーちゃんの舵取りをしようとしているの  
だろう。んっ?これだと俺が負けてる事にならんか?違う違う、俺は  
どっちかと言えばカレンを分からせようとしてて??でもそうすると

ポニーちゃんが??うん???

??おつ、大人をからかいやがってあの妹はア~~~~ツ!!

でも1度だけカラオケで彩fantasiaを歌って貰った事も、あるにはある。感想としては??2度と歌わせてはならないと言う結論に至った。あれは兵器だ。絶ツツツ対墮ちる。俺はお兄ちゃんだったから耐えられたが、ポニーちゃんなら耐えられなかった。じゃあ耐えられてねえじゃねえか。本当に愚息だなお前な?

「あつ、そうでした。トレーナーさん、両親がまたご挨拶したいからは非と連絡を送ってきてまして。」

「んあ?ああ??じゃ近い内に挨拶行くか。」

「いつもすみません??。」

「OK、OK。最初印刷業の事とか機械の使い方をミツチリ説明された時はどうしようかと思っただけど、覚えてみたら楽しいしな。」

「父には言っただけ聞かせます。本当に。2度とさせません。」

そこまで覚悟決めた顔で言わなくても、気にしてないからね?お前それ秋天の時と同じ位覚悟ガングマリしてる顔だからね?

俺としては新鮮で楽しかったりするんだ。大人になると、自分から動かない限り新しい事を学ぶ機会ってのは少なくなってくるから??なんて思ってしまうぐらいには時が流れてしまった事に戦慄を覚えている今日この頃。そうだよ、人生30年終えてんだよ。大丈夫、まだ髪はある。

でも親父さん、物凄く親身に教えてくれたというか??あわよくば仕事継がせるんじゃないかねえかって勢いだっただな??いやいや、それは無いだろうけども。

「そう言えば??俺もお前に聞きたい事があったんだ。」

「なんででしょう?」

「ファン感謝祭のライブ。あんな事言っただけ良かったのか?」

デジタルとクロフネは途中離脱した為に順番を変えてもう一度出て来たのだが、その時デジタルは観客に向けてこう言っていた。

『アタシはもう無敗のマイル王でも無く、勇者でも無く、普通のウマ娘オタクで構いません。まだまだ走りますけど、今後は“勇者御一行”の皆さんを改めてよろしくお願いします。』

“マイル王”、“勇者”、“変態”<sup>??</sup>。確かにこいつは色々な名前で呼ばれてきた。でもそれはデジタルの成績だったり行動だったり愛嬌から来るものだし、何よりファンが付けてくれた2つ名のようなもの。でもそうじゃなく、普通のウマ娘で良いのだとコイツは言っていた。

デジタルはウマ娘を推すファンの気持ちだつて良く知っているだろうから、何か考えがあるなら聞いておきたかった。また知らずに何年も——なんて、御免蒙りたい。

「良いんです。だつてアタシ達は、もうチームじゃないですか。きつとこれからまだまだ増えますし、チームの皆さんそれぞれが推すべき勇者達ですよ。」

「??そっか。それもそうだな。ちよつと安心したわ。」

「それに、ヨ——あの時髪を結ってくれた方が言つて下さったんです。自分にとって大事なもの、大事な事が有るなら??ちよつとぐらい、優先したつて良いんじゃない、と??あの?なので??。」

どこか落ち着かない様子で、デジタルはモジっていた。耳ヤベー事なつてんな??心做しか、ほんの少し身体が強ばっている気もする。そうしてこちらを振り向いたデジタルは、申し訳なさそうに??けれど真っ赤になった顔で、言った。

「も、もももし??私をまだ勇者つて呼んでくれる人が居るなら??つ。それは、あの??だつ、だだだ大事な??人、に??大切な1人に、呼ん

で欲しいって??お、おおっ、思いまし、て??。」

眼を泳がせ、言葉に詰まり、終いには完全に下を向いてしまったが??そういう事らしい。こういう時恥ずかしがられると、こちらとしても少々むず痒くなるもの。何をそんなに照れる事があるのか??全く。俺はもうお前の事、ちゃんと分かっているさ。

「そうだな——クロフネに呼んで貰えるように頑張らなきゃ痛たたたたたたッ!!えっ?!?何で太腿抓った!?!」

「キレそうだったの。」

「キレそうだったの!?!」

スンツ??となった相棒は、そのまま視線をテレビへと戻した。

えっ、拗ねた?バツ、バカを言うな??相棒が拗ねたらお前、大変なんだぞ。普段滅多に起きない事象なんだから、幾らデジタルの理解率100%の俺でも対処が難しい。

これ以上無いくらいにパーフェクトな回答を返したつもりだったのに、物理ダメージで返されたわ??痛ってえ??。

「今みたいな対応、他の皆さんにしたら駄目ですからね。」

「ええ??や、やったらどうなる???」

「食べられます。」

「助けてデジたん。」

「ご自分で始めた物語なので責任を持って下さい。」

ぎゃあっ!相棒が完全に拗ねたーッ!!何が理解率100%だボケッ!!100分の1%やろがイッ!!

まっ、待ってくれ、俺1人には荷が重すぎる!いや、確かに『あっ、可愛い。ウチのチームに??』みたいな精神で集めたメンバーだけでも!大人をからかっちゃいけないぞ☆とか教えようとしている身だけでも!デジタルに『良い?スカウトして良い??アオハル手伝って良い

「???」とか許可貰ったけれども!!

責任持つって言うか責任取らせれそうなのがチラホラ居るじゃん！童貞結構頑張ってる方じゃん！ヤダーツ！まだ社会的に死にたくなーいッ!!

「??悪かったよ。でもさ——やつぱり、お前の隣が1番落ち着くわ。」

「??それは??まあ、その??そうですね。」

怒られはしたが、こんな日もある??と、思いたい。多分これからも世話になる事は沢山あるだろうし、手伝える事は喜んで手伝うさ。なななっって戦友で、同士で、たった1人の最初の相棒パートナーなんだから。

こちらに身体を預けてきたデジタルはテレビを見ながら、ピンクになったペンライトをキュツと握りしめている。返してくれた言葉には、僅かながら温かさが戻っていた??ら、嬉しいですね。

今までと何にも変わらない、そんな休日の昼下がり。

「あつ、待ってくしやみ出そうへッツツプシ!!!」

「耳がア————ツツ!!!」

「ごめりん!」

### 3章 Special Record !! プロローグ : マヤ、聴いちやつた!

「もーいーくっ寝ーるとー♪」  
『なーっーがっしゅーくー♪』

即興の歌に、隣を歩くカレンちゃんとボーノちゃんが合わせてくれる。

そう——来週からとうとう夏合宿が始まるの!今年はマルゼンちゃんとロブロイちゃんが一緒に初めての夏合宿。しかもスイープちゃんも来てくれるんだって!

さらにさらにヨシエちゃんのチームからも、なんとキタちゃんがゲスト参加!ヨシエちゃんは会長さんやテイオーちゃんと用事があるから行けないって言ってたから、ちよつと寂しいけど??でもその分、トレーナーちゃんがたつくさん楽しい事考えてくれるよね!

「トレーナーちゃん、今年も最後に水鉄砲大会やってくれるかな〜!去年はボーノちゃんが活躍してたから、今年はマヤが勝ちたい!」  
『水ちゃんこでドスコイ!』って言いながら、お兄ちゃんの顔に水浴びせてたね〜♪」

「うん!トレーナーさんがね〜、『鍋も鉄砲だからセーフ!』って言うてくれてね〜!」  
「鍋も鉄砲???そっかー!」

ゴメンねボーノちゃん、ちよつとマヤ分かんなかった。

でもボーノちゃんとトレーナーちゃんが分かかってれば問題無いよね!トレーナーちゃんが分かかってるかは置いておいて!

うちのチームの合宿はオンとオフの切り替わりがハッキリしてる。練習する時とはことんするけど、そうじゃない時は全力で遊んじゃおうってスタイルだから、皆夏祭り用の浴衣だったり海で遊ぶ用の水着

だったり??準備する物は色々。

今年の夏は——ううん、今年こそは!せくくくつたいに、トレーナーちゃんの事ドキドキさせてみせるんだから!!

「スイープちゃんが来る事、多分お兄ちゃんはまだ知らないだろうし??あははっ、喜ぶんだろうなあ♪」

「ね〜!後でフラワーちゃんにも声掛けてみよっかな!」

そんなお話をしながら、マヤ達はトレーナー室まで来た。

部屋の中からはトレーナーちゃんの声が??誰かとお話してる?でもトレーナーちゃん以外の声は聴こえないし??電話っぽいけど、お仕事かな。

そうして、カレンちゃんがドアノブに手を掛けた時だった。

『いつまでその話引つ張るんだよ??だ、だから告白した件は悪かったって??。』

悲鳴をあげたドアノブが、扉にサヨナラをした。

何が起きたか分からなくて、ボーノちゃんと顔を見合せて??ようやくトレーナーちゃんが、聞き捨てならない爆弾発言をしたんだって理解して。ふとカレンちゃんの方を見ると、扉から手を離して立ちすくんでいた。笑顔で??でも手にドアノブを持ったまま。

『夏合宿始まったら、顔見せぐらいはするから。ウチの新しいチームメンバーに挨拶しとくか??おう、別に。まあその件だけは伝えとくさ。じゃあまたな、ミチコちゃん——好きかどうか聞いてくんじゃねえよツ!擦るなツ!じゃあな!!』

「どすっこーいッ!!」

カレンちゃんの表情から何かを察したのか、ボーノちゃんが扉に張り手をした。勢いよく開いた扉の向こうでは、電話を片手にトレー



ナーちゃんがビツクリしてて??何も言わないまま、カレンちゃんはぱかプチぬいぐるみで埋まったソファアにちよこんと座った。

「何?何??えっ??授業、お疲れさん。」

「うん??それは??うん。」

「ど、どうした?カレンも何だか調子が悪そうだけど??。」

トレーナーちゃんの声に振り向いたカレンちゃんは、何も言わずにニコニコ笑っているだけだった。

あつ、トレーナーちゃんちよつと怖がってる。

「あ、あのねトレーナーちゃん!今回の夏合宿なんだけど、実はスイープちゃんも一緒なの!」

「えっ!?!そつ、そうか?そうか??ふふっ。」

「それでね??えーつ、と??参加してあげるんだから迎えに来なさいつて言ってたよ!」

「しよ~~~~うがないな~~~~!!じゃあちよつと行ってくるから、皆はゆっくりしててな!帰ってきたらミーティングだ!ヒュー!ドアノブもげとるやんけツ!!」

そんな事一言も言っただけ。

ゴメンねスイープちゃん、トレーナーちゃん??でも今は、マヤ達大変なの。気持ちをどこに向けたらいいか分からないし、何よりカレンちゃんが??。

「あつ、カレン——何かあったら、すぐ言ってくれよな?俺はちゃんとお前さんの事も見てる。お前さんの言葉や気持ちは、俺にとつて大事な物だからさ。」

頭にそつと手を乗せながらそう言っつて、トレーナーちゃんが居なくなつたお部屋。誰も何も言えない空気の中、カレンちゃんがようやく

ソファアで横になってぬいぐるみに顔を埋めていた。

「??グスっ。」

泣いちゃった!!!あのカレンちゃんが!!!

人前で絶対に弱みを見せないって言われてたカレンちゃんが??お耳へにやへにやになってる??。

トレーナーちゃん??この間、『カレンに弱点とか無いのかな?』って言うってたけどね。マヤ、本当は大きな声で言いたかったんだよ?

弱点が何言ってるの、って。

さっきのも状況が状況じゃなかったらパーフェクトだったんだけどな??このチーム、大体トレーナーちゃんが弱点なのに本人がまるで気付いてないし??あっ、どうしよう、マヤも悲しくなってきた。ちやっ。

「あらあら、皆どうしたの?何か扉も壊れてるけど??。」

「ステータス:『悲観』を検知。恐らくは先程廊下で転んでいたマスターからの精神攻撃によるものかと思われます。」

「マルゼンちゃん?ブルボンさん??。」

「もし良かったら、お姉さんがお話聞いてあげる♪」

重苦しい空気の中、そう言ってくれるマルゼンちゃんが物凄く大人びて見えた。ううん、きつともう大人のお姉さんだよね??だってトレーナーちゃん、マルゼンちゃんの事凄く頼りにしてるし??この間も買い出しに行ってきたらしい??。

やっぱりマヤ達だけじゃどうにも出来ないから、マルゼンちゃんにさっきの事を話してみた。

「そういう事!パーペキに把握したわ!ふふっ、トレーナー君も大人の男性だもの。あの性格だし、色恋話の1つや2つ出てくるわよね。」

「マルゼンちゃんは??悲しくならない?」

「えっ?私?そうね??だってあの人が皆の事置いていくだなんて思わ

ないもの。そ・れ・に！聞いた感じだと昔の話っぽいじゃない？悲観的にならなくてもバッチグー！元気だして行きましょー！」

笑顔でそう言い切れるのは、やっぱり大人だからかな??でも、うん。そう言われるとそんな気がしてきた！そうだよね！カレンちゃんもちよつとお耳が戻ってるし、大丈夫大丈夫!!

「お疲れ様です。はふう??本日も皆様方の美しいご尊顔を拝む事が出来る幸せ??デジたん、世界に感謝致します??ありがてえ??。ですが、ほんの少々いつもより重めの気が漂っているのもまた確か。ふむ——トレーナー<sup>あ</sup>さん、何やりました?さつき壁にぶつかってましたし。」

あつ??そうだ。そうだよデジタルちゃん!!多分デジタルちゃんが知ったら一番ダメージ大きいよ!!どつ、どうしよう??内緒にした方が?でも隠し事したらデジタルちゃん傷ついちゃうかもしれない??ええ?トレーナーちゃんやあん??転んだりぶつかったりしてる場合じゃないよ!!

「皆青春の真っ只中なのよ。トレーナー君、電話で昔告白した相手とお話してみたいでね。それを皆が聴いちやったらしくて。」

「えっ!?マルゼンちゃん言っちゃうの!?!」

「隠すよりは良いかなあつて思つて??皆可愛いわよね♪」

「最&高です。しかし成程??納得しました。それで扉があんな事になってるんですね??ではトレーナーさんに直して貰いましょうか。」

そう言つて笑つたデジタルちゃんは鞆を置いて、ホワイトボードにおっきなハートマークを書いた。その下にトレーナーちゃんの顔写真を貼つて、ハートの中にはマヤ達皆の顔写真。そうして言ったの。

「はい、これがあの人の脳内です。その??僭越ながら申し上げますと、あの人大概別の事考えていても基本的に皆さんの事ガチ推し勢と言いますか。好きすぎて最早離れるとか絶対に無理だと思えますよ?絶対に。絶ツツツ対に。」

「説得力と念押しが凄いわね。」

「流石チームリーダー。」

「いえいえ??と、とにもかくにも!余程の事が無い限りは大丈夫です!ぶつちやけますと、あの人の”癪<sup>へき</sup> 考えたらまあ無理でしょうしねツ!!」

「そっか??じゃあミチコちゃんって言う人にも、もう1回アタック掛けたりは無いつて事だね!」

「ミチコ、さん???」

その名前を聞いた瞬間、デジタルちゃんは顔が真っ青になっていった。あつ、マヤ分かっちゃった。今余程の事が起きたっぽい。

「ああ、そういう、あつあつ??おああーーツ!!」

「デジタルちゃんどうしたの!?大丈夫だよね!?余程の事が無い限りつて今言ったもんね!」

「ええ、あの、大丈夫、大丈夫です、本当に大丈夫なんです!」

「さっきまでの説得力0だよ!ほら見て、カレンちゃんなんてもうぬいぐるみに埋もれすぎて尻尾とお耳しか見えないの!安心させて!!」

「その人は、ああああの??ゆ、勇者御一行を応援して下さってて、お料理上手で、お話が上手くて??それだけなんですうーーツ!!」

「あつーデジタルちゃん!!」

扉を破壊して逃げるように、デジタルちゃんは居なくなつた。

1番トレーナーちゃんと関わりの深いデジタルちゃんが見せた本気の動揺に、カレンちゃんも完全に埋まって??えっ、待ってそんなにあったの?ぬいぐるみ多過ぎない?じゃなくて!!

ポーノちゃんは考え事してて、マルゼンちゃんは困つた様に笑つて

??ブルボンさんは空を見てた。空?ううん、多分”空”。  
えっ??どうすればいいの?

「どしたーおデジ——扉吹っ飛んどるやんけツ!!」

「トレーナーちゃんが戻ってきちゃった??じゃなくって!えっと、えっと??ブルボンさん、取り敢えずホワイトボード誤魔化して!!」

「任務了解。これより『改ざん行為』を行います。」

「聞こえが悪いよ!カレンちゃんは——あつ、戻ってる。」

「大丈夫よマヤちゃん。トレーナー君の事だもん、逆に堂々としてた方が伝わるわ。多分。」

「そうかなあ!？」

そうしてる間にも廊下からトレーナーちゃん達の声が近づいてくる!お、おかしいところは無いよね!いい、いつも通り??いつも通りのマヤで??トレーナーちゃん達が入って来たら、ニコニコ笑顔で——  
!

「そういう事だから、アンタ達は今日からアタシの使い魔よ!!返事は“はい”か”ワン!”」

『ワン!!』

待って、マヤついていけない。

今のバタバタしてた一瞬で何があつたの?

何でトレーナーちゃん、顔に土付いてるの?刺さってた?

何でデジタルちゃんがトレーナーちゃんをお姫様抱っこしてるの??

そして何で2人ともノリノリでスイープちゃんと主従関係を結ぶ状態に発展するの??

あれ、もしかしてマヤ??そんなに物事分かってないのかな??。

困った様に笑っていたロボロイちゃんが部屋に入るなりこつちを向いて固まった。それに続いてスイープちゃんも??何だろう。

「??ねえ。アンタ、チームでどんな立場なの?」

「えっ?普通にトレーナーだけ?ど??。」

もしかして――。

固まったトレーナーちゃんを見て、部屋に居た全員がホワイトボードの方を向いた。

さつきまで大きな♡マークで囲われてたチームの顔写真は、今度は△で囲われてる。ペンを持ったブルボンさんが満足気な顔で、『改ざん完了しました。』って言ってるけど??ブルボンさん。

それ、食物連鎖だよ。

何とかしなくちゃ。

そう思うのに、時間は掛からなかった。あれから1週間が過ぎて、”ミチコちゃん”についての話は挙がらなかったけれど??マヤもカレンちゃんも、そしてデジタルちゃんも。或いは平気に見えてたブルボンさんも。

みんなみんな、合宿所へ向かうバスの中では空気が重かった。ロブロイちゃんは直接聞いてなかったけれど、流星に何かを察してくれたのか、ずっとメガネが光ってて顔色が分からなかった。

もし――もしも”ミチコちゃん”って言う人が、後輩<sup>ヒメ</sup>ちゃんみたいに自分の気持ちを伝えられなくて少しだけ雑に扱ったりするタイプだったら。

ヨシエちゃんみたいに、絶つつつ対トレーナーちゃんの事好きなのに距離感が分からなくて喧嘩した後でこっそり凹んでるタイプだったら――大人同士の関係は、マヤ達がどうこうできる問題じゃない??。でも、だからこそ??そういうお話があるのなら、トレーナーちゃんにはきちんとお話して貰いたいって思う。だから??。

「マヤが何とかするんだ。」

「あの??マヤノさん?」

「安心してデジタルちゃん。マヤが、キチンとトレーナーちゃんとお話するから。先ずは情報収集!それから協力してくれそうな子達にもお願いして、後は——。」

「ヒエッ??あ、じゃ、じゃあ??アタシもトレーナーさんとお話を??。」

「それは待つて!!」

「何故ッ!」

「だって??皆、デジタルちゃんのこと大事に思ってるから。だから待つて。デジタルちゃんは——最後にビシツと決めてくれれば良いからね!」

「トドメをさせとツ!?!しかし?いや、あの??はいっ!!」

デジタルちゃんはニツコリ笑ってお返事してくれた。顔色は青いままだけど、心配無いつて言うのはこれから行動で見せなきゃね!

そうしてバスは合宿所に到着した。

今回は勇者御一行に加えてスイープちゃんとキタちゃん、それから急遽トレーナーちゃんから紹介されたカワカミちゃんも一緒に計13人の大所帯。皆それぞれがバスから降りた所で、先にトレーナーちゃんと一緒に移動してたマルゼンちゃんのスーパーカーが目に入っ——。

「長旅お疲れさん。あつ、荷物置いたら例年通り自由時間だぞ!」

「待つてたわよく!ささつ、今日は目一杯遊んじやいませよ♪」

「トレーナーちゃん??マルゼンちゃん??何でもうビツシヨビシヨなの?」

手に水鉄砲を持って、ハートのサングラスを掛けた2人がやって来た。

駐車場に。

水着で。

ビシヨビシヨのまま。

大人ってなんだろう。

「——夏の誘惑に、さ。」

「そうね——渚が私達を呼んでいたの。」

「そっか??じゃあ、しようがないね。」

「明日からガツチリ練習だからな。その分今日はどこん羽目を外して??カレン?どうしばぼぼぼぼぼん!!」

笑顔のカレンちゃんは、トレーナーちゃんが持ってた水鉄砲を躊躇いなく顔に発射した。勢い凄いね。

夏合宿??大丈夫かなあ?



## 第1R : ユーコピー? マイポニー!

「俺はカレンに怒られるのかもしれない。」

「考え過ぎじゃない?」

合宿所へ入って行った皆を見送り、項垂れた俺のケツに水鉄砲を撃ちまくりながら、マブい姉ちゃんはその言った。やめっ、ち、ちべたい!!

いやしかしだな??どうもこの1週間、勇者御一行の空気が重苦しい気がするんだよ。多分勘違いじゃねえだろう。それもこれも、何故か俺の知らない所で食物連鎖が完成していたあの日からだ。

誰が主催かは分からないが、ブルボンのヤツめ??やたら嬉しそうに耳を動かしておってからに??.俺が1番下なのは納得いかん!1番下はポニーちゃんだぞ!物理的にも。

相棒に何かあったのか聞いても、『年貢の納め時です』としか言わないし、カレンはズーッとニコニコしたまま会話は一言で終わるし??ブルボンなんか会話したら必ず1回ブルブルする始末。ヒヒン!俺が何したって言うんだ??!

「トレーナー君も罪な人よね。実はモテモテなのに次から次へと女の子を引っ掛けちゃうんですもの。」

「本当にモテモテだったらもうちよいマシな対応出来ると思うんだよね??後言いい方よ。俺がいつ女子おなごを引っ掛けたんだ。」

「NOW。」

「OKバブリー、水に濡れる覚悟は良いな?」

「冗談よ、冗談!ふふっ、皆キミの色恋話に敏感になってるの。ミチコさんって人にアタックしたんでしょ?」

何で俺の黒歴史を知ってるの???

あつ、そうかデジタルか!確かにあの時はおデジしか面倒見てなかったし、笑い話の1つとして教えたんだ!たった一言、『草。』っ

て返されたけどな。

ん？じゃあ何でマルゼンは“色恋話”とか言ってたんだ？知ってたからそうはならないと思うんだが??。

「ねねっ、その人ってどんな人？お姉さん気になるな♪」

「ええ??言うの？あつ、あつ、冷た！分かりました言います！冷たいツ!??ミチコちゃんは同じ歳でBARのマスターやってるママさんみたいな人だよ。”オールカマー”って店だな。高校時代の同級生なんだ。」

「ふくん？もしかして、飲み過ぎた勢い？」

「ああ??あの時色々あった時期でさ。後先考えずにベロベロになっちゃまって??ふふっ、俺が告白なんておかしいよな。アイツ妻子持ちだし??。」

「君の告白自体は別に——妻子持ち?。」

「ミチコちゃん男だぞ。」

「ゴメン、今何の話してたっけ。」

「えっ?。」

「えっ?。」

沈黙——。

互いに何も言わず、ただ無表情のまま見つめ合って??僅かに考える素振りをしたマルゼンスキーは、ようやく何かを閃いた様に手をポンっ、と叩いた。リアクションの古さよ。

「ああ成程っ!”<sup>オールカマー</sup>全員オネエ!”そういう事だったのね!」

「そういう事。何だ、俺はてっきりデジタルから聞いているもんだとばかり思ってたよ。」

「そのデジタルちゃん、青ざめてたわよ。」

「えっ?何で?。」

「えっ?何でかしら??。」

『??えっ?』

ダメだ埒が明かねえ。これ以上はマルゼンに聞くのも酷な話??やはり、相棒。あれに聞かねば事の真相は決して掴めぬ。

しかし上手いことデジタルとあれこれ話をする機会が訪れないのもまた事実。何故ならチームメンバーがデジを庇ってるようにも見えるからだ。

ぐぬぬ??こうなれば奥の手よ。スイーピーかキタちゃん、或いは我が親愛なるキングに託されたカワカミ姫に言伝を頼んで――。

「ねえ使い魔。」

「おっ、どうしたスイーピー?」

「ロボロイが自由時間に練習していいかって言ってるんだけど。」

「構わないぞ。俺の目の届く範囲でやってくれりや、ちゃんと見るかな。ただ今空いてそうな場所と練習は??タイヤ引きかなあ。」

「ふーん。じゃああのバカデツカイやつ持ってくれば良いのね。行くわよキタサン!」

「あつ、ちよ、待って下さいよスイープさーん!!トレーナーさん、これヨシエさんからのお手紙です!」

「はい、ありがとさん。」

学校指定の水着に不釣り合いな大きな魔女帽子を揺らし、スイーピーはキタちゃんと共に歩いていった。ふふつ、なんて可愛さ。やはり魔法少女仲良し大作戦は完璧に決行しなければならぬ。

何となくだが、彼女は人の上に立つスキルもセンスもある気がしてならないのだ。しかもからかいっ気無しに俺の事好き。絶対好き。

即ち――味方に付けければウチのボス達も容易に手は出せまいと言う事!なーっはっはっは!!我無敵!無敵の童貞、即ち童帝なりッ!!凹む。

して??何だこの手紙。アイツ俺に何寄越しやがった。ご丁寧にハートのシールまで貼っちゃってよお??どれ、1通目??。

——キタサンブラックは素直な良い子です。勇者御一行ならば、彼女の力を十二分に伸ばしてくれる事を期待し、また、一回り成長した彼女に会える事をポラリスとしても楽しみに待っています。どうか彼女の事、よろしくお願いします。

??怖い。えつ、怖い怖い怖い!!何この文章!!本当にクソ女<sup>アレ</sup>が書いたのか!?正式に任されてるじゃないですかヤダーツ!!めっちゃくちや責任重大案件!魔法少女仲良し大作戦とかバカ言ってる場合じゃねえ!!

た、確かに今回ルドルフやテイオーとフランスに行くとかで神妙な面持ちしてたけど??何か抱え込んでんのかアイツ??素直に頼りそうもねえもんな??。

ええい、そこは後で直接聞けば良い。と、取り敢えず今は2通目を??。

!! ——お前キタちゃんに手エ出してみろぶつ殺してやるからなツ

だよなあツ!?そんなわけねえよなあツ!?1周回って安心感すら覚えるわクソ女がツ!!紛らわしい事してんじゃねえよ!無駄に氣い使っちゃまっただろうがよマジで——!

「ああああの、トレーナーさん?!スイープさん達は!」

「めっちゃデカタイヤ取りに行つたよ。練習するならしつかり見ておくから、怪我せず無理せず精神で頑張れロボロイ。」

「はっ??はいー!」

遅れてやってきた水着のロボロイが、ぺこりと頭を下げてはパタパタ走っていった。ふふつ、可愛い。一気に落ち着いた。

さて、と??。

デデッ、デッ、デデッ?!?!?めっちゃデカパイや!!何だ今の衝撃はッ?!?思わずロブroyの目ガン見しちまったよ!あれが2ヶ月?!?2ヶ月間?!?!?バカ言うなお前コノヤローツ!!無理に決まってるだろ!!練習見るとか言っちゃったよ!その前に練習を見る練習をさせてくれッ!!後生だから!!

「あつ、そうだとトレーナー君。私そろそろチヨちゃんの所に行つてくるわね。併走をお願いされてるから。」

「はいよ。向こうのトレーナーさんにもよろしく頼む。」

「ええ、分かったわ。バイビー♪」

バイビー♪て??グリーンかお前は。イメージカラーレッドでしょ。まま、ええわ。マルゼンやデジタル、それにカレンなど実績を残してきた生徒が合宿で他のチームに駆り出されるのは今に始まった事では無い。現にデジタルとやってた頃もキングに助けて貰っていたし、恩返しとはまた違うかもしれないが他の子達の助けになれるのならウチはいつでもお声掛けOKスタイルだ。

俺の自由時間はここまで。後はロブroyの練習を見たり、他のチームに駆り出されたメンバーの様子を見に行くのが今日のお仕事。こんなんでもトレーナーだからな!取り敢えず水鉄砲に水を補充して??又ツ、裾を掴まれている。誰が——あらくマヤちゃん!どうしたの お可愛いねえ〜!

「ねえねえ、トレーナーちゃん。ちよつと??時間良い?」

「良いぞ。あつ、砂浜に荷物置いてあるからそっち行こうか。暑いだろうし。」

「うん、分かった。」

そんなやり取りをして、先にマルゼンスキーと立てておいたパラソルの下へとやって来たワケだが??。

この子、さつきから視線がえげつねえ。ちよいちよい見てくるとか

言うレベルじゃないのよマヤちゃん、それはガン見って言うの。しかも笑ってないのよね。

何で？えっ、何で??やだあ怖い??この子すぐ分かっちゃうから迂闊な事出来ないの??。

ん？分かっちゃう???

ははあん??さては昨日の夜、それ系の映画でも見たな？大人の女に憧れるマヤちゃんは、映画やドラマに影響を受けやすい節がある。恐らくは俺とそういう大人チックで心理戦的な駆け引きをお望みなのだろう。何故このタイミングでかは分からないが、それなら付き合おうじゃないか！とことんな!!

「トレーナーちゃん、最近チームの空気が重くなってるの気付いてる？」

許して下さい身に覚えが無いんです??とことん付き合うとか言っただけど半分勢いと冗談なんです??だからその顔で尋問は勘弁して下さい??。絶対俺に非がある時の顔じゃんそれ??。

「ああ??勿論。ただ俺には理由が分からなくてな。マヤは何か知ってるか？」

「ううん、マヤもちよつと分かんないかな。」  
「そっか。」

嘘だ。絶対に嘘だ。分からないならそんなに熱い視線を送って来るはずが無い。何か知ってる上で俺から証言を聞き出そうとしている。ヤベエ、ガチ尋問だったわ。えっ、昨日何見たの？現実？それ見なくちやいけないのは俺の方じゃボケエ。

ちよつ、ちよつと待ってくれ！待ってくれ!!俺は今から和やかムードの中、デジタルの勇者手帳からロブroyの事を調べつつ楽しく練習を見たかったんだ！スリーサイズ諸々記載されてるアレをこの状況で出したら、俺ボコボコにされるんじゃないか!?クソうツ!!何でこん

な事になつてるんだ!

一瞬の隙も油断も見せられない。ほんの少しでもあの手帳の中身を見られたら、『トレーナーちゃんって、担当の子達のデータと水着姿を照らし合わせて楽しんでたんだ♪』とか、『ふーん??分かつちやった♡』とか言われるに違いない!そのままたづなさんの元へ Going Down!! No! No! No!

これはマズイ??何か?何か現状を打破する手を打たねば。おちおちロブロイの情報も集められん!!1つでいいんだよ!あの子と会話のキツカケになる1つさえあれば!だからほんの少しだけで良い、俺に猶予をおくれー!ー!

「マーヤちーん☆」

「あつ、マベちん!」

感謝。感謝、マーベラス。マヤちゃんを引き付けてくれるんだねマーベラス。これは貰いました勝ち確です対戦ありがとうございました。

しかし念には念を押しして、手帳を見るのは一瞬で済ませなければならぬ。マヤちゃんが完全に視界を外した——今ッ!!

マーベラスサンデーさん : 145cm / B87 / W52 / H77

B87!?! W52!?! 145cmで!?!マーベラス!!☆

何でマベちゃんの情報調べてんだバカヤロウ。そうじゃねえだろう?ヤベツ、バレる??ふう、危なかった。ちよいちよいこっち見てるなこの天才。悪く思わないでくれマヤちゃん??大人は愛想笑いで誤魔化すのも仕事みたいなものだから。

良いか俺??次は無い。恐らくはもうラストチャンスだ。ロブロイの情報は緑の付箋の箇所。さっきの一瞬で場所は確認した。すぐ開けるように指もセット済み。後はそこを開いて、パツと情報を見て、サツと閉じる。あわよくばマヤちゃんにその話を振って、それとなく

話題を逸らす！コレしかねえ!!

頼む勇者手帳??頼む三女神様??今だけで良い。この瞬間だけで良いんだ。俺に逆転の一手を——くれえッ!!OPEN!CLOSE!!

「じゃあまた後でマーベラス!☆」

「うん!バイバイマーベラス!☆」

「マヤ、知ってたか?」

「なにー?」

「ロブロイ、牛に好かれるんだって。」

「そうなんだ??何で今そのお話したの?」

「何でかな。ちよつとしたくなっちゃった。」

神は居なかった。助けてオグリん。

三女神とパルキアのバカヤローーッ!!もつとあつたらろ!?こんな情報で何をどう逆転すりや良いんだ俺はよオ!!そりやマヤちゃんだつて不思議に思うよ!言つた本人が思つてんだもん当たり前だろ!?

大体何だよ牛に好かれるって??それ完全に牛達に仲間意識持たれてるじゃねえか??仲間意識??巫山戯るなよ??ッ!

ロブロイはなあ??確かに夢も現実も色々大きくて、たまに目ヂカラ半端じゃない時あつて怖いけど??!ありつたけの勇気を振り絞つてウチに入るって言ってくれた英雄志望の文学少女なんだよッ!牛じゃなくて可愛い可愛い140cmのお清楚ロリウマ娘だッ!その辺分かつてんのかホルスタイン共がッ!!

いや、小柄だし原産国スコットランド繋がりでアングス・ビーフかな??何かそつちの方がしつくりくる。ふふっ。

牛じゃねえって言つてんだろッ!!ロブロイはなあ??確かに夢も現実も (ry

「トレーナーさん!!タイヤ、持ってきましたっ、たあ??ッ!!」



うお、急にすげえ牽引<sup>けんいん</sup>?? バイソンかな? その本格化でお清楚名乗るのは各方面に失礼だよね。

「お疲れ様。じゃあそのまま引つ張ってって良いぞ。スイーピーは上で声掛けてやってくれ。キタちゃんは——。」

「はい! 何でも言っただけで下さい! お手伝い出来る事はやらせて貰いますから!」

「ああー?? えーっ、と?? たまに反対から引つ張って負荷をかけてやって欲しい。無理しないようにな。」

「分かりました!」

めっちゃハキハキした子?? ちゃんと話したの、多分今日が初めてだからビックリしちゃった。

そしてこっちは何も現状が変わってない。相変わらずマヤちゃんからの視線が熱いのよ。夏だもんね、しょうが無いね?? とところで一体俺に何を聞こうとしているの? 今なら普通に教えるよ?? だから優しく尋問して???

「?? トレーナーちゃん。可愛い手帳、使ってるんだね。」

ばああああッ?!?!?!?!?!  
!? いつ!? クツソ!!~~~~~!!

しかし俺は大人、どれだけ内心泣きそうでもここでポーカーフェイスを維持する事ぐらいやってのけるさ。まずは冷静に状況を整理しよう。

①. 俺が可愛い物好きというのはチームメンバー全員が周知の事実。

②. つまりここでマヤちゃんがわざわざ発言するという事は、手帳がただの手帳じゃない事が既にバレている。

③. マヤちゃんは今、俺の表情や仕草に敏感かつ、最近のチーム事情を知っている。その原因が俺だと睨んでいるのだ。物理的にも。

以上の事から、手帳を褒める事で俺が中身の情報を一緒にポロリする事を期待しているという所だろう。カマかけマヤちん。そんな技術どこで覚えたの？カレン？カレンチャン？

ま、まあここまで分かかって引掛かるなどそんなへまはしない。寧ろ、逆にマヤちゃんへとカマをかけてみようじゃないか。本当に手帳を見たのかどうか。

黙って目を見つめて??しかし可愛いな??そらきた！ちよつと泳いだ!!やっぱりカマかけてたなこの子!!怖い！今日の天才本当に怖い!!

しかし俺は優しい大人。その勇気に免じて君の主張を認めようじゃないか。ガハハ！

「まあ、な。やっぱり変かな？」

「ううん、良いと思うよ！」

「ありがとう。ところで今日は??よく目が合うな。」

「そうだね??何でだろうね。」

じーっと見つめ合って数十秒。

てっ、手強い?!こちらは手を打ったんだぞ?!早い所白状して楽になった方が良いんじゃないか!?オラツ、まんじりともせず受け入れろ!!

ヌツ。うんともスンとも物言わぬ。一か八か牽制球でも放ってみるか?ちよつとだけ??ちよつとだけ手帳をチラ見せして――。

「あっ。」

「どうした？」

「ううん。何でもない。そっかあ??分かったからもう良いや♪」

牽制球放ったらバットが飛んで来た。

嘘、バレた?あのチラ見せで??中身全部分かっちゃったの??無敵かお前は。

じゃあもう晒されるじゃないですかヤダーツ!!

「トレーナー……! マヤちゃんせんぱ……い!!」

「この声?? ダウナービートの声だ。」

「何かあったのかな?」

「分からんが?? 取り敢えず。」

「うん、取り敢えず。」

一時休戦だ。そうアイコンタクトを送りあつた俺達は、声のした方へと目を向けた。

嬉しそうにこちらへ手を振るロリ新人ちゃん1号のダウナービート。何でもう日焼けしてるの?

本っ当に珍しくウキウキな表情をしたロリ新人ちゃん2号のバイブスアップ。絶対名前逆だよ君達。

そしてその間にはカワカミ姫ことカワカミプリンセスが、ドヤ顔をしながらこちらへ歩いて来ていた。

その肩に?? 大きな大きなシャコガイを担いで。

『分つつつかんない??』

## 第1R : マヤ、謀っちゃった!

駐車場でのあれこれがあつて、マヤ達は合宿所の中にひとまず荷物を置きに来た。

2人1組な寮のお部屋と違って、合宿中は基本的にチームで纏まって1つの部屋に割り振られているから、勿論マヤ達も皆一緒。マンツーマンで練習してる子達は希望があればチームのお部屋に入り、寮と変わらず2人1組になるけれど、基本的に1人でとかは無みたい。練習の打ち合わせとか、反省とかしたいんだって。

部屋に着くなり皆黙々と荷物を整理し始めてるけれど??ただ1人デジタルちゃんだだけは、お布団の上で大の字になって無表情のまま天井を見ていた。大丈夫かな??。

「??1度?現実と痛い目を同時に見て貰った方が良いのでは?いや、でも今回はアタシにも非が??。」

「デジタルちゃん、大丈夫??。」

「はい、大丈夫です。少々??呆れておりました。」

そう言つてお米を食べたそんな薄く笑った顔に、大丈夫なんて感情はまるで無くて。

むむむ??ちよつとこれはマズイかも。デジタルちゃんの事だもん、きつとトレーナーちゃんの事心配してるよね??。

あつ、そうだ!デジタルちゃんが元気になる方法、ヨシエちゃんから聞いてたんだ!こんな状況だから——今こそやらなきやダメだよね!よろし??マヤ、テイクオーフ!!

「デジタルちゃん!」

「はい??。」

「夢小説書いてるって本当?」

「ミ。ッ!!!」

!!!

大の字のまま、デジタルちゃんはお布団の上で飛び跳ねた。待って、今のどうやったの?どこの筋肉使ったの?

「夢??えっ、なん、ちよつと聞こえ無かったです。」

「ヨシエちゃんがね。デジタルちゃんは絶対夢小説書いてる——。」

「勘違いじゃないですかねえ!あははは!!」

「って言う話を振って動揺したら確信犯って言ったの。夢小説ってなーに?」

「許して下さい??出来心なんです??あんなスカウトしてくる方がおかしいじゃないですかあ??。」

お布団の上で、デジタルちゃんは丸くなっちゃった。いつもよりもっと小さくなって??トレーナーちゃん、好きそう。

夢小説が何かは分からないけれど、さっきまでの虚無感は無くなつたみたいだし??うん!任務完了だね!

一先ずは荷物をまとめて??ちよつと考えなくちゃ。

トレーナーちゃんは、きつとこの1週間の事に気づいてる。でもその理由までは分かってないっていういつものパターンだと思うんだよね。

スイープちゃんの使い魔になった時はデジタルちゃんと息ピッタリだったけれど、色恋話??特に”ミチコちゃん”関連の話題が出た時は、デジタルちゃんは決まって青くなっていた。きつとトレーナーちゃんにもその事は話していないと思う。

うーん??トレーナーちゃん、嘘つくのが下手っぴだから、何かあったらすぐ分かると思うんだけど??でもいきなりその事を聞き出すのは、ちよつと失礼かも。

マルゼンちゃんも、『大人の女なら、相手を信じて待つてあげるのも手よ』って言ってたし。

ネイチャちゃんも、『エイプリルフルは終わったよ』って言ってたし。

信じてる気持ちは勿論あって、でもこのまま時間が過ぎるのは皆の

精神的にも良くない。あとマヤも泣いちゃう。

それなら——まずは情報を集める事が最優先。”ミチコちゃん”の事、トレーナーちゃんの事、何も知らない状態だと聞こうにも聞けないもんね。

窓の外に目をやると、トレーナーちゃんのお尻に向かってマルゼンちゃんが水鉄砲を撃ちまくってた。2人で何かお話ししてるけれど?? 流星に聞き取れない。

むっくく??トレーナーちゃん、マルゼンちゃんには色んな事お話ししてるのにくく??。じゃあマヤだつて本気出しちゃうもん!

「マーヤちん! ☆今日はお休み? 一緒にマーベラスを探しに行きましょ☆」

「あつ?? あー! マベちん!! ねえねえつ、マーベラスも探しに行くけどお願いがあるの!! ちよつとお耳貸して!」

「??? ふむふむ? ほうほう?? んく! 探偵物みたいでスリル満点! そんなマーベラスなお手伝いなら任せて! ☆」

「ありがとくく!!」

ふっふっふ?? 協力者は出来たよ。待っててねトレーナーちゃん。今日のマヤはひと味違う、”名探偵マヤ”なんだから!!

そうして水着に着替えた後、おニユーのパーカーを羽織つてトレーナーちゃんの所に来て?? 今。

「トレーナーちゃん、最近チームの空気が重くなってるの気付いてる?」

「ああ?? 勿論。ただ俺には理由が分からなくてな。マヤは何か知ってるか?」

トレーナーちゃんはやっぱり知らない?? と言うより、気付いてな

い。マヤ達の事をよく見てるから、空気の変化自体には敏感さんだけど??。

ここでトレーナーちゃんに確かめたいのは2つ。

1つはミチコちゃん絡みの情報。電話でまた顔を見せるって言うてたし、多分何処かのタイミングで会いに行くんだと思う。という事はスケジュールを確認したり、それに合わせて”調整”をすると思うんだよね。だからその動きを確認しておきたい。きつと早ければ今日の自由時間で確認する筈。

そしてもう1つは??トレーナーちゃんの事。

マヤ達はトレーナーちゃんの事、まだ全然知らない。マルゼンちゃんやデジタルちゃんみたいに昔から付き合いが有る2人は、多分昔のトレーナーちゃんのことだっけって知ってるんだらうけど??今回の件も、全然マヤ達は知らなかった。

あんまり自分の事お話ししてくれる人じゃないのは知ってるけれど、それにしたって少ないよ。

だから知りたい。そうすれば、トレーナーちゃんがもしチーム以外の誰かと?その??お、お付き合い??したり。ゴゴゴツ、ゴールインとか!しちやっても!心の準備が出来て——ると良いなあ??。

違う違う!今はまずミチコちゃんの事!これが最優先!だから——ゴメンねトレーナーちゃん。マヤ、ちよつとだけ悪い子になっちゃうね。

「ううん、マヤもちよつと分かんないかな。」

「そっか。」

??疑ってる。流石だね??簡単には信じてない。むく??それならこっちにも手があるよ。

トレーナーちゃんはよく今みたいに皆の目を見てお話ししてくれているけれど、そういう時は決まってマヤ達の事だけじゃない、何か別の事を考えてる。マヤ達絡みで??でも会話の中に関わるような話題じゃない事。

つまり、他を見る余裕なんか無い。だから今??マヤが尻尾で出してる合図だつて見えてないんだよね、きつと。

「マーヤちゃん☆」

「あつ、マベちゃんー」

ここで登場、探偵助手のマベちゃん!!

このタイミングで空気を変えるマベちゃんの乱入??トレーナーちゃんからは絶対に偶然に見えてる。だってマヤの出した合図にも気づかないくらいには余裕が無いって事だから、意図的な乱入だつて分かってる筈が無いの。

トレーナーちゃんは今、何かを確認したがつてる。

マベちゃんにお願いしたのは、マヤとの会話。本当はトレーナーちゃんも気付いてないだろうから居てくれるだけで良いんだけど??念には念を入れて、お話してるっぽい雰囲気を出しておく。

そしたらトレーナーちゃん、絶対に油断するから。何か動きがあった時に、ちよつと後ろを向いて確認するだけ。うん??イケる。後はお願いね、マベちゃん!!

「聞いて聞いて☆この間、とくつてもマーベラス☆な事があつてね!あのローレルさんが怒つてたの!マヤちゃんのトレーナーさんに!」

待つてそれ聞いてない。

今振り返ろうとしてただけど、そのお話も気になる??トレーナーちゃん、ローレルさん怒らせるって相当だよ?何したの??

「ローレルさんの事、『ゲレイロ』って呼んじゃったらしくて、ローレルさんが『後何十回間違えたら覚えられますか?』って笑つてて☆」

そうだよね、トレーナーちゃんよく間違えてるもんね??今ツ!!



あれ!? 何でトレーナーちゃんちよつとだけこつち向いてるの!? バレてる!? もくく!! 何で今日に限って勘がいいの!?!

あつ、もしかしてトレーナーちゃんが話題の話をしてたからかな? 本末転倒だよ。

ううん、まだチャンスはある?? 焦つちやダメだよマヤ。それとマベちゃんは話す内容、もう少しラフでも良いから。出来ればトレーナーちゃん絡みじゃない話題をね? お願い。

「それでそれで! トレーナーさん、空気を変えようとしてブライアンさんがブロッコリーの格好をしてる事話したら、ローレルさんが無表情になってく! 『ブライアンちゃんはね。ブロッコリーなんて着ないし、身内ネタなんて喋らないし、やる事全部が”怪物”でなきやいけないの。』 って言ってたの☆」

ごめんなさいローレルさん。それ全部本当なの。そのタイミングで言ったトレーナーちゃんも悪いけど、ローレルさんも大分拗れてるかな。

じゃなくって! トレーナーちゃんの方を向くタイミング掴めないよ!!

??よし。いち、にの、さんで向こう。マベちゃんがどんなお話をしても、次で決めるんだ。これがきつとラストチャンスなんだから?? 頑張らなくちゃ! 皆の為に!!

いち、にの、さん——!

「で、最後に『ごめん?? ゲレイロ。』って言ったトレーナーさんにローレルさんがタツクル——あつ、これ別のマーベラスだった。」

「集中出来ないよマベちゃん!! 話が濃すぎてマヤ分かんないのー!! 別のマーベラスって何!? そのやり取り何回かあったの!」

ダ、ダメだった?? うう、これ以上はチャンスが無い?? 怪しまれちゃう。多分トレーナーちゃん、今調べたい事はパツと調べたと思うの。

そういう時の行動は早いから??どうしよう??!

「あとね——トレーナーさん、可愛い手帳を使ってるよ☆」

「っ?!マベちゃん?!」

「頑張ってるね、名探偵☆」

そうだ??マヤからはほんの少しだけしか見えなかもしれないけれど、マベちゃんの位置からなら全部見れてる!今教えてくれたのは、トレーナーちゃんの情報!しかも超有力な!!

ありがとうマベちゃん!でも話の内容が濃すぎて振り回されたのは変わらないからねマベちゃん!!

「じゃあまた後でマーベラス!☆」

「うん!バイバイマーベラス!☆」

「マヤ、知ってたか?」

「なにー?」

「ロブロイ、牛に好かれるんだって。」

今調べたのそれなの?

マヤこんなに頑張ったのに、それが見たかったの?

ち、違うよ??絶対に違う??。危ない、トレーナーちゃんのペースに巻き込まれる所だった?!そっちがそう来るなら、ビックリしたお返しちやうもんね!

「そうなんだ??何で今そのお話したの?」

「何でかな。ちよつとしたくなっちゃった。」

ますます分かんなくなっちゃった。誤魔化すにしてもそんな誤魔化し方あるの?絶対無理だよトレーナーちゃん??確かにビックリする事実だけど、別に今聞きたかった話じゃないかな??後でロブロイちゃんと牧場に行ってみよ??。

今日のトレーナーちゃん手強いよ〜??いつにも増して何考えてるのか分かんない〜??はあ??. ううん、諦めちゃダメ。思い出してマヤ。皆の事。

デジタルちゃんは今日までずっと頭を悩ませてた。

カレンちゃんは可愛いを勉強しなくちやって元気無く笑ってた。

ポーノちゃんはちゃんこ鍋を作ってた。

だからマヤが頑張らなきゃ??!!

「トレーナーさん!!タイヤ、持ってきてましつ、たあ??ツ!!」

「お疲れ様。じゃあそのまま引つ張ってって良いぞ。スイーピーは上で声掛けてやってくれ。キタちゃんは——。」

「はい!何でも言つて下さい!お手伝い出来る事はやらせて貰いますから!」

「ああー??えーつ、と??たまに反対から引つ張って負荷をかけてやって欲しい。無理しないようにな。」

「分かりました!」

トレーナーちゃんの指示を受けたロブロイちゃん達は、そのままアイヤを引きながら砂浜を歩き出して行つた。

今なら——2人だけ。マベちんの情報を元に、トレーナーちゃんに揺さぶりをかけるなら今しか無い。あつ、どうしよう??何か大人の駆け引きみたいでちよつとドキドキしてきちゃつた。

「??トレーナーちゃん。可愛い手帳、使ってるんだね。」

あつ、あつ、あーつ!!トレーナーちゃん反応したーッ!ポーカーフェイス作ってるけど冷や汗かいてる!!やったよマベちゃん!やったよゲレイロさん!

ふっふっふ、トレーナーちゃんが可愛い物好きなのは勿論知ってるよ?でも??手帳は違うんだよね。

普段使っている手帳は、デジタルちゃんがクリスマスプレゼント

でくれたんだって、トレーナーちゃんは言ってた。

中を入れ替えるタイプのシンプルデザインな手帳。カバーが少しだけ擦り切れ始めてるけど、トレーナーちゃんがいつも大事に持っているのはそっち。

だから可愛い手帳は使っていない。トレーナーちゃんがデジタルちゃんからの贈り物を使わないで自分で買うなんて考えられないし、絶対に無い。

となれば??誰かからの贈り物、とか。だってトレーナーちゃん、貰い物は基本的に使ってるもん。

そんな可愛い物をあげそうな人??後輩<sup>ヒメ</sup>ちゃんは大人っぽい物だから無し。桐生院さんは練習絡みで使えそうな物だから無し。ヨシエちゃんはウケ狙いだから絶対に無し。後は——やっぱりミチコちゃん。

よ、よーし??折角トレーナーちゃんがこっち向いてるんだもん。じーつと見つめ返して、もつともーつとドキドキさせちゃうよ。動揺しちやえ、トレーナーちゃん!

「しかし可愛いな。」

うん、マヤの方が耐えられない。

もー??もー!もー!もー!!何で今そういう事言うのーツ!!目を逸らしちゃったじゃん!トレーナーちゃん、また考えてる事ポロツと口に出したでしょ!今はそういう事考えてなくて良いの!!でもありがと!!

何だかんだ言っても、弱いのは弱いんだから??パーカーの事言ったのかな。それとも??マ、マヤの事、かな??じゃないんだってば!ううー??揺さぶり掛けれないー!!

??待って。もしかしてマヤ、今トレーナーちゃんの作戦にハマった?実は狙って言った言葉だったのかな?

だとしたら??マズイ、かも。

「まあ、な。やっぱり変かな?」

「ううん、良いと思うよ!」

「ありがとう。ところで今日は??よく目が合うな。」

「そうだね??何でだろうね。」

ダ、ダメだよマヤ。もう少しだけ頑張つて。トレーナーちゃん、確実に動揺してるから。今マヤに向かって何かカマを掛けてる。多分、本当にマヤがその手帳を見たのかどうかって事なんだろうけれど??実際にマヤは見えてないし、ここで悟られるわけにはいかない。

だからじーっと見つめ返してトレーナーちゃんが引くまで攻めな  
くちやいけないの。だって今日はもう打つ手無いんだもん!トレー  
ナーちゃん、何か手強いんだもん!!も〜!ちよつとミチコちゃんの事  
教えてくれるだけで良いのにく〜ッ!!!

あれ?トレーナーちゃん、何か手帳見せて——。

「あつ。」

「どうした?」

「ううん。何でもない。そっかあ??分かったからもう良いや!」

トレーナーちゃん??そんなに驚かなくても良いのに。だってマヤ  
見えちゃったんだよ。

裏表紙にね—— 『あぐねすでじたる』って書いてたの。

可愛い手帳つて、デジタルちゃんがマヤ達の事を物凄く詳しく纏め  
てくれてる手帳の事だったんだ。確かにそれならトレーナーちゃん  
が持つてもおかしくないよね!だってあれ、マヤ達専用の練習帳み  
たいに詳しいんだもん!クセとか、今までのレース結果とか、反省点  
とか、今後の練習とか??。

えっ?じゃあこの時間で分かったのつて、ロブロイちゃんが牛さん  
に好かれてる事とトレーナーちゃんがローレルさんを怒らせた事だ  
け?マヤの自由時間どこ行っちゃったんだろ。もう遊ぼうかな??。

「トレーナー——！マヤちゃんせんぱ——い!!」

「この声??ダウンナービートの声だ。」

「何かあったのかな?」

「分からんが??取り敢えず。」

「うん、取り敢えず。」

一時休戦だね。よし、遊ぼ。

声のした方を向けば、真つ先に目に入ったのはカワカミちゃんが肩に担いでいた大きな大きな貝殻だった。

あつ、どうしよう。これ本当に分かんないやつかもしれない。助けてトレーナーちゃん。トレーナーちゃんもダメそうだね、ごめんね。このチームってこういう事が沢山あるから面白い——って周りに言われてるんだと思うな。マヤは好き。でも??。

『分つつつかんない??』

## 第2R : ユーコピー? アイロニー!

ニコニコと微笑みながら正座をしたカワカミ姫。その両隣りにはウチの可愛い新人ちゃん達。間にシャコガイを挟んで俺とマヤちゃん。何だこの構図はたまげたなあ??トレーナーちゃん、トレーナー業に就いてから初めての経験だよ。隣ではマヤちゃんもペタンと女の子座り。

あや／＼／＼すったげ死ぬ程めんけえお可愛いごどこのわらす子供。こいつの場合はロリ。／＼／＼!!

鎮まれユキッペユキノビジンを宥める際の言葉。

一時休戦中とは言え、今日のマヤはその名の通り歴戦のエースパイロット。まるでこちらの動きを手取るように把握し、確実に撃墜しに来るつもり満々なのだろう。夜間戦闘すら考えられる。油断をするな。

それに気を付けなければならぬのはこの子だけでは無い??未だ行動が読めないウチの妹が何処かで息を潜めているのだ。恐らくはお兄ちゃんが撃墜されたのを皮切りにハイエナの如く忍び寄り、ポニーちゃんを文字通りしゃぶり尽くすに違いない。

又ッ。念の為合宿所内のトレーナー室は鍵を開けておこう。夜間戦闘に対する抵抗の意思表示である。お兄ちゃんは起きてるからあまり好きに出来ると思うなよ。でも合気道は許して下さい。

そんな事よりッ!今はこの状況の解決が先だろう。

日焼けしてニッコニコのダウナービートはまだ分かる。可愛い。

さつきからビニール袋の中を覗いては満足気なバイブスアップも分かる。可愛い———。どんだけフジツボ取ってんだッ!!俺が集合体恐怖症じゃなくて良かったね!!

そして姫、君だよ君。俺とデジは一応キングから君を預かってる身なのよ。

『貴方達をその道の一流と見込んで、彼女を任せたいの。少し力加減が分かっているところ以外は素直な子よ。く・れ・ぐ・れ・もッ!』

変な事を教ええないように!』

と、温かく釘も刺されてしまったワケで。はい、既に任務失敗しつつあります。

ま、まあ??一流のプリンセスを目指していると聞いていたカワカミ姫。何かこう、その辺にあったものを持ってきたとかそういう感じだろう。じゃなきゃこのプリンセス、舞踏会を武闘会と勘違いするタイプの戦闘民族かグラップラーである。このスタイルの良さでそんな事あるわけないだろ!!

「カワカミ。これ——。」

「ぶちもいでやりました♡」

そんな事あったかもしれない。

キング、キング、キングヘイロー。電撃6ハロンを制した我等が王よ。既に手遅れでした。現場からは以上です。

えっ?これ現場監督者の責任?俺のせいになる案件?キングに『おばか!』とか『へっぽこ!』って言われるやつ?そんな事を言われてみる、元気になってしまふ。あの一生懸命考えた末に出てきたであろうキング的語彙力の罵声からしか取れない栄養素、”キングニウム”は実在する。

「カワカミ先輩凄かったの!なんかね!なんかね!フンツ!つてやってた!」

「そうか??マヤ。」

「わかんない。」

「ゴメン。」

「トレーナー??フジツボ、いっぱい??飼いたい。」

「ええ??合宿の間だけ、ね?俺のところで飼って良いから。」

「トレーナー、好き。フジツボぐらい。」



初めて言われたわ。死ぬほど複雑。

取り敢えずこのままと言うわけには行かないので、シヤコガイは調理担当ポーノの元へ。フジツボ達は新人ちゃん2人が責任を持ってお世話をしてくれるだろう。

3人にそう話を付けて見送った後、再び俺はマヤと2人きり、パラスルの下でぼんやりする事になった。

「皆元氣と言うか??個性が強いなあ。」

「そうだね。こんなに分かんないの、ここが初めてかな。トレーナーちゃんの事も??ね。」

何だと??いつ!?

いかん!空気が変わってる!マヤが僅かに笑いながらこちらを見ているではないか!戦いはもう始まってると言うのか!?

休戦協定など、マヤちゃんだけにやはり”まやかし”!(激ウマヤ)カワカミ姫達との時間の中で、恐らくは次の手その次の手まで考えついたのだろう。

クツ??ツ!コチラの戦力は、精力モリモリマツチョマンのポニーちゃんただ1人。おデジ——あれはウマ娘ちゃん大好きウマ娘であるが故、俺とウマ娘ちゃんでは天秤にかけるまでも無くウマ娘ちゃんに味方する女よ。でもちゃんと隣には帰ってくる。なんて奴だ。そういうところだぞ。

まっ、まあ?例えばポニーちゃん1人であっても、恐れる事は無い。何故なら俺は大人だから。大人に憧れるマヤちゃんには特効持ちだとすら自負出来る。言ってしまうえば一般人に対する元グリーンベレーのようなものだ。怖いか?ふふっ。

「聞いてくれれば答えるよ。」

「何でも?。」

「勿論。」

「トレーナーちゃん誰かとお付き合いた事ある?。」

ぎやああお”ん”ん”ん”ッ!!言葉の暴力が心を乱暴に殴りつけて来たア—ツ!!何でも答えるって言ったそばからこれかよ!大人の駆け引きも何も無いじゃない!こんなの身長縮んだ言葉のコマンドーよ!!だつたら抱けばいいだろッ!!

落ち着けよポニーちゃん。お前は激しく錯乱しているんだ坊や。まさに錯乱坊さくらんぼ。誰がチェリーだ2度と喋るなバカヤロウ。

こつ、これは日頃の行いが余りにも酷過ぎて、『トレーナーちゃんつてば女の子の相手した事ないでしょー!』からの『マヤは知ってるよ??トレーナーちゃんの相手の仕方♪』となつて最終的にはカレンちゃんまでやって来るやつだ!去年の夏合宿でここたまやられて、コミュニケーション発揮した上に大人の尊厳を踏み躪られた定石パターンだ??ッ!!また1人で夜に枕を濡らすんだッ!!ヤダーッ!!

「??無い、です。」

「そつかく。でも——。」

その後の言葉は無く、マヤちゃんの方を向けば何故か動きを止めていた。

??何だ?心ここに在らずというか??微妙に目線が俺の方を向いていない気がする。それはそれで寂しい。

「マヤ?どうした?」

「トレーナーちゃん、あれって??。」

マヤは俺の後ろを指差した。振り返るが、特に何の異常もおかしな点も見当たらない。精々カレンが毎年のように短距離勢のコーチをしているだけで——今日自由時間って言ったでしょあの妹はア—ツ!!

いやいや、カレンだぞ?お兄ちゃんとの約束を破るような子では無い。それだけは断言出来る。こちらの貞操を狙っているだけで約束

を破った事など1度も無いのだ。どちらがマシかはノーコメント。  
つまりこれはカレンの作戦である。

ふむ??お兄ちゃんの天才的感性と本能的危機感からの推測によれば、自分のカリスマ性を最大限に発揮して手下を増やそうとしているのが妥当だろう。300万人も居りやあ充分だろうに??お前その軍勢率いて来んなよツ!!絶対止めろよツ!!お兄ちゃんお前1人でも無理なんだからな!?まさしく”愛お兄ON・下手いロイ”。何!?ロブロイもか!?お兄ちゃんはおしまい!

あつ、マーちゃんが手を振ってくれている。癒し。

「何かおかしな事でもあったか?」

「えっ!?いや、だから??ううん、何でもない。」

そうは言うが、やはり気になる様子??何か推しの視線を奪われているみたいで悔しいな。クツソ〜〜ツ!!

あつ、そうだ。驚かすついでに顔を覗き込んで見ようか。マヤちゃんテンパると可愛いが過ぎるのだ。元気になる。そうと決まれば??ふふふつ。

「本当に大丈夫——。」

「わっ!?近い、近いッ!!」

ドンッ!と肩を突き飛ばされてしまった。ほら可愛い。

しかしやはりウマ娘のパワーは侮れないもので、俺はパラソルの下から2回転ばかり転がって放り出されてしまった。正直に言おう。

肩いつてえッ!!!助けてデジたんッ!!!パージしたい!!!三十路が泣くッ!!!!

自業自得だと怒られそうだ。凹む。どこ行ったの相棒。もうそろそろ水着姿のウマ娘ちゃん達を拝んで4回は倒れてる頃だと言うのに。横に戻って来てくれ。

「勇<sup>いさま</sup>トレーナー。」

???? あっ、俺か。そう言えば勇<sup>いさま</sup>だったわ。

いかんいかん、どうにも最近名前と呼ばれる事が無いから本気で忘れていた。

モルや葵ちゃんは”勇者御一行のトレーナーさん”としか呼ばないし。

クソ女は”クソボケ”だの”童貞野郎”だの”ハゲ予備軍”だのとしか言わん。

後輩ちゃんですら俺を”先輩”以外で呼んだ事が無い。あの娘、後で姫野って呼んでやらア。

皆して俺の名前知らないんじゃないかな??んなわけねえよな??そこそ有名チームなのに??学園のホームページにはちゃんと名前付いてるのに??凹む。

「あの。」

「すみません榎本さん。少々、アクティブな姿をお見せしました。ふっ。」

「大丈夫ですか?」

「あっ、はい。」

大丈夫ですか?は寧ろこちらの台詞である。

何でこの人このクソ炎天下の海で黒スーツ着てんの?修行僧かな?

後輩ちゃん曰く、体力無きすぎて榎本さんが理子ちゃんになるぐらいにはヤベーっす、との事。最近前転が出来たらしい。そんな格好してたらぶっ倒れるって。

ヌツ!真夏の如き熱い視線!

よくよく見れば、榎本さんの両隣りに居るウマ娘達から強い感情をぶつけられているでは無いか!

ふっ、そうか??っべえ、何の記憶もねえ。おおお、俺、今度は何

怒らせたんだ??? 助けてデジたん。本当に助けて。

「今日は、その??どうされました??」

「実は??誠に勝手な話なのですが、少々ココンとグラッセの2人と併走をして頂きたいと思ひまして。」

良かった。原因は俺じゃなかった。アオハル杯準優勝のチーム”ファースト”から直々のお誘い??という事であれば考えられるのは1人だろう。

「??後輩ちゃんに唆されました?」

「発破を掛けられた、が正しいですね。」

「成程??分かりました、少し日陰で待ってて下さい。マヤ、榎本さんと待っててくれな?」

「うん。いいよー。」

そうして俺は、榎本さんの側近であるリトルココン、ビターグラッセと共に、少しだけパラソルから距離をとる事にした。

だつて凄いい圧かかっているもの。おかしいもの。あの小娘、一体何吹き込みやがったチツクショー?!特にココンさんだよ!この子尋常じゃねえの圧がッ!

いいか俺、ここで対応を間違えるのだけは絶対にしてはならない。この子らはアオハル杯の準優勝チーム??あの豪華メンバーなチーム”ハーバー”相手にメンチ切った肝の座った2人なのだ。あろう事か負けず嫌いの代名詞、顔のイカつさだけなら学園トップの後輩ちゃんにも。

分かることはただ1つ。ポニーちゃんには勝ち目が無い。ヒヒン。

「??もうちょっと、リラックスしても良いんだぞ?姫野に何言われたのかは分からないけどさ。」

「いやー、私は全然してるんだけどさ!ココンがねえ。」

「——もし。」

ずっと怖い顔をしていたリトルココンが、ようやく口を開いてくれた。

「もし、アオハル杯に”勇者御一行”が出ていたら??優勝は難しかったって聞いた。」

「そ、そうか??。」

「アタシらに平均で5バ身も差をつけたチームのトレーナーが、そんな事を言ったんだ。気にもなる。」

「私はアグネスデジタルと走りたいな!噂のオールラウンダー、”戦場を選ばない勇者”と競ってみたいんだ!」

あんの小娘えくくツツ!!何他所のチーム煽る真似してんだ!この2人ウチの子達を負かす気満々じゃねえか!!どう収集付けどよコレッ!

お前アレだぞ!あんまりウチを巻き込むような事言ったら、お前が水族館の魚に名前付けて愛着湧かすクソカワ娘だって秘密もバラしたるからな!テツポウオに”ケルヒヤー”って名前付けて10分ぐらい釘付けになってた事もセツトだ!寡黙でクールな女のイメージ壊してただの萌えキャラにしてやるから覚えとけツ!!

本人には絶対言えないけど。殺される。

「??ただ。」

「ただ?」

「アタシは、ミホノブルボンに用がある。」

おっとまさかの逆指名。

「理由を聞いても?」

「アオハル杯の決勝で舐めた走りしたから。」

「心ここに在らずってやつだったぞ。」

「ふむ??分かった。そういう事なら、取り敢えずココンにはブルボンと走って貰おうかな。今のブルボンは、顔見りやどれだけ強いかすぐ分かるさ。ビターグラッセは、デジタルの都合が良い時に追って連絡するよ。今日は??うん??ね。」

「構わないさ。本当に強いんだよな?」

「5バ身で済むなんて思わない方がいいぞ。忠告までにな。」

ビターグラッセは一瞬驚いた表情をして見せたが、直ぐに笑みを浮かべた。ふふつ。

ゴメンよグラッセーツ!!俺今ちよつとだけムキになっちゃったね!?!デジタルの事になるとすぐこうなるの本当に申し訳ない!!ウマ娘オタクのオタク失格である??ヒヒン??。

「それは楽しみだな!」

グラツチエ、グラッセ。女神はやはり実在した。全てを肯定してくれるポーノに続く第2の女神である。あと1人居れば俺の中の3女神が爆誕してしまう。

「??ねえ。ミホノブルボン、顔見れば分かるって言ったよね。」

「ん?ああ。」

「あれの事言ってるの?ふざけてる?」

ヤダ、何でこの子ちよつと怒ってるの???

リトルココンが指差した方に顔を向ければ、先程までロボロイが引っ張っていたタイヤのすぐ横にブルボンが居た。

何でツ!斜めにツ!!刺さってんだお前エツ!!!

それ何だよ!!ボケか!?素か!?どうやったら砂浜にそんな体勢で

ぶっ刺さんだマジで!!上半身しか出てねえじゃねえか!こつちは今慎重にココンさんの相手してたのにタイミング最悪だよもーツ!!

「スワイプさあん??これ、絶対違いますよ??。」

「本人が良いって言ってるんだから良いのよ!手伝うの?手伝わないの?」

「手伝いますけどおっ?!」

タイヤの影から小さなスコップを持ったスワイプーとキタちゃん  
が現れ、あろう事かブルボンの周りを砂で固め始めた。何してんのあ  
の子ら。ロブロイはどうしたのよ。

「すまないココン、ちよつと??ちよつとだけ待っててくれ。すぐ戻っ  
てくる。」

まずは事態の把握。大丈夫、俺は出来ない大人ではあるが、腐つて  
もチームのトレーナーなのだ。今日の前で起きてる事くらいすぐに  
分かるわい。

そうして3人に声を掛けようと近付き——タイヤの影に居たロ  
ブロイに気付いてしまった。

陽の光が反射し、ギラついた眼鏡の奥でどんな表情をしているかは  
分からない。だがその両手にしっかりとシャベルを抱え、ロブロイは  
微動だにしていなかった。

トレーナーちゃん分かっちゃった。ウチのボスこの子だわ。

完全にマフィアの首領ドクだよこの落ち着きぶり。あそこに居る魔女  
とお祭り娘はボスからの指示を受けてサイボーグを埋めているに違  
いない。ココンさん、今からでも英雄志望と走らない?多分飢えてん  
の。

「あの、ロブロイ??ちよつとブルボン借りたんだけど??。」  
「????。」



「ロボ——。」

「こらあロボロイツ！何寝てんのよツ!!」

「ひえあいつ!お、おお起きてました!!はい!!」

激おこポンプン丸と化したスイーピーの一喝で、ロボロイは目を覚ました。えっ、ただお眠ねむだったの?クツソ可愛いな??ロボロイはボスでは無くスコットランドの癒し粹、ちよつと牛に好かれるだけの文学少女だったらしい。やはりボスはスコットランドの卑し粹カレンチャンで続投なのか。

今はスイーピーの使い魔だが、俺だって魔法使いの端くれチェリー・ポピンズ??いや、それすら凌駕するチェリー・ポッター!いぎと言う時には取っておきの魔法で相手になってやる。

一夜の魔法、”チェリーチェリー・シツポリア”!

ダメだ、アバダケダブラを連発される未来しか見えねえ。這い寄る擦りザリン、秘密の部屋で突如始まるクイディッチ、気付いた時には賢者の意志。終わりだ??何だとポニーちゃん?カレンとハツスルパフに行きたい?お前明日にはBANからの囚人行きだぞ。エクスペクト・パトロー南無なむ。

「使い魔!アンタもぼさつとしてないで手伝いなさい!」

「えあつ、あつ、はい??じゃないわ。少しブルボンを借りても良いかな??」

「何だよ。」

「ちよつと併走をお願いされてさ??ほら、あそこの子に。」

「ふーん??誰?」

それ絶対本人に言っちゃダメだぞ魔女っ子。戦争が始まる。

「まあまあスイープさん、ここはトレーナーさんにお任せしましょう?」

「ダメよキタサン!偉大な魔女は途中で仕事を投げ出したりしないの

「使い魔も使い魔で、ご主人様の言う事なんだから聞きなさいよ!」  
「??すまないスイーピー。実は俺、闇の魔法を掛けられているんだ。」  
「闇の??魔法??だ、誰がそんな事??!」

「ヨシエさん。」

「魔女だったの!?!」

「ああ、物凄く強いしタチの悪い魔女だ。」

魔女は魔女でも魔性の女だけど。これがバレたら顔にドロップキックが飛んでくるに違いないが、そこは上手くやるさ。

しかし??ふふっ、食い付いたな。こちとら魔法少女仲良し大作戦の為に、君の気に入りそうな文言は予め予習済みさ。全てはデジたんのおかげ。あかん、もう相棒無しじゃ生きられない身体にされてる。

「だから君の言う事に従いたいのに、身体が言う事を聞かないのさ。それは恐らくこれからも不定期に続くだろう??クツ!!」

「ちよ、ちよっと!じゃあどうするのよ!?!」

「えっ?あー??アレよりも偉大な魔女が強力な呪文??えーっ?と?——レ、”レースの魔法??”とかを使えば解けるはずなんだが??。」

「ツ!レースの魔法??!」

ゴメンよスイーピー。そんな魔法はでっち上げだ。どんな効果があるんだそれ、聞いた事ねえよ。相変わらず突発的な対応はクソぎこポニーちゃんなのだ。お前ホントにそういうところだからな。

足りない頭で一生懸命考えた末に出た言葉がこれである。悲しいかな。

まあ要するに”ゲスト参加じゃなくてウチに来て一緒に青春アオハルしようか?”というアプローチを含めただけなのだが??やはり無理があっただろうか。

ほら見てみる、ロブロイが何かニコニコしてるじゃねえか??何で?今君が喜ぶような事あった?怖すぎん?

キタちゃんだって何かオロオロしてるし??何で?闇の魔法信じた

の? いい子すぎん? いや、ヨシエさんの担当だし頭の心配をされてるのかも。辛辣すぎん?

「分かったわ! 行くわよキタサン、ロブロイ! 魔法の練習よ!」

『はい!』

「??行ったか。じゃあブルボン——ヒエツ。」

時すでに遅し。

リトルココンは斜めにぶつ刺さったブルボンの前に立ち、思っクソメンチ切っていた。対するミホノブルボン??思っクソ口が半開きである。どこ見てんだお前。

「??元気そうじゃん。」

「はい。」

「???」

えっ、会話終わり? 嘘でしょ? 誰かウララちゃん呼んできてーッ!

あつ、ウララちゃんは学園で黄金世代と一緒にだった。万事休す。俺がウララちゃんになるしかねえ。(?)

「何のお話ー?」

「併走の話は纏まりましたか?」

「あつ、えっと、あの??月末に改めてレースと言うのはどうでしょう!? 途中の成果を見つめ合える良い機会にもなりますし!!」

「成程??確かに今日は些か急な申し出でしたからね。そちらが良ければお願いします。」

覚えておきなさいマヤちゃん。これが君の憧れる大人の女の1つの答えだよ。君は後輩ちゃんの事めっちゃリスペクトしてるらしいけど、あれはどこまで行ってもギャップ萌えが過ぎる。君ギャップ萌えなんて手にしてご覧? 無敵だよ?」

ほらほら、そういう事だからこのピリついた空気もおしまーい！今日は皆でシャコガイBBQといこうじゃないか！勿論タイキも呼んでだ！ねっ！だからそろそろガン飛ばし合うのは本当に勘弁して下さいお願いします。

「??マスターが。」

「??」

突然のブルボンの発言に、ココンと2人首を傾げた。おっ？何か嫌な予感がするぞ？

「大抵の事は、物真似の1つでも出来れば景気づけ出来ると言っていました。」

「??だから？何、急に。」

「本気のレースをご所望の様なので、景気づけを試みようかと。」

「ふざけてんの？」

「いえ。ですがここは1つ。」

「何なのマジで??やりなよ。」

そう言つて砂浜から這いずり出てきたブルボンはココンの前に立ち、僅かに見下ろした。慈愛に満ちた笑みで、どこかで見た事ある雰囲気を醸<sup>かも</sup>しながら——あつ、醸<sup>かも</sup>すで思い出した。お米ちゃんだ。

「ココンさん。ドリンク??ふふっ??飲む？」

ギョツと耳を絞ったココンが、ゆっくりと俺の方へ顔を向けた。あつ、処される。

待て待て待て待て！俺お前らのそのやり取り知らねえんだよ!!何の物真似してんの!?!そもそも景気づけになるってそのサイボーグに教えたのは俺じゃなくてイカつい小娘なの！無垢なウマ娘達に闘争心植え付けるのは神がかってんだよアイツ！俺は無関係だから巻

き込むんじゃねえッ!!

「あれさ??ココンがライスシャワーに6バ身離されて負けた時に言われたんだ。練習中にライスシャワーがココンのドリンクぶちまけてさ??いや、今なら悪気は無かったって少しは分かるんだが??途中に笑ってる辺り再現度高いな。」

「ありがとうグラツチエ、グラツセ??つまりメンタルつよつよ鬼のライスが皮肉たつぷりだったのは分かった。それをブルボンが真似してココンが何故か俺にキレてるのも分かった。この場面、ここからどうしたらいい?」

「いや終わりじゃないか?この場面は。先に言っておくけど、樫本トレーナーを巻き込まないでくれ。」

「なんて日だ。」

姫野??お前がといだお米ちゃん、刃研ぎそんな位覚醒してんよ。覚えてやがれ、再来週合宿に来た時3倍返しにしてやるからな??あつ、その前にライスだけ先行してお手伝いに来るんだった。

マジ?火に油注いで米入れたらそれはもう炒飯だよ。パラパラどころかバラバラにされるんじゃねえかな俺??うっ、胃が痛くなってきた。チームの空気も若干重い状況だと言うのに何なんだチクショー??。

こうして夏合宿の目標——チーム”ファースト”とのレースが、思いもよらぬ形で決まってしまった。

助けてデジたん。そろそろ定位置に帰ってきて。

## 幕間　：　初日を終えて

「榎本トレーナー、どうですか?」

「??強いて言うならば、彼は普通では無い、と言うしかないでしょう。」

ビターグラッセの言葉に、机上の資料を数枚渡しながらそう答えた。

7月末の模擬レース。”勇者御一行”とのチーム対抗戦。まずは合宿1ヶ月を終えた段階での成果を確認したいと、彼はそう言っていた。

だが??彼のチームを調べれば調べる程に、勇トレーナーの人となりは謎に包まれるばかり。

短距離には、1度とは言えあのサクラバクシンオーに勝ち越したカレンチャンに、無敗の怪物マルゼンスキー。それから療養中のヒシアケボノ。

マイルにおいては現絶対王者、チームのエースにして距離もバ場も問わないオールラウンダーのアグネスデジタル。

中・長距離には変幻自在の脚質を持つ天才マヤノトップガンと、姫野トレーナーから預かったというミホノブルボン。

そして本格的に指導を始めたと言うゼンノロブロイ。

それだけでは無い。ルーキーの2人や夏合宿中の仮契約であるスイプトウシヨウ、キングヘイローに託されたというカワカミプリンセス、”ポラリス”の円トレーナーに預けられたキタサンブラック??初日にして、彼女達とは既に一定の信頼関係を構築しているようにも見える。

極めつけは、彼が今夜のバーベキューに連れて来た———  
魔性の青鹿毛<sup>メジロラモース</sup>。彼女とのやり取り、か。

初めに担当として3年を共にしてきたアグネスデジタルならまだしも、途中参加である他の面々があれ程までに心を許すと言うのはまず難しい。ましてやメジロラモース程の傑物を相手になど??出来たとしても相応の時間が掛かるでしょう。その信頼関係はつまり、相手

の考えの奥底を読み取り、夢への理解を行動で示し、手を差し伸ばしてようやく築けるものなのですから。

勿論アグネスデジタルと言う前例の無い担当が居れば興味は引けるし、実績を紐付けければ期待の眼差しや一時的な信頼は生まれる。だがそれも最初の内、信頼は継続しなければ意味が無い。

見た所彼女達はそれぞれが類まれなる才能を持っている??が、自分達のやりたい事が明確に分かりきっている以上、波長を合わせるのは並大抵の事では無い。それは弱点、或いはチームとしての体を成す際の短所にも成り得る。

”ファースト”はやりたい事は違えど、彼女達の本質は皆同じ。他者と足並みを揃える事を苦手とし、しかし強さを望む心だ。”勇者御一行”はそうでは無い。

だからこそ、それらの舵取りを一人で担っている以上、底知れないと感じてしまうのも仕方ないのかもしれない??。

「ココン、君はどうだ?」

「??何が。」

「私が話したのはトレーナーの方だ。ミホノブルボン??彼の担当しているウマ娘と話したのは君じゃないか。我々は間違い無く強者。驕りでは無く事実だ。君から見たあのチームのウマ娘の事を、榎本トレーナーにも聞かせて欲しい。」

蹄鉄の手入れをしていたココンが小さく溜息をこぼし、私の方へ向き直った。

「??強いです。ワケの分からないモノマネをされて聞き流してましたが、ミホノブルボンがすれ違いざまに言っていました。『貴女に私の影は踏ませない』??と。その眼に迷いは無いようにも見えました。」

「実際トレーナーの方も、最初こそふわふわしてると思っていましたか??どうにも言葉の端々には自信と闘争心が籠っています。こちらと向き合っているようで煙に巻き、その時が来るまで刃を隠し持ってい

る。」

「まるで、アイツ——ライスみたいな。」

ライスシャワー。

姫野トレーナー率いるチームのステイヤーにして、”黒い刺客”。元々繊細で気弱な面が強かった彼女は、アオハル杯でその真価を發揮した。

いや??元よりあった才能を昇華させたと言った方が良い。純真であるが故に。繊細であるが故に。植え付けられた闘争心は自分を肯定したトレーナーへの恩返しという形でより強固な物に成った。

彼は、ミホノブルボンをそのレベルまで引き上げたという事だろうか。姫野トレーナーが、”自分の全てを掛けてでも勝たなくてはならない相手”と言っていたトレーナー。グラツセの言葉通り、我々は強い。それは自信を持って言える。

なら??昼間、彼が言っていた言葉の意味は——。

『榎本さん。良い練習になると良いですね。』

「練習??か。」

「榎本トレーナー。」

「どうしました?ココン。」

「あのトレーナーが、もし本当に”ポラリス”のトレーナーと同じレベルなら??間違い無くこちらの2手、3手先を読んできます。そうじゃなくても、単純な実力プラスで奇策や搦手は考えておいた方がいいかもしれません。」

「我々はどんなメニューでも乗り越えます。必ず勝ちましょう!」

「??分かりました。ココン、グラツセ。メンバーを集めて下さい。ミーティングを開き、今後の練習メニューを見直します。」

『はいっ!』

彼女達が着実に成長している事に嬉しさを感じる。少し前ならば、



自分達からこんな言葉を掛けてくる事は無かった。

アオハル杯に向けた日々??そして発破を掛けた姫野トレーナーの存在。それらがあつたからこそ、彼女達は前を見据えている。

ならば私もトレーナーとして、チーム“ファースト”を導かねばならない。

アオハル杯決勝では“ハーバー”に全員がペースを乱された。

模擬レースを頼んだ”ポラリス”には、純粋な実力でねじ伏せられた。

彼女達に敗北は似合わない。だからこそ、相手が格上だったとしても勝たねばならない。

勇トレーナー??受けて立ちましょう。

こちらこそ、良い練習相手になって貰います。



「あの??カレンちゃん??。」

「大丈夫だよマヤちゃん。悪い人じゃないから。」

初日恒例のBBQが終わって、マヤ達は皆でこれからの事を話そうかなって思ってた。勿論トレーナーちゃんの事とか、ちゃんと合宿での練習の事とか。今回はメンバーも多いし、それぞれ得意分野でこなした方がトレーナーちゃんの負担も少ないよねってお話で。

デジタルちゃんが居なかったのが気になるけれど、すぐ戻るって言ってたからあまり気にしないようにはしてたんだ。

でも??そんな時、マヤ達の居る部屋にお客さんが来たんだよね。凄くダンディーな声をした男の人??多分誰かのトレーナーさん——あつ、これマーちゃんのトレーナーさんか。

今はそう??物凄く大きなアストンマーチャン着ぐるみさんが、ギチギチにドアに詰まっていた。ギッチギチに。誰も出られないし、入れな

いくらいには。何で横向きに入ってこなかったんだろう。そしてこれ、どうしたらいいんだろう。

「??お疲れ様です。勇者御一行の皆さん。」

「ヤスさんも、お疲れ様です♪」

「えっと??」

「この人はヤスさん。姫野さんの同期で、見ての通りアストンマーチャンさんの担当??を、予約されてるトレーナーさんなの。」

「そっか??じゃあ昼間マヤが見たのは幻覚じゃなかったんだね。トレーナーちゃんには見えてないのかと思っちゃった??。」

海辺に佇んでマヤの方に手を振ってたのも、その後マルゼンちゃんみたいなダンスを踊ってたのも、ニコニコのカレンちゃんに全速力で追いかけて回されてたのも、ピッチ走法でバタバタ走って逃げた数秒後に転んで波に攫われかけていたのも、全部本当の事で良かったっつ!! とはならないんだけどね?それはそれで、”何で?”ってお話なんだけどね?こんなに濃いのに何ひとつ分かってないんだもんマヤ。

「その??先輩に用事があつたのですが??。」

「あくゴメンなさい!お兄ちゃん今居なくて??多分トレーナー棟だと思えますよ?。」

「そうですか。すみません、ありがとうございます。では??では??。」

「スウー??ではっ!ふんっ、ハアッ!!」

「ねえヤスさん、マヤ達が手伝おっか?」

「いえッ!皆さんの手を煩わせるだなんてそんな事はッ!!」

「でも??さつきからマーちゃんの手がパタパタしてるだけだし??。」

「全ては自分のミスが招いた事??これで皆さんに負担を掛けて、明日以降のトレーニングに支障が出るような事があれば??自分は??先輩に顔向け出来ません??。」

困ったマヤの耳元に顔を寄せて、カレンちゃんがこっそり囁いた。

「こういう人なの。根が真面目過ぎる、お兄ちゃんのパアン??。」

「トレナーちゃん周りの周りって濃い人しか居ないね??。」

「うふふふつ。でしたら私にお任せあれ! プリファイの様に可憐で優雅に美しく——そしてパワフルに。ドタマぶち抜いてやりますわよ♡」

「アンタは下がってなさいカワカミ。中身出たらどうすんの。」

「そんな事致しませんっ!」

「ふーん、どうかしら。キタサン、アンタは何か無いの?」

「??わっしょい?」

「は?」

「ロロ、ロブロイさあんっ!!」

「ええっ!? あ、や、あの??せつ、石鹸でも塗りましょうか!? それか??つ、ブルボンさんお願いします!」

「結論。着ぐるみの周りに潤滑剤を塗布、その後扉を外して救出し、再び扉を修理して”わっしょい”する事が最善かと。提案。潤滑剤でしたら、丁度ここに自然薯が。」

それしまつてブルボンさん。

「皆さん??すみません??ありがとうございます、ございます。本当に??うつ??。」

「も、ヤスさんつてば泣かないで下さい♪困った時はお互い様じゃないですか。」

「そう、ですね??グスツ?先輩に似て、皆さん——。」

「そ〜?——れっ!!☆」

ポンっ、と言う音が聞こえそうな勢いで。

それか、バラエティー番組だったら3カメラ入りそんな感じで。マーちゃん着ぐるみが扉から飛び出して来て、部屋の中で転がって??動かなくなっちゃった。

「ふふっ、どう?..どう?..お姉さん張り切っちゃった♪」

「マルゼンちゃん??。」

「??あら?..あら??え〜つと??もしかして。張り切り過ぎた感じ??」

「いえ、心配なさらないで下さいマルゼンスキーさん。こんな事も有ろうかと、中のクッションにはかなりこだわりました——アドマイヤベガさんが。」

それでもスイープちゃんの前でモゾモゾした着ぐるみさんは、今度は仰向けになって動かなくなっちゃった。本当に大丈夫かな??結構な勢いに見えたけど??。

「??あつ、スイープトウショウさん。中身は有りません。安心して下さい。」

「喋ってるし、中のクッションって今自分で言ったじゃない。何今更思い出したみたいにマスコット根性出してんのよ。バカじゃないの?。」

「何も言えません??ご指摘に感謝し、精進します。」

「??ねえ。あたしはこれから使い魔のとこ行くけど、アンタも来る?..用があるんでしょ?。」

「使い魔??先輩ですか。是非、ご一緒させて下さい。」

「今度はちゃんと横向きに出る事!..良いわね!..行くわよキタサン!。」

「ちよわっ!..あたしもですか!..あつ、ちよ、スイープさあん!!」

手を引かれ、途中扉で引っかかりそうになったヤスさんと3人で、スイープちゃん達は部屋を後にした。何か嵐が過ぎ去ったみたい。

「ヤスさん??変わってるね。」

「うん。でもお兄ちゃんがべた褒めしてるくらい可愛がつてる人だから、悪い人じゃ??無いかな?..何か、”恋人に選ぶならああいうタイプ”って言ってたもん。」

「トレーナーちゃんってばそういう事サラツと言うんだからあ??。」  
『ね。』

「あつ、そうそう！恋人で思い出したけれど、トレーナー君にミチコさんの事聞いたわよ。何かね??ふふつ。男の人なんですって！」  
『??えつ。』

マルゼンちゃんの言葉の意味が全然理解出来なかった。えっ？  
待つて待つて待つて??ミチコちゃん、男の人？

告白したミチコちゃん 男の人。  
恋人にしたいヤスさん 男の人。

この2人の特徴を表した式はつまり、男の人+男の人 男の人。分かんない。ハヤヒデさんどうかして。

??トレーナーちゃん、もしかしてそういう事?そういう??えつ!!?  
うなの?!?!今物凄い勢いでマヤ分かつちやつてるけどそういう事なの?!  
?!?!本当は?!?デジタルちゃんが青ざめてたよっほどの事ってこういう??  
??そつ、かあ??そうなんだあ??。

「昔からの付き合いだくって言ってたし、そういうのって何か良いわよね。ふふふつ♪」

「マルゼンちゃんは??大人、だねえ??大人?大人って、なんだろう??。」

部屋の中には、どうしたらいいか分からない空気だけが残っちゃった。助けてデジタルちゃん。



目の前でニコニコと微笑むベール——ローレルに、俺は今恐怖心すら覚えている。や、確かにワケあつて呼んだのは俺なのだが??急に部屋にあつたクソデカハリセンを持ち出して何されるかと思つたら、

正座させられて本当に何されるか分かったもんじゃねえ。俺は何かお説教でもされるのだろうか?!

「あつ、別にそういう訳では無いです。」

「心まで読んだらいいよ無敵だぞお前さん。」

「また口に出てましたよ?ふふつ——恐怖心?ベーグル?」

「ヒエツ。ご、ごめ——!」

「ビクトリー♪」

ハリセンが頭に飛んできた。この真顔やり出したら死ぬしかない。そもそも真顔なのにその声のテンションで人の頭どつくなよ??誰かこの桜の暴君を止めてくれ。あつ、居たわもう1人。

「??ジ、ジョーダンは何をさつきから爪眺めてんの?」

「んー?やつ、なくんか調子がさ??ベースミスったかもしんね。」

「ほーん??ちよい待ち。見てやるから。」

「えっ?いやいや、いーつて。つか、出来んの?」

「ちよつとはな。お前さんはそこに居てくれれば助かる。寧ろ居てくれないと、膝の上で幸せな顔した相棒が落ちるから。ローレル、ちよつとこれ使ってネイル落としてやってくれないか?」

「はーい♪」

「ハリセン置けよ。」

いつまで持ってたんだその鈍器。それあれだぞ?ウチの先輩の忘れ物だぞ?

あの頃はシンザンやシービーにマルゼンの他にも、TTGの3人が混ぜって色々やってたから??人生ゲームとか、叩いて被ってジャンケンポンとか??その名残を持ち出して人の頭をさつきからボツコンボツコン叩いてんじゃないよ。そもそも何置いてったんだあのハゲは。だから毎年俺だけこの部屋の固定枠扱いになっただけじゃねえか。持って帰れつての。そしてハゲろ。

渡したコットンと除光液で一旦ジョーダンのネイルを落としてい  
るローレルを横目に、俺はこっそり持って来た”担当イメチェンメイ  
クボックス”を引つ張り出した。

ウチのチームは、SNSは元より雑誌の取材やウエディング特集の  
撮影等がポンポン舞い込んでくるクソかわメンバーの集い。流石に  
黙って見ているだけでは申し訳ないので、トレーナーとして出来そう  
な事は片っ端から学んだのだ。即ち俺流の推し活。この中には日頃  
使っているイメチェンアイテム達がわんさか詰まっている。

因みにネイルは商店街で教わった技術である。他にもメイクやら  
撮影技術やら裁縫やらうんぬんかんぬん??あそこには俺の師匠達が  
わんさか居る。だから逆らえないんですよね、分かっています。

「よし、ひと仕事やってやらあ。」

「それデジタルの手な。」

「あつ、いつもの癖で。」

「いつも何してんの?」

「気にしちゃダメよ。良いからお出て出しなさいほら。」

「何かオネエのスタッフみたいでウケるんですけど。撮るところ。」

「撮んな。」

好き勝手言いおつてからにこのギャルは。

しかし手は滅茶苦茶綺麗。流石、己の弱点をカバーし続けてきたネ  
イルのプロである。素直に尊敬するわ。

「そういえばジョーダンちゃんとトレーナーさんの組み合わせって、  
珍しいよね。」

「あー、何か補習してるところ見つかって??勉強教えて貰って??『これ  
お前とも縁が出来たな!』とかワケわからん事言われて、今に至るつ  
て感じっすかね。」

「ワケわからんとか言うな。チームメンバー以外ならお前さんが1番  
付き合い長いんだから。最早マブだろ。」

「何で今マルゼンさんの話したん？」

「マブい姉ちゃんの話はしとらん。手元狂うから笑かすなよ。」

「ウケたんだ。」

「うん。」

『うえ〜〜〜い。』

「笑かすなつつつてんだろ顔中にトップコート塗りたくんぞ。」

「ガチで止めろ。」

見ろお前、サクラの彼女が楽しそうに笑ってらあ。ん？楽しそうなら良いのでは？あつ、ダメだハリセン置いてねえ。まだ安堵するには早すぎる。

まあ??正直言うと、デジタルを除けばこれ程まで友達感覚と言うか気楽に過ごせる子もトーセンジョーダン位である。言ってしまうえば悪友のようなものだし、彼女のトレーナーには俺も色々と教わる事の方が多いのだ。

ウチのメンバーは良くも悪くも落ち着かない。俺の感情とポニーちゃんがブルンボロンに揺さぶられてしまうからな。

「あたしからすればローレル先輩とコレの組み合わせも珍しいですけど。」

「今コレって言ったか？」

「う〜ん、そうだね??私もちよつと、色々あったからね。この人と。」

「今指差したか？」

便乗すんなゲレイロ。お前さんそういうキャラじゃないでしょ？どっちかと言うと、ど根性系主人公とかヒロインみたいなポジでしょ？2番目に付き合い長いからってジョーダンみたいな絡み方しなくていいんだよ？

何だポニーちゃん、ポジが悪い？ポジ違いだから喋んな。

「つたくよお??揃いも揃って好きに言いやがって??ほら、出来たぞ。」



「早っ——あく、あのさ？やって貰って言うの、ちよい気が引けんだけど?。」

「おう。ミスった。」

「あたしの気遣い返せし。」

「まあ待て、聞いてくれジョーダン。これは”敢えて”、だ。」

自慢じゃないが、俺はこの位の事でミスったりはしない。なら何故かと言われれば——交渉術である。

怪訝な顔を浮かべたギャルを宥め、隣でハリセンを構えた暴君を横目に説明する事にした。

「俺は昔、お前さんのトレーナーにネイルを教えた事がある。あの人は勤勉家だから、お前さんの為に今だって不器用ながらも努力している事だろう。」

「??それで?。」

「俺のこのミスを話のタネに、あの人に話題を振ってみるといい。”そーいやアンタも出来るんだって? やって見してみ? あたしも教えたいからさく”的な事をそれとなく言うんだ。あの人真面目な顔に似合わず絶対ウキウキでやるぞ。」

「いやいや、まさかあ??やりかねねー??。」

「ふふ??あとは分かるな? お前さんは共通の話題であの人にもう少し歩み寄れる。あの人はお前さんの為に力になれる。win-winの関係じゃないか。」

あつ、考えてる考えてる??ヨシッ!押せ!行け!ここで上手い事頼れるマンだと示して、あわよくば俺の頼みを聞いて貰え!

「お前さんは自分をバカだと言うが、バカ正直で素直なのが良い所だ。あの人もそこはちゃんと気付いている。日頃の恩を上手い事返せるチャンスだぜ?。」

「??何か? 釈然としねーけど??上手い事乗せられてる気がするけど??」

「一理あるわ。天才か？」

「伊達にトレーナーやってないさ。ガハハ！」

「そして2人の初々しいやり取りを、デジタルちゃんと一緒に隠れて見てるんですよね？」

「ロオーレルウウウウウウツツ!!!」

「今決まったろ!?”勝ち確です。ありがとうございます” ってなつても良い場面だったろ!?”何で全部バラしたんだチクショーツ!!”デジタルが起きたら良い知らせとして報告しようと思ってたのによオツ!!

「ゲツ!?”ジョーダンの眼が痛い!視線が刺さるツ!冷や汗が止まらねえツ!!

「??? いや、ほら。当然冗談だから。」

「だあ~~~~~~~~る。」

「ごめんで??。」

「それで、トレーナーさんは結局私達に何の用があつたんですか？」

「今聞くの? タイミングおかしくない??? まあ、良いか。実はさ?? ウチのチーム、ここ1週間空気が重くて——。」

「あーはいはい、いつものっしょ? お疲れでしたー。」

「逃がさんぞトーセンジョーダン。貴様とは縁が出来てるんだ、そう簡単に逃げられると思うなよ?? ツ!!」

「うーわ秒で縁切りてえ??。」

「駄目です。大人しくお話聞いて下さいお願いしますから。」

「最早俺だけではどうも出来んのだ。相棒もここに来たは良いが、早々にハリセンを持ち出したローレルに冗談半分で”なんでやねん♪”と軽く小突かれ、そのまま幸せの中で意識を失ってしまった。何しに来たんだお前。」

「た、頼むよ？もう頼れるのが2人だけなんだ?!」

「まあアンタ、他のウマ娘達から微妙に距離置かれてんもんね。」

「そうなんだよ。俺が何したってんだ。」

「何って??ねえ?」

「そうだね。多分畏れ多い的な意味だと思うけれど??やっぱりバーベキューのアレかな?」

『ラモーンさん連れて来て”ラモラモ”呼びしてた事。』

「ハモるな。別に連れて来るぐらい普通だろ。」

「や、それは良いんだって。あの人相手に”ラモラモ”とか言ったからビビられてんの。ぶっちゃけあたしも、『コイツ実はやばいんじゃない?』とか思ったし。」

「しかもラモーンさんのお皿にワインナーばかり山盛りにしてましたよね。アルダンさん、顔面蒼白でしたよ?」

だってワインナー似合うと思って??本人も食ってたし、良いじゃん??その後もシャコガイあげたじゃん??。

言っておくけどお前ら、ウチの師匠なんかもつと凄いだぞ。ラモラモの事、”青二才の未亡人だな。ガツハツハツ!”とか普通に言ってたんだからな。シンザンにシバかれてたけど。ラモラモぐらい可愛い方だろう。

「そんな事やってっから距離感遠いんじゃない?って話。あいつヤベーわ的な。」

「でもデジタルちゃん、ここに来た時は結構焦ってる感じでしたし??多分チームの事と関係あるんじゃないですか?」

「えっ!?そうなのか相棒!?起きろ!頼む起きてくれ!俺に叡智を授けてくれえッ!!」

「??ふあっ!?アタシは何を——ふとももお?」

「ジョーダンの太ももならまた後で聞くから!今は大事な話があるんだよ!」

「大事な話、です、か?太ももじゃなく??」

覚醒したのも束の間、既にふるふる小刻みに振動しつつある相棒はジョーダンの膝枕に限界寸前だ。このままでは幸福と罪悪感から意識が遙かな樂園<sup>エデン</sup>へと旅立ってしまう。

その前に話題を??明瞭簡潔に、されど伝わる様に!行けつ、ポニーちゃん!!お前はやれば出来る子元気な子ツ!!

「俺とお前の??将来的な話だ。」  
。「」

相棒はフリーズした。何ならオマケでハリセンも飛んできた。なんでやねん。

「??デジタルちゃん、宇宙行きましたね。」

「相棒————ツ!!!」

「いや、今のはアンタが100悪いわ。んな言い方普通はしねーからな?」

「えーつと??要するにトレーナーさんは、チームの雰囲気は何とかしたい。でも皆は素直に聞いてくれないし、自分から聞くのも怖いからそれとなく私達に聞いて欲しい??で、合ってますか?」

「??はい。」

「まあ、そんなくらいなら別にいいけどさ。あんましさつきみたいな事ペラペラ言つてつと、ますます距離感バグンぞー。じゃ、帰るわ。」  
「ありがとうございます?ありがとうございます??気を付けます??。」

そうしてジョーダンとローレルが部屋を後にしようとして扉を開けた直後だった。クツソデカいマーちゃん着ぐるみが扉の前に立ち尽くしているじゃないかたまげたなあ??何してんのヤス君。

「??はっ?なんコレ??ちよちよちよ!?!無理だから!その幅で入ろうとすんなって!絶対無理——ほら詰まったあ??。」

「何でやるなって言ったことを全つつつ部律儀にやってんのよアンタはあ~~~~ツ！」

スィーピー??えっ!?スィーピー!?ななっ、何でこのタイミングで!?はっ!まさか昼間に話した”レースの魔法”が嘘っぱちだとバレたのか!?とっ、問い詰めには???

ヴェあああああっ!!勘弁して下さい俺が悪かったです!謝りますからチームのムードが重たいこの流れでの言及は許して下さい!!

もしこれがバレでもしたら、相棒には呆れられ、マヤちゃん達には嘘つき♡と失望され、カレンには布団の上で”お話”されるハメに??くっ!!

いや、待てよ??だとしたら何故俺の可愛い後輩であるヤス君まで居るんだ?えっ!?!ヤス君にも失望されるパターン!?!ヤダー~~~~っ!!  
??取り敢えず引っこ抜いてやるか。

「しよーがないから魔法でどうにかしてあげるわよ!行きなさいキタサン!!」

「魔法じゃないんですか!?!」

「アンタだってあたしの立派な使い魔なんだから魔法で召喚したようなものじゃない。」

「いや、あの??ええ~~~~??」

「良いよキタちゃん。こっちで引っ張るから——。」  
「わっしよいッ!!」

威勢のいい掛け声と共に、着ぐるみの腰あたりに抱き着いたままキタちゃん部屋の中に飛び込んで来た。何で皆お話聞かないん??あつ、俺が言えた事じゃねえわ。凹む。

ゆっくり起き上がったキタちゃんは地味に恥ずかしかったのか、両手で顔を隠しながら、こう言った。

「??これで?満足ですか???」

「えっ??知らない??でも、何かゴメンね?」

この後大変ご立腹な魔法少女に、死ぬ程物理<sup>ハリ</sup>魔法<sup>セン</sup>を叩き込まれた。

### 第3R : ユーコピー?今日のポピー

『きよ、今日からいっぱいお手伝い頑張りますね!』

唐草模様の風呂敷にシューズをパンツパンに詰め込んだライスシャワーがやって来て1時間。話を聞いたところ、どうやら彼女はウチだけでは無く他のチームのお手伝いさんもしてくれるとの事。

それがチーム”ベガ”——アドマイヤベガと口数の少ない寡黙な男性トレーナー率いる3人体制のチーム。未だ勝ち数こそ少ないが、そこには”スターメモリー”と言う尾花栗毛の若手ウマ娘が居たはず。ライスが助っ人なら、恐らくは中々長距離向けの子なのだろう。1度走りを見た時はどうにもいっぱいと言いか、身に合わない走りをしていたイメージだが?!

ま、そこは彼女らの問題なので良いんだ。アオハル真っ盛り、何ならアヤベ世代は頼れるメンツの集まり。呼べば来るのも居るし呼ばなくても高笑いと共にやって来るのも居る。オマケにタヌキとセットで来るのも居る。精神安定剤のウララちゃんも忘れるべからず。うつらら☆

今それよりも問題なのは、ウチのRobRoy。——改めロボロイだ。

ライスシャワーとゼンノロボロイは同室の友。気弱な内面を見せながらも内に秘めたる意志の強さは中々に目を見張る物があるウマ娘同士である。

だから??ね?俺だって、気の知れた仲間同士の方が良いと思って早速併走をお願いしただけなのよ。本当にそれだけなの。

『どのメニューが良いですか?』って聞かれたから、ライスに渡された”並盛”、”大盛”、”鬼盛”のカードから記念に”鬼盛”を選んで??おかわりまでセットでき。RobRoy。——もといロボロイのポテンシャルならいけると思ったの。許してくれロボロイ。

「はあっ?、はあっ?!!」

「ロブロイさん、お顔が上がってきてるよ？頑張って！あともう少し！」  
「なんつ、で、そんなに??余裕が??つ、ここでツ！離しますツ!!」  
「うん、その調子！ライスついてく！どこまでもついて行って——  
逃がさないからね?」  
「ひッ!」

鬼違いだろコレ。併走ってか逃走だよ。さつきから英雄見習いが鬼宿した娘と鬼ごっこしてんの。流石レース中はカワイイカレンチャンですら震え上がらせる後輩ちゃんお抱えの準エースと言ったところか??後でロブロイにはポーノと一緒にご飯でも作ってあげよう。や、暫くご飯が怖いかもしれない。

逆に”並盛”と”大盛”ってなん——薄ら下に”鬼盛”って書いてるうーっ!!ウチの中・長距離メンバー潰す気満々じゃないですかヤダー！お前ブルボン基準で練習メニュー考えたろツ！

いや、こんな事するのはあの小娘以外居ないか??とんだ刺客送って来やがったな後輩ちゃん。お前ウチからもカレン送りつけてクロフネ共々カワイイに染めてやる。覚悟してろよ。

??そのカレンが乗り気になってくれればの話だが。

「カレン。今日はどうした?」

「え〜?何が〜?♪」

さつきからゼロ距離なのよね、このドスケベサキュバス。隣にビダツツツ!と引つ付いて座ってんの。

おう、今年もか?今年もお兄ちゃんのことをそんな薄着で誘惑する生足幻惑のマーメイドになるつもりかお前。お兄ちゃんだって成長してるとこ見せてやるからちよつと待っててポニーちゃん舐てくる。

いくら夏だからって海物語にはまだ早えんだよマリANCHAN。あつ、カレンチャン。

しかも何がヤベーって、ちよつと距離取ろうとすると腕掴まれん



の。ずーっつと微笑みながらこっち見て本当にすみませんでした命だけはお助け下さい。

ポニーちゃんが俺に囁いている??"年貢の納め時だね、トレーナーさん!"と。喋るな。

昨晚何があつたかは分からんが、朝俺と目を合わせてくれたのはデジタルとスイーピー、それにマルゼンとボーノだけだったんだ??悲しい。かと思えばカレンはこうしてお兄ちゃんの横に張り付いて、覇王色の覇気を放つ始末。モルモットを見習え。アイツはジエネリックタキオンの副作用で蛍光色の覇気を顔面からひり出してゐるぞ。そういうので良いんだよ、そういうので。

もうね??薄々分かつてる。原因は俺なんだなって、流星に理解してるの。心当たりが無くても、皆にとつては結構な事をしてかしたんだなって??だからさ、もう、聞くよ?聞いちゃうよ?ジョーダン達には悪いけど、もうお終いにする。うん。大人の覚悟を知れ。

「何かあつたら?その??結構前から。折角こうして2人なんだし、出来れば??聞かせて欲しい。」

「じゃあね?1個だけ教えてくれる?」

「ああ。」

「カワイイって何かな?」

カワイイの権化が哲学を殴りつけてきた。

どゆこと?今何聞かれてんの??白雪姫問題??『それは貴女様でございます。鏡見ろ。』とか言えば良いのかな??そんな分かりきつてる返答なんかしてみろ、叩き割られて身体でお話だ??毒リンゴに頼るまでも無く物理で沈められて、7人の小人ならぬ7人分の小人が蹂躪される世紀末??7人分ってエグイなッ!?自分で思ってなんだけど、それはもう小人じゃねえよ!大人だよ!!

「あのね??カレン、今ちよつとスランプなの。だからお兄ちゃんに教えて貰いたくて??。」

身体で教えてって事？今犯行声明出してさ？

バ、バカ、違うだろ童貞！そうやって何でもかんでもペロリ♡される方向に持っていこうとするんじゃない！お前三十路だろ！相手は中等部にして妹みたいなものだろうが！少しは冷静になれ！！なった。

「??例えばね？自分の長所に自信があつて、その長所で色んな人達に幸せになつて貰いたい??そういう風に考えてる子が居るとするよね。」

A. 貴女です。お前さんのカワイイ理論にはいつも幸福感とやりがいと緊張感を感じながら楽しく仕事させて貰っています。謝謝。いつもカワイイね♡魔王みたい。

「それで、そんな子をずっと支えてくれる人??子供の頃から、そうやって今も変わらないまま見守つてくれる人が居て。だからその人と一緒に頑張りたい、とか??一緒に居たいって思うのは、普通だと思うの。」

A. それは私です。そんな挙動をした覚えが確かにあります。心持ちは今も変わっておりませんボス。成程、やはり俺達の話なんですね。腑甲斐無いお兄ちゃんんで申し訳ありませんボス。しかしそのデカすぎる感情は果たして普通なんでしょうかボス。

「でもね??もし、その人が??同性の人に恋してたら、どうするのが”カワイイ”かな?」

これ俺らの話じゃねえわ。

えっ、何？今何か同人誌の話されてる？何かそういう作品見たの？  
薔薇系？

いやいやいや、カレンチャンだぞ?! いったってお兄ちゃん一筋?? 自分で言うのも気が引けるが、そういう空気とムーブをかましてきてたでしょ!? 何でその花園に”カワイイ”を見出そうとしているの!? 結末とか展開に納得いかなかったから、何とか自分の中で良い解釈に纏めようとしているって事!? 解釈違い絶対許せないウーマン!?

ただでさえカワイイの権化やらインフルエンサーやらでキャラ付け出来てるのに、新しい概念をねじ込むなッ!

おあああ?? 哲学かと思っただらもつと難しい問題だったわ??。何て答えるのが正解なんだよ?? 見た事ねえよ薔薇の花園は??。

しかしここで黙ったり変に濁らすのも大人として、或いはトレーナーとして良くない。この質問の返答次第で俺の今後が決まってしまうかもしれないのだ。

かくなる上は、カレン的に満足しそうかつ、俺の考えをフワツとラテのように添えて??。

「??難しいな。でも、それがその人の本心なら?? 尊重したり、応援してくれた方が嬉しいんじゃないかな。」

妹からの返答は無い。横をチラリ。

【急募】 笑った妹からの逃走経路【カワイイカレンチャン】

これ死んだわ。助けてデジたん。”お前が何言うてんねん”みたいな空気を感じる。

これ俺の話じゃないでしょー!? 言っちゃなんだけど、俺自分のチームメイト全員に弱いんだからな!? ポニーちゃんだって認めてるんだから!! 別にヤス君とかモルとはそういう花園営業してねえわッ!

「やっぱり?? そう思う?。」

「?? あくまで俺の意見だから。」

「そっか。うん?? もう少し考えてみるね??。」

そう言つてカワイイカレンチャンは、どう見ても無理してるだろう笑顔のまま新人ちゃんの練習に混ざりに行った。アカン、あれは納得してないやつだ。お兄ちゃん失格である。

「??どうしよう、相棒。」

「何であたしを砂に埋めながら??いえ、良いんですけど。正直に言うとですね。皆さん、トレーナーさんがミチコさん——もとい、ミチルさんに告白した事を知ってるワケです。」

「うん。」

「昨日の夜あたしも初めて聞きましたけど、トレーナーさんがヤスさんの事を”恋人にするならああいふタイプ”認定していた事も、昨日皆さんは知ったんですよ。」

「うんうん。」

「トレーナーさん、今現在蔷薇系そつちの人つて思われてますからね。」

「カレン待つてツ!!待つてツ!!お願いだから説明させてツ!!!」

何でこつちの呼び掛けに全力疾走で逃げんだあの妹はツ!!ちよつとくらい止まつてくれても良いじゃんかよオツ!!さつきまで死んでも離さねえみたいなおーラ出してたじゃん!俺だつて逃げたいよ!知りたくなかつた衝撃の事実だよツ!!えっどうすんの!?!本当にどうすんのこの惨状!?!お前これミチコちゃんにバレたら一本背負い待つたナシだよ!!俺よか身長デカイ元柔道部なんだぞあのカマは!!

「その??大丈夫ですよ。何とかありますって。あたしもお手伝いしますから。今回はちゃんと説明しないで逃げたあたしにも非はありませんし??!。」

「相棒??!。」

「それはそれとして、こころでトレーナーさんには現実と痛い目を両方見てもらつた方が良くかなとも思ってますが。ははっ。」

「相棒??ツ!」

乾いた笑い、辛辣だがぐうの音も出ねえ。あつ、ローレルとジョーダンどうしよう??結局ジョーダンが言っていた”いつもの”で話が完結するやつだった。怒られる??生徒にドヤされる??。

そんなどうしようもない思考に耽っていた時、不意に肩を叩かれた。

振り返ると、そこに立っていたのは1人の女性だった。

身長はそこそこ高く、後輩ちゃんよりも僅かに低い程度だろうか。つばの大きな白い帽子の下でセミロング程の髪を後ろで結び、へそ出しホットパンツからスレンダーな脚がのぞくという、見る人が見れば目のやり場に困るだろう格好。お前の事だよ童貞。凹む。

そして何より彼女はウマ娘。帽子から飛び出した鹿毛の耳がぴよこぴよこ動き、首からは『特別指導員』の札をぶら下げていた。目には何故かハートのサングラス。昨日マルゼンスキーと一緒に付けてた俺が言うのもなんだが、それ流行ってるんですかね。

何だこの絵に書いたような真夏のビーナスは。俺全く知らんぞ。特別指導員の話だつて聞いちゃいねえ。

「勇さん、で合ってますか?」

「あつ、はい。」

「早い合流が出来て安心しました。私、秋川理事長から許可を受けて、1週間生徒さん達の指導をさせて頂く——こういう者です。」

そう言って彼女が差し出してきた名刺にはたったひと言。

『刀削麺』

ちよけてるのかな?

待つてよ。ここでボケる?初対面で?危なく、『はっ?』とかいつも

通りのツツコミをかましそうになってしまったんですが。いやいやいや、んなわけあるか。間違つて出したんだきつと。

「貴女がアグネスデジタルさんですね。お会い出来て光栄です。私、こういう者です。」

「??味噌ラーメン。」

刀削麺じゃねえのかよ。ボケにボケを重ねるな。いや重ねるのは良いけどタイミングとかさ??妙に懐かしさを覚えてしまうのは何故だ。

あつ、遠くからカレン達の視線を感じる。大丈夫大丈夫、お兄ちゃん達は平和です、ボス。

「??その。結局、何とお呼びすれば良いでしょうか。」

「”ベイクトモチョチョコ”と呼んで下さい。」

「ん”??嘘ですよね?。」

「そうとも言います。わはは。」

何笑ろてんねん。

こちらの困惑など意に介さず、彼女は俺の前へと回り込み、前屈みでこちらを仰ぎみた。

「??仕事上の相棒と、呼んで貰っても構いませんよ?。」

彼女の後ろで砂が舞った。

何だデジタル。どうした、その座りが悪い両手。何か中途半端に墓から出てきたゾンビみたいになつてんぞ。

「??すみません。相棒なら間に合ってます。」

「そうですか。では、やはりモチョチョコで。」

「??モチョチョコ、さん。」

「わはは。」

何笑てんねん。

砂から両手を出したデジタルの横でしゃがみ、もう一度綺麗に両手を埋めた。”えっ?”みたいな顔されてるが、えっ?はこっちだよ。何ビックリして反応してんだ。相棒としてのお前の今日の仕事は俺の砂遊びに付き合う事です。嘘、流石に仕事はね???ただちよつと皆と距離を縮める為の作戦をね????

「仲がよろしい様で何よりです。では早速、この後の練習について提案が有るのですが。」

「その前に??貴女が来る事は、秋川理事長から何も聞かされていない——。」

「先ず、貴方とデジタルさんで短距離からマイルまでの生徒の指導を。貴方の経験上、今はそちらの方が合っているはずですからね。」

「いや??話を——。」

「中・長距離のメンバーは私が。但しブルボンさんはライスさんと他のチームでしようし、若手のダウナービートさんは貴方の指導に合わせて貰った方が今後の為にもなる??よって、マヤノさんとロボロイさん、それからキタサンブラックさんの3人になりますね。そちらの負荷が大きくなってしまいますが、ご了承下さい。」

「あ——。」

「無論、無理はさせません。あくまでも判断はトレーナーさんのご指示という事でどうでしょう?“うん”、ですか。分かりましたありがとうございます。あ、これ私の連絡先ですので登録して下さいね。」

自由過ぎんだろこの姉ちゃんよオツ!!最後なんて俺の口塞いで無理やり領かせたじゃねーか!!ちよつとぐらい話聞けよ!こっちは何にも聞いてねえって何回言わせんだ!

いや、1回も言っていないわ。凹む。

それと”トレーナーさんの指示”とか言ってたわりに、俺に何にも聞かないで行つちまったけど大丈夫かよ??。

「??デジタル。あの人が知ってるか?」

「いえ??あたしよりも、トレーナーの方が詳しくそうじゃないですか。」

「何で?取り敢えず、素性も分からねえあのフリーダムウーマンに3人を丸投げするのはちよつと怖い。こっちは俺の方で練習見ておくから、それとなく昼まであの人の事見ててくれないか?」

「それは構いませんけど??一応、カレンさんに話しておいた方が良さそうですね。」

「カレン?」

「あつ、こっちの話です。」

ボンツ、と砂を吹っ飛ばした相棒はそのまま起き上がり、にこやかに微笑んだ。

「それでは、張り切ってウマ娘ちゃんへの御奉仕と参りましょうか。相棒さん。」

「おーし。その前に——人が横に居るのに砂飛ばしてんじゃねえよこの万能クソカワロリオタクがあツ!!」

「耳い————ッ!!!」

そんなこんなで早30分。

様子を見ていたデジタルから、残酷な現実を突きつけられてしまった。

「トレーナーさん。凄いですよ。」

「どうした?何か変化有った?」

「あの人、トレーナーさんよりもちゃんとトレーナーやってます。」



「???」

「無言で穴を掘らないで下さい。埋まつてる場合じゃないです。」

「???」

「こつち見て涙ぐんでる場合でも無いですよ!？」

「だつてよお?。」

言葉の重みが違うのだ。仮に俺が他チームの生徒に、『指導が適当すぎ。バツジ返せば?』と言われたら3日寝込めば致命傷で何とかなる。だがコヤツに『トレーナーさんよりちゃんとしてますね。はあくだらしな?』（超意識）と言われるのは心の臓にナイフを突き立てられている気分だ。

例えるならば、おしどり夫婦でやってきたはずなのにある日突然離婚届を笑顔で渡された時のような感情?独り身だけど。

故に辛い。お涙が勝手に浮かんでしまう。うっ?。

たつ、確かにさ?俺は後輩ちゃんやモル君、それからヨシエ<sup>あ</sup>ちゃんに比べればまだまだ未熟だよ?こんなにチームとして上手くやれるのは、ほぼ相棒のお陰だと自覚してるよ?にしてもこんな急に現れた謎のウマ娘にまで立場を奪われては、いよいよメンバー達に本気で呆れられてしまう。

「そんなに心配せずとも、大丈夫ですつてば。別にトレーナーさんがダメとか指導力不足とかは関係無いですからね!」

「何でそう言い切れるんだよお?。」

「??あたしがここに居るからですけど。」

中等部の勇者が見せる突然のガチトーン。不覚にもときめいた30年目の夏。

しかしこれは逆に考えると、『あたしが最終関門ですから分かってますよね?後が無いので真面目にやって下さいね?カレンさんあてがいますよ?』と言う威圧感たつぷりの警告でもあるのだろう。いかん、だとしたら泣くのも凹むのも人目につかない所だ。そしてカレ

ンを派遣社員にするんじゃない。お兄ちゃんベッドで地獄の70連勤だよ。

??それはそれとして、お前今言った事後悔してるな?絶対やっちゃまったって思ってるな??頭抱えてモジモジしておっからにこのオタクはホンツツツマそういうとこ、はあ~~~~ツツツ!!!

「ねえねえ、トレーナーちゃん!」

項垂れた俺を他所に、モチヨチヨさんの元で指導を受けていたはずのマヤノが声を掛けてきた。

「どうしたの???」

「声小さいね。どうしたのはこっちの台詞だけ??あのね?トレーナーちゃんから見て、マヤってどう思う?」

どうした急に。

何だその漠然とした質問は。何と答えればいいのか。遠くでモチヨチヨさんが笑っている。こちらに手を振っている。マヤちゃんに何話したんですか?

どうって??可愛い?違うだろ。

小さくて可愛い?それも違う。ええ??何を求められてんだよ。

マヤノはいつだって純新無垢で、大人の女になるべく日々精進している天才キッズ。しかし色恋話に興味津々が故に、首を突っ込んでたまに自爆する節があるから??ううん??。

掛かりやすい——とか。

「わあ〜っ!やっぱりそうなんだ!ありがと!!」

「えっ!あつ、マヤ!待って、マヤーーッ!!」

そうなんだって何!?やっぱり!掛かっている自覚あったの!?!いやそもそも俺のポロリ発言しつかり聴こえてるじゃないですかー!!どこ

からどこまでを聞いて”分かつちやった!”したんだあの子!?!それにさつきから待ってつて言ってるのに誰も待ちやしねえのは何なんだ!!

「??何で今日は、皆俺の話を聞かないのかな。」

「鏡をお貸ししましょうか。」

「凹む。んあ??着信?モチヨチヨさん?」

振動する携帯の画面には、先程連絡先を交換——と言う名の一方的な押し付けを——したモチヨチヨさん。今度は何だつてんだ??。

「はい、もしもし。」

『お忙しい所すみません。今から併走を予定しているので、皆さんでこちらへ来て頂けないでしょうか。』

「えっ、皆と?それに急ですね??併走は誰とでしょう?」

『マヤノさん、ロブロイさん、キタサンさん、私の4人です。』

「そうですか??ん?」

この人が?走る?現役ウマ娘相手につて??どんな理由があるんだろうか。言っちゃなんだが、マヤは普通に強い。ロブロイやキタちゃんだつて、本格化までもう少しの段階にして既にポテンシャルの塊である。失礼かもしれないが、引退後のウマ娘で彼女達の相手をするのは並大抵の事では無い。実際に走る事で実力を見極めたいのだろうか?確かにそれは普通のトレーナーには出来ないが??。

『あ、そうだ。トレーナーさん、スピーカーモードに切り替えて頂けますか?』

「??はい、やりましたけど。」

電話の向こうから、すうーっとわざとらしく息を吸う声が聞こえ――。

『ぬあーはっはっはっは！お前の可愛い教え子達はこの私が預かった！取り返したくば、今すぐ芝コースに来るが良いッ!!』

「??モチヨチョコ、さん？」

『わはは！誰だよモチヨチョコって！』

「えっ?えっ??」

「お兄ちゃん?どうしたの?」

『いさみんってばひっどーい。私とあんなに熱い夜を過ごしたのに??。』

丁度やって来たカレンがフリーズして耳絞ってるッ!!!

タイミング最悪じゃねえかチクショーツ!そんな熱帯夜を過ごした記憶なんか無えよツ!!こちとら現在進行形で独り身じゃ!うつせえわ!!

「??トレーナーさん。」

「違っ、待ってデジタル。落ち着いてくれカレン。俺本当に知らないの。本当に本当なの。そんな無責任な事、万に1つも無いの??。」

『嘘だあ。合宿所で、皆に隠れて朝まで一緒にオールナイトしましたあ。』

「んなわけ無いでしょ!?!大体貴女とだって今日初めて——!」

『も・も・て・っ♡』

瞬間——俺の脳裏を過ぎったのは1人のウマ娘。

当時マヤより少し大きいぐらいだったチンチクリンの彼女は、スレにスレ切っていた俺にとって唯一のベストフレンドだった。先輩とも腐れ縁の夢女とも違う、ウマ娘の中では正真正銘の心の支えだった相手。

そのウマ娘も、俺の事をこう呼んでいた筈だ??いさみん、と。

夏合宿の最中に、確かにやった筈だ??99年に渡るキングボンビー

の醜いなすり付け合いを。

「??お前??なんつ、えっ?はあ??」

全てが繋がったこの間0.5秒(体感)。ベイクドモチヨチヨとそのウマ娘の顔が、完全にリンクした。だとしたら??ヤバい。

ヤバい、ヤバい、ヤバいッ??!!

実力を見極める?

3人に勝つのは並大抵じゃない?

んなわけあるか!面白半分でちよっかい掛けやがってあのレースバカあ!!今の3人じゃ勝てねえよッ!!

『因みに出走まであと1分だぞ♪あつそーだ!道中にクソ程スイカを並べたんだよね。後で食べたいから、全部叩き割ってからおいで! バーイ♡』

「はあああああああああッ!?おまつ——切んなやボケエツ!!!」

俺はただ、砂浜で吠えるしかなかった。

両膝をつき天を仰ぎ見るばかり。相棒と妹から??いやもう、周りで練習してた他の生徒達からも、『何コイツ?』みたいな目で見られているがもうそれどころじゃない。

誰に聞かれたわけでも無い??ただその言葉は、混乱した自分の心を納得させる様に、自然と零れていた。

「——」天《font:ul40》馬《font》が、来た。」

### 第3R : マヤ、出会っちゃった!

トレーニングに集中出来ない。

全部昨日判明した『トレーナーちゃん男の人好き過ぎ問題』のせい。何なら寝不足気味だもん。これは実質トレーナーちゃんが寝かせてくれなかったのと同じだね。

それに暑いし??もう、直接全部トレーナーちゃんに聞いた方が早い気がしてきたなあ??。

いや、でも??うーん??折角ならやっぱり、大人っぽい駆け引きしてトレーナーちゃんから聞きたい。そしたらトレーナーちゃんだって、マヤの事子供扱いしなくなると思うし??。

「マヤちゃん、大丈夫?」

「ちよつとしんどいかもー??。カレンちゃんは大丈夫?その??トレーナーちゃんの事、とか。」

2人が出会った日のお話は聞いた事がある。

カレンちゃんが子供の時、迷子になった事。

その時トレーナーちゃんと出会って、自分の夢を肯定してもらった事。

トレセン学園で運命的な出会いを果たして、デジタルちゃん、ポノちゃんの後に3人目としてチームに入った事。

本当ならカレンちゃんが物凄く複雑な気持ちじゃないかなって思うのに、昨日から落ち込んでる様子は見せなかった。こういうところ、本当に強いんだよね??。

それでも、さつきトレーナーちゃんの所から走って来たのはまだ思うところがあるんじゃないかな。

「??あのね、マヤちゃん。実はカレン言っただけだ??。」

「うん??。」

「今回のお話が大した事じゃないってヤスさんに聞いて1週間前から

知ってるんだ。酔っ払ったお兄ちゃんが同級生の人に告白しただけなんだって。」

「エーーーーーッ!!??」

「昨日カレンがヤスさんの所に行ったのも、お兄ちゃんには内緒にしてて欲しかったからなの。」

「エーーーーーッ!!??」

「マヤノさんにステータス：『驚愕』を感知。どうしましたか?」「ブルボンさん!トレーナーちゃん別に男の人とそういう関係じゃ無いんだって!」

「検索：”過去のマスターの言動及び行動”。思考：”そこから構築される事実確認のプロセス”。実行中——実行中——実行中——」。

ぽかんとした顔のままゆらゆらしてる。ブルボンさんってこんな感じだったかな。

「結論：”でしょうね”。」

「今の時間なにー!? って言うより知ってたの!?!」

「あくまでも推測によるものです。この結論に至る可能性は96%でした。」

「それほぼ100!!えっ!?じゃあロボロイちゃんは!?!」

「皆さんが神妙な面持ちだったので、チームとして大きな課題に向けて特訓するんだと思ってました」って、朝言ってたよ?」

「1番真面目だった!じゃ、じゃあスイープちゃんは!?!」

「回想：『別に興味無いわよ。使い魔の事なんか大して知らないし。』と。」

「新人ちゃん達はっ!?!」

『ああ、お馴染みの??って。』

「うわーーーーん!マヤだけ知らなかったーーーーっ!何でーーーーっ!?!」

あつ、寝不足でフラフラする??。

おかしいよ?? マヤ結構物分りに関しては自信あったんだよ? だからトレーナーちゃんから事実確認を取ろうと思って頑張ってたのにな?? うう~~~~??

「?? ボーノちゃんは?」

「今日のご飯が味噌ちゃんこだと言うこと以外は特に。」

「わーい。」

「ごめんねマヤちゃん。本当はすぐにでも教えてあげたかったんだけど?? お兄ちゃんが近くにいる時には教えてあげられなかったんだ。」

「な、何で??」

「だつてお兄ちゃん、カレン達が落ち込んでるとすぐ気付くでしょ? でも普段全然そんな素振りを見せないから——カレン達の事を見てももらいたくて、ちよっぴりいじわるしちゃった♪」

「マヤさんは大体マスターの傍に居た為、連絡が遅くなりました。すみません。」

「まさかの自滅だったよ?? 大人の駆け引き、マヤより先にやってたんだ??。」

しかもトレーナーちゃんには絶対効く方法で。今の所マヤの成果つて、ロブロイちゃんが牛さんの友達だつて事と崩れたローレルさんのイメーজだけだよ。こんな事ある? 無いよ。

「?? もう今日は何もしたくない。」

「でもねマヤちゃん?? 実は、カレン達も次の手が無くて困っちゃってるの。だからマヤちゃんの手を貸して欲しいんだ。ダメ?? かな?」

「うっ??。」

「昨日のマヤちゃんとお兄ちゃんのやり取りを見て、ビビビー! つて閃いたの! マヤちゃんなら他の人とも顔が広くて仲良しだし、お兄ちゃんの考えも分かっちゃうから有利な駆け引きに持ち込めるかなつて??。」



「それは??えつと??。」

あのカレンちゃんがマヤを頼ってくれてる。可愛いだけじゃなくて頭も切れるカレンちゃんが??ブルボンさんも、そうなのかな??

少しだけ目線を送ると、ブルボンさんはカレンちゃんの方を向いてからマヤに目線をくれた。

『ぶつちやけ1番大人のやり取りです』と、ミホノはミホノは進言します。」

「??やるっ!マヤがゼーっ!ったいにトレーナーちゃんの事をチームに振り向かせてみせるから!!」

「ありがと〜♡」

「流石です。天下無敵のちよろ——記憶媒体にある台詞データを消失しました。」

「ブルボンさん、ちよつとあつちでカレンと”お話”しませんか??」  
「任務了解。これより”コミュニケーション”を実行します。」

行っちゃった。何かブルボンさん言いかけてたけど、何だったんだろ?」

「あの、マヤノさん??大丈夫ですか?さつき大きな絶叫が聞こえてましたけど??。」

「キタちゃん!もう大丈夫だよ!なんて言ってもマヤ、大人だからね!♪」

「はあ??それなら良いんですけど??。」

そう言ったキタちゃんは、さつきまでカレンちゃんと一緒に居たトレーナーちゃん達の方に顔を向けて言った。

「あの、マヤノさん??あの人って。」

「えっ?」

キタちゃんが向いた方にはトレーナーちゃんとか??いつから居たのか、ウマ娘の人が。

わっ、待って待って!!何あの人??おつとな〜!!

マルゼンちゃんとは違う雰囲気って言うか??出来る女オーラが凄い!でも誰!?また新しいトレーナーちゃんとの交友関係が発覚したの!?!も〜も〜!これ以上新しい人増やさないとよトレーナーちゃん!!また分かんなくなっちゃうから!!ハヤヒデさんに何個方程式作ってもらえばいいの!?!

「うーん??」

「キタちゃんどうしたの?」

「何かあの人??どこかで見た事あるような??無いような。ヨシエさんが何か言ってたような??言っていないような。いや、テイオーさんだったかな?」

「そうなの?」

「ハッキリとは??でも気の所為かもしれません!それか、何か有名な人で雑誌やテレビに出てたとか!」

「うーん??確かにトレーナーちゃんもヨシエちゃんも、知り合いに凄い人がいっぱいいるから有り得るかも。」

「ですよね!あたしも最近慣れちゃってましたけど、やっぱりあの2人が特殊なんですよね!あはは、良かった——。」

「お2人共、こんにちは。」

『わあっ!?!』

キタちゃんと一緒に尻もちをついちやった。

だって、さつきまでトレーナーちゃん達と一緒に居たお姉さんが急に目の前に現れたんだもん。いつ来たのか全然分からなかった。

「初めまして。今日から1週間、お2人とゼンノロブロイさんの指導をさせて頂く??そうですね——」  
「ティー&ボー」、と呼んで下さ

い。」

「えっ?もう1人居るんですか?」

「えっ?私だけです。」

「えっ?」

「えっ?」

『えっ?』

じゃないよもーっ!!終わらないじゃん!何今のゆるいやり取り!?  
何で2人組みたいな呼び名を使ったの!?

「ふふっ、冗談でございますよ。ティーボーと呼んで下さいでございます。」

『ティ、ティーボー??さん。』

「——よしよしヨシエちゃん。はい!私と君達は知り合い超えて最早フレンド!堅苦しいモードしゅりよ〜!改めてよろしく〜♪」

そう言つて浜に膝をついたティーボー?さんは、マヤとキタちゃんの手を取つて、キスを——えっキスツ!?わっ、わわ、わあ?!ハートのサングラスが全部台無しにしてるぐらい大人な対応??フジさんでもやってるの見た事無いのに!

「あららら??この中に1人、お顔真つ赤な純情娘がいるようで。」

「だっ、だつてえ〜??。」

「わははっ。気楽に行こうぜい、天才マヤちゃんにリボルケインキタちゃん。」

「リボ???」

「つて事だから2人とも!最後の主役、英雄見習いの素敵な卵ちゃんを呼んでみよっか!行くよ〜?せーっ、の——!!」

『ロブ——』

「ロブ之助ええええええいッ!!」

皆ビックリしてる。ロブロイちゃんも、トレーナーちゃんも、デジタルちゃんも??ビックリするよね、今のは。ロブロイちゃんの事をそうやって呼ぶ人初めて見たもん。

近くに居たカレンちゃんやスイープちゃん達は、ようやくティーボーさんに気づいたみたいで??カレンちゃんに関しては、今頃凄い速さで色んな事を考えてるんだと思う。対応力込みならウチのチームでもダントツの理解の速さだから、多分もうトレーナーちゃん絡みだって察してるんじゃないかな。

「はい、良く出来ました!じゃあ皆で練習だ!トレセーン、ファイオーツ!」

そうしてティーボーさんはキタちゃんの手を引つ張りながら、皆が居る方とは逆側に歩き出した。だからマヤも、遠くに居るロブロイちゃんに『こつち』って手を振って??見ちやっただよね。

トレーナーちゃん達が居る方から真つ直ぐこつちに向かつて来た——砂浜の、大きく抉れた蹄跡を。

「かわいい子ちゃん達、ようこそティーボー先生のスペシャル指導教室へ!いや、1回こういうトレーナー業務って言うの?やって見たくてさあ〜!理事長ちやまに無理言っちゃったぜい。」

合流したロブロイちゃんとも挨拶を交わした後、ティーボーさんは嬉しそうにそう言っていた。

「さてさて、改めて君達に状況説明をしようか!私は今日から1週間、

皆の面倒を見る為にやって来たサプライズゲストなワケでございませう。時にBLACKちゃん？君はトレーナーから何か言われているかな。」

「ヨシエさんから？指示に従ってという事以外は特に??あつ。」モツペを楽しませてあげて」とは言われました。」

「うゝわ出た。ヨシエちゃんの言葉足らずな超感覚的ピーキー指導。その中に意味が5ゝ6個はあるから気を付けてね。」

「えっ？そうなんですか？それしか言われてないので、あたしはそのモツペさん？がそもそも誰なのか分からなくて——。」

「キタちゃん。それ多分、ラモーヌさんだと思うな。」

マヤの言葉を聞いて、キタちゃんはどんどん顔色が悪くなっていった。

「そうだよね??マヤも昨日、トレーナーちゃんがラモラモって言った時言葉に困ったもん。そういう所だよ2人共。だからウマ娘の子達の間で密かに流行ってる、『このトレーナーは無く理々ステークス』で13回連続ワンツーフイニッシュ決めてるんだからね。一緒に居るとお腹痛くなるって。」

「よしよし、難題押し付けられた不憫な子よ??でも任せなさい！無理じゃないからね！先ず君の課題は『積み重ね』。ガチガチに基礎固めてメンタルわっしよいさせてこー！」

「??で、出来ますか？かね??その、あたしは全然テイオーさんやルドルフ会長には及ばないですし??ましてやラモーヌさん相手に??。」

「んゝ、1つ言っておくよ。そもそも君の相手はメジロラモーヌじゃない。その上で出来ると言っておこうか。『惰性的な継続』と『意識した積み重ね』は決定的に違う。後者の方が断然ムズいんだけど、ヨシエちゃんが君を選んだって事は後者のやり方が出来るって断言してんだよね。あの子は自分のやり方が滅茶苦茶な事を理解してる。」

その上で担当を選別してるのさ。そこにルドルフもトウカイテイオーも関係無い。キタサンブラック——君は、ヨシエちゃん最後の

”可能性”なんだ。」

「えっ、ええく??胃が??ち、因みにその相手って??」

「??忘れちった! わははっ! 取り敢えず最終日にモっペをぶっ飛ばしてやろーぜい!」

「??はいっ。」

「ラモーヌさんって、呼び名幾つあるんでしょうか??。」

「ねー。」

それよりキタちゃん倒れるんじゃないかな。もう全然笑ってないもん。

「さあお次はロボロイちゃん。過去のレースは私も見させてもらったよ。君に必要なのは、”スイッチ”かな。」

「スイッチ??ですか?」

「YES! ぶっちゃけ実力はそこそこあるし、確実にこれからもっと伸びる。けれど忬度無しに言うのなら気弱。優しいんだらうけどそれ以上にメンタルがナメクジ。」

「ナ、ナメクジ??。」

「私としてはルドルフの前で、『我こそは英雄ゼンノロボロイ! 悪しき皇帝よ! 貴様の覇道をぶち壊しに来た!』ぐらい言って欲しい。」

「無理ですっ! 無理無理無理無理っ!!」

わははっ! て笑いながら、それでもティーボーさんはロボロイちゃんに視線を合わせるようにしゃがんで言葉を続けた。

「今のは冗談。でもね? 自信を持つて言うのは本当。トレーナーの、チームメイトの、ファンの期待と夢を背負って、私達は走る。どれだけ自分は1人だ、関係無いと思つても??ウマ娘である私達がレースに出てる時点で、誰かにそういう想いを託されている。それは皆同じなんだ。」

「皆? 同じ??。」

「そうして最後まで走って、歓声すら置き去りにする最終直線ですよやく本当の1人きり。意地と意地の、エゴとエゴのぶつかり合い。君らの勇者様が強いのはそのスイッチの入れ方が上手いのと、入れるべき所をきちんと理解しているからさ。」

足を動かすのは、心を震わせるのは、最後まで信じた自分だけの夢の剣。その剣で全てを打ち倒して、自分に希望を託した民の元へと凱旋出来たなら——シンプルにカツコイイだろう？英雄。」

「っ——！」

大きく見開かれたロボロイちゃんの眼の中で、熱く、大きく昂る何かが揺れ動いた。

ティーボーさん??言葉を選んで話してる。ロボロイちゃんの考え方を根っこから揺らすように、ロボロイちゃんの好きな言葉で。勿論トレーナーちゃんからマヤ達の事を聞いてる可能性もあるけれど??何だろう、この、さっきから胸がザワつく感じ。この人の現役時代を知らない筈なのに、言葉の節々にある説得力??うーん??それも何か違う。もっと分かりやすい”違和感”がある気がする。

「??とまあそれっぽい事言ってみたけど、そこは割と後でどくどくどくどくでもなるから、先ずは足りてない分の実力を堅実につけようねー!課題は『マヤちゃんの後ろーバ身以内に付いてくる』ことー!」

「えっ??」

「ティーボーさん台無しーッ!ロボロイちゃん固まっちゃったよ!?!ほら見て!眼鏡光ってる!!」

「あつ、これは逆光で??。」

「わははっ!そんなナイスツツコミしてくれたマヤちゃんの課題はね〜?。」

空気が変わった。

この人は笑ってるのに、ロボロイちゃんもキタちゃんも後退りして。

マヤも背中がゾワゾワして、自然に手をギュツと握ってた。ずつと付けてたハートのサングラスを外してティーボーさんは??瑠璃色の眼をしたウマ娘は、言った。

「——『私に勝ちな。』」

あー、理解<sup>わか</sup>つちやった——この人、デタラメに強い。

「??良いよ。」

「驚かないんだ?」

「だってティーボーさん、本当ならデジタルちゃんクラスじゃなきや相手にならないくらい強いでしょ。そんな人と走れるなんてこれから先何回あるか分からないもん。」

「やだなく。こんな事言ってるけど、私はもう引退してるんだからすぐ出来るって。わははっ。」

「ううん嘘。おかしいと思っただよね。さっきの??トレーナーちゃん達の所からマヤ達の所に来るまで早過ぎた事とか。今のロボロイちゃんに対する言葉とか。ティーボーさんってば、意地と意地のぶつかり合い??それもかなり強烈なのを経験してるんだね。」

笑ったままこの人は何も言わない。

でも促してきてる??”それで?”って。空気だけがピンツと張りつめて、胸が詰まる。

「まあ、経験してるよね。でも君達の所にちゃっちゃか行ったのは大した事じゃ無いよ。カレンちゃん??だっけ?あのスプリンターの子ならもつと速いんじゃない?」

「そうだね。でも——スプリンターでも無い引退選手が、学園内で1と2を争う現役スプリンターに並ぶっておかしくないかな?まるで”スピード”に手足が付いてるみたい。それかあの足跡を見るなら??もしかして、手足の代わりに”翼”でも生えちゃってる?」



さつきの足跡の所には、小さな人集りが出来ていた。

言葉を無くしてる子、素直に驚いてる子、嬉しそうな子、ちよつと引いてる子??色々な感情が集まったその場所に目もくれないで、ティーボーさんは黙ってマヤの方を向いていた。

「??翼??スピード??ああー!!!!!!」

大きな声をあげたのはロボロイちゃんだった。

眼を真ん丸にして、まるで信じられない物を見ているかの様にビツクリして??どうしたんだろ??

「マ、マ、マヤノさん!こここの人——むぐつ!」

「OK天才キッズ、私の負けだよ。君は本当に分かつちやう子なんだなあ??。」

「ふふん♪でしよ?マヤのこと、もつと凄いつて言ってくれても良いよ☆」

「まあそこが弱点なんだけどね!物分りが良すぎる気分屋さんでオールマイテイな脚質持ち??だから、その日の気分とレース展開で都度変えながら走ってるでしょう?」

「えっ、うん。」

「それ自体は悪い事じゃないんだ。良くないのは、君が受け身の姿勢で居続ける事。天候に、バ場に、相手に、展開に合わせる??結構。気分で走るのだから大いに結構!けれど——相手任せな合わせ方しかしてないから急なアプローチが発生したら引っ掻き回されて、対応出来たとしても先ず出遅れるし、取り戻そうと掛かりに掛かる。」

「うっ。」

「バテる。逆噴射。撃沈。トレーナー大爆笑。ユーコピー?」

「だってえ~~~~~!!うう??アイコピー!」

何か反論したかったけれど、実際心当たりしか無かった。につ、て

笑ったティーボーさんの大人な笑顔に、ますます何も言えない??マヤの子供っぽい所を宥められてるみたいで、ちよつぱり悔しい。むく。

「だから君にはもつとスタミナを付けてもらいます。多少の掛かりはしょうがない。それでも押し切れる肺を作っておけば困る事は無いし、君の考えも幅が広がるでしょ。後はもう1つ有るんだけど??そこはやりながら考えてごらん。」

「はい??あれ?でもそれとティーボーさんに勝つ事に何の繋がりがあるの?」

「んー?走れば分かるさ。そして君のそんな変化を、いさみんは待つてる。」

「??いさみん?」

「あつ、やべ。トレーナーさん!わははっ!」

さつきまでとは打って変わって、ティーボーさんはマヤと目を合わせてくれない。引き攣った笑い方で明後日の方を向いてる。

??あやしい。この人絶対絶対、ぜくくくつたい何か隠してる!

「あ、あの、マヤノさん??この人は——。」

「バーンツ!!」

「ひゃあっ!」

「今どこからクラツカー出したの??」

「さあさあ先ずは実力判断の模擬レースと行こうか!芝コースに行こうそうしよう!マヤちゃんは??気になるなら、トレーナーさんにも聞いてくるかい?私が言った事、きつと明瞭簡潔に教えてくれるぜい♪じゃつ、待ってるねく!良いかいロブ之助。ネタばらしはほら、トレーナーにねっ?ねっ??私もちよつとカツコつきたいから??。」

「は、はい??。」

??行っちゃった。何か、知性を持ったハリケーンみたいな人。手当たり次第に巻き込んで暴れてるっぽいのに、ちゃんと考えながら動い

てるって言うのかな。

トレーナーちゃんのおかあ??うん、行ってみよ。やっぱりトレーナーちゃんからも聞いておきたいし。夏合宿って本当はそういう期間だもんね!

そうと決まればレッツゴー!!

「ねえねえ、トレーナーちゃん!」

「どうしたの???」

「声小さいね。どうしたのはこっちの台詞だけ??あのね?トレーナーちゃんから見て、マヤってどう思う?」

地面に項垂れて半泣きだったトレーナーちゃんは、マヤの問いに少し考える素振りを見せた。

本当は??ティーボーさんの言葉が、本当でも嘘でも良かった。嘘なら嘘でティーボーさんのお茶目なジョークだったで済ませられるし、本当なら——。

『そして君のそんな変化を、いさみんは待ってる。』

あの言葉は、きつとティーボーさんとトレーナーちゃんが昔からの知り合いだって事なんだろうと思う。むしろこっちが嘘だったりして。本当に待っているのは??あの人。マヤに何かを見出そうとしている。

だからマヤに足りない物があの人と言った通りなら、マヤは全力であの人と戦わなくちゃいけない。

トレーナーちゃんはまだ考えてじつとマヤの事を見ながら——  
待って今別の事考えてない??

「掛かりやすい——とか。」

「わあ〜っ!やっぱりそうなんだ!ありがと!!」

「えっ!?あつ、マヤ!?待って、マヤ——ッ!!」

気のせいだった！そうだよね！幾らトレーナーちゃんでもこの場面  
面で別の事なんて考えないもんね！

ティーボーさんの言っていた事は本当だった。

”とか”、つて言ったのは、きつと掛かりやすさだけじゃない要因  
があるんだ。そしてそれがティーボーさんの言っていた、気付いて欲  
しいこと。

それがマヤの課題なら、乗り越えれば強くなれる。もっとキラキラ  
になれる。あの人と——ワクワクな勝負が出来る。

そんな軽い足取りの中、何でかいっぱい並んだスイカを横目にマヤ  
は芝コースへと向かった。

そして着いた時には——1人の生徒が、3人の前に立っていたん  
だ。

さつきまでの明るい雰囲気はまるで無くて、ただその生徒??尾花栗  
毛のウマ娘の子は、両眼が隠れるくらいに伸びた前髪の間隙から  
ティーボーさんの事を黙って見ていた。

澱んだ青。

眼の下に出来た大きなクマ。

ビツクリした顔のティーボーさんを見れば、2人が知り合いなのは  
すぐ分かったけれど??そこに、少なくとも仲良しなんて感情は無かつ  
た。その子もその子で、睨みつけているようにも見えるけれど??申し  
訳なさつて言うか、ティーボーさんに対しての怖さが見える感じでど  
こか眼を泳がせてた。

「??あー？久しぶり、スーちゃん。今年は合宿に参加してたんだ。」

「??。」

「そっか??あつ、とそうだ。君の姉ちゃんさ——。」

「??すみません。芝コース、使いますよね。私はそろそろ休憩なの  
で??どうぞ。」

スーちゃん。そう呼ばれた子は、深く俯いて更に言った。

「ごめんなさい。私、走りますから。ちゃんと??勝ちますから。」

「??なーに言ってるのさ。そんな使命感、誰も望んでない。代わりなんて、誰にも出来ないんだから。君は君の為に——。」

「出来ないとかじゃ、なくて??やるんです。私が。私だけが、何を掛けても。何に変えても??所詮、”期待外れの凡才”ですから。それじゃ。」

「——随分変わったじゃん。」

マヤ達の横を通ったこの子に、ティーボーさんの寂しそうな、冷たい声が掛かった。

「スター??私は、君の星空みたいな眼が大好きだった。私らにくっついて歩いてた時とは随分違う。あの綺麗な星は——どこに行ったのさ。」

「??落ちましたよ?落ちたんです??あの日に、全部。」

「そうかい??じゃあ落ちたついでによく聞きな。君に姉ちゃんの代わりは出来ない。」

「??言ったじゃないですか。それでも、私は——。」

「無理だ。あの強さを、あの輝きを、あの気高さを真似するなんて、誰にも出来やしない。私にも、グリ子にも、シンザン先輩にも。仮に妹だったとしてもさ??アイツを1番近くで見てきた私が言うんだ、スター。」

「??そんなの??分からないじゃないですか。」

「分かるに決まってるでしょうが。自分の心だつて見失ってる奴に、流星の貴公子”テンポイント”が背負えるかよ。」

「ッ??!」

「あ???。」

疲労の残った無理してる顔。その顔を悔しさに歪ませたスターメ  
モリーさんは、涙が零れる前に走っていった。

「??あーあ、クソ頑固な姉妹め。はよくっ付けっちゅーのに。」

「ティーボーさん??。」

「じゃあやろうか!芝コースも空けてもらったワケだし、レッツRU  
N!大将が来る前にやっちゃうぜい☆」

無理してるのは、この人も同じなのに。

何でも無いみたいな顔でスタート位置についたその人に何も言え  
なくて、ただ後ろを追ってマヤ達もスタート位置についた——時  
だった。

「マヤノツ!ロブロイツ!!キタちゃんブラアアアアツクRXツ!!!」

『トレーナーちゃん!』

「うーわっ、早いんだよ来るのが。わははっ。」

「RXって何ですか???」

「そいつはトウシヨウボーイだッ!手加減も遠慮も要らん!全力で  
走ってヨオオオツシツ!!」

「トウシヨウボーイ??この人が???」

「やっぱり、”TTG??!”」

「おーおー??担当ちゃんにおんぶして貰って、良いご身分ですねート  
レーナー殿!」

「うっせえわ!誰のせいでこんな事してると思ってたんだお前えツ!」

相変わらず楽しそうに笑ってるティーボーさんは、その眼をトレ  
ナーちゃんからマヤ達の方へと向けた。

「改めまして私はトウショウボーイ。TTGの1人。”天《font: u140》馬《font》”なんて呼ばれてた事もありまして——  
—後は分かるね?」

「っ??。」

「??あたし達、もしかして今凄い経験してます??よね。」

「わははっ。」

「おいティーボー!急にレースするって事は分かってんだろっうなあッ  
!」

「分かってますよ。まったく、そんなにカッカしなさんな??黙って  
た事は、後でちゃんど——。」

「カメラ持ってきてねえんだからな!?!どうせクソカッコよくぶっ飛ば  
すんだろっうけど加減しろよ!?!あとあれだ!あのく??取り敢えず終  
わったら歓迎会すんぞコラアッ!!」

キョトンとしたティーボーさんは溜息を1つこぼしながら、呆れた  
様に顔を手で押えていた。

なのに??その顔に浮かんでいたのは、笑顔。空気を張りつめさせた  
あの笑顔でも無くて、マヤ達の所に来てからずっと貼り付けてた偽物  
でも無い、自然な笑み??嬉しさ?

それでも1つ分かるのは——トレーナーちゃんが今、この人の”  
スイツチ”を押しした事。

「——だから会いに来なかつたんだぜ??っし!それじゃあ位置につ  
いて!~よーい??スタート——!」

「あつ、トウショウボーイさんってあのトウショウボーイさんなんだ  
!?!」

ようやく理解が追いついたマヤの言葉に、ティーボーさんは頭から芝コースに転んじやった。痛そう??。

眼鏡がずり落ちそうなロブロイちゃんに、眼が点のキタちゃんが2人揃ってマヤの顔を見ながら固まっていた。

「??ド派手にすっ転んだなあ、おい。」

「あつ、トレーナーちゃん。」

「もー！ー！ー！ツ！勘弁しなよ天才キッズ！他にどのトウシヨウボーイが居るんじやいツ！」

「えっ!?だ、だつて教科書の人居るなんてすぐに飲み込めないよ！」

「あーはっはっはっはっ!!物分り良いのに理解おせー！ひー、ヤベー！腹痛てえーツ!!」

「笑い過ぎーツ！」

この後両手にスイカを付けたカワカミちゃんと、そんなカワカミちゃんに引つ張られたソリに乗ってスイープちゃんが来るまで、ティーボーさんはずっと笑ってた。

ずー！ー！ー！ー！つと!!笑ってたツ!!



対決 :

???????

「よおダチ公。身長<sup>たっぱ</sup>伸びたな。」

「おつすダチ公。相変わらず老けてんね。」

「そうかそうか減らない口だ。スイカ食いたかつたんだろ？霧吹きに汁詰め込んで来たから腹いっぱい食えよカブトムシ。」

「ぐわー！雑い！仕返しが雑いし顔中スイカ臭ーい！」

「遠慮するなよ。姫が頭突きでかち割ってきた特級品だぞ。満足しろ？」

「満足した。おしぼり頂戴。」

「あるわけねえだろんなもんツ!!」

「雑いし逆ギレされたー！ウケるーツ！」

あつ、皆ポカンとしてる。それはそう。少々舞い上がってしまったようだ。サイボーグとマブ姉はお手伝いで居ないが、まあこれだけ揃っていればOKよな。どうせ夜には顔合わせするんだし、寧ろマブは顔見知り。

「はーい皆注目。こっちの自由人はトウショウボーイ。多分授業で習った事あると思うけど、少し前に”TTG”って呼ばれていた3強の1人です。」

「どうも。昔の女でゝす。」

「何で言葉1つで他人の信頼関係を狂わそうとするんですか？」

「逆に言葉1つで狂うような信頼関係しか無いんですかね？」

「はあー！?!そんなわけ無いんですけどおー！?!仲良しチームなのが売りなんですけどおー！?!はあー！?!」

「じゃあ良いじゃん。って事でよろしく♪1週間は面倒見るけどその後は遊びたおすから、楽しい思い出作ろーねー！」

クツソ軽いなコイツ。自分がそれなりに有名人と言うか、レジエンドクラスだって事分かってんのかな。挨拶したのに結局皆ポカン

じゃねえか。カワカミ姫、挨拶中に両手のスイカぶつけて叩き割るのはよしなさい。何を目指してんだよ。

そもそもデジが大人しいのが不気味??あいつどこ行つた!?さつきまで居たのに!!イヤー!一人にしないで相棒ーーツ!!

「ほんじゃあ挨拶もこの辺にして??って、言いたいところだけれどね。相棒ちゃん!そんな所隠れてないで、こっちおいでよー!」  
「ひよえっ??。」

居たわ。スタンド席の影に隠れて様子を見てやがった。

そのモーシヨンは可愛さ満点で大変よろしいが、チームのペースとしてお前が居なきや話が始まらんと言うのに。

恐る恐る影から出てきた相棒は申し訳なさそうな顔をしたまま俺の後ろに身を隠してホンツツツトそう言うところやぞお前ツ!!

いかん、冷静になれ。いつもの事だろう。いやいつもじゃないからおかしくなつてんだこっちは。そりゃちよつと、8割位はコイツに脳を焼かれた覚えはあるが、冷静さを欠いてはならん。少なくともティーボーはそういうところ絶対に見逃さないし、後からクソほど弄ってくるに決まってる。

「??どした?」

「だつ、だつてレジエンド様ですよ!?!あ、あたしさつき砂に埋まった状態でご挨拶しちゃいましたし??申し訳ないと言いますか??。」

「ほれほれ、天《font:ul40》馬《font》様のご尊顔だぞ?近くで見なくて良いのかな?」

「あつ、しゆき??♡」

「止めろお前ツ!ウチのエースを落とそうとすな!コイツすぐ落ちるんだから!!」

「手土産もあるぞ?ウマ娘ちゃん好きな君にうつつつけの、直筆サイン色紙だぞ?」

「ひえええツ?!?!そ、そんなつ、TTG様から直々にいッ?!?!?!これも日頃の!?!?!?!」

徳——。」

色紙を受け取った相棒がフリーズした。色紙に書かれていた名前は以下の通りである。

セントライト。カネケヤキ。カブラヤオー。ハイセイコー。テスコガビー。テイタニヤ。マックスビューティ。シンザン。テンポイント。グリーングラス。トキノ——。

「TTG増えたなあ。」

「なわけ。ほぼおやつさんの人脈。いさみんの師匠すげーや。あんな適当野郎なのに。」

「??家宝にさせて頂きます。トレーナーさん、これ神棚に飾って下さい。」

「家宝にしろよ。」

「畏れ多いですよコレエツ!!寮の部屋に置いておけない代物!歴史的価値の有る文化遺産!プレミアなんて言葉で表せない聖遺物!!分かってますかツ!?家宝にするに値する物だからこそ、トレーナーさんの家の神棚に置くんじゃないですかツ!!」

「わ、分かったよ??お前の名前、『アドレスデズタルちゃん』になるけどな。」

「ほら適当だ。」

「ところでお前の名前は?」

「私のはこっち。」

どこからともなくサインペンを取り出したティーボーは、デジタルのジャージにスラスラと自分の名前を書いては顎に手を当てた。あつ、おい待てい!顎クイやんけツ!?そこまでは許してねえツ!!しかもそのジャージまだ使うんだぞツ!!

「その色紙よりは価値が無いかもだけど、これで私にとって君は特別

な人になったんだ。だから??私の事だけ見ててよ、アグネスデジタル。」

「あつ、あつ??あ——っ!」  
「ん?」

「アタシがこんな扱い受けるのは解釈違いですからあああああッ!!!」

あーあ、行っちゃった。キヤパ超えたな??いや戻って来たわ。何だし。

「生涯尽くして大切にさせて頂きます!ありがとうございます!本当にありがとうございます!!でもやっぱり解釈違いなのは間違いじゃないのでお許し下さいいいいいッ!!」

オタク君さあ??今日も可愛いね。

「律儀だねえ。わははっ。」

「そういうフアンサバっかりしてるからガチ恋勢が後を絶たないんでしょうが??で?走んの?」

「えっ?やだ。歓迎会やってよ。顔中スイカ臭いし。そもそもロブ之助、これ以上はオーバーワークでしょ?」

「自由人め。でもあんがと。はーい今日の練習終わりー。皆で歓迎会しましよー。」

『はーい。』

和やかムードの中、ボーノさんから『スイカちゃんこ』とか言うヤバめの単語が聞こえた気がするが??まあティーボーなら全部食うだろ。知らんけど。食わせてやる。絶対に。

それより気になるのは、さつきからスタンド席に隠れてこっちの様子を伺ってるあのウマ娘だ。

チーム『ベガ』所属のスターメモリー。

成程成程、TTGと来てようやく思い出した??確か”貴公子の妹君”だったか、或いは”期待外れの凡才”か??何にせよ、浮かない顔しちゃってまあ??ふむ。ここで勇家いさまの家訓4箇条を思い出して1つ考えてみようか。

1. 義理堅くあれ——うむ、ここで会ったのも何かの縁。チーム『ベガ』には世話になっているからな。一肌脱ごうごうじゃないか。

2. 恩は必ず返せ——これも1に同じだろう。特にアヤベには世話になりっぱなしだ。恩と言うか借りだが、返すに越したことはない。

3. 無理をするな——今回はメンバーが多い。が、有り難い事におデジやカレン、ティーボーが居るなら分散して面倒を見れる。故に余裕は少しあるぞ。

4. 猫は友達——これだけは未だに分かんないの。ウマ娘であるお袋の家系が代々受け継いでいるらしいが??よっぽど影響力があつて猫好きだったんだろうな。『キンチェム』つて人。

まあ、4項に関しては余裕があつたら猫の可愛さを布教すれば良い。結論としては、マヤ達の特訓が終わったら盛大に推し活してやろうという事に至ったワケだ。”推し活はやることキツチリやってから”、は我が相棒の言葉である。流石はオタク、言葉の重みが違うぜ。

「っ?。」

こちらの視線に気付いた彼女はぺこりと一礼し、その場を後にした。

見間違いだろうか。

彼女の後ろに、ドス黒い霧のような物が見えたのは。



「それで？何が聞きたいのかなキッズ。」

「んー？」

ティーボーさんの歓迎会は、終わるのが勿体無いくらい楽しかった。本人の緩い感じと、マヤ達の知らなかったトレーナーちゃんとの昔の事が沢山聞けたし。当のトレーナーちゃん本人だけはずっと”No!!”って叫んでたけれど。

すっかり日も落ちて、もう30〜40分もすれば消灯時間。マヤはティーボーさんに色々聞きたい事があったから、夜の散歩に付き合っただと貰った。もちろんそれを分かっただけの人も付き合ってくれたんだと思う。何となく感じていたけれど、ティーボーさんは多分頭が良い。

「君はキタちゃんもロブ之助も居ないのに抜けがけで走ろうなんて性格じゃない。なら理由なんて、大方こっちの用事でも聞いとうって事でしょ。」

「うーん??そうとも言うし、違うとも言えるかも。」

「わははっ。何だそりゃ。」

静かな砂浜で、波の音だけが رفتり来たりしてた。

ティーボーさんはそれから何も言わなくて、ただ微笑んだままマヤの言葉を待っていて。

「課題の事とかは聞かないよ。でも何個か気になる事があつて??。」

「うん。」

「ティーボーさん、トレーナーちゃんの相棒だったの?」

「んー??違うかな。相棒ってのは、確かに私がいさみんに教えた言葉さ。でもただの言葉じゃない。『一蓮托生な存在』ってのが、私らの言う相棒。いさみんは、私の後ろをずーっとついてきてた人だからねえ??ダチではあるけれど、それ以上は無いよ。呼んだ事も、呼ばれた事

も無い。」

??やっぱり。顔に出てる。

「ティーボーさんの”スイッチ”って??トレーナーちゃんでしょ。」

「おん?何だよ何だよ急に。」

「カツコイイとこ見せようとした。あのまま走ってたなら、きっとマヤ達皆追いつけなかったと思うの。久しぶりに会ったって言うのがどんな感情なのかは、今のマヤには分からないけれど??でも——。」  
「そうなあ。カツコつけようとはしたよ?ダサいとこなんか見せられないって。私はいさみんの前じゃ、いつだって”天《font:ui40》馬《font》”トウショウボーイさんでいなきや。」

新月の夜。

真つ暗な空に浮かんだ沢山の星を見ながら、どこか寂しそうな声でそう言ったティーボーさんは溜息を零した。

「??すっかり1人前の顔しちゃってさ。頼れる相棒も居て、チームトレーナーなんてもんになつて。たかだか3年ちよつとだけ?おやつさん——あつ、いさみんの師匠ね。その人から話を聞いた時は耳を疑ったよ。あの頭ん中思春期男がそんなわけってね。けれども??今日、見て分かった。私らTTGは過ぎた時代の栄光で、今を生きてる君らの足を引っ張つちやいけないんだなつて。」

「??そうなの?」

「そうなの。いつか分かる時が来るよ。」

「ティーボーさんは??それで良いの?」

「良いの。それもいつか分かる??かも?あははっ。」

「??そっか。」

マヤには分からない。きっとティーボーさんにだつて分かつてないと思う。でもこの人は大人だから??きつと納得はしてる。それが

良い事なのかは置いておいて、何となくこの人の横顔から目を離せなかつた。

届かない願いを星に祈ってるような表情。

トウシヨウボーイさんは、きつと――。

「んで？他には？」

「聞いていいのか悩んだけど??スターさんの事。」

「まあ、そうなるか。うくん??何から話すべきか??もうちよつと散歩しようぜ。」

波打ち際をゆっくり歩き回り歩いてくティーボーさんの後ろを追う。わざとらしくうんうん唸りながら、それでも1つ1つ丁寧に言葉を選んで話してくれた。

「まずTTGってのは、ファンが付けてくれた呼び名だね。私とダチ2人――」流星の貴公子”テンポイントと、”緑の刺客”グリーングラス。そして”天《font:ul40》馬《font》”トウシヨウボーイ。」

「うん。そこはロブロイちゃんからちゃんと聞き直したよ。」

「よろしい。スターメモリーはその1人??テンポイントの、少し歳の離れた妹なのさ。」

「妹??でも、あの??テンポイントさんって??。」

「??今でも、たまに夢に見る。忘れもしない日経新春杯。アイツは第4コーナーで骨折した。嫌な音がして??気付いた時には、倒れてるテンが居てさ。ピクリともしてなかったんだ。何が最悪だったって、それが妹の真ん前で起きた事でねえ??正直――死んじまったかと思つたよ。」

ポツリ、ポツリ??ゆっくり言葉が吐き出される。その言葉はどれもが重くて、悲しくて、見てきたこの人だから説得力を持っていて。レースが楽しい、熱いだけじゃない、危険な1面もある事を物語って



いた。

「誰もが貴公子の復帰を願った。アイツのトレーナー??って言うか、私らTTGのトレーナーも躍起になって、『コイツの夢を死なせてたまるか!』って。一命は取り留めたけど、競走生活には戻れなくてね?? ああでも心配は要らないよ。アイツは諦めが物凄く悪くてさ。今も私とグリ子の2人がかりでリハビリしてやってんだ。」

「そっか??。」

「けど?? スーちゃんは違った。あの子はずつとわ言みたいに言つてたのさ——私のせいだって。」

「どういう事?。」

「さあ、ね。詳しい事は何にも話しちゃくれない。ただ?? 走る才能に恵まれた姉と平凡な妹。色々あったろうさ。あの子は決まって今日みたいな新月の夜に、一番綺麗なあのお星様をお願い事をしてたんだと。”願いを叶える星”とか言ってるね。」

ティーボーさんが指差した空には、確かに他よりも大きく、強く輝いている星があった。ああいうの、一等星って言うんだっけ。

あれ? でもそんな事をしてた人、他にも居たような??。

「あの子は今暴走してる。自分の感情が間違ってた、贖罪の為に?? ちゃんちゃらおかしいや。実の姉だろうと、負けず嫌いで悪い事なんか何も無いのにな??。姉ちゃんも姉ちゃんで、妹との約束を守ろうと必死こいてるのに頑なに会おうとしないんだ。だから、誰かが止めなくちゃならない。そうしないと、スーちゃんは”運命”に引きずり込まれちゃう。」

「その止める役目がマヤだったって事?。」

「んー? どうだろ。そういう役こそ私らみたいな時代遅れがやるべきだと思ってるけど。」

「嘘ついてる。ティーボーさん、そんな事思っていないよ。だって無理してるもん。」

「なんだとうコイツめく??とまあ、スターに関しては何んなどこかな。後はどうだい?ちよつと合宿所から離れちゃったし、夜も遅い。帰ろうか?」

「待って。最後に1つだけ——キタちゃんの敵って、誰?」

足が止まった。

「??何でそう思った?」

「ティーボーさんが思ってる以上にマヤは分かるんだよ?昼間、『敵』の事を話してから一瞬顔付きが変わったよね。それって、本当は言いなくなかった事なんじゃない?違うかな??マヤ達の前じゃ、言ったらダメな事かも?」

「??。」

「ティーボーさんと会ってから、ずっと感じている違和感もあるんだ。この違和感は多分『矛盾』なの。ヨシエちゃんに凄くそっくりな??何か目的があつて来たはずなのに、目的を果たしたくない。話したくない。そんな『矛盾』。」

このお話は本当にキタちゃんだけのお話?ううん、きっと違うよね。キタちゃんも候補なんだ。本当に用があるのは??その『矛盾』を生んでいるのは多分——デジタルちゃんとトレーナーちゃん。」

「マヤノ??。」

「トウシヨウボーイさん——どうして今になって『勇者御一行』の前に現れたの?そんなに辛そうな顔してまで??。」

「それは??君らが——。」

言葉を止めたティーボーさんは、勢いよくマヤの方を振り向いた。

驚きにも怯えにも似たその開かれた目線は、マヤよりもずっと後ろ

??夜の闇が続いてる、砂浜の方に。

そんな時だった。

「にゃあ。」

「??猫ちゃん? よーしよし、どうしたの?」

「触るな。」

冷たい声だった。

この人は変わらずに遠くの闇の中に眼を凝らしてる。

「??マヤちゃん。その猫、どうやって来たと思う?」

「どうって、勿論歩いて——あつ。」

「ここにはもう??私達以外何も無い。分かったら立って。早く。」

言われた通りにするしか無かった。

合宿所の周りや建物に面してる細い道路には街灯が並んでいて、それはずつとずつと浜の向こうまで続いている。だから波打ち際でも、少しは明かりが見えるんだけど??この子の周りには足跡一つ無かった。

それだけじゃなくて、街灯の位置を考えれば本当なら影は海に向かって伸びていないといけないはずなのに、この子の影はティーポーターさんが見つめていた浜の暗闇まで真っ直ぐ伸びている。

あんなに聞こえていた波の音も聞こえない。

海は動き続けているのに音だけが消えていた。

「??居るのか、そこに。居るんだな、そこに。」

耳をギュツと絞って、喉から低い唸り声を出して警戒しているこの人の視線を追って暗闇を見ると、赤い光が不規則に揺らめいていたん

だ。

正確な距離は分からないけれど、街頭の間隔を考えれば——多分、目測で2000mちよつとか、そこら。

その光のすぐ近くの街灯が消えた。

嫌な汗が背中を伝う。

寒気もしてきた。

今すぐにも逃げ出したいのに、どうしてもその光を目で追っちゃう。

街灯がまた1つ消えた。

この時間??って言うより、合宿所周りの電気は基本的には消えない。防犯の意味合いも兼ねてるからって、前にトレーナーちゃんから聞いた事がある。

なのに??また、消えた。

その赤い光の近くから、どんどん消える

消えた。

消えた。

消えた。

また、消えて。

点滅を始める。

「何でだ。何でっ?!」

点いて、消えて。黒いモヤが街灯の近くに居る。

点いて、消えて。モヤは人の形になった。

点いて、消えて、点いて、消えて。それがウマ娘の形だって事に氣

づいた時には、辺りが真っ暗だった。消灯前の合宿所の電気すら全部

消えて——それから、一斉に明かりが灯る。

黒いモヤは。

黒いウマ娘は。

ウマ娘の形をした何かは。

赤い光眼をギラつかせて??1歩ずつ踏みしめた地面に、”怒り”と、

”悲しみ”と、”無念”を煙みたいに撒き散らしながら。

『????』

ノイズ混じりの声を、音の無い世界へ叩きつけるように捻り出したそれは??つ。

「私もこの子も——名前を呼んで無いだろうがツ!!」

激情を煮え滾らせた蒸気機関車のように、物凄い速度で向かって来た。

「走れマヤノツ!!戻るよツ!!!」

「え???」

「ほら急ぐツ！担いだから??つ、さあ!!」

返事をする前にティーボーさんはマヤの事を肩に担いで走り始めた。

それは速いなんてもものじゃなくて——本当に、背中に翼が生えているようだったんだ。姿勢がうんと低くて、マヤの事だつて担いでるのにまるでブレない軸。走りの鋭さ。街頭に照らされた砂浜に大きく抉れた足跡を幾つも残しているのに、凄く軽やかに地面を蹴ついで。

これが??天《font:ul40》馬《font》”トウシヨウボーイ——こんな状況なのに、凄いものを見るせいで胸のドキドキが止まらなかった。

けれど、もつとおかしいのは後ろに??確実にマヤ達に狙いを定めて、黒い影のウマ娘はその速度をぐんぐん上げてる。不規則に揺れた赤い光が安定して、寒気だけが意志を持って近付いてきてる。分かりたくもない事が分かっちゃうんだ。

「ティーボーさんダメ！追いつかれる！」

「今どの辺ッ!？」

「よく見えない！でも、どんどん早くなってる！あれ何!?本気のマルゼンちゃんより全然速いよッ!!」

「正面玄関まで回ってられない??トレーナー棟なら近いけど、そもそもベランダの鍵開けてる不用心なのが居るとは——。」

「居る!トレーナーちゃん!」

「マジ!？」

「消灯前は必ず30分ぐらいベランダで煙草吸いながらボーツとしてるって、後輩<sup>ヒメ</sup>ちゃんが言ってたの!トレーナーちゃんの部屋は角部屋だし、あと少しで見え——!」

『?????????』

追いかけて来てる何かが言葉を発した??気がする。全く聞き取れないし、相変わらず凄く寒い。合宿所までは後もう少しのはずなのに、とても長い距離に感じる。この人の足でこれなら、マヤは絶対に逃げ切れなかった。

けれど、どうしてだろう??こんなにも悲しい気持ちになるのは。

「ドンピシャだぜ、マヤちゃん。」

「えっ??」

「不用心なのがちゃんと居たって事さ。いさみーんツ!」

「カワイイカレンあーんツ!!??あつ、寝てた??何してんの君ら?もう消灯時間になるぞー!」

「自分の担当、ちゃんと受け取れよーツ!マヤノ!今から君を投げる!」

「えーんツ!？」

「ほんの数秒ばかりの遊覧飛行さ!部屋の中入ったら、私に構わず窓閉めるんだよ!はい3、2、1!!」

「待っ——!!」

「ゆーきちゃんふらーいッ!!」

身体が宙を浮く。

トレーナーちゃんの所まで2mも無いくらいの距離を飛びながら、ふと目に入った。追いかけて来た黒いウマ娘の影が、やっぱりとても悲しそうな眼をしていた事。諦めにも似た、虚ろな眼??ねえ、どうして?」

ううん、そっちは後。まずはトレーナーちゃんに受け止め——何で目を瞑って十字切ってるの——ッ!?

「さあ??カモンカモンカモンッ!!!」

「じゃあ眼を開けててよ——ッ!!」

「ぶべらッ!!!」

ギリギリの所で顔にしがみつくと事しか出来なかった。トレーナーちゃんは受け止めきれぬわけも無く、そのまま部屋の中に倒れ込むように——。

「??おかえり。夜遊びしたいお年頃だろうけど、消灯時間は守ろうな。」

??怪我、してない。

必死になって分からなかったけど、窓の方を向いて置かれていたソファアーの上に倒れ込んだみたい。こんな置き方じゃなかったはずだけど??トレーナーちゃん、最初から知ってたの?」

「あつ!窓!!」

「閉めたよ。倒れる時にな。」

「えっ??本当にトレーナーちゃん?」

「どういう意味かはこの際置いとくよ。」

「だってトレーナーちゃん普段はもつとドジっ子なのにな?。」

「置いてくつて言ったんだから拾わなくて良いのツ！薄々気付いてたけどもッ！」

「アローハー！トウショウボーイさんだぞー♪」

「えっ!?な、何でティーボーさん床下から出てきたの!?どういう事!?!」  
「わははっ。この部屋、元々いさみんの師匠の部屋なのさ。私らTTGは消灯時間破りの常連だかね。こうして緊急逃走経路を3つぐらい作ってたワケ。マヤちゃん投げた後に軒下滑り込んでさく。いやー助かった！愛してるぜいダチ公☆」

「分かったから人の担当を夜遊びに巻き込むんじゃないやありません。マヤ、そろそろ降りてもらっていいかい？首が逝く。」

ゆつくり降りて窓の方を見ると、黒いモヤも、赤い眼をした黒いウマ娘もどこにも居なかった。まるで最初から何も無かったかのように静かな砂浜。少し息を切らしたティーボーさんだけが、部屋の中で『わはは』って笑ってた。

「はいはい、お楽しみは終了。エアグルーヴ母ちゃんが見回りに来るから、そろそろ部屋に戻りな。」

「うん??。」

「じゃあお休みく。」

「何俺のベッドで寝ようとしてんだお前。皆のところで寝させて貰え。」  
「ケチ臭いこと言うなよダチ公。私と君の仲じやんか。」

「俺とお前の、ねえ??因みにお前から結んできた『約束』、俺は1日だつて忘れた事は無いぞ。それでもここで寝るか？ベッドは1つだ。本当に良いのか？俺はお前、今日は何が何でもベッドに寝てやるからな。お前がそのまま寝落ちかまそうが俺はそこで寝るぞ。良いんだな。本当に、本つつつ当に良いんだな?」

「あーっ！可愛い皆と寝たくなってきたなーっ！帰ろっかなーっ！行こーぜマヤちゃんー！」

「えっ?う、うん??。」



凄く慌てた様子のティーボーさんに手を引かれて、マヤ達はトレーナー室を後にした——はずだったんだけど。

「くそっ、くそっ??っ!人の事忘れてたくせに何で余計な事覚えてんだアイツ~~~~っ!」

「??どうしたの?座り込んで。『約束』の話?」

「ふふっ??良いんだ天才キッズ。気にしないでくれ。これはその??わ、若気の至りだったんだから??。」

「え〜?もしかしてデートのお誘いでもしてた、とか??なーんちゃつて——♪」

あつ、凶星だあ??凄く顔してる。逃げよ。

「待てよマヤちくん!今日はお姉さんと一緒に寝ようぜ~~~~~~~~  
〜おおいツ!!」

「わーっ!?!ゴメンなさいツ!!でもそんな露骨に顔に出るティーボーさんの方にも問題あると思う~~~~~~~~!!」

結局3秒後に捕まっちゃった。

あれ?1週間でこの人に勝てる想像、全く出来ないや??。

「??まさか2人が外に居るとは思わなかったからエライ目に巻き込まれたな。マヤ、トラウマにならなきゃ良いけど。結局お前さんとルドルフが言っていたオカルト話や、『漂流者』と『観測者』が全部事実だったわけだ。屋根裏に隠して悪かったな??もう出てきて良いぞデジタル。」

「いえいえ、お構いなく。屋根裏は慣れてますから。」

「なんで？ いや?? お前だもんな。取り敢えず見回りまで後20分。パ  
パッと話をして、URAファイナルズからの”ユメ”にケリをつけよ  
うか。」

「??はいっ。」

「お前にも言ってるんだぞー。真っ黒ウマ娘の——『セントサイモン』  
さんよ。」

特別R : 勃発、魔法大戦!

【発令】夏合宿にスイーピー参戦! 【仲良し大作戦】

ふっ??ふっ??そうかそうか、とうとうこの日が来てしまったのか。ロブロイが加入した今、残すはスイーピーとフラワーちゃんのみとなった、『平均身長142・5cm勇者御一行完全化計画』——いやそんなものは無い。血迷うな。平均身長ちっちゃっ!!!外でミーティング作戦会議したらお巡りさんに職務質問されるやんけ!!

まあいい。大した問題では無い。それよりもシンプルに嬉しいのだ。だって俺がチームにお誘いした子達が、今の所ちゃんと来てるんだぞ?新人ちゃん達にフェイスハガーマヤちゃん、それから破竹の英雄見習いロブロイ??調子が良すぎて己の勧誘スキルにビビっちゃうぜ。ポニーちゃんだって嘶いてらア。ブルルン!ボルルルン!

今後に関して決めて、決して優しさに漬け込んでいるわけではないが、フラワーちゃんは何とかなるんじゃないかと思ってるのよね。ウチには”カワイイダービー”で競ったカレンチャンや、お料理繋がりでもボーノも居る。寧ろボーノが居る。つまりどういう事か??スプリンターにしてお料理出来るボーノはまさに勇者御一行のスーパークリークなのだ。存在感デカすぎだろ??。

言うなればママ。アケボノママあーっ!!  
字面が力士なんよ。

それに三十路のおっさんがママはちとキツイ。俺はノーマルだ。そもそもママ寄りというか、オカンと言う意味では我が相棒に勝る者は居ないんだよ。流石だなオタク。本当にオタクか?

ボーノは??そう女神。ちゃんこを司る、俺にとつての3女神様の1人だ。皆にちゃんこを振る舞い、たまに食べ過ぎに泣かされ、然し愛を持って全てを肯定してくれる??ふっ。まさに——。

親方かな?ウチ関取育てたっけ?

いかんいかん、ボーノの事を考えると思考が力士になってしまおう。ごつつあんです。

まあどのくらい女神かと言われると、彼女が居なかったら俺は無入島で餓死していた位には女神だ。

まだデジタルしか担当していなかった当時、気分転換に行ってみた無入島ツアーでまさかの置き去り。しかし準備は万端だった。電池切れにならないようフル充電+モバイルバッテリー3台というパフォーマンス仕様、己の完璧なスケジュールに恐れすら抱いていたが??。

まさか電波が無いとはこの李白の目を持ってしても読めなかった。そも本当に完璧なら帰りの時間を忘れてたりせぬわボケナスが。

結局2日間誰にも連絡出来ずだったせいで、帰って来たら半ベそかいた相棒にド叱られ、たづなさんには笑顔で正座させられ、モルモツトはブラックライトみたいに光ってたんだよな。ふふっ??こわかった。

結局のところ、ボーノが居れば安泰と言う話。何たる頼もしき。今こそヒシアケボノさんを讃える賛美歌を歌うべきだそうしよう。どうせスィーピーの教室まで1人だからな！わっはっは!!

「Baby ちゃんちゃんちゃんこボーノ ちゃんこボーノ——」  
♪

「マスターに気分、『高揚』を検出。」

「トレーナー君、そこ濡れてるから滑るわよ?」

「えっ?はあん!!」

教え子の前で喘ぎながらすつ転ぶとかある?あるんだよ俺は。マブ姉とロボ姉にクツソ恥ずかしい所見られたんですがどうすれば良いですか師匠。この場合の対応を教えてくださいませんかよ師匠。ハゲれば良いですか?

いや、よく考えたらあの人の仕事って大概俺がやってたわクソが。

貴様がハゲろ。頭散らかせ。

「あらあら??エキサイティングにいったわね。大丈夫?」

「バッチグーだぜ姉ちゃん。なんて事は無い。心以外は。」

「マスター。心臓マツサージ、いきますか?」

「??ワンプッシュしてくるんだろ?いいよ。」

「御意。BPMを170に設定。位置について??よい。」

「要らないって意味だよゴメンねツ!!ワンプッシュで心臓に『うま  
びよい伝説』のビート刻もうとすなツ!死ぬわツ!魂うま脱地<sup>だっち</sup>ツ!」

「そうですか??159まで下げたらどうでしょう。」

「それ『本能スピード』だろ!?どうも何も生存本能が身体を駆け巡るか  
らダメ!」

「では95。」

『Winning the soul』もOUT!三冠どころか一巻  
の終わりだよ!」

「98。」

「何でちよつと上げた!?人の散り際を『彩ファンタジア』で飾ろうとし  
てんのか!?ぐつとぎゅつと鼓動が苦しいわツ!ねえツ!」

「ステータス、『ニツコリ』。満足です。」

サイボーグお前コノヤロー、いつからそんな人を弄ぶレベルまで成  
長した?

誰だ!誰の差し金だ!言え!中身幼女なブルボンちゃんをこんな  
??ふむ、しかしその自然発生しただろう『ニツコリ』スマイルは可愛  
いな。ここはもうカレンという事にしよう。大体いつもそうなんだ  
俺は詳しいんだ。それならお兄ちゃんは納得という名の敗北宣言を  
する。アレは今の俺が勝てる相手では無い。しかし必ずやお兄ちゃ  
んの前で敗北宣言させてやる??なんだポニーちゃん?今元気になる  
要素無かったろ?お前敗北カレンチャンの字面に反応したのか?そ  
れでOUTなら生涯勝てねえわ。

「よくそんなにポンポン反応が返せるわね??。」

「ふふっ、だって俺は中央のトレーナーだぜ? 当たり前前田の——。」

「クラッカー?。」

『いえ〜い♪』

「じゃ、先にトレーナー室行ってるわね〜!」

「失礼しマスター。」

「ん”っ?! クソっ! こんなので! こんなのでえツ!!」

子供は成長する。何故かそれをブルボンで実感してしまった。

あー頭痛え?? ふええ〜バカになっちゃうよお?? キツシヨ!!

いかにいかに、先を急がねば。

「あつ、トレーナーさん。」

「おつすデジ。今日は真っ直ぐか?」

「ええ、まあ。トレーナーさんはどちらに行かれるので?」

「ふふふっ、聞いて驚け?? 何と夏合宿にスイープトウシヨウが参加してくれるのだ!」

「あつ、その話でしたか。」

「お前さ?。」

また知ってたパターンだわ。おう相棒、他に俺の知らない事が有るなら今の内に吐いとけよ。今なら右耳だけで勘弁してやらあ。

「それより前を見て歩いた方が——あつ。」

「あはあんっ!!」

今度は壁にぶつかつた。これが壁ドンですか? 喘ぎ声2連発である。控えめに言つて死にたい。

何でもっと早く言わねえんだこのオタクは。やれやれみたいな表情で笑いやがってしかし顔が良い?? やはり五大栄養素の1つ『デジタリウム』は実在した。その内万病にも効くだろう。残りの4種である

『キングニウム』、『ウララン』、『ヒメノミン』、『カルシウム』も定期的に摂取してる俺に死角は無いという事よ。死角があつたから壁にぶつかったのでは？Um m??。足引つ張ってんのはカルシウムだな。やはり『カレン酸』を摂取するべきか。

しかしあれは過剰摂取すると頭がカワイイ色になり、最終的には社会的に死に至る。悩みどころだな??。

「では、お先に失礼します。」

「??あいよ。」

前途多難ではあつたが栄養素も補給出来たことだし、そもそもスイーピーの教室前まで来ていた。ならば後は俺の巧みな勧誘センスに物言わせて推し通るのみよ??ふふっ。ちよつと興奮してきたな。いぎ!!

「ごんちはー。スイープトウシヨウは居るかな？」

「何よ。」

「おおスイーピー！夏合宿参加してくれるんだって!?!どうもありがとうな——。」

「それ以上近付かないで。」

お父さん、お母さん。貴方達の息子はもうダメかもしれませぬ。オマケに愚息もダメです。しょんぼりポニーちゃんです。

この世には童貞を殺す言葉がわんさか有るが、『近づくな』と『臭い』と『お兄ちゃん♡』はその代表格とも言えるだろう。特に3つ目が破格の強さとセンシティブさを誇る。

開幕これ？トレーナーさん辛いわ??助けてデジたん。俺に助言をくれ。

「そこ、魔法陣があるから。魔力の無い一般人が入ったら魔法がおかしくなっちゃうの。だから駄目。」

「あつ、そういう事??。」

良かったなポニーちゃん。スイーピーは丁寧に教えてくれたらしいぞ。好感度マイナススタートというわけでは無かったらしい。喜べ。ヒヒイーーーンッ!!!

「それで?何しに来たのよ。」

「いやなに、さっきも言ったが夏合宿に参加してくれるって話じゃないか。だから一先ず挨拶とお礼をな。」

「ふくん。殊勝な心掛けじゃない。」

「後、迎えに来てって言われたから来た。」

「はっ?言っていないわよそんな事。」

「えっ。だってマヤノが??。」

「言っていない。」

「でも??。」

「言っていない。」

「??言っていない。」

「ない。」

あのクソカワ天才キツズめくくくく!!!

そんな駆け引きまで変幻自在にならなくていいんだよ!!トレーナーちゃん1人で浮かれて先走っちゃったでしょ!?!無駄にすっ転んで壁にぶつかって喘いで喘いで踏んだり蹴ったりだわッ!!

クツ、今頃トレーナー室でカレン達と共に『今日のくそぎこトレーナーちゃんからかい反省会』の1つや2つ開いているに違いない??ッ!どうやらマヤノに対する評価を改めねばならないようだ。

やはりここは大人としての余裕と尊厳を見せねば。そのセンチタイプぽんぽんに誓って必ず分かせたるからな!!

ところでこの魔女っ子。言っていないとは言いつつも本気で不要だと話しているわけでは無さそう。とどのつまりツンデレである。



はっ？貴様スイーピーのどこにツン要素があるんだ。寧ろどう考  
えてもデレの極地だろうがコレは。やはり守護らねば。ここは1つ  
話題を振って出方を伺ってみよう。

「??懐かしいな。俺も昔は、好きでよく魔法の呪文を唱えたりしてい  
たよ。」

「アンタ魔法を使えるの?」

「えっ、あっ??使えるっていうか??うん。」

「そう??魔法使いつてわけ??へ、へえく??。」

はいっ！魔法使いなりたてホヤホヤです！ホヤ遊ばせ！潮も吹く  
ぞ！ストレートに最低だよ。

何かこの歳の子に魔法使い呼びされると良くない感情がふつつ  
と沸き起こる気がしたが気の所為だったかもしれない。なっ？ポニー  
ちゃん。うんっ！喋るなっつて。

因みにねスイーピー？ウチの学園の男性トレーナー、大概魔法使い  
だよ？ここホグワーツみたいなものだから。

「??どんな魔法?」

「何が?」

「だから??どんな魔法使えるのかって聞いてるの!」

「ああ、成程。それは——。」

なんっつっつにも考えてませんでした。そう来るとは思っただけど準  
備時間無さすぎんよ??。

いやいやいや、俺なら出来るさ大丈夫さ。折角ここで彼女から食  
いついて貰ったチャンス逃すわけにはいかん。先ずは過去の記憶を  
総動員しろ。覚えているのは??うくん——。

『リリカル☆トカレフ☆キルゼムオール』

お前この子の年齢考えろよバカ野郎が。炎魔法で手当たり次第に  
火をつけ回ったらどうすんだ。しかもあれは魔法少女と言うには邪

道が過ぎる。スイーピーに関節技でも決められてみるお前?? 滾る。滾るなよ。

じゃああれだ、あの――。

『テクマクマヤコン☆テクマクマヤコン』

又ツ、これでは俺がマヤちゃんのテクニックに為す術もなく負かされるくそざこロリコン野郎では無いか。そも俺は何度も繰り返すがロリコン野郎では無い。たまたま可愛いくて集めたチームメンバーが比率的に小さくなっちゃっただけだ。そういう事もあるだろう、人生だもの。

ええい、もつと手頃なのがあったろ?? あなの?? カードをキャプターする感じの女の子が主役の?? クソっ! 喉まで出かかっているのに出てこねえ!! 代表的なのがあった筈なんだ! 頑張れ俺! 考えろ考えろ?? ほらあの、ウ、ウ、ウ、ウ??!!

「がー！ー！ぶッ!!!」

「ウインディー！ー！ー！ーッ!!!」

あつ、これが深考シンコウウインディーですか?? じゃねえわボケエツ! 普通に痛えよツ! 何勝手に人の腕噛んでんだこの犬っころろッ!!

大体にしてお前ウインディって名前だけでダート地属性やろがいつ! 風属性なら他に居たる!? 何なら申し子呼ばわりされてる風属性が! 誰かー! ヤマニン海賊団の船長呼んできてエーッ!

!!  
本日は所により薫風、凱風、いやっ風ふう。ゼファファファファツ

腕が痛い。凹む。

「??何だ? デジタルの?? トレーナーだったのだ。」

「自分から噛んどいてそんなガチめのシヨック受ける事ある?」

「デジタルのトレーナーに用は無いから帰るのだ。じゃ。」

「やりたい放題かよ。」

本当に何しに来たんだあの初代フェブラリース優勝者は。

「??アンタ、本当に魔法使い?」

「えっ。も、勿論さあツ!俺にかかれれば魔法の1つや2つ——。」  
「じゃあ使ってみてよ。アタシの前で。」

アーツ!困りますお客様!弊社の魔法は夜限定1回限りとなっておりますのでそんな急にドストレートで大胆なアプローチをされてはこちらとしてもニワ床トコの杖を抜かねば無作法トクというもの。ヌツ!グリフィンドールと薩摩に300点ツ!!

「言っておくけど、それで魔法が使えないんだったら夏合宿には参加しないわよ!嘘ついた奴と練習なんて出来ないもの!」

それだけは本当に困りますお客様ーツ!!い、いかん!巫山戯ている場合では無い!スイーピーの走りは、恐らく多分今後もしかしたらきつと相棒の力になる筈なのだ!絶対にこの縁は切ってやらねえ!!  
??かくなる上は??やるしか無いのだろう。もしもの時の為に覚え  
ておいた、ある種禁断の魔法を。

「分かった。なら、外に行こう。ここだと被害が出てしまうからね。」

「な、何するのよ???」

「——召喚魔法さ。」

と、言うわけで。中庭にやって来たワケなんですけどもね、ええ。  
召喚魔法と言っても特段用意する物は無い。運と、1つの要素と、  
己の祈りだけだ。

先ずは要素。奴はこの時間、この辺りをテリトリーとして巡回して  
いるはずだ。プロレス娘が言っていたから間違いない。

そして運というのは、奴が俺の顔を覚えているかどうかさがさっぱり  
分からんという事。プロレス娘は『賢いので大丈夫デース!』とか

言っていたが、俺は敵意の目を向けられていた気がしてしょうがない。

そして祈り??これが1番大事だ。

「さあ見せてみなさい!アンタの魔法を!!」

ひえーッ!可愛いーッ!顔が良すぎるーッ!期待の眼差しご馳走様ですッ!なんて純真無垢ッ!やはりこのウマ娘是非ともウチにッ!

これら全ての欲と煩惱を寄せ、俺は今あの大空に願いを託すのだ。右手を水平にし、自身が止まり木である事を示す。呼吸を整えて集中しろ??生涯治る事の無いと理解した厨二心を思い出せ。

万感の想いを込めて——いざっ!!

「エル・プサイ・コンドルウ!!来いッ!『マンボ』——ッ!!」

スイーピーの耳が僅かに動いた。

聴覚の優れたウマ娘の耳には、風切り音が聴こえたのだろう。ふふふっ??俺の勝ち、だな。うおっ、右手重——。

「ケエエエエエエエッ!!!」

デッケエー——ッ!?何だこいつ超デッケエー——ッ!?初めてこんな近くで見たアツ!!!翼広げて威嚇してるうッ!!怖ッ!!猛禽類怖いッ!!無理デカイ怖いゴメンなさいッ!!気軽に呼んでゴメンなさいッ!!お前マンボってかジャンボじゃねえかチクショーッ!何が『小さくて可愛いんですよ♡』だあのプロレス娘ッ!凄えガン飛ばされてんだよこっちは!!

し、しかし??。

「??アンタ、本当に魔法??。」

期待の眼差し——ッ！キラッキラおめめが可愛いねコンチクシヨーツ！

みつともない所を見せるな俺。こちとら勇者デジタルの半身にして中央トレセンのトレーナーだぞ。たかが猛禽類の1羽や2羽が何だってんだ。ビビる必要は無い。普段通りクールに、冷静にだ。

「紹介しようスイーピー。コイツは”マンボ”。理由あって今は俺と——。」  
「ケエエエエエエツ!!!」

怖え————ッ!!猛禽類超怖え————ッ!!んだよ餌なんか無えわ!!こっちは瀬戸際だったんだからしようが無いだろ!後でプロレス娘にでも貰ってくれよッ!!

あつやべ、2階の窓にプロレス娘居たわ。目合っちった。こっちは今立て込んだるパサー。ゼファファファファッ!!

「マンボ、ありがとう。もう良いよ。じゃ、そういう事だからさっさと帰ってもらて——。」

「ケエエエエツ!!!ケエエエエエツ!!!」  
「痛つてえツ!!お前顔面蹴りやがったなこの鳥類がツ!人が下手に出てりゃ好き放題やりやがって——あつ、ぐ、ゴメン!ゴメンなさい!蹴らないで!控えめに言つて爪が痛い!俺が悪かったですすみませんでした!!」

ようやく落ち着いた猛禽類は人を見下した表情で飛び去って行った。あの猛禽野郎??飛び立つ寸前でダメ押し of 蹴り入れてきやがった。エル、そのアイマスクを差し出すがよい。女子テニス部にしてやる。

「??ねえ。」

「ん？」

「何でアタシなの？」

「??と、言うतो？」

「トレーナーなら??アタシの事、聞いてるでしょ。色々。」

ええモロちん。あつ、勿論。フジキセキ寮長様から聞いていますとも。だから何をそんなに浮かない顔を——最後に情けないところ見せたせいかな？

あ、あのダメ押し蹴りをかまされた男の姿を見て、何か色々残念な奴だと思われてしまった系!?

そ、そうか??つまりこの段階で彼女の俺に対するイメージは、鳥にすら蹴られナメられるクソザコナメクジ以下の魔法使い(意味深)になつてしまったという事だ。そんな奴に面倒を見られるなど、自由意志の強い彼女からすればどんな理由をつけてでも断りたいのだろう。俺なら断る。

「??アタシ、はつきり言うわよ。やりたくない事とか、つまんない事とか言ったら??アンタの言う事だつて聞いてやらないんだから。」

「うん。どうぞ。」

「何でよッー！」

ええ??ここ怒られるところ??た、助けてデジたん??お前俺とスイーピーの相性バツチリとか言つてたよな??あつ、違うわ。バツチリだったのに俺がマイナスにしたんだこれ。凹む。

いやいや、めげるな俺。寧ろ好感度マイナススタートならば恐れるものは何も無いじゃないか。素直にお気持ち伝えた所でこれ以上好感度が下がる事は無いのだから安心しろ。

「俺はさ、スイーピー。君の走り??実は1回しか見たことないんだ。」

「アンタよくそれで勧誘しようと思つたわね。」

「本当にな。けれど、1回でよかつた。その1回で俺は君の走りに、君

の生き方に釘付けだったんだよ。それこそ??まるで魔法にかけられたみたいに。」

【警報】三十路限界アラート発令中。恥ずかしい台詞が止まりません。転げ回りたいが、やる事やってからデジタルに何とかしてもらえ。

「2回目は??いや、それ以上の走りを見るなら、俺は絶対に自分の手で君を導いてやりたい——と、思ってたんだけどな。」

「??何よ。違うの?」

「最初<sup>ハナ</sup>っから導く必要なんか無いつて事が、今日君と話してよく分かった。スイープトウショウ??存分に意見してくれ。『嫌だ』、『やりたくない』は大歓迎だ。『つまらないから嫌』なんて気持ちには同意し  
か無い。」

君には君のやりたい事があって、それを君自身が客観視して判断出  
来ている。そんなの大人だって中々出来る事じゃ無い。それを我儘  
だと一蹴するのも居るかもしれないが、俺からしてみれば知ったこつ  
ちやないね。」

大体にして彼女はまだ子供。見ろよ、ちまつこいこの背丈を。可愛  
いーツ!!

違う違う、そうじゃない。我儘の1つや2つ、なんなら20から3  
0程度はなんて事は無い。俺はチームのパパなのだ。寧ろ遠慮され  
る方が気を使うというもの。反抗期?上等。

「率直に言えばスイープトウショウ。君を”偉大な魔女”と呼んであ  
げるにはまだまだ経験も実力も足りないよ。けどな——今の君は。  
今の段階で既に、誰よりも”気高い魔女”だと俺は思っている。もし  
もそんな魔女に仕える事が出来たら??こんなに誇らしく、幸せな事  
は無いだろうさ。」

「??。」

あかん、俯いちやった。そのおっきな帽子寄せて貰っていい？お顔が見えなくてポニーちゃんビクビクしてるの。

こ、これでダメなら3日ほど待って下さい！原稿用紙にちゃんと勧誘文句纏めてから出直して来ますッ！すみませんッ！1回しか走ってるの見た事ないクソザコナメクジ以下の童貞が偉そうな口きいてすみませんッ！ナメクジらしく部屋の隅でヌルヌルのぐっちよぐちよに大人しくしてますッ！！塩対応されたら縮むけど。

「??そこまで言うなら??夏合宿ぐらいは??参加してあげても良いけど。」

「っ???そ、そうか。じゃあ改めて、『勇者御一行』へようこそ。歓迎するよ、スイーピー。」

「じゃあさっさとミーティング行くわよ！」

「ああ、分かった。」

っしやあオラアッ!!第1関門突破キタコレッ!!ラリホーラリホー!!よくやったぞ俺!やはり勧誘スキルだけの男と言っても過言では無いぞ俺!魔女っ子属性まで来たらいよいよウチのチーム無敵だなあおいッ!ゼファアファアファアッ!!

でも好感度はマイナスなんですよね?うわっ、考えたら辛くなってきた。夏合宿耐えられないかもしれない。

しかし心做しか嬉しそうな顔をした彼女を見てふと思う。きつとこの気高さも強さいつか必ず魔法となって多くの人々を魅了するだろうと。

それはきつと観客達だけでなく、誰もがまだ見ぬ偉業を目指す、あの小さな女王候補にも必ず――。

「何勝手にマンボ呼んでるんデスカーッ!!」

「げっ、プロレス娘!急げスイーピー!走るぞ!」



「そこ穴。」

「ああはあんツ!!!  
!!!♡」

何でまだ好感度下がる事態になるんだよクソが。1日に喘ぎ声3回はシヤレにならねえわ。覚えてろよウインデイ??ツ!お前、絶対にデジタルをあてがってやるから覚悟してやがれチクショーツ!!

「アーーーーッハッハッハ!バチが当たったんデス——ケエーーーーッ  
!?!」

「お前も落ちるんかい。」

「な——っはっはっは!ウインデイちゃん特製スペシャル落とし穴なの——どわあツ!?!」

「お前も落ち——お前は落ちるなよツ!!」

【ウマ娘】 社会的ゲート難共のスレ2 【語ろう】

301：名無しのゲート難

また来ちゃった♡

302：名無しのゲート難

定期的に出るよなこのスレ

303：名無しのゲート難

これ何のスレです？

304：名無しのゲート難

初見が居る??だと？

305：ヨシエ

ここは私とクソ共が性癖で殴り合うスレ

306：名無しのゲート難

ヒエツ

307：名無しのゲート難

出たわね

308：名無しのゲート難

ママー、変なのが居るー

309：名無しのゲート難

コラ、見ちゃいけません

310：名無しのゲート難

性癖の絞りカスみたいな女が何か言ったら

311：ヨシエ

もつと褒めろ。崇めろ。奉れ。ついでに金寄越せ

312：名無しのゲート難

くたばれ

313：名無しのゲート難

子供銀行しかねえ

314：名無しのゲート難

腹パンでいい？

315：ヨシエ

いいわけねえだろ脱ぐぞ

316：名無しのゲート難

脱ぐなw

317：名無しのゲート難

よもや羞恥心を無くされた???

318：名無しのゲート難

迂闊に脱ぐな。貢ぎたくなる

319：名無しのゲート難

それは???そう

320：名無しのゲート難

正しくは皇帝のトレーナーが著しくイメージを損なうスレ

321：名無しのゲート難

ガイドライン踏み越えそう

322：ヨシエ

私がルールなのに何言ってるの？従え。そしてさっさと貢げ

323：名無しのゲート難

腹パン

324：名無しのゲート難

してえ？腹パンしてえくく??

325：名無しのゲート難

口開けば腹パン案件だなお前な

326：ヨシエ

やってみろよ腐れ童貞共が！フランスまで来れたらな！ガハハツ

!!

327：名無しのゲート難

フランスのどこ？ワイ今仕事でフランスにおる

328：ヨシエ

ごめん調子乗った許してよ今日だけは見逃してもう言わないから

329：名無しのゲート難

芝

330：名無しのゲート難

芝

331 : 名無しのゲート難  
ダメやん

332 : 名無しのゲート難  
今日もヨシ虐で飯が美味い

333 : 名無しのゲート難  
秒で負けるのか??フランス兄貴は遠慮せずシバいたって

334 : 名無しのゲート難  
フランスで遊んでないで仕事しろ

335 : ヨシエ  
仕事で来てんだよ。日本に行くって聞かないウマ娘迎えに来た

336 : 名無しのゲート難  
お?

337 : 名無しのゲート難  
おNewの顔や

338 : 名無しのゲート難  
この時期とかまた中途半端やな

339 : 名無しのゲート難  
フランスとか絶対強いやろ(偏見)

340 : 名無しのゲート難  
モンジューだな!!

341 : 名無しのゲート難

なわけ

342 : 名無しのゲート難  
たわけ

343 : ヨシエ  
モンジュー

344 : 名無しのゲート難  
は？

345 : 名無しのゲート難  
マジ？

346 : 名無しのゲート難  
ウツソだろお前冗談で言ったのに!?

347 : 名無しのゲート難  
おかしいですよカテジナさん！

348 : ヨシエ  
の友達。バーカバーーーカ!!

349 : 名無しのゲート難  
たわけ

350 : 名無しのゲート難  
くたばれクソが

351 : 名無しのゲート難  
流石クソで割ったクソをクソで煮詰めた女

352：名無しのゲート難  
見戯よのう??

353：名無しのゲート難  
でもモンジューのダチって字面が強いわ

354：ヨシエ  
ジエンヌみたいな子。『ライネルブリッツ』って調べてみ

355：名無しのゲート難  
ジエンヌ？オペラオーが2人になるってこと？

356：名無しのゲート難  
はいはい世紀末世紀末

357：名無しのゲート難  
ゆーあーしょーっく!!

358：名無しのゲート難  
アドマイヤバガ絶対絡まれる案件

359：名無しのゲート難  
アヤベさんが変なのに絡まれる風潮ヤメロ！

360：名無しのゲート難  
でもこの間ショッピングモールのビーズクッションコーナーでふわわカバー特集やってたけど、アヤベが座りながら『デネブ??』って言ってた

361：名無しのゲート難

本人も大概やった

362：名無しのゲート難  
可愛い人妻

363：名無しのゲート難  
幸せになって人妻

364：名無しのゲート難  
長生きして人妻

365：名無しのゲート難  
おうライネルブリッツ調べたで。戦績は奮ってないけどまあまあ  
おかしい奴だわ  
芝・ダート問わずで短距離から長距離まで全部出走してる。凱旋門  
にも

366：名無しのゲート難  
世紀末霸王に変態勇者を掛け合わせた??ってコト？

367：名無しのゲート難  
フランスのHENTAIか??!

368：名無しのゲート難  
勝ってないなら闇雲に出てるんじゃないやね？中央はまだ平和

369：ヨシエ  
73戦71勝1敗1引き分け

370：名無しのゲート難  
どうした急に



371：名無しのゲート難

何の戦績？

372：ヨシエ

ブリッツちゃんのタイマン戦績。1敗はモンジューにアタマ差。引き分けは阿寒湖。私らが来た初日にはダンシングブレーヴに2バ身差離して勝ってた

373：名無しのゲート難

何で凱旋門賞ウマ娘に勝ち越してるんですかねえ???

374：名無しのゲート難

そのタイマン相手世界最強候補の1人やぞ

375：名無しのゲート難

黄金世代が黙ってないやろなあ。特に不死鳥怪鳥日本総大将辺り

376：名無しのゲート難

タイマンならヒシアマゾンが歓喜する

377：名無しのゲート難

俺もアマさんとタイマンしたい

378：名無しのゲート難

何でそんなのが急に来るとか言ってるんですかね

379：ヨシエ

さあ？愛の為にしょ

380：名無しのゲート難

腹パンで候

381：名無しのゲート難  
仕事しろ腹パン総大将

382：名無しのゲート難  
鼻ホジってそう

383：名無しのゲート難  
すっげー投げやりだゾ?? (驚愕)

384：ヨシエ  
何だ貴様ら好き勝手言いやがってよお!!こちら土産選びに奔走  
して毎日忙しいんだよ分かってんのか!!

385：名無しのゲート難  
本当に仕事しろよw

386：名無しのゲート難  
何してんだ給料泥棒w

387：名無しのゲート難  
俺への土産はエスカルゴで頼む

388：ヨシエ  
その辺のカタツムリでも食ってる

389：名無しのゲート難  
顔にカタツムリ乗せてくれたら食ってもいい

390：名無しのゲート難

このスレ変態がちよいちよい湧くよな

391：名無しのゲート難

スレ主がド変態の時点で察し

392：名無しのゲート難

つか、1人？

393：名無しのゲート難

こいつがルドルフを置いてくとは思わん

394：名無しのゲート難

ポラリスメンバーだって夏合宿じゃない？

395：ヨシエ

ルドルフとテイオーは連れてきて、オフサイドちゃんとツルちゃんは学園で教官達の手伝い。キタちゃんは勇者御一行に預けてきた

396：名無しのゲート難

あっ?? (察し)

397：名無しのゲート難

また勇者か

398：名無しのゲート難

安定の勇者御一行

399：名無しのゲート難

っぱ変態×変態のチームよな

400：名無しのゲート難

おいたわしやキタちゃんブラツク

401：名無しのゲート難

どうせ皆勇者色になる

402：ヨシエ

はっ？私との純愛いちやラブ御神輿わっしよいビラビラ花笠まつりが約束されてるんだからなるわけねえだろ

403：名無しのゲート難

素質あるよ

404：名無しのゲート難

顔の良いクソ女が顔の良い無垢な女の子をNTRされてメンタルベコベコになるスレはここですか？

405：名無しのゲート難

>>402

お前それルドルフの前で言ってみろ

406：ヨシエ

ちよつと引かれた

407：名無しのゲート難

言うなw

408：名無しのゲート難

何で言ってるんですかねえ???

409：名無しのゲート難

こいつ無敵か？

410：名無しのゲート難  
怖いもん無しやな

411：名無しのゲート難  
これはルドルフが正しい

412：名無しのゲート難  
でも面白着ぐるみ着てるお姉さんになってるよね最近

413：名無しのゲート難  
皇帝？昔はあんなに凛々しくて凄味があつたのにすっかり丸くなられて？

414：名無しのゲート難  
毒素に当てられてしまったな

415：名無しのゲート難  
毒素つてかドクソヤろ

416：名無しのゲート難  
芝

417：名無しのゲート難  
芝

418：名無しのゲート難  
芝4000。座布団あげたい

419：名無しのゲート難  
これは評価されていい

420：ヨシエ

怒った。テイオーのうなじ吸ってやる

421：名無しのゲート難

キツシヨ

422：名無しのゲート難

でも正直羨ましい

423：ヨシエ

蹴られた。凹む

424：名無しのゲート難

残当

425：名無しのゲート難

そりやそうだ

426：名無しのゲート難

だからやるなってw

427：名無しのゲート難

仕事の早い女だ誰かポリスマン呼んでくれ

428：名無しのゲート難

そも皇帝と帝王が一緒ならジエンヌと走ったんちやうの？どう  
やった？

429：ヨシエ

あの子マジで意味分からのよ。勝てない。適正なんかどう見

たつてダートの短距離なのに。ルドルフは称賛してるけどテイオーの負けず嫌いに火がついて手がつけられなくなってる

430：名無しのゲート難

ハルウララ（ロンシヤンの姿）

431：名無しのゲート難

ならマルゼンスキーとも良い勝負じゃね？

432：名無しのゲート難

あれは規格外やる。ましてや今勇者御一行やぞ。何しでかすか分からんて

433：名無しのゲート難

それはそう。ドリームトロフィーでも無双してるしな?? まあ一番ヤバイのはスパーカーを吹っ切れさせたトレーナー定期

434：名無しのゲート難

でもあの人口りばつか集めてない？

435：名無しのゲート難

つまり同士? って事?

436：名無しのゲート難

G1ウマ娘出すか国内外の芝ダート両方走れる距離適正ガン無視勇者を口説いてから同士を名乗れ

437：名無しのゲート難

皇帝の勝てなかった相手がトレセンに来るのか?? 荒れそう（小並感）

つかジェンヌのトレーナーはどうすんの？

438：ヨシエ

向こうはチームの1人だからトレーナーは来れない。取り敢えずはポラリスで面倒見る事にした

439：名無しのゲート難

ヒエツ

440：名無しのゲート難

変態×変態VSD変態×HENTAI？

441：名無しのゲート難

トレセンの明日はどっちだ

442：名無しのゲート難

ねえよ、んなもん

443：名無しのゲート難

世知辛いねえ??

444：名無しのゲート難

勝った方が我々の推しになるだけです

445：名無しのゲート難

ラドンもそうだそうだと行っていきます

446：名無しのゲート難

お前はさっさと山に帰れ

447：名無しのゲート難

実際問題、そんなレベルの奴が何で勝てないん？



448：名無しのゲート難

気性難か掛かり癖が酷い。或いはさっきのクソの発言からするに、  
タイムン以外だと集中出来ないんじゃない？

449：名無しのゲート難

1対1だから燃える？

450：ヨシエ

ちよつと違う。本人曰く、『皆が本気だからこそ私は皆を愛し、焦が  
れ、昂るのだ。誰か一人など到底選べない。そして覚えておくとい  
！我が名はライネルブリッツ！猛り燦る雷撃だ！』だって

>>448お前ぶっ飛ばしてやるからな

451：名無しのゲート難

芝

452：名無しのゲート難

何ですその自己紹介

453：名無しのゲート難

強者の濃ゆさ半端じゃねえよな。日本も海外も

454：名無しのゲート難

要するにアグネスデジタルと同じ考え方同じ走り方するのにデジ  
タルとは真逆の結果になるわけだ

455：名無しのゲート難

やっぱりHENTAIじゃないか（戦慄）

言うほど変態か？

変態か（確信）

456：名無しのゲート難

モンジューにアタマ差、ブレーヴに勝ち越してる時点でHENTA  
Iだわ。フランスこわあ??

457：ヨシエ

んな事より貴様らに聞きたいことあんだけどさ

458：名無しのゲート難

頼み方つてもんがあるだろ常考

459：名無しのゲート難

土下座して土下座ほらほら

460：名無しのゲート難

頭、高くない？高くない？

461：名無しのゲート難

まま、ワイら優しいから聴いたるわ

462：名無しのゲート難

感謝しろよクソ女

463：ヨシエ

全員明日の正午に足の小指ぶつける呪いかけてやる  
エクリプスって知ってる？

464：名無しのゲート難

何それ？

465：名無しのゲート難

急行列車だ

466：名無しのゲート難

それはエクस्प्रेस

467：名無しのゲート難

モブみたいだな達かな

468：名無しのゲート難

それはエキストラやな

469：名無しのゲート難

よく同人誌で見るし股間にくるやつ

470：ヨシエ

それは種付けプレスだろバカにしてんのかクソ共がツ!!

471：名無しのゲート難

お前が突っ込むなw

472：名無しのゲート難

無いものにくるな。無いやつが突っ込むな

473：名無しのゲート難

好きなん？ワイは好き

474：名無しのゲート難

恥を持って恥をwww

475：名無しのゲート難

そーいやコイツ心にち○ぽ生やしてたな

476：名無しのゲート難

マジな話だと日食とか月食、侵食だったか？それがどした？

477：ヨシエ

イギリスで超有名だった、鬼レベつよつよウマ娘の名前。それがエクリプス

478：名無しのゲート難

おっ？

479：名無しのゲート難

ん？

480：名無しのゲート難

居たか？そんな名前の

481：名無しのゲート難

知らん

482：名無しのゲート難

聞いた事ない

483：名無しのゲート難

調べても出てこんぞ。本当に居たんか？

484：名無しのゲート難

ダメだ記憶にねえ

485：名無しのゲート難

昔のウマ娘記念館みたいなところでも見た事ないわ

486：ヨシエ

ん、りよ

487：名無しのゲート難

でもイギリスってさ??昔あんまり良くない噂無かった?

488：名無しのゲート難

紅茶キメなきや口にティーパック詰め込まれてお湯飲まされるやつだろ

489：名無しのゲート難

英国ヤベーな

490：名無しのゲート難

風評被害だろ。紅茶に

491：名無しのゲート難

エクリプスは知らんけど変な噂見つけたわ。昔イギリスで2人のウマ娘が居なくなっただと。道路に影だけがずっと残ってたっばい

492：名無しのゲート難

はい眉唾

493：名無しのゲート難

オカルトの類ー?

494：名無しのゲート難

まだあんの?

495：名無しのゲート難

もう無いんだって。28年前に消えたらしい

496：名無しのゲート難

写真は各自で調べて、どうぞ

497：名無しのゲート難

うお、なにこれ

498：名無しのゲート難

うわあ??

499：名無しのゲート難

靈感とか無いはずなのに妙に寒気がする

500：名無しのゲート難

2枚出てきたけどこれ2人目？

501：名無しのゲート難

どうやらなあ??撮った場所違うっぽいし、違うんじゃない？

502：ヨシエ

貴様らテイオーの部屋着見たくない？

503：名無しのゲート難

話題振った本人が飽きてる

504：名無しのゲート難

芝

505：名無しのゲート難

切り替えの速さよ

506：名無しのゲート難

部屋着見たい！テイオー見たい！

507：ヨシエ

許可取ろうとしたら蹴られた。萎えたからやっぱ無し

508：名無しのゲート難

はあくつつかえ!!!はあくくくくつつ!!!

509：名無しのゲート難

仕事しろダメ女

510：名無しのゲート難

腹パンですねこれは

511：名無しのゲート難

パンしろパン

512：名無しのゲート難

白パン!?(難聴)

513：ヨシエ

それ私

514：名無しのゲート難

急に劣情煽るじゃん

515：名無しのゲート難

何の報告だよ自撮り晒せ

516 : 名無しのゲート難

ちよつと信じられないので見せて頂いても？

517 : 名無しのゲート難

大概やなおまいらw

518 : 名無しのゲート難

顔とスタイルなら満点だからこの女

519 : 名無しのゲート難

正直どう対応したらいいか分からないしちよつと燃えてる自分が許せない

520 : 名無しのゲート難

SAGAよのお

521 : 名無しのトレーナー

見せたい相手が居るので恐らく無理でしょう

522?: 名無しのゲート難

えっ  
!?!?!?

523 : 名無しのゲート難

新しいコテハン兄貴から衝撃の事実

524 : 名無しのゲート難

お前男居たんか!?

525 : 名無しのゲート難

ルドルフやろ



526：名無しのゲート難  
つか>>521誰やねん

527：名無しのトレーナー

ワイの担当がそう言つとります

『得体がしれないのにデジタル君のトレーナーに片恋拗らせ過ぎて思  
春期男子と小学生みたいな恋愛感情の狭間で悶々してるねえ??愉快  
だねえ??』つて。今日も葉がうまい

528：ヨシエ

クソモルモットテメエざっけんなバカ野郎ツ!!!誰が誰に見せるつ  
て話してんだおいつ  
!!!!!!

529：名無しのゲート難

キレたw

530：名無しのゲート難

これは互いに知ってる相手か？

531：名無しのゲート難

凶星やんwつかお前勇者御一行目当てかよw

532：名無しのゲート難

拗らせ可愛いね♡破局はまだですか？

533：名無しのゲート難

春爛漫になって参りました！ウツララ〜！

534：名無しのゲート難

ヨシエちゃん泣いてる？泣いてる？僕は笑ってる！

535：名無しのトレーナー

ハーバートレの事はめっちゃ好き。ルドルフは結婚したい。勇者御一行トレは拗らせるくらい好き。だから一人一人に色々なアプローチ掛けるけど一人も釣れない女。どうしてストリートにいないんですか??

536：ヨシエ

お前モルモットだろ！モルモットだろお前なあ！モルモットだよなあツ！本当に覚えてろ??覚えてろよ??ツ!!日本帰ったらぶっ〇してやるからなツ!!!

537：名無しのゲート難

大荒れしとるw

538：名無しのゲート難

芝

539：名無しのゲート難

芝

540：名無しのゲート難

応援したるから土下座しろほらほら

541：名無しのゲート難

んんwwwお可愛いことwwwwww

542：名無しのゲート難

これだからヨシ虐はやめられねえんだ??

543：名無しのゲート難

名無しのトレーナー兄貴愛してる結婚しよ

544：名無しのトレーナー

カフェとタキオンが居るのでゴメンなさい

545：名無しのゲート難

ふあっ!?チームお友だちちゃんけ!!!!

546：名無しのゲート難

本人キターー!!!

547：名無しのゲート難

祝えや祝え!

548：名無しのゲート難

もしや前スレで後輩ちゃん情報垂れ流したのも彼では?

549：名無しのゲート難

後輩ちゃん情報下さい(切実)

550：名無しのゲート難

小動物トレーナーの情報はまだですか?

551：名無しのゲート難

言い値で買おう

552：ヨシエ

何この待遇の差

553：名無しのゲート難

残当

554：名無しのゲート難

お前の事好きやから弄れるんやぞ。脱いでくれ

555：名無しのゲート難

大丈夫大丈夫応援してるから。破局はよ

556：名無しのゲート難

アグネスデジタル居る時点でそもそも勝ち目無い定期

557：ヨシエ

キーーーーーッ!!!もう決めた明日帰る。ブリッツちゃん連れてテイオーの首根っこ掴んででも帰って夏合宿合流してやるから。お前日の目を浴びれると思うなよモルモット!!

558：名無しのトレーナー

こちらもお会い出来るのを楽しみにしています  
因みに貴女が夏合宿に出したキタサンブラックさんですが、『わっしよい音頭』なるものを勇者御一行のトレーナーさんから教わってましたよ。賑やかで良いですね

559：ヨシエ

お前は後だ。先にぶっ〇す相手出来たから待ってる

560：名無しのゲート難

盛wりw上wがwつwてw参wりwまwしwたw w w

561：名無しのゲート難

マジレスするとそういう事してるから振り向いて貰えないのでは？

562：名無しのゲート難

想い人に犯行予告とは新しい恋の形ですね

563：名無しのゲート難

がんばえ〜

564：名無しのゲート難

報告よろ

565：名無しのトレーナー

後輩ちゃん情報はありますが夏合宿に関しては面白い情報がありますよ。オフレコでお願いしますね

今勇者御一行の元に、『天《font:ul40》馬《font》』が来てます

566：名無しのゲート難

えっ

567：名無しのゲート難

はぁん???

568：名無しのゲート難

勇者くんさあ？

569：名無しのゲート難

まじ？

570：名無しのゲート難

本当に何でニュースになってねえの？マスコミ君達仕事してる？

571：名無しのゲート難

合宿所に行けばトウシヨウボーイに会える？ヤバない？

572：ヨシエ

ツルちゃんからも連絡来たんですけど。明日学園に『流星の貴公子』が来るからどうしたらいいって。ちよつと本当に待ってトウシヨウボーイ含めて私何も聞いてないんだけど何してくれてんだあのクソボケロリコン野郎

573：名無しのゲート難

口悪いなw

574：名無しのゲート難

本当に盛り上がってきた！

575：名無しのゲート難

TTGが動いてる？なんで??

576：名無しのゲート難

グリーングラスは!?!ワイのイチオシ生涯のファン！グリ子様はあ!?!

577：ヨシエ

居る。来た

578：名無しのゲート難

なにが？

579：名無しのゲート難

問題発生？

580：名無しのゲート難

荒れそうですわね??先ずはスイーツでもパクパクしましょう

581：名無しのゲート難  
どしたー？

582：ヨシエ  
グリ子ここに居る。今来た

583：名無しのゲート難  
フランス???

584：名無しのゲート難  
どういう事ーッ!?博識兄貴助けてーッ!?

585：名無しのゲート難  
TTGが同じ様なタイミングで別々の場所に居るのか

586：名無しのゲート難  
さっぱり分からん。後進の育成か？

587：名無しのゲート難  
よく分からんけどその3箇所回ったら皆のサイン貰えるって事で  
ok？

588：名無しのゲート難  
なんやそのクソゲースタンプラリーー

589：ヨシエ  
ルドルフが対応してくれるらしいけどさつきから意味分からん。  
勇者御一行に確認の電話する

590：名無しのゲート難

お前に分からんなら俺らに分かるわけが無いな！ヨシっ！ラブ  
コールタイム入りまーす！

591：名無しのゲート難

ほんそれ

592：名無しのゲート難

後は任せた

593：ヨシエ

>>590ちげーわバカタレツ！

取り敢えず1回抜けるわ。スマン。おいクソモルモット！まだ見  
てるんなら責任持って引き継げよなお前ツ！！よろしくお願いします

594：名無しのゲート難

情緒の振り幅どうなつとんねん

595：名無しのゲート難

三十路手前の恋活頑張れ

596：名無しのゲート難

良い報告待ってるゾ♡

597：名無しのゲート難

泣いてくれればもつと喜ぶ

598：ヨシエ

お前ら嫌いだバーカバー！カッ！！勃起不全になつちまえツ！！

599：名無しのゲート難



なんて捨て台詞だ

600：名無しのゲート難

主が抜けたのに続くスレよ

601：名無しのゲート難

どうせ暇やし

602：名無しのゲート難

お友だちトレがいるなら違う流れになりそう

603：名無しのゲート難

小動物トレーナーの情報はまだですか？（依存）

604：名無しのトレーナー

ここだけの話

実はあの子、お酒が入ると早々に眠くなるうえに他人の手首を甘噛みするクセがあるんですよね。関わりの深い人は特に。

勇者御一行のトレーナーさんだけは毎回首を甘噛みされています

605：名無しのゲート難

エッ

!!!!!!!

606：名無しのゲート難

マーキングやん??小動物のジャレつきやん??素敵やん?・

607：名無しのゲート難

くそっ、じれってーな???俺ちよつとやらしい雰囲気にしてきます!!  
なっていました

608：名無しのゲート難

デジトレは何故耐えられる？メンタル強過ぎんか??

609：名無しのゲート難

どんどん萌えキャラみたいになってくの嬉しい、嬉しい

610：名無しのゲート難

そこにヨシエ入るのってやっぱ無理ゲーじゃね

611：名無しのゲート難

勝ち目無いやろ

612：名無しのトレーナー

どうでしょうね??正直言って勇者御一行のトレーナーさんとヨシエさん、お互いを良く見てると思いますよ。昔から毎日の様に小競り合いや喧嘩をしてるみたいですけど、ネタが尽きていないのがその証拠です。

あの類の2人はいざと言う時に脳を焼き合う関係じゃないでしょうか

613：名無しのゲート難

勇者御一行とポラリスが手を組んだら誰が止められるのか

614：名無しのゲート難

そもどういふ状況が重なればそんな事に???

615：名無しのゲート難

そらトレセン学園の危機やろ。特撮映画のVSシリーズでよくあるやつ

616：名無しのトレーナー

時に皆さん、ヨシエさんの事をどう思ってるのでしょうか?純粹な興

味なので深い意図は特にありませんが

617：名無しのゲート難

どうって言われても??クソ？

618：名無しのゲート難

頭に『愛すべき』が付くタイプの愚者

619：名無しのゲート難

マスコットの気性難。腹パンしたくなる（褒め言葉）

620：名無しのゲート難

まあ悪い奴ではない

621：名無しのゲート難

ファン感謝祭で知り合った奴の店で飲んだりしてくれるしな

622：名無しのゲート難

悪態はつくけどなんか憎めんです

623：名無しのゲート難

正直可愛いところは有るし、ウチの長女が生まれた時に祝いをしに来てくれたのは嬉しかった。本人には絶対言わんけど

624：名無しのトレーナー

成程??ありがとうございます

良かったですねヨシエさん

625：ヨシエ

お前ら私の事好き過ぎなーーーーッ!!!!

626：名無しのゲート難  
酷いものを見た

627：名無しのゲート難  
これが中央のやり方か???

628：名無しのゲート難  
勇者御一行×ポラリスよりこのタッグのがヤベーよ

629：名無しのゲート難  
そも何でいるんだこのクソ。一緒に居るのか？

630：ヨシエ  
居ねーわ。私が用事に5分も掛かるわけねーだろ常考  
貴様ら何年私のファンやってんだよマジでさあッ！いつもありが  
と

631：名無しのゲート難  
だから情緒の振幅よ

632：名無しのゲート難  
高低差200mありそう

633：名無しのゲート難  
死ぬほどムカつくのに面と向かってこれ言われたら堕ちる自信が  
ある。だからクソなんだこいつあ??

634：名無しのゲート難  
自分の武器を理解してる顔の良い女ほど怖いものは無い。ソース  
はコイツとカレンチャン

635：名無しのゲート難

カレンチャンはちよつと小悪魔に寄ってるだけの裏表カワイイ色に染まったボス乙女だろうが！いい加減にしろ!!

636：名無しのゲート難

ガチ勢が居ますねえ？

637：名無しのゲート難

ボス乙女は字面が強過ぎる

638：名無しのゲート難

しかしお友だちトレが思ってたより曲者だった

639：名無しのトレーナー

よく言われるんですよ。トレセンのゆるキャラだと。

あつ、倫理観的な話です

640：名無しのゲート難

この人1番ヤベーだろ

## 第4R : マヤ、願っちゃった

何かを忘れていている気がする。

トウシヨウボーイさんが来てから、もう6日が経った夜。明日はいいよ言い渡された課題の日。

一昔前、日本のレース界を盛り上げた天《font:ul40》馬《font》に勝たなくちゃいけない日。

正直練習は辛かった。

だってあの人鬼だったもん??練習になると人が変わるって言うか、マヤ達3人のギリギリのラインを常に把握してるって言うか??本当に無理って言う所までずくずくとスパルタだった。

何回か、もうダメっ!てフリをして休もうとしたけど、ひとしきり演技に付き合ってくれた後『満足した?行こっか☆』って。全部バレてたんだよね。

けど引き際は分かってて、辛いのに実力がついてきた実感は確かにあるから何も言えなくて。

——明日で終わり。辛かったけど、そう考えると少し寂しい気もする不思議な感覚。

結局あの人はどうして夏合宿に来たのかも、マヤ達に何をどうして欲しかったのかも分からないし、教えてはくれなかった。

それに、胸にぽっかり穴が空いている気がする。

何か??何か大事な事を忘れてるんだ。

2日目の朝にトレーナーちゃんから謝られた。『昨日の夜はゴメンな。怖くなかったか?』って。

何の話か分からなかったんだよね。

思い出そうとすると、頭にモヤが掛かったみたいにも何も浮かばなくて。だってティーボーさんが来た日の夜は歓迎会をやって皆でお話して、それで終わったから。

終わった??はず、だよな?

「??分からないなあ。色々分からない。」

後1時間もすれば消灯時間。

チームの皆はそれぞれの時間を過ごしてる。ロボロイちゃんはちよつと思ひ詰めた顔をしてたし、キタちゃんは急に部屋を訪ねてきたラモーヌさんとお話しに行つちやつて。

キタちゃん??あんまり良くない顔してたけど大丈夫かな。緊張もあるだろうけど、もつと違う事を気にしてたっぽいし。

調子が悪そうと言えばロボロイちゃんもそう。課題がマヤについてくる事つて言われてたけど、練習の大半はロボロイちゃんのペースに合わせてたから??マヤはまだ走れても先にロボロイちゃんの方が限界になって、休憩を挟むのなんて結構あつたし。気にしすぎてないと良いけど??。

ほんの少しだけ世界がちぐはぐな感じ。前に進んでるのに、歩かされてる見たいな。ティーボーさんじゃない誰かが望んでる通りの道に、こつち、こつちつて。

「トレーナーちゃん??今日、見回りだったつて。」

行つてみようかな。迷惑かな。でも——。

『覚えてないなら良かったじゃん。』

そう言つて笑つたティーボーさんの顔も、驚いた顔をしてたデジタルちゃんと同レーナーちゃんの事も、頭から離れない。多分この3人だけが、正しい道を歩いてる。どう正しいかは分からないけれど??やっぱり聞いてみよう、かな。

そう思つたらわりとすぐに足は動いていたんだけど、トレーナーちゃんが居る部屋に向かつている最中——バツタリ出会つたその人は、少しだけビツクリした顔で立ち止まつた。

「マヤちゃん、お散歩？」

「うん、そんな所。ローレルさんは——。」

珍しかった。あのローレルさんがジャージの袖を捲つて、フアスナーも全開。少し暑そうにパタパタと中のシャツを仰いでて、まるで激しく運動した後みたい。

でも??わざわざトレーナー棟で練習するかな?それも消灯の1時間前まで。

「運動してたの?」

「うーん、そんな感じ??かも?今日も暑いね。もう1回シャワー浴びてこなきや。」

そう言って笑ったローレルさんとすれ違って——ピツコー——ンツ!!マヤレーダー探知!!これもしかしてもしかするとそういう事!?えっ、マヤ分かっちゃった!!

「ローレルさん、デジタルちゃんの匂いがするね。」

「本当?あはは!さつき移っちゃったかな?」

「デジタルちゃん、今日は夜ご飯の後からタキオンさんと一緒なんだ。ローレルさん??デジタルちゃんとトレーナーちゃん、同じ匂いがするんだよね。」

足を止めたローレルさんは、にっこり笑ったままマヤの方を振り向いた。

「さつきまで一緒に居たの??トレーナーちゃん、でしょ?もしかして??トレーナーちゃんと——。」



少しだけ。ほんの少しだけ気まずそうな顔をしたローレルさんは、いつもよりどこか余裕が無いようにも見えた。やっぱりそうなんだ??。

「トレーナーちゃんと遊んでたでしょーッ! ずるーいーッ! っ! こんなギリギリまで!! 今度はマヤも呼んで! 絶対!!」

「そのまま大人になってね、マヤちゃん。お休みなさーい♪」

「何で走るのー!?! 絶対呼んでね! 約束だから!!」

「はーい!」

??何だろう、このマヤだけ分かってる感。こういう時って大体本当の事は違うっていうのがこの合宿でよく分かったんだよね??それは分かりたくなかった事なんだけど。

「いーもん! もうトレーナーちゃんに直接聞いちゃお!」

「俺が何?」

「ひゃっ!」

居た。今会おうとしてた本人が後ろに立ってた。不思議そうな顔をしてマヤの顔を見た後、いつもみたいに大人びた顔で笑って。い、いぎ目の前にすると聞けない??。

「何か声が出したと思ったらローレルは走って行くし??何か用があったかな?」

「トレーナーちゃん??あの、あのね??ローレルさんと!??何、してたのになって??。」

あれ??何でだろう、凄く恥ずかしい。

もしかしてマヤ、今凄い子供っぽい? 遊んでたのが羨ましくて内容聞いちゃったりしたら?? トレーナーちゃんはまたマヤの事子供扱いするかも。失敗したあ??。

ほら、トレーナーちゃんだっていつもみたいに笑って青ざめるー！ツツ!!何で!?遊びの内容聞いただけだよ!?そんなに白熱したの!?汗かくぐらい凄い事してたの!?

「??マヤ。ローレルさんはどんな感じでいらっしやったかな?」

「??あの、凄く暑そうにしてて??何か運動したのかなって感じで??ジャ、ジャージも着崩してたよ?」

頭抱えてる??しやがみ込んだ??本当は何してたんだろ。

「おーっすマヤノ。」

「ジョーダンちゃん??」

「こんな所でどうしたん?あー、つか腰痛えー。明日も練習なんだけどマジで??無駄に身体使わせんなし。」

「えっ?えっ?ジョーダンちゃんも一緒だったの??め、珍しいね!ローレルさんとトレーナーちゃんの3人で何してたのー?」

途端にオロオロしだしたトレーナーちゃんの方をチラッと向いたジョーダンちゃんは、不思議そうに首を傾げた後に教えてくれた。

「あー??何って??あれ何?カバディ?」

「????????」

ちよつと分かんない。

分かんないけどトレーナーちゃんも物凄く分かんないって顔してる。何でトレーナーちゃんが分かんないのかは分かんない。ねえマヤ全然理解出来てなくてちよつと落ち込みそうだよ。分かっちゃうのがアイデンティティだったのに。

「良く分からんがお前はバカでい。」

「うつせーっつの。バカでわりーか。」

「最高。」

『うえ〜〜い。』

「帰るわ。」

「おう。お疲れ。」

ジョーダンちゃん行っちゃった。今って何の時間だったんだろうね。もしかして分かんない事は考えない方が良いのかも。

「それで？俺は今から見回りだけ??。」

「ううん、何でもない！お休み！」

「そっか??なあマヤノ。実はデジタルに今日が見回りだって事言い忘れててき。誰か付き添いが必要なんだけど、良かったら夜の散歩に付き合ってくれるか?。」

「??先生とかエアグルーヴさんも居るし、見つかったら怒られるよ?。」

「その時は俺が怒られるさ。頼むよ。」

バレバレの嘘。本当に付き添いが必要なら怒られる事なんて無いのに。トレーナーちゃんなりに気を使ってくれたんだろうけど??そういうとこだなあ。それで付き合っちゃおっと思うマヤもマヤだけだ。

「良いよ。じゃあ何かあったらよろしくね。」

「勿論。」

「それで??結局3人で何してたの?。」

「??枕でバシバシって。」

「枕投げ!?やっぱりマヤも呼んで欲しかったー!。」

「1人が俺を押し付ける係で、もう1人が一方的に。」

「じゃあ枕投げじゃないね。皆で狙い合う遊びなのにその役割分担おかしいと思う。」

「凄い汗かくし、なんか楽しげな笑い声とかしてき。」

「それ枕投げだよ！運動量凄いし、皆で楽しめるから絶対枕投げ！合宿のテツパン！」

「手に持った枕を何度も何度も俺の顔にね、こう。ツボに入って笑えばなしの奴も居て。」

「じゃあ枕投げじゃないね。投げてないもん。百歩譲っても枕叩きつけかな。待ってジョーダンちゃんもローレルさんも居たの？ホントに？」

トレーナーちゃんはニコツと笑うと、何も言わずに歩き出した。

これホントなんだあ??混ざる??うーん、混ざれる??次呼んでって言っちゃったけど??けどおくく??っ！後で！考えよ！

歩くと意外と広い合宿所の中を2人で歩いてると、あちこちの部屋からヒソヒソ話し声が聴こえた。”練習疲れたね”、とか。”明日はオフだ”、とか。”皆まとめてプリンにしてやるのツ!!”とか。最後のは何だろね。

思い思いの夏を過してる子達の話の話を聞くと、勿論マヤ達だつて成長はしてるんだけど??それでも明日はどうなるか分からない。それはマヤだけじゃなくて、ロブロイちゃんもキタちゃんもそう。

考えない様にしてる??でも、考えちゃうんだ。何も本当の課題を見つけれない自分自身が成長してるのかどうか不安になる。

そんな時、トレーナーちゃんが頭に手を乗せながら笑ってくれた。

「心配無いよ。」

「えっ?」

「マヤノが思っているような事は何も無い。だから、いつも通りのお前さんでいい。」

「??うん。」

トレーナーちゃんはたまにこういう所がある。こっちの考えてる事を分かっているみたい、欲しい言葉を言ってくれて。

きつとこれが大人って事なんだよね。

「あのね、トレーナーちゃん。実は用事って言うのは??キタちゃんとロブロイちゃんの事なの。」

「2人がどうした——って、決まってるか。努力の鬼にやられたんだろ?そうさなあ??じゃあ今から言う事、3つばかり聞いて欲しい。」  
「うん。」

「1つ——キタサンブラックに関しては大丈夫だ。なんたって今回はスイープが居るし、そもそもウチに来た時点で何も心配はしちやいなさい。いつも通りの皆で接して欲しい。」

2つ——ロブロイの話も聞いている。ティーボーの奴、マヤノとロブロイに同じメニューやらせてるのに、ロブロイのペースに合わせてるんだったよな。」

「そうなの。だからロブロイちゃん、たまに思い詰めたり、マヤに謝ったりしてて??。」

「ロブロイに教えてあげてくれ。ティーボーが付き添ってたこの一週間、そもそもお前さんの為だってな。」

「うん??うん?えっ?そうなの??。」

「知らなかったろ?アイツは最初っからロブロイがマヤノに負けるとは思っていない。寧ろ勝負が面白くなるように、課題なんて名目で正解を言ってたんだ。ロブロイにはアイツからの課題の意味、もう一度よく考えてみて欲しいかな。」

??今日のトレーナーちゃん、何か変。変って言ったたら凄く失礼なんだけど!でも何か??ちゃんとしてるって言うか??。

「それで3つめ。マヤノ??お前さんの課題は、トウシヨウボーイに勝つ事でも無ければスタミナを滅茶苦茶増やす事でも無い。そもそもロブロイのペースに合わせた1週間じゃ、肺活量の底上げなんて無理がある。それをするのは俺の役目だ。」

「じゃあマヤはどうしたらいいの?。」

「——レースを作れ。そして、トウシヨウボーイをよく見ておくん

だ。」

ぎっくりした答え。

でも——分かるんだ。不思議と。

「マヤノの強みは周りへの理解が早い事。ただそれは、お前さんが受け身の姿勢でレースに出る限り弱点なんだ。周りに引つ張られるのなら??突出した誰かの出方が気になるのなら。そもそも自分がレースを作ってしまった方がいい。走りやすいように、動かしやすいように。集中するのは特定の誰かじゃなくてレースそのものだ。だから——天《font:ui40》馬《font》もお前さんの掌に誘い込んじまいな。」

「??出来るかな。」

「出来る。少なくとも、俺もティーボーもそう思ってる。それにな??マヤノ。」

大きな手が頭をくしゃくしゃやってしてくる。昔パパにされたみたいで、くすぐったいけれど少しだけ落ち着く。

「お前さんはナリタ<sup>沈</sup>ブライク<sup>行</sup>アン<sup>タ陽</sup>を追い続けた。どこまでも飛んで、その先で諦めをつけようとしていた怪物の心を繋ぎ止めた。俺はそれを見てきたんだ。出来ない事なんてあるものか。」

「トレーナーちゃん??っ!」

「うおっ!?!な、なに!?!どした!?!」

ぎゅっとしてた。トレーナーちゃんは驚いていたけど、何も言わないでそれを許してくれて。『まだまだ子供だなあ』なんて、わざとらしく言ってくるけれど??子供っぽいマヤがこうして出来るなら、今はまだ子供のままでもいい。

いつかちゃんと成長した日に、改めてトレーナーちゃんの事を夢中にさせられたらなって思うもん。なるべく。早い内に??。

「お悩み解決したか？あまり良い事は言えなかったかもしれないけど??。」

「ううん、十分。もう大丈夫だよ。明日は楽しみにしててね！」

「はい、分かりました。ははっ——おっと。お疲れ様、キタちゃん。」  
「??はい。お疲れ様です。」

ラモーヌさんとの話が終わったキタちゃんが帰ってきた??けど。その顔はどこか青くて、明らかに無理してる笑이었다。

キタちゃんの課題は、ラモーヌさんを楽しませる事。あの人は物凄く強いし、レースに関してはかなり真剣なうえに言葉もストレートだから、もしかすると今のキタちゃんには厳しかったのかもしれない。見ていてこっちまで辛くなる、そんな笑顔だった。

「あっ??消灯時間、ですか。じゃああたし、先に休みますね！明日もありますから??お休みなさい。」

「うん。お休み。」

「??トレーナーちゃん。」

「遅かれ早かれこうなってた、な。ラモラモに容赦無く叩き切られたんだろうさ。なあ、マヤノ。俺はさつきスイーパーが居るから大丈夫と言ったが、お前さんにも頼みが有る。」

しやがんで目線を合わせたトレーナーちゃんは、両手をマヤの頬に当てた。あっ、小さい声で”ひえ”って言った。

「んっ、んん！あの子の憧れは誰か知ってるな？」

「うん。テイオーちゃんだよね。」

「そうだ。そしてトウカイテイオーの事を誰よりも知ってるのは、同室のお前さんだと俺は思ってる。あの子は今、憧れを追うだけのウマ娘”から、先ずは”憧れに並び立つウマ娘”へと成長しようとして

るんだ。だから、キタちゃんの事を支えてやって欲しい。先輩として??あの子よりほんの少しでも大人なウマ娘として。」

「先輩で、大人??何したら良いのかな?」

「まずは隣で話を聞いてあげる事。その後はお前さんに任せよ。正しいとか正しくないとか関係無く、マヤノがキタサンブラックにどうなって欲しいか考えてやってみな。」

「??分かった!」

につ、と笑ったトレーナーちゃんはそこでようやくやく立って、安心してように歩いて行った。

「俺は最後に上の部屋に行くよ。『お友だち』からデジタルも回収しなきゃだし。何かあったらいつでも頼ってくれて良いからな。」

「うん。おやすみ。」

「??後、大丈夫?本当に無いかな?気になる事とか聞きたい事とか??。」

「えっ、うん??無い、よ?」

「そうか——お休みツ!!」

??やっぱり、変だよ。無駄に元気な声の挨拶とグッドサインをして歩いていく後ろ姿を見送って部屋に入ると、流石に皆もキタちゃんの様子がおかしい事に気付いたのか、お喋りしながらもほんの少し気になってるみたい。直接聞く事はなかったんだよね。

——スリープちゃん以外は。

「??何よ、その顔。」

「えっ?」

「ひどい顔。」

「そうかな??今日もちよっと疲れちゃったから、かも?あはは??。」

「キタちゃん??ラモーヌさんに——。」

「あっ、すみません!もう寝ましょう!トレーナーさんは見逃してく



れましたけど、他の人が見回りに来たら——スイープさん？」

ムスツとした顔のままスイープちゃんは自分の布団をゴソゴソとやり出した。そして取り出した大きなハリセン——何で？——を、構えて??あつ！

「ふんツ!!」

「いっつったあ——ツ!!!」

顔に??フルスイングしちゃった。

「何か言う事は？」

「えっ?ええっ???!いや、だからもう寝ましょ——。」

「物理魔法ツ!!」

「いだあツ!?!」

「ちよ、ちよつと!おやめ下さいましスイープさん!」

「離しなさいカワカミツ!」

「腕力に物を言わす事は無いじゃありませんか!」

「アンタにだけは言われたくないわよ!説得力0のパワープリンセス!ジャンケンのグー担当みたいなポジションじゃないツ!」

「姫の誉ですわよツ!」

「あの、ま、先ずは落ち着きましょう?!」

「はい、これは可愛くないので没収しまーす♪」

「何なのよ揃いも揃ってツ!アタシは——ツ!」

流石にロブロイちゃんやカレンちゃんもスイープちゃんを落ち着かせる為に動いたけれど、スイープちゃんは一向にその素振りを見せなかった。

それどころかどんどんボルテージが上がってるようにも見える。

そんな時、”ねえ?”ってマルゼンちゃんが手を挙げた。

「もしかしてスイープちゃん、今キタちゃんが悪い魔法に掛かっているって気付いてるのかしら。実は私もそう思ってたのよ！でもこの悪い魔法、解除も上書きも相性があるみたいだから、まずはキタちゃんの話聞きながら解決策を探しましょ♪」

「っ??ん。」

「ふふっ、ありがとう。キタちゃん。そう言えば私達、もう1週間近くも同じ部屋で過ごしてるのに、貴女の事をちゃんと聞いた事無かったわよね？ラモーヌちゃんとの事を無理にとは言わないわ。だから先ずは貴女の事を教えてくれるかしら。見回りなら私も居るから少しは大目に見て貰えるし、そろそろ臨時テイトレーナーボーもコンビニから帰ってくるからね。」

赤くなつた鼻を押さえながら、キタちゃんは少しだけ俯く。

マヤの方を向いたマルゼンちゃんはパチツとウインクしてくれた。『大丈夫』って言ってるみたいだ。そんな対応の出来るマルゼンちゃんがやっぱりカッコ良く見えたし、居てくれて良かったって本当に思う。

「??あたし、テイオーさんに憧れてトレセンに入りました。いつかあの人がみたいになりたいって思ってた??でもやっぱり遠い人で。出来る事は、ただ我武者羅に頑張る事しか無かったです。でもある日、ヨシエさんに『チームに来ない?』って声を掛けられました。」「うん。それで??」

「嬉しかったです。だってルドルフ会長やテイオーさんと同じチームに誘われたんですから。ツルマルさんやオフサイドさんも、怪我や病気に負けないぐらい強い心を持つてる人達で??その時、ふと思ったんです。じゃあ——あたしは何だろう??って。」

声色が変わった。震える声で、凄く怖がってる。多分今まで誰にも言った事が無かったんじゃないかな。テイオーちゃんにも、ヨシエちゃんにも、ダイヤちゃんにも??他の誰にも。

「会長さんみたいな強さも無くて。テイオーさんみたいなカリスマも無くて。オフサイドさんみたいな熱い闘志や執念も無くて。ツルマルさんみたい我真つ直ぐな走りも出来なくて。本当は、今でもレースに出ると怖いんです。」

だから、自分がどうしてポラリスを背負えるだなんて言われてるのか分からない??あたしは、まだ、何も分かってないのに??テイオーさんの後ろを追っていた筈なのに、いつからか皆の後ろを眺めているだけの気がして??。」

「それをラモーヌちゃんに指摘されたのね。」

「はい??『何にも変わっていないつまらない子』、『トウカイテイオーの後を追うだけなら、あの子と走ってる方が退屈しないし有意義だ』って??あたし??何もつ、言えなくて??!」

——遅かれ早かれこうなってた、な。

トレーナーちゃん言葉が頭をよぎった。きつと、もうとつくに知ってたんだよね。それでも直接関わらないのは、きつとマヤ達にキタちゃんの事を知って貰いたかったから。このチームはいつだってそうだったもん。

勿論話を聞いてくれたり手伝ったりはしてくれるけど??あの2人は、必ず最後に背中を押してくれる役。誰よりもチームの事を見る、一心同体の勇者。

だからマヤのやる事は??キタちゃんに言わなくちゃいけない事は??。

「キタちゃん。」

「はい??。」

「テイオーちゃんってね。昔、毎日の様に泣きながら帰って来てたの。」

「えっ?」

「会長さんに憧れてポラリスに入りたいうってずーっと言ってたんだけ

ど??ヨシエちゃんも会長さんも、テイオーちゃんがそう言った時に必ずレースで負かしてね。最初はそれでも『会長凄い!』って言ってたんだけど??とうとうヨシエちゃんが言っちゃったんだ。

——『期待し過ぎたかな。ガワだけ見てただ凄いつて思うんなら、今の君はウチに向いてないよ。誰に何しに来たの?』とか。『そもそも負けて出た感想がそれだけだったら、ゴメンだけど面倒見れないから』とか。」

キタちゃんは少しだけ身震いしてた。多分、心当たりがあるんだと思う。誰かに憧れる気持ちは勿論分かるし、そうなる為に色んな事真似してみようとかも凄く分かる。

まあテイオーちゃん以上に大泣きして引き摺ってたのは、そのキツく言った本人らしいんだけど。生徒会室が洪水になるってブラリアンさんがボヤいてたし。

??ゴメンねテイオーちゃん。

多分キタちゃんの前では良い先輩であろうとずっと頑張ってたんだよね。でも今だけはお願ひ。マヤの知ってる、泥臭くて頑張り屋なキミを話したいんだ。

「??意外と言うか、不思議な感じですよ。だってテイオーさん、凄いつかりしてて頼りになりますし。ヨシエさんもそんなテイオーさんに色んな仕事任せたり、心を許してる感じがするの??。」

「だってキタちゃんが居てくれたんだもん。」

「あ、あたしですか??」

「うん。それに??テイオーちゃんは自分で道を見つけたんだよ。」

憧れは目標にしなきゃいけない。並んで同じ景色を見る為に。

憧れは超えなきゃならない。そこより先に歩いて行く為に。

未来の自分が誰かの憧れで居られるように、自分の憧れは打ち倒さなきゃいけない。テイオーちゃんは自分でそれを見つけて決めたの。何度負けても、悔しい思いをしても、脚を骨折をしても。

——だからあの子は、『皇帝』を超える『帝王』なの。諦めを知ら

ない、最強無敵のウマ娘。」

「並んで、超えて??打ち倒す。」

「今は分からなくてもいいと思うな。悩むのも全然アリ。だってそれは、キタちゃんが自分に本気で向き合ってる証拠だもん。」

「マヤノさん??。」

この子にもそうであって欲しい。キタちゃんだけの、キタちゃんにしか出来ない事を見つけて??きつと『帝王』よりも強くなって、『北極星』<sup>ホラリス</sup>を背負える存在になれるように。

そして思うんだ——い、今のマヤ、ちよつと大人っぽくなかった?何か後輩の面倒を見れる頼れる先輩みたいな感じ出てたよね!?

!!  
こういう時に限ってトレーナーちゃん居ないんだからもーっ

「??あたし、明日はやってみようと思います。何をどうするかは分かかってないですし??やっぱり、自分がラモーヌさんとなんて荷が重い気がしますけど??。」

「つゝゝゝ!ちよつとツ!!」

「スイープさん???」

「そもそもラモーヌさんだって、アンタの中身見てちゃんと喋ってんのよ!言い方は確かにアレだけど、”走らない”って言ってない時点でキタサンの事もちゃんと見てる!それでも小難しい事考えて不安がるんなら——アタシが魔法で奇跡の1つでも見せてあげるわ!そうすれば出来ない事なんて無いって分かるでしょ!」

あれ?なんか流れ変わった??ま、魔法の内容によってはもしかしてフオローとか必要なんじゃない?。

「えつと??どんな、魔法?」

「今から花火打ち上げてやるんだからッ!!」

スイープちゃーん!!んツ!!それはマヤ達でもどうにもならないよ!?何かフオロー出来るかなって思ったけど多分本当に奇跡起きないと無理なやつ来ちやつた!!こつ、これ大丈夫!?うわぁーん、トレーナーちゃーん!!んツ!!デジタルちゃーん!!戻ってきて何とかしてよおろろろ!!流石のマルゼンちゃんもカレンちゃんも次の手を考えちやつてるろろろ!!

「あの??スイープさん。あたしなら大丈夫だから、その??魔法は——  
—ハリセン置いて!?本当にどこから持ってきたのそれ!」

「使い魔のどこ!!」

「トレーナーさあん??。」

「良いから見てなさい!魔法はいつだって、そんな悩み現実をひっくり返す為にあるんだから!アンタの悩み現実ぐらい、アタシがひっくり返したうえで保証してやるわよ!空を彩れ??夜闇を照らせ——『コスモス・フリー・ヴェールズ』!!」

しん、とした部屋。

夜空には星だけが輝いていて、それ以外は何も無かった。誰も、何も言えない状況で、スイープちゃんだけはただ1人??窓に向かって走って——笑っていた。

「キタサン。」

「は、はいっ。」

「良く覚えて起きなさい。これがアタシの魔法??出来ない事なんて——  
——何つつつにも無いんだからあッ!!」

勢い良く開けた窓の向こう。

部屋とブルボンさんをブルつと震わせた轟音。

炸裂した大輪の花が、空を色付かせていた。

『??えっ??』

「ほらっ！ほら見なさいよ！マヤノも！カレンも！カワカミも！ロブ  
ロイも！アタシの魔法を！どう!?凄いでしょ!?今アタシが1番ビツ  
クリしてるわ！でも当然よね！天才魔法少女スイーピーなんだから  
!♪」

「??花火。」

「出ちやつたね??。」

「あらあら??流石、トレーナー君が勧誘にお熱な魔女さんね??。」

「スイープさん??あたし、あのっ、この花火??っ、多分??忘れないです  
??!」

「泣く暇あるなら明日は我武者羅に走りなさい！ラモーヌさんのド肝  
抜いてくればいいわ!」

「はいくく??スイープさああああん!!」

「ちよつと!?暑苦しいから引っ付かないでよ!攻撃魔法ツ!」

「いったあツ!?そのハリセン置いてっ!武器だよそれ!」

きつとここにデジタルちゃんが居たら大喜びしてたと思う。

どうしてかハート型ばかりだったけれど、大小色んな大きさの花  
火は確かに打ち上がってて。すっかり見蕩れていたその魔法をもう  
少し近くで見たくて、窓際に近付いた時だった。

「だからっってお前、火力を考えろ!エアグリーブがすっ飛んでくる  
わッ!」

上からそんな声と一緒に、窓を閉める音がした。この上はタキオン  
さんとカフェさんの部屋??それに今の声。

——俺は最後に上の部屋に行くよ。『お友だち』からデジタルも  
回収しなきゃだし。何かあったらいつでも頼ってくれて良いからな。

「あつ。」

きつと聞いたのはマヤだけだと思う。だからこれはマヤだけの秘密。トレーナーちゃん達がどこまで知ってたのかは分かんない。でもトレーナーちゃん、ウチのチームだけにはヨシエちゃんぐらい分かっている時があるから、もしかしたら知ってたのかも。それならスイープちゃんが居るから安心して言ってくれてたのも納得出来るもん。

このチームでなら、きつと大丈夫。

マヤは明日??あの人に挑むんだ。目的がどうであれ、勝ちたい。勝って、今よりもっとキラキラな自分になる為に。

「たっだいまー麗しの彼女達!!何か花火やってなかった!?!ビックリしたよねえ!あつ、コレ見て!コンビニに味噌バターカレー牛乳ラーメン売ってたの!食べる人ー!はーい!」

天《font:ui40》馬《font》さん、自由が過ぎるよ。

「??。」

「カレンさんも、気付きましたか。」

「ブルボンさんもですか?」

「はい。向こうの窓??カーテンの隙間から——黒いモヤが見えた気がして。気の所為だとは思いますが、少々嫌な寒気を感じたもので。」



第4R : ユーコピー? (図) 太すぎるツピ! (1  
/2)

「まずはよく集まってくれたな、ジューダンにローレル。これから緊急会議を開きたいと思う。」

真面目な顔して携帯をポチるギャルが1人。

優しいほほ笑みでノートしか見てない月桂樹が1人。

話聞いている? 聞いてないね? 会議終わり! 解散ツ!

に??なるはずも無く。

トウシヨウボーイがやって来て6日目の夜。今日まで実に怒涛の日々だった気がする。

マヤノとティーボーが真つ黒ウマ娘に追いかけて回されて——しかもマヤノだけ覚えていない+俺とデジタルもアイツの名前を思い出せないという不思議現象込み。

トレセン学園に<sup>流星の貴公子</sup>テンポイントが来るとヨシエちゃんから電話を受け、『知ってる事有るなら吐け。吐かなきゃ絞め殺す』と静かにキレられたり。

それに付随して我等が親愛なるキングヘイローからも『貴公子さんが貴方を探してるけど何したのよおバカっ! 学園が色んな噂でプチパニックじゃない!』と、人が何かやらかした前提で話を進められたり。

ティーボーが部屋でだるま落としのギネス記録を狙い始めたりetc.

もうね、濃ゆ過ぎて胸焼けEveryday。

だがなあッ!! 俺にはそれらよりももっともっと大切な問題があった事を忘れてはならないッ!!

即ち、今チームメンバーに男の人好きと思われているこのクソ認めたくもない事実である。

初めてデジタルからこの真相を聞かされてからも、もう6日。

お前今まで何してきたんだと問われればトウショウボーイの襲来が強過ぎてすっかり忘れていました。忘れてはならないって言うてんだろがポケツ!!

いやいや、これでも何とか弁明しようとはしたんだ。

ただこの話題を出すと皆揃って『何の話?』みたいな顔するし、ブルボンはおててパチパチして(可愛い)エラー起こるし、カレンとマヤノに至ってはニツコニコでデートの約束を取り付けてくる始末。これは良くない。そもそも俺は適切な距離感云々を分からせ云々したかったんだ。断じて俺が立場を分からせられる為では無いんだよ!

その為にもデートはしようと思う。敵の情報は多いに越したことは無いし、俺が女性と付き合った事すら無いよわよわ男だと知られてはならないからだ。

つまり今こそ『桜満開ギャル同盟』の力を合わせる時!名前に俺の要素無くない?凹む。

「結論から言おう???すまない。どうやらその、俺が原因だったらしい。」

『でしようねー。』

オラツ、ちゃんと聞けよお前ら——でしようね!?何その『バカ言ってるんじゃないよ』みたいな返し!!知ってたの!?知ってて1週間近く俺と一緒に忘れてたってコト!?

いや違うわ。これわりとどうでもいいって思われてたやつ。これが俺の人望である???凹む。同盟など最初から無かった、良いね?。

「??何見てんの?ジョーダン。」

「んー？トレーナーがこの間のレース動画送って来たんだけど、課題めっちゃ有るみたいでさ。説明はされてるし、なんとなくは分かっただけけど、どう治したらいいか分かんねーつつうか？でもこんなんで世話掛けたくないじゃん。」

「その説明された課題点、自分でも変な違和感を感じてるんだろ？レース中に全箇所あれこれ治そうとしてるから、身体と頭に差が出来てんだ。しかも展開にその修正が追いついてないから、中途半端な対応のまま色んな問題未解決で走ってる。難しい事考える前に、”今日はこれだけやんぞつ”て1つずつ気楽にやってみな。それと？掛けたくねーって言うてるその世話。頼られると、トレーナーは冗談抜きで嬉しいもんだから遠慮すんなよ。騙されたと思つて頭の片隅に入れとけ頼つてけ。」

何だそのポカン顔??余計バカっぽく見えるからやめた方がいいぞ。しかし顔が良いなお前。

「ローレルさんは何を見てらっしゃる?」

「実は後輩の子に練習メニューの見直しを頼まれているんですよ。気になる所はアドバイスしてあげたいですし、今はまだ教官の元に居ますけど本気で頑張っている子ですから。」

「そか。ちょっと失礼?!この子追い込みやるでしょ。内側攻めるの苦手で、何回か当たり負けも起こしてる。体幹もつと強くさせて姿勢のブレを無くしてやりな。後、苦手なら無理に内側攻めさせなくていい。大外ぶん回して持ち味の末脚スカツと出させる事。追い込み出来るなら、慌てずちよつと周りを見るだけで大分走りやすくなる筈だ。苦手を克服したい気持ちや焦る気持ちも勿論分かるが、そっちはトレーナーが付いてから正しく教えて貰える。付かなきゃ俺が教える。まずは自分の走りで自由に走る楽しさを覚えなきゃな。」

何だその信じられない物見た時の顔??人の事何だと思つてんだよ。しかし顔が良いなお前。

『???』

「???もう言っつていい?では本題といこう。俺は皆に男好きと思われてる。」

『うーん、台無し。』

んだよオツ!!揃いも揃って!お前らが話聞かねえから聞いてもらおうとしただけやろがいッ!!台無しってなんだよ!もしかして自力で何とかしたかった系乙女ちゃんでしたか!?それは――!

非常に申し訳ない事をしたと思います。だから人望消えるんだぞお前。『桜満開ギャル同盟』は今日で解散、明日からは『桜色ギャル同盟――真夏の栗の花を添えて――』だ。

「アンタさー??そうしてつとちゃんとトレーナーじゃんね。何が楽しくていつも自爆してんの?」

「デビュー前の子達つて結構人数居ますけど、気に掛けてくれてるんですか??」

「流石に全員じゃない。たまたまだよ。おいそこのギャル、俺がいつ自爆したか言ってみろ。」

「自爆したから集まって会議とか言っつてんじやん。」

「えっ、あつ、それは??うむ??。」

悔しいがぐうの音も出ない。

うっ、うるせー!俺だつて好きでこんな事になってんじやねーよ!気付いたら火が回つてたんだよ!だから責任持つて大火災を止めようとしてんじやねーかチクショーツ!!

「そもそもどうしてそんな事になってるんですしたっけ。」

「その??俺が酒の飲みすぎで、ミチルっていう同級生の男に告白した事が知られて??でもちゃんと事の真相が伝わってないと言うか??。」

「そりやもうミッチーに弁明して貰うしかなくね？OKするっしょ。」  
「お前友達か？」

「ミッチーさんほど気量があつて器の大きい方なら大丈夫ですよ。」  
「お前友達か？」

『うえ〜〜い！』

「やかましわ。揃いも揃つて何ださつきから。」  
「アンタもノつてんじやん。」

同盟なんだから当たり前だろ!?仲間外れは止めろよ!

まっ、まあ良い??こういう所も愛嬌だ。全ては俺の自業自得だと言  
う事は前提としてもこのままと言うわけにはいかないだろう。だか  
ら意見を求めてるのにこの子達は本当にもう!

「まあ??実際トレーナーさんが話したらまるつと解決すると思うんで  
すよねー。」

「ウチのチームに限つてそれで済むとは思えん。絶対に何かこちらの  
弱みとして握つた上で最大火力の爆撃を落とすに決まつてる。特に  
天才と妹分。」

「自分のチーム何だと思つてんの??そう言うところで変な勘違い起きて  
んじやねーの?知らんけど。」

「あとやっぱり??お、大人としてちよつと冷静に上手い立ち回りがし  
たいって言うか??。」

『むくだ〜〜。』

「なあんだとコノヤロー。」

こつちが下手に出ればその倍は上に立ちやがる。どれだけ俺が  
日々の誘惑と世間体を気にしながら生活してると思つてるんだコイ  
ツら。しかし落ち着け三十路。お前はもういい大人なのだ。ここで  
協力関係を壊してしまつては元も子も無い。だからこちらはいつで  
も下の立場かつフレンドリーさも忘れてはならない。ふふっ、やっぱ  
り俺は出来る男よ。

「まあ兎に角そういうわけだから。今後もスパイ活動の協力をよろしくな、ジョーダンにモーター。あつ！あつ！！ローレル！ローレルさん！ローちゃん！！」

「こーらー♪」

「ヌツ!!」

優しい声色、反比例のクソヂカラ。ほぼタツクルと言っても過言では無い勢いで、桜のあんちくしょうは人をベッドに叩きつけてきた。死ゾ。共倒れゾ。さらば我が青春のアルカディア。

「何ですかー？さつきちゃんと言えてましたよねー？わざとやってませんかー？」

「ジョーダン！助けてジョーダン!!いやー!!やめてローちゃん！チツクシヨービクともしねえツ!!人間がウマ娘に勝てるわけがないんだ助けてくれよジョーダン!!」

「冗談キツいっすわー。じゃ、あーし先に帰るんで。乙ー。」

「へーい、ギャルビビってるく〜く〜く〜!こっち来いよほらほら!!」

「だりい??ローレルさんも強めに何か言った方が良いですよ。それ永遠に絡んでくるんで。」

「ビビってる〜♪」

『嘘じゃん。』

「いやアンタがビツクリしてどうすんの。」

この流れでノって来るとは思わねえだろ。

超ダルそうな溜息をこぼしたジョーダンは携帯を手にとある人物へと連絡を取り始めた。

「あーもしもし?うん、あーしなんだけどさ??ちよつと、5分位遅れっから。やつ、大した用ってわけじゃ——。」

「見ローレル。あれがパートナーだけに見せるギャルの映え顔だ。」

「盛れてますね。今何て言いました？」

「これからミーティングを兼ねたお勉強会やるんだぞアレ。写真撮ローレル。」

「もうデレデレですね。今何て言いました？」

「あつ、あつ、あつ——！力強いツ！止めローレル！止めローレルツ！！ジョーダンちゃん助けて！いつまで照れくさそうにニッコニコしてんだよ可愛いなお前ツ！！デジタルに報告しとくねツ！！」

「やっぱ3分な。なんかあつたらデジタルのトレーナーに文句言えし。じゃ??お前さつきからうるせエし好き勝手言ってるんじやねえ————ツ！！ギャル舐めんなオラアツ！！」

この後枕片手に大暴れし始めた(自称)ダウンーギャルと、そのギャルを見てキヤツキヤ笑いながらも、クソヂカラを一向に緩める気のないギャツプ持ち枝垂れ桜に滅茶苦茶シバかれた。

そうしてきつちり3分後、最早誰もが汗だくである。誰がここまでハッスルしろと言った。おじさんもう30なんだから余りハッスルされると明日が辛いのか??何だポニーちゃん。自業自得?それはそう。これがカレンとマヤノじゃなくて良かったな愚息。お前今頃死んだぞ。目を瞑ってやるから黙ってる。

『遊び疲れたので先に戻りますね』と一言言い残し、先ずはローレルが帰って行った。ぶつちやけ俺もこの後見回りがあるのだが、如何せんここに居るギャルは筋肉痛を忘れて暴れたらしく動けんと。仕方ない??こやつの特レーナーでも呼んで背負って行ってもらおう。謝罪と菓子折りはその時に——。

「何で走るの——!!絶対呼んでね!約束だから!!」

「は——」

「今の??マヤノじゃね?」

「だな。もう部屋に居なきやなのに、何してんだろ。ちよつと行つてもいいか?」

「りょー。こつちはテキトーに帰るわー。」

取り敢えずジョーダンには早めに菓子折りを持たせつつ部屋を出ると、すぐ目の前にお可愛い天才キッズが居た。何ならローレルが走って行つてる最中である。合宿所内は程々に走らんかいあのさくらんぼ。さくらんぼはお前だろポニーちゃん。凹む。

「いーもん!もうトレーナーちゃんに直接聞いちゃお!」

「俺が何?」

「ひゃつ!?!」

ひゃつ、だつて。殺す気かな??可愛いね。でも純粋な反応されるとその度にポニーちゃんが曲線のソムリエになりそうだからもう少しカレンみたいに威風堂々かつ唯我独尊、立ち塞がる者は鎧袖一触な面持ちで居てくれると、トレーナーちゃん凄く嬉しいぞ。

「何か声が出したと思つたらローレルは走って行くし??何か用があつたかな?」

「トレーナーちゃん??あの、あのね??ローレルさんと!?!?何、してたのになつて??。」

賢い俺はすぐさま理解した。

ははあくん、これミチコちゃん以上の爆発寸前大誤解が生まれたゾ?だつてローレルさんってばひとしきり暴れたままの格好でバツタリこの天才に出会つちやつたんでしょ?つまりそう言う事でしょ??うわやベエ。相棒居ないんだけど。助けてデジたん。これただの火災じゃねえよ最早山火事だよ。

「??マヤ。ローレルさんはどんな感じでいらつしやつたかな?」



「どうしたのその喋り方??あの、凄く暑そうにしてて??何か運動したのかなって感じで??ジャ、ジャージも着崩してたよ?」

でしようねえツ!!役満じゃねえかバカヤローツ!!

「火照った身体に着崩した衣服、激しい運動の後の様な見た目に全力疾走での逃走。オマケに今日はトレーナー室に俺だけだという事をチームメンバー全員が知ってる前提付き。更に付け加えるならマヤノがさつき言ってた『今度呼んでね絶対だよ』の一言。」

いやあああああアツ!!!完全にそういう事だっと思われてるうーっツ!!思われた上で次は自分も来ようとしてるうーっツ!!じゃあ必然的にカレンチャンも来るうーっツ!!!お前らどんだけ鬼メンタルで徹底的にトレーナーちゃんの事分かせようとしてんの!?!それこつちがやりたいのツ!いややりたいワケでは無い。教え子ぞ。

べ、弁明する!?!でもそれだと余計に怪しまれるとかほぼ確信される!正直に言ってもいいけどなんて説明すんだよさつきのおふぎけタイム!チクショー!こんな事ならローレル揶揄って遊び倒すんじゃないかったあー!さつさと帰してあげれば良かったあー!ゴメンな桜のキミーツ!!でもお前もせめて説明するか否定してから走ってけよ桜のキミーツ!!

「おいつすーマヤノ。」

「ジョーダンちゃん???」

「こんな所でどうしたん?あー、つーか腰痛えー。あーし明日も練習なんだけど??無駄に身体使わせんなし。」

山火事に爆薬ぶち込んでんじゃねえツ!!油ぐらいでもいつぱいいっぱいなの!今大変な事になってんだよ主に俺のせいデツ!!痛がるのは腰じゃなくても良かったろ!?!狙ってんのかお前コノヤローツ!

あつ、これがジョーダンの言ってた自爆かあ。冗談じゃねえ??ツ!

こんなのが自爆であつてたまるかつてんだ！良いところギヤルが山火事にC4投げつけて『ヤバ、ウケる。撮つとこ。』してるだけやろがいッ!!

そもそもどうして俺はやる事なす事こうもタイミングが悪いんだクソウ??ッ!!

「えっ?えっ?ジョーダンちゃんも一緒だったの??め、珍しいね!ローレルさんとトレーナーちゃんの3人で何してたの?」

ジョーダン分かつてるな?この返答で俺とお前とローレルの未来が決まるんだぞ。取り敢えず爆薬は置け。後で何でも言う事聞かからお願ひしますベストアンサー導き出して奇跡よ起これ。

ジョーダン分かつてねえな?お前今小首傾げたか?爆薬に着火しながらとぼけてんのか???じゃ俺の事はもうどんなロクデナシみたいに言つても良いからせめてローレルだけは守つてやつて!あの子本当は素直でいい子なんです!皆のお姉さんみたいな立ち位置もあるし、ああやつて年相応のはっちゃけ見せるって言うのも出来れば内緒で助けてやつて下さいッ!

「おー??何つて??あれ何?カバデイ?」

『??????』

そうはならんやろ。

「良く分からんがお前はバカでい。」

「うっせーっつの。バカでわりーか。」

「最高。」

『うえくくくい。』

「帰るわ。」

「おう。お疲れ。」

ジョーダンちゃんはやっぱりジョーダンちゃんだった。弁明でも無く誤解を加速させるでも無く、ただ俺とマヤノに困惑を与えて事態を収拾するなんざ並外れた頭では到底真似出来ん。あつ、褒めてるから。

ならば後は俺次第。この流れ、絶対に断ち切らん??タダでは逃がさんぞ天才キッズ??!!

「それで?俺は今から見回りだけど??どうした?」

「ううん、何でもない!お休み!」

「そっか??なあマヤノ。実はデジタルに今日が見回りだって事言い忘れててさ。誰か付き添いが必要なんだけど、良かったら夜の散歩に付き合ってくれるか?」

「??先生とかエアグルーヴさんも居るし、見つかったら怒られるよ?」

「その時は俺が怒られるさ。頼むよ。」

あつ、考えてる。そんな姿も実に可愛らしい正に我がチームの純粹担当。こんな事言っただけど本当に見つかって怒られでもしたら本末転倒。何故ならこの天才、かつてたづなさんの前で『大人の女にして!』と爆弾発言がました前例があるし、お腹丸出し勝負服のままレース後に顔面にへばりつく事もザラにある。油断はならない。

「良いよ。じゃあ何かあったら??よろしくね。」

「勿論。」

「それで結局、3人で何してたの?」

「??枕でバシバシって。」

「枕投げ!?やっぱりマヤも呼んで欲しかったー!」

「ローレルが俺を押し付ける係で、ジョーダンが一方的に。」

「じゃあ枕投げじゃないね。皆で狙い合う遊びなのにその役割分担おかしいと思う。」

「凄い汗かくし、なんか楽しげな笑い声とかしてさ。」

「それ枕投げだよ!運動量凄いし、皆で楽しめるから絶対枕投げ!合

宿のテツパン！」

「手に持った枕を何度も何度も俺の顔にね、こう。ツボに入っ  
て笑っぱなしの桜も居て。」

「じゃあ枕投げじゃないね。投げてないもん。百歩譲っても枕叩き  
つげかな。待ってジョーダンちゃんもローレルさんも居たの？ホント  
に？」

ああ言えばこう言うレスポンスの速さよ。流石俺の愛バ??いや、最  
早愛娘。

ん?どうしたのマヤちゃん。そんな浮かない顔して——どうもこ  
うも色々勘づかれてんだろバカー——!!相手が天才的な直感持ち  
な事忘れてんじゃねえよ!山火事の現状何も変わつとらんやろが  
いッ!!いい、いかん!先ずは今すぐにでも落ち着かせなければッ!焦る  
な、クールに、そして出来る大人のキメ顔で??うおっ、急に死にたく  
なってきた。やかましい、やれ。

「心配無いよ。」

「えっ?」

「マヤノが思っているような事は何も無い。だから、いつも通りのお  
前さんでいい。」

「??うん。」

納得いきませんかお嬢?そりやそうですよね無理がありましたよ  
ね。何かこう切り口になりそうな物が無いと責任追及なんて出来ま  
せんよね。ハラキリ焼き土下座で許して頂きたく早漏。

来るぞ追撃??こうなりやとことんやってやらあッ!考えてる時間  
はありません!考えてたら死にます!だから俺の分からせ計画第一  
人者はマヤ!お前と知れえッ!!

「あのね、トレーナーちゃん。実は用事って言うのは??キタちゃんと  
ロブロイちゃんの事なの。」

真面目な話題振ってどうしたのお?????

今なけなしのお兄ちゃんブレインをフル稼働させてあらゆる弁明  
分考えたのにワンクツション置く?ここで?なんでえ?????

ハッ!?そういう事か危ねえッ!つまり万全な状態では嘘をつかれ  
る可能性があるから、真面目な話題を振りながら油断したところを仕  
留めようって魂胆だない女めくくくッ!!

気付いたからにはボロは出さん。そもそもボロンと出るのはポ  
ニーちゃんだけなのだ。これが俺のトップガン、ベッドの上では  
トムキャット  
F-14。早くて雄猫とかお前バリ太刀整備士カレンチャンに勝ち  
目ねえだろ。どこ整備されても昇天だよクソが。

「2人がどうした——って、決まってるか。努力の鬼にやられたんだ  
ろ?そうさなあ??じゃあ今から言う事、3つばかり聞いて欲しい。」  
「うん。」

「1つ——キタサンブラックに関しては大丈夫だ。なんとって今回は  
スリープが居るし、そもそもウチに来た時点で何も心配はしちやいな  
いさ。いつも通りの皆で接して欲しい。」

その辺への信頼度は厚いぞ♡

まあメンバーから俺への信頼度は遊び相手ぐらいしかないだろう  
が。凹む。

「2つ——ロボロイの話も聞いている。ティーボーの奴、マヤノとロボ  
ロイに同じメニユーやらせてるのに、ロボロイのペースに合わせてる  
んだったよな。」

「そうなの。だからロボロイちゃん、たまに思い詰めたり、マヤに謝っ  
たりしてて?。」

「ロボロイに教えてあげてくれ。ティーボーが付き添ってたこの一週  
間、そもそもお前さんの為だったな。」

「うん??うん??えっ?そうなの?。」

「知らなかったら？アイツは最初っからロブロイがマヤノに負けるとは思ってたない。寧ろ勝負が面白くなるように、課題なんて名目で正解を言ってたんだ。ロブロイにはアイツからの課題の意味、もう一度よく考えてみて欲しいかな。」

人はそれをスリップストリームと言います。あれ？合ってるよな??あ、相棒ー？今お前の半身困ってるよー？ここに来てその知識満遍なく発揮してどうぞー？

あかん、モルモットに連れて行かれたんだったクソが。あの男後で覚えてやがれ。

「それで3つめ。マヤノ??お前さんの課題は、トウシヨウボーイに勝つ事でも無ければスタミナを滅茶苦茶増やす事でも無い。そもそもロブロイのペースに合わせた1週間じゃ、肺活量の底上げなんて無理がある。それをするのは俺の役目だ。」

「じゃあマヤはどうしたらいいの?」

「——レースを作れ。そして、トウシヨウボーイをよく見ておくんだ。」

素質あるとか言ってたし。これで違ったら文句は天《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》様によろしくお願い致します。あの人マヤちゃんの事、第二の天《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》に仕上げようとしてるんだよね。理由は聞いたけどよく分からなかった。トレーナーのクズがこの野郎??ッ!

「マヤノの強みは周りへの理解が早い事。ただそれは、お前さんが受け身の姿勢でレースに出る限り弱点なんだ。周りに引つ張られるのなら??突出した誰かの出方が気になるのなら。そもそも自分がレースを作ってしまったばいい。走りやすいように、動かしやすいように。集中するのは特定の誰かじゃなくてレースそのものだ。だから——  
|天《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》もお前さんの掌に誘い

「込んじまいな。」

「??出来るかな。」

「出来る。少なくとも、俺もティーボーもそう思ってる。それにな??  
マヤノ。」

いつもの様に頭をくしゃくしゃに撫でてやった。

いつもと違ってお風呂上がりの匂いがした。助けてデジたん、俺この子の事好きになっちゃう。もう好きだった。

落ち着けよポニーちゃん。こんな時は冷静にカレンの事を考えろ。  
仁王立ち満面スマイルの妹分??うっ、ブルつと落ち着いた。

「お前さんはナリ沈みタブ行ライくアンタ目を追い続けた。どこまでも飛んで、その先で諦めをつけようとしていた怪物の心を繋ぎ止めた。俺はそれを見てきたんだ。出来ない事なんてあるものか。」

「トレーナーちゃん??っ!」

「うおっ!?な、なに!?どした!?!」

抱きついてきちゃった。お風呂上がりのマヤスメルが世界を満たす真夏の夜の夢。

えあああああああアツ!!来るなら来るって言って!!

おまつ、お前嫁入り前の娘が風呂上がりに抱きついてくるんじゃないよツ!トレーナーちゃんそんなシチュ想定してないの!デジもカレンもこれだけはしてこなかったの!何急に大人の階段2段飛ばしでダツシユしてきてんだよもーっ!!

しかし頭は至って冷静。冷静ゆえに抱き締めようこのリトルポデー。駄目だ脳が焼けてる。俺に出来るのはせいぜい”まだまだ子供だなあ”と強がって見せること位で——エアグルーヴおつたああああアツ!!

居るなら居るって言うてくれよツ!どうすんだこの状況ツ!?これも天才の策略か!?見た事ねえ顔してんじゃねえか女帝様がよオツ!!

不味い不味い不味い、誤解を解け今すぐに!女帝に届け童貞の口パ

クコミュニケーションションツ！

——ミ、ノ、ガ、シ、テ。 ベ、ロ、ちゃん。

——たわけが。

普通に凹む。流石後輩ちゃん相手に母親のような世話焼きぶりを見せるハーバーの母よ。本当にごめんなさい後で菓子折り持って見逃してくれたお礼に行きます。

「お悩み解決したか？あまり良い事は言えなかったかもしれないけど??。」

「ううん、十分。もう大丈夫だよ。明日は楽しみにしててね！」

「はい、分かりました。ははっ——おっと。お疲れ様、キタちゃん。」

「??はい。お疲れ様です。」

あらヤダ真っ青。どうしたの？お腹痛い？食べ過ぎた？ラモラモに意地悪された？100%ラモーンだろあのDSめ。ルドルフならいざ知らずキタちゃんにメジロ節はパワーが強過ぎるんよ。

「あっ??消灯時間、ですか。じゃああたし、先に休みますね！明日もありますから??お休みなさい。」

「うん。お休み。」

「??トレーナーちゃん。」

「遅かれ早かれこうなってた、な。ラモラモに容赦無く叩き切られたんだらうさ。なあ、マヤノ。俺はさつきスイーパーが居るから大丈夫と言ったが、お前さんにも頼みが有る。」

しゃがんでマヤに目線を合わせ、精一杯のデキる男アピール。頬っぺに手も当てちゃう。



ひえっ。

めっちゃやわつこくてビックリしてしまった。マックちゃんの腹並みである。2マックイーンレベルだ。聞かれてねえよな???ヨシツ!

「んっ、んん!あの子の憧れは誰か知ってるな?」

「うん。テイオーちゃんだよね。」

「そうだ。そしてトウカイテイオーの事を誰よりも知ってるのは、同室のお前さんだと俺は思ってる。あの子は今、憧れを追うだけのウマ娘から、先ずは、憧れに並び立つウマ娘へと成長しようとしてるんだ。だから、キタちゃんの事を支えてやって欲しい。先輩として??あの子よりほんの少しでも大人なウマ娘として。」

「先輩で、大人??何したら良いのかな?」

「まずは隣で話を聞いてあげる事。その後はお前さんに任せるよ。正しいとか正しくないとか関係無く、マヤノがキタサンブラックにどうなって欲しいか考えてやってみな。」

「??分かった!」

分かっちゃった。え〜〜〜チヨロ〜〜〜い!可愛い〜〜!本当にエアグルーヴ差し向けた女と同一人物か?いや、これも作戦???駄目だ近付けば近づく程にマヤスメルが脳を焼きにかかってきやがる。クソっ、今日は引き上げだッ!撤退!撤退!!これ以上はきつと俺が痛い目見る!だが俺は負けてないからなッ!引き分けだからなッ!クソウツ!!

「俺は最後に上の部屋に行くよ。『お友だち』からデジタルも回収しなきゃだし。何かあったらいつでも頼つてくれて良いからな。」

「うん。おやすみ。」

「??後、大丈夫?本当に無いか?気になる事とか聞きたい事とか??。」

「えっ、うん??無い、よっ。」

「そうか——お休みッ!!」

最後の最後までローレル達の事を言及してこなかったな??だが油断するなよ俺。夏合宿中のどこかでこの子は俺に牙を剥く。努努忘れるんじやあない。

そうして一息つきながらやって来たチーム『お友だち』の部屋。扉を開ければ、あら綺麗!イルミネーションが所々に散りばめられて床にはブルーシート。オマケに部屋のど真ん中にはビニールプール! ナイトプールかなあ??

カフェとモルモットの姿は無く、部屋には2人だけ。恐らく私物の水着だろうクロスホルダービキニのアグネスと、フリルが付いたピンクの申し訳ビキニのアグネスがプールでイチャついて——。

やりやがったなアグネスタキオン。

第4R : ユーコピー? (図) 太すぎるツピ! (2  
/2)

「デジタル君は小さいねエ??懐にすっぱり収まるねエ??君の相棒君の気持ちも分かるねエ??。」

「南無阿弥陀仏??摩訶般若波羅蜜多心経??南無観世音菩薩??。」

「独特な心の落ち着かせ方だねエ??。ところでデジタル君、そろそろ私とお話しようじゃないか。なあに、今の君のデータを少々??。」

「南無阿弥陀仏ツ!摩訶般若波羅蜜多心経ツ!南無観世音菩薩ツ!  
法ツ、法経教ツ!!!」

「住職を志してるのかな?」

俺は今何を見せられているんだ??。

水着のアグネス共がイチヤイチャしてるかと思ったら片方は目の下にクマ作って死にそうなツラしてるし、もう片方に至っては読経してやがる。

もつと??もつとあつたら?イチヤイチャの仕方が。揃いも揃ってベクトル違いな満身創痍状態じゃねえか。あつこらタキオンお前、止める止める。それ以上デジタルをギュツとするんじゃない。ビニールプールが鼻血で真紅に染まるぞ。そういう遊び方じゃねえからそれ。

「やあデジタル君の。ちよつとワイフを借りてるよ。」

「誰が誰のワイフだ??ナイトプールなんて楽しむキャラじゃないだろうに。」

「人は見かけによらないものさ。ほおら見たまえ、このイルミネーションなんて中に羊が居るんだ。これが本当の電気羊だぞう?彼はどんな夢を見ているんだろうねエ。」

「さては徹夜したろ、その変なテンション。」

「そうだったちゃ。」

「ラムちゃんかよ。あつ、電気で羊??やかましわ。」

徹夜すると奇行に走るのはスカーレットといい勝負だ。この状態のタキオンを放っておくなんて普段のモルモットからは考えられないが??アイツさてはこの為にデジタルを連れて来やがったな。

クソがつ、相棒が本気で住職になられても困るので引き剥がさねばなるまい??うおつ、タキオンテメエ何抵抗してんだコラツ!!オタク君返せよおつ!ニヤニヤしてんじやねえこのつ、顔が良いツ!でもやっぱムカつくうーツ!お前ら同部屋だろ!チクショーツ!!

諦めた。その徹夜顔に免じて今日は許してやる。だが勘違いするなよ!負けてねえからな!譲歩だ譲歩!

??しかしタキオンだけならまだしも何でお前も私物の水着で参加してんの?クソ可愛いなオタク君。でもその読経はマジで止める。怖いのが出たらどうするんだ。

「いーやなに、研究が行き詰まりのどん詰まり。気晴らしにと以前ヨシエ君から貰った昔話を解読しようとしたがこれもさっぱり。」  
「だろ。うな。いかにもダメでしたって散らかり方してるもの、この資料の山。濡れるぞ?」

「原本は学園にある。いくら濡れても構わないさ。」

そういうもんかねえ。にしたってお前、足の踏み場もねえのはやりすぎだろうに??。ビニールプールに寄っかかり、ちやぱちやぱデジタルの背中に水を掛けながら、アグネスのヤベー奴は妖艶な笑みで資料を指差す。

——気になるなら、どうぞと。

上等じゃねえか分かりやすい挑発しやがつて??こんなもん秒で読み解いて俺の有能っぷりを見せつけてやる——あつ、無理無理これ何語?魔界の本?『ザケル』とか書いてんの?ダメだちよっどしか読めん。

「??『個を捨てた叛逆者、群と成りて運命に抗い』——なんちやら、ほにやらら?!。」

「??なに?」

『祖は奏で、因果は血を結び、最果ての地を——』??あー、と?『名をここに記さん。汝は——』サンデーサイレンス”』??』

「読めるのかッ!」

「ヴェッ!」

あつこら! デジタルを締め上げながら立つんじゃない! オタク君がカエルみたいな声出しちゃっただろ! しかしあの変態、タキおっぱいが後頭部を包んでるせいで乙女がしちやいけない顔してらあ。超光速で粒子になろうとしてる。南—無—。

「アツハツハツハツ!! そうか、君か! やっぱり君だったか! 君は、君が、君達なんだなッ!」

「何興奮して——コラコラコラ押し倒そうとするんじゃないよ待てお前待ってって冷めてえな! 何だ今日押し倒されてばかりやないかい!!」

間にデジタルを挟み、すっかりアグネスに力負けしてしまった。どこの世界にずぶ濡れ水着のまま床ドン☆! してくる奴がおるんじゃない。

タキオンの赤い目がより一層ギラついた光を帯びながら、上から見下ろしてきている。顔が良い。だが避けて貰わねば普通に冷たいし、お前がタキONしてる限り胸に顔埋めたまま間に挟まったオタク君が興奮で死んでしまう。

あつ、動いてない。多分ダメですねクオレハ。

「今ここに1つの仮説は消えた。新たな仮説が定説となり、真理はより近いものになったんだ。分かるかい? 異分子。」  
イレギュラー

「分からんから分かるように言え。さっさと退けてからな。」

「デジタル君かと思っていたが、答えは君だったという事さ。君と言う異分子が他者と結合し、世界が本来歩むべき筈の道を押し流している。」

えっ、えつちな話してる??

他者と結合とか巫山戯んなよお前、こちとら結合経験ゼロどころか女性とお付き合いた事もゼロで30年貫いて来たんだぞ。

お前に分かるか? 全員結婚した同級生達の子供に”おじちゃん”と呼ばれながら懐かれ、遊び相手になり、仲睦まじい夫婦のやり取りを見せつけられる独身男の悲しみが。

同窓会で子育ての難しさと幸せについて皆が語り合ってる中、1人だけ教え子に対する付き合いの難しさと愛情を語って精一杯強がる場違い感が。

何なら後輩ちゃんとかヨシエちゃんの話もして、あの2人からは方に1つも考えられないが『いやー? ちよつといい仲の人は居るけどー??』みたいなクソの得にもならねえ虚しい嘘を語り続ける男の心情が。

お袋にも遂に『アンタ家に誰連れて来るのー? 全員? ワオ! 近所に言っ方がいい?』とか俺が何も言っただけなのにチーム丸つと嫁みたいに紹介するみたいな流れになった焦りがツ! これだから頭ウマ娘の母親はよオツ! 田舎のコミュニティ知ってるのに息子を町ぐるみで口リコンに仕立てあげようとするんじゃないやねえツ!!

しかし実際同級生の子供達は可愛いし皆幸せそうなので何も言えないこのもどかしさ。奴ら曰く、俺の精神年齢が近いらしい。クソが。

「?? やっぱ分かんねーっすわ、タキオン先生。」

「何を急に拗ねてるんだい? ああ勿論褒め言葉なんだから気にしないでくれよ。キー君、彼にタオルを頼む。忙しくなるぞコレは?? クッククツツ?! 手始めにこの文書を——!」

随分楽しそうね。それ徹夜明けのテンションだろ。もう寝ろよ。  
あつ、タオルありがとう。

大体にしてお前——キー君？誰よ？それにさつきからやたらと袖を引っ張られて??。

「??どちら様ですか？」

大根が居た。

厳密に言えば顔の付いたセクシー大根みたいな何か、俺にタオルを掲げている。受け取ったら受け取ったで、その何かはパタパタ部屋の隅に走って行った。いや待てよ、マンドラゴラかもしれん。そもそも何故顔が付いている？今自分の意志で走ってったか？部屋の隅からじつとこつち見てるけどあれ生き物？植物？ダメだ全然分からん。

分からんが——。

「イレギュラー異分子——ツ!!!」

「静かにしたまえ。うるさいぞ。」

「アレ！アレの方がイレギュラー異分子だろ!？」

「ま——ったく何を言うかと思えば??キー君はキー君さ。」

「何で落ち着いてんだよ??ヒエツ、こつち来た??！」

歩きを覚えた赤ん坊のような歩みでこちらへ来るなり、キー君とやらはヨジヨジとおデジの身体をよじ登って来た。あつ、おい待てい。そこまでは許してないぞ大根君。相棒が穏やかな微笑みで気絶してるからまだ良いものの、慎ましやかな胸の上であんまり動くんじや——何だ？その一生懸命伸ばしてる手は。抱っこして欲しいのか？ん？クツソ、可愛いじゃねえか??こちらも抱かねば無作法と言うもの。

そして両手をキー君に伸ばした時である。

大根が慎ましやかな胸でジャンプし、「ヌツ!」と叫びながら目を覚ました変態とバツチリ目が合ったのは。

「おはよう。おデジ。」

「あつ、おはようございまあああああツ  
!?!?!?」

大絶叫からの寝返り、寝返り、寝返りの3コンボ。もう1回寝返るドン！壁に頭がドン！ウルセエ、行こう！ドンツ☆！何か裏切りの常習犯みたいだな。さつきから騒いでるけど、隣の部屋は大丈夫だろうか。

「なつ、なつ、ななななあー！ーッ!？」

「あんまり大きい声出すんじゃないよ。ベロちゃん飛んで来るから。どした?」

「いやっ！いやいやいやっ!!えっ!?!どどっ、どうしたって、あの?!」

らしくもない慌て方。部屋の電気は消えているので良く見えないが、どうにもデジは両手を胸の前でクロスをさせているっぽい。それ何よ? 天空ペケ字拳?

あつ、キー君歩いて来た?? よーしよし、今度こそ抱っこしてやるからなあ可愛いヤツめくくく!

「おー！ーやおやおやおやトレーナーくうーん! ダメじゃないかキミイ、デジタル君が気絶してるのをいい事にあれこれしようだなんて業が深いねエツ!」

「声がデカい。お隣に迷惑だろ。」

「正論だねエ?? すまないねエ??。君何とも感じないのか?」

「何がよ? キー君が可愛い事ぐらいしか思わん。なー? キー君?」

「ふむふむ数値に変動無し、デジタル君の数値は急降下、オマケにその真顔?! なーるほどなるほど。君ヤバいな?」

喧嘩売られてんのはよく分かった。もう寝ろ。



「ったく??そのワケ分からん話の何がそんなに嬉しいんだか。」

「それを読み解くのにどれだけの時間とコストを浪費したと思う?昨日今日だってそうさ。気付いたら夜は明けるし、カフェとモルモットは連日夜のお散歩さあ。ならどうする?デジタル君とプール開きしかないだろう!」

「海に来てプール開きかよ夏の欲張りセットめ??その2人はどこまで散歩行ったんだ?」

「知らないよ。『タキオンさんは??やめた方が、良いです。』とか言っですーぐ居なくなるんだあのモルモット専用ドリッパーは。」

徹夜明けの科学者口悪いな。もう寝なさいよ貴方??凄いクマが出来てるじゃないの。そして今更ながらイルミネーションの全てがうっとおしい。自重しろその輝き。モルモットの頭みてえだな。

「何でも合宿が始まって以降、体調不良を訴える生徒がちらほら居るらしい。酷い悪夢を見て、それに引つ張られるように影響が出ているそう。カフェ曰く、憑かれていますらしくてね。」

「ふーん??まあ疲れてる時にお前さんが居たんじゃ確かに休まらんわな。その道の専門家だって今は学園に居るし。」

「おや、カフェの他に専門家が居るとでも?」

「ウララちゃん。」

「エー……ツツ!?そ、そうなのかつ!?」

「そりやそうさ。」

逆に俺はウララちゃん程万人に突き刺さりじんわりと心をほぐしていく存在を知らない。そう、俺にとっての3女神最後の1人は正に彼女だろう。

なんてこった??食を通じて幸福を運ぶボーノ、過ちの全てを肯定して受け入れてくれるグラッセ、万人を救うウララちゃん。ヤベエ、日本がセロトニン出しまくっちゃう。

「まあカフェの淹れた珈琲も確かにリラックス効果はあるだろうが??。」

「ん?珈琲じゃなくてお友だちの方だぞ。」

「えー……ッ!? そうなの!? お友だちってそんな癒<sup>ヒール</sup>しだったかッ!?」

「いや悪役かと言われればそうとも言いきれないが私の研究資料を燃やした時は間違いなく悪役<sup>ヒール</sup>だったよ。」

「俺はてつきりオカルトな人とばかり??。」

「最初からオカルトな話しかしてないだろうに。」

「嘘つけお前ッ! ウララちゃんがオカルトなわけないだろッ! 怖い事言うなよッ!」

「ウララ君を持ち出したのは君だろうッ!? デジタル君、彼は何だ! まるで話が噛み合わない!」

「タキオンさんは本当に寝た方がよろしいかと?? トレーナーさんはどう何を話しても誤解しか生まないので一旦話すのをやめて下さいね。マジで。」

「泣きそう。」

相棒はこういう塩いとこ有る。この、何?? お母ちゃんに優しく諭された時ぐらい辛いと言うか?? 怒られた方が1周まわってみたいな感じ?? その笑顔向けんな。いたたまれねえ。あと何か口調強くない???

「まあデジタル君がそう言うなら仕方ない。私としても貴重な実験——もといデータ提供の理解者に距離を置かれたくは無いからねエ。トレーナー君、片付けるから部屋の電気をつけておくれよ。」

「あいよ。手伝ってやるから、カフェ達が来る前に——。」

カチツ、と。

確かに部屋のスイッチを押した。どの部屋にも共通している室内照明の電気だ。だがまるで反応しない?? どころか、何かカウントダウンの様なテンポのいい機械音がする。

ふとタキオンの方を見れば、いつの間にかプールから出て窓を開けているじゃないか。

「なあ、これ。反応しないんだけど。」

「奇遇だねえ。こつちもまるで反応無しだ。デジタル君の方は私の水着姿で暴力的な数値を叩き出し、今しがた急降下したりと変化しているのに、君はまるで無反応??何か足りない物があるのかな?」

「何の話してんだ?そりゃ確かにお前さんの水着だって似合ってるし、モルモットのヤツが発光しそうだが??。」

「ふむ??なら話を変えよう。デジタル君を見たまえ。」

渋々言われた通りにしたが、一体全体何だっただ。俺の前にはプールに入ってたせいで水も滴るクソかわオタク君しか居ないぞ。去年から学校指定のしか見てないから新鮮です。それおNew?大方可愛い妹分と可愛い天才児にその手の店に連れて行かれたのだろう。もう1度言わせてくれ。水も滴るクソかわオタク君。何だそのフリフリしたフリル。そして何でちよつと目を逸らすんだ止めてくれ、それは俺に効く。凹む――。

「それ君に見せる為に用意したらしいぞ。」

「タ”キ”オ”ン”さ”あ”ん”ッ!!!」

《ロジカル!ロジカル!ロジカル!》

「アーツハツハツハツ!!そおら行けーッ!!」

相棒の悲鳴。謎の機械音声。爆笑する徹夜明けのマッドサイエントティスト。そして次の瞬間には室内に鳴り響く轟音。

満点の星空に、大きな大きなハートの花火が炸裂した。

「??何からツッコめってんだコノヤロー。」

「なーに聞き給えよ。私はねえ??最初っから君も込みでデータが欲しかったんだ。だが君は可愛いデジタル君と違って素直に協力してく

れないだろうか？腹立たしい事に。そこで私は考えたのさ！彼女に協力して貰って勝手に取ってしまえばいいじゃないかと。あわよくば暇を持て余してスカーレット君の為に作った花火も打ち上げて貰って連帯責任にしようかと。そら、手首を見たまえ。」

徹夜明けの科学者本当に口悪いな。

しかし俺の右手首には、いつの間にか『釈迦』のロゴが入った小さな機械が着いていた。えっ、こわあ。何で？いつ？デジタルに協力して——さつき引き剥がそうとした時か~~~~~っ!!

「それこそ私が企画・開発した、心拍数から心の状態をグラフや数値として可視化する小型器具。データはあつちのパソコンにあるホストサーバーに自動的に記録される超高性能装置——名付けて、”しゃかーるくん”!! 因みにデザイン担当がこだわり過ぎて予算が無くなったから、幅と高さで奥行が7cmずつ足りないよ。」

「知らんわ。うわっ、パソコンがシャカールの顔になってる??許可取ってんのかこのドーモ君モドキ。」

「勿論だとも！私の必死の説得や熱意の籠った有用性の証明、果てはこの装置で取ったデータの共有を云々かんぬんしてそれはもう彼女も興味津々と言った様子で承認してくれたさ。多分。」

「??つまりなんだ。この胡散臭い装置と花火の点火装置を連動させて、俺のデータが一定の値を叩き出したら花火が飛んでくって事で良いかバカヤロー。」

「そうなるねエ??口が悪いねエ??。」

「うるせえ。何でハートなんだよ。」

「どうせデジタル君が関わると数値が変動するんだから、君のデジタル君に対する心情も可視化した方がいいだろう？あれ程分かりやすい形も無いじゃないか。」

ダスカの為に自分で言ったじゃねえか。たまたま思いついただけだろお前。

アツハツハーと愉快そうに笑う主犯の女は有罪として、共犯者の相棒——は顔を押えて『ひええ?!』って言ってるから多分知らなかったんだろう。無罪ヨシ!

「??で?そこまでして得られた情報は何だった。」

「まあ、何だ??露骨な煽りや場面に反応しないって事は——君シチュエーション派だったんだねエ。あんな分かりやすい嘘デタラメに引っかけたって花火を飛ばすんだ。でも今度はもう少し使えるデータが欲しいかなあ。アツハツハツハツ!」

判決——貴様を就寝刑に処す。

「デジタル。この寝不足気味デンジヤラス女今すぐ寝かしつけんぞ。」

「なんだいなんだい。君だって花火が見れて満足だろう?夏の風物詩、しかもお手製あの規模だ。寧ろ褒め讃えてくれたまえ。」

「だからってお前、火力を考えろツ!エアグルーヴがすつ飛んでくるわツ!!」

「まあまあそう固い事を言うんじゃない。私だって——おやおやデジタル君どうしたんだい?無言で布団なんか引つ張り出してきて。何だキー君まで枕を並べて。そんなに焦らなくても先ずは片付けを先にだねエ??やつ、本当に、あの、カフェに怒られ——すうん??。」  
「寝息が独特過ぎる。」

この後の事など説明するまでも無い。

エアグルーヴ。

どうせこれ一言で万人に伝わるわチクショーめ。

『果てよ。最果てよ。辿り着くは神の御心。』

運命の渦中に怒りは有り。海の彼方に道は拓けり。

選ばれし意志、為れば獣の心臓に剣を穿つ。

最果ての領域にて我が身を奮え。

本能のままに、御心のままに——。

これが昔話の正体だったとして、僕には何の話か分からない。カフエ、君は?」

「??すみません。私にも、そればかりは??ただ??この問題に関しては、手を引きましょう。アレを追うのも、今日で最後です。」

『???  
叛逆者  
?????  
お前、  
は  
????????  
』

「そうだね??僕も賛成だ。どうにも友好的な関係を築けそうにない。他のウマ娘達には申し訳ないが、君やタキオンの方が優先順位としては上だから。所で、君にはアレが何に見える?僕にはただの、意志を持ったモヤにしか見えないよ。」

「??悲しい人です。神の気まぐれに選ばれただけの、運命の従属??でも、私達ウマ娘の身体の、魂の、記憶の奥に根付いた血の因果が??彼女の本質を理解しています。あれは神が創った??怪物の——ツ!」

『サンデーサイレンスツ!!』

対決　：　らもらも&てぃーぼー

「マヤノさん、こんなところで油売ってて良いんですか？」

「いーの！今日は普通の練習お休みだし、トレーナーちゃん達も色々やる事があるって言ってたもん。午後まで後輩<sup>ヒメ</sup>ちゃんと居よつかなーって♪」

「そりやどうも。」

「ぶー??もつと嬉しそうにしてくれてもいいのにー。」

「ちゃんと喜んでますって。表情筋の奴が気性難でして。」

「ぶーぶー！」

「あんまりぶー垂れてるとメスブタになりますよ。」

「メスブタってなに？豚さん？」

「是非トレーナーちゃんに聞いてみて下さい。なるべく人の多い所で元気良く。」

何がそんなに楽しいんだか、膝の上でルンルンしちゃって。

今日からようやくアタシらハーバーも夏合宿に合流した矢先のコレ。オフだから良いけども。

この子もこの子でどうしてかアタシに懐いちゃって??普通、こんなイカつい顔してバチバチにピアス開けた奴には近付かんでしょ。少なくともアタシが知ってる中じゃこの子とあのクソボケ大先生だけだし。

「そんなに不思議？」

「何がですか？」

「ヒメちゃんと仲良くしてるのが！そんなに心配しなくても、ヒメちゃんはトレーナーちゃん達からも大事にされてるのに。マヤだつて一目見た時に、ビビビーツ！ってきたんだから。」

「へえ??因みにアタシまだ何にも言ってなかったんですけど。」

「お顔に書いてるもん。」

流石の理解力。よっ、古今無双のチョロかわ娘。

喋らなくて良いのは楽だけど時と場合によつては超やりづらいヤツ。そもそも、その大事にしてくれてるトレーナーちゃん+他2名も変人ばかりなんですからね。

「財布出しながら」身体触らせて下さい” って頭下げに来る夢女姉さんとか。

「いよいよ他人様の飲み物に薬品ぶち込み出した頭カフエイン兄さんとか。

子供だけ狙ってフィルタリングを透過してくるフィッシング詐欺師とか。

「字面だけ見たら間違い無く子供を預けられない3人衆。あつども、これが職場のトップ達です。知ってます？中央トレセン学園って言うアットホームな職場なんですけど。」

「それにマヤ、ヒメちゃんをリスペクトしてるからね！この間ドラマで言ってたけど、ヒメちゃんみたいなタイプってこう言うんでしょ？えつとく？？」

「??？」

「大人と子供を都合良く使うタイプ！」

「アタシ嫌われてんのかな。少なくとも褒め言葉じゃねえし、職場にそんな居たらブチ切れ案件だわ。マヤノさんドラマから言い回し覚える癖何とかなりませんかね。あーでもアクション映画見出すとたまに毒吐くんだった。」

「あとねあとね！ヒメちゃんのギャップ萌えも、すつごくお手本にしたって思ってるの！」

「はあ、ギャップ萌え??ありますか？」

「あるよ！だって普段そんなにクールなのに——。」

「??？」



「トレーナーちゃんと話してる時は女の顔してるもん！」

アタシ嫌われてんのかな。普通に毒吐いてきたわ。この子の目にどんな風に映ってるのマジで。えっ、大人と子供使い分けながらお気に入りの男の前でメス顔晒してる女って事？ヤバあ??。

「誰がお気にやねん。」

「どうしたの？」

「何も。午後からレースでしたっけ？」

「うん。キタちゃんがラモーヌさんと走って、マヤとロボロイちゃんはトウシヨウボーイさんと！」

出た出た先輩の謎コミュニティ。だから先輩もヨシエさんも、生徒さん達から近寄り難いつてんのに。

そもそもアンタが居なかったせいで学園に来たテンポイントさんの対応させられたんですけど。トレーナーの中じゃアタシが1番付き合い長いから、『じゃあ代わりに??』とか意味分からん事を縁の人に言われましたよアンタの後輩ちゃんは。1時間あやとりしながらマントゥーで時間潰したこっちの気持ち考えろつての。無駄にハロンタワー極めたわ。あのたわけ、毛糸で縛<sup>シバ</sup>いたろ。

「ヒメちゃん。」

「はい？」

「今トレーナーちゃんの事考えてた。」

「いやヘルシエイク矢野の事考えてました。」

「またそんな事言っちゃって——あつ。そうだマヤ、やっぱりやる事あったんだ！だからそろそろ行くね！ばいばい♪」

クソ自由やんこの女兒??まいつか。

ひとまず夏の成果、見せてもらいましょうかね。先輩。

「行くぞRXッ！わっしよい音頭はああああッ!!」

「にっ、日本の音頭だ！お祭りだ！あっそーれっ！」

『わっしよい！わっしよい！わっしよいしよーいッ!!』

「トレーナーさんッ！」

「どうしたブラック！」

「ラモーンさんの目が辛いですッ！」

「お前さんの成長に感動してるのさッ！」

「ラモーンさんの周りをぐるぐるする必要ありますかッ!？」

「あるともッ！さあラモラモ、感想を述べよッ！」

「酷い祭り。」

『ひんっ。』

ダメかー。キタちゃんの緊張解すのに良い案だと思っただけだな??。

お前とレースってだけでヤバいのに、観客までバカみたいが増えたんだからキタちゃんだって上がっちゃうだろうよ。ルドルフみたいに威圧感を加減しなさい貴女。何の為にブルマ履いてるんだ。

「あのっ、や、やっぱり怒ってますよお??。」

「落ち着いてくれキタちゃん。ラモーンは———なんと怒らない！聞いてみな?。」

「??ラ———。」

「怒ってるけれど?。」

「うわぁー！んッ！ヨシエさぁー！んッ！」

「君は純粹で素直だねえ。悪い大人には気をつけ———んぁーッ!!」

突如現れたフランス帰りのお姉さんが頭を鷲掴みしてきた。何で水着なの？何で薄手のパーカーだけで済ましてんの？またフアス

ナー君悲鳴あげてんじゃん。はっ? デツカ、キレそう?? いやキレてんのコイツだな。帽子の下から覗いてる目がマジだ。俺を今殺そうとしてやがる痛い痛い痛いすっごい痛いッ!! 握力ゴリラだなお前ッ! 絶対学名”ヨシエ・ヨシエ”とかだろウホホイッ!

ゴリラがそんなデカ乳ぶら下げてるわけねえだろ反省しろ。

「これ以上ウチのルーキーに恥かかせるなら頭骨握り割るぞバカ野郎?? ツ!」

「いやーッ! ビクともしねえッ! 頭割れるーッ! お前何で居るんだよ! 帰国日は今日じゃねえだろ!」

「はっ? 何時帰ってこようが私の勝手だろ喋んな。お前のはクソモルモットだ?? アイツ6000回ぶっ殺してやるッ!!」

「助けてテイオーッ! テイオーッ! テイ、テイ、オーッ!」

「?? ヨシエー。あっちでクロフネのトレーナーが呼んでたよ。」

「はーい! ♡今行きまあーす! ♡?? 命拾いしたなドブカスが。」

トレーナー歴が先輩なら他人にここまでの暴言吐き捨てていいの?? 俺一応年上?? うっ、こめかみの辺りが陥没してそうだ。

「何で痛い目見るって分かっててちよつかいかけるのさ。」

「いつか俺の方が上だと絶対に分からせる為だ。あたた?。」

「望みは薄いねー。ほらっ、邪魔になるから戻るよ。」

ふとキタちゃんの様子が気になり目を向けると、すっかりラモーヌに怒ってる・怒ってないと振り回されていた。あの魔性はああやって玩具が出来るとすぐ?? ヌツ、視線! なっ、なんだよお前事実だろ! ? そうやって俺の事も?? クソウ、おっ、大人をからかいやがって?? ツ!

しまあ——。

「テイオー。」

「何?」

「お前の後輩、バケるぞ。」

「うん。知ってるよ。」

ひえっ。これだからポラリスは。天才集団



始まったレースの展開は分かりきっていた。

なるべくハナを取りながらラモーヌさんから距離をとる。ヨシエさんに見出して貰ったあたしの走りは、比較的長い距離での”逃げ”。正直言つて、今回みたいなの2400mは少し厳しいらしい。

ましてや相手が、トリプルティアラを達成した魔性の青鹿毛と呼ばれる人なら尚更。

前を走つていても感じるプレッシャー。もつと逃げたいけれど、正直今のあたしに2400mの正しい走りが出来るとは思えない。これ以上はペースを乱されるだけ??ジリ貧になったらそれこそ潰されると思う。

半分を超えた辺り。プレッシャーと嫌な予感、確信に変わった。

「ねえ——このまま終わらないわよね?」

「っ?!」

余りにも呆気ない抜かれ方。

接戦なんか起きもしないで、ただ一方的に潰されていくんだ。

昨日、あんなに勇者御一行の皆さんが声を掛けてくれたのに。

スイープさんが魔法を掛けてくれたのに。

こうして走つて改めて思い知らされた??やっぱり強い人だ。今のあたしじゃとても相手にならない。

それと同時に、今ならこの人に言われた言葉が身体で理解出来る。メジロラモーヌさんはどうしようもなくアスリートで、レースに真摯で、”自由な世界”と言っていたこの場所を愛してる。そう??伝わる。

だから物足りないあたしじゃ、實力不足だったのも痛い程分かったちゃうんだ。

??私には何がある?この人のそういう感情にぶつけられる何が?

まだ分からない。何も思いつかない。テイオーさんだったらどうしてるんだろう。

余計な事を考えないように??それが出来たらどれだけ楽なのかな。皆、どうしてあんな簡単に出来るんだろう。あたしには後、何が足りてないのかな。どうして勝てないのかな。どうして届かないのかな。

????  
ああ。

そうか。

あたし、やっぱりダメだ。

あんなにも胸躍らせていた筈の場所が怖い。

ラモーヌさんの愛してるこのターフが怖い。

覚悟の違いを見せつけられるのが怖い。

勝ちたい気持ちを比べられるのが怖い。

そして、どうしようもなく惨めな自分が許せない。

あたしは。

あたしは、ただの臆病者だったんだ。

で?どうするよ、意気地無し。

「えっ??」

それは、聞いた事の無い誰かの声。  
辺りを見回しても、そんな声の主はどこにも居ない。  
その代わり――。

「キタちゃん。」

一瞬。

最後の直線に差し掛かった、ほんの一瞬に。

あたしを呼んでくれた声があった。

あたしと眼を合わせてくれた人が居た。

目深に被ったキャップの下から笑みが見えた。

今度は知っている顔だ。知っている眼だ。

今まで何度も横で見してきた、無邪気な笑みだ。

何かを確信した時にだけ見せる――『皇帝の杖』の慧眼。

無敗の三冠ウマ娘が、”絶対”の実力を歴史へ刻み付けた時に。

無敵の最強ウマ娘が、”絶対”な自分を証明して奇跡を起こした時

に。

病弱だったウマ娘が、”絶対”の覚悟でダービーを勝ち取った時

に。

不撓不屈のウマ娘が、”絶対”と言われていた絶望を跳ね除けた時

に。

??臆病で、良いんですか？

勝てなくて良いんですか？

こんなあたしで、本当にポラリスに居て良いんですか???

「??そう。貴女――。」

音が、遠くなる。

景色が白んでいく。

胸の鼓動と血の巡りだけが加速していく。

自分の走る道と、ラモーヌさんの行く道だけが青々としていて。聴こえるのは、あたしの息遣い、ラモーヌさんの嬉々とした声。大地を踏み締める蹄鉄と土の弾ける音。

それから——大きく息を吸った、あたしの、トレーナーの。なら。

ならっ！

それならッ!!あたしはッ!!

「キタサンブラック！ぶちかませッ!!」

「っ??あああ”あ”あ”ッ!!!」

あたしに出来る事なんて最初っから一つだろ！

あたしは！ただ我武者羅になるしかない！

あたしはッ！足が動かなくなるまで突っ走るだけ！

みつともなくても！何も分かってなくても！やらない理由になるもんかッ！

あたしのトレーナーの前でッ！諦めていいワケ??あるもんかあッ!!

もつとだ！

もつとッ！

もつと、もつと、もつと!!

先ヘッ！前ヘッ！走れ歯を食いしばれ死ぬ気で踏ん張れ止まるな諦めるな、諦めるな、諦めるなッ！あの背中を絶対に逃がしてたまるかッ!!

だってそれが??それが、キタサンブラックのッ！

「あたしだけの——”絶対”なんだからあああああッ!!」

足が沈んだ。

地面がぬかるんだようにも感じたそれは、自分の足が迎えた限界。ゴール板は、ほんの数メートル先で。

前には、ラモーヌさんの背中があつて。  
真つ直ぐなんか到底走れなかった。

フラフラで、やつぱりみつともなくて。転ばないように何とかゴールしたその先で力尽きようとしたけれど。

「そんな顔出来たのね。まるつきり怪物みたい。」

「ラ??モーヌ、さ??。」

受け止めてくれたのはラモーヌさんだった。

パチパチ視界に火花が走る。寄りかかるとなつちやつたからすぐにでも退けたかったのに、足は歩くどころか立つ事さえ許してくれない。

「先ずはゆっくり息を整える事。途中から呼吸のペースがおかしかったもの。明らかに酸素不足ね。」

「ゲホツ、ゲホツ?!す、ずみま、ゴホツ??。」

「話す前に自分を落ちつけなさい。」

ラモーヌさんは全然息切れなんか起こしてなかった。あれだけ必死に走ったのに??追いつこうとしたのに??まるで届かなかった。

ああ??もう??悔しいなあ??。

息が出来ない苦しさが、それ以外の何かか。

あたしに出来ることはターフを力いっぱい握る事だけ。

拳に落ちた雫に気付いて、これ以上みつともない顔を見せないように歯を食いしぼるだけ。

落ちるな??お願いだから、もう、落ちないで??。

「——よろしくてよ。?。」

ふと、そんな声が聞こえた。

上げた目線の先で、ラモーヌさんは微笑んでいた。頬に添えられた



右手が、あたしの目から零れるみつともない想いを撫でている。

「怪物は怪物でも、意地っ張りな怪物さん。そうね??その走りをもつと普通に出せるようになったら、かしら。」

「えっ???あ、あの、でも???あたし???ぷえっ!」

「2度は言わないの、私。」

ギユツと掴まれた頬。変な声出しちやったし、なんか凄く真剣で??あつ。お、怒らせちやったかな??。

ラモーヌさんはそれだけ言うのと立ち上がって、背中を向けた。

「ねえ、貴女。自分が今どんな顔をしているか分かって?」

「??きつと、ぐちやくちや??です。ヘンテコです??ズツ??みつともなくて、カツコ悪くて——。」

「”ここで生きてる”って顔をしてるわ。」

ピシヤリと遮られた。

けれど、どこか温かさの籠った声音は、自分が何を言おうとしたのか、それすらも忘れるくらいに心地よかつたんだ。

そんな時、遠くから大きな声でこっちに呼び掛けてくれる人達が居た。

「やったぜキタちや——んツ!!課題合格!いい走り見せてもらったお礼に、私もスッゲーレース見せてやんよ!」

「そのままテイオーちゃんも追い越しちやえくくく!」

「カツコよかつたぞキタちやんブラツクツ!いよっ、バクシン教の1番弟子!頭バクシンオー!!」

「はあーっはっはっは!お呼びでしょうか——んツ!」

「あつ、呼んでな——どこ行くね——んツ!」

「??あははっ。」

嬉しそうな声。喜んで貰えたのかな？ 凄いや？ バズーカみたいなくラッカー鳴らしてるけど？ 賑やかだなあ？？。

そんな皆さんを一瞥して歩き出したラモーヌさんと入れ違いになるように現れたのは、あたしの？？ポラリスのトレーナーさん。最後の最後まで信じてくれたその人は、立ち止まったラモーヌさんの横で耳打ちしていた。

「どーよ、ウチの子は。」

「シンボリルドルフに話があるのだけれど。繋いでくれるわよね？」

「合宿所に居るんだから、ご自分でどうぞ？」

「生憎と気分じゃないの。じゃあ、よろしく。」

わざとらしく肩を竦めたヨシエさんは、少しだけキャップを上げて座り込んだあたしを見下ろした。

「久しぶりだね。良い顔してるじゃん。青鹿毛ちゃんはどうかだった？」

「??あたし、全然ダメでした。ごめんなさい、やっぱり?!」

「やっぱり?」

「??こんなの、ポラリスに相応しくない??ですよね??あははっ。」

しまった、って思った。

言いたかった事はそうじゃないのに。本当は??本当はっ。

勝ちたかったって。

頑張ったって??っ。

次は負けませんって!!

??信じてくれて、ありがとうって。

そう言いたかったのに??やっぱりダメだなあ、あたし。

「それを決めるのは私だよ、ルーキー。」

しゃがんだヨシエさんが、キャップの下から目線を送ってくる。何もかも見透かしたような、怖いぐらい鋭い目。怒ってるわけじゃ、なさそうだけど??耐えられなくて、目を逸らしてしまった。

「君に問おうか。どうして私が君に声を掛けたのか??1度でも考えた事ある?」

「??すみません。」

「あるのか、無いのか。」

「なっ、無かったです?!」

「よろしい。君がテイオーに憧れてる事も、自分の走りにコンプレックスを抱いていた事も知ってるよ。でもね?私が君に声を掛けたのは——それでも諦めていなかったから。」

その言葉に自然と顔が上がる。ヨシエさんの目は、優しいお姉さんみたいな目になっていた。

「骨折から1年明けに復活した奇跡の天才ウマ娘。」

残りのクラシック期間を犠牲に栄光を掴んだダービーウマ娘。

屈腱炎なんて絶望にだつて立ち向かい続けた不撓不屈のウマ娘。

3人の共通点はね??いつだつて諦めなかった事だよ。ただテイオーみたいになりたいってんなら、私とルドルフは君をチームに入れてないし声も掛けなかった。けれど足りない自覚があつて尚、君は”足りない”を補う為に我武者羅になり続けた。違う?」

「それは??あたしには、それしか出来なくて??。」

「自分に嘘をつかないで、いつだつて弱さを認めてきた。それは誰にでも出来る事じゃないし、走ってる時だつてそうだったでしょ?なら、次にやる事なんて??っ、ゴメンちよつと??。」

「ヨシエさん??？」

珍しく言葉に詰まったこの人は帽子で顔を隠した。どうしたんだろうって思ったけれど、答えはすぐ分かって。

俯いた顔を——涙が幾つも通っていた。

「??いやあー悔しいよねえ??そりやそうだよ。次は絶対勝とうね。私も頑張るから。君の気持ちを、君だけに背負わせないから。気付いてあげられなくて、迎えが遅くなって、本当にゴメンねキタちゃん。」

言葉より先に、あたしはヨシエさんを抱きしめていた。

普段の姿からは考えられない程小さくて、弱々しくて、消えてしまいうそで??震えていた。

私の心に言葉で言い表せない何かがある??ううん、本当は分かっている。分からないフリはお終いにしなきゃ。

あたしは、もう誰にも負けたくない。

そう思ってたギョツと握った手の平に違和感がある。いつから握っていたのか、それはペットボトルキャップ位の灰色で透明な石の欠片だった。

遠く。

ヨシエさんの背中の向こう、ずっと遠くの日陰に誰かが立っている。

それは見た事もないウマ娘。けれど、知っている。

腰まである黒髪に橙色のメッシュが入った、まるで??日蝕の様な髪色のその人は、聴こえない声であたしに語りかけた。

それやるよ。またな、意気キタサン地無ブラック。

姿が消える直前の木漏れ日に照らされた顔は、子供のよ様な笑顔

だった。



「ヨシエちゃん大丈夫かな??。」

「大丈夫だよ。ありや鬼のように強い女だ。」

「そうかなあ??マヤ、ヨシエちゃんはすつごく繊細だと思っけど??。」

「わははっ。」

「むゝゝゝ。」

スタート地点に着いてすぐそう言ったマヤの言葉に、トレーナーちゃんは笑ってた。今そんなにおかしい事言ったかな？

「そう頬つぺを膨らまさないの??どの道俺らに出来るのは、ああやって遠くから声を掛ける事だけだよ。本当に気持ちを共感してやるのも、悔しさを分かち合うのも、結局は一緒にやって来た奴にしか分かんらん。同じ”頑張ったな”って言葉でも、俺らとアイツじゃ全然意味が違うのさ。キタちゃんは死ぬ程悔しいと思う。ウチに預けるって選択肢を取るしか出来無かったヨシエもそう。だから——マヤノ??。」

「??今ヨシエちゃんの事呼び捨てにした。」

「んゝゝゝお話聞いてたかな?トレーナーちゃん、珍しく良い事言った自信あるよ?。」

「日頃の。」

「行い。」

『あははははっ!』

トレーナーちゃん横になっちゃった。

「おーい。準備は良いかい？」

「まーだだよ??。」

「しろよ。何寝てんだオラツ、この！」

「あだっ!? 足出すな足っ！」

「うっせー！寝技の1つでも掛けてやろうかお前っ！わははっ！」

「仲良いね。」

「で、ですね??。」

ロブロイちゃん、緊張してる。実際マヤもそうだし、するなっ言う方が難しいと思うんだ。だってこんな和気藹々な空気だけど、目の前のこの人は紛れも無く教科書に載ってる人で??実はまだ夢なんじゃないかって思ってるんだよね。

何となくロブロイちゃんは課題の意味を理解したらしいけど、うーん??この人が素直にやらせてくれるとは思えないし。トレーナーちゃんに言われた、”トウシヨウボーイをよく見てろ”って意味の方がぎっくりし過ぎててイマイチ??。

「うしっ、やろうか。」

「もう良いの?。」

「逆にまだ自分のトレーナーを痛めつけて欲しかったの??まあ、満々満足ティーボーさんって事だから??並びな。」

『っ！』

「おいで、2人共。技術と蹄跡を。意地と感情を。そして天《font:ul40》馬《font:ul40》の誇りと責務を持って、トウシヨウボーイが君達を見届けよう。願わくば——今日この日を、生涯忘れる事の無いように。」

「後輩ちゃん助けて??身も心もボロボロ??まぢむり。」

「あっ、目線オナシヤース。出来ればこの醜態を生涯忘れる事が無いように。」

「はっ倒すぞ。」



2400mの芝コース。アップダウンの差はあるけれど、右回りな事も含めて大体は日本ダービーと同じ条件。

レースが始まってすぐ、ロブロイちゃんはマヤの後ろにピッタリ付いてきていた。

やられて始めて分かったんだよね。ティーボーさんやトレーナーちゃんが言ってたロブロイちゃんの課題。

スリップストリーム——確かにこれなら、マヤよりも少しだけ小さいロブロイちゃんは楽に走れると思う。

中々長距離を走れるマヤと中距離メインなロブロイちゃんはスタミナの絶対量が違うから、ロブロイちゃんがやらなくちゃいけないのはどれだけスタミナの消費を抑えながら前に出やすい位置をキープし続けるか。

けれどこの子の事ばかり気にしてもいられない。マヤだつて競ってるのは同じ。ティーボーさんに逃げの一手は多分通用しない??けど力でぶつかったら確実に押し負けるから、前をキープして走らなきゃ。

何より怖いのは——やっぱりこの人のメンタル。

「ふーん??良い位置だね。ロブ之助も役目を良く分かってる。その調子で頑張れ。」

全然余裕そうなんだよね。

マヤ達現役なのに、何か一方的にプレッシャーに振り回されちゃってるんだ。

ロブロイちゃんもロブロイちゃん、今日は何かいつもと違うって

言うか??あれ?これマヤだけプレッシャー2重で掛けられてない??  
理不尽っ!

暫く展開に変化は無く、そのまま1000mを超えた辺り。いよいよ後ろからあの人近づいて――。

「じゃっ、お先。」

『えっ。』

??今躲された?距離を詰めるとかじゃなく?にしてもあっさり過ぎない???

うそっ、だつてさっきまで全然距離開いてたのに??スパート、掛ける?

ううん、あの人全然余裕そう。ここで仕掛けても結局最後はギリ貧になるよね??かと言って最後の直線まで引つ張ったところで、あの人スパートに間に合うとは思わない。そもそもあの人どこでスパート掛けるタイプなのか分かんない。

あっ??これ、やっちゃった?もしかして攻めの機会無くなっちゃった感じかな?そっか??。

どどどどーすんの、どーすんの?♪

つて言ってる場合かーいッ!!トレセン音頭が流れて来たよもーっ!考えるのはこっちじゃなくてレースの方だつてば!でもこれ、マヤ一人が何しても多分――あつ。

ロボロイちゃん??右にズレた?

「マヤノさんっ。」

斜め後ろから飛んで来た眼光は、いつものオドオドしたロボロイちゃんのじゃなかった。



自分はやれるって顔。  
前に行かせて欲しいって顔。  
あの伝説と戦いたいって顔だ。  
なら??いける、かも。

「ロブロイちゃんっ!」

「はいっ!天駆けるウマ娘は??私が地上に引き摺り下ろしますッ!」

過激ッ!!ロブロイちゃんこんな感じだったっけ!?もしかして  
ティーボーさんに当てられてる!?

うゝゝゝゝゝん??っ!!もう難しい事は無しッ!!ロブロイちゃん  
がそんなに意地を見せるなら、ステイヤーマヤのドキドキの意地だっ  
て見せなきゃね  
!!

その為には——。

「おーおー、ようやくかよ英雄ッ!!アタシはここだぞッ!前走ってや  
るから、その意地剣奮って見せろやッ!!」

「言われずともッ!!」

そう、行って、ロブロイちゃん。その位置ならティーボーさんは内  
側に潰される。どれだけスパートで速度を稼げるって言っても、ロブ  
ロイちゃんと競ってる中じゃスタートだって出しにくいはずだもん。  
その子だっ  
てダービー2着の実力者なんだし!

今回は大外1人で回るマヤの方がスタートは早いもんねー!これ  
で??っ。

「先に逃げ切っちゃうからッ!!」

「あっはっはっは!!いいねいいね!熱くなるねえ!こんなに燃えたの  
は久しぶり、内側に追い詰められたのもダービーぶり——ダー、  
ビー???

一転、ティーボーさんの顔つきが変わった。

ダービー——まるでその言葉でスイッチが入ったみたいに、すごく悪い目付きっていうか??笑ってるのに笑ってないよ。あつ、何かダメかもコレ。

それと同時に叫び声が出た。マヤとロボロイちゃんを呼ぶトレーナーちゃんの、珍しく慌てふためいたそんな声が。

「2人共ゴールまで全力疾走ッ!そいつキレてるぞッ!!」

『えっ。』

「??誰から聞いたんだよ、この攻め方。走りにくいっいたらありやしない。そうだ、そうだった??ダービーでもやられたんだよコレ。もどかしくてさあ??めっちゃ悔しかったんだって。マジに。」

『えっ。』

「あー、何か色々??負けて、初めて泣いたんだ、うん。ダチ公の前でさ、ダッセエとこ見せて??なあロボ之助え??アイツだろ?」

「えっ!?あつ、いえっ、あのっ??!」

「マヤノー??やっぱり、アイツだよなあ。」

「しっ、知らない知らない知らないっ!たまたまだからっ!」

うう~~~~ッ!!何か痛いっ!横からのプレッシャーが凄く痛いっ!何これ!?ブライアンさんもローレルさんもマベちゃんもこんな事にならなかったのにつ!!この人ヤダ!怖い!

「うわあ~~~~ん!スパ~~~~トッ!!」

「~~~~~!!!」

「いさみんの教え子まで使って??ふぎけるなよクライムカイザーッ!!」

『誰~~~~ッ!?!』

内側に追い詰められたティーボーさんが見せた初めてのの本気顔。今迄の比じゃないプレツシャー。

普段が自由人過ぎてたまに忘れるんだけど、この人だって伝説級なんだよね！そうだよね！

TTGは一緒に競い合った3人かもしれない。でもライバルがそれだけとは言ってなかった。多分そのクライムカイザー？って言う人も、この人にとっては凄いライバルで??でもっ??!!

「それを今ぶつけないでよっ！もおーっ！！」

「どこ見てんだマヤノトップガンツ！私を見てろツ！！」  
「っ?!」

低くなった姿勢に、1歩1歩確実に抉れていく地面。

それは見間違いなんかじゃなかった。トウシヨウボーイさんの背中  
中に生えた――。

「――綺麗な、翼。」

「ぶっ飛ばして行くからなあツ!!」

勝てると思ってた。

この策ならギリギリ通用すると思ってたし、現役のマヤ達なら逃げ切れるって思ってたんだ。

けれど、天駆けるウマ娘には??そんな小手先の事なんて些細な問題で、到底捕まえられないものじゃなくて。

凄いなあ??やっぱりこの人の走り方、何回見ても――あれ？

マヤ、どこで見たんだっけ？

??そうだった。何で忘れてたんだろ。

気になる事があったんだ。

聞きたい事があったんだ。

ついて行ったら??分かるかな。  
勝ったら教えて貰えるのかな。

ねえ、天《font:ul40》馬《font》さん。

それを真似したら、マヤにも見える？

「??マジかこのチビ??ならやろうぜ。力尽きるその瞬間まで。」

”Rock ON”——しちやったからね？」

「ロブロイツ！こつから気張れよーツ!!」

「っ??はいツ!!」

後もう少しで届きそう。

でもこの走りは違う??これはあたしのじやない。

どうすれば追いつけるかな。どうすれば自分の翼あたしものになるのかな。

それが欲しい。そうになりたい。そこに行きたい。行きたいの。

そのキラキラした場所に——あたしはツ!!

「とか言って、とつくにゴール過ぎてるんだけどね。わははっ。はい私の勝ち〜。」

『え————ツ!?!』

「熱くなるのは良い事だけど振り回され過ぎだぜGirls。策に出るのがちつと遅かったね。2000mしか無いんだから、もう少し早くあの思考になってれば——どしたの?」

「??2000m。」

「ですか??。」

マヤ分かっちゃった。流石のロブロイちゃんも眼鏡が光ってる。

だって聞いてた話と違うもん。  
400mも短いもん。

トレーナーちゃん2400mって言ってたもんっ!!

「つたく、レース中に暴れ散らかしやがって??。」

「演技に決まってるでしょ?今更クライムカイザーの1人や2人??  
フーッ!フーッ!」

「ダメじゃん。2人共お疲れ様。取り敢えず身体休めて反省会——  
—。」

「動かないからッ!」

「エッ。」

「疲れたッ!だからマヤ動かないもんッ!トレーナーちゃんおんぶし  
てッ!ロブロイちゃんと一緒に運んでッ!」

「??つ、追加400m分の疲れが??すみません、結構辛いです??。」

「追加400m???何の話?いさみん——。」

「??ふむ、そつ、成程??ヌン。」

「??お前やったな?」

引き攣った顔のティーボーさんの前で、トレーナーちゃんは静かに  
笑った。

「??誰か、俺に耳鼻科を紹介して下さい??へへっ。」

「ジョーダンちゃんツ!ローレルさあ——んツ!!」

「それ耳鼻科じゃ——ひんっ。」

「ゼーんぶ見てましたよ?」

「へー。」耳鼻科”ってこう書くんだ??あつ、やってるとこねーわ。」

『真面目か。』

ある意味で忘れられないレースになった今日。

本気のロブロイちゃんを見れた事。

マヤの知らないドキドキとピリピリがあった事。

ターフで見た綺麗な翼の事。

色んな知らない事、やってみたい事が出来た。それに??マヤがマヤじゃなくなつたみたいなの、あの最後の感覚。

??ねえ。あ<sup>貴</sup>た<sup>女</sup>しはだあれ?

「さっ、マヤちゃん。戻ろっか。2人は私とジョーダンちゃんが運んであげるから。」

「ローレルさんありがと〜!」

「ロブローイ?だいじよぶかー?」

「すみません??本当に、無理っぽい??です??。」

「私も戻るわ〜。あの男には死ぬ程反省して貰わなきゃね。ラモーヌ見張りにしてきたから帰る帰る。正直言つてあの2人が揃つた空間にこれ以上留まるとろくな事になりやしない。」

主犯、トレーナーちゃんはティーパーさんが”よしつ”て言うままで、ずつと四つん這いのまま反省させられてた。多分このままこつてり絞られると思うけど、流星に今回は反省してもらおうからねっ!

何でラモーヌさんが背中に座ってるのか分かんないけど。見張りつてそういう事?ううん、考えるのやめた!もう今日はお終い!!

「なあ、ラモーヌ。」

「あら?反省中は口を利いても良いのかしら。」

「ちよつとだけさ。お前??”エクリップス”と繋がってるだろ。デジタルヤルドルフと同じ様に。」

「さあ??どうだか。人参はいかが?」

「こりやどーも??生かよ。」

「兎に角やる事は変わらないわ。ただ??貴方達には手札が無い。最低でもカードはもう1枚必要よ。人参はいかが?」

「まだ食まらつふつてんだろツ!もごお。」

「遠慮なさらないで?ほら。そのもう1枚のカード??そうね。”取っておきの切り札”をどう使うかは、貴方次第。惨い選択かもしれないけれど、まあ頑張ってるね。」

「??もご。」

ファースト（1／2）： さよならブルボンさん

「お客様、ここは如何ですかー?」

「おおああああ??めっちゃ効く??えっ、ローレルさんガチでマツサージ上手くないすか?」

「沢山経験してきたからね。後は??ここかな?えいつ、えいつ。」

「ああああ、そつす、そこつすヤバくくくく!」

この桜エツチすぎんか?

オツサンみたいな声出したバ美肉ギャルのせいで相対的にスケベさが強調されている気がする。確かに桜軍団の中では一際大人びている印象は有るよ?後2人はノンストップ委員長とはつけよいワンコだもの。

にしても待つて欲しい。だからと言って人のトレーナー室をそういうお店みたいにするやつがどこに居る。ここに居た。ガツデム!

な、何だその眼??何思わせぶりにニツコリ笑ってんだよ怖えな。そんな優しい顔してるけど怒ったらタツクルしてくるし絶対言葉責めとか得意だろお前。手の扱いも凄そうだもんな。ウチの妹分に匹敵するかもしれん。

まあアレは怪物だからお兄ちゃんが手隙になった途端ポニーちゃんに手好きしてくる可能性があるのだから、恐ろしさで言えば妹分の方がまだ上なのが救いだ。救いとはなんだ?教えてくれソクラテス。いかん、このまま放置するのは非常に良くない気がする。折角ヤス君も来ているのだから、彼に助けを求めよう。

「貴方、マーは言えるかしら?」

「まー。」

「ふふっ??よろしくてよ。」

ダメだ青鹿毛に遊ばれてる。玩具取り上げたたら露骨に拗ねるからメジロの扱いには気を付けねばならない。何だこの空間。



「ちよい、ちよい。」

「何だオツサン。」

「オツサンに言われたかねーわ。いや、ずっと気になってたんだけどさ??何でラモーヌさん居んの?」

「お前とローレルが来る前から居た最古参メンバーだぞ。アイツの退屈しのぎと俺のファイリングが合致したからお前さん達はこの楽しい集いに居るOK?だからこれから一生ラモラモと走って、どうぞ。」

「初耳なんだけど。はっ?初耳なんだけど??。」

「お前さんもよろしくな、ドンメル。ブアツ!!」

無言のハリセンが顔をぶち抜いてくうーッ!!野郎隠し持つてやがった!普通に痛いッ!そういうとこだつて言つてんだろお前ッ!そろそろ返せよそれ!何かスイーピーも振り回してたけど既に影響されてんじゃねえかチクショーッ!

ヌツ、扉のノック。この16ビートは後輩ちゃん。

「居るぞー。」

「うわ何すかこの空間。」

「どした?」

「どしたっつーか、先輩に客人っつーか。彼女候補名乗ってるヤベーおじ様達が玄関前にスポーンしてんすけど。」

??正直、いつか来るとは思っていた。ミチコちゃんへの告白という俺の不始末が齎したこの夏の大誤解。奴の配下の妖怪共が、そんなおもしろ話を知らないわけが無い。どこから情報が漏れたかとかは考えたくないが??アイツらは普通の人間の手に負えるものでは無い。俺とヨシエちゃんやが、ボコボコにしてやりたいという唯一つの共通認識でタッグを組むレベルなのだ。つまりハゲと同レベルに手を焼く猛者共。

罵れば喜び、蹴れば悦に入り、唾を吐こうものなら感涙されるとか

いうドM集団??その悪鬼共、おお正しく我が友ミチコちゃんの下である。本人は至って普通なのになんでこうなるのかが分からない。そして何で今日に限って来たのかもサツパリ分からない。もつと言えはその変態集団の8割は既婚者という世紀末。俺はアレ以下なんだ??。

凹むのは後にしろ三十路。少なくとも目当ては俺かヨシエちゃんのだとちかだらう。いや多分俺だ。

今日は絶対に構ってなどいられないのだ。樫本さんはあれでいか弱い生き物、扱いを間違えると俺のように凹んでしまうかもしれない。後輩ちゃんほどの接点はないが頼られているのなら勇者御一行としてはいつでもお助けせねばならぬのが義務よ。ふふっ、良いぞ俺。ココンはブルボンとのあれこれを解消する為みたいだが、ビターグラッセにはNewおデジの練習相手になってもらおう。

「ジョーダン、ローレル。後は各々解散していいぞ。俺は今日戻らないから。メジロのお姉様はどうするよ?。」

「そうね。今日は特別な誘いがあるから、それに乗るつもり。」

「そうかい。ヤス君で遊ぶのも程々にしとけよ。あつ、後輩ちゃん、アレお前さんの同期で俺の後輩??って、まあ知ってるか。」

「アタシ同期居たんすね。」

「お前。」

「だって。」

だってじゃねえよ可愛い返し方しやがって萌えキャラが。いい加減自分がシベリアンハスキーの着ぐるみ着ただけのハムスターだって事理解しろよジャンガリアン。

着ぐるみ着てんのヤス君だけど。あつ!ほらショック受けてるじゃん!お前の優秀さにコンプレックス持ってたのにアウトオブ眼中されてるの今知った感じだよコレ!マーちゃん着ぐるみが白目剥いてるもん!魔改造だろ。

「じゃあ行くか。おデジも拾っていざ鎌倉ってやつだ。」

「アホくさ。」

「お前。」

「だって。」



絶対めんどくせー事に巻き込まれてるわ。別にアタシ要らなくね？寧ろこの人絡みで面倒くさくない事の方が少ないし??っべーわ、さっさと帰るべきだった。割とガチでこんなんやつてる場合じゃねーんだけど。えっ??帰りたい。

「今スランプか？」

隣のオツサンは徐にそんなこと言い出した。

「クロの奴ですか？確かに最近ドツボにハマって伸び悩んでますね。今のままじゃデジタルさんの相手出来ねーってなもんで。」

「何焦ってんだよ。」

「そう言ってるんですけどねえ。」

「お前にしか言っつてねーぞ俺は。」

??こういう所。何柄にもなくマジな顔してこっち見てんだか。

「クロフネは確かに責任感強いけど根本はそこじゃねえよ。ドツボにハマってるのは、お前さんが自分の出してる指示と、クロフネの成果が見合っていない事に納得いってねえからだろう？あの子はそれを良く見てる。だから後輩ちゃんへの指示についていけない、変わっていかない自分が”そもそも足りてない”って思い込んでんだ。お前さん達は

どっちも真っ直ぐだから。」

「??いつ見てんすか。アタシらの事。」

「たまに。けど俺が見れてない分は相棒の考えだ。アイツのがよっぽどお前さん達のこと、先輩として見てくれてるよ。はっ？俺無能過ぎんか？凹む。」

勝手に喋って勝手に凹んでら。

大体こういう一人相撲してる時はヘツタクソな嘘ついてる時で。どうせことある事に様子見てたんでしょに??いやこれガチかもしれん。だとしたらアタシの先輩無能過ぎんか？ウケる。

徐ろに手をポンと叩きながら何か閃いた顔でこの人は言った。リアクション古っ。

「今日見に来いよ。クロフネ連れて。」

「??良いっすけど、何ですか?」

「お前らに火い付けてやるよ。何で伸び悩んでるのか、俺もデジタルは分かってんだ。と言うより??まあ、何だ。責任は取る。」

責任取るとか言われた。はっ？今そこじゃねえだろ。もつと頑張れアタシの賢さ。頭ドーベルさんかよ。

そんなこと言って笑って。何でそんなにこつちを気にかけるのかさっぱり分からんけど。アンタはロリ専門でしょうがって言いたいけども。

そう言われたからには、こつちは何も言えないわけで。だから乗ってみる事にした——はずなんだけどなあ。

「どうも、お2人さん。」

『どーもー、ヨシエさん。』

ニッコニコ笑顔の皇帝の嫁がいらっしやって。こういう顔してる時、大概上手く事が進んだ試しは無い。毎日の様に繰り広げられてる

学園名物、『過激なウオ×スカ』がスタートする合図。ほら、青筋浮か  
んであら。

「後輩ちゃん、ちよつとゴメンねー。そこのアホ借りてもいいかな？」  
「どうぞどうぞ。」

「悪いけどそんな暇ねーぞ。俺は今から後輩ちゃんと悪霊退治に行く  
んだから。あと榎本さん達が待ってる。」

オマケみたいに言ってるの大丈夫なんかな。知らんけど。そもそ  
もアタシはあの軍団の相手したくないんです。スランプ気づく前に  
ここ気付いてもらて。

「何で榎本さんなんですかねえ？」

「そりやお前、今日はファーストと模擬レースだからだよ。」

「ああ、そう。自白ありがとう。こつち来いバカヤロウ。お前のせい  
でバケモン共が我が物顔で百鬼夜行してんじゃねえか。」

「だーから今それを解決しに行こうって言ってるんだろうがよ。何ダル  
絡みしてんだマジで。」

「ダブルブッキングガマしといて随分上から物言ってるな、お前な。  
あーちゃんに全部バラしてやっても良いんだぞボケナスが。あ？」

ダブルブッキング。

その一言で、滅茶苦茶面倒くさそうな顔で受け答えしてた先輩は急  
に『あつ』みたいな顔してこつちを見た。見んな。アタシ絶対やりま  
せんからね。

「分かったらこつち来て下さい。」  
「???  
あい。」

よーし、空き部屋入ったな。アタシは自分の仕事果たしました。  
レースはちゃんと見に行くんで、お先に失礼です。

「あつ、ヒメちゃん！」

うわあ撃墜王。勇者様も居らっしやる。

いやもう終わったじゃないコレ。逃げられんじゃん。

「ねえねえ、トレーナーちゃん見なかった？」

「見てないですね。」

「えっ、何で嘘つくの？」

「えっ、何で分かんのか？」

「お顔に出てるもん。」

アタシクソ雑魚過ぎんか？もつと頑張れよ表情筋。お袋さんが泣くぞ。

「ところでデジタルさん、髪下ろしてましたっけ？似合ってますけど。」

「エツ!?いや、まあ、これはアレですよあの、何と言いますか??アレです!はいっ!」

「トレーナーちゃんに『それ良いじゃん。大人びて見えるしそういう感じも好きだなあ』って昨日言われてたもんね!」

さすマヤ。勇者様小さくなっちゃった。元から小さいけど。

「お待ちせー。いやーゴメンね急に。」

「ヨシエちゃん!ねえねえ、トレーナーちゃん見なかった？」

「えっ?見てないよ?今日は何か用事あるとか言ってたっけ。」  
「そっかあ。」

ヨシエさん、そのクソデカイ麻袋引き摺りながら知らないは無理です。マヤノさんも流石に眼がそこにはしか向いてないっすわ。デジタ

ルさんなんか虚無顔してんじゃないすか。絶対中身が相棒だつて気付いてるでしょコレ。

「あつ、用事つてアイちゃんの??」

「なーんだ、知つてたんじゃん。そういう事。」

「テイオーちゃん言つてたもん！ヨシエちゃんがすごく楽しみにしてるってー！」

「ねえそれ聞き捨てならない。ちよつと待つてね。」

「ウキウキで準備してたんだっけ？だつたら絶対行かなきゃ！」

「待つてつてば。マヤちゃん？」

「トレーナーちゃんと一緒に何かやりたかつたんだもんね！叶つて良かったねっ!!」

「??勘弁してよ。」

そう言いながら麻袋に足掛けたけど、アタシ今何見せられてんの？照れ隠しか職場のパワハラ現場かもう分かんねーわ??この人本当にオジサンの2つ下なんかな。

ただそうなる気持ちは分かります。さすマヤ。怖いもんねえだろこの子。

「??一応聞きますけど。その麻袋なんです?」

「ゴミ。」

「そつすか。」

「ポニーちゃあん。」

「多分ですけど、そこ足掛けたらダメな場所だと思うんでもう少し上踏んでやって下さい。じゃっ、アタシはもう行きますから後はよろしくお願いしました。はいサヨナラ。」

「ちよつと待つた!」

「ミチュラルに尻を撫でないで貰えませんかね。」

「???あつ、もしかして嫌だった?」

「そんなに理解するのに時間掛かります???どうしました。」

「いやね、ちよーつとお願いがあつて??へへっ。」

ああ、これ尻拭い系だわ。だから尻触られたんかな。やかましわ。

「??と言うわけで、あのオジサンは来れなくなりました。ヨシエさんも引率で来られないので、代わりにアタシがあれこれします。」

ほら沈黙。普通他所のチーム焼き付けて予定ぶつけるかね??あつ、元々焼き付けたのアタシだわ。クソが。

聞けばあのオツサン、アーモンドアイさん含めた子供達の夏イベントに参加するみたいで。そもそもそのイベントが将来的にトレセンに來たいウマ娘やトレーナー志望の子達にあれこれ経験してもらおう学園主催のイベントで。そこにあの人と何故カリツキーさんが加わつてあーだこーだしようつてな話。

玄関先に居たオネエ様達はまさかの子持ちで、イベントの参加者兼保護者だとか。ここに來たのはあのオジサンを迎えに來たらしく、もれなく全員あのヤベー2人の知り合いでもあると。ヤベー奴ばっかじゃんマジで人間関係イカれてんな。

あー??ライスさんにお姉様って言われたらあのオネエ様達と被るんだけどマジでどうしてくれるのこれ。どこに責任追及すりやいのよ。

そしてどこからどう見てもリトルなココンさんキレてる。そりやそう。オマケにイメチェン勇者様がどうもさつきから――。

「クロ。その子死ぬ気で止めて。絶対土下座or切腹カマすから。」

「分かってるけど力強くてツ??!!おっ、落ち着いて下さいデジタル先輩  
~~~~!!」

「いいえ!コレばかりは!今回ばかりはあつ!アタシがもつとスケ



ジュールを把握していれば??あの人の予定を覚えていればあゝくっ!!カーツ!何で忘れてたのデジさんのバカバカバカッ!チームの誤解もルドルフさんとの話もっ!5%??いや3%位はアタシにも非があるんですよっ!」

以外と余裕あんな。さすデジ。立場と扱い方を良く分かってらっしゃる。でも非が無い97%をもっと労わってもらて。

「??はあ。あのさ。そっちの都合とか知らないから。アタシはミホノブルボンと走ればそれで良い。アンタは元々そのトレーナーの担当でしょ?」

「はい。」

「なら問題無いじゃん。やるならさっさとして。こっちだって暇じゃないんだから。あとデジタル。」

「はいい??。」

「誰が見たってダブルブッキングした奴が一番悪い。頭下げる前にあのトレーナー何とかしなよ。??それだけ。」

あらら、すっかり角が取れちゃったんですね。

グラッセさんも樫本さんもそれを知ってるのか、何かニヤニヤしてるし。

デジタルさんはようやく落ち着いてくれたし。あつ、何か勝手に気絶した。ココンちゃん角取れツンデレ概念の誇大妄想したな。

ブルボンさんはかき氷食ってるし。えっ、何してんの?これから走るんですよサイボーグさん。頭痛起きとるやん。

ライスさんは横で楽しそうに笑ってるし。えっ、何で居んの?お米ちゃんってば最近研ぎ汁が出過ぎてお姉様も行動が読めないよ。

何だろう。ウチのチーム大概イロモノになってきたかもしれない。



『貴女に??私の影は踏ませません。』

それが、久しぶりに出会ったミホノブルボンからの宣戦布告。

あの眼。あの口調。そしてあの威圧感??アオハル杯の時とはまるで別人の様な姿。

勇者御一行の話は、ハーバーのトレーナーや他のウマ娘たちが話している噂程度では知っていた。

国内外、芝もダートも問わず、マイルで絶対的な立場に居るアグネスデジタルとそのトレーナーが作りあげたイロモノチーム。そもそもあのレースローテーションを走るなんてバカげてる。普通のトレーナーならまず考えないし、普通のウマ娘は走ろうともしない。場所が変わるだけでどれだけ足への負荷と走りに影響が出るか分かったもんじゃない。

??けれど、アイツらはやり通した。

”そこにウマ娘が居るから”——たったそれだけの理由でそれだけの事をやらかしたんだ。

ライスシャワーに言われた事をふと思い出す。

アオハル杯に勇者御一行が出ていなかったから優勝出来た、と。自分のお姉様がそう言っていたのだと。

だから賭けてみた。その滅茶苦茶なチームに。

正直ミホノブルボンがどう変わってようと、アタシにとってはどっちでも良い。

ただ1度??サイボーグと呼ばれる本気のアンタと競いたかっただけ。

戦場を選ばない勇者の近くで何が変わったのか。ソイツと走ってアンタは何を見たのか。あのトレーナーが何を考えてるのか??負けて来て来たから、それを間近で感じるのも悪くなかったんだ。

——なのに。

当の本人は砂浜に刺さってたし、さつきもずっとかき氷を食ってた。

トレーナーはダブルブッキングした上に今日の事を”良い練習”呼ばわり。

何より1番ムカつくのは??ミホノブルボンに叩きつけられた宣戦布告が、勇者御一行のトレーナーに言われた”良い練習”が、全くその言葉通りになってる事。

「2400mの大逃げとか??何考えてんの。」

アグネスデジタルのトレーナーの代わりにやって来たハーバーのトレーナーが、レース前ミホノブルボンに何を吹き込んだかは分からない。ただアタシも、コイツも、あのトレーナーも??これがあの日の続きだって事を分かっている。分かっているからある程度の実力は予想していたつもり。

それが勇者御一行の干渉で全部狂った。こっちは完全に予想外。ミホノブルボンは本気でこのまま逃げ切るつもりらしい。時折こつちを睨みつけるかのような剥き出しの闘争心が、別人のウマ娘を映し出しているようだった。

走れば伝わる何か??感覚というか、相手の執念みたいな物。

それはアタシらウマ娘が幾度と無くレースの中で経験してきた、アタシらにしか分からない感覚。

その感覚が言っている——この別人を作りあげたのは。サイボーグを完成させたのは、間違い無くアグネスデジタルとそのトレーナーだと。

もう2000mはノンストップ??どこかで落ちるはずのミホノブルボンは一向にバテル気配も落ちる素振りも見せやしない。滅茶苦茶で、ムカついて、どこまでも自由気ままに自分勝手な、ペース配分も何も無い走り。

それをアオハル杯で見られたなら。

「ココン、間に合わないぞっ！ソイツは落ちないッ！スパートを掛けるんだ!!」

そんな事??アンタに言われなくても分かっているっつもの。このままアタシ1人がペースを考えながら追いかけたところで、ミホノブルボンは逃げ続ける。それどころか、そのまま差し切るつもりだ。

??異次元の逃亡者サイレンススズカにでもなったワケ?冗談。

負けらんないのはこつちも同じ。

ハーバーには意地と精神で負けた。

ポラリスには手も足も出ないままねじ伏せられた。

今度は勇者御一行が出ていけば、自分達が3位でしたなんて言われて引き下がるわけが無い。

そのまま終わるだなんて冗談だ。

「舐められたまんまで——やらせるかッ!!」

影を踏ませない?笑わせんなッ!いつだって死ぬ気で練習してきた。樫本トレーナーを信じてやって来た。1人でもやれる??そんなアタシにも力を貸してくれた人に、これ以上負ける姿を見せるワケにはいかないんだよッ!

「ふふっ。」

「ッ!」

「もしかしたら、私達はどこか似ていたのかもしれませんが。ただ気付かなかっただけで。」

「??何言ってるの。レース中に。」

「何となく。そう、伝わったので。もう少し早く出会えていたら変わっていたかもしれないね——この結末は。」



「クロ。ちょっと席外すわ。ブルボンさん戻ってきたらよろしく。」  
「えっ? えっ?! 何で!? どこ行くの!? ヤダヤダ置いて行かないで一人にもしないで約束したじゃんツ!!」

「んな約束してねーわ。急に重力増やすな。」

「はーい。行ってらっしゃい。」

2400mの逃げ切り勝ち。ウチに居た時よかスタミナの持ちも土壇場の根性も上がってる。やっぱり先にライスさんだけ送つといい良かった。あの子が1番ブルボンさんの変化を分かっていたから。あの子のアドバイスと今日の走りを見なかつたら、アタシはずっと決めあぐねていたと思う。

あの子の居場所はウチじゃない。伸ばせるのは?? 本当の意味で吹っ切れさせるのは、アタシじゃ無かった。

正直クツソ悔しいけど、それは後。今は離れた場所で見ている人と話さなくちゃいけないって思う。

「初めまして、ですよ。ブルボンさんのトレーナーさん。チームハーバーの姫野です。」

「??初めまして。」

あの子と一緒にクラシック路線を駆け抜けた、2人目のトレーナーで最初のマスター。どこか羨望の眼を送るこの人がここに居ることは予想外だったけど、多分ヨシエさんの根回しだと思う。

「良かったんですか? ここで。」

「良いんです。私は、あの子から逃げたんですから。会う資格なんて有りません。」

「そうですか?? 聞いて良いのか分かんないですけど、どうしてここへ? ああいや、別に悪い意味じゃなく。気になっただけっつーか?? じゃ

なくて、気になりました。」

「??どうして、でしょうか。ただ、電話が掛かってきたんです。”アグネスデジタルのトレーナー”を名乗る人から、見に来て欲しいって。連絡先はルドルフのトレーナーさんから聞いたそうですけど。」

完全に予想外。まさか2人がかりで根回ししてたとは思わんて。

ただ??だとすると、あの人はあの人なりに気にしてたんかな。よく分かんねー人。

「来るのは、正直怖くて。無理はしなくて良いって言われたんですけど??本当に不思議なんです。あの子の夢から目を背けて、あの子の前から勝手にいなくなつて、それなのに??。」

「いや不思議も何も??気になつてたのなら未練があるつて事じゃないですかね。あつ。アタシはそう思います。」

「??ですね。ふふつ。もしかして話すのが苦手だったりします?。」

「あー、まあ、はい。そんな感じですよ、ね??口が少々アレなので。」

普通の常識持った同性の先輩とか話した事ないっす。すんません。ネジ緩んだ年上の姉さんなら居るんですけど。ボツチですんません。

走り終わった2人を遠目に見ながら——あつココンさん。古今無双の癒しがそつち行きました。頑張つて下さい。

「ココンさん。」

「これ、ドリンク??どうぞ?。」

「物真似はもういいって——本家じゃん??合わせ技止めろ。」

「青森ですよ。」

「はっ?何??.」

「あのねココンさん。ブルボンさん??ふふつ!青天の霹靂なんだつて。」

「はっ?それアンタが急に来てビックリしてるだけじゃん。」

「うんっ!!」

すみませんココンさん。そんな『はっ?』みたいな顔でこつち見られても困ります。ほら、ウチの学園は自由意志を尊重してるんで。ライスさんの研ぎ汁ヤバいでしょうけど米ネタに関しては自分もノータッチでやらせて貰ってます。ウス。

「ライスちゃんもブルボンも??すっかり元気ですね。貴女のお陰で。」  
「あれを元氣と見るかは人によりそうですね。」

「あははっ、確かに。私??今は地方の方でサブトレーナーみたいな事してるんです。皆いい子達ですけどね??どうしても、あの子の顔が過ぎるから。本当は、もう辞めようかなって、思ってたんですけど。」

「へえ。いつ学園中央に戻ってこられるんです?」

「??はい?」

「席は有りますよ。」

言うまでもなく驚いてらあ。それはそう??言つといてなんだけどアタシもそう思ってるよ。この人今地方つつたな?やりやがったよ、ヨシエあの人さん。

「皇帝のトレーナーが、”辞めます”に対して”はいそうですか”だけで終わらせるとは思えませんし。現に貴女が辞めたなんて一言も理事長から聞いてないですから。地方への長期出張、お疲れ様です。」  
「?????」  
「?????」

ブルボンさんみたいな反応しますね。その宇宙旅してる感じ。多分そういう感じに何か上手いこと話が纏まってると思います。」

先輩は知らんけど、少なくともアタシやこの人は全部ヨシエさんの掌の上でコロコロさせられてたつてのは良く分かる。今気づいた。これ言いながら腑に落ちなかった部分が急に嵌ったわ。

ブルボンさん達から聴いていたのは、自分達のトレーナーが辞めたとか言う生徒さん達の中での又聞きの話。噂話なんて大概口くなも

んじゃない。そもそもアタシがヨシエさんから聞かされていたのは、要約すればこうよ。

”世間を黙らせるぐらいの力量で、あの4人の道が正しかった事の証明をしてくれ”、と。

途中からぶち込まれてそれだけ聞かされた所で、こっちは何の事か分かるワケも無く。とにかく必死こいて言われた事やるしか無かった。あれ絶対言葉足りないっての。何でポラリスの子達がノータイムであるの意図を理解出来るのか本気で分かんねーのよ。天才集団こわっ。

??アタシがブルボンさん達の面倒を見てたのは仮。何でかって言われたら、今この人もライスさんのトレーナーさんも、トレセン学園からしたらただの出張応援期間中。幾ら時間が経つてあの時よりマシとは言え、戻つて来たらきつと世間の目はこの人達に向くんでしようよ。良くも悪くも。

だから戻ってくる時必要なのは、世間に不安感を持たせる様な中身じゃダメなワケで??そのお膳立てが必要だった。

ハーバーではこれだけの成績を残した。

でも元はと言えばその走りを確立させたトレーナー達の力。

だから??あの2人が戻ってきたら、もつとヤベーのが見れんぞ。

信じるも信じないも、後は走りを御覧じろってなもんで。

それを宣言する為の手段が、”期待の若手”とかクソいらねえ広告を世間様に引っ提げられたアタシだっただけで。まんまと使わされた女よ??とほほ。

オマケに自分の力不足も分かっちゃったもんで、仮移籍中のブルボンさんも本格的に先輩の所に預けようと思ってるし。あー??とほほ。

「いつでも待ってますから。決心ついたらつて事で、よろしくお願ひします。あつ、文句は皇帝の杖か戦場を選ばない勇者の片割れにどうぞ。あの人達は大体あぁなんで。何ならー発ずつ殴りつけときましようか?やらせて下さい。」

「ええ??いや、そこまでは??戻つて、良いんですかね。」



「良いと思いますよ。好きに生きましょ。」

「そうですか??私——。」

そう言った矢先、言葉を止めた彼女は目を見開いて前を見ていた。視線の先には、これまた驚いた顔のブルボンさんが居て。何か口を開きかけたと思えば、あの子はただ目を瞑り??柔らかな笑みを浮かべながら、手を振ってくれた。

「??あの。お礼を伝えて頂けませんか? 2人のトレーナーさん達に。」

「ウス。勿論。」

「ありがとうございます。本当に??元気で良かった。さよなら、ブルボン。またね。」

手を振り返しながら、この人は泣いていた。それでもきつと、何かに踏ん切りを付けるには充分だったと思う。

その言葉には、少しの明るさも混じっていたから。

それはそれとして面白くねーから、やっぱあの2人シバいたろ。

「おいクソボケエ。折角だ、ブルボンちゃんのトレーナーに連絡取るとか言ってた理由聞かせてみろく? 私が動いてやったんだからなあ。」

「うわダルっ。んだ急に??最近な??翼を授けるレッドブルボンです”、みたいな事を言い出してよ。後輩ちゃんに殺される前にこっさりメンテナンスに出してバグを取り除いて貰おうかと??。」

「お前何だマジで。勘違いだけで人生謳歌し過ぎなんだよ、ぶち殺すぞ。もう手間取るもん全部貴様に押し付けてやるわ。」

「は？別に良いけど頭下げろよ？『お願いします』ってな。」

「は？まずは『お願いします、頭下げてお願いして下さい』だろうが。」

『はあ？』

「はあ~~~~んっ！！！！」

『キタサンブラック。』

「あつ、すみません、そつ、そういうフリかと??思つて??。」

『100点。』

「テイオーさん！あたし100点貰いました！」

「うん、そうだね。でもそこまでにしよ？バカつて移ると大変だから。」

「本当に反省して下さいね。トレーナーさん。」  
『大変申し訳ありませんでした。今後はこの様な事が無いように致します。』

ブルボンさんとリトルココンさんのレースが終わった後。ライスさんが一方的にココンさんと仲良くしてる裏で、トレーナーの携帯に電話が掛かってきた。相手はデジタル先輩のトレーナーさん。

ダブルブッキングしたとかでデジタル先輩のトレーナーさんはこの場に居ない。今はそんなダブルブッキングの主犯にデジタル先輩がお説教を終えた所だった。

普段叫んでるか気絶してるか興奮してるかの3択なデジタル先輩のこういう所は初めて見る気がする。私はトレーナーにそういうの、多分出来ないし??しつかりしてるんだなあ?!

向こうは今バスの中らしくて、私とトレーナーとデジタル先輩は揃って携帯の画面を覗いてる。流星にお説教されたから堪えてるっぽい。擁護はしないけど??えっ待ってこれ反省してる?!

『樫本さん達には改めて菓子折りを持って謝罪させて頂きます。ブルボンちゃんにも土下座します。この度は本当にご迷惑をお掛けしました。』

「そつすか。肩にアイさんが寄りかかっているせいでまるでお言葉がふわふわなんすよおじ様。羽毛出してんの?」

『小鳥ちゃんはお前だけだな。だって起こせないだろこんな??おかわわ??さながら長期遠征の帰りに疲れから寝落ちカマした時のデジ――』

あつ、デジタル先輩切っちゃった。

「さっ！やりましょうか！」

「掛かってますね。」

「エッ!?そんなまさか！あたしは何も問題無しです！」

「いや電話の話です。もう一回掛かってきてるんで。えっ、デジタルさん掛かったんすか？」

「??あっ、いやちがつ、そうじゃ??。」

「掛かった上に引つ掛かったところで対応おなしやす。あざっす。」

デジタル先輩小さくなっちゃった。

この先輩はもぉ~~~~っ!!!うっ、胸の奥がキュンキュンするっ！そうだよコレなの！マイルCに応援来てくれた時も何か最前列でずつとぴよんぴよこしてたし、こんな小さいのに強い、速い、気遣い出来るってもうずるいんだよ~~~~っ!!しかもこの反応って絶対自分も経験あるやつじゃん~~~~っ!!ライバルとか言っただけど推しでいたい。生まれてきてくれた事に感謝したい。オールウェイズ眺めたい。ウチのトレーナーと同じくらい眺めていたい。髪を下ろした姿も素敵過ぎて4K撮影したい~~~~っ!!

今更だけどデジタル先輩のトレーナーさんは私の好きな物2つも手に入れてるの本当にずるいと思う。地味な人なのに。ダブルブツキングしたのに。

「??はい、デジたんです。何でしょうか。」

『あーっ！デジたんだーっ！』

『スッゲー本物！』

もう一度だけ掛かってきた電話の向こうでは、子供達が揃ってこっちの方を見て盛り上がっていた。

真ん中の補助席で、デジタルさんのトレーナーさんだけは腕を組みながら大御所みたいに座ってる。相変わらず肩にアイちゃん？が寄りかかっているけど。やる気あるのかな。

『??同士、聞いて欲しい。』

『??はい?』

『今こつちには未来の原石達が沢山居るんだけどな。ヨシエちゃんが今回の失敗をエンターテインメントとして昇華させてくれるらしいんだ。だから携帯をバスのモニターに繋いで、それを皆と見てる状態なんだけど??レースはしたか?』

その言葉にピンつと耳を立たせたデジタル先輩は、何かに気付いたような顔でトレーナーさんに言葉をかける。

「いえ、今からでした。」

『そつか。なら丁度いい。』

「ですね。芝の状態は昨日と特に変化は無いです。概ねミーティング通りの内容でいけるかと。グラッセさんの仕上がりのにも、多分あなたの方に合わせてくれたんだと思います。遠目に見てもアオハル杯決勝かそれ以上には。」

『??成程。じゃあ例の戦法は試すとしても位置取りが??アイツのスパートを考えるなら目測300??いや、340??流石に厳しいかな。もう少し余裕を見て??。』

『おじさん何してるのー?』

『シーっ。今このおじさん、自分の仕事してるから??良く見ておくこと。あれもトレーナーとウマ娘の大事なやり取りだからね。』

ヨシエさんのフォローを受けて、バスの中の子供たちは静かに見守っていた。デジタル先輩もそんな様子を見て笑ってるけれど??何かが違う。

見たまんまはいつもと同じ、愛くるしい先輩。

なのに何だろう??この、妙なザワつき。落ち着かないんだ。

デジタル先輩のトレーナーさんと目が合った気がした。一瞬過ぎた勘違いかもしれないけれど??あれ?

アイちゃんつて子——起きてる？何か小さい声で言ってるような??気付いて、無いのかな??。

『??おし。目測480の3カウントだ。』

「合点！ただ??良いんですかね？それをやるのは本番までの秘策って言ってお話では？」

『そのつもりだったんだけどな。どうにもその後輩達が迷子になつたらしくてよ。なあ、クロフネ。』  
「っ。」

『出たかったもんに出られなかったのは、まあ??運が悪かったのもある。けれど元を辿れば、そこには俺達の存在もあつたはずだ。ダートから出てきたマイラーが、芝2000の東京レース場で霸王達を迎え撃とうってんだから、世間だつてそりやザワついたよ。なあ、お嬢ちゃん——納得してんのかい?』  
「??私ほっ。」

その先は言えなかった。

”はいしてます”、”そのうえで競いたいです??”言いたかつた言葉は驚く程喉につつかえて出て来なかった。

苦しい。けれど認めたくない。この感情を正しいと信じたくない。だつて出られなかった私はこの人達のお陰でダートを見つけたんだ。感謝だつてしてる。してるんだよ。

『あの日から止まったままの固つてえ秒針、2人掛かりでぶん回してやるよ。もう止まってやらねえし、止めてもやらねえ。難しい事考えなくて良い。ソイツはその背中に色々なモン背負つて走ってる。その背中目掛けて全速力で突っ走ってこい。じゃなきや、置いてくかな?』

『おじさん、デジさんの事好きなの?』

『ゾッコンなの?』

『嫁なのー?』

『何だとチビ共。そりゃあ??大事さ。なんたつて頼りになる相棒なんだから。今日だつておじさん、スツゴイ失敗しちやつてさ?なのにデジたんは、あそこで1人立つてる。今からドデカい戦場に行こうとしてるんだよ。自分の責任を果たす為に。』

ふと気付いてしまった。さつきから周りが物凄く静かな事に。

榎本さんは多分気付いていない。ウチのトレーナーもそうだと思う。

けれど??後方理解者みたいな笑みを浮かべたブルボンさんが。どこか期待と嬉しさを交えた眼のライスさんが。目を見開いて驚いたココンさんが。無邪気に笑いながらデジタル先輩の前に立ったグラッセさんが。

この場に居るウマ娘、皆の顔が語ってる。

『やれるな?同土。』

「勿論です、同土。」

『オールラウンダーだもんなですから。』

『??こんな事。』

「クロ?どした?」

「トレーナー——あの人、”領域”に入ってる。」

「走ってからにしてくんねーかな。凹むわー。」

「ゴメン??私が足りないだだだだッ!ほっぺ抓らないでえ!」

「なら2度とそんな事口走んな。大丈夫??アタシは、アンタに感謝してる。」

そうやって。

また、そうやって??軽口で誤魔化して、悔しきだつて見せないで、自分の事は後回しなんだ。いつだつてそう。

私の嫌な予感にわざわざ付き合つてJDDを回避した時だつて??望んでない肩書きのせいでもがいてる時だつて??っ!

さつきまでのザワつきはいつの間にか消えていた。

あるのは??チクリと刺さる胸の痛みだけ。

これはダメだ。

気付いちやいけない気持ちだ。

抑えなきやダメなんだ。

今は??レースに集中しなきや。

「??なんつー顔してんだか。」



レースが始まってすぐ、展開には違和感を覚えた。

隣に居るクロフネが感じたデジタルさんの”領域”。アタシらがまだ見た事の無い勇者の本気モード。映像でしかないけれど、あの子の走りはこれでもかかってぐらいには見てきた自信がある。

確かにあの子は前につく先行策も、後ろからまとめて差し切るだけの末脚もある。寧ろあの末脚なら、天皇賞でも見せた最終直線大外ぶっこ抜きが1番得意なスタイルなワケで。

ただ、それでも今回は――。

「マスター。」

「どーもブルボンさん。」

「貴女の感じている違和感ですが、私も今初めて実際に確認しました。恐らくはチームの練習が終わった後、2人だけであれを確立させたのだと思われます。」

「??気付いてるんですね。」

「はい。」

ならその左の手の平にビッシリ書かれたカンペは何でしょうかサ



イボーグさん。外付けHDDにしてはアナログ過ぎませんか？ちよつと滲んでるし??いやツツコまんけど。

「彼女は今、貴女方の運命を変えた天皇賞を再現しています。あくまでも自分の中では、ですが。」

「ほう、だとしたら随分——。」

「ええ。後ろ過ぎる、ですね。」

「はい。」

もしかして右手にも書いてんのかな??うーわ書いてる。

「あの子のレースは、映像とは言えそれなりに目を通して来ました。でも今まであんな走り方してるところなんて見た事ないです。ここに来て新しい策ぶち込もうって事なんですかね。」

「いいえ??新しいものではありません。彼女はかつて、一度だけあれをやったことがあります。貴女やクロフネさんの知らないところ  
で。」

「知らないタイミング?」

「そのレースはただ1度だけ開かれました。貴女方が決して知り得ない時期かつ、記録やデータを残す人は特定の人物しかいない??そんな  
始まりのレースが。」

「??”模擬レース”かあ。」

ブルボンさんはこくりと頷いた。

あの先輩まじでタチ悪い。分かるかいそんなもん。1度だつて話  
なんか聞いた事無いし、そもそもあの人は自分で映像記録を残したり  
しない。だから全部頭の中の記憶だけって事よなオーマイガツチ。

「それは狙ったものでは無かったです。言うなれば、事故のよう  
な偶然だった??それでも出遅れた彼女は殿から上がり最速のタイム  
を出しながら先頭を走り抜けたと聞いています。」

「それ全部カンペに書いてます?」

「はい。」

捲った袖の下にまで書いてんのはもうやりすぎなんよ。耳なし芳一かな? 誰に書かれたんすかそれ。自分でとか言わんでくださいね。お米ちゃんだけでも大変な事になってんのに?? あつ、これトウシヨウボーイさんだ。名前書いてら。

はっ? あの夏合宿参加して1ヶ月も経ってないのに何で全部理解しちゃつてんの? これだからレジェンドは??。

「先程私とココンさんの走りを見ながら、デジタルさんは自分の中で1つの式を組み立てたはずです。それがトレーナーさんからの言葉で完成した?? 2人で1人の司令塔であり選手であるからこそ、勇者御一行は道を切り開いて来たのでしょうか。そして——今、この瞬間も。」

その言葉と同時に風が吹き抜けた。

ずっとモヤモヤした顔だったクロフネの前を。

聞けば聞くほど無茶苦茶で笑うしかなかったアタシの前を。

あの日の天皇賞の様に、大外から飛んできた勇者様が……たった1回事故っただけの追走い込方みを武器にして。

んで、一瞬こっち見て笑ったのよ。

“任せろ” って言わんばかりにさ。

「おいおいおい! 普通その距離から捲ってくるかッ!? はははっ! スタート前といい、ここまでの圧迫感といいッ! 君は本当に面白いなアグネスデジタルッ!!」

「……。」

「ならこっちも——!」

「??いやこれ。」

「もう、遅いのです。」

アタシとブルボンさんの言葉が途切れる前に、デジタルさんは完璧にグラッセさんを差し切ってゴールしていた。

息ひとつ切らさずに??ただ簡易ゴール板の向こうで立っている。

「??声掛けなくていいワケ?」

「??だって。」

「後悔すんぞ。今、やらなきゃ。」

「っ??デジタル先輩!」

耳をピンと立てた彼女が振り向く。

物好きな先輩のパートナーで、ウマ娘が好きすぎるオタクウマ娘で、アタシのパートナーにとって並び立つべき目標と憧れであったその勇者は。

もう、少しも笑っていない。

開かれた目に宿るのは、ただの人間でしか無いアタシにだって分かるヒリつきと寒気。喉元に冷たく鋭利な物を突きつけられた感覚。

勇者は今——切っ先を向けている。

ゆっくりと抜いた剣を。

ずっと見守ってきたはずの”推し”に。

??ああ、そうですか。

クロとどう向き合うか、貴女はとつくに覚悟を決めてくれていたんですね。

アレはもうただの目標なんかじゃない。

あの子はたった今、自分の意志と覚悟を持った上で、アタシ達の明確な”敵”になった。

——眞の勇者は戦場を選ばない。

それは、場所も距離も相手すらも選ばなかった、2人で1人の挑戦者の言葉だったはずなのに。今こうして敵対して初めて分かった??追いかける側にとつては滅茶苦茶おつかねーわ。

「??やんぞ、クロ。アンタの先輩——どこ行ったの芦毛ちゃん?」  
「先程、思い詰めた顔であちらへ走っていききましたが??追わなくても良いのですか?」

「??まあ、OKす。分かってなかったのは多分アタシだけなんで。ありや勝手に踏ん切りつけて戻って来ますよ。」

そう??分かってなかったのはアタシだけだ。

クロは、ずっと悩んでたんだと思う。自分の中に生まれた感情、本能、熱——それはデジタルさんに向けちゃいけないものだって、どこかセーブしていた気がする。

頭では理解している。でも心は受け入れられなかった。その間でずっとモヤついたまんまだったから、最後に最初の1歩を踏み出せなかったんだろうねえ。教えてやるのは、本当ならアタシがやらなきゃいけない役目つつーか責任だったのに。とほほ。

「マスター。」

「何です?」

「貴女に、ステータス : 『吹っ切れ』を確認しました。今日最初に出会った時とは違う表情です。」

「??かもつすね。不本意ながら誰かさんがここに呼んだおかげで。」

「なら良かったです。貴女の顔色が良ければこれを見せていいと、デジタルさんの——勇者の1人から伝言です。」

そう言つて笑いながら右手の袖を捲ったブルボンさん。その綺麗な肌には、後輩であるアタシへのメツセージが残されていた。

”かかってこいバーバーカツ!! m9 (゜D゜)”

今すぐ帰って来いぶつ飛ばしてやるよクソボケ野郎が。



あの目が。あの顔が。あの走りが。頭に焼き付いて離れない。私の中で次々生まれれていく感情が喉につつかえてるみたいだ。必死で走った。耐えられなくて、逃げるように走り続けた。

芝コースから離れて、他の皆が練習してる所も過ぎて、誰も居ない浜辺まで??。

「??どうしたら。」

意味も無く辺りを見渡して、息を整えるより先にそんな言葉が口をつく。どうもこうもない。向き合うしかない。そんなの分かっている。分かっているんだよ。でもさ??出来るわけ、ない。

「っ??出来るわけないじゃんツ!!」

「お前声がデカいのだ。何1人で叫んでるのだ?」

すぐ横から声が届いて距離を取った。誰も居ないと思ってた場所に居たのはウィンディさんで??うわっ、聞かれてた。

「??さては生徒会の回し者か!?何を言われようとウィンディちゃんは落とし穴を掘るのも噛み付くのもイタズラするのも止めてやらない

のだ！いーっ!!」

「やつ、それは好きにどうぞ?? 告げ口もしませんから。そもそもここ人來ないし??。」

「ん?よく見たらお前クロフネじゃないか。話分かる良い奴だな！特別に親分として話を聞いてやるのだ！ありがたく思え！」

いつから私はこの人の子分になったのだろう。

いや、でも聞かれたのなら?? 一応はダートの大先輩だし?? ファルコンさん達も何かお世話になったとか言ってたような?? うん。

「あの?? デジタル先輩の事?? わ、私、さっきあの人の本当の本気を知ってしまつて。目標だった?? なんですけど??。」

正直、ウインデイさんの事だから茶化し文句の1つでも飛んでくるかと思っていた。この人いつもデジタル先輩へのイタズラ失敗して返り討ちにあつてるし?? でも。

「少だけ顔色を伺えば、ウインデイさんは何も言わないまま笑ってくれた。”それで?”と言いたげに。」

「並ぼうと思つてたんです。唯一無二のオールラウンダーの、唯一無二のライバルとして。自分でこう言うのもアレですけど、凄く気にかけてもらつていましたし?? なのに、変なんですよ。最近あの人の事を考える度に、悔しくて悔しくてしょうがないんです。私が出られなかった天皇賞、私ならこう走つたのにつてそればかり。私とトレーナーだつて、絶対に勝てたはずなのにつて。」

「おう。」

「さつきだつてそうです。私はあの人の目線から逃げ出しました。だつて、怖かつたんですよ。あのままそこに居たら、私はデジタル先輩に?? きつと色んな事をぶちまけていたかもしれないんです。自分が分からないんですよ?? 何をしたいのか。目標でいてくれた人、気にかけてくれていた人にどうしたらいいのかなんて??。」

「ふむふむ。」

「??あの。聞いてますよね? 何で今、” 何言ってるか分かんない” みたいな顔を——。」

「いやお前が何言ってるのか全然分らないのだ。」

相談相手間違えたかもしれない。

「あのな。ウインディちゃんはイタズラするのが好きなのだ。落とし穴を作るのも、噛み付くのも。悪の親玉としてあらゆる悪行が大好きなのだ。」

「??この時間も、ですか?」

「まあ聞け。それでな? もし誰かにそういう好きな物を止めろー! って言われても、ウインディちゃんは必ずこう答える。” 嫌だ!” っつな。何故ならそれが好きだからだ。それがウインディちゃんだからだ。けどな?? どうしてもそれを止めなくちゃいけない、自分を変えなくちゃいけないってなった時は?? 物凄く怖い。」

普段とは違う、困った様に笑うこの人を見て、トレーナーに聞いていた事を思い出した。

ウインディさんは1度?? レース中に競争相手の子に噛み付いたらしい。世間からバッシングを浴びたって。謝って、ちゃんと自分のやり方を見つけても、イロモノ扱いされてた時期が長かったらしい。

「皆、同じなのだ。」

「えっ?」

「デジタルの好きな物は?」

「??ウマ娘の子達、ですよね。」

「だな。アイツはその好きなウマ娘の為に、何かよく分からん技術も平気で覚えるし、好きなウマ娘と1人でも多く走りたいからって芝もダートも日本も世界も走り回ってきた欲張りな子分だ! 正直ちよつとヤベー奴だと思ってる。」

「そういう所が良いんじゃないですか。」

「大概だぞお前。じゃな——いッ！つまりウィンディちゃんが言いたいのは——そんな欲張りでバカ強いヤツが、自分の好きを曲げてでも、特にお気に入りなハズのお前に向き合ってたって事だ。怖くなかったって、思うか？」

「??あつ。」

「ウィンディちゃんが怖かった時は、作戦参謀と一緒にゴメンなさいを言ってくれたのだ。デジタルだつてきつと、あのへんちくりんなトレーナーが居たはずなのだ。お前はどうか？」

「??トレーナーが居ます。」

??そつ、か。

何で言われるまで気付かなかったんだろう。

「ぎつきのレースとか、本気のデジタルとか、ウィンディちゃん全然見てないから分からないけどな。お前に見せたかったのは走りとかじゃなくて、自分の変化を受け入れて、目標だつて超える為の”勇気”じゃないのか？」

「勇気??私の、変化??で、でも、もしそれで今後とかに影響が出るような変な関係になつたら??。」

「意外とまどろっこしいヤツだなお前??んが——ッ！そもそも作戦参謀のやり方真似したつてウィンディちゃんにしか効かないのだ！真似なんか出来るわけないのだ——ッ！何が”良い事した後のイタズラはもつと楽しいから”だ！ウマ娘のスイッチだかブレーカーだか知らないけど、ウィンディちゃんにだつてウィンディちゃんのやり方つて言うものがあるのだッ！おい！芦毛なのにクロフネ！」

久しぶりに名前前で弄られた??。何か1人で盛り上がってるし。ウィンディさんからウィンディちゃんに戻つたみたい。

「ウィンディちゃんもなあー、お前には目を付けていたんだ。」



「??そ、そうですか。」

「芝から出てきたクセに、ダートを走ったらやつぱりこつちの方が良いですなんて随分生意気で都合のいい奴なのだ。」

????。

「ここらで大先輩なウィンディちゃんが摘んでやるのだ。デジタル1人から逃げ出したのにデカイ顔してるお前も、そのトレーナーも、共々噛み付いてやるのだ。」

「??れが??。」

「あーん?」

「誰が??好き好んで??なら、やりましょうよ。幾らでもやつても良いんですよこつちは。私も、トレーナーも、そんな風に言われる筋合いなんか無い。大先輩のアンタが相手だろうと知ったこつちやないんですよ。」

「おーおー、威勢がいい奴だ。お前何か忘れてんじゃないか?今お前の前に居るのは、お前がデジタルとケリをつけようとしてる舞台——フェブラリースのチャンピオン様だぞ。」

「それが何。アンタも??あのトレーナーも??アグネスデジタルも??アタシとトレーナーの邪魔するなら!アタシ達の可能性を邪魔するんなら!誰だろうとぶつ千切るツ!!」

自分でもバカ言ってるって思う。分かってるよ。

さつきまであんな事言ってくれてた人に啖呵切っちゃってさ??でも仕方ないんだ。もう止められないんだ。さつきのレースから続いてたモヤモヤが、ザワつきが——アタシの中の積もった闘争心が??疼いて仕方が無い。

そうだよ、疼いてるんだ。

だっておかしいじゃん。アタシは、トレーナーは、もっとやれる。

やれたんだ!

結果論なんて知るか！アタシ達の声も聞かないで、何が『誰もが納得』だッ！納得なんかするかッ！してたまるかッ！だから、アタシは——ッ!!

「こーんな目をしてるのだ。お前やっぱウインディちゃんが見込んだだけの事はあるな。」

「??はい？」

「それをデジタルに言えばいいだけの話なのだ。難しい事ゴチャゴチャ考えるから難しくなるし、そもそもそんな目をしたヤツが良い子ちゃんだだけで終われるわけが無い。ちよっと考えれば分かるのだ。」

「??あつ、ちよ、どこ行くんですかウインディさん！まだ話は終わって

——穴あッ!!」

落ちた。

さつきまで見え見えだった、こんな人の居ないところで意味無いって思ってた落とし穴に。ガチめにショック。

すっぽり私の身長が埋まるぐらいの縦穴。その上からウインディさんはわざとらしくしゃがみ込んで、手のかかる子分を見つめる親分みたいに笑っていた。

「頭に血が上って周りが見えなくなった時程、デジタルは絶対に見逃さないのだ。悔しかったらレースでそれをやらないように気を付けるんだな。ワーハッハッ！ウインディちゃんは帰るのだー！」

「??助けてくれないんですかーッ!？」

「悪い事は好きだつてさつき言ったばかりだろー。子分なら自力で何とかするのだー。デジタルならその倍は深くても感謝しながら這い上がってくるのだー。」

??嘘じゃん。本当に行っちゃったんだけど。

えっ、待ってヤダヤダヤダッ！トレーナー！トレーナーの所に行きたいーッ！

何とか指引っ掛けて、こう、上手いこと??うっ?!砂に指引っ掛かるわけないじゃんっ！

「??無理言わないでよお。トレーナーあ??ぐずっ??。」

「????。」

「??あーっ！っ!!ねえ、お願い！トレーナー呼んで来てくれるっ!?!担当がバカやりましたって言ってくれば良いからっ！」

ウィンディさんの代わりに私を見下ろしていたのは、最近ハーバーに新しく入った新人の子。

デビュー前からかなりの實力を見せてつけて、数え切れないぐらいのトレーナーに勧誘された期待のホープ。

そしてそのトレーナー達の自身を尽くへし折って、ヨシエさんマツチングの末にウチに来た子。

才能を持て余したその子は、コクンと頷いて歩いていった。

「本当にありがとーっ！っ！プイちゃんっ!!」

「何とかなっって良かった??ふふっ。デジタルのやつ、昨日言った通りに渾身のキメ顔したかな。ドヤっても良いとは言ったけれど。きつとさぞ可愛らしいドヤ顔して自爆した事だろう。ヨシエちゃんよー、今日は感謝しとく——。」

「しゃーねーなーキッズ共！もう一回真似してやるから見とけよ見と

「けよー？『取り返しに来たエンマ様の杓が思ったより太かった時のキスケ』。太すぎるツピ!!」  
「他人のフリしとこ。」

## Summer Ghost ①

未だに夢を見る。私の星が地に落ちた日の事を。

未だに心が責めたてる。全ては私のせいだと。

いつからか、空を見上げる事さえ止めてしまった。

彼女の声もう聞こえないから。

子供の頃の私は、新月の夜、決まって空を見上げていたんだ。月明かりの無い空??幾千幾万の星々が煌めく中で、他の何よりも輝いていたその星を私は”願ひい星”と名付けていた。

両親や友達に信じてくれなかったけれど、私には彼女の声が聴こえていた。いちばん大切な友達みたいなものだったんだ。

ある日の夜もそうだった。

私が”願ひい星”と話をしている時、突然お姉ちゃんはやって来た。昔っからずっとマイペースで、あやとりしながら何も言わずに隣に座って。

『気にしなくていいよ。お話、続けて』なんて??まるで無関心みたいな顔してさ。

仲は良かった??と、思う。私の話を信じてくれたのは、いつだってお姉ちゃんだけだったから。マイペース過ぎて周りを振り回すあの人の面倒を見るのは私の役目みたいなものだったし。

けど彼女に話していたのも、そんなお姉ちゃんの事で??話せるわけなかったんだよね。

私とお姉ちゃんは全然違う。

性格も。勉強も。運動神経も。走る才能も??他人からの愛され方も。

そんなお姉ちゃんが羨ましくて、私は子供心に願ってしまった。取り返しのない事を、”願ひい星”である彼女に。

——お星様。私をお姉ちゃんみたいにして下さい。頑張り過ぎなお姉ちゃんを休ませてあげてください。

その願いの後、彼女とは話が出来なくなってしまうた。  
その2日後、願いは最悪な形で叶えられた。

『ここでテンポイントが後退ッ！どうしたテンポイント、テンポイント  
トは競走中止かッ!?動きがおかしいテンポイントッ!場内からはざ  
わめきが——あぁと転倒ッ!!故障発生かテンポイントッ!?これ  
はえらいことになりましたッ!』

ボキンッ、と何かが碎けた音。

歪に曲がった脚は、それだけで1人のウマ娘から全てを奪った事が  
分かってしまった。

トレーナーと、友達でありライバルでもあった2人のウマ娘の救急  
隊を呼ぶ叫び声が、空っぽになった私の頭に鐘のように響いてきて。  
逸れないように私の手を握っていたお母さんは、振り払うようにそ  
の手を離し、顔を覆って泣き叫んで。

脂汗を滲ませ、見た事も無い形相で、それでも意識を失うその瞬間  
まで這ってでも前を目指し続けた私の憧れの星。

ようやく私は、自分が何を願ってしまったのかを理解した。

どれだけ傲慢で、浅ましくて、身勝手な願いだったのか。

だから彼女は、もう私に語りかけはしない。

私はもう、星を見上げない。

流星の貴公子——誰もが愛し、そう呼んだウマ娘は??もう2度  
と、表舞台上に上がってくる事は無かった。

2ヶ月間に渡る夏合宿も、早いもので明日が最後になった。実際は明後日の朝に帰るから、1日とちよつとだけけれど。

昼間、あれ程騒がしく鳴いていた蝉の声も、すっかり蝸だけが声を震わせているばかりになった。

それなりの宿泊道具が入ったりリュックを背負って、薄暗い山道を登って行く。1人が寝れるだけのテントに、椅子代わりのレジャーシート。この時期の夜ならまだ大して寒くはならないけれど、寝袋も念の為に詰め込んで来た。

これは全部借り物。私の所属する小さなチーム——『ベガ』の先輩であり、ダービーウマ娘でもあるアドマイヤベガさんからの。

成長出来たのかと言われれば、首を横に振るしかない。私は未だに負ける事の方が多いし、自分の走り方さえままならない??だから、G1どころかG2クラスでも勝てない状態が続いている。

けれど、走らなければ落ち着かなかった。何かしていなければダメだと思った。『根を詰めすぎだね』とトレーナーさんに言われるまで、私は練習するしか無かったんだ。

だから、今日の夜から明日はオフ。どうせならとアヤベさんは星が綺麗に見える場所を教えてくださいました。気分転換にと言う割にはその顔は複雑そうだったけれど、あの人は絶対に深入りしてこない。私にはそれが心地良かった。

例えばそれが、傍から見れば歪な関係性だったとしても。

開けた場所に出れば、山の下に合宿所の明かりが見える。今頃は皆、あそこで反省会だったりお疲れ様会をしているんだと思う。私は??そんなに友達が居ないから、そういうのは縁が無い。有っても参加はしないか。

今日はここで過ごそう。星は??きつと見る事が出来ないけれど。アヤベさんに、きちんとお礼も言わなきゃ。

そう思っって荷物を降ろした時だった——隣から心臓が止まりそうな叫び声が聞こえたのは。

「立ち去れ幽霊ツ！この<sup>変態の悶絶所</sup>デジたん人形が目に入らぬかッ！去れーッ！

去れーッ！俺はまだ独身なんです許して下さいッ！」

迫真の顔で小さなぬいぐるみをこちらに突き出し、(クソうるさい) 大声を出した人には見覚えがあった。芝もダートも走れる無茶苦茶な才能を持ったオールラウンダー——アグネスデジタルちゃんのトレーナー。学園内でも1、2を争う実力派の中堅トレーナーだつて、私達のトレーナーさんは言っていた??と、思う。別人じゃない筈だけど、イメージが違い過ぎて認めたくない。

「チクシヨー！そもそも部屋乗っ取ったあのバカ女が『我同衾可！』とか文鳥みたいな動き飛び跳ねる様。求愛ダンス。で騒がなきやこんな事??ッ！」

「??取り敢えず落ち着いたらどうですか。」

「おっ、そうだな。」

情緒不安定なのかな。

この人の後ろには、恐らくこの人が今日泊まるのであろうテントが不格好な形で設営されていた。どうしよう??予定狂っちゃった。流石に同じ場所は使えないし、別の場所探さないと。

「よく見なくてもウマ娘だったか。恥ずかしい所を見せてしまった。」

「別に??じゃあ、私はこれで??。」

「恥ずかしい所を見たついでに少し話し相手になってくれないか?」

「??嫌ですけど。」

「そうか??積もる話もあるだろうが、まあ座りなさい。他所のトレーナーではあるが、相談にでも乗ろうじゃないか。」

「話聞いてました?嫌です??。」

「ふむ??今日は星が——。」

「はあ??。」

まるで聞いていない。変な人だから出来るだけ関わらないよう



にってアヤベさんから言われていたのに。そもそも目が泳いでる。こうやって取り繕ってはいるけれど、結局さっきの感じからすれば幽霊が怖いから一緒に居てくれて話なんだろうけど??じゃあ何でこんな所に居るんだって話だし。

「素直に言えばいいじゃないですか。幽霊が苦手だって。」

「??い、言ったら話に付き合ってくれるのか?」

「だから嫌ですってば。お疲れ様でした。」

「ちよつと待ってくれスターメモリーツ!今頼みは君だけなんだ!本当に少しだけで良いから!会話の先つちよだけだから!よろしくお願い致します!!」

「はっ、や、なっ、何土下座して??くくっ!もうっ!!」

ゴメンなさいアヤベさん。教えて貰ったスポットで星を見られなだけでじゃなくて、言いつけも守りませんでした。けれど大の大人に土下座までされたら多分誰だって無理です。それが例え、学園内で唯一”皇帝の杖”に楯突けるような人であったとしても。

「??それ以上近づくのは無しですからね。私中等部なので。」

「だ、大丈夫だから??。」

「変な事もしないで下さい。直ぐにアヤベさんに持たされた防犯ブザー鳴らします。GPS付きなので居場所も割れています。」

「過保護過ぎない???それももう不審者に出会った時の対応じゃん??あっ、お経は唱えていい?」

「今変な事するなって言ったのに、本当に話を聞いてないんですね。」  
「良く言われる。」

ムカつく。

でもこうしてる間に時間はどんどん過ぎていってしまうのも事実だし、もう諦めるしかない。アヤベさんには一応連絡しておこう。

「??何で私の名前、知ってたんですか?」

「うん?そりやあデジタルのトレーナーだから。」

「理由になってないし??。」

「これ以上ない理由だけどなあ。」

「もう良いです。何か適当に話してて下さい。」

「あつ、はい。何か??この手持ちデジタル人形を筆頭に、『両手でぎゅつとどこでもウマ娘ちゃん』をシリーズ化して商品展開しようと思っただけどう思う?」

「どうも思いませんけど??強いて言うならその商品名、地味に気持ち悪いです。」

「凹む。」

??正直、予想外と言えば予想外だった。

勇者御一行——どう考えても才能持ちが集まった実力派チーム。その話は又聞き程度でしかないけれど聞かない日は無い。

そんなチームをまとめ上げているトレーナーなんて、同じ様に才能を持つてる堅物かなって思っていた。

・ 幽霊が怖い

・ 人の話を聞かない

・ ずっと人形を両手で握ってて何か嫌

もうこの段階で色々おかしい。

結局は想像でしか無かったから、多少の違いはあってもここまで変な人だったとは考えられるはずも無い。何で他のトレーナーさん達はこの人と”皇帝の杖”を評価してるんだろうか。あつちはあつちで全てにおいて突き抜けてるから誰にも止められないし。

「なあ、スターメモリー。」

「??何ですか?」

「酷いクマだ。最近眠れてないのか?」

「別に??そんなのじゃないです。元からこうですよ。」

「ふーん??元々は良い顔してたと思うけど。」

「??何が言いたいんですか。」

「何で周囲に隠してる? お前さん、流星の貴公子 テンポイントの妹だろ。」

「っ!」

「孤立?? ってわけじゃなさそうだな。少なくともアヤベがそうやって親身になってるからにはそれなりのワケありって事だ。周りの交友関係を見ても、別に普通に過ぎしてそうだし?? ただ走りはアレだな。自分を追い込んでるヤツ特有の、切羽詰まった走りって感じがするよ。オマケに”才能” って言葉に引つ張られるくらいがある。って事は——。」

「関係ないじゃないですか。」

しまった、って思った。こんなのはこの人の言った事を肯定している事と同じ。完全に油断していた。そもそも隠しているはずの事を何で知っていたのか?? 名前もそう。変な理由ではぐらかされたけれど、考えられるのは——あの人。

「??まあ確かに、関係は無いな。」

「トウシヨウボーイさんに何を言われたんですか?」

「いや、何も。」

「嘘ばかり。」

「本当さ。ほら見てくれこの子供の様な眼差し。」

「暗くて良く見えません。」

「だって近付いたらダメなんですよ? ブザーの刑ですよ? もう構えてるの見えてるもの。悪かった、大人しくするよ?? ただ今のは本当だ。別にアイツに何か言われたわけでも無いし、頼まれてもいない。俺が勝手に思っていた事だ。忘れてくれ。」

それから暫く、お互い何も言わなかった。簡単に設営している間も何度かこの人の方を見たけれど、向こうは向こうで携帯を見ながら何かブツブツ言ってるだけだった。多分仕事絡みの何か?? だと思おう。少なくとも私の事じゃないと信じたい。

結局私の準備が終わったぐらいのタイミングで、勇者御一行のトレーナーさんは改めて話し掛けてきた。

「なあ、ちよつと良いか？聞きたい事が有るんだ。」

「??今度は何ですか。」

「携帯の待受をデジタルにしようと思うんだけど、どれが良いかな。」

「それをずっと悩んでたとか言わないですよね？」

「寧ろこれ以外に何を悩むのか。」

??何か深読みしてる自分がバカバカしくすら思えてくる。そんな距離で携帯だけ見せられても見えるわけがないのに。

と言うより、あんな真剣な顔で話してた癖に私の話は待受以下って事じゃん??別にいいけどさ。

「どれですか。」

「この3枚??あつ、ちよ、ちよつと待て！来るなら防犯ブザーは持ってきた方がいいぞツ！」

「はい?。」

「いやなに、ここまで来たらその対応貰ってもらった方がこつちとしても安心する。」

「??貴方って、以外と面倒臭いですね。」  
「良く言われる。」

ムカつく。

考えてみれば、ウマ娘の時点で私がパワー負けするワケでも無いんだし考えるだけ無駄だった。

「??その前髪で前見えてるのか?。」

「見えてるのでお構いなく。」

「そ、そうか??でもやっぱりあれだな。お前さん、相当疲れた目をしてるよ。」

「お構いなくって言いましたけど。」

目に見えてシユンとした。何この人。私が言えた事じゃないけど距離感の掴み方あんまりだよ??そんなにキツく言ったかな。

渡された携帯にはこの人のチームの子達の写真が沢山あった。

どれもこれも勝った時や練習風景、何気無い日常の写真——この人デジタルちゃんの寝顔連写してるじゃん。ヤバい量なんだけど3枚ってどれの話してるの?どこからどこまでの範囲で3枚選べって話?ああ、もう??何でもいいでしょコレ。

「??これでいいんじゃないですか。」

「ふふっ、お目が高いな??俺もそう思っていた所だ。やっぱりこれだけ雰囲気違うもんな。」

「それじゃなくて隣です。」

「えっ、こっち?あつ、こっちか。」

「いやそっちじゃなくてこっち——見分けついてないじゃないですかッ!!」

「実はさっきから候補選ぶ度に見失ってワケ分からなくなってる。」

「本当に張り倒しますよ??もう戻ります。」

「ウス??。」

??もし。

ここまで私の予想と違う事ばかりやってる人なら。

本当にTTGの3人と関係無く、私の事を知っているなら??私は、私の事を聞いてみたい。元々いつかは、それをこの人か皇帝の杖に聞くつもりだった。思わぬ前後の仕方をしたせいで知りたくなかった性格も見えたけれど。

「??あの。」

振り向けば、湯気の立ち上がったマグカップを差し出されていた。

「丁度湯が沸いたんだ。ココアで良ければ、礼代わりに受け取って欲しい。」

「??どうも。じゃなくて??あ、ありがとうございます。」

「こちらこそ。」

「??貴方が私を知ってる事前提で、単刀直入に聞きたいんですけど。今の私が勝てるようになるには何が足りないんでしょうか。」

「何、か。それを教えるのは本来俺じゃないんだが??強いて言うなら色々足りてないな。そもそも追い込みは走り方があつてないよ。切羽詰まってるから周りも見えてないし、肝心な場面でスパート掛けるタイミングを間違えてる。体幹ブレブレで当たり負けが多いし、それを取り返そうと掛かるのも悪い癖だ。」

でも直せないワケじゃない。そして——チームベガのトレーナーがそれに気付けない筈も無い。」

「??。」

「何が足りていないか??1番デカイのは、そう考えてる事を共有出来ていない事だ。お前さんはまだ何か隠し持ってる。ドデカイ爆弾みたいな感情、アヤベやトレーナーにも打ち明けてないメンタル部分だな。アヤベならそれでいいかもしれない??だが教える側の人間からすれば、同業の忬度抜きに見てもこれだけは言える。」

中々に厄介なのは意思の疎通が難しい事だよ。どこまで踏み込むべきか、踏み込んでいいのか??特にあの人は慎重になる筈だ。前例がある分、余計にな。」

この人は??何だろう。散々人の話も聞かないで好きにやってたのに、今は淡々と私の事を言つてのける。まるで本当に見てきたかのような言い方だ。でも今は分厚い手帳に目線を落としているだけ。そこに何が書いてあるのかは分からないけれど——。

「後、負けてもヤケ食いはやめとけ。体重増加の傾向有りだぞ。」

「本当に何書いてるんですかそれッ!べつ、別に良いじゃないですか

食べたってツ！全部台無しですよツ！」

「だって何が足りないか聞くから??大事だぞ?」

「そっ??うですけども！あるでしょデリカシーとか色々!!」

「へへへっ??。」

本っ当にムカつく!!

「まあ、なんだ。強く生きろよ。」

「うるさいツ！」

「ひんっ??でもさ。物怖じせずツツコめるのは良い事だ。そうやって慣らしていけば、その時が来たら自分から色々話せるだろうよ。それまではいつでも駄弁るなり愚痴るなりしに来て良いからな。」

「??それってこれからも貴方と関わりを持って話ですか?」

「今のトレセンで昔のお前さんとTTGの背景を知ってるのは、俺と皇帝のトレーナーだけだ。敵でも味方でも、繋がりが多い方がいいだろう?」

何か上手いこと纏めようとしてるし??言ってる事自体間違ってるのが地味に腹立つ。さっきから腹立ってるけど。

そそくさとテントの方に戻りながら、この人は最後に嫌な事を企んだ笑みを浮かべながら言った。

「スター。生まれ持った才能ってのは、それだけで個人のスタートラインを決めるかもしれない。でも一流のウマ娘王様も言っていたが、その出遅れが全てを決めるだなんて到底思わない。だから——俺はお前さんに、マヤノトップガンをぶつける。」

「っ??:。」

「頑張っつて、もがいて、必死こいてるヤツにこれ以上無責任な頑張れは言わん。ただどう頑張るかはお前さんとチームベガ次第だ。いつかお前さんだけが持つてる才能を貸して欲しいしな。じゃあ、お休み。今日はありがとさん。」

「??お休みなさい。」

聞いているんだが聞いてないんだが、適当に欠伸だけしてテントの中へと戻って行った。

私だけの才能??私自身だって分かってないの？

マヤノちゃんだってこんなの相手にしても練習にならないのに、滅茶苦茶だ。

変幻自在の脚質。

勇者御一行の天才。

直感型で、何でも分かるその発想力と真っ直ぐすぎる夢。私なんかとは大違い。

でも??私は、きつとそれをやらなきゃならない。超えなきゃならない。

私は——星を落とした忌み子だ。

私は——。

「私は??流星の貴公子にならなきゃいけないんだ。」

その為なら何だつてする。誰だつて利用してやる。例えそれが、天地ほど差がある”天才”<sup>才能</sup>だったとしても。

「なあ、スターメモリー。」

「うわっ、起きてた??。」

「お前さんさつきアヤベに何送った?俺LANEで釘刺されてんだけど。『横の子に何かやったら 怒るわよ』って。たまげたな、五七五だ??。」

「もう寝て下さいよ鬱陶しいな??。」

「凹む。ああ、そうだ。最後にもう1つだけ約束してくれ。」

「??何ですか。」

1呼吸置いて、彼は腹を括った顔でこう言った。



「俺達は明日、最も偉大なウマ娘——歴史そのものと向き合おうと思う。意味は分からないだろうが??明日の夜だけは、絶対に外に出ないようにな。」

戦場を選ばない勇者の道を切り開いて来た唯一無二のトレーナー。

皇帝のトレーナーが道を指し示す杖ならば、今のこの人は確かにそう呼べるかもしれない??そんな顔。

私の後ろで、誰かがクスリと笑った気がした。